

EMA CASTLE SITE

江馬氏城館跡 Ⅲ

—下館跡南辺の調査—

神岡町教育委員会
富山大学人文学部考古学研究室

1997年3月



1 調査地区全景写真（上で北、1996年撮影）



2 壇穴住居S I 01発掘後写真

EMA CASTLE SITE

江馬氏城館跡Ⅲ

——下館跡南辺の調査——

神岡町教育委員会
富山大学人文学部考古学研究室

1997年3月

序

江馬氏城館跡の発掘調査は早くも3年目をむかえ、毎年、真夏の暑い盛りに行なわれる発掘調査もすっかり見慣れた風景となりました。また、その調査成果が着実にあがっていることは誠に喜ばしいことと感じております。

本年度の調査では、下館跡指定地南辺に接する地区で7棟の掘立柱建物と、下館跡では初例となる竪穴住居2棟を確認することができました。また出土した漆の破片が、漆塗りをするために容器に入れていた生漆であることがわかり、館の中心からやや離れた場所で、漆塗り職人が活動していた様子が明らかになりました。竪穴住居はそういった職人たちの作業場であったようです。門前地区に立ち並んだ建物には、館の主人に直接従う武士階級の人々が暮らしていたと考えましたが、これらのことから、堀の周辺に、色々な階層の人々が集まっていたことがわかつきました。当時、この地方で活躍した先人達の暮らしの様子が、少しずつですが具体的なものになってきたと言えるでしょう。

また、建物などの遺構は調査地区の南側にさらに続くものと考えられ、下館に関する施設は現在の指定地だけでなく、おそらくは殿段丘全体に広がる可能性が高くなりました。一方、今年の調査では確認できませんでしたが、館の門前道路が段丘下の旧街道である上宝道との様につながるのかなど、まだまだ不明な部分も多く、これから発掘調査によって明らかになることがらへの興味は尽きることがありません。

おわりに、発掘調査に際して、地元の皆様のご理解とご協力を頂いたこと、文化庁・岐阜県教育委員会をはじめ各種専門分野諸機関の皆様からご指導・ご尽力を賜ったこと、また発掘調査とまとめの報告書の作成作業に、文字どおり昼夜の区別なく取り組んで頂いた富山大学考古学研究室の学生諸君にたいして、深甚の感謝とお礼を申しあげます。また、今後の発掘調査と史跡整備に益々のお力添えを賜りますようお願い致します。

平成9年3月

神岡町教育長 堀本 昌義

例　　言

- 1 本書は、岐阜県神岡町教育委員会が平成8年度に県費補助事業として実施した神岡町大字殿所在国指定史跡江馬氏城館跡下館跡発掘調査報告書である。
- 2 調査は、文化庁記念物課、岐阜県教育委員会文化課、江馬氏城館跡発掘調査整備委員会の指導協力を得て、神岡町が富山大学人文学部考古学研究室（代表：前川要）に委託して実施した。
- 3 遺物の復原・実測、図面の整理・製図は調査参加者全員が協力して行った。
- 4 本文は前川要（富山大学人文学部助教授）、大平愛子（神岡町教育委員会学芸員）、中田書矢、石井淳平、小野基、清水あゆ美、鈴木悟嗣、滝沢匡、戸田真美子、野水晃子、深田亜紀、丸山浩、三浦英俊（富山大学人文学部考古学研究室学生）が分担して執筆し、前川・大平・中田が記述内容の統一をはかった。また江馬氏の文献的考察について小島道裕氏（国立歴史民俗博物館歴史研究部助教授）、遺跡探査について酒井英男氏（富山大学理学部助教授）、考古地磁気年代測定について廣岡公夫氏（富山大学理学部教授）、漆器塗膜分析について四柳嘉章氏（漆器文化財研究所所長）、鉛同位体分析について斎藤努氏（国立歴史民俗博物館歴史研究部助教授）にお願いした。なお執筆分担は目次に記し、必要な場合は文末にも付した。編集は前川と大平が行い、中田が補佐した。
- 5 参考文献は本文末にまとめた。遺物番号は実測図と写真とを統一した。
- 6 地区割は、直角座標第7系国土座標（X=35878.577, Y=13064.049）を原点として設定した。水準はT.P.である。
- 7 本書の作成に際して、宇野隆夫（富山大学人文学部教授）、小池伸彦（文化庁記念物課）、小野正敏（国立歴史民俗博物館考古研究部助教授）、千田嘉博（国立歴史民俗博物館考古研究部助手）、服部英雄（九州大学大学院比較社会文化研究科助教授）、檜崎彰一（愛知県陶磁資料館総長）、井上喜久男（愛知県陶磁資料館）、藤澤良祐、岡本直久、河合君近（瀬戸市埋蔵文化財センター）、大熊厚志（岐阜県教育委員会文化課主任）、中井均（米原町教育委員会）、浅野晴樹（埼玉県埋蔵文化財調査事業団）、三鍋秀典（富山県立山町教育委員会）、尾野善裕（京都国立博物館）、内堀信雄（岐阜市教育委員会）、小野木学（岐阜県埋蔵文化財保護センター）、柳原滋高（青森県市浦村教育委員会）、都竹清隆（神岡町社会福祉協議会事務局長）、若田俊一（神岡町文化財審議会委員長）、マーティン・モリス（千葉大学工学部講師）をはじめとする方々からご協力および貴重なご教示を得た。調査に際しては、田家幸夫（大字殿区長）、洞口英夫（江馬遺跡保存会長）、堀進、田中幸一、吉中公男、川上定義、沖野好夫、宮前稔、保木薰、清水邦宏、川上真人、新家康孝、新家久雄、中田康孝、沖野寛、岩垣達蔵、伊勢米蔵（殿地区地権者）、日影広男をはじめとする神岡町の方々にご協力戴いた。神岡鉱業株式会社から給水について便宜を計って戴いた。記して厚く感謝申し上げる。
- 8 出土遺物・記録書類は、神岡町教育委員会で保管・公開している。

目 次

	頁
第1章 調査の概要	大平愛子..... 1
1 調査に至る経緯と目的	1
2 江馬氏下館跡の現状	3
3 調査の経過と調査組織	3
第2章 遺跡の立地と歴史的環境.....	大平愛子..... 10
1 遺跡の立地	10
2 歴史的環境	14
3 中世の街道と高原郷・江馬氏	17
4 周辺の中世城跡	19
第3章 発掘調査の成果	23
1 調査前の知見	大平愛子..... 23
2 調査の方法	中田書矢..... 27
3 段丘上面の調査	29
(a) 層 位.....	戸田真美子..... 29
(b) 遺 構.....	小野 基・深田亜紀・清水あゆ美..... 30
(c) 遺 物.....	鈴木悟嗣・三浦英俊・丸山 浩..... 53
〈付〉 1978年度調査におけるS I 01出土の遺物.....	中田書矢・石井淳平..... 70
(d) 小 結.....	大平愛子・中田書矢..... 75
4 段丘斜面のトレンチ調査	76
(a) 層 位.....	戸田真美子..... 76
(b) 遺 構.....	滝沢 匠..... 76
(c) 遺 物.....	野水晃子..... 77
(d) 小 結.....	大平愛子・中田書矢..... 79
第4章 考 察	81
1 遺構の考察	81
(a) 遺構配置の変遷.....	小野 基・清水あゆ美..... 81
(b) 旧地形の復元.....	戸田真美子..... 86
(c) 掘立柱建物.....	石井淳平..... 87
(d) 石 積 み.....	滝沢 匠..... 96

2 遺物の考察	中田書矢.....	100
3 周辺景観の考察		113
(a) 江馬氏下館周辺の近世村落の復元.....	大平愛子.....	113
(b) 江馬氏下館と古道.....	小島道裕.....	119
4 結 語	大平愛子・前川 要・中田書矢.....	121
付章 自然科学的調査の成果		125
1 岐阜県神岡町江馬氏下館跡における電磁気探査		
	酒井英男・黒沢尚美・前川 要・田中保士.....	127
2 江馬氏下館跡の焼土遺構の考古地磁気測定	広岡公夫・森 京子.....	141
3 江馬氏下館跡1996年度出土漆器の塗膜分析	四柳嘉章.....	155
4 江馬氏下館跡出土鉄砲玉の鉛同位体比測定結果	斎藤 努.....	161
参考文献		165
別 表		171
English Summary		213

図版目次

関連頁		
卷首図版 1 調査地区全景写真.....	1996年富山大学考古学研究室撮影.....	29~80
卷首図版 2 竪穴住居 S I 01発掘後写真（東から）	大平撮影.....	42
図版 1 江馬氏下館跡の地形鳥瞰図		
1 江馬氏下館跡の地形（西から）		23~27
2 1996年度調査地区の地形（北から）		80
図版 2 調査地域航空写真 1 （1947年撮影）		10~22
図版 3 調査地域航空写真 2 （1993年撮影）		10~22
図版 4 調査地域空中写真.....	1996年富山大学考古学研究室撮影.....	23~80
図版 5 江馬氏下館跡		
1 神岡町遠景写真（北から）		23~27
2 調査地区遠景写真：1978年度調査時（西から）		23~27
図版 6 調査地区周辺の地形と発掘区位置図		
1 調査地区地形図.....	小野作成.....	23~29
図版 7 江馬氏下館跡1996年度調査地区遺構（1）		

1	調査地区遠景写真（西から）	1996年富山大学考古学研究室撮影	29～80
2	調査地区発掘後全景写真（東から）	大平撮影	29～52
図版8	江馬氏下館跡1996年度調査地区遺構（2）		
1	調査地区発掘後全景写真（調査地区東部、南から）	大平撮影	29～52
2	調査地区発掘後全景写真（調査地区西部、南東から）	大平撮影	29～52
図版9	江馬氏下館跡1996年度調査地区遺構（3）		
1	建物S B11写真（南から）	大平撮影	30
2	建物S B12写真（南から）	大平撮影	30
図版10	江馬氏下館跡1996年度調査地区遺構（4）		
1	建物S B14写真（北から）	大平撮影	33
2	建物S B15写真（東から）	大平撮影	33
図版11	江馬氏下館跡1996年度調査地区遺構（5）		
1	柵列S A11写真（西から）	大平撮影	35
2	柵列S A12写真（南から）	大平撮影	35
図版12	江馬氏下館跡1996年度調査地区遺構（6）		
1	竪穴住居S I 01発掘後写真（西から）	大平撮影	42
2	炉跡S X 02検出写真（南から）	大平撮影	42
図版13	江馬氏下館跡1996年度調査地区遺構（7）		
1	竪穴住居S I 02発掘後写真（西から）	大平撮影	43
2	炉跡S X 03検出写真（西から）	大平撮影	43
図版14	江馬氏下館跡1996年度調査地区遺構（8）		
1	S P 207半截断面写真（S B11、南から）		
2	S P 148半截断面写真（S B12、北から）		
3	S P 201半截断面写真（S B12、南西から）		
4	S P 212半截断面写真（S B12、北から）		
5	S P 222半截断面写真（S B12、南から）		
6	S P 144半截断面写真（S B13、北西から）		
7	S P 210半截断面写真（S B13、西から）		
8	S P 77半截断面写真（S B14、西から）		
図版15	江馬氏下館跡1996年度調査地区遺構（9）		
1	S P 420半截断面写真（S B15、西から）	近藤撮影	30～42
2	S P 416半截断面写真（S B16、南から）		
3	S P 419半截断面写真（S B16、西から）		

- 4 S P 411・410半截断面写真 (S B16・17, 南西から)
 5 S P 513・417半截断面写真 (S B16・17, 南から)
 6 S P 443・442半截断面写真 (S B16・17, 南西から)
 7 S P 431半截断面写真 (S B17, 南から)
 8 S P 525半截断面写真 (S B17, 北から)
- 図版16 江馬氏下館跡1996年度調査地区遺構 (10)近藤撮影.....30~42
 1 S P 478半截断面写真 (S B17, 南から)
 2 S P 88半截断面写真 (S A12, 南西から)
 3 S P 19半截断面写真 (西から)
 4 S P 218半截断面写真 (北から)
 5 S P 229半截断面写真 (北から)
 6 S P 279半截断面写真 (南西から)
 7 S P 413半截断面写真 (東から)
 8 S P 494・528半截断面写真 (南西から)
- 図版17 江馬氏下館跡1996年度調査地区遺構 (11)
 1 S X 01発掘後写真 (南から)大平撮影.....43
 2 S X 01断面層位写真 (南北畦の南半, 東から)近藤撮影.....43
- 図版18 江馬氏下館跡1996年度調査地区遺構 (12)
 1 S K10・11断面層位写真 (北から)大平撮影.....46
 2 S K12・13・14断面層位写真 (東から)大平撮影.....47
- 図版19 江馬氏下館跡1996年度調査地区遺構 (13)
 1 1 E T南壁層位写真 (盛土部分, 北東から)大平撮影.....48~51
 2 3 T南壁層位写真 (盛土部分, 北から)大平撮影.....48~51
- 図版20 江馬氏下館跡1996年度調査地区遺構 (14)
 1 2 T北壁層位写真 (盛土部分, 南東から)大平撮影.....48~51
- 図版21 江馬氏下館跡1996年度調査地区遺構 (15)
 1 5 T北壁層位写真 (南東から)大平撮影.....48~51
 2 6 T南壁層位写真 (北東から)大平撮影.....48~51
- 図版22 江馬氏下館跡1996年度調査地区遺構 (16)
 1 2 N T西壁層位写真 (東から)大平撮影.....48~51
 2 10 T東壁層位写真 (西から)大平撮影.....48~51
- 図版23 江馬氏下館跡1996年度調査地区遺構 (17)
 1 調査地区南壁層位写真 (中央部, 北から)大平撮影.....29

2	調査地区南壁層位写真（西寄り、北から）	大平撮影	29
図版24	江馬氏下館跡1996年度調査地区遺構（18）		
1	調査地区北壁層位写真（中央部、南から）	大平撮影	29
2	調査地区北壁層位写真（西寄り、南から）	大平撮影	29
図版25	江馬氏下館跡1996年度調査地区遺構（19）		
1	調査地区東壁層位写真（南寄り、西から）	大平撮影	29
2	調査地区東壁層位写真（中央部、西から）	大平撮影	29
図版26	江馬氏下館跡1996年度調査地区遺構（20）		
1	段丘斜面発掘前写真（北西から）	大平撮影	76
2	段丘斜面発掘後写真（北西から）	大平撮影	51
図版27	江馬氏下館跡1996年度調査地区遺構（21）		
1	段丘斜面発掘後写真（北部南寄り、西から）	大平撮影	51
2	段丘斜面発掘後写真（北部北寄り、西から）	大平撮影	51
図版28	江馬氏下館跡1996年度調査地区遺構（22）		
1	石積み1裏込完掘写真（3T部分、西から）	大平撮影	51
2	石積み1裏込断面層位写真（3T南壁、北から）	大平撮影	51
図版29	江馬氏下館跡1996年度調査地区遺構（23）		
1	段丘斜面石積み2写真（調査地区北西隅、西から）	近藤撮影	51
図版30	江馬氏下館跡1996年度調査地区遺構（24）		
1	1T発掘後写真（段丘斜面部分、北西から）	近藤撮影	76・77
2	4T発掘後写真（段丘斜面部分、北西から）	近藤撮影	76・77
図版31	江馬氏下館跡1996年度調査地区遺構（25）		
1	3T発掘後写真（東から）	近藤撮影	77
2	2T発掘後写真（東から）	大平撮影	77
3	3T西壁層位写真（西端の崖部分、東から）	近藤撮影	76
4	2T西壁層位写真（西端の崖部分、東から）	近藤撮影	76
図版32	江馬氏下館跡1996年度調査地区遺構（26）		
1	1T南壁層位写真（斜面下部分、北から）	近藤撮影	76
2	2T北壁層位写真（斜面下部分、南から）	近藤撮影	76
図版33	江馬氏下館跡1996年度調査地区遺構実測図（1）		
1	調査地区遺構平面図	鈴木悟製図	29～80
図版34	江馬氏下館跡1996年度調査地区遺構実測図（2）		
1	南壁土層断面図	中島製図	29・76

- 図版35 江馬氏下館跡1996年度調査地区遺構実測図（3）
 1 北壁土層断面図……………戸田製図……29・76
- 図版36 江馬氏下館跡1996年度調査地区遺構実測図（4）
 1 東壁土層断面図……………戸簾製図……29・76
 2 3 T南壁土層断面図……………戸簾製図……29・76
- 図版37 江馬氏下館跡1996年度調査地区遺構実測図（5）
 1 1 T盛土断面図……………須田製図……48～51
 2 5 T盛土断面図……………須田製図……48～51
 3 3 T盛土断面図……………須田製図……48～51
- 図版38 江馬氏下館跡1996年度調査地区遺構実測図（6）
 1 8 T盛土断面図……………戸田製図……48～51
 2 9 T盛土断面図……………戸田製図……48～51
 3 2 T盛土断面図……………戸田製図……48～51
- 図版39 江馬氏下館跡1996年度調査地区遺構実測図（7）
 1 建物S B11・S B12・S B13実測図……………小野製図……30～33
 2 柵列S A11実測図……………小野製図……35
- 図版40 江馬氏下館跡1996年度調査地区遺構実測図（8）
 1 建物S B14実測図……………小野製図……33
 2 建物S B15実測図……………小野製図……33
- 図版41 江馬氏下館跡1996年度調査地区遺構実測図（9）
 1 建物S B16実測図……………梶田製図……34
 2 柵列S A12実測図……………梶田製図……35
 3 柵列S A13実測図……………梶田製図……35
- 図版42 江馬氏下館跡1996年度調査地区遺構実測図（10）
 1 建物S B17実測図……………小野製図……34
- 図版43 江馬氏下館跡1996年度調査地区遺構実測図（11）
 1 壴穴住居S I 01実測図……………深田製図……42
 2 壴穴住居S I 02実測図……………深田製図……43
- 図版44 江馬氏下館跡1996年度調査地区遺構実測図（12）
 1 土間状遺構S X01実測図……………深田製図……43
- 図版45 江馬氏下館跡1996年度調査地区遺構実測図（13）
 1 土坑実測図……………深田製図……46～48
- 図版46 江馬氏下館跡1996年度調査地区遺構実測図（14）

1 石積み 1 実測図	滝沢製図	51・96
図版47 江馬氏下館跡1996年度調査地区遺構実測図 (15)		
1 石積み 2 実測図	滝沢製図	51・96
2 10T 東壁土層断面図	滝沢製図	48～51
3 2NT・2ST 土層断面図	滝沢製図	48～51
図版48 江馬氏下館跡1996年度調査出土遺物実測図 (1)	三浦英製図	60
図版49 江馬氏下館跡1996年度調査出土遺物実測図 (2)	三浦英製図	61・62
図版50 江馬氏下館跡1996年度調査出土遺物実測図 (3)	丸山製図	62～64
図版51 江馬氏下館跡1996年度調査出土遺物実測図 (4)	野水製図	64・65
図版52 江馬氏下館跡1996年度調査出土遺物実測図 (5)	野水製図	65・66
図版53 江馬氏下館跡1996年度調査出土遺物実測図 (6)	野水製図	66・67
図版54 江馬氏下館跡1996年度調査出土遺物実測図 (7)	佐藤製図	67～69
図版55 江馬氏下館跡1996年度調査出土遺物実測図 (8)	宮崎製図	69・70
図版56 江馬氏下館跡1996年度調査出土遺物実測図 (9)	柄谷製図	77・79
図版57 江馬氏下館跡1996年度調査出土遺物写真 (1)	大平撮影	60
図版58 江馬氏下館跡1996年度調査出土遺物写真 (2)	大平撮影	61・62
図版59 江馬氏下館跡1996年度調査出土遺物写真 (3)	大平撮影	62～64
図版60 江馬氏下館跡1996年度調査出土遺物写真 (4)	大平撮影	64・65
図版61 江馬氏下館跡1996年度調査出土遺物写真 (5)	大平撮影	66
図版62 江馬氏下館跡1996年度調査出土遺物写真 (6)	大平撮影	66・67
図版63 江馬氏下館跡1996年度調査出土遺物写真 (7)	大平撮影	60～69
図版64 江馬氏下館跡1996年度調査出土遺物写真 (8)	大平撮影	67～69
図版65 江馬氏下館跡1996年度調査出土遺物写真 (9)	大平撮影	69・70
図版66 江馬氏下館跡1996年度調査出土遺物写真 (10)	大平撮影	77・78
図版67 江馬氏下館跡1978年度調査出土遺物写真 (1)	大平撮影	70～72
図版68 江馬氏下館跡1978年度調査出土遺物写真 (2)	大平撮影	71～74

挿図目次

第1図	富山大学理学部チームによる遺跡探査	大平撮影	4
第2図	発掘作業風景	大平撮影	5
第3図	南壁層位図の作成	大平撮影	6
第4図	土間状遺構S X01の発掘	大平撮影	6
第5図	発掘調査整備委員会の現地指導	近藤撮影	7
第6図	富山大学理学部チームによる考古地磁気資料採取風景	大平撮影	7
第7図	調査参加者写真	大平撮影	8
第8図	江馬氏下館跡の位置	清水作成	10
第9図	江馬氏下館跡と周辺の城跡・遺跡	平井作成	11
第10図	江馬氏下館跡付近絵図トレース図（江戸末～明治初年）		12
第11図	江馬氏下館跡付近地籍図（明治21年）		12
第12図	中・近世の吉城郡の交通路	大平作成	18
第13図	下館跡と周辺城跡の位置・距離図	大平作成	22
第14図	江馬氏下館跡の地形鳥瞰図…中谷・小幡・梶田・須田・滝川・中島作成	24	
第15図	1976～1978年度調査における下館跡南辺の調査地区	中田作成	26
第16図	1996年度調査地区のトレンチ設定図	中田作成	28
第17図	区画1における掘立柱建物の立地	中田作成	31
第18図	区画2における掘立柱建物の立地	中田作成	32
第19図	その他柱穴列の想定図	清水作成	36
第20図	区画1の柱穴土層断面図	鈴木由・深田製図	37
第21図	区画2の柱穴土層断面図（1）	鈴木由・深田製図	38
第22図	区画2の柱穴土層断面図（2）	田中慎・深田製図	39
第23図	区画毎の柱穴分類別組成	向井作成	41
第24図	区画毎の柱痕跡検出状況	向井作成	41
第25図	S X01内検出の石・礫、石材分類図	滝沢作成	44
第26図	S X01の遺物出土状況	中田・深田作成	45
第27図	S K10・11の遺物出土状況	中田・深田作成	46
第28図	S K12・13・14の遺物出土状況	中田・深田作成	47
第29図	盛土の土層堆積図	中田・戸田作成	48
第30図	盛土周辺の遺物出土状況	中田・野水作成	49

第31図	盛土内遺物の垂直分布図	中田・清水作成	50
第32図	石積みの石材分類図	滝沢作成	52
第33図	中世遺物の出土散布図（1996年度調査地区）	小島作成	54
第34図	土師器皿の出土散布図（1996年度調査地区）	小島作成	55
第35図	珠洲・瓷器系陶器の出土散布図（1996年度調査地区）	小島作成	55
第36図	瀬戸美濃の出土散布図（1996年度調査地区）	小島作成	56
第37図	中国陶磁器の出土散布図（1996年度調査地区）	小島作成	56
第38図	江馬氏下館出土の土師器皿分類図	中田作成	59
第39図	1978年度調査におけるS I 01出土の遺物（1）	中田製図	72
第40図	1978年度調査におけるS I 01出土の遺物（2）	佐藤製図	73
第41図	1978年度調査におけるS I 01周辺出土の遺物	佐藤製図	74
第42図	1996年度調査地区の地形鳥瞰図	中谷・小幡・梶田・須田・滝川・中島作成	80
第43図	館内地区における建物・柵列の主軸方位	小野作成	82
第44図	門前地区における建物・柵列の主軸方位	小野作成	82
第45図	南辺地区における建物・柵列の主軸方位	小野作成	82
第46図	江馬氏下館I期の遺構配置図	中田作成	83
第47図	江馬氏下館IIA期の遺構配置図	中田作成	84
第48図	江馬氏下館IIB期の遺構配置図	中田作成	85
第49図	柱穴レベルをもとにした旧地形の復元（南から）	戸田作成	86
第50図	門前・南辺地区における建物概略図	石井作成	87
第51図	多変量解析による掘立柱建物属性の分析結果	石井作成	88
第52図	柱穴の諸属性の相関図	石井作成	92
第53図	柱間距離と柱穴規模の相関図	石井作成	93
第54図	建物面積と柱穴規模の相関図	石井作成	94
第55図	多変量解析による掘立柱建物の分類	石井作成	95
第56図	江馬氏下館の石積み遺構	鈴木悟作成	96
第57図	1978年度調査D地区石積み実測図	滝沢作成	97
第58図	1978年度調査D地区石積み写真		98
第59図	1996年度調査：石積み遺構の岩石別三軸平均径	滝沢作成	99
第60図	1978年度調査：石積み遺構の三軸平均径	滝沢作成	99
第61図	1995年度調査：園池景石の岩石別三軸平均径	滝沢作成	99
第62図	江馬氏下館における中世遺物の接合関係図	中田作成	101
第63図	江馬氏下館出土の陶磁器接合資料	宮崎・古屋製図	102

第64図	江馬氏下館における中世食器の出土状況	中田・中谷作成	104
第65図	江馬氏下館における土師器皿の出土状況	中田・中谷作成	105
第66図	江馬氏下館における国産無釉陶器の出土状況	中田・中谷作成	106
第67図	江馬氏下館における国産施釉陶器の出土状況	早川・中谷作成	107
第68図	江馬氏下館における中国陶磁器の出土状況	早川・中谷作成	108
第69図	吉城郡高原郷阿曾布村殿組絵図		115
第70図	吉城郡高原郷阿曾布村殿組絵図トレース図	大平作成	116
第71図	江馬氏下館跡周辺の近世村落復元図	大平作成	117
第72図	本研究の探査範囲と発掘調査で検出した遺構		128
第73図	(a) 磁気傾度探査の結果, (b) 二極法電気探査の結果		129
第74図	ウェンナー法探査の結果		130
第75図	地下レーダー探査の測線と発掘で得た遺構平面図		131
第76図	測線105での地下レーダ探査の結果		132
第77図	表土掘削後の電気探査の範囲		132
第78図	上：S I 01地域における磁気傾度探査と二極法電気探査の結果 下：S I 02地域における磁気傾度探査と二極法電気探査の結果		133
第79図	S I 02地域の放射温度計による調査結果		133
第80図	表層を取り除いた後の二極法電気探査で得た電気比抵抗の分布と 発掘結果との対応		135
第81図	道路に沿った地下レーダ探査の測線A～L位置図		136
第82図	測線A～Fにおける地下レーダ探査の結果		137
第83図	測線G～Lにおける地下レーダ探査の結果		138
第84図	S X02の試料の磁化方向の等積ステレオ投影図		143
第85図	S X03の試料の磁化方向の等積ステレオ投影図		143
第86図	S X05の試料の磁化方向の等積ステレオ投影図		143
第87図	S X11の試料の磁化方向の等積ステレオ投影図		143
第88図	北陸版考古地磁気永年変化曲線（広岡, 1996）と, S X03・S X05の考古地磁気方位（平均磁化方向）		144
第89図	S K13中の被熱礫（CG1341）のN RMの磁化方向		145
第90図	S K13中の被熱礫（CG1342）のN RMの磁化方向		145
第91図	S K13中の被熱礫（CG1343）のN RMの磁化方向		145
第92図	S X01中の被熱礫（CG1351）のN RMの磁化方向		145
第93図	S X01中の被熱礫（CG1354）のN RMの磁化方向		146

第94図	S K13中の被熱礫の熱消磁による磁化方向の変化	146
第95図	S X01中の被熱礫の熱消磁による磁化方向の変化	146
第96図	漆器塗膜層の顕微鏡写真（1）	159
第97図	漆器塗膜層の顕微鏡写真（2）	161
第98図	江馬氏下館跡出土鉄砲玉と青銅器・鉛鉱石の鉛同位体比分布図（A式図）	165
第99図	江馬氏下館跡出土鉄砲玉と青銅器・鉛鉱石の鉛同位体比分布図（B式図）	165
第100図	土坑内検出の石・礫、石材観察番号（1）	三浦知作成 191
第101図	土坑内検出の石・礫、石材観察番号（2）	三浦知作成 192
第102図	石積みの石材観察番号	三浦知作成 193
第103図	1978年度調査D地区石積みの石材観察番号	三浦知作成 194

表 目 次

第1表	江馬氏下館跡の発掘調査実績表	大平作成 3
第2表	江馬氏下館跡指定地の土地買上げ事業実績表	大平作成 4
第3表	江馬氏関係年表	大平作成 16
第4表	江馬氏下館跡周辺の城館跡一覧表	大平作成 20
第5表	柱穴の断面形分類表	中田作成 41
第6表	区画1柱穴の分類別集計表	向井作成 42
第7表	区画2柱穴の分類別集計表	向井作成 42
第8表	1996年度調査地区出土食器の種類・器種別組成表	中田作成 57
第9表	1996年度調査地区出土食器の用途・種類別組成表	中田作成 58
第10表	掘立柱建物の主成分統計値表	石井作成 89
第11表	掘立柱建物の主成分負荷行列表	石井作成 89
第12表	掘立柱建物の主成分得点表	石井作成 89
第13表	掘立柱建物の相関行列表	石井作成 90
第14表	江馬氏下館：堀跡毎の種類・器種別食器組成	中田作成 109
第15表	江馬氏下館：堀跡毎の用途・種類別食器組成	中田作成 110
第16表	門前地区：遺構毎の種類・器種別食器組成	中田作成 111
第17表	門前地区：遺構毎の用途・種類別食器組成	中田作成 111
第18表	南辺地区：遺構毎の種類・器種別食器組成	中田作成 112
第19表	南辺地区：遺構毎の用途・種類別食器組成	中田作成 113

第20表	絵図と元禄検地帳に記す名前の対応表	大平作成	118
第21表	江馬氏下館跡の考古地磁気試料番号一覧		148
第22表	江馬氏下館跡S X02のNRMの磁化測定結果		148
第23表	江馬氏下館跡S X02の2.5mT消磁後の磁化測定結果		148
第24表	江馬氏下館跡S X02の5.0mT消磁後の磁化測定結果		148
第25表	江馬氏下館跡S X02の7.5mT消磁後の磁化測定結果		148
第26表	江馬氏下館跡S X03のNRMの磁化測定結果		149
第27表	江馬氏下館跡S X03の2.5mT消磁後の磁化測定結果		149
第28表	江馬氏下館跡S X03の5.0mT消磁後の磁化測定結果		149
第29表	江馬氏下館跡S X03の7.5mT消磁後の磁化測定結果		149
第30表	江馬氏下館跡S X05のNRMの磁化測定結果		150
第31表	江馬氏下館跡S X05の2.5mT消磁後の磁化測定結果		150
第32表	江馬氏下館跡S X05の5.0mT消磁後の磁化測定結果		150
第33表	江馬氏下館跡S X05の7.5mT消磁後の磁化測定結果		150
第34表	江馬氏下館跡S X11のNRMの磁化測定結果		151
第35表	江馬氏下館跡S X11の2.5mT消磁後の磁化測定結果		151
第36表	江馬氏下館跡S X11の5.0mT消磁後の磁化測定結果		151
第37表	江馬氏下館跡S X11の7.5mT消磁後の磁化測定結果		151
第38表	江馬氏下館跡S K13の焼け石のNRMの磁化測定結果		152
第39表	江馬氏下館跡S K13の焼け石の150°C消磁後の磁化測定結果		152
第40表	江馬氏下館跡S K13の焼け石の200°C消磁後の磁化測定結果		152
第41表	江馬氏下館跡S X01の焼け石のNRMの磁化測定結果		152
第42表	江馬氏下館跡S X01の焼け石の150°C消磁後の磁化測定結果		152
第43表	江馬氏下館跡S X01の焼け石の200°C消磁後の磁化測定結果		152
第44表	江馬氏下館跡焼土址の考古地磁気測定結果		153
第45表	江馬氏下館跡焼け石の考古地磁気測定結果		153
第46表	江馬氏下館跡出土鉄砲玉の鉛同位体比		163

別 表

	頁
別表1 建物計測表	小野作成……173
別表2 柵列計測表	小野作成……173
別表3 竪穴住居計測表	深田作成……173
別表4 溝計測表	深田作成……173
別表5 土坑計測表	深田作成……174
別表6 柱穴計測表	小野・春名作成……175
別表7 土坑内検出の石・礫、石材観察表	滝沢作成……185
別表8 石積みの石材観察表	滝沢作成……187
別表9 1978年度調査D地区石積みの石材観察表	滝沢作成……189
別表10 1996年度調査の出土遺物計測表	野水作成……195
別表11 1978年度調査S I 01、周辺の出土遺物計測表	三浦英作成……200
別表12 中世食器のグリッド別集計表	中田作成……201
別表13 土師器食膳具のグリッド別集計表	中田作成……202
別表14 瓦器火鉢類のグリッド別集計表	平井作成……203
別表15 珠洲貯蔵具のグリッド別集計表	平井作成……204
別表16 珠洲調理具のグリッド別集計表	平井作成……205
別表17 瓷器系陶器貯蔵具のグリッド別集計表	平井作成……206
別表18 濑戸美濃食膳具のグリッド別集計表	小林作成……207
別表19 濑戸美濃貯蔵具のグリッド別集計表	小林作成……208
別表20 濑戸美濃調理具のグリッド別集計表	小林作成……209
別表21 濑戸美濃奢侈品のグリッド別集計表	小林作成……210
別表22 青磁食膳具のグリッド別集計表	海道作成……211
別表23 白磁食膳具のグリッド別集計表	海道作成……212

付 図

付図1 江馬氏下館跡遺構平面図……………清水製図

第1章 調査の概要

1 調査に至る経緯と目的（第1表）

岐阜県の北部、旧飛騨国に位置する神岡町を流れる高原川と山田川の川筋には、中世におけるこの地域の豪族が築いたと伝えるいくつかの城跡が点在している。中でも高原川右岸に広がる殿段丘上の神岡町大字殿地区は、古文書・古絵図等に「江馬氏之下館」と記していること、字土井ノ内に「五ヶ石（御花石）」と呼ぶ5つの大きな石が残っていることから、地元では古くから、中世高原郷を中心活躍した地方有力武家である江馬氏の館・庭園跡であると言い伝えてきた。

神岡町教育委員会は1973～1977年にかけて、この殿地区一帯において土地改良（基盤整備・客土）工事に先立つ試掘調査を実施した。その結果、これらの伝承を裏付けるかのように庭園跡、南・西の堀跡や建物跡の一部を確認することができた。特に庭園跡は、故森^{おさむ}庭園文化研究所所長により、室町時代の庭園として貴重なものであるという評価を受け、1977年には岐阜県史跡「江馬館庭園」の指定を受けている。

1978年には国史跡指定を前提とした国の埋蔵文化財緊急発掘調査補助事業として、遺構規模・館跡規模の四方向からの確認を目的として本格的な発掘調査を実施した。これらの調査によって、当遺跡は中世武家居館跡として全国的に見ても非常に保存状態のよい遺跡であることが明らかとなり、1980年、遺存状態の良い関連の6つの城跡とあわせて「江馬氏城館跡」として国の史跡指定を受けた。

1993年、神岡町教育委員会では、江馬氏城館跡は国民共有の文化遺産であるという認識のもとに、遺跡の保護・保存は言うまでもなく、その歴史的意義をさらに追及するための発掘調査を計画した。さらに、遺跡を広く一般に公開・活用することも大切なことであると考え、発掘成果に基づいた整備事業も行うこととした。

この整備事業では、史跡の公有化及び保護・保存を目的に、地元住民の意志を尊重し、さらに科学的な調査研究結果に基づき、将来的には歴史公園としての整備復元を目指している。

これらの事業は、神岡町教育委員会が事務を担当し、その基本構想を事業計画に基づいて実施しつつある。またその過程における発掘調査の指導や助言、整備方法の提言については、それぞれの学識経験者で構成した発掘調査整備委員会・文化庁・岐阜県教育委員会から受けている。発掘調査整備委員会の構成は、下記の通りである。

江馬氏城館跡発掘調査整備委員会

委員長：牛川喜幸（考古学・庭園）	長岡造形大学教授
委 員：加藤允彦（造 園）	奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター 保存工学研究室長
委 員：吉岡泰英（建 築）	福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 主任文化財調査員
委 員：前川 要（考古学）	富山大学人文学部助教授
委 員：洞口英夫（地 元）	江馬遺跡保存会長

発掘調査整備委員会では、下記の実施計画を作成した。

〈基本計画〉

- ・史跡として活用でき、歴史学習が身近にできる環境づくり
- ・親しみやすく休息できる散策空間の整備
- ・文化遺産を保護・保全していくための整備を行う

以上の計画のために以下の項目について今後検討していく。

- (1) 館跡は、史跡として活用できるので、調査結果に基づいて整備復元する。
- (2) 江馬氏城館跡全体を関連づけた施設を整備する。
- (3) 出土遺物を整理し展示するための施設を整備する。
- (4) 歴史学習に親しみやすくするために、散策、休憩の場としての空間を整備する。

発掘調査は神岡町教育委員会が主体となり、発掘調査整備委員会の指導に基づき遺跡の保護・保全に必要な調査や、整備に必要な資料を得るために調査を、1994年度から計画的に実施している（第1表）。

1994年度は、館の三方を囲む堀跡のほぼ全面の発掘調査を行った。

1995年度は、館の正面と考えられる西堀の外側地区の様相を明らかにするための門前地区の全面調査と、園池地区のトレンチ調査を行った。

1996年度は、前年度門前地区で確認した道路の延長、遺構の在り方、広がりの確認を目的として下館跡指定地南辺部での調査を行った。

なお、1994年度から1996年度の調査は富山大学人文学部考古学研究室に委託して行っている。

第1表 江馬氏下館跡の発掘調査実績表

調査年度	調査地区	調査面積 (m ²)	事業費 (千円)	備 考
1976年度	庭園周辺	2,940		
1977年度	堀内側北東部建物群 南・西堀端部周辺 南堀外側地区	2,610		
1978年度	遺跡範囲確認調査	3,060	10,000	奈良国立文化財研究所・福井県教育庁 朝倉氏遺跡発掘調査研究所の指導を受ける
1994年度	堀跡地区	1,630	24,357	富山大学人文学部考古学研究室に委託
1995年度	門前地区 園池地区	1,210 140	25,764	富山大学人文学部考古学研究室に委託
1996年度	南辺地区	890	19,573	富山大学人文学部考古学研究室に委託
総 計		12,480	79,694	

2 江馬氏下館跡の現状（第2表）

神岡町教育委員会では、史跡指定地全体を遺跡保存地区として公有化を計画している。史跡指定地の総面積はおよそ24,810m²であり、そのうち4,090m²は1978年度以前に、約3,580m²は1995年度に公有化を終えている。残り17,140m²のうち、道路水路以外の約16,190m²はすべて民有地であり、14人の地権者が主に農地（大半は水田）・宅地として利用している。指定地内には3戸の住宅が建っているほか、倉庫など付属建築物や庭木などの樹木がある。指定地内の東側の史跡内を南北に町道が、中央部には同方向に農道が走っている。

なお、1996年度国庫補助事業として、指定地内の家屋の指定地外への移転1件と8,160m²の土地の公有化を実施している。

3 調査の経過と調査組織

神岡町教育委員会は、1996年度の国指定史跡江馬氏城館跡下館跡の史跡整備を目的とした発掘調査（空中写真撮影・遺跡探査を含む）を、富山大学人文学部考古学研究室に委託して実施した。なお、1996年度調査地区の選定については、1996年1月17日に実施した第2回江馬氏城館跡発掘調査整備委員会において、検討している。

第2表 江馬氏下館跡指定地の土地買い上げ事業実績表

事業年度	面積 (m ²)	事業費 (千円)	備 考
1978年度以前	4,090		
1995年度	3,580	116,661	家屋移転補償1件含む
1996年度	8,160	224,077	家屋移転補償1件含む
公有化済総面積	15,830		
未公有化総面積	8,980		
下館跡史跡指定地総面積	24,810		

発掘調査の経過：

1月17日、神岡町役場において第2回江馬氏城館跡発掘調査整備委員会を実施する。文化庁増渕徹氏、委員各氏、県教育委員会大熊厚志氏の出席を得て、町関係者を交え、1995年度調査の成果、今後の発掘調査・整備事業計画についての検討を行なう。

5月12日、神岡町教育委員会事務局担当者と富山大学代表者が調査日程・内容等について打ち合せを行なう。

6月26日、富山大学にて発掘調査の打ち合せを行い、日程、調査方法等を確認した。

7月15日、富山大学にて発掘器材の準備を行った。

7月16~21日にかけて、富山大学理学部助教授酒井英男氏を中心とするチームが、地下遺構の状態を確認するための磁気探査、電気探査、放射温度計探査を行った。なお、8月13日からは、同チームの指導を受けた考古学研究室学生が放射温度計探査を行なっている。

7月19日、現地にプレハブを設置して、発掘器材を搬入した。

7月20日、調査地区予定地西辺北端と南端に試掘坑を設定し、土層の堆積を確認するため、人力による表土掘削を開始した。

段丘面と古道とのつながりを確認するため、段丘斜面と斜面中段の畑にトレンチを設定し、人力で掘削を開始した。

7月21日、調査区西辺段丘端部で盛土遺構を、トレント西端部分で地山面の落ち込みと、古道に接する平坦面を確認した。

7月22日、重機による調査地区的表土掘削を開始。掘削が完了した個所から人力で掘り下げ、遺構の検出に努め



第1図 富山大学理学部チームによる遺跡探査（二極法電気探査）



第2図 発掘作業風景

る。

7月25日、遺構面検出がほぼ終了した。調査地区西辺中央部から斜面にかけてトレントを設定し表土を剥いだところ、石積みを検出した。地区割の設定、遺構の半截を開始した。

7月28日、遺構概略図の作成を開始した。

8月5日、遺構の半截と並行しながら、遺構の検出状況平面図・断面図の作成を開始した。漆器文化財研究所所長四柳嘉章氏来訪。

8月6日、文化庁小池伸彦氏、奈良国立文化財研究所加藤允彦氏、一乗谷朝倉氏遺跡資料館吉岡泰英氏、国立歴史民俗博物館小島道裕氏・千田嘉博氏来訪。現地視察後、岐阜県教育委員会大熊厚志氏、江馬遺跡保存会長洞口英夫氏、調査担当者、町関係者が加わり、第3回江馬氏城館跡発掘調査整備委員会を行った。

8月9日午後、現地で調査成果の記者発表を行い報道関係記者7名、神岡町議会議員9名などの参加を得た。米原町教育委員会中井均氏来訪。

8月11日午後、現地説明会を行い、地元の方々を中心に約100名の参加を得た。

8月12日、国立歴史民俗博物館小野正敏氏来訪。富山大学理学部教授廣岡公夫氏が炉跡の考古地磁気測定のため、測定資料を採取した。

8月13日、早朝、高所作業車による全景写真撮影およびバルーンによる空中写真撮影を



第3図 南壁層位図の作成（図版34参照）



第4図 土間状遺構S X01の発掘（図版44参照）

行った。埼玉県埋蔵文化財調査事業団浅野晴樹氏来訪。

8月15日、全ての発掘調査・記録作業を終了した。保存のための遺構への砂入れ、段丘斜面の埋め戻し作業を開始した。同夜、神岡町教育委員会主催のお別れパーティー。なごりを惜しむ。

8月16日、器材の搬出を行い、現場での調査作業の全日程を終了した。

8月末～9月初め、重機による調査地区全面の埋め戻しを行なった。

なお、遺跡指定地南側への遺構の広がりが想定できるため、11月20日、調査地区南側での区画施設の有無を確認するため、田中地質コンサルタント田中保士氏によるレーダー探査を行なった。また同日、夏期調査期間中に完成できなかった段丘下の旧街道（上宝道）の平板測量を行なった。

整理作業：

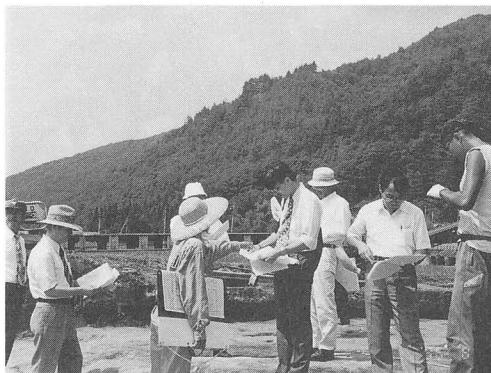
発掘作業中の宿舎夜業で、遺物洗浄・遺物取り上げ台帳の記録、遺構写真整理を行なう。8月末から、1978年度調査SI01出土遺物の計測・実測、1996年度出土遺物の注記を行なった。

9月3日、瀬戸市埋蔵文化財センターにて、檜崎彰一氏、井上喜久男氏、藤沢良祐氏、岡本直久氏、河合君近氏より、1978年度調査・1996年度調査出土の瀬戸美濃についてご教示を受けた。

10月上旬、遺物計測表のデータベース化を行った。遺物実測図、遺物ドットマップの作成を開始した。また、12月中旬まで、指定地全体での遺物の移動状況を明らかにするため、前年度までの出土遺物も含めての接合作業を隨時行なった。

10月中旬、遺構の計測、遺構計測表のデータベース化を行なった。

11月下旬、石材観察表のデータベース化を行なった。遺構図版版下の作成を開始した。



第5図 発掘調査整備委員会の現地指導



第6図 富山大学理学部チームによる
考古地磁気資料採取風景
(竪穴住居S I 01炉跡)

江馬氏城館跡III

12月上旬，三次元鳥瞰図の作成のため，等高線自動計算ソフト（TN-CONTOUR Ver. 3）に平面図からおこした旧地形データの入力を開始した。

12月18・19日，国立歴史民俗博物館にて，小野正敏氏・千田嘉博氏より遺物の出土状況・接合状況等について，小島道裕氏より下館跡周辺の屋号調査について，指導を受ける。

12月下旬，遺構図版版下，1月中旬，遺物図版版下の作成を開始した。

1月末，全図版版下が完成した。

2月上旬，事実報告の文章，2月中旬，考察の文章の執筆を開始し，2月27日，最終的な編集作業を終了した。2月28日，印刷所に入稿した。
(大平愛子)



第7図 調査参加者写真（東から）

江馬氏下館跡1996年度調査組織

調査員：前川 要（富山大学人文学部助教授）

大平 愛子（神岡町教育委員会学芸員）

調査補助員：近藤 美紀（富山大学大学院人文科学研究生）

調査作業員：中田 書矢，芳賀万里子，石井 淳平，井手口恵美，工藤 直子，
小林 香織，田中慎太郎，古屋 聰洋，宮崎順一郎，本村 徹，
小野 基，清水あゆ美，鈴木 悟嗣，滝沢 匠，戸田真美子，
野水 晃子，深田 亜紀，丸山 浩，三浦 英俊，小幡 鮎子，
梶田亜友美，佐藤 慎，須田 雅昭，滝川 邦彦，塙田 和也，
戸簾 暢広，中島 和哉，早川さやか

（富山大学人文学部考古学研究室学生）

沖野 裕子（敦賀女子短期大学学生）

沖野 好夫，出井 正蔵，道上 義紀，宮垣 一子，宮垣 秀雄，
森腰 幸一，堀辺 英臣，和仁 文子（地元作業員）

調査協力者：荒木 慎也，飯田 良智，磯村 愛子，川良 由香，佐々木亮二，
遠野いづみ，貫井 美鈴，廣瀬 直樹，眞井田宏彰，宮川 俊輔，
渡辺 樹

（富山大学人文学部国際文化学科学生）

整理参加者：海道 雅子，田中 幸生，中谷 正和，平井 晶子，向井 裕知，
浅野 良治，金成 淳一，小島あすさ，宿野 隆史，鈴木 由紀，
柄谷 朋子，春名 理史，岡田 一広，高志こころ，三浦 知徳，
砂田 普司

（富山大学人文学部考古学研究室学生）

事務局：堀本 昌義 神岡町教育委員会教育長

村井 充佳 神岡町教育委員会教育課長

古宿 稔 神岡町教育委員会社会教育係長

大平 愛子 神岡町教育委員会学芸員

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

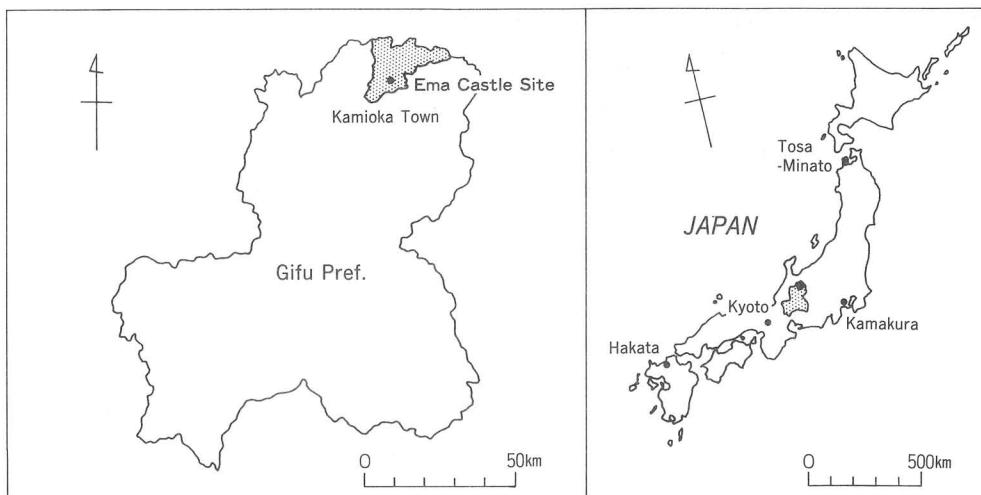
1 遺跡の立地

(a) 神岡町の地勢と遺跡立地 (図版2・3, 第8・9図)

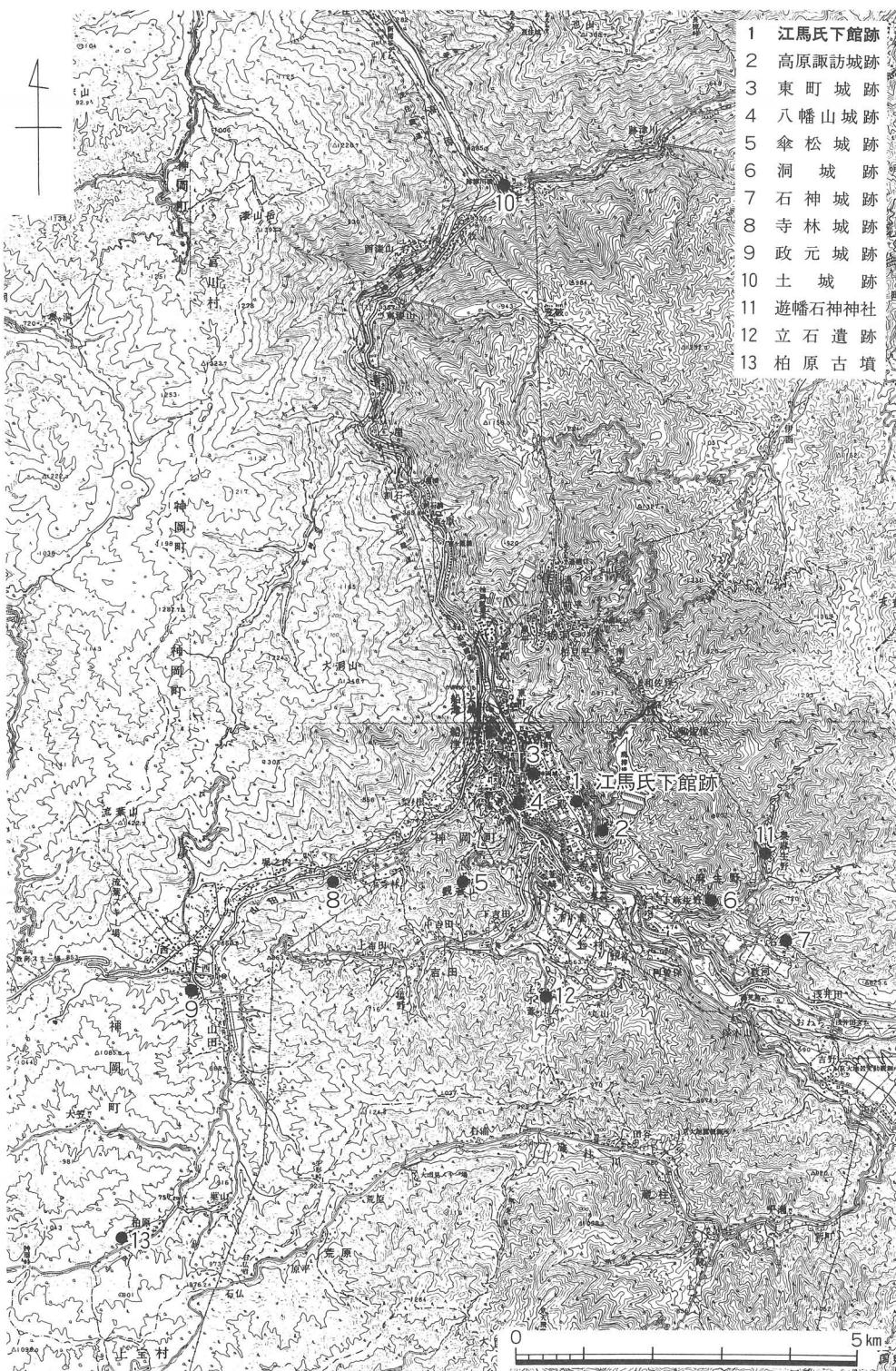
神岡町は岐阜県北部、旧飛騨国吉城郡高原郷に位置する。その人口は約13,000人、面積は312.34km²であり、うち耕地面積8.72km²、宅地面積2.32km²、山林面積221.52km²である。その広い土地のほとんどは山地・森林であり、標高差が700mもある複雑な地勢である。町や集落は山々の間を流れる谷や川に沿って立地し、神岡町市街地は河川の浸食により幾階層かに分かれた河岸段丘状の土地に成立している。市街地中心部の標高は約400mを測る。この地域は、1950年（昭和25年）に舟津町・阿曾布村・袖川村が合併し、町制を施行したものであり、江馬氏下館跡の所在する殿地区は、古くは阿曾布村に属していた。

江馬氏下館跡は高原川中流域にある殿段丘の中央部、標高約455mに立地する。殿段丘は北アルプス連峰に源を発する小谷および蒲田川、双六川が合流し山峡を北流して日本海に注ぐ高原川（神通川水系右支）と、神岡町東北端に位置する北アルプスの支脈二十五山（標高1,327m）および天蓋山（標高1,527m）付近に源を発する和佐保谷の浸食により形成された河岸段丘である。

遺跡の背後にあたる東側は二十五山から南に向かって伸びる支脈が屏風のように段丘をさえぎり、尾根の南端頂および稜線延長には「高原諏訪城」がある。現在は二十五山に発電所の導水管が通ったためその水量は減ってしまったが、かつては山麓裾部に豊富な湧水

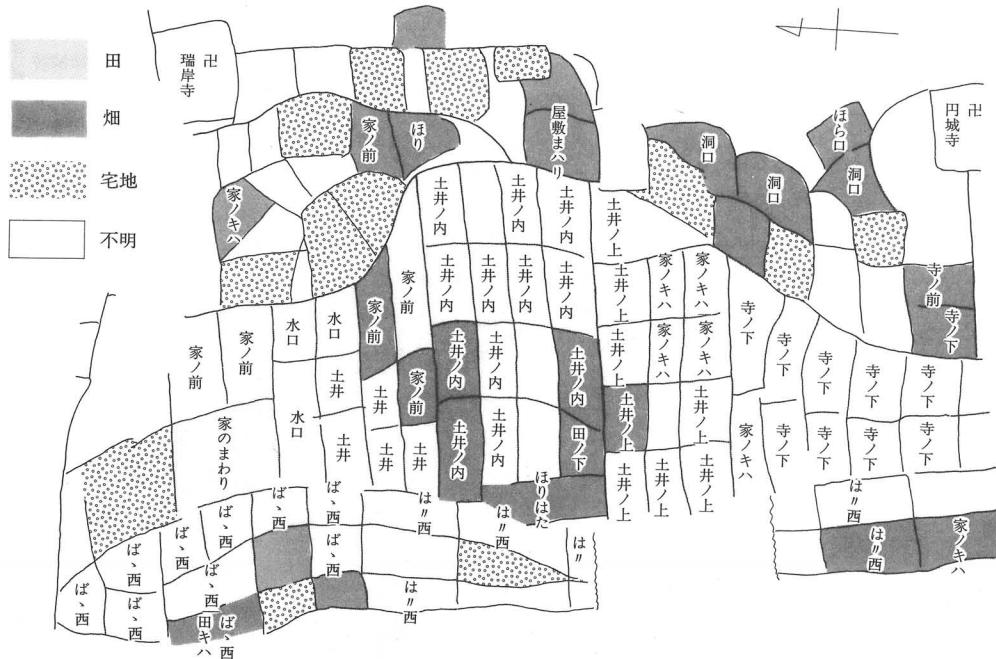


第8図 江馬氏下館跡の位置



第9図 江馬氏下館跡と周辺の城跡・遺跡 縮尺1/100,000

江馬氏城館跡III



第10図 江馬氏下館付近絵図トレイス図（江戸末～明治初年、小島道裕氏原図を一部改変）



第11図 江馬氏下館跡付近地籍図（明治21年）

や谷水があり、この地域への水源となっていたようである。

遺跡西側は西堀跡から約55m西の付近において、旧高原川が南から北西に蛇行し段丘を分断して形成した標高差約7mの崖が自然の要害をなしている。その対岸の段丘を向野と呼び、現在は神岡鉱業の社宅街・一般住宅地となっている。

遺跡南側は、和佐保谷が二十五山から延びる支脈を浸食・切断して形成した低位段丘が南約1kmの付近まで広がっている。この地区はかつては耕地であったが、現在は工業団地や運動公園となっている。

北側の段丘野尻には東町城^{りがしまち}が位置している。この遺跡は『飛州史』に「江馬之御館」と記すものであり、現在の神岡城である。この館跡北側は段丘上で最大の広がりをもち、農耕地として利用していたが、第2次大戦後、神岡鉱業の社宅拡張や都市計画による住宅地化、学校建設等によって市街地化している。東町城から眺望できる最下位段丘上は江戸時代、舟津町村として周辺農村の商業地として発展し、現在も市街地が広がっている。

また、現在の神岡町・上宝村である旧飛騨国吉城郡高原郷の中心をなす集落は、いずれも高原川およびその支流に形成された段丘上に位置している。高原郷に活躍した中世地方豪族に關係すると伝えられる城館跡は、下館跡の東側背後にある高原諫訪城のほか、高原郷では東町城（「江馬之御館」）・洞城^{ほら}・石神城^{いしがみ}・寺林城^{てらばやしき}・政元城^{まさもと}・土城^ど・尻高城^{しったか}・芋生茂城^{おうも}・天元城などがあり、これらの河岸段丘上の集落の背後に立地しているものが多い。なお、荒城郷（現在の古川町）の梨打城、越中の中地山城なども江馬氏との関係が伝えられている。

（b）古絵図・古文書から見た下館跡の土地利用の変遷（第10・11図）

殿地区に現存する土地に関する最も古い記録として元禄検地水帳（元禄7年、1694年）がある。しかしこれに付随するもしくは同時期の絵図がないため、水帳にあげている孫字名の正確な位置を知ることができない。

第10図は江戸時代末～明治初年の江馬氏下館付近の絵図のトレース図である。この図を見ると「土井ノ内」・「土井ノ上」・「田ノ下」・「ほりはた」などの字名の地区を畠として利用していることから、周辺の田よりもやや高い地形であったことが予想される。明治初年頃は、このように僅かではあるがかつての館の地形・施設の名残を留めている。

館跡内郭部に当たるであろう字「土井之内」には庭園遺構が遺存していたと推定できるが、江戸時代末期の文化年間（1804～1817）に、江馬氏と関係の深い臨済宗瑞岸寺12世陽堂泰旭がこの地区を再開発した。そして文化末年に再建した瑞岸寺本堂の境内拡張に際して、その石垣として庭園の景石を利用したようである。

第11図は明治21年の地籍図であるが、これをみると明治初年には畠があった字中通り一帯が、すべて水田になっていることがわかる。ここには掲載しなかったが、昭和初年頃に

撮影した当地の写真をみると、田の畦畔にかつては池の景石であったであろう巨石を用いていることがわかる。

このように後世の耕地化等によって、地形に残っていたかつての館の痕跡は次第に失われつつあり、明治の中頃には字名にその名残を残すだけになったようである。

(c) 遺跡周辺の現地形と原地形

神岡町大字殿地区一帯は1972年から実施した土地改良事業によって、その地形が大きく変わっている。土地改良事業施行前の地形（原地形）は、「土地改良事業計画概要書」（昭和47年10月31日付、岐阜県知事平野三郎宛、神岡町営土地改良事業施行認可許可申請書）には、「旧来の圃場は極めて小さく、そのうえ起伏多き複雑な地形をなしている。地形は東西1/60・南北1/350の傾斜で、地質は洪積層に属する。地質は地表から0～30cmまでは茶褐色粘質土質腐食土壌、30～80cmまでは黒色泥質土壌で花崗岩礫が混っている。80cm以下は黄褐色礫層で径30cmの礫および玉石が混じっている。」としている。

このように中通り一帯は南北に細長く緩傾斜で広がり、東側山麓から河川敷跡までの幅は南北に比して狭く、傾斜が急な地形であった。そして土地改良事業の施行に伴い、山麓の起伏が多い高地を削り取り、その土砂によって段丘野尻の低地を埋めた。その結果、館跡西部の外郭部分は土砂の著しい移動がなされ原地形は失われた。また中通り一帯、江馬氏下館跡を南北に縦断している町道周辺の変貌は著しく、土地改良事業とあいまって埋立て、宅地化、工場敷地等の開発が進み、市街地近郊として様相を一新し、かつての地形とはその姿を大きく変えてきている。

2 歴史的環境（第9図・第3表）

高原川水系の河岸段丘上には古くから人々の営みがあったようである。石神・麻生野・殿・小萱・釜崎・朝浦・吉田など、高原川・吉田川によって形成された河岸段丘上や、山田など山田川沿いの河岸段丘上では縄文時代の土器・石器が出土している。麻生野地区からは縄文時代草創期の有舌尖頭器が出土し、また同地区の遊幡石神神社は、縄文時代中期の硬玉製大珠をはじめとする石器類を保管している。石神地区からも縄文時代中期の赤色顔料付有孔鍔付土器や石器・石棒などが出土した。上小萱の立石遺跡は縄文後～晩期のものであろう環状列石遺構であり、周辺から土器・石器なども出土している。遺跡の範囲やその変遷等、不明な点は多いものの、縄文時代を通してこれらの河川沿いに人々が暮らしていたようである。

一方、高原郷からは弥生式土器の出土はほとんど確認されていない。

飛騨における古墳の確認例は国府・吉川を中心とする古川盆地と、高山盆地の宮川水系に集中している。これに対して本遺跡が立地する高原川水系の高原郷では、山田川沿いの

かしはら
相原古墳が唯一の確認例である。

古代から中世鎌倉時代にかけての高原郷については、確認できる遺跡や史料が少なく、明らかではない。

中世室町時代に至ると、江馬氏下館跡から13世紀以後の遺構・遺物が出土するようになる。また江馬氏が高原郷一帯を治めるようになったことを史料から知りえるようになる。江馬氏関連の史料については、葛谷鮎彦氏の詳細な考察（葛谷1970）、小島道裕氏の論考がある（小島1996）。葛谷・小島氏の研究を第3表にまとめ、以下に簡略に示す。

高原郷の江馬氏は、13世紀中頃に伊豆国田方郡江馬庄（現伊豆長岡町付近）を領有していた鎌倉幕府執権北条氏か、その在地御家人である伊豆の江馬（江間）氏のいずれかの一族が飛騨に所領を得て高原郷に入ったものようである。その後、南北朝の内乱を経て在地領主として成長して行ったと推定できる。

高原郷の江馬氏が史料上に現われるのは14世紀後葉以後のことであり、「山科家文書」応安5年（1372年）の記録がその初見である（岐阜県教育委員会1969）。

「山科家文書」の応安5年（1372年）から嘉慶2年（1388年）までの記録では「江馬但馬四郎」、「江馬能登三郎」、「江馬民部少輔」の名前が確認できる。この3人の出自、系譜、また高原郷で伝えられる江馬氏と同族なのかも明らかではない。しかしすでに14世紀末には、高原郷にいた江馬氏の一族が室町幕府と直接結びついてその公務を執行したり、逆に反抗する力をもっていたことがわかる。

「山科家札記」の文明3年（1471年）・同4年（1472年）の記録からは、江馬氏が室町幕府の有力者と強い繋がりを持ち、また認められるだけの力を持つ地方豪族であったことがわかる。

「梅花無尽藏」の延徳元年（1489年）の記録からは、江馬氏が高原郷から荒城郷近辺、つまり高原川流域に留まらず、既に古川盆地にまでその勢力を拡大していたことがわかる。戦国時代になるとその動乱の中の江馬氏の活動が記されている。北飛騨高原郷は次節でも述べるように、信州・美濃を介して太平洋側と日本海側を結ぶ交通路の分岐点として戦略上の重要地である。江馬氏は甲州の武田氏と越後の上杉氏という二大勢力の間でその双方から圧力を受けつつも、越中に進出するだけの力を蓄えていたようである。

天正10年（1582年）本能寺の変によって織田信長が没すると、江馬輝盛は飛騨の支配権をめぐる南飛騨の三木自綱との戦いに敗れて討死にし、高原諏訪城も落城した。このようにして、中世の北飛騨に雄飛した江馬氏は、近世への転換期に領主としての姿を消すこととなった。

第3表 江馬氏関係年表

暦年代		江馬氏の動向	日本史上の動き	
13世紀	1300	北条氏の一門または伊豆の江馬氏の一族、 高原郷に入る。	鎌倉時代	
				1321 後醍醐天皇 建武の新政。 1336 足利尊氏 京都に入る。 南北朝の分裂。
14世紀	1372	「江馬但馬四郎」 広瀬氏を通じ、管領細川頼之から 室町幕府の指示実行命令を受ける。[1]	南北朝時代	
	1381	「江馬但馬四郎」 伊勢貞長を通じ、管領斯波義将から 室町幕府の指示実行命令を受ける。[1]		1378 足利義満 室町殿(花の御所)に移る。
	1383	「江馬能登三郎」 山科家領飛騨国江名子・松橋を押領する。[1]		
	1388	「江馬民部少輔」 室町幕府の指示実行命令を受ける。[1]		1392 南北朝の統一。
	1400			
15世紀	1471		室町時代	
		「江馬左馬助」伊勢貞宗、飯尾為信・之種から 室町幕府の指示実行命令を受ける。[2]		1467 応仁の乱始まる。
		「江馬左馬助」管領細川勝元から 山科家に忠節を尽くすよう指示を受ける。[2]		
		万里集九、高原郷・荒城郷を訪れ 「江馬氏」の饗応を受ける。[3]		
16世紀	1565		戦国時代	
		甲州武田氏、越後上杉氏の両勢力から圧力を受ける。 この頃の江馬氏の当主は「左馬介時盛」であるが、 息子「常陸介輝盛」と対立する。 この頃、越中まで勢力を伸ばす。		1551 第1回川中島の戦い。
		「輝盛」、父「時盛」を殺害。本城高原諏訪城支配。 上杉氏の軍勢、飛騨侵攻。輝盛、上杉氏に降伏。		
		「輝盛」、織田信長を後盾とした		
		南飛騨の三木自綱と対立。 「輝盛」、吉城郡荒城川で三木自綱軍に敗れ、討死。 高原諏訪城落城。		1582 本能寺の変。
	1582			1600 関ヶ原の戦い。 —

・〈江馬氏に関する記述がみられる古文献〉

[1]『山科家文書』、[2]『山科家礼記』、[3]『梅花無尽藏』

・16世紀中葉以降の記事は『岐阜県史』通史編年中世 1969 岐阜県、『岐阜県史』通史編近世 1968 岐阜県による。

3 中世の街道と高原郷・江馬氏（第12図）

江馬氏城館跡の所在する高原郷は飛騨国の最北端に位置し、越中・信州と接していることから古くより交通の要所となっていた。ただ中世における街道の史料は必ずしも多くはない、その詳しい経路については近世以後の記録によるところが多い。しかしぬるべで示すように、中世における館・城の立地は、これらの街道と密接な関係にあったと推定できることから、街道の名称や正確な道筋はともかく、ほぼ同様の経路の交通路があったと推定して大過はないであろう。

中世鎌倉時代において交通上最も重要であったのは、幕府が所在する政治の中心地鎌倉との交通である。この鎌倉への道を鎌倉街道と呼ぶ。飛騨のみならず、北陸諸国から鎌倉のある関東方面に向かうには、日本アルプスを越え、信州・甲斐に抜けるのが最も近道であり、飛騨の鎌倉街道は北陸諸国と鎌倉とを結ぶ道としても重要であった。

有峰街道：越中有峰から高原郷を抜けて信州に至る道であり、鎌倉街道の一つであった。
 越中有峰から和佐府・下之本・森茂・山吹峠・双六を通り中山から高原川にそって長倉・今見に至り、そのまま高原川に沿って一重ケ根・平湯と進み、安房峠を越えて信州に抜けるもの（安房越え）と、そこから蒲田川沿いに柄尾・神坂・中尾を通り、中尾峠を越えて信州に抜けるもの（中尾越え）であった。鎌倉街道と呼ばれるものには、高山盆地から益田川水系を遡り、野麦峠辺りを越えて信州に抜けるものもある。鎌倉幕府が倒れると、これら鎌倉街道は鎌倉へ上の道としての役割は失うものの、飛騨・北陸諸国を信州と結ぶ道として信濃街道・信州街道と呼ばれるようになった。

飛騨と越中を結ぶ街道は越中街道と呼び、主要なものは越中東街道・越中中街道・越中西街道の3つである。

越中東街道：高山から上広瀬・今村峠・八日町・大阪峠（十三墓峠）を越えて高原郷に入り、巣山・山田・寺林を通り、舟津から高原川東岸沿いに東漆山・東茂住・横山を通り加賀領東猪谷に至る道である。

越中中街道：舟津で越中東街道から分岐するものであり、高原川西岸を割石・西漆山・西茂住・中山を経て、谷で“篠の渡し”で宮川を渡り、越中蟹寺に至る。

越中西街道：下山中道とも呼ぶ。宮川沿いに高山・広瀬・古川・袈裟丸・野口・大無雁・林・三河原（文道寺峠）・打保・杉原・小豆沢・加賀沢を通り越中蟹寺に至るものであり、室町時代になると飛越を結ぶ交通路として重要視されるようになった。

上記の主要街道の他にも、下記のような脇街道があり、信濃（有峰）街道と越中東街道とを連絡している。

有峰道：土から跡津・佐古・大多和を経て大多和峠を越え越中有峰に至る。

上宝道：鹿間から殿・麻生野・数河・浅井田・桃原を経て中山に至る。

山之村道：山之村で信濃（有峰）街道に連絡する道。坂巻から殿・和佐保・伊西峠を越え森茂に至るものと、土から跡津・佐古・青木峠を経て下之本に至るものがあった。

吉田街道：山田から杉越峠を越えるものと、寺林から寺林峠を越えるものがあり、ともに吉田に出て、釜崎に至った。

高山街道：山田から神原峠を、数河街道は西から袈裟丸を経て杉崎を結んだ。

この様に中世の飛騨国高原郷は飛騨・越中・信州を結ぶ主要街道が通るだけではなく、それらを連絡する脇街道も通る交通上の重要な地域である。

江馬氏下館跡は、越中東街道と信濃（有峰）街道とを結ぶ上宝道沿いの河岸段丘上に位置する。さらに館の南には山之村道と吉田街道の分岐点があり、これらを通じても街道と連絡がとれる。また江馬氏城館跡に指定されている城跡は、これらの街道沿いやその分岐点など交通上の重要地に位置している。江馬氏にとって、軍事・商業の両面において大切な意味をもつ交通路を掌握することが、高原郷を支配する上で重要な意味をもつことであったのだろう。



第12図 中・近世の吉城郡の交通路 縮尺1/500,000

4 周辺の中世城跡（第12・13図・第4表）

第4表に下館跡周辺の中世城館跡を一覧表にまとめ、下館跡からの距離関係を第13図に示した。第12図には街道と城跡との位置関係を示している。

高原諏訪城跡：江馬氏下館の東側背後、二十五山から南に向って延びる尾根の南端頂および稜線延長上、保木戸平（城山）山頂に位置する。周囲の山々の峰はいずれも高く、包囲された印象をうけるが、南方は水かさの多い高原川の急流に臨んでおり、比較的攻撃しにくい位置にある。高原諏訪城の南裾において山之村道が上宝道から分岐し、山之村で鎌倉（有峰）街道と連絡する。高原諏訪城は江馬氏の本城であると伝えるが、築城年代・築城者とともに不明である。

本丸は南北30m・東西16mの長方形の平場であり、その下には幅6～10mの腰曲輪がある。本丸北側尾根の延長に堅堀や堀切を設け、尾根筋からの攻撃を防いでいる。本丸の南方、直高12m下に東西の方向に山地を掘り切った長さ42m・幅18mの堀切がある。この堀切より5.5m下った所に、東西9.6m・南北20mの二の丸（出丸）があり、幅5m前後の腰曲輪がめぐる。二の丸の南端も堅堀と堀切で防御している。

洞城跡：神岡町の中心地からやや高原川をさかのぼった麻生野地区の山上にある。『飛州志』には、城主は麻生野右衛門大夫直盛と記しており、築城者はこの直盛であると考えられる。また彼は永禄7年（1564年）に55歳（一説には57歳）で没しており、築城は天文頃と考えられる。直盛の跡を継いだ慶盛が本家の輝盛と不和になり天正6年（1578年）8月18日夜、輝盛の軍勢に攻められ、慶盛は自害し、城も焼け落ちたという。

山頂に東西42m、南北13mの長方形の本丸を設け、本丸西側に東西33m、南北14mの曲輪がある。この曲輪から南側・北側それぞれの斜面に1本ずつの堅堀を設ける。また、本丸北側は堀切で尾根筋を防御している。

石神城跡：神岡町石神地区にある。洞城と石神城は共に、高原郷と鎌倉（有峰）街道を結ぶ上宝道沿いに立地し、また二つの城の間に広がる河岸段丘の平坦面を守るように立地する。江馬時経の築城とされる。

本丸は東西27m・南北19mの楕円形の平場であり、東側に南北方向の堀切、西側南北それぞれの斜面に1本ずつの堅堀を設ける。この堅堀の西に平坦面があるが、送電線の設置によって地形がかわっている。この平場の南西端部に東西方向の堀切を設けている。

寺林城跡：神岡町寺林、玄蕃山の頂部に立地する。高原郷の主要街道である越中東街道沿いである。本丸は東西23m・南北10mの方形の平場であり、3段の平場が連なるが、堀切、堅堀はない。

政元城跡：神岡町西にある。高原郷の主要街道である越中東街道はこの地で巣山・十三

第4表 江馬氏下館跡周辺の城館跡一覧表

番号	城館跡名	読み	別称	標高(m)	比高(m)	下館から直線距離(km)	立地	指定	所在地	参考文献
1	下館跡	しもやかたあと		455	0	河岸段丘面上	国史跡 江馬氏城館跡	岐阜県吉城郡 神岡町殿	2, 3, 4, 5, 6, 7, 9, 10	
2	高原諏訪城	たかはらすわじょう	江馬城　えまじょう　あさひやじょう	619	164	0.5	尾根筋先端頂部	国史跡 江馬氏城館跡	岐阜県吉城郡 神岡町殿	2, 3, 4, 5, 6, 7, 9, 10
3	東町城	ひがしまちじょう	旭山城　あさひじょう	443		0.9	段丘野尻	町史跡	岐阜県吉城郡 神岡町殿	2, 3, 4, 5, 6, 7, 9, 10
4	八幡山城	はちまんやまじょう		451	30	1	山頂	町史跡	岐阜県吉城郡 神岡町朝瀬	4, 5, 9
5	龜松城	かさままつじょう	吉田城　よしだじょう	802	373	2.1	山頂	県史跡	岐阜県吉城郡 神岡町吉田	4, 5, 9, 10
6	洞城	ほらのじょう	麻生野城　あそやじょう	536	74	2.4	半独立峰頂部	国史跡 江馬氏城館跡	岐阜県吉城郡 神岡町麻生野	2, 3, 4, 5, 6, 7, 9, 10
7	石神城	いしがみじょう	杏城　あんずじょう 二越城　ふたごえじょう	703	183	3.7	山頂	国史跡 江馬氏城館跡	岐阜県吉城郡 神岡町石神	2, 3, 4, 5, 6, 7, 9, 10
8	寺林城	てらばやしじょう	玄蕃城　げんばくじょう	632	76	3.7	半独立峰頂部	国史跡 江馬氏城館跡	岐阜県吉城郡 神岡町寺林	2, 3, 4, 5, 6, 7, 9, 10
9	政元城	まさももじょう	山田城　やまだじょう	741	39	6.2	尾根筋先端頂部	国史跡 江馬氏城館跡	岐阜県吉城郡 神岡町西	2, 3, 4, 5, 6, 7, 9, 10
10	土城	どじょう	鬼ヶ城　おにがじょう	352	62	9.2	山頂	国史跡 江馬氏城館跡	岐阜県吉城郡 神岡町牧	2, 3, 4, 5, 6, 7, 10
11	梨打城	なしうちじょう		749	197	12.5	山頂	—	岐阜県吉城郡 国府町	2, 6, 7, 10
12	尻高城	しったかじょう			7		—	—	岐阜県吉城郡 上宝村戸高	7, 8
13	天元城	てんげんじょう			9.5		尾根筋先端頂	—	岐阜県吉城郡 上宝村岩戸	8, 9, 10
14	芋生茂城	おうもしょう			14.2		—	—	岐阜県吉城郡 上宝村芋生茂	8
15	中地山城	なかちやまじょう		380	55	26	台地	町史跡	富山県上新川郡 大山町中地山	1, 2, 6, 7, 10

番号は第13図と対応する。

墓峠を越える本道と、数河峠を越える脇道（数河街道）に分かれ、政元城はその分岐点の押えであったと推定できる。江馬氏の家臣吉村政元の居城とも、正本主馬の居城とも伝えられる。本丸は東西20m・南北10mの楕円形の平場であり、幅4～10mの腰曲輪がめぐる。西側に東西16m・南北10mの曲輪がある。その南に堀切を設け、尾根筋への防御としている。

土城跡：神岡町牧、高原川と跡津川の合流点の岩山である牛首城山にある。高原郷の主要街道である越中東街道と、鎌倉（有峰）街道を結ぶ脇街道である有峰道はこの城の麓の大字土より分岐して大多和峠を経て有峰・富山に至る。土城はその分岐点にあり、北方に備えると共に、江馬氏との関係が伝えられる越中中地山城（富山県上新川郡大山町）との連絡にあてられたものであろう。江馬氏の家臣一ノ瀬清四郎の居城であったとも伝えられている。頂部に二段の平場がある。

東町城：現在の神岡町東町、江馬氏下館の北方、殿段丘の段丘野尻に位置する。『飛州志』には「江馬之御館」と記され、江馬氏が武田氏に属した後、武田信玄の越中侵攻のため、その家臣山県昌景の縄張りで造り、後の金森長近の入国際には、その家臣山田小十郎が入れ置かれたとされている。

梨打城跡：吉城郡国府町八日町、古川盆地を流れる宮川の支流荒城川が東の山峡に入つてもなく、北岸の桐谷と十三墓の両峡谷に挟まれた標高749mの山頂にある。越中東街道はこの城の東裾を抜けて大阪峠から高原郷に入るが、梨打城はその守りであった。『飛州志』には高原諏訪城城主江馬常陸介輝盛の持ち分と記され、北飛驒の雄であった江馬氏が南方を固めるために造った出城であろうが、築城者、築城年共に不明である。天正10年の荒城川の合戦で輝盛が三木氏に破れた時、本城高原諏訪城と共に落城している。

本丸は南北36m、東西24mの不整三角形の平場であり、幅4～8mの腰曲輪がめぐる。本丸を中心に三叉状に伸びる尾根上に曲輪を設け、堀切、竪堀で防御している。

その他江馬氏との関係が伝わる城跡には「八幡山城」・「傘松城」（神岡町）、「尻高城」・「天元城」・「苧生茂城」（上宝村）、「中地山城」（富山県上新川郡大山町）などがある。

（大平愛子）

第4表、第13図の参考文献

- 1 大山町教育委員会 1994 『大山の歴史』
- 2 神岡町教育委員会 1979 『江馬氏下館跡発掘調査概報』
- 3 神岡町教育委員会 1981 『江馬氏下館跡保存管理計画策定報告書』
- 4 神岡町教育委員会 1981 『神岡の文化財』
- 5 神岡町教育委員会 1994 『飛驒の神岡』
- 6 神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 1995 『江馬氏城館跡一下館跡発掘調査

報告書 I -』

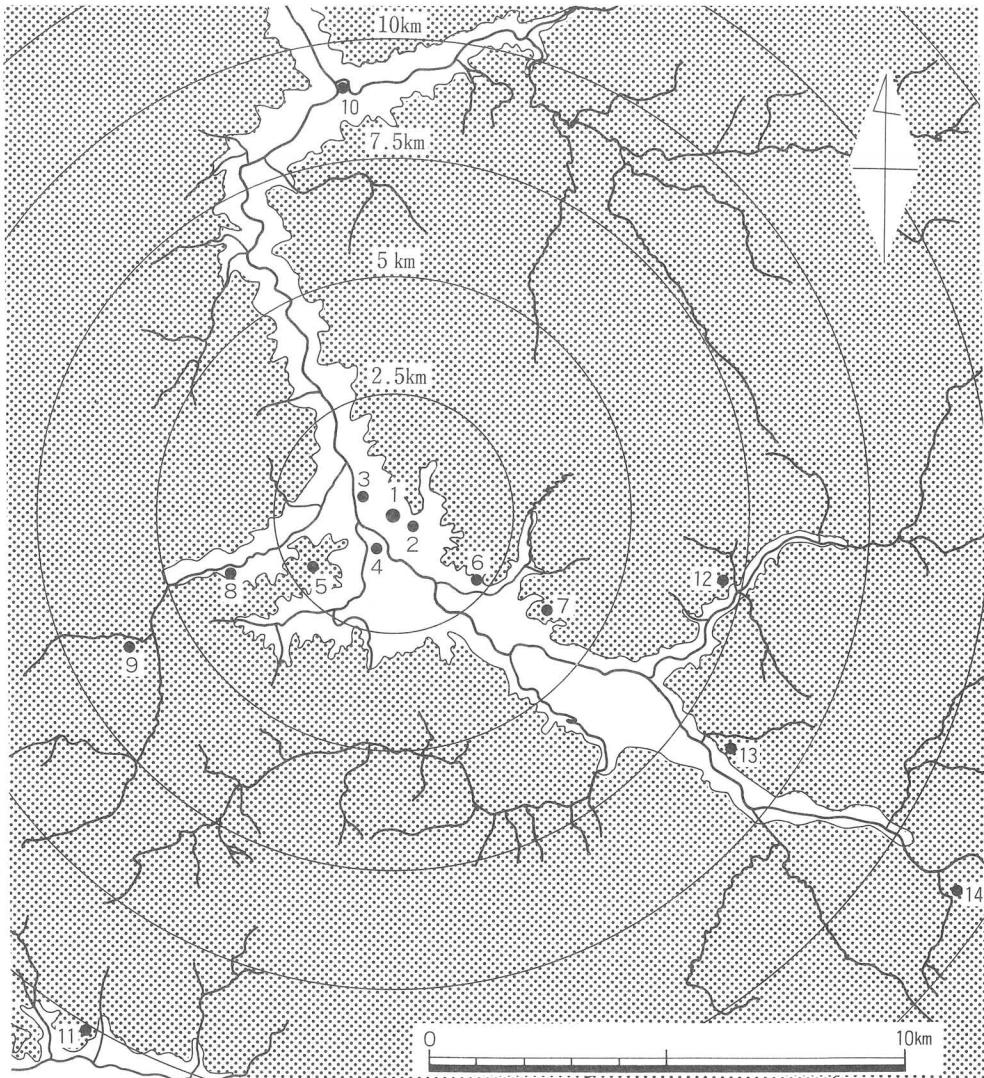
7 神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 1996 『江馬氏城館跡II－下館跡門前地区と庭園の調査－』

8 上宝村『上宝村誌』

9 森本一雄 1987 『定本飛驒の城』 郷土出版社

10 吉岡 煉・村瀬一郎・横山 泰 1979 「岐阜県」『日本城郭大系』第9巻 新人物往来社

11 佐伯哲也氏提供の縄張図を参考にした。



1. 江馬氏下館跡 2. 高原諏訪城 3. 東町城 4. 八幡山城 5. 傘松城
6. 洞城 7. 石神城 8. 寺林城 9. 政元城 10. 土城 11. 梨打城
12. 尻高城 13. 天元城 14. 芽生茂城 (図中の番号は第4表と対応する)

第13図 下館跡と周辺城跡の位置・距離図 縮尺1/160,000

第3章 発掘調査の成果

1 調査前の知見

江馬氏下館跡は北飛騨の高原郷を治めた中世武家である江馬氏の居館跡であり、1980年に国の史跡指定を受けた江馬氏城館跡の中心遺跡である。

1973年度に江馬氏居館跡・庭園跡との伝承をもつ神岡町大字殿地区において土地改良工事に先立つ試掘調査を行い、広範囲にわたる遺構の存在を確認している。この調査によって庭園遺構の概要をほぼ確認し、園池に隣接した建物跡、館を囲む堀跡の存在も明らかになった。以後、1978年にかけて、調査区を拡大しつつ館内外の発掘調査を行い、建物跡、館の西・北・南の三方を囲む堀跡などを検出している（神岡町教育委員会1979）。

1994年度にはそれまでの調査によって部分的に確認していた館の三方を囲む堀跡について、その規模と年代を確認することを主目的とする調査を行った（神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室1995）。

1995年度は、館の門前の利用のあり方と館内外を結ぶ道路を確認するための門前地区的調査と、館内部の園池地区のトレンチ調査をおこなった（神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室1996）。

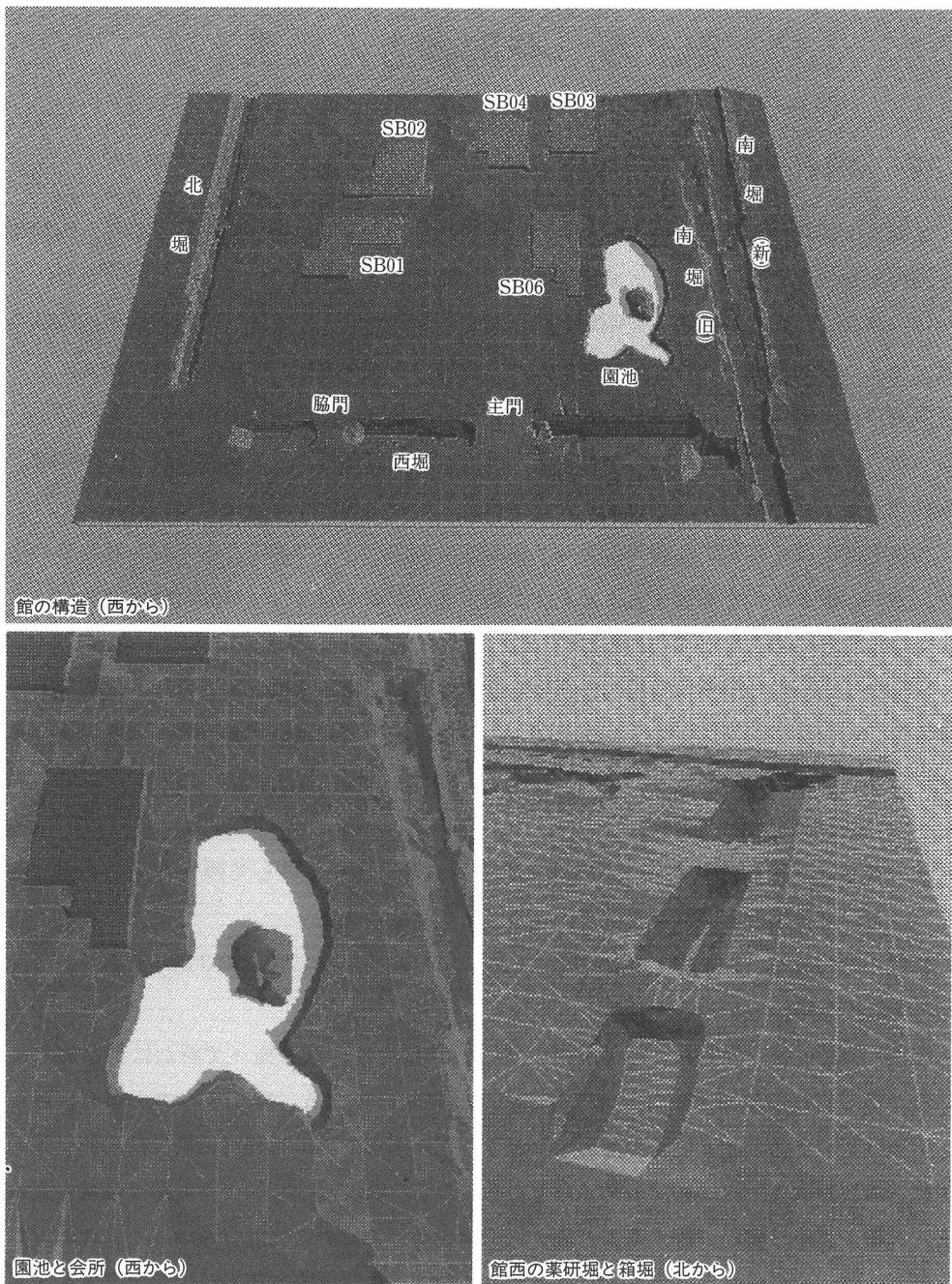
(a) 館内部の調査（第14図）

館の規模は、東西114m、南北97m程であり、東側は山を背にして残りの三方を堀で囲んでいる。建物配置と薬研堀の位置からみて、正面は西を向く。

北堀：幅約4m、深さ約1mの箱堀である。堀の内側に接して、幅3m、高さ0.5～0.8mの土壘状の高まりがある。

南堀：幅約4m、深さ約1.1mの箱堀であり、角度をやや東に振って新たに掘り直している。掘り直した新堀は幅約5m、深さ約0.7mの箱堀である。掘り込みの土層の検討から南堀は新旧2時期、6段階の変遷をたどることが判った。旧堀の埋土には館内側からの流れ込み層があり、土壘を伴っていたと考えられる。新堀にはこのような層が堆積しない。また旧堀西方には園池の排水路が接続する。南堀では旧堀の東側部分をいったん埋め戻し整地した後、その南側に新堀を掘り直しているが、この排水路以西では旧堀跡をそのまま利用している。

西堀：館の正面であり、館への導入部となる二つの土橋がある。北側の土橋1は幅約3m、南側の土橋2は幅約7mであり、南側が主門である。堀は、土橋1の北側では、幅約4.4m、底幅約1.8m、深さ約1.4mの箱堀であり、南側では幅約4.5m、底幅約0.2m、深さ



約3mの薬研堀である。その埋土は自然の堆積ではなく、整地土で一度に埋め戻している。この堀埋土の流れ込みの方向から、西堀の内側に土塁の存在が想定できる。これらの堀は、わずかに水が溜まる程度であり、基本的には空堀であったようである。出土遺物からみて16世紀前葉には埋めていたと考え得る。

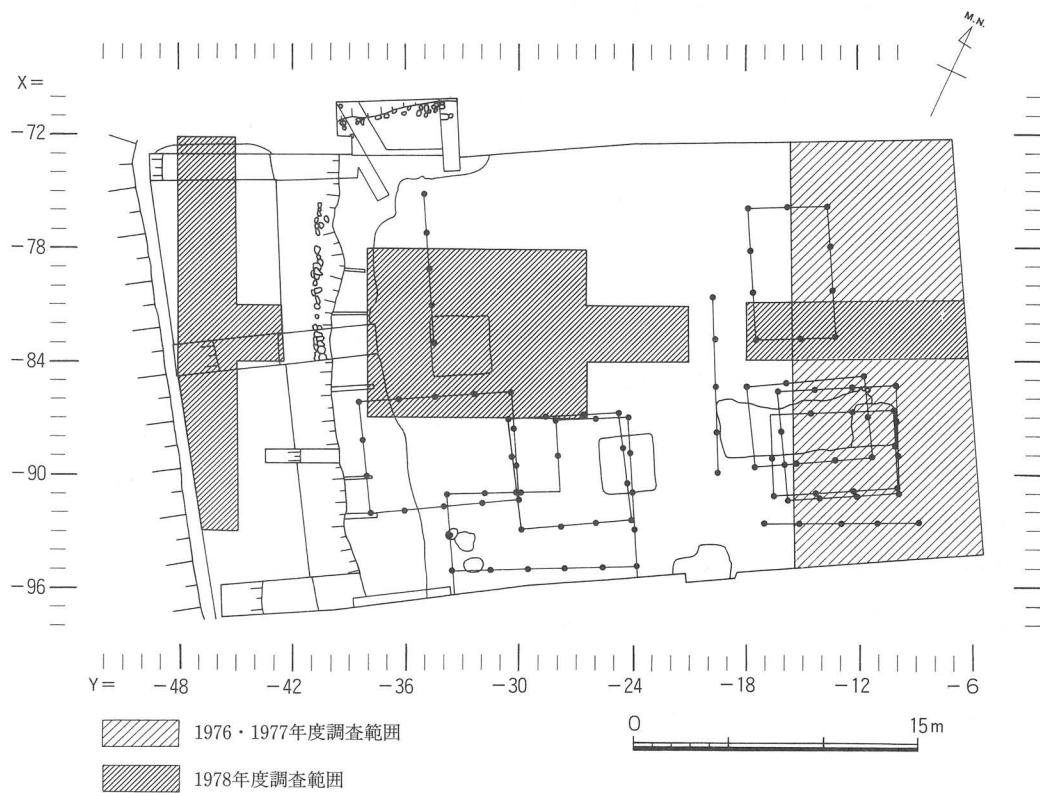
庭園：館の南西隅に位置する。1995年度に行なったトレンチ調査により東西約28m、南北約14mの規模であり、中央部には東西約7m以上、南北2.5m以上の中島を築くものであったことが判明した。池底は素掘りの状態であり、地山層まで削った後に、掘削土を用いて池の汀部と中島に盛土している。池辺の施設や付属する建物の配置、石材の使い分け、景石の据え方などから、京都の庭園様式にならって造ったものであると推測している。園池からの排水溝が南旧堀に接続していること、層位観察による南堀・盛土との関係から、園池は館の造成時に旧堀・土塁と一体の施設として成立したことがわかる。出土遺物から、16世紀前葉には埋まっていたと考え得る。

建物：館内部には3つの遺構面があり、館の成立期を含めて3回の整地を行ったと考え得る。最上層遺構面で検出した館内の建物跡には、礎石建物9棟、掘立柱建物1棟、柵列4列、溝跡等がある。これらの建物群はその主軸方位の違いから2時期あったことを確認し、報告書中ではこれをA期・B期にわけて整理している。両者の新旧関係については一部の礎石の抜き取り穴の重複（SB03・SB11）や、礎石の検出レベルから、A期（SB01～SB07）がB期（SB08～SB11）に先行することが判明している。A期建物は遺構の残存状態が良好で平面規模も推測できるが、B期建物については削平を受け、平面規模は明瞭ではない。建物と南堀との主軸方位をみると、古いとされるA期建物と南堀新堀の主軸方位が一致し、南堀新堀段階にA・B両時期の建物が伴うことが指摘できる。これら各期の遺構には、建物跡の主軸方位、堀の重複状況、庭園と堀の関係等にみられるように前構築工法の踏襲の意識が強くうかがわれる。

（b）館外部の調査（第15図）

1978年度調査では遺構の広がりを確認するため、堀の外側でもトレンチ調査を行っている。館の北側・南側では南北に長軸をとる十字型のトレンチをそれぞれ4本・1本設定した。西側は西堀から段丘端部まで伸びる東西トレンチを1本、段丘端部に東西方向に2本、南北方向に1本のトレンチを設定した。各トレンチでは柱穴・土坑・竪穴住居等を検出したようであるが、1978年度概報では、館外での明確な遺構の広がりは確認できなかったと報告している。

1995年度には館の正面にあたる門前地区の調査を行ない、掘立柱建物8棟、柵列3列、井戸10基、竈跡1基などを検出し、大きく3時期の変遷をたどることが明らかになった。門前地区第1段階は館を整備する前であり、総柱式掘立柱建物（SB01・06～08）が散在



第15図 1976～1978年度調査における下館跡南辺の調査地区 縮尺1/400

する。門前地区第2a段階は館の整備に伴って建物を建てる時期であり、門前を柵列（S A01）で南北の区画に分け、南側の区画では建物が建ち並ぶ景観が出現する（S B02・03・05・S A02）。門前地区2b段階は、館内部と共に建物を建て替える時期であり、門前地区は広場状になっていたことが明らかになった（S B04・S A02）。この成果から、館の周辺部にも多くの施設が存在する可能性が高くなった。

なお、本年度調査地区については、1976～1978年度調査時の調査地区と広い範囲で重複しており、竪穴住居などの多くの遺構が確認されていたようである。当時の調査範囲は第15図に示したとおりであるが、このうち1976・1977年度地区の記録類は所在不明である。

(c) 出土遺物の概要

中世の遺物は土師器皿を中心として5000点ほどが出土しており、その出土量は堀の内側地区に多く、門前地区では極端に少ない。出土土器・陶磁器の種類は、土師器、瓦器、中国陶磁器、白瓷系陶器、瀬戸美濃、珠洲、八尾、常滑などである。13世紀後半から16世紀中葉にかけての各時期の遺物から構成され、15世紀前半の遺物量が最も多く、館の最盛期と考えられる。また、全体的な量は少ないものの16世紀中葉まで遺物が見られる。

(d) 江馬氏下館跡の変遷

以上の調査成果に基づき、江馬氏下館全体の変遷を、次のⅠ～Ⅲ期に時期区分している。

江馬氏下館Ⅰ期（13世紀後半～14世紀）：一定の遺物が出土するようになり、この地の利用が始まる。総柱式建物が散在し、堀はまだ造っていない段階である。1994年度報告の江馬氏下館1期、1995年度報告の門前地区第1段階に相当する。

江馬氏下館Ⅱ期（14世紀末～16世紀初め）：方約一町の館を整備した段階である。建物主軸の方位の変化に基づき、ⅡA期・ⅡB期に細分できる。

江馬氏下館ⅡA期（14世紀末～15世紀前半）には堀・庭園を造成し、館としての機能が出揃う。1978年度報告のA期建物の時期である。遺物の出土量は最も多く、館の最盛期である。1994年度報告の江馬氏下館2-a1期、1995年度報告の門前地区第2a段階に相当する。

江馬氏下館ⅡB期（15世紀後半～16世紀初め）には建物の主軸方位が変化し（1978年度報告のB期建物）、門前地区には馬屋が出現する。1994年度報告の2-a2期、1995年度報告の門前地区第2b段階に相当する。

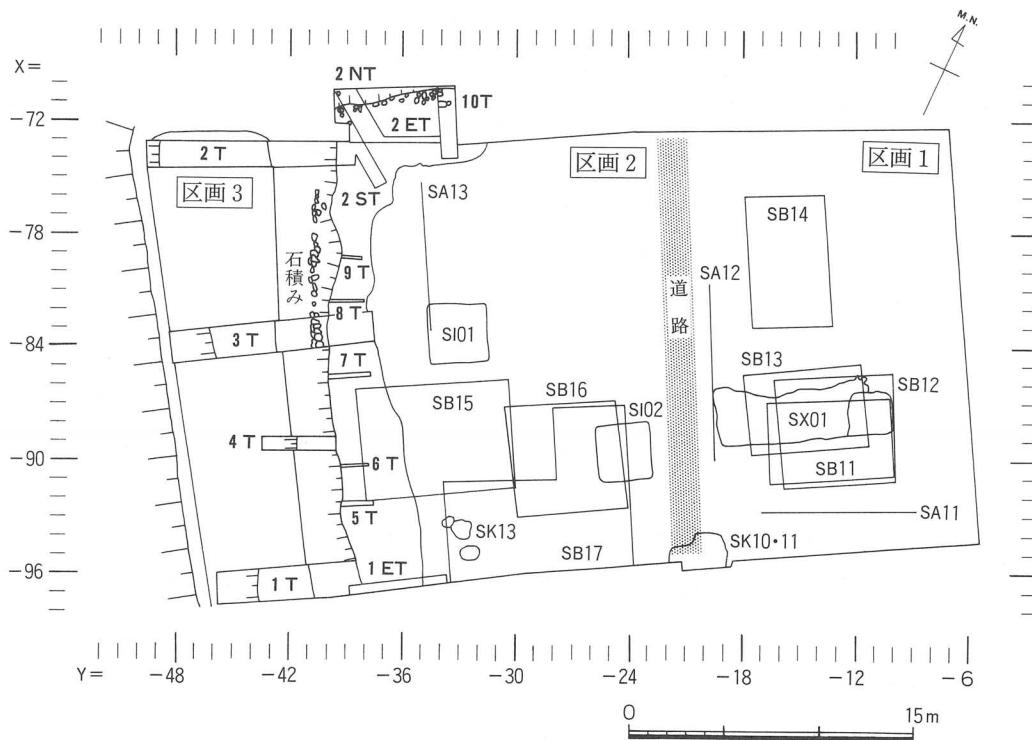
江馬氏下館Ⅲ期（16世紀中頃～16世紀末）：江馬氏が下館の堀を埋め、その機能を他に移してから、1582年に三木氏に敗れ領主としての江馬氏の歴史が終わるまでの時期である。1994年度報告の江馬氏下館2-b期と3期の一部に相当する。地籍図や縄張図等の検討から江馬氏下館Ⅲ期には、東町城・高原諒訪城が本拠であった可能性が高い。（大平愛子）

2 調査の方法（図版6、第16図）

以上の知見に基づき、1996年度は下館跡周辺の状況をより詳しく把握することを目的とした発掘調査を実施した。調査地は史跡指定地の南辺にあたる部分であるが、この地域の大部分は1976～1978年度調査時にすでに掘削している。そのため、発掘で得られる遺構・遺物データには原状を保っていないものが多く、その解釈には調査期間を通じて細心の注意をはらった。

遺跡の標示：岐阜県遺跡台帳に登録されている遺跡番号はG07K00093である（岐阜県教育委員会1989）。遺跡略号は、Gifu EmayakataをあらわしたGEとし、調査年度を組合わせてGE96と標示した。

調査区の設定：基準点網の設定は、1978年度調査時に使用したグリッドをもとに行った。これは当時の保存原点である杭1（国土座標X=35878.577, Y=13064.049, Z=455.555）と杭2（国土座標X=35913.142, Y=13116.680, Z=455.653）を結ぶ線を基準とするものである。すなわちこの軸線をY軸とし、杭1を通りこれに直交する軸線をX軸とした。杭1が原点0であり、座標は1mを単位とした数値によって表示している。なおこの座標



第16図 1996年度調査地区のトレンチ設定図 縮尺1/400

の方向は館内のA期建物の軸線にあわせたものであり、X軸が磁北から西へ約25度振っている。

調査区は現在の田地の区画に合わせて設定した。X座標が-72~-96m, Y座標が-6~-36mの範囲であり、更に調査区西端から段丘下までの斜面部分に試掘坑を拡張した(1T~3T)。発掘調査面積は約890m²であり、移動した土砂の体積は約445m³となる。

なお調査区内の杭は6mごとに設定し、遺構実測・遺物取り上げの基準として用いた。

調査の方法：まず調査区予定地の北端と南端に層位観察用の試掘坑を設定して、表土、旧表土から地山層に及ぶ基本層序を確認した。その後、調査区全体を重機を使用して旧表土層まで掘削し、それより下層は人力により発掘した。検出された遺構には、奈良国立文化財研究所の標示方法に準じて、以下の記号を用いた遺構番号を付した。

S B : 建物 S A : 柵・柱列 S I : 竪穴住居 S D : 溝

S K : 土坑 S P : 穴・柱穴 S X : 不明遺構

個々の遺構調査では、柱穴は柱痕跡や抜き取り跡を平面的に観察しながら最終的には半截している。各種土坑は二分法、あるいは四分法を用いて発掘した。土坑は半截の後、残

り半分の土壤をとりあげて、微細な遺物の水洗選別を行なっている。

斜面の盛土層や石積みについては適宜試掘坑を設けて地山まで掘り下げた（4T～10T）。ただし調査期間中にその性格・年代を明確にできなかつたため、全体的な掘削は行つていない。

実測・記録：遺構の平面図・断面図は全て縮尺二〇分の一で、割り付け実測を行なった。なお小さな柱穴・土坑の断面図は主要な建物や柵列に伴うものと、堆積に層位があるものについて作成した。ただし全ての遺構は、埋土・断面形・法量等を記録した遺構観察表から断面図の作成が可能なようにしている。調査区西端で検出された石積みについては、使用石材の岩石種と寸法（長径・短径・控え）を石材観察表にまとめた。このうち岩石種の同定では神岡町文化財審議会委員長・若田俊一氏より多くのご教示をいただいた。

出土遺物の取り上げは、前述した座標を用いてX・Y・Z座標を少数点以下2桁まで記録して行なった。取り上げた遺物は台帳登録した後、座標値をもとに全点をドットマップ化している。

写真撮影は遺構検出状態、土層断面、遺物出土状態、遺構完掘状態等を中心に行なった。調査区全体の発掘後全景写真は高所作業車を用いて撮影し、あわせてバルーンによる空中写真撮影も行なった。

（中田書矢）

3 段丘上面の調査

（a）層位（図版23～25・34～36）

1996年度調査地区は史跡指定地の南辺に位置し、段丘端部にあたる。そのため、調査地区的東西端では、遺構面を検出した地山面で約1mの比高差がある。また、1995年度調査の門前地区よりやや高いところに立地しているようであり、0.8m程の標高差がある。調査地区内のY座標-20mとY座標-30m付近にある2つの段差については、後世の耕地化による削平と考えられる。

段丘上面の層位は、南壁、東壁、北壁の3方向で観察した。基本層序は、上層から表土、土地改良土（盤土）、旧耕作土、地山に大別できる。表土は第1層オリーブ褐色砂質土および第2層暗褐色砂質土であり、現在の耕作土である。第3層明黄褐色砂質土は盤土であり、以上の土層は1972年度の土地改良工事の際の客土である。旧耕作土は第11層暗褐色砂質土および第25層黒褐色シルト、第29層暗赤褐色砂質土が相当する。土地改良以前の耕作土であり、中世～近世までの遺物包含層である。第29層は耕作に伴つて沈着した鉄分の層である。地山は暗灰黄色砂質土であり、この面上で遺構を検出した。（戸田真美子）

(b) 遺構 (図版 7~22・26~33・37~47, 第16~32図, 第5~7表)

発見した主な遺構は、掘立柱建物7棟、竪穴住居2基、土坑22基、盛土、石積みなどである。また調査区中央にほとんど遺構のない帶状の部分があり、東西方向にはしる道路跡であったと考えられる。本地区はこの道路を境として、2つの居住区画にわかれしており、道路に沿う柵列SA02は空間を区分する性格のものであった。

本文では、道路・柵列の東側部分を区画1、西側部分を区画2と呼称している。なお区画2の西側は河岸段丘の斜面となっており、その中位に確認できた平坦面は区画3と呼称した(第16図)。また、文中における「南辺地区」とは区画1~3の総称である。

以下で主な遺構について報告していくが、ここでは各遺構を種類ごとに記すにとどめ、時期別の組合せやその変遷については第4章考察で扱うこととする。 (中田書矢)

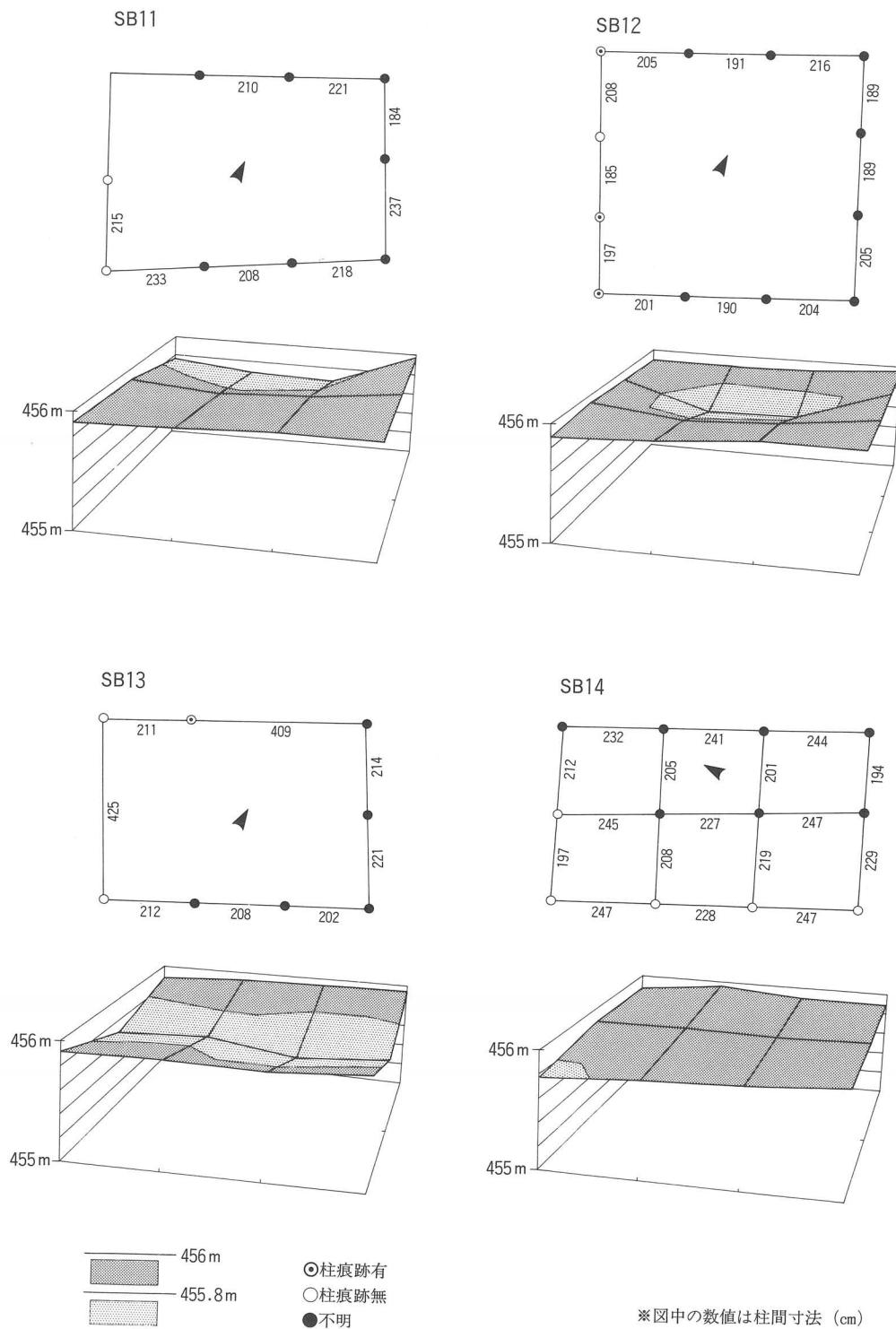
掘立柱建物・柵列跡 (図版 9~11・14~16・33・39~42, 第17~24図・第5~7表)

本年度の調査では福井県立朝倉氏遺跡資料館・吉岡泰英氏のご指導を受けつつ、掘立柱建物7棟、柵列3列を復元した。これらの柱穴数は110基を数えるが、調査区全体での柱穴数は525基であり、さらに多くの建築活動があったことが推定できる。なお、このうちの249基については、1976~1978年度調査時に一度完掘しており、埋土の状況・柱痕跡の有無を確認できなかった。

第17・18図には区画ごとの建物の立地を示した。区画1の建物は平坦な場所に立地していることがわかる。区画2では西に低く、ゆるやかに傾斜した場所に建物が立地している。なお南辺地区全体の地形復元については第4章で詳しく扱っている。以下、各建物について記すが、文中に示す尺は、1尺を0.303mとして計算したものである。また、遺構番号は1995年度調査門前地区からの通し番号とし、それぞれSB11・SA11から数えた。

SB11 (図版 9の1・39の1) : 区画1の南寄り, X座標-91.2~-86.9, Y座標-16.8~-10.2の範囲に位置する。南北2間、東西3間の東西棟の側柱式建物である。この建物の東側には、桁行に柱筋をそろえた柱間1.7m(5.8尺)前後の柱穴が5基あり、東側に2間×2間の張り出しがある可能性がある。主軸方位はN-61.5°-Eであり、座標にはほぼ一致する。桁行は総長6.59m(21.8尺)であり、柱間は約2.2m(7.3尺)等間である。梁行は総長4.21m(13.9尺)であり、柱間は2.1m(6.9尺)前後である。なお北側柱穴列の東から第4柱穴は検出できなかった。柱穴は円形・橢円形を中心とし、長径28~42cm、深さ8~35cmを測る。埋土は黒褐色土を中心とし、層をなす。SP177からは直径12cm程の根石を検出している。SB12と重複しているが、直接切り合うSP200・SP201を1976・1977年度調査時に完掘しており、新旧関係は不明である。またSB13とも重複しているが、直接切り合っていない。遺物はSP225から土師器皿が1点出土している。

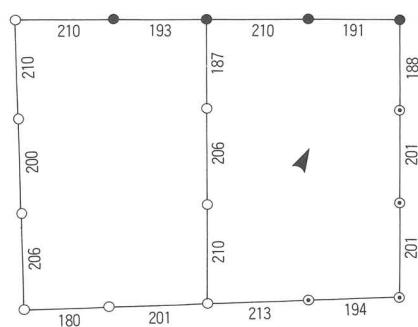
SB12 (図版 9の2・39の1) : 区画1の南寄り, X座標-91.8~-85.5, Y座標-16.4



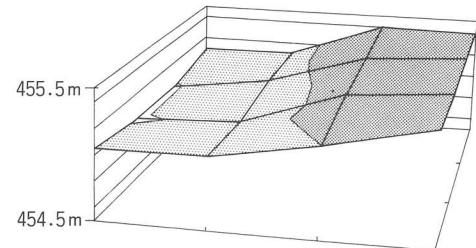
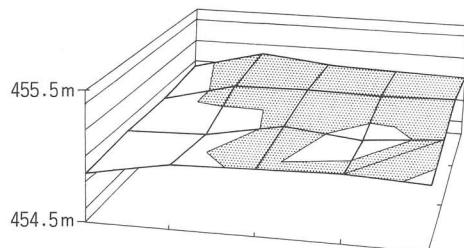
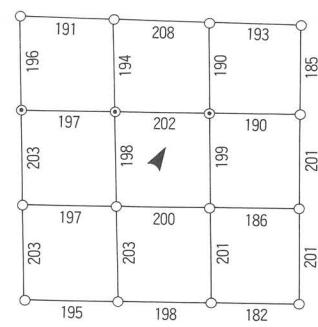
第17図 区画1における掘立柱建物の立地

江馬氏城館跡III

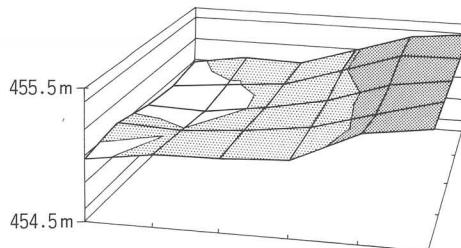
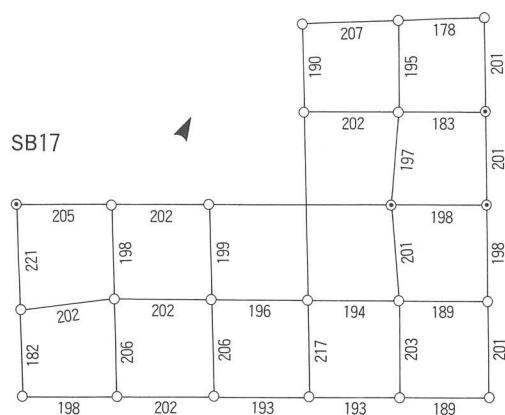
SB15



SB16

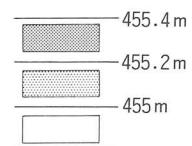


SB17



- ◎柱痕跡有
- 柱痕跡無
- 不明

*図中の数値は
柱間寸法 (cm)



第18図 区画2における掘立柱建物の立地

～-10.2の範囲に位置する。南北3間、東西3間の東西棟の側柱式建物である。西側には北側柱穴列・南側柱穴列と柱筋をそろえ柱間が等しい柱穴列があり、西側に2間分張り出す可能性がある。主軸方位はN-62.5°-Eであり、座標にほぼ一致する。桁行は総長5.95m(19.6尺)であり、柱間は約2.0m(6.6尺)等間である。梁行は総長5.83m(19.2尺)であり、柱間は約2.0m(6.6尺)等間である。柱穴は円形を中心に長径27～50cm、深さ13～42cmを測る。埋土は黒褐色土を中心に層をなす。S P148・S P171・S P212・S P222からは根石を検出し、直径は10～18cm程であった。S P148・S P212・S P222では柱痕跡を確認しており、直径は16cm前後、深さは18～32cmを測る。S B11と重複しているが、直接切り合うS P200・S P201を1976・1977年度調査時に完掘しており、新旧関係は不明である。S B13とも重複するが、直接切り合わない。遺物はS P222から土師器皿が2点出土している。

S B13 (図版39の1)：区画1の南寄り、X座標-89.9～-85.0、Y座標-18.1～-11.4の範囲に位置する。南北2間、東西3間の東西棟の側柱式建物である。建物中央に土間状遺構S X01を伴う。西側に北側柱穴列・南側柱穴列と柱筋をそろえ柱間が等しい柱穴列があり、西側に2間×1間の張り出しがある可能性がある。また、北側に柱間が等しい柱穴列があり、北側に3間×1間の張り出しがある可能性がある。主軸方位はN-62.0°-Eであり、座標にほぼ一致する。桁行は総長6.22m(20.5尺)であり、柱間は約2.2m(7.2尺)等間である。梁行は総長4.35m(14.4尺)であり、柱間は約2.1m(6.9尺)等間である。なお、北側と西側柱穴列の東から第2柱穴は検出できなかった。柱穴は円形を中心に長径34～50cm、深さ8～33cmを測る。埋土は黒褐色土を中心に層をなす。S P144では柱痕跡を確認しており、直径12cm、深さ20cmを測る。なお、S P534とS X01が近世溝SD03に壊されている。S B11・S B12とも重複しているが、直接切り合わない。遺物は出土していない。

S B14 (図版10の1・40の1)：区画1の北西寄り、X座標-83.0～-75.7、Y座標-17.8～-13.3の範囲に位置する。南北3間、東西2間の南北棟の総柱式建物である。南側第1・第2柱穴列の西側に柱筋をそろえ柱間が等しい柱穴があり、西側に1間分張り出す可能性がある。主軸方位はN-27.0°-Wであり、座標にほぼ一致する。桁行は総長7.22m(23.8尺)で、柱間は2.4m(7.9尺)前後である。梁行は総長4.23m(14.0尺)で、柱間は2.1m(6.9尺)前後である。柱穴は円形を中心とし、長径31～52cm、深さ6～31cmを測る。埋土は黒褐色土を中心に層をなし、一部地山ブロックが混じる。遺物は出土していない。

S B15 (図版10の2・40の2)：区画2中央よりやや南西寄り、X座標-92.3～-85.9、Y座標-38.5～-30.2の範囲に位置する。南北3間、東西4間の東西棟の側柱式建物であ

り、東側から2間目の梁行方向に間仕切りをもっている。主軸方位はN-61.5°-Eであり、座標にはほぼ一致する。桁行は総長8.04m(26.5尺)、梁行は総長6.16m(20.3尺)である。桁行・梁行共に柱間は約2.0m(6.6尺)等間である。柱穴は円形を中心とし、長径23~65cm、深さは15~42cmを測る。埋土は暗茶褐色土と黒褐色土を中心に層をなすが、建物の南東隅付近の柱穴埋土は灰黃褐色土が中心である。S P 401・S P 455からは根石を検出し、その直径はそれぞれ11cm、10cmを測る。S P 394・S P 418・S P 420・S P 422では柱痕跡を確認し、直径は16cm前後、深さは15~35cmを測る。S B 16・S B 17と重複しているが直接切り合わない。遺物はS P 420から鉄製品1点、S P 428から土師器皿1点、S P 455から銅滓1点が出土している(図版51の83)。

S B 16(図版41の1):区画2の南東寄り、X座標-93.2~-86.9、Y座標-30.7~-24.3の範囲に位置する。南北3間、東西3間の南北棟の総柱式建物である。北側に東側より第1・第3・第4柱穴列に柱筋をそろえ柱間が等しい柱穴列があり、北側に1間分張り出す可能性もある。また、北東隅には、柱間の狭い柱穴列が1間×1間分あり、底である可能性がある。主軸方位はN-31.5°-Wであり、座標よりやや西へ振る。桁行は総長6.02m(19.9尺)、梁行は総長5.92m(19.5尺)である。桁行・梁行共に柱間は約2.0m(6.6尺)等間である。柱穴は円形・楕円形を中心として、長径24~70cm、深さ16~51cmを測る。埋土は暗茶褐色土と黒褐色土を中心に層をなし、一部、地山ブロックが混じる。S P 413・S P 416・S P 419では柱痕跡を確認し、直径は16cm前後、深さは14~34cmを測る。S B 15・S I 02と重複するが、直接切り合わない。また、S B 17とも重複しており、切り合う柱穴の新旧関係はS P 411→S P 410、S P 443→S P 442、S P 513→S P 417、S P 563→S P 447であり、S B 16→S B 17であることが判る。遺物はS P 395から瀬戸美濃壺瓶類1点、S P 406・S P 411・S P 443から土師器皿各1点が出土している(図版51の84・85)。

S B 17(図版42の1):区画2の南寄り、X座標-95.4~-87.1、Y座標-34.1~-24.1の範囲に位置し、調査区南外に拡張すると考えられる建物である。調査区内においては、南北2間、東西5間の東西棟の総柱式建物であり、北辺東側に2間×2間の張り出しがある。主軸方位はN-64.5°-Eであり、座標にはほぼ一致する。桁行は総長9.75m(32.2尺)、梁行は総長4.03m(13.3尺)である。桁行・梁行共に柱間は2.0m(6.6尺)前後である。なお、南側より第3柱穴列の東から第3柱穴は検出できなかった。柱穴は長径26~70cmの円形を中心としており、深さは10~58cmを測る。埋土は暗茶褐色土と黒褐色土を中心に層をなし、一部、地山ブロックが混じる。S P 439・S P 459・S P 461・S P 465から根石を検出し、その直径は7cm前後である。S P 404・S P 407・S P 410・S P 431では柱痕跡を確認し、直径は12~21cm、深さは24~40cmを測る。S P 407がS I 02の一部を壊し、S P 525がS K 12に壊されている。S B 15と重複するが、直接切り合わない。また、S B 16と

重複しており、切り合う柱穴の新旧関係は S P 410←S P 411, S P 442←S P 443, S P 417←S P 513, S P 447←S P 563であり、S B17←S B16であることが判る。遺物は S P 409から骨片 1 点、S P 410から鉄製品 1 点、S P 431から土師器皿 2 点と種子 1 点、S P 442から青磁碗 1 点、S P 478から土師器皿 2 点が出土している（図版51の86～89・102）。

S A 11（図版11の1・39の2）：区画1の南寄り、X座標−93.0～−92.9, Y座標−17.3～−9.1の範囲に位置する東西方向の柵列である。調査区外の南に建物として伸びる可能性がある。主軸方位はN−66.0°−Eであり、座標にはほぼ一致する。総長は8.2m（27.1尺）である。柱間は、東から第1柱穴−第2柱穴と第3柱穴−第4柱穴の柱間が約1.8m（5.9尺）と等間である。また第2柱穴−第3柱穴と第4柱穴−第5柱穴の柱間は約2.3m（7.6尺）等間である。柱穴は長径35～60cm、深さ6～15cmを測り、平面形は一様でない。埋土は暗茶褐色土と黒褐色土を中心に層をなし、一部地山ブロックが混じる。遺物は出土していない。

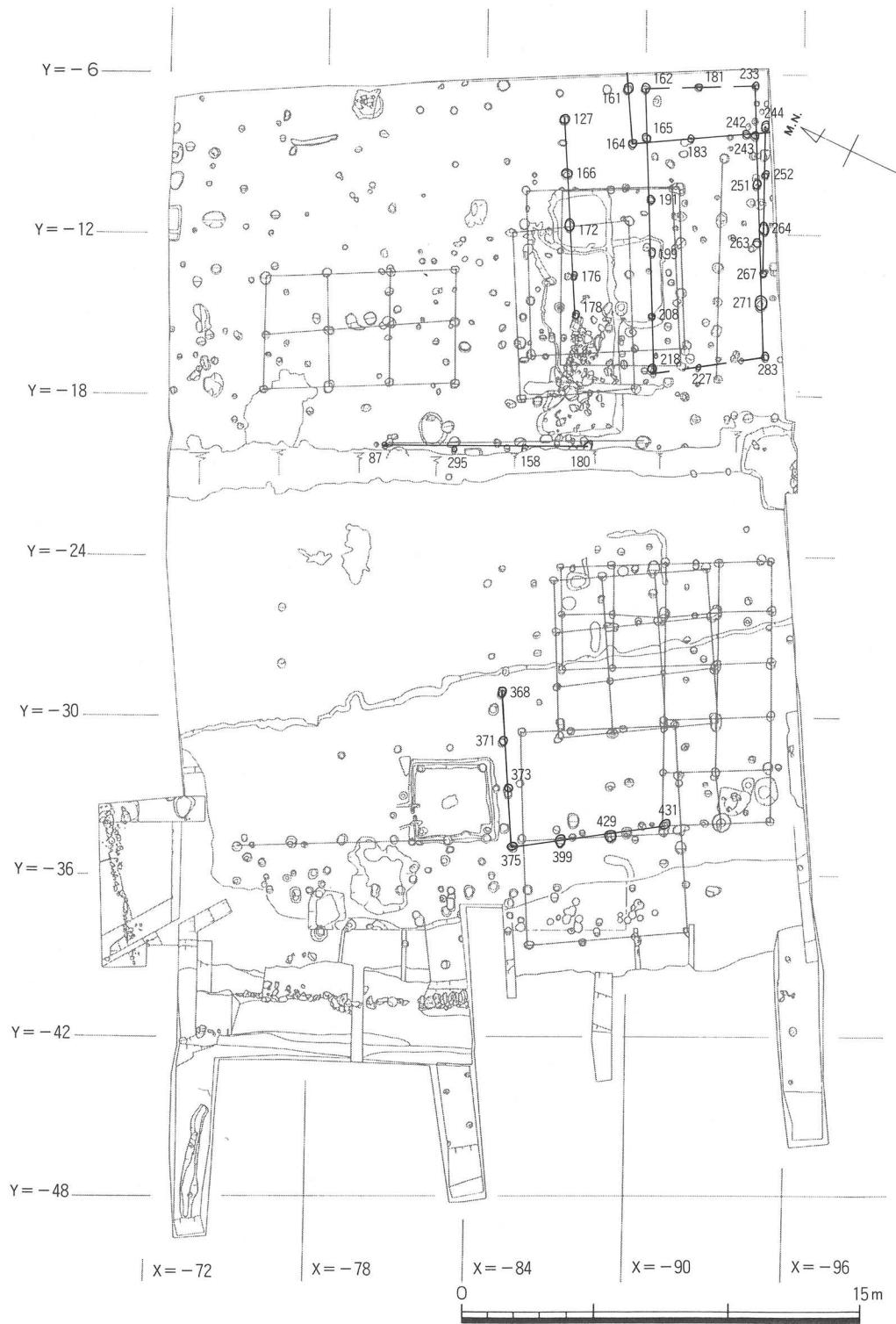
S A 12（図版11の2・41の2）：区画1の西寄り、X座標−90.2～−80.5, Y座標−19.7の範囲に位置する南北方向の柵列である。主軸方位はN−25.5°−Wであり、座標にはほぼ一致する。総長9.63m（31.8尺）であり、柱間は約2.4m（7.9尺）等間である。柱穴は円形もしくは楕円形であり、長径33～59cm、深さ9～54cmを測る。埋土は黒褐色土を中心にして層をなす。遺物は S P 156・S P 179から土師器皿が各1点ずつ出土している（図版48の2）。

S A 13（図版41の3）：区画2の北西寄り、X座標−83.2～−75.2, Y座標−34.9～−34.6の範囲に位置する。南北方向にのびる4間の柵列である。主軸方位はN−27.5°−Wであり、座標にはほぼ一致する。総長7.95m（26.2尺）であり、柱間は約2.0m（6.6尺）等間である。柱穴の平面規模は長径34～45cmの円形もしくは楕円形であり、深さは24～59cmを測る。埋土は黒褐色土を中心に層をなす。S P 314では柱痕跡を確認し、直径23cm、深さ49cmを測る。S P 336がS I 01と重複するが、1978年度調査において完掘しており、新旧関係は不明である。遺物は出土していない。

その他の柱穴列について（第19図）：今回の調査で確認した掘立柱建物7棟及び柵列3列を構成する柱穴は、総数525基のうち110基であるが、残りのいくつかの柱穴についても調査時において建物あるいは柵列を形成する可能性のあることを注意していた。しかし、最終的に、①柱穴が直線上に並ばない、②柱穴が小さすぎる、③柱穴列が調査区外に拡張し、建物になる可能性が高い、などの理由から、建物及び柵列として図化しなかった。以下、このようなものについて記述する。

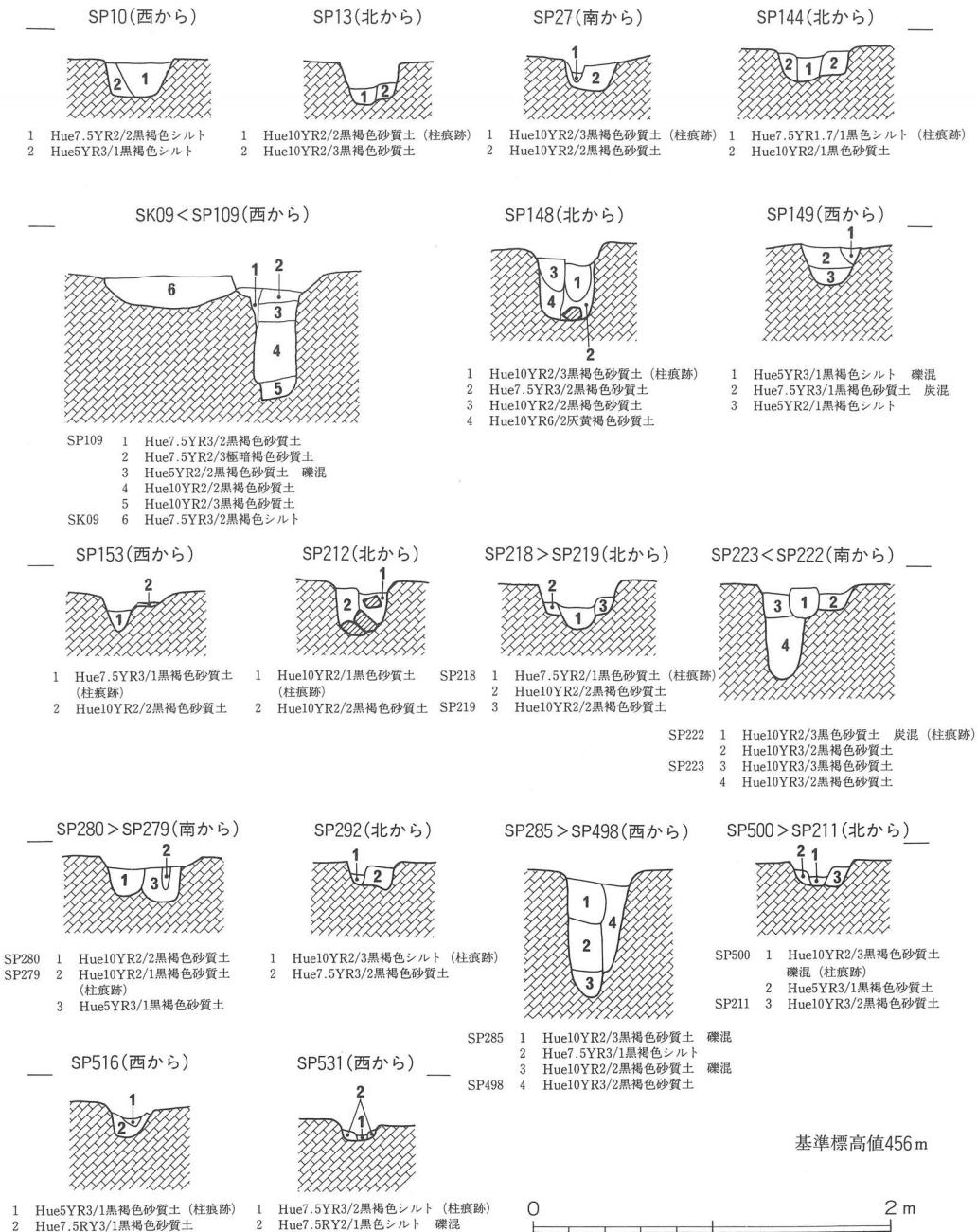
区画1の南寄り、X座標−94.6, Y座標−13.5～−8.0の範囲に位置するS P 244からS P 267は柱間が等間である。主軸方位はN−64.5°−Eであり、座標にはほぼ一致する。東西

江馬氏城館跡III



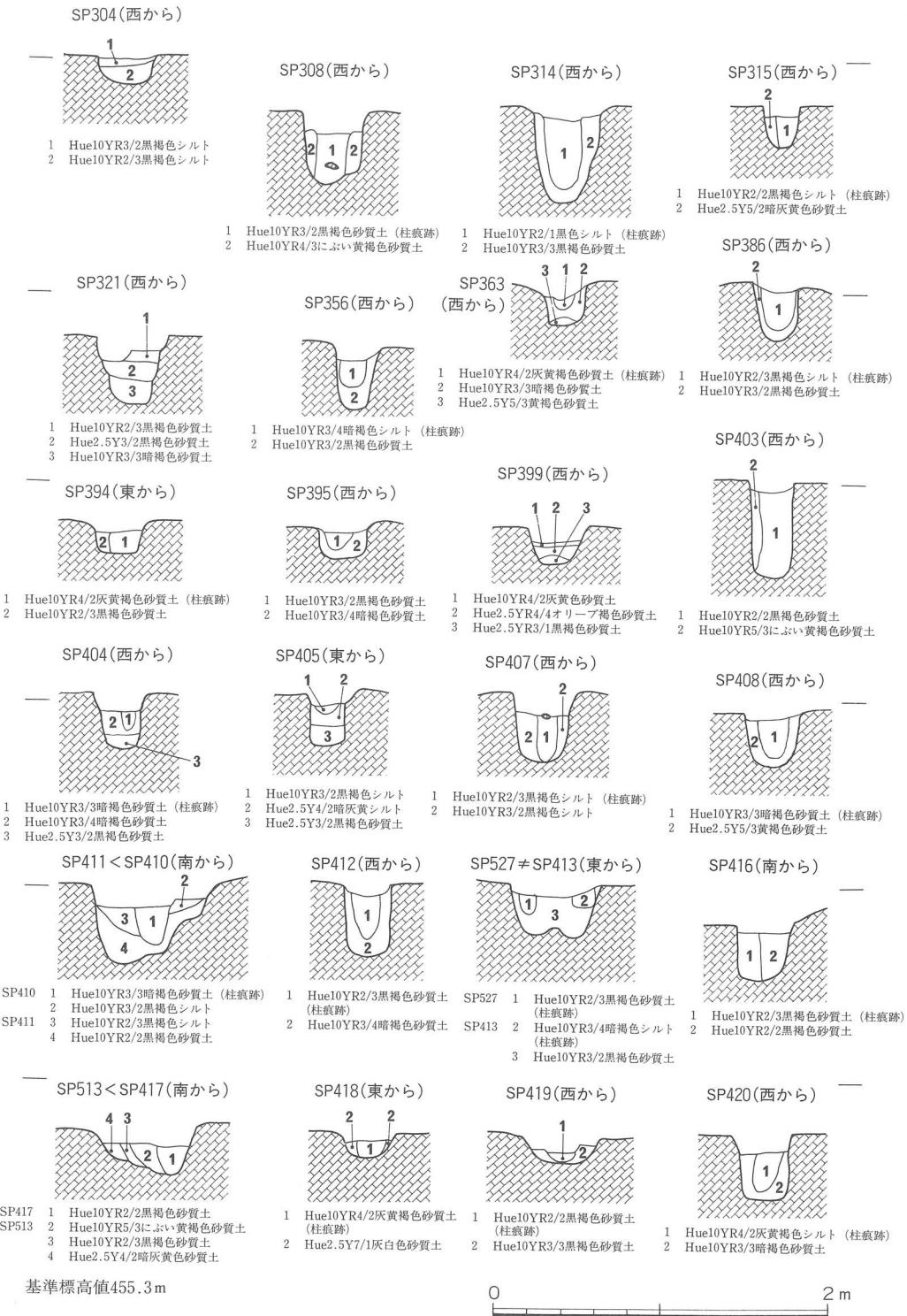
第19図 その他柱穴列の想定図 縮尺1/250

発掘調査の成果



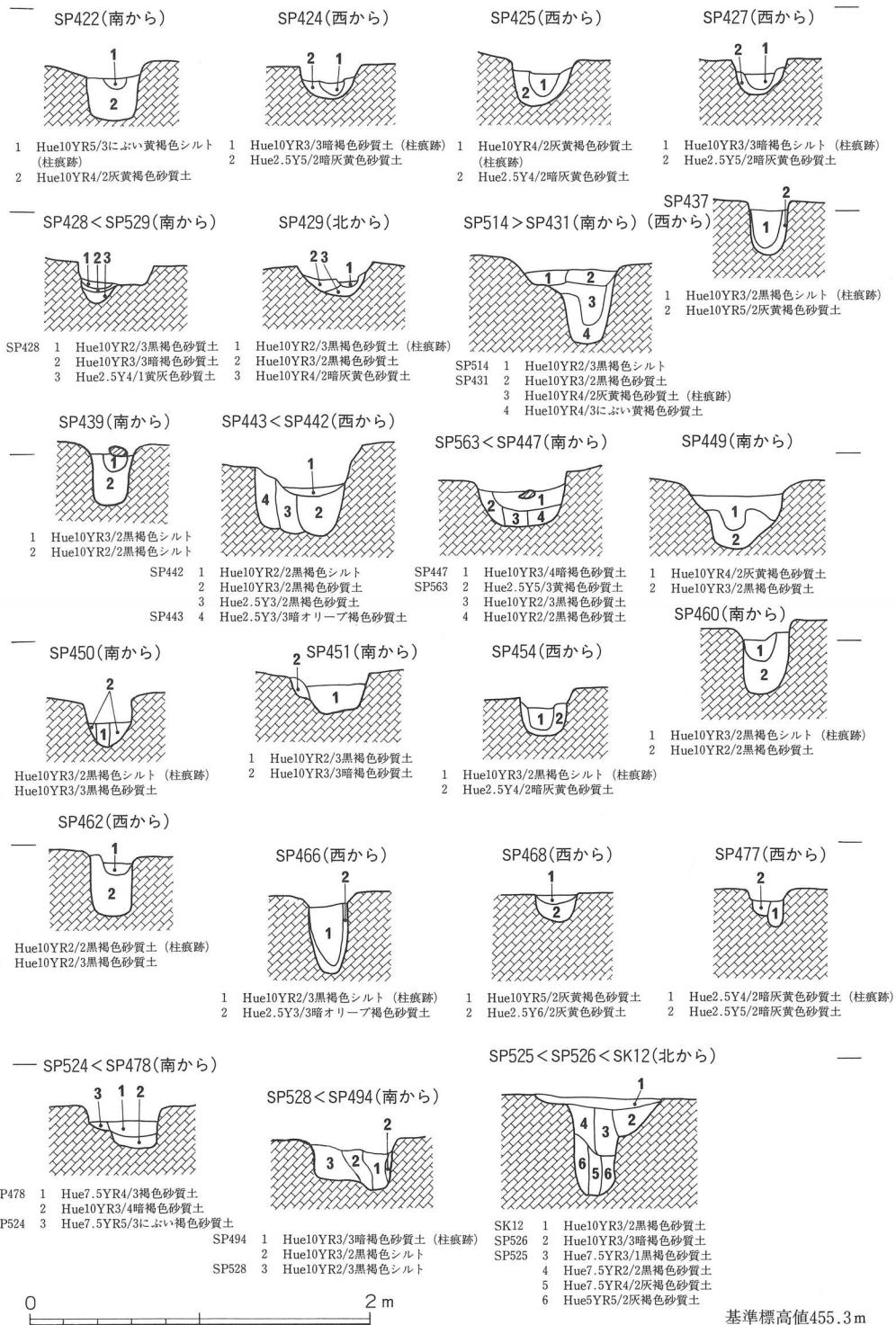
第20図 区画1の柱穴土層断面図 縮尺1/40

江馬氏城館跡III



第21図 区画2の柱穴土層断面図(1) 縮尺1/40

発掘調査の成果



第22図 区画2の柱穴土層断面図（2） 縮尺1/40

方向にのびる3間以上の柵列または北側柱間3間以上の掘立柱建物である可能性がある。

区画1の南寄り、X座標-94.7~-90.0、Y座標-17.0~-6.5の範囲にS P162からS P218で構成する5間の東西方向の柱穴列と、その南側にこれと柱間をそろえたS P233からS P283で構成する5間の東西方向の柱穴列がある。2列の柱穴列はほぼ平行しており、主軸方位がN-64.0°-Eで座標にはほぼ一致する、南北2間、東西5間の東西棟の掘立柱建物である可能性がある。また、柵列である可能性もあるが断定できない。

区画1の南東寄り、X座標-93.8~-89.5、Y座標-8.6~-8.3の範囲に位置するS P164からS P242は柱間が等間である。主軸方位はN-30.4°-Wであり、座標よりやや西へ振る。南北方向にのびる2間以上の柵列である可能性がある。また、S P164の東側のS P161は、この柱穴列に直交する柱穴列の一部と考えることができ、南北2間以上、東西1間以上の掘立柱建物である可能性もある。

区画1の中央よりやや南、X座標-87.5~-86.9、Y座標-15.0~-7.7の範囲に位置するS P127からS P178は柱間が等間である。主軸方位がN-62.9°-Eであり、座標にはほぼ一致する。東西方向にのびる4間以上の柵列である可能性がある。

区画1の西寄り、X座標-88.1~-80.4、Y座標-20.1~-19.9の範囲に位置するS P87からS P180は柱間が等間である。主軸方位はN-25.1°-Wであり、座標にはほぼ一致する。南北方向にのびる3間の柵列である可能性がある。

区画2の中央よりやや南西寄り、X座標-91.4~-85.1、Y座標-34.9~-29.1の範囲に位置するS P368からS P375とS P375からS P431は柱間が等間である。この2列は直交しており、主軸方位がN-33.6°-Wで座標よりやや西へ振る、南北3間、東西3間の南北棟の掘立柱建物である可能性がある。

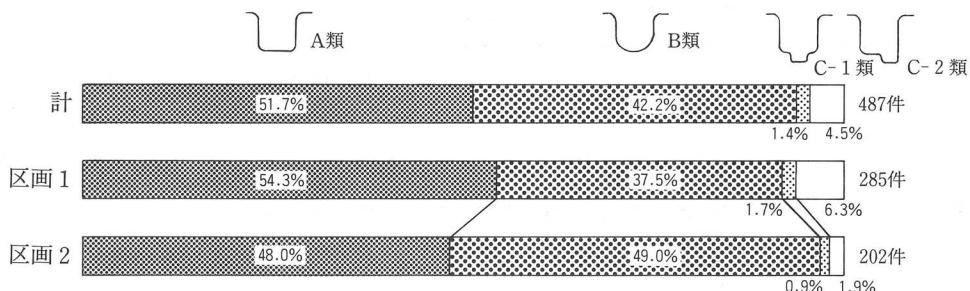
柱穴について（図版14~16、第20~24図、第5~7表）：第20~22図は、堆積に層位のある柱穴の土層断面図である。このうち柱痕跡を確認できた柱穴は49基であり、柱痕跡の直径の平均値は15cmである。このうち建物を形成するものは16基であり、柱痕跡の直径の平均値は16cmである。なお、柱を抜いたと考え得る柱穴は確認できなかった。柱痕跡のない柱穴の土層は、水平に堆積している場合が多く、片側から流れ込むように堆積している例もみられる。埋土は黒褐色土が主体をなし、一部には炭・礫が混じるものもある。

また本地区の柱穴については、断面形態をもとに大きく4つの類型に分けることが可能であった。ここでは、その集計結果について記述する（第23・24図・第5~7表）。調査区内において、断面形態の分類が可能であった柱穴は、総数525基のうち489基を数える。

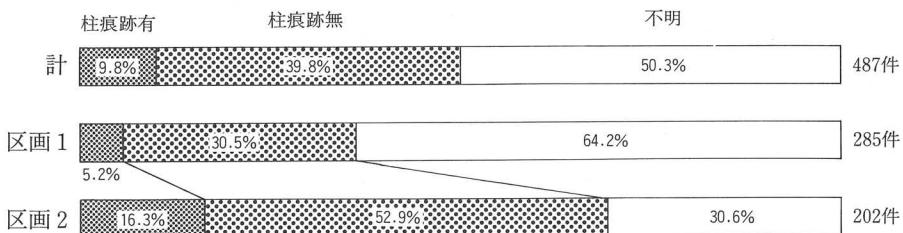
第23図では区画毎の柱穴の分類別比率を示した。全体としてA・B類が大半を占め、C類が少ないことがわかる。区画1はA類が過半数を占める。区画2はA類・B類がほぼ同数であり、あわせて97%を占めている。

第5表 柱穴の断面形分類表

形態・分類	備 考
A類  SP394	・底面が平坦で、断面形が方形を呈するもの。
B類  SP450	・底面が丸もしくは尖り、断面形が方形・三角形を呈するもの。
C-1類  SP308	・底面に段を有するもの。 { 底面中央に段を有するもの (C-1類)。 壁面に段を有するもの (C-2類)。
C-2類  SP13	



第23図 区画毎の柱穴分類別組成



第24図 区画毎の柱痕跡検出状況

第6表 区画1柱穴の分類別集計表

	A類	B類	C—1類	C—2類	計
柱痕跡有	8	3	0	4	15件(5.2%)
柱痕跡無	39	46	0	2	87件(30.5%)
不明	108	58	5	12	183件(64.2%)
計	155件 (54.3%)	107件 (37.5%)	5件 (1.7%)	18件 (6.3%)	285件

分類不明5件を含む総数290件

第7表 区画2柱穴の分類別集計表

	A類	B類	C—1類	C—2類	計
柱痕跡有	8	22	1	2	33件(16.3%)
柱痕跡無	37	68	1	1	107件(52.9%)
不明	52	9	0	1	62件(30.6%)
計	97件 (48.0%)	99件 (49.0%)	2件 (0.9%)	4件 (1.9%)	202件

分類不明23件を含む総数225件

第24図は区画毎の柱痕跡検出状況の比率である。不明としたものは、1976～1978年度調査時に完掘した柱穴である。柱痕跡を確認できた柱穴数は区画2がやや多い。

(清水あゆ美・小野 基)

豊穴住居（図版12・13・43）

区画2において2棟の豊穴住居を検出した。このうちS I 01は、1978年度に既に調査・完掘しており、遺物も全て取り上げた状態であった。当時の出土遺物については、後に詳しく報告したい。

S I 01（図版12・43の1）：区画2中央西寄り、X座標-85.1～-81.7、Y座標-34.6～-31.5の範囲に位置する。後世の耕地化に伴う削平により、上部は失われている。1978年度調査の際に完掘しているため、重複している柱穴との切り合い関係は不明である。

平面形は一辺320cmの方形であり、主軸方位は東辺でN-25.5°-Wである。豊穴住居の四隅には柱穴S P 328、S P 329、S P 330、S P 332があり、上屋を支えていたと考えられる。また、北辺西寄りの部分を除いた壁面にそって溝があり、ここに壁板を立てる構造であったと考えられる。壁はほぼ垂直に立ち上がる。北辺西寄りの溝がない部分には、豊穴内に向かって緩やかに傾斜する張り出しがあり、幅90cm、検出長50cmを測る。床面は地山を直接ほぼ平坦に掘り込んで用いており、叩き締めや貼床は行っていないようである。遺

構検出面から床面までの比高差は15cmである。この床のほぼ中央に炉S X02があり、長径60cm、短径40cm、深さ7cmの規模である（図版12の2）。

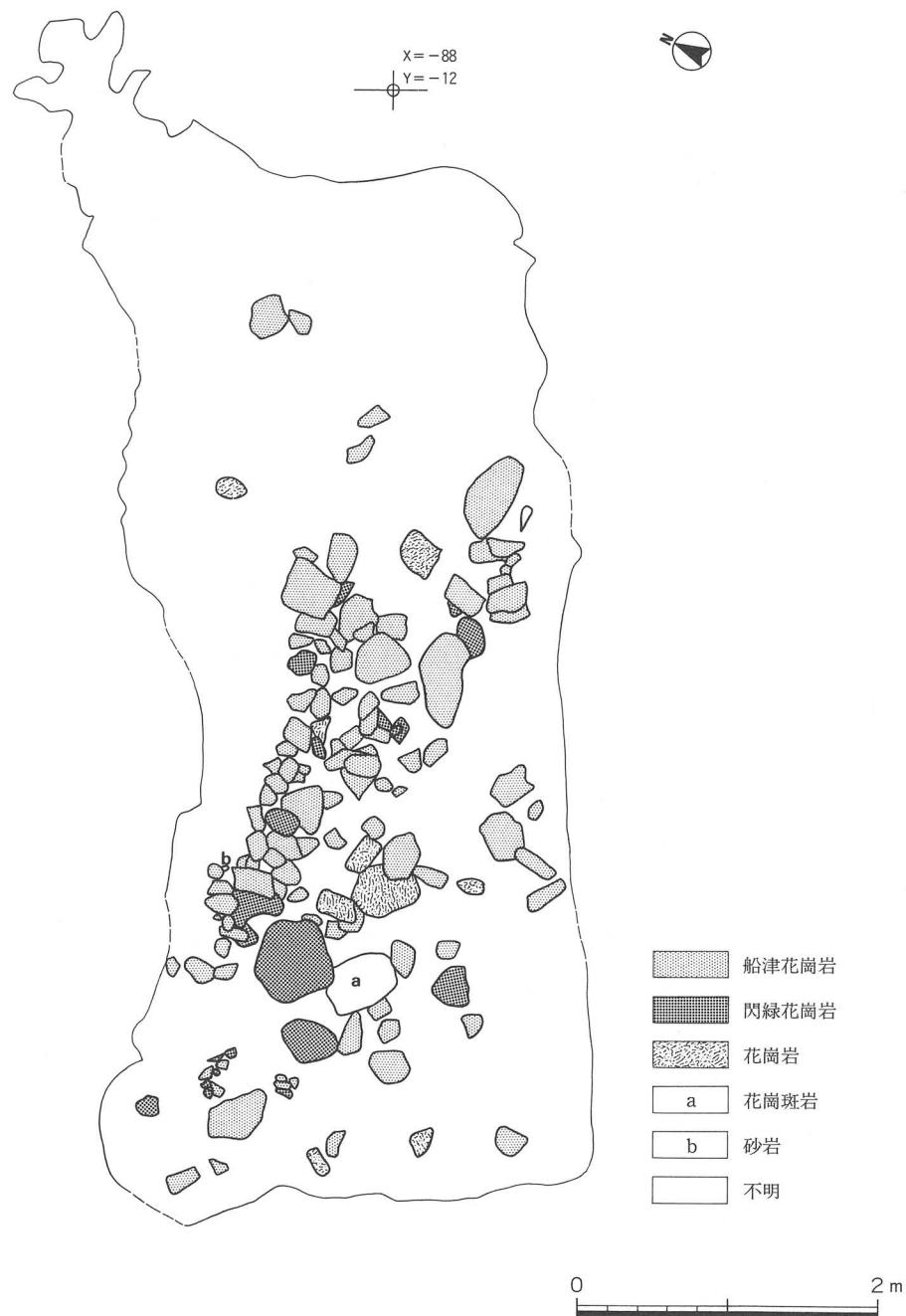
S I 02（図版13・43の2）：区画2南東寄り、X座標-91.2～-88.0、Y座標-25.8～-22.8の範囲に位置する。後世の削平により、上部のほとんどを失っている。南・北・東辺で確認した溝と、四隅にあたる位置にある柱穴S P386・S P403・S P408・S P506との配置がS I 01とよく似ており、一辺300cm前後の竪穴住居と判断することができた。主軸方位は東辺でN-27.0°-Wである。床面は削平を受けており、壁も残存していない。竪穴住居の中央部にあたるところで炉S X03を検出した。直径40cmの円形であり、深さは7cmを測る（図版13の2）。S P386とS P408では柱痕跡を確認した。柱痕跡は円形であり、直径は20cmである。S I 02南辺の溝がS P407（S B17）に壊される。遺物はS P408から土師器皿1点、S P386から土師器皿1点が出土している（図版51の99）。

なお、炉跡S X02・03の被熱強度については、広岡公夫氏が炉跡の熱残留磁化測定と帶磁率測定を実施しており、その結果を付章で報告している。

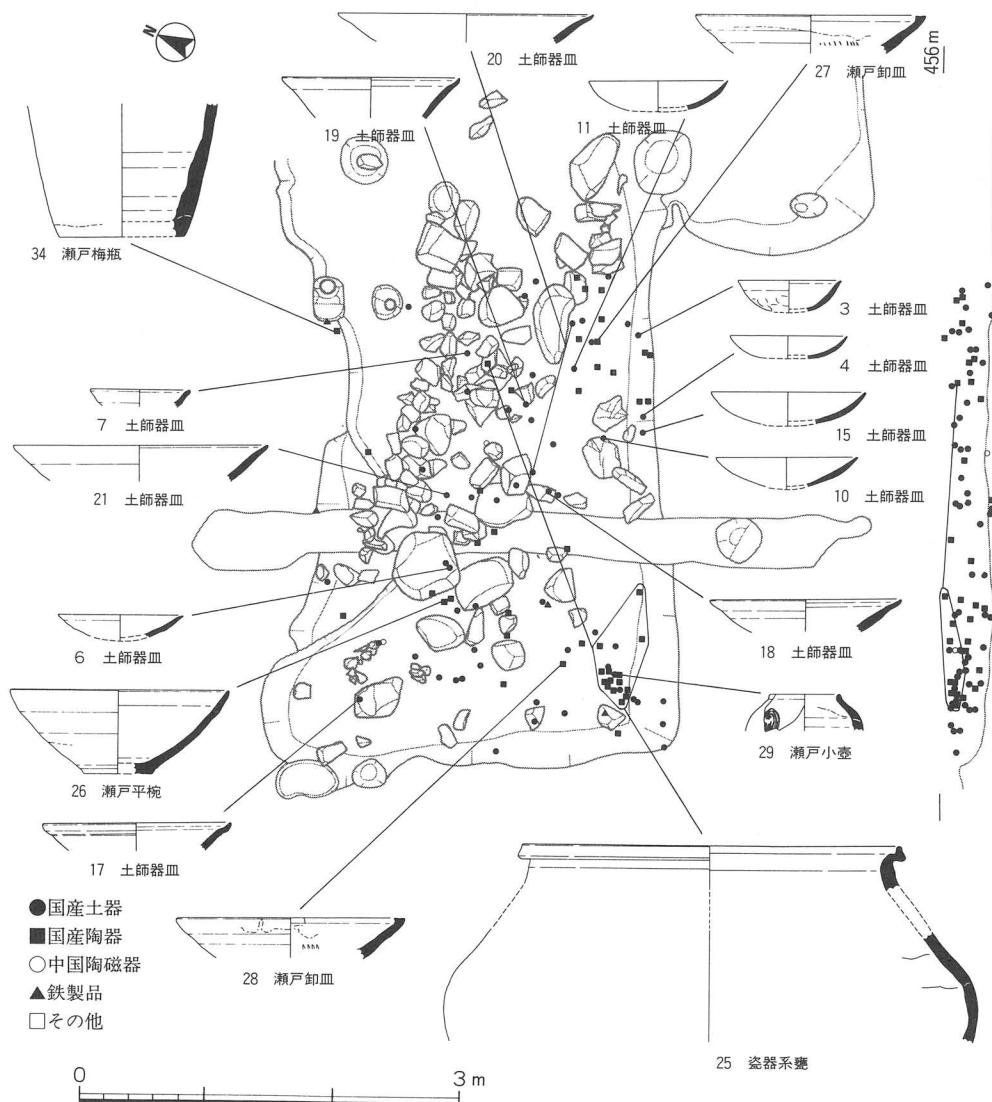
土 坑（図版17・18・44・45・第25～28図）

今回の調査では、土坑23基を検出した。このうちSK01～08、SK15・16・19・20・21は1976～1978年度調査時に完掘している。残り10基のうち、遺物が出土した土坑は8基である。区画1のS X01については、掘立柱建物との配置関係から建物に伴う土間状遺構と推定した。

S X01（図版17・44、第25・26図）：区画1の中央より南寄り、X座標-89.3～-85.5、Y座標-19.3～-11.5の範囲に位置する。S B13と主軸方位がほぼ一致し、S B13に伴う土間状遺構と考えられる。平面規模は長径682cm、短径238cmの長方形を呈している。床面はほぼ平坦であり、壁はゆるやかに立ち上がる。遺構検出面から床面までの比高差は32cmを測る。床面は地山を直接掘り込んでそのまま使用しており、叩き締めや貼床は行なっていない。埋土は炭化物を多く含み、黒褐色土を中心として7層に分層できる。ただし、土坑の東側半分は1976・1977年度調査で完掘しており、土層の観察ができなかった。いずれの層にも多くの礫が混入しており、S X01全体では140個近くを確認した。礫は遺構底面の南東隅から北西隅にかけて、多く出土している。石材には船津花崗岩、閃緑花崗岩、花崗岩、花崗斑岩、砂岩があり、中には被熱している石もみられた（第25図）。大きさは5～15cm大のものが多いが、60cm大のものもある。遺物は石・礫が比較的少ない南西側から多く出土しており、礫と同じように被熱している破片が多かった。なお、南西隅からは同一個体と考えられる瓷器系陶器の甕が集中して出土している（第26図）。土層の堆積状況から、この遺構は人為的に短期間で埋められたものであることが判る。S P516・S P517・S P531・S P533（S B12柱穴）を壊し、SD03・S P296・S P507に壊されている。19



第25図 SX01内検出の石・礫、石材分類図 縮尺1/50



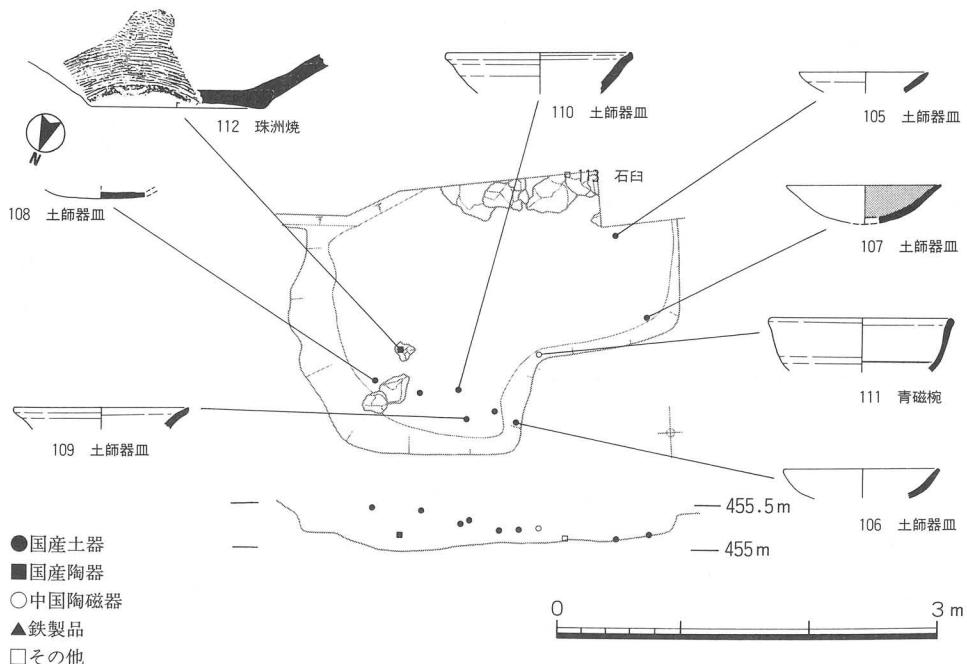
第26図 SX01の遺物出土状況 縮尺1/60

77年度調査時に完掘された部分で重複する S B11柱穴との新旧関係は不明である。土師器 58点、瀬戸美濃20点、珠洲3点、瓦器4点、青磁2点、瓷器系陶器17点、繩紋土器1点、鉄製品11点が出土している（図版48の3～25、49の26～38）。土師器皿が15世紀後半の年代を持つものであり、SX01の廃棄は館の本拠が移動する江馬氏下館跡II B期末であると考えられる。また古瀬戸後I～II期にあたる梅瓶破片が区画2の盛土出土品と接合している。なお、被熱した礫については、広岡公夫氏が熱残留磁化測定をしており、結果は付章に記している。

SK06 (図版45)：区画1の東寄り，X座標-79.5, Y座標-7.2に位置する。平面形は直径106cmの円形であり、深さ11cmを測る。底面の北寄り部分では、5～25cm大の礫が折り重なるように集石していた。1976・1977年度調査で完掘しているが、これらの礫は取り上げずに、そのまま埋め戻していたようである。

SK09 (図版45)：区画1のやや西寄り，X座標-82.2, Y座標-19.3に位置する。平面形は直径120cmの円形であり、深さ20cmを測る。底面はほぼ平坦であり、埋土は黒褐色土である。S P109に壊される。遺物は土師器皿1点が出土した。

SK10・11 (図版18の1・45, 第27図)：区画2の調査区南壁際，X座標-95.2, Y座標-20.5に位置する。南半分は調査区外に伸びており、全体の形は不明である。後世の削平によって上部が失われており、平面プランからSK10とSK11の新旧関係を確定することができなかった。しかし、調査区南壁の観察からはSK11の埋土がSK10の上に流れ込むように堆積しており、SK11がSK10より新しいと判断することができた。SK10は、直径172cm、深さ22cmを測り、埋土は黒褐色土である。SK11の平面規模は不明であるが、深さ24cmを測る。埋土はわずかに白色土粒が混じる黒褐色土である。SK10・11ともに底面はほぼ平坦である。SK10の底面直上には、5～20cm大の礫がいくつかみられた。SK11の底面直上からも礫を検出したが、調査区南壁にかかるため、大きさは不明である。遺



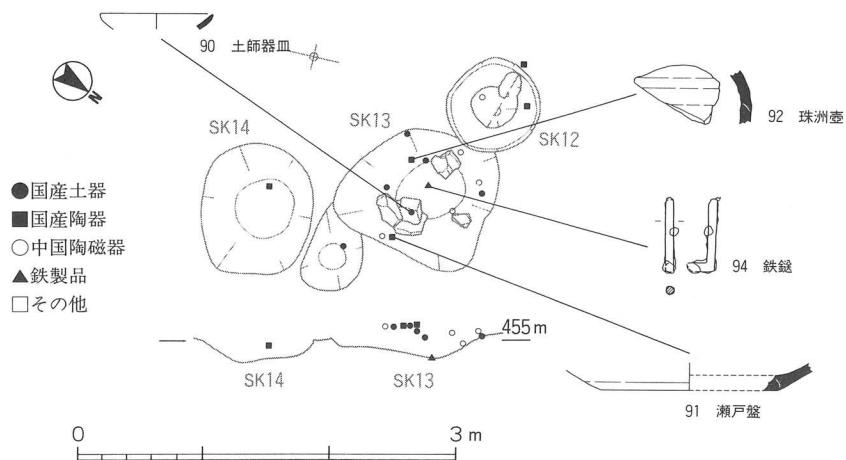
第27図 SK10・11の遺物出土状況 縮尺1/60

物は特にSK10の北端からの出土が多い（第27図）。SK10からは土師器皿7点、瀬戸美濃瓶類1点、青磁碗1点、銅滓1点が出土しており、SK11からは土師器皿1点が出土している。また、SK10とSK11の切り合う部分からは、珠洲甕1点、石臼1点が出土している（図版52の105～114）。遺物の年代は14世紀末～15世紀後半にわたっており、江馬氏下館跡の存続期間に対応している。なお、二次被熱した遺物は出土していない。

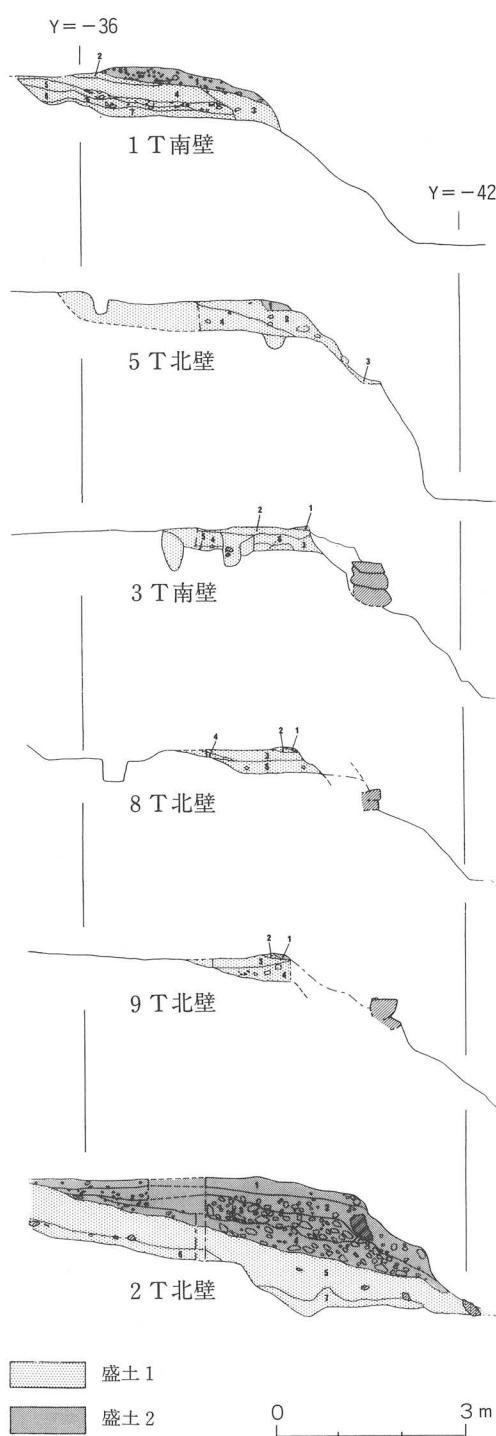
SK12（図版18の2・45、第28図）：区画2の南西寄り、X座標-93.5、Y座標-33.9に位置する。平面形は直径74cmの円形であり、深さは9cmを測る。埋土は黒褐色土である。SP525（SB17柱穴）・SP526・SK13を壊している。遺物は珠洲1点、白瓷系陶器碗1点、白磁碗1点が出土した。

SK13（図版18の2・45、第28図）：区画2の南西寄り、X座標-93.9、Y座標-33.1に位置する。平面形は一辺約120cmの方形であり、深さは12cmを測る。断面形はすり鉢状を呈する。埋土は上層から、黒褐色砂質土、暗褐色砂質土、暗茶褐色砂質土の3層に分層でき、南側から流れ込むように堆積している。底面直上に15～25cm大の礫をいくつか検出した。SP484を壊し、SK12に壊される。遺物は構造の上層付近から多く出土しており（第28図）、その内訳は土師器皿5点、瀬戸美濃盤1点、珠洲壺1点、青磁碗2点、青磁盤2点、鉄製品4点である（図版51の90～95）。年代を知ることのできる遺物の大半は15世紀前半のものであった。

SK14（図版18の2・45、第28図）：区画2の南西寄り、X座標-95.2、Y座標-32.7に位置する。平面形は長径104cm、短径88cmの楕円形であり、深さ12cmを測る。底面はほ



第28図 SK12・13・14の遺物出土状況 縮尺1/60



第29図 盛土の土層堆積図 縮尺1/120

ば平坦であり、埋土は暗茶褐色土である。遺物は土師器皿1点、珠洲すり鉢1点が出土している。

S K18 (図版45)：区画2の東寄り、X座標-87.8、Y座標-24.9に位置する。平面形は長径87cm、短径62cmの南北に長い楕円形であり、深さは20cmを測る。断面形はすり鉢状を呈する。埋土は黒褐色土と暗褐色土を中心とする5層に分層でき、このうちの1・4層には地山土ブロックが混入していた。この土坑はS I 02の一部を壊す。遺物は土師器皿1点が出土した。

(深田亞紀)

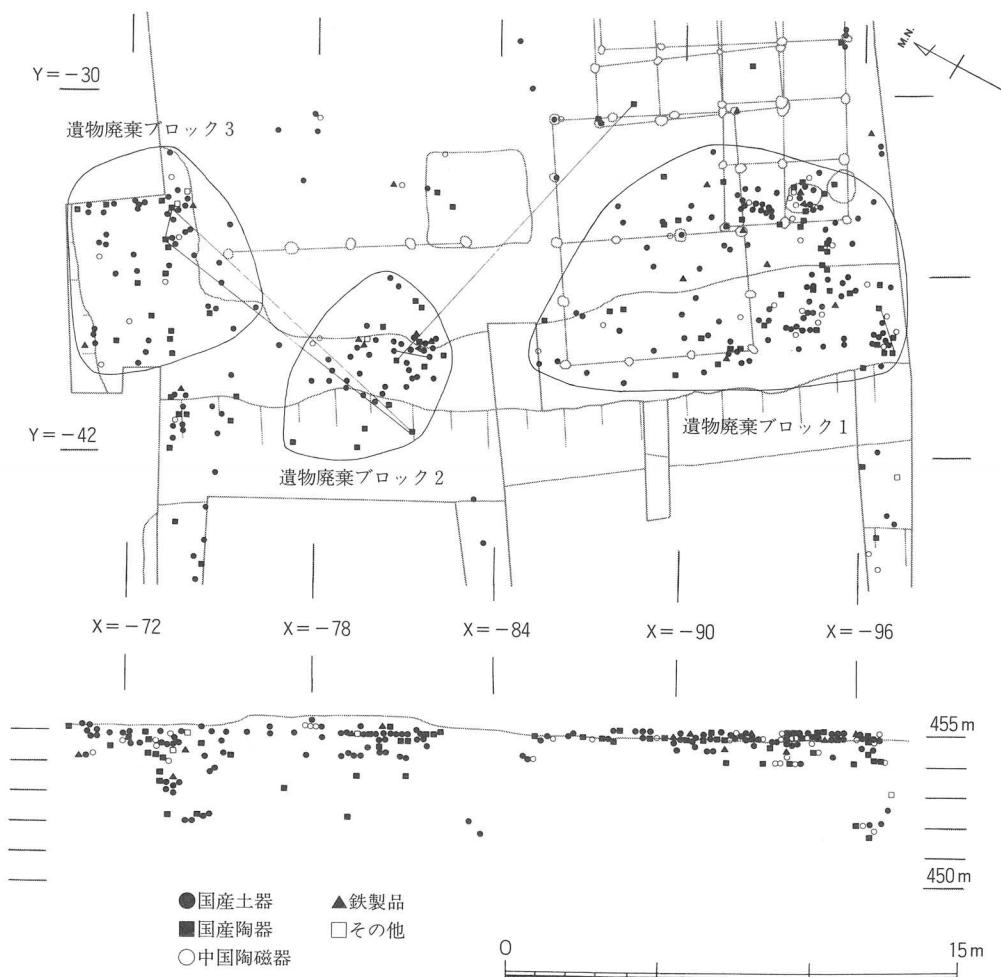
盛 土 (図版19~22・30~33・37・38、第29~31図)：段丘の西端部分において、広範囲に及ぶ盛土地業面を確認した。盛土は段丘端部の地山傾斜部分をほぼ平坦に埋めて、段丘の平面部分を拡張している。その範囲は調査区の南北壁際で広く、中央部分では石積みの削平を受けてやや狭くなっている。なお、盛土面上の調査ではほとんど遺構を検出できなかった。

盛土の厚さと堆積については、いくつかの試掘坑を設けて土層観察を行っている(5 T~10 T)。その結果、この盛土が土質の異なる2層からなっていることが判り、下層の黒褐色土層(盛土1)と、上層の地山ブロックを多く含む層(盛土2)に分類することが可能であった(第29図)。盛土1と2の厚さはそれぞれ1 Tで0.25mと0.4m、3 T・5 T・8 T・9 Tで0.06~0.12mと0.4~0.55m、2 Tで1.2mと1 mである。南端部では地山が中央部分と比較して少し

落ち込んでいるため、0.3m程度厚くなっている。北端部は地山が大きく落ち込んでおり、特に盛土が厚い。盛土の土層は基本的には水平に堆積しているが、北端部分だけは大きく落込む地山面に沿って、傾斜して層をなしている。

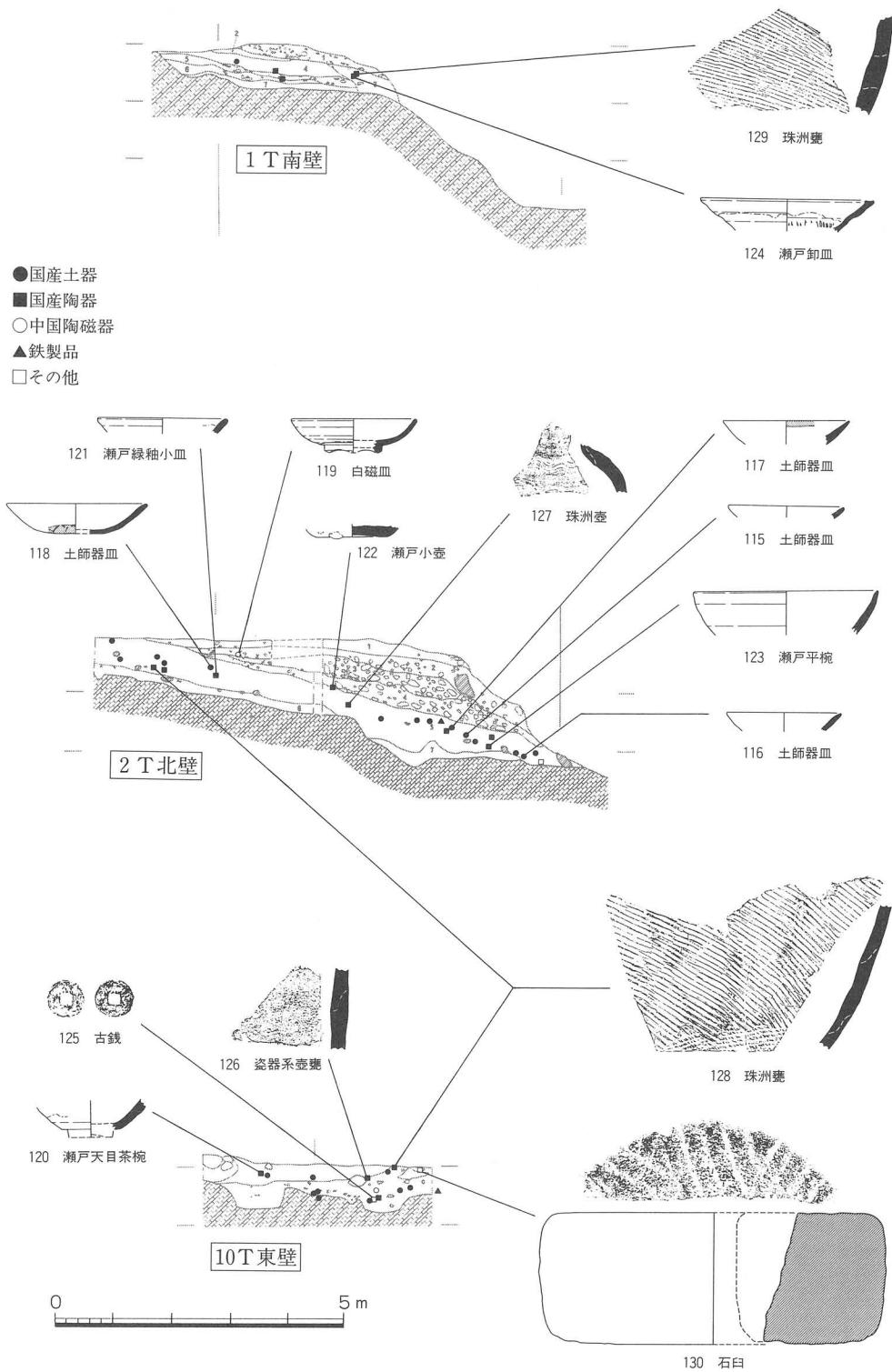
なお、調査区内で確認し得る盛土の土量を概算すると、調査範囲内で盛土1が約57m³、盛土2が約18m³、合計約75m³となる。

遺物は盛土面上とトレンチから多数出土しており、その出土地点は大きく3ヵ所に分れてまとまっている（第30図）。今回の遺物整理作業では、これらの遺物群をそれぞれグループ化し、ブロック1～3と呼称することとした。ブロック1は調査区南寄り隅に位置し、東西8m、南北12.5mの範囲に広く分布している。このまとまりは更に調査区の南区域外に広がる可能性がある。ブロック2は中央部分に径およそ6mの範囲で不整円形状にまとまっており、ブロック1に比して遺物の分布密度がやや高い。ブロック3は北端の盛



第30図 盛土周辺の遺物出土状況 縮尺1/250

江馬氏城館跡III



第31図 盛土内遺物の垂直分布図 縮尺1/120

土が広がる部分に位置しており、径およそ6m程の範囲から更に調査区外に広がる可能性がある。盛土面上、トレンチ共に土師器の出土数が多く、陶磁器類の出土点数は僅かであった。各トレンチにおける出土遺物の垂直分布は第31図のようになる。2トレンチでは土層の堆積に添うように遺物が分布する状況がみられる。また出土する遺物は盛土1からのものがほとんどであり、盛土2出土のものは少ない。盛土1から出土している遺物は、14世紀半ばから15世紀半ばの物が多く、最も新しい遺物は古瀬戸後Ⅳ期の天目茶碗（図版53の120）である。盛土2からは年代のわかる遺物が出土していない。

なお盛土1出土の瀬戸美濃梅瓶が区画1のSX01出土片と接合しており、盛土の地業と土坑の廃棄がほぼ同時期に行われた可能性が考えられる。SX01の廃棄年代は館の本拠が移動する江馬氏下館II B期末であり、盛土の地業もほぼその頃に行ったものと理解できるであろう。
(戸田真美子)

石積み（図版26～28・29・46・47、第32図）

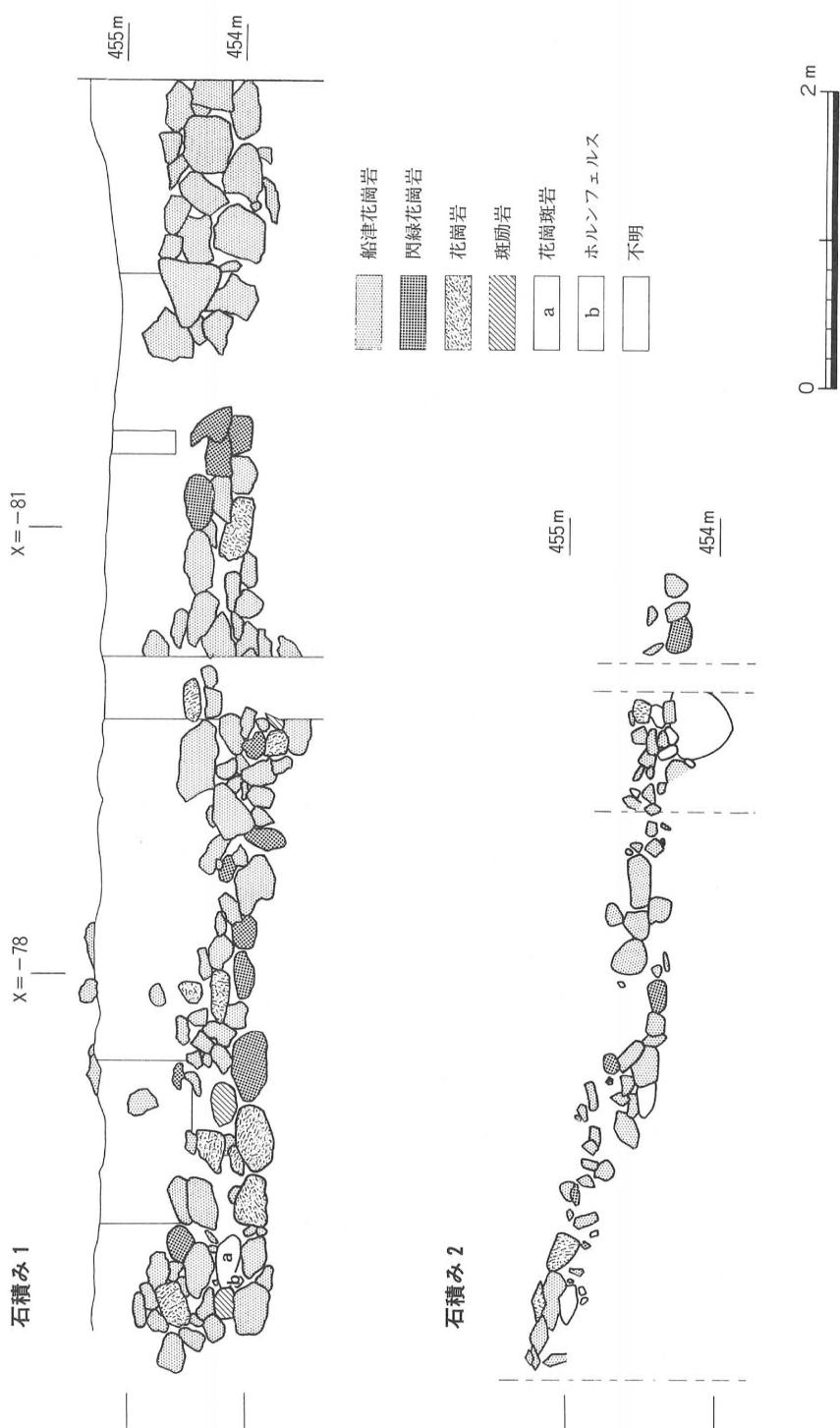
今回の調査では調査区の北西部で石積みを確認した。南北方向に並ぶものを石積み1、東西方向に並ぶものを石積み2と呼称する。いずれの石積みも、段丘端部を盛土ごと削平して平らな面を造り、そこに石と裏込め土を積み上げるものであった。以下、それぞれについて記述する。

石積み1（図版26～28・46、第32図）：段丘斜面のX座標-75.0～-84.0付近に位置する。検出長8.30m、遺存高は残りの良いところで0.92mを測る。段丘斜面のX座標-89.0付近に4トレンチを設定し石積みの南延長部分を探したが確認できなかった。積み方では、南端の船津花崗岩のみを使ったもの(a)と、それより北にある複数の石材を使ったもの(b)が明瞭に分れている。

石積み1の(a)は船津花崗岩のみを三段に積んでおり、正面では下の二段が長径26cm以上、最上段が長径17.0～21.0cmを測る。最上段には直方体の石を控えが長くなるように並べていた。この石積みの裏込め内からは土師器皿2点が出土している。

石積み1の(b)には閃緑花崗岩、花崗班岩、班励岩、ホルンフェルスなども用いているが、量的には船津花崗岩が多い。積み方は長径25cm程のものを横長に積んでおり、長径13cm以下のものを隙間を埋めるための詰石として使用している。崩れて落下している部分が多く、前者との切合い関係は不明であった。

石積み2（図版29・47の1、第32図）：区画2の北辺西側隅、Y座標-33.4～-39.4付近に位置する。石積みは崩壊が著しく基底部の大部分が未検出であるが、検出長6.08m、遺存高0.70mを測る。石積みが調査区外の東へ延びる可能性もある。使用石材は船津花崗岩が最も多い。遺物は裏込めの範囲にも分布しているが、全て盛土や旧耕作土層に伴うものである。
(滝沢 匡)



第32図 石積みの石材分類図 縮尺1/50

(c) 遺物 (図版48~55・57~65・67・68, 第33~41図, 第8・9表)

遺物の出土状況 (第33~37図)：下館跡南辺地区から出土した遺物は、中世の土器・陶磁器片のほかに鉄製品、銅製品、石製品など総数736点であった。ここでは、これら遺物の分布状況と接合関係について若干の検討を加える。なお、この成果を含めた遺跡全体の出土状況については、第4章で考察することにしよう。

第33図には中世遺物の水平・垂直分布を示すが、本地区の垂直分布については、後世の土地改良によって包含層のほとんどが失われていたため、遺構内や遺構面上にかたよるものであった。水平分布については、遺構内出土品が多く、特に区画1のSX01や区画2の盛土部分にドットが集中している。調査区東部やSI01周辺での出土が少ないので、1976~1978年度調査で一度遺物取り上げを行ったためであろう。この範囲に示される僅かなドットも原位置を保つものではない。

以下第34図~第37図において、各種類ごとの出土状況を示しながら、遺物の接合関係について記述しておく。

第34図には土師器皿の出土状況を示した。小破片の個体識別が難しいことにもよるであろうが、出土量に比べて接合する例が少ない。またその関係も、同じ遺構やブロックごとでまとまるものであり、ほぼ同一地点で出土していることが判る。

第35図は珠洲・瓷器系陶器の出土状況である。珠洲については、トレンチから出土した盛土下層のものと、段丘斜面の出土品に接合関係が認められた。瓷器系陶器甕では、SX01内に同一個体片のまとまる例があるが、一個体を復元するには破片が不十分であった。

第36図の瀬戸美濃では、盛土下層とSX01出土の梅瓶が接合しており、区画を越えて分布する例として注目できる。他に、区画2の地山面と盛土面とに別れて出土した天目碗があるが、これ以外は全て、ほぼ同一地点で接合関係が認められた。

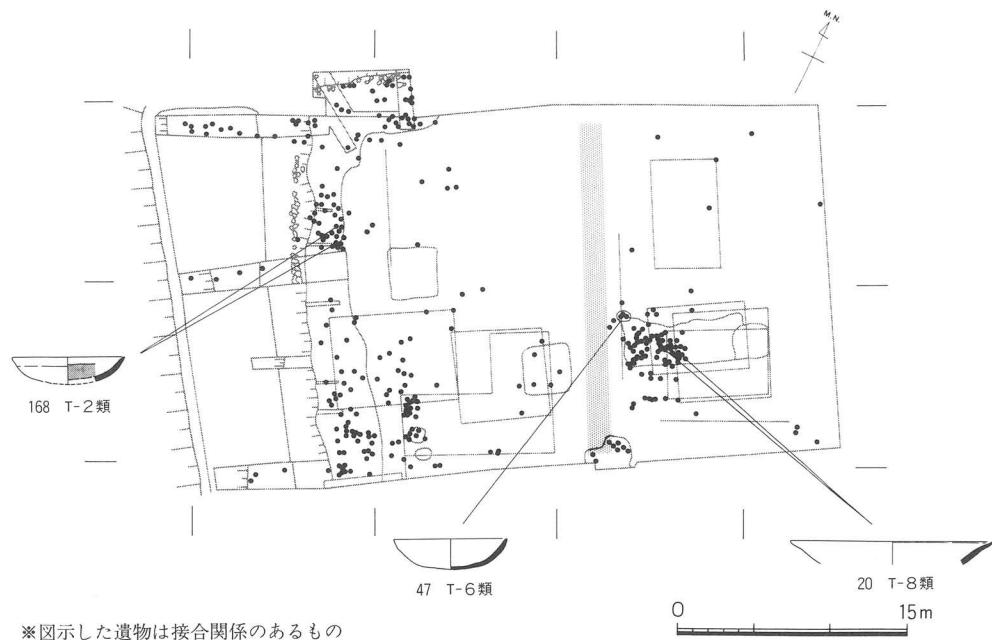
なお第37図に示すように、中国陶磁器の接合関係は確認できなかった。

遺物各説 (第38図、第8・9表)：1996年度調査地区からは、594破片、口縁部15.14個体分の中世土器・陶磁器が出土した。まず、得られた食器資料について、種類別組成・用途別組成の比率を算出した (第8・9表)。南辺地区では土師器食膳具が高い比率を占めていて、他の館外地区の一般的な状況と異なる傾向を認めることができた。出土量は1m²あたり0.66片を数え、1995年度門前地区に比べるとかなり多くの食器が出土する区画であった。この他には漆塗膜が出土しており、付章において四柳嘉章氏が分析した結果では、漆塗作業に用いた容器片だったようである。これは区画2で検出された竪穴住居とともに、下館跡南辺の性格を考えるうえで重要な資料となるものである。

なお本年度の調査区は、道路を境として2つの居住区画に別れており、遺構出土品の整理はこの区画を単位として行うこととした。また遺構外出土品であっても、集中してまと

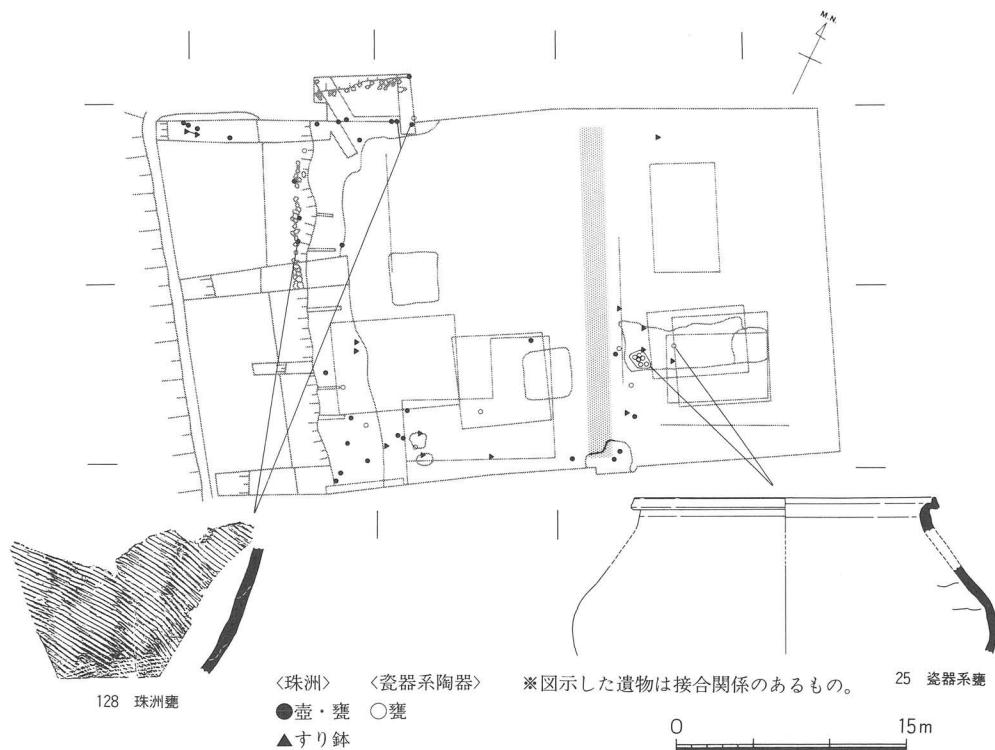


第33図 中世遺物の出土散布図（1996年度調査地区） 縮尺1/300



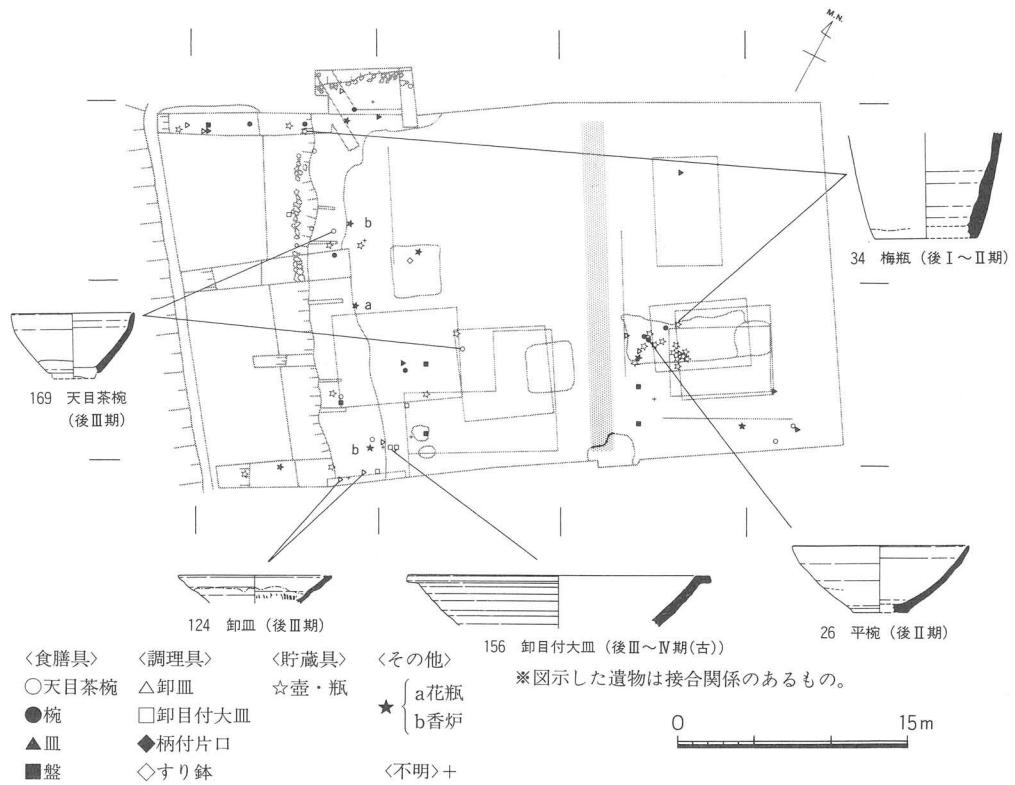
※図示した遺物は接合関係のあるもの

第34図 土師器皿の出土散布図（1996年度調査地区） 縮尺1/500

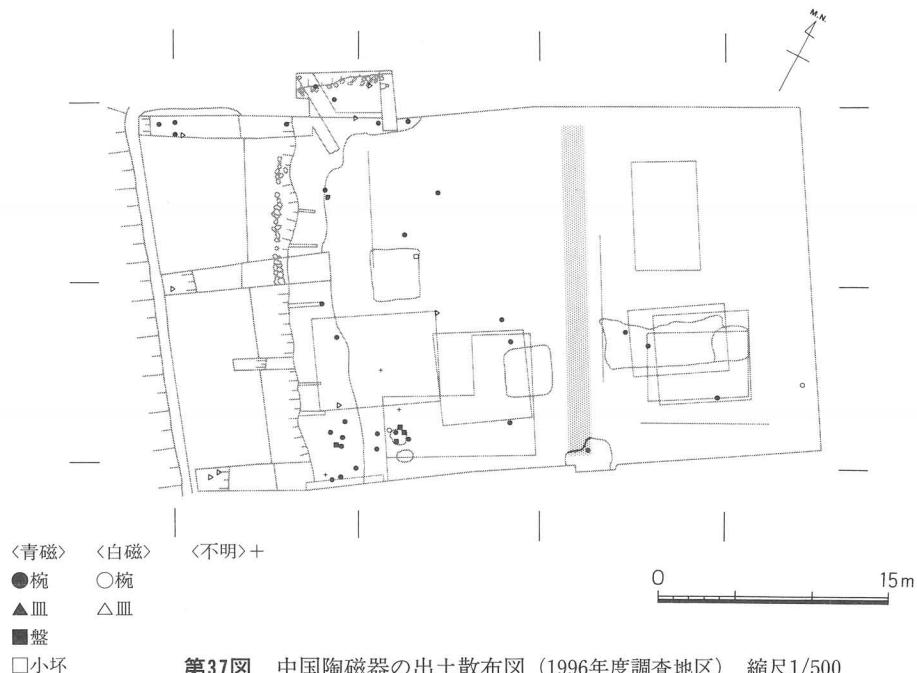


第35図 珠洲・瓷器系陶器の出土散布図（1996年度調査地区） 縮尺1/500

江馬氏城館跡III



第36図 濑戸美濃の出土散布図（1996年度調査地区） 縮尺1/500



第37図 中国陶磁器の出土散布図（1996年度調査地区） 縮尺1/500

第8表 1996年度調査地区出土食器の種類・器種別組成表
(13世紀後半~16世紀初)

種類	器種	破片数	個体数	
土師器	皿	350	12.07(100.0%)	
	小計	350	12.07(79.7%)	
瓦器	火鉢・風炉	7	0 (※%)	
	小計	7	0 (※%)	
珠洲	壺	3	0 (※%)	
	甕	15	0 (※%)	
	壺・甕	17	0 (※%)	
	すり鉢	16	0.12(100.0%)	
	小計	51	0.12(0.8%)	
瓷器系陶器	甕	29	0.03(100.0%)	
	小計	29	0.03(0.2%)	
瀬戸美濃	天目茶碗	15	0.14(7.7%)	
	碗	7	0.12(6.6%)	
	皿	8	0.17(9.3%)	
	盤	10	0.12(6.6%)	
	壺・瓶	33	0.25(13.7%)	
	すり鉢	1	0 (※%)	
	卸目付大皿	5	0.07(3.9%)	
	卸皿	8	0.72(39.6%)	
	香炉	5	0.23(12.6%)	
	花瓶	2	0 (※%)	
	その他	1	0 (※%)	
	不明	6	0 (※%)	
	小計	101	1.82(12.0%)	
白瓷系陶器	碗	1	0 (※%)	
	小計	1	0 (※%)	
中国陶磁器	青磁	碗	38	0.67(60.9%)
		坏	1	0.09(8.2%)
		盤	6	0 (※%)
	白磁	碗	2	0 (※%)
		皿	8	0.34(30.9%)
		小計	55	1.1 (7.3%)
総計		594破片	15.14個体分	

(個体数は全て口縁部計測法による。※は破片が存在するが個体数が数値として表れないもの。)

第9表 1996年度調査地区出土食器の用途・種類別組成表
(13世紀後半~16世紀初)

用 途	種 類	破片数	個体数
食 膳 具	土 師 器	350	12.07(88.0%)
	瀬 戸 美 濃	40	0.55(4.0%)
	白 瓷 系 陶 器	1	0 (※ %)
	中 国 陶 磁 器	55	1.1 (8.0%)
	小 計	446	13.72(90.6%)
貯 藏 具	珠 洲	35	0 (※ %)
	瀬 戸 美 濃	33	0.25(89.3%)
	瓷 器 系 陶 器	29	0.03(10.7%)
	小 計	97	0.28(1.9%)
調 理 具	珠 洲	16	0.12(13.2%)
	瀬 戸 美 濃	14	0.79(86.8%)
	小 計	30	0.91(6.0%)
そ の 他	瓦 器	7	0 (※ %)
	瀬 戸 美 濃	7	0.23(100.0%)
	小 計	14	0.23(1.5%)
総 計		587破片	15.14個体分

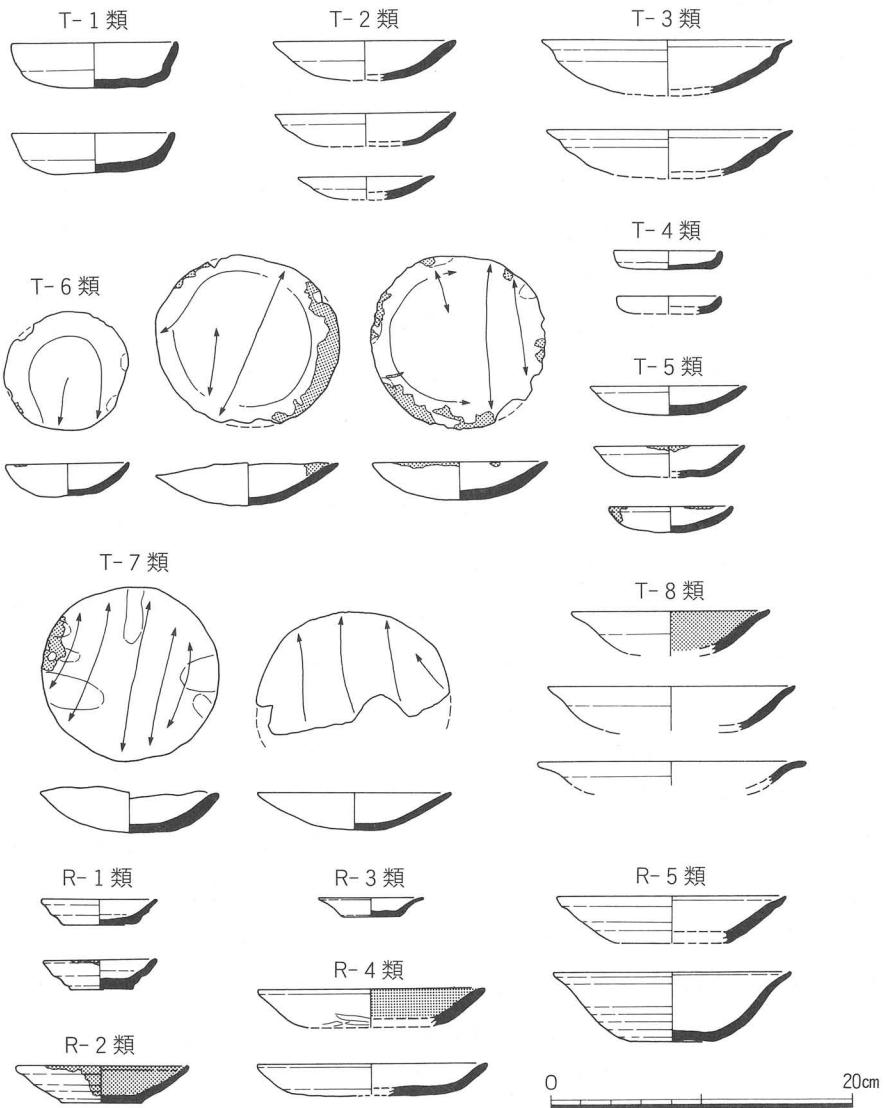
(個体数は全て口縁部計測法による。※は破片が存在するが個体数が数値として表れないもの。)

まる遺物群については、それぞれを廃棄ブロックとしてグルーピングしている。一連の作業は国立歴史民俗博物館助教授・小野正敏氏のご教示を頂きつつ、一乗谷朝倉氏遺跡第36次発掘調査の遺物整理方法を参考にして行った（福井県教育委員会・福井県立朝倉遺跡資料館1983）。

ここからは出土遺物の諸特徴を述べるが、中世陶磁器については、中国陶磁器を国立歴史民俗博物館集成の分類に、瀬戸美濃を藤澤良祐氏の編年に、珠洲を吉岡康暢氏の編年にそれぞれ依拠して記述した（国立歴史民俗博物館1993・藤澤1996・吉岡1994）。また最も多く出土している土師器皿については、1994年度調査報告書で示した分類に沿って記述している（第38図、神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室1995）。

各遺物の詳細データは別表10にまとめてあるので、こちらもあわせて参照されたい。

(中田書矢)



手すくね成形（T類）

T-1類 体部が屈曲ぎみに立ち上がるるもの。

T-2類 口縁部に一段の横撫でを強く施すもの。

T-3類 口縁部を薄くし、強く外反させて段を付けるもの。T-4類 体部が屈曲ぎみに立ち上がる小皿。

T-5類 口縁部に一段の横撫でを浅く施すもの。

T-6類 内面だけを不規則に撫でて、口縁部の調整を省略するもの。

T-7類 内面に一方向の撫でを施し、口縁部の調整を省略するもの。

T-8類 横撫でにより口縁部を強く外反させるもの。

轆轤成形（R類）

R-1類 口縁部がゆるく外反する小皿。底部は回転糸切り。

R-2類 口縁外側を笠で面取りするもの。底部は回転糸切り。

R-3類 口縁部が強く外反するもの。底部は静止笠削りか。

R-4類 浅い皿型で、体部が直線的に開くもの。底部は静止笠削り。

R-5類 深い坏型で口縁部がやや外反するもの。底部は回転笠削り。

第38図 江馬氏下館出土の土師器皿分類図 縮尺1/5

区画1 出土遺物 (図版48~50・57~59・63の1~63)

S B14出土品 (S P42, 図版48・57の1)：1は土師器皿である。T-5類に属し, 口径は約7.5cmを測る。胎土は密であり, 焼成は良好である。体部外面に指押え痕が残る。色調は黄褐色を呈する。

S A12出土品 (S P156, 図版48・57の2)：2は土師器皿である。T-1類に属し, 口径は約11.5cmを測る。胎土は密であり, 焼成は良好である。色調は淡黄色を呈する。

S X01出土品 (図版48・49・57・58・63の3~38)：3~21は土師器皿である。いずれも胎土は密であり, 焼成は良好であるが, 色調には差異がある。3はT-2類に属し, 口径は約8cmを測る。体部外面に指押え痕が残る。色調は灰黄色を呈する。4はT-5類に属し, 口径は約9cmを測る。胎土は少量の砂粒を含み, 色調は黄白色を呈する。5はT類に属する。口径は約10cmを測り, 色調は灰白色を呈する。6はT-5類に属する。口径は約10cmを測り, 色調は黄白色を呈する。7はR-1類に属する。口径は約7.5cmを測り, 色調は黄白色を呈する。8は分類不明である。口径は約11cmを測り, 色調は灰白色を呈する。9はT-8類に属し, 口径は約11cmを測る。色調は黄白色を呈する。10はT類に属する。口径は約11cmを測り, 色調は灰白色を呈する。11はT-5類に属する。口径は約11cmを測り, 色調は灰白色を呈する。12は分類不明である。口径は約12cmを測り, 色調は黄白色を呈する。13はT-1類に属する。口径は約11.5cmを測り, 色調は浅黄橙色を呈する。14はT-2類に属し, 口径は約12cmを測る。色調は灰白色を呈する。15はT類に属する。口径は約12cmを測り, 色調は灰白色を呈する。16はT類に属し, 口径は約13cmを測る。色調は黄白色を呈する。17~19はR-5類に属する。17は口径約15cmを測る。胎土は砂粒を含み, 色調は黄白色を呈する。18は口径約15cmを測る。色調は灰白色を呈する。19は口径約14cmを測る。色調は黄白色を呈する。20はT-8類に属し, 口径は約20cmを測る。胎土は砂粒を含む。色調は黄白色を呈し, 外面が黒く変色している。21はR-4類に属し, 口径は約20cmを測る。色調は黄白色を呈する。

22~24は珠洲のすり鉢の体部破片である。22は年代不明である。胎土は白色の砂粒を含んで密である。焼成は還元硬質である。色調は青灰色を呈する。23は珠洲V期に属する。胎土は白色の砂粒を含んで密である。焼成は還元軟質である。色調は灰白色を呈する。24は珠洲V期に属する。胎土は砂粒を含んで密である。焼成は還元軟質である。卸目は摩耗が著しい。色調は外面が灰色, 内面は灰白色を呈する。

25は瓷器系陶器の甕である。越中八尾窯の製品であり, 酒井重洋氏の分類による第2群甕A類に属する(酒井1990)。口径は約40cmを測る。胎土は密であり, 焼成は良好である。色調は灰色を呈する。

26は瀬戸美濃の平椀である。口径は約17.5cmを測る。胎土はやや粗く色調は淡黄色を呈

する。焼成は良好である。内外面に淡黄色の灰釉を施す。古瀬戸後II期に属し、15世紀初頭のものである。27、28は瀬戸美濃の鉢皿であり、同一個体である。口径は約18cmを測る。口縁部は内側に折り返し、小突起を形成する。口縁部内外面に灰釉を施すが、二次被熱を受けて明緑灰色を呈する。胎土は密であり、色調は灰白色を呈する。古瀬戸中IV期に属し、14世紀中頃のものである。29は瀬戸美濃の無頸壺である。口径は約5cmを測る。内外面に黄褐色の鉄釉を施す。おはぐろ壺に使用したと推定できる。胎土は密であり、浅黄色を呈する。焼成は良好である。古瀬戸中I～II期に属し、14世紀前半のものである。30は瀬戸美濃の楕形鉢の体部破片である。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。内外面に浅黄色の灰釉を施す。古瀬戸後I～II期に属し、14世紀後半～15世紀初頭のものである。31～33は瀬戸美濃の瓶子の体部破片である。同一個体と推定できる。いずれも外面に灰釉を施すが、二次被熱を受けて浅黄色を呈する。胎土は密であり、灰白色を呈する。古瀬戸後I～II期に属し、14世紀後半～15世紀初頭のものである。34は瀬戸美濃の梅瓶である。外面に浅黄色の灰釉を施している。胎土は密であり、灰白色を呈する。古瀬戸後I～II期に属し、14世紀後半～15世紀初頭のものである。

35は瓦器の火鉢の体部破片である。外面に1本の隆線を持ち、その下部に雷文を印文する。胎土は砂粒をわずかに含み粗い。焼きが悪く、色調は明黄褐色を呈する。

36～38は鉄釘であり、部分的に鏽が付着している。36は長さが3.4cm、頭部の下幅は0.5cmを測り、重さは1.2gを量る。37は長さが3.4cm、幅は0.4cmを測り、重さは1.2gを量る。38は長さが2.8cm、幅は0.7cmを測り、重さは1.8gを量る。

S D 03出土品（図版49・58の39～41）：39～41は土師器皿である。いずれも胎土は密であり焼成は良好であるが、色調には差異がある。39はT-6類かT-7類に属し、口径は約10cmを測る。色調は淡黄色を呈する。40はR-5類に属し、口径は約15cmを測る。色調は灰黄色を呈する。41はR-5類に属し、口径は約14cmを測る。胎土は砂粒をわずかに含み、密である。焼成は良好であり、色調は黄白色を呈する。この他、細片のため図示しえなかつたものに近世磁器の碗がある。

S P 46出土品（図版49・58の42）：42は瀬戸美濃の腰折皿の底部破片である。高台径は5cmを測る。内面に浅黄色の灰釉を施す。胎土は砂粒を含んでやや粗く、灰白色を呈する。古瀬戸後IV期（新）に属し、15世紀後半のものである。

S P 214出土品（図版49・58の43）：43は土師器皿の底部破片であり、R-1類に属する。底径は約4cmを測る。底面に回転糸切り痕が残る。胎土は密であり、焼成は良好である。色調は黄白色を呈する。

S P 218出土品（図版49・58の44）：44は土師器皿であり、T-2類に属する。口径は約10cmを測る。胎土は密であり、焼成は良好である。色調は浅黄橙色を呈する。

S P 229出土品 (図版49・58の45) : 45は土師器皿であり、R類に属する。口径は約11cmを測る。胎土は密であり、焼成は良好である。色調は黄白色を呈する。

S P 273出土品 (図版49・58の46) : 46は土師器皿であり、T類に属する。口径は約11cmを測る。胎土は密であり、焼成は良好である。色調は灰褐色を呈する。

S P 296出土品 (図版49・58の47) : 47は土師器皿であり、T-6類に属する。口径11cm・器高2.7cmを測る。胎土は密であり、焼成は良好である。色調は淡黄色を呈する。

S P 285出土品 (図版49・58の48・49) : 48は土師器皿であり、T類に属する。口径は約12cmを測る。胎土は密であり、焼成は良好である。色調は灰褐色を呈する。

49は珠洲の壺甕類の体部破片である。外面に3cm幅に8条の平行叩き目を施す。胎土は密である。焼成は還元硬質であり、色調は青灰色を呈する。

S P 507出土品 (図版49・58の50) : 50は瀬戸美濃の卸皿である。口径は約18cmを測る。口縁部は内側に折り返し、小突起を形成する。口縁部内外面に灰釉を施すが、二次被熱を受けて明緑灰色を呈する。胎土は密であり、灰白色を呈する。古瀬戸中Ⅳ期に属し、14世紀中頃のものである。

S P 286出土品 (図版49・58の51) : 51は瀬戸美濃の盤類である。口径は約32cmを測る。口縁部外面に淡黄色の灰釉を施す。胎土は砂粒をわずかに含んでやや粗く、灰白色を呈する。焼成は良好である。古瀬戸後Ⅱ期に属し、15世紀初頭のものである。

区画1 遺構外出土品 (図版50・59・63の52~63) : 52~57は土師器皿である。いずれも胎土は密であり、焼成は良好であるが、色調には差異がある。52はT-5類に属し、口径は約10cmを測る。色調は灰黄色を呈する。53はT-5類に属し、口径は約11cmを測る。口縁部にタールが付着している。色調は黄白色を呈する。54はT類に属し、口径は約11cmを測る。全面にタールが付着しており、色調は黒色を呈する。55はT-6類かT-7類に属する。口径は約11cmを測り、色調は浅黄色を呈する。56はT-6類かT-7類に属する。口径は約12cmを測り、内面にタールが付着している。色調は淡黄色を呈する。57はT-5類に属し、口径は約14cmを測る。色調は浅黄橙色を呈する。

58は珠洲の甕の体部破片である。体部外面には3cm幅に10条の平行叩き目を施す。胎土は砂粒が混じり、密である。焼成は還元硬質であり、色調は灰色を呈する。年代は不明である。59は珠洲のすり鉢の体部破片である。体部内面に2.5cm幅に9条の卸目が1帯確認できる。胎土は砂粒を多く含み、やや粗い。焼成は還元硬質であり、色調は灰色を呈する。年代は不明である。

60は瀬戸美濃の天目茶碗である。口径は約12cmを測る。体部は直線的に開き、口縁部はほぼ直立して、端部はややくびれている。黒色の鉄釉を施しているが、底部付近は露胎である。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。古瀬戸後Ⅰ期に属し、14世

紀後半頃のものである。61は瀬戸美濃の盤類である。口径は約34cmを測る。全面に浅黄色の灰釉を施す。胎土は砂粒をわずかに含み、灰白色を呈する。焼成は良好である。古瀬戸後II期に属し、15世紀初頭のものである。

62は白磁碗の体部破片である。体部内面に櫛描きの花文を持つ。胎土は密であり、白色を呈す。内外面に浅黄色の釉を施す。白磁碗V-4 b類に属し、11世紀中頃～12世紀初頭のものである。

63は古銭である。直径は2.2cmを測り、重さは1.4gを量る。表裏面とも摩耗が著しく、判読不能である。

1976～1978年度調査埋め戻し土出土品（図版50・59の64～82）

1976～1978年度調査終了後に構造を埋め戻した土から出土した遺物である。64～71は土師器皿である。いずれも胎土は密であり、焼成は良好であるが、色調には差異がある。64はT類に属し、口径は約8cmを測る。外面の胎土が剥落しており、調整は不明である。色調は黄白色を呈する。65はT-5類に属し、口径は約8cmを測る。口縁部にタールが付着している。色調は灰白色を呈する。66はT-4類に属し、口径は約8cmを測る。色調は灰黄色を呈する。67はT-5類に属し、口径は約9cmを測る。口縁部にタールが付着している。色調は橙色を呈する。68はT-6類かT-7類に属し、口径は9cmを測る。体部外面に指押え痕が浅く残る。色調は浅黄色を呈する。69はT類に属し、口径は約11cmを測る。色調は灰白色を呈する。70はT類に属し、口径は約12cmを測る。色調は黄橙色を呈する。71は分類不明である。口径は約14.5cmを測り、色調は黄橙色を呈する。

72は瀬戸美濃の天目茶碗である。口径は約13cmを測る。体部はやや丸みを帯び、口縁部はほぼ直立して、端部は短く外折する。内外面に黒色の鉄釉を施す。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。大窯第1段階に属し、16世紀初頭のものである。73は瀬戸美濃の天目茶碗の体部破片である。外面にはにぶい褐色の錆釉を施し、内面には黒色の鉄釉を施す。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。大窯第2段階に属し、16世紀前半のものである。74は瀬戸美濃の丸皿の底部破片である。付高台であり、高台径は約6cmを測る。高台周辺には浅黄色の灰釉を厚く施す。胎土は密であり、灰白色を呈する。大窯第1～2段階に属し、16世紀初頭～前半のものである。75は瀬戸美濃の皿の底部破片である。底径は4.5cmを測る。底面に回転糸切り痕が残る。外面は露胎であり、明褐色を呈する。内面には浅黄色の灰釉を施す。灰釉は部分的に剥落している。古瀬戸前期に属し、13世紀代のものである。76は瀬戸美濃の水注の口縁部破片である。口径は約6.5cmを測る。頸部上方はゆるやかに外反し、口縁部は内傾する器形になると推定できる。内外面に灰釉を施すが、二次的に被熱し浅黄色を呈する。胎土は密であり、灰白色を呈する。古瀬戸中期に属し、14世紀前半のものである。77は瀬戸美濃の梅瓶の体部破片である。体

部外面に印花文を施す。窯焼けしており、釉調は不明である。古瀬戸中I～II期に属し、14世紀前半のものである。78は瀬戸美濃の小壺の底部破片である。底径は約6cmを測る。底面に回転糸切り痕が残る。外面は露胎であるが、内面には黒褐色の鉄釉を施す。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。古瀬戸後期に属し、14世紀後半～15世紀後半のものである。79は瀬戸美濃の香炉の体部破片である。底径は約8cmと推定できる。外面に灰釉を施すが、二次的に被熱し浅黄色を呈する。胎土は密であり、灰白色を呈する。古瀬戸後I～II期に属し、14世紀後半～15世紀初頭のものである。80は瀬戸美濃のすり鉢の体部破片である。内外面に黒褐色の錆釉を施す。古瀬戸後II～III期に属し、15世紀前半のものである。81は瀬戸美濃の盤類である。口径は約31.5cmを測る。体部は直線的に開き、口縁部はわずかに肥厚する。内外面に灰釉を施すが、外面の釉は二次的に被熱し、剥離している。釉調は浅黄色を呈する。胎土は密であり、灰白色を呈する。古瀬戸後III期に属し、15世紀前半のものである。

82は珠洲のすり鉢の体部破片である。胎土は砂粒をわずかに含み、密である。焼成は還元硬質であり、色調は黄灰色を呈する。年代は不明である。 (鈴木悟嗣・野水晃子)

区画2 出土遺物 (図版51～55, 図版60～65の83～187)

S B15出土品 (S P 428, 図版51・60の83) : 83は土師器皿の底部破片である。R-5類に属し、底径は約6cmを測る。胎土は砂粒を含んでやや粗く、焼成は良好である。色調は灰黄色を呈する。

S B16出土品 (S P 406, S P 443, 図版51・60の84・85) : 84・85は土師器皿である。共に胎土は密であり、焼成は良好である。84はS P 406から出土し、T-2類に属する。口径は約9cmを測る。色調は黄白色を呈する。85はS P 443から出土し、T-6類かT-7類に属する。口径は約12cmを測る。色調は灰白色を呈する。

S B17出土品 (S P 431, S P 478, S P 442, 図版51・60の86～89) : 86～88は土師器皿である。いずれも焼成は良好であるが、胎土・色調が異なる。86・87はS P 431から出土している。86はT-4類に属し、口径は約8cmを測る。胎土は密であり、色調は黄白色を呈する。87はT-6類かT-7類に属し、口径は約11cmを測る。胎土は砂粒を含みやや粗い。色調は灰褐色を呈する。88はS P 478から出土し、T-2類に属する。口径は約13cmを測る。胎土は密である。色調は灰褐色を呈する。

89は青磁碗である。S P 442から出土している。口径は約15cmを測る。体部外面に籠描きの蓮弁文を持つ。内外面に明緑灰色の釉を施す。年代は不明である。

S K13出土品 (図版51・60・63の90～95) : 90は土師器皿である。T類に属し、口径は約9cmを測る。胎土は密であり、焼成は良好である。色調は灰褐色を呈する。

91は瀬戸美濃の盤類の底部である。底径は約14cmを測る。胎土は密であり、焼成はやや

不良である。内面に緑灰色の灰釉を施す。古瀬戸後III～IV期（古）に属し、15世紀中頃のものである。

92は珠洲の轆轤壺である。胎土には砂粒が混じり、焼成は還元硬質である。色調は暗灰色を呈する。年代は不明である。

93は小札である。長さ6cm、幅2cmの長方形鉄板である。厚さは0.2cmを測り、重さは9gを量る。鑄のため塞がっているものもあるが直径約0.2cmほどの穴が約0.5cm間隔で4～5箇所、2列に並ぶ。94は鎌である。長さは6cm、幅は2.4cmを測り、重さは12.4gを量る。95は鉄釘である。長さ4cm、頭の下の幅0.3cmを測り、重さは1.4gを量る。

このほかに細片のため図示し得なかったもので、年代がわかるものとして、龍泉窯系碗B0類に属する青磁碗がある。13世紀後半から14世紀初頭の遺物である。

S K15出土品（図版51・60の96）：96は土師器皿の底部破片である。R-5類に属し、底径は約6cmを測る。胎土は密であり、焼成は良好である。色調は灰白色を呈する。

S K17出土品（図版51・60の97）：97は土師器皿の底部破片である。R-5類に属し、底径は約7.5cmを測る。胎土はやや粗く、焼成は良好である。色調は灰白色を呈する。

S P402出土品（図版51・60の98）：98は土師器皿である。R-5類に属し、口径は約14cmを測る。胎土は密であり、焼成は良好である。色調は灰白色を呈する。

S P408出土品（図版51・60の99）：99は土師器皿である。T類に属し、口径は約8cmを測る。胎土は砂粒をわずかに含み、密である。焼成は良好であり、色調は灰白色を呈する。

S P437出土品（図版51・63の100）：100は開元通宝である。直径は2.5cmを測る。重さは1.8gを量る。一部が欠損する。初鑄年は621年である。

S P405出土品（図版51・63の101）：101は鉄釘である。全体に鑄が付着する。長さは3.7cm、頭の下の幅は1.1cmを測る。重さは5.6gを量る。

S P410出土品（図版51・63の102）：102は鉄釘である。長さは4cm、頭の下の幅は0.5cmを測る。重さは1.8gを量る。

S X08出土品（図版51・60の103・104）：103は青磁碗である。口径は約16cmを測る。口縁端部より1.8cm下がった内面に1条の沈線がめぐる。釉調は明緑灰色を呈する。胎土は密であり、灰白色を呈する。同安窯系の碗であり、12世紀末から13世紀前半のものである。

104は珠洲の甕の体部破片である。外面には3cm幅に9条の平行叩き目を施し、内面には当て具痕が残る。砂粒をわずかに含み、密である。焼成は還元硬質である。色調は暗灰色を呈する。年代は不明である。

S K10・11出土品（図版52・60・61・63の105～114）：105～110は土師器皿である。いずれも胎土は密であり、焼成は良好であるが、色調には差異がある。105はT-5類に属し、口径は約10cmを測る。色調は橙色を呈する。106はT-6類かT-7類に属し、口径

は約12cmを測る。色調は浅黄橙色を呈する。107はT-6類かT-7類に属する。口径は約12cmを測る。内面全体にタールが付着する。色調は黄褐色を呈する。108は底部破片である。R-4類に属する。色調は淡黄色を呈する。109はR-5類に属し、口径は約14cmを測る。色調は淡黄色を呈する。110はR-5類に属し、口径は約15cmを測る。色調は灰白色を呈する。

111は青磁碗である。口径は約14cmを測る。外面は無文であり、内底付近に1条の沈線がめぐる。内外面に明緑灰色の釉を施す。胎土は密であり、灰白色を呈する。年代は不明である。

112は珠洲の甕の底部である。底径は約18cmを測る。外面には3cm幅に9条の平行叩き目を施す。胎土は砂粒を含んでやや粗い。焼成は還元硬質であり、色調は灰色を呈する。年代は不明である。

113は石臼である。上臼の破片であり、直径約33cmを測る。上面は直径約25cmの範囲で窪みがあるが、上縁が欠損しており、窪みの深さは不明である。中央よりやや寄ったところに円形の孔が貫通する。下面中央には芯棒孔があり、底面には放射線状の刻み目が入る。

114は銅滓である。重さは15.2gを量る。

このほか細片のため図示し得なかったものに、古瀬戸後期の瀬戸美濃の壺瓶類が出土している。

盛土出土品（図版53・61～63の115～130）：115～118は土師器皿である。いずれも胎土は密であり、焼成は良好であるが、色調には差異がある。115は分類不明である。口径は約10cmを測り、色調は黄褐色を呈する。116はT類に属し、口径は約10cmを測る。色調は黄白色を呈する。117はT-6類かT-7類に属し、口径は約11cmを測る。口縁部内面にタールが付着する。色調は浅黄橙色を呈する。118はT-7類に属し、口径は約12cmを測る。体部外面にタールが付着し、指押え痕が残る。色調は浅黄色を呈する。

119は白磁皿である。口径約11cm、底径約5cm、器高約3cmを測る。白色の釉を全体に施すが、高台とその周囲は露胎である。胎土は密であり、灰黄色を呈する。白磁皿16類に属し、15世紀前半のものである。

120～124は瀬戸美濃である。120は天目茶碗の体部破片である。外面上半と内面全体に黒色の鉄釉を施す。高台付近は露胎であり、淡黄色を呈する。焼成は良好である。古瀬戸後Ⅳ期に属し、15世紀中頃～後半頃のものである。121は縁釉小皿である。口径は約11cmを測る。口縁部内面に緑灰色の灰釉を施す。胎土は密であり、暗灰色を呈する。焼成は良好である。古瀬戸後Ⅲ期に属し、15世紀前半のものである。122は小壺の底部である。底径は約6cmを測る。内面には暗褐色の鉄釉を施し、外面に黒色の鉄釉の釉だまりがある。底面に回転糸切り痕が残る。胎土は密であり、黄褐色を呈する。焼成は良好である。古瀬

戸後期に属し、14世紀後半～15世紀後半のものである。123は平椀である。口径は約16cmを測る。全体に灰釉を施すが、二次被熱のため灰黄色を呈する。胎土は密であり、暗灰色を呈する。古瀬戸後Ⅰ～Ⅱ期に属し、14世紀後半～15世紀初頭のものである。124は卸皿である。口径は約15cmを測る。内外面ともに上半には緑灰色の灰釉を施す。下半は露胎であり、灰黄色を呈する。内面には16条の卸目が確認できる。古瀬戸後Ⅲ期に属し、15世紀前半のものである。

125は古銭である。直径は2.2cmを測り、重さは1.6gを量る。表面の磨耗が著しく、銭種を判別することは困難である。

126は瓷器系陶器の壺甕類の体部破片である。外表面は茶褐色を呈し、胎土は灰色を呈する。焼成は良好である。

127～129は珠洲である。127は珠洲の轆轤壺の体部破片である。外面に波状文が2帯確認できる。胎土は密であり、焼成は良好である。色調は青灰色を呈する。珠洲Ⅰ～Ⅱ期に属し、12世紀後半～13世紀前半のものである。128は甕の体部破片である。外面には3cm幅に6条の平行叩き目を施し、内面には当て具痕が残る。胎土は密であり、焼成は良好である。色調は灰色を呈する。年代は不明である。129は甕の体部破片である。外面には3cm幅に8条の平行叩き目を施し、内面には当て具痕が残る。胎土は密であり、焼成は良好である。色調は暗灰色を呈する。

130は石臼である。下臼の破片であり、直径は約30cmを測る。上面は磨耗が著しいが、刻み目が確認できる。

遺物廃棄ブロック1出土品（図版54・64の131～160）：131～144は土師器皿である。いずれも胎土は密であり、焼成は良好であるが、色調には差異がある。131はT-1類に属し、口径は約9cmを測る。色調は浅黄色を呈する。132はT-6類かT-7類に属し、口径は約9cmを測る。色調は浅黄色を呈する。133はT-6類かT-7類に属し、口径は約9cmを測る。色調は黄白色を呈する。134はT-6類かT-7類に属し、口径は約10cmを測る。色調は淡黄色を呈する。135はT-1類に属し、口径は約10cmを測る。色調は浅黄色を呈する。136はT-1類に属し、口径は約11cmを測る。色調は灰黄色を呈する。137はR-1類に属し、口径は約7cmを測る。口縁部にタールが付着している。色調は灰白色を呈する。138はT-5類に属し、口径は約11cmを測る。色調は灰白色を呈する。139はT-6類かT-7類に属し、口径は約11cmを測る。色調は灰褐色を呈する。140はT類に属し、口径は約12cmを測る。色調は淡黄色を呈する。141はT-6類かT-7類に属し、口径は約12cmを測る。色調は灰褐色を呈する。142はT-6類かT-7類に属し、口径は約12cmを測る。色調は灰褐色を呈する。143はT-8類に属し、口径は約13cmを測る。色調は浅黄色を呈する。144はT-8類に属し、口径は約15cmを測る。色調は灰黄色を呈する。

145～147は青磁碗である。145は口径約14cmを測る。内外面は無文であり、口縁端部は外反する。全体に緑灰色の釉を厚く施す。胎土は密であり、灰白色を呈する。龍泉窯系碗D類に属し、14世紀後半のものである。146は口径約15cmを測る。内外面は無文であり、口縁端部は外反する。明緑灰色の釉を全体に施す。胎土はやや粗く、灰白色を呈する。龍泉窯系碗D類に属し、14世紀後半のものである。147は口径約15cmを測る。内外面は無文であり、緑灰色の釉を施す。胎土は密であり、灰白色を呈する。年代は不明である。148は青磁盤の底部破片である。底径は約12cmを測る。高台内まで緑灰色の釉を施すが、外底の釉を輪状に削り取る。内底には模様を施す。胎土は密であり、灰白色を呈する。年代は不明である。149は青磁碗の底部破片である。底径は約10cmを測る。緑灰色の釉を高台内まで施し、外底の釉を削り取っている。見込みには2条の沈線を施す。胎土は密であり、灰白色を呈する。年代は不明である。

150は白磁皿の底部破片である。底径は約6cmを測る。白色の釉を施すが底部付近は露胎であり、灰白色を呈する。白磁皿1類に属し、13世紀代のものである。

151～154は瀬戸美濃である。151は天目茶碗の体部破片である。内面と外面の上半には黒色の鉄釉を施し、高台付近には暗赤褐色の錆釉を施す。胎土はやや粗く、灰黄色を呈する。焼成はやや不良である。古瀬戸後IV期に属し、15世紀中頃～後半のものである。152は香炉である。口径は約12cmを測る。内外面に鉄釉を施すが、二次被熱を受けて暗緑灰色を呈する。胎土は密であり、灰白色を呈する。古瀬戸中I期に属し、14世紀初頭のものである。153は卸皿である。口径は約14cmを測る。体部上半に緑灰色の灰釉を施すが、内面下半は露胎である。胎土はやや密であり、灰黄色を呈する。焼成は良好である。古瀬戸後II期に属し、15世紀初頭のものである。154は梅瓶の体部破片である。外面には印花文を施す。灰釉を施すが二次被熱のため、ほとんど剥落しており、緑灰色を呈する釉がわずかに残るのみである。古瀬戸中I～II期に属し、14世紀前半のものである。

155は瓦器の体部破片である。器種は不明である。胎土はやや粗く、焼成は不良である。色調は浅黄橙色を呈する。

156・157は瀬戸美濃の卸目付大皿である。156は口径約30cmを測る。口縁端部を水平に折り曲げており、黄灰色の灰釉を全体に施す。胎土はやや粗く、灰白色を呈する。焼成は良好である。古瀬戸後III～IV期（古）に属し、15世紀中頃のものである。157は口径約32cmを測る。口縁部は内側に折り返して突起を形成する。全面に浅黄色の灰釉を施す。体部外面は轆轤目が顕著である。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。古瀬戸後IV期（古）に属し、15世紀中頃のものである。

158は珠洲のすり鉢である。口径は約28cmを測る。胎土はやや粗く、灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲IV期に属し、14世紀代のものである。

159は瓷器系陶器の甕の体部破片である。口縁部付近を外反させているが、口縁端部は残存していない。外面は茶褐色を呈し、内面は褐灰色を呈する。胎土はやや粗く、焼成は良好である。

160は珠洲の壺甕類の体部破片である。外面は3cm幅に9条の平行叩き目を施し、内面には当て具痕が残る。胎土はやや粗く、焼成は良好である。色調は灰色を呈し、一部断面のみが暗赤褐色を呈している。

遺物廃棄ブロック2出土品（図版55・63・65の161～173）：161～168は土師器皿である。いずれも胎土は密であり、焼成は良好であるが、色調には差異がある。161はT-5類に属し、口径は約7cmを測る。体部外面に指押え痕が残る。色調は灰白色を呈する。162はT-5類に属す。口径約8cm、器高約1cmを測る。色調は淡黄色を呈する。163はT-5類に属す。口径約8cm、器高約1.4cmを測る。口縁部にタールが付着している。色調は黄白色を呈する。164はT類に属し、口径は約8cmを測る。色調は灰黄色を呈する。165はR-1類に属し、口径は約9cmを測る。色調は黄白色を呈する。166はT-5類に属し、口径は約10cmを測る。色調は黄白色を呈する。167はT-6類かT-7類に属し、口径は約10cmを測る。色調は灰褐色を呈する。168はT-2類に属し、口径は約11cmを測る。内面にタールが付着している。色調は灰褐色を呈する。

169～171は瀬戸美濃である。169は天目茶碗である。口径約12cmを測る。内面と外面上半には黒色の鉄釉を施すが、高台付近は露胎である。二次被熱を受けている。胎土は密であり、灰白色を呈する。古瀬戸後III期に属し、15世紀前半のものである。170は平椀である。口径は約16cmを測る。灰釉を施すが、二次被熱のため灰黄色を呈する。外面下部は露胎である。胎土は密であり、色調は灰白色を呈する。古瀬戸後I～II期に属し、14世紀後半～15世紀初頭のものである。171は梅瓶の体部破片である。外面に浅黄色の灰釉を施し、3条からなる波状文と2条からなる平行沈線を施す。また体部の上部は二次被熱を受けている。胎土は密であり、灰黄色を呈する。古瀬戸後I～II期に属し、14世紀後半～15世紀初頭のものである。

172は珠洲の甕の体部破片である。外面に3cm幅に8条の平行叩き目を施し、内面には当て具痕が残る。胎土は密であり、焼成はやや良好である。色調は灰色を呈する。年代は不明である。

173は鉄釘である。長さは7.5cm、頭の下の幅は0.6cmを測り、重さは7.2gを量る。

遺物廃棄ブロック3出土品（図版55・65の174～178）：174は土師器の受け皿であり、口径は4.5cmを測る。胎土は密であり、焼成は良好である。色調は浅黄橙色を呈する。14世紀後半のものである。

175は白磁皿の底部破片である。底径は約4.5cmを測る。内面には釉を施すが、二次被熱

を受けて灰白色を呈する。高台に抉り込みがはいる。胎土は密であり、灰白色を呈する。白磁皿16類に属し、15世紀前半のものである。

176は土師器皿である。R-5類に属し、口径は約15cmを測る。胎土は密であり、焼成は良好である。色調は灰褐色を呈する。

177は瀬戸美濃の卸皿である。口径は16cmを測る。内面に浅黄色の灰釉を施し、3条の卸目が斜行して入る。胎土は密であり、色調は暗灰色を呈する。焼成は良好である。古瀬戸中IV期に属し、14世紀中頃のものである。

178は珠洲の甕の体部破片である。外面に3cm幅に9条の平行叩き目を施し、内面には当て具痕が残る。胎土は密であり、色調は青灰色を呈する。年代は不明である。

区画2 遺構外出土品（図版55・65の179～187）：179～183は土師器皿である。いずれも胎土は密であり、焼成は良好であるが、色調には差異がある。179はT-1類に属し、口径は約10cmを測る。色調は浅黄色を呈する。180は分類不明である。口径は約10cmを測る。口縁部にタールが付着し、色調は浅黄橙色を呈する。181はT類に属する。口径は約11cmを測る。色調は灰褐色を呈する。182はR-5類に属し、口径は約15cmを測る。口縁部にタールが付着し、色調は淡黄色を呈する。183は底部破片である。R-5類に属し、底径は約6cmを測る。色調は淡黄色を呈する。

184は青磁碗である。口径は約14cmを測る。口縁部はまっすぐに立ち上がり、外面に雷文を施す。やや粗い胎土に明緑灰色の釉を施す。龍泉窯系碗C2類に属し、14世紀末～15世紀初頭ものである。185は青磁の小杯である。口径は約12cmを測る。口縁部は強く外反し、明緑灰色の釉が厚くかかる。体部外面には籠描きの細い蓮弁文を施す。龍泉窯系杯III類に属し、13世紀後半～14世紀中頃のものである。

186は瀬戸美濃の花瓶の体部破片である。浅黄色の灰釉を外面に施す。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。古瀬戸後I～II期に属し、14世紀後半～15世紀初頭のものである。

187は珠洲の甕の体部破片である。外面は3cm幅に8条の平行叩き目を施す。胎土は密であり、焼成は良好である。色調は青灰色を呈する。年代は不明である。

（三浦英俊・丸山 浩）

〈付〉 1978年度調査におけるS I 01出土の遺物（第39～41図、図版67・68の1～53）

区画2で検出された竪穴住居S I 01は、1978年度に既に調査・完掘しており、遺物も全て取り上げた状態であった。しかし、当時の出土遺物は神岡町教育委員会で保管しており、それらの注記等からS I 01出土品の多くを特定することが可能であった。この中には近世以降の陶磁器類もみられたが、これについては当時の調査に携わった都竹清隆氏のご教示から、全て遺物取り上げ時の混入と判断することができた。この資料は下館跡南辺の遺物

様相を考えるうえで、基礎的な資料として提示できるものであり、本稿において、その概要を報告することとする。

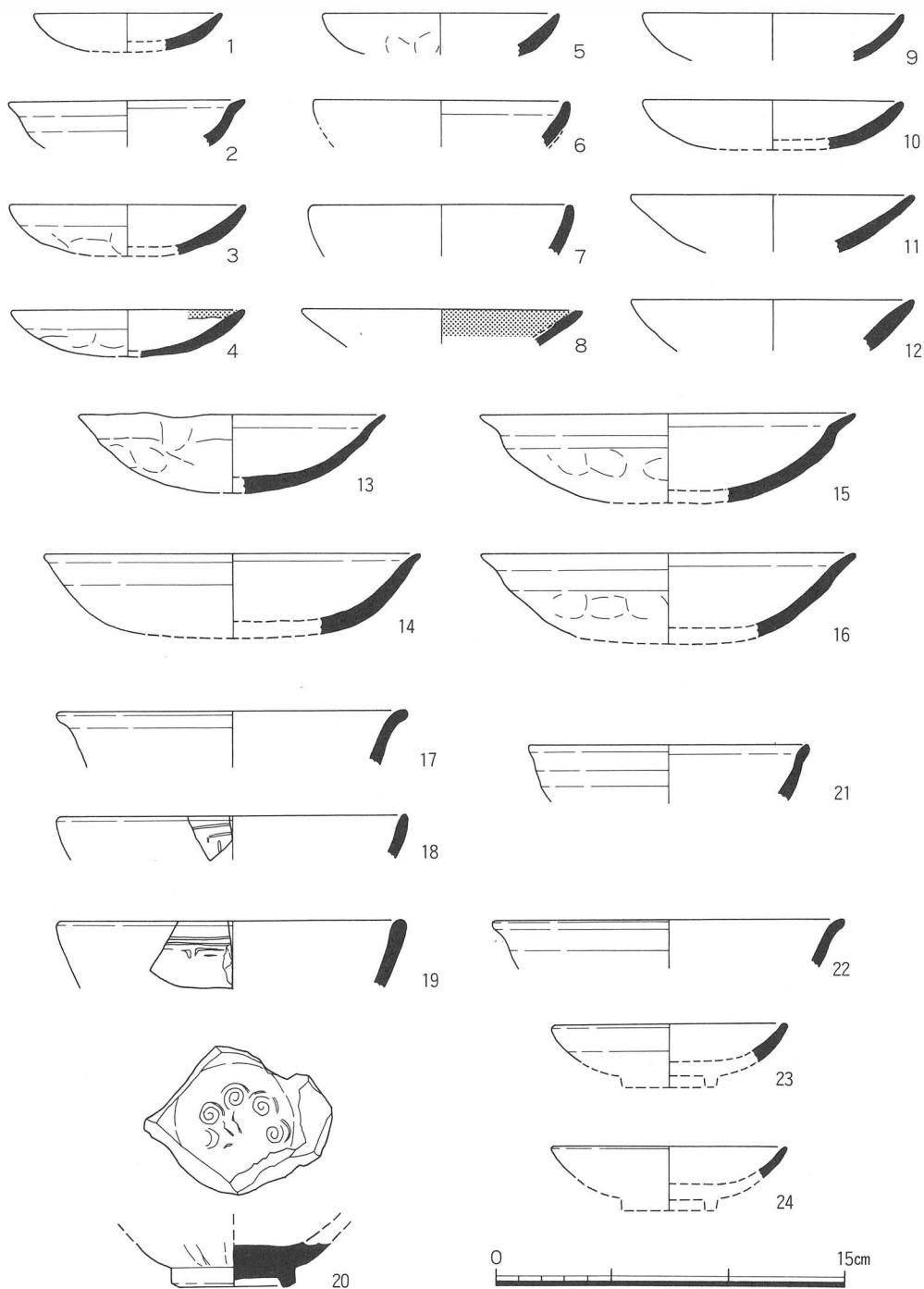
出土遺物実測図は第39・40図に示しているが、この他にもS I 01周辺出土として取り上げている遺物があり、参考資料として第41図に示した。なお詳細な計測データは別表11にまとめ、巻末図版67・68に遺物写真を掲載している。

出土遺物の概要（第39・40図、図版67・68の1～41）：出土した遺物には土師器、珠洲、瀬戸美濃、青磁、白磁などがある。

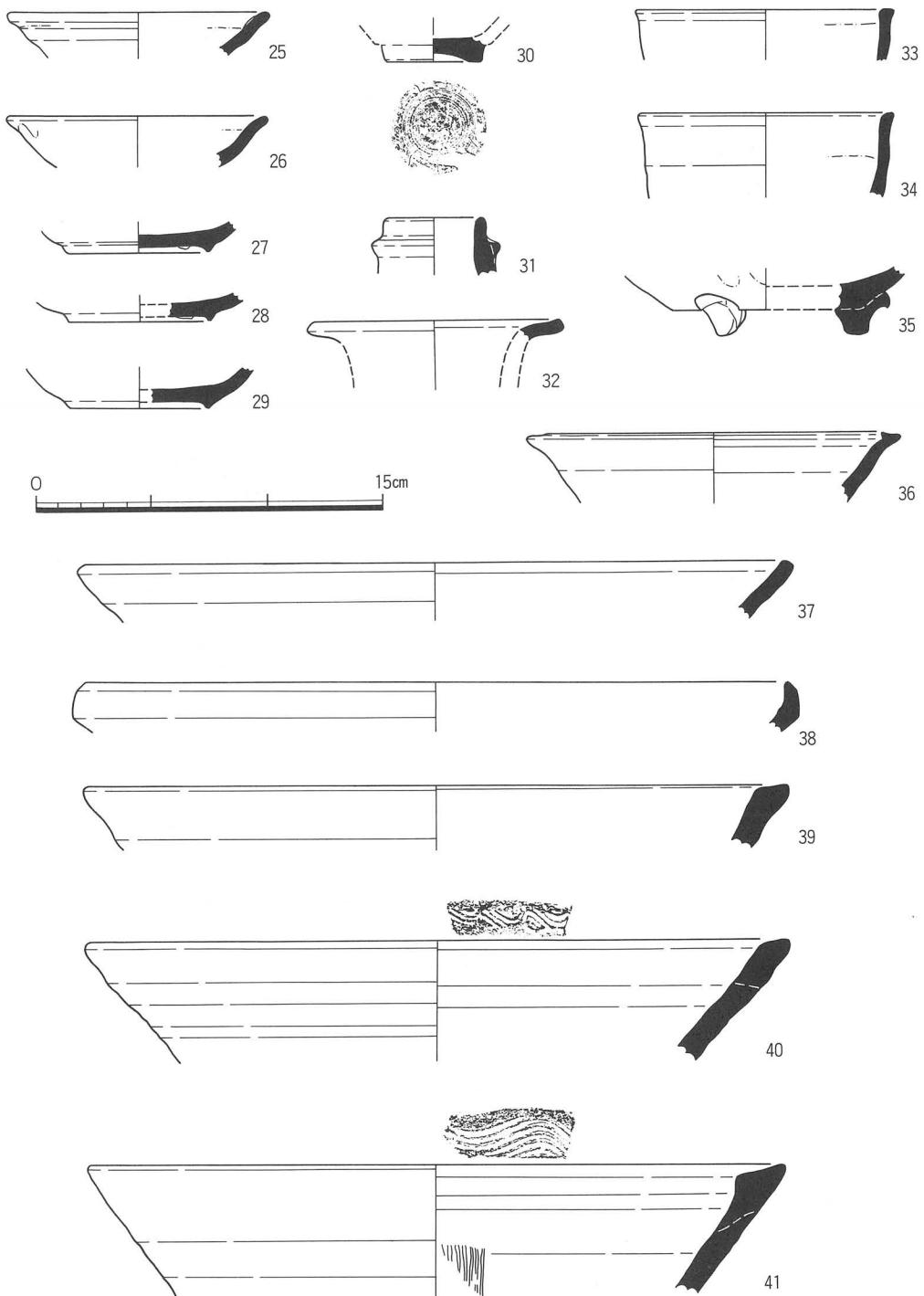
土師器皿（第39図・図版67の1～16）：37点出土しているが、そのほとんどが手づくね成形品であった。このうち主要な形態について記述すると、体部がやや屈曲ぎみに立ち上がる6、7はT-1類に属する。口縁部を浅く一段撫する3～5などはT-5類であり、口縁部の調整を省略している8・11はT-6かT-7類にそれぞれ分類することができる。15は口縁部を薄くし、強く外反させて段をつけるもので、口径も16cmと大ぶりである。T-3類に分類できる。なお4・8の内面にはタールが付着していた。

中国陶磁器（第39図・図版67の17～24）：17～20は青磁であり、器種は碗が多い。17は内外面無文の端反碗で、龍泉窯系碗D類にあたる。18・19はいずれも龍泉窯系碗C類に属する雷文碗である。20は龍泉窯系碗B1類の底部破片であり、高台が断面方形を呈している。高台部の畳付とその内部は露胎である。また内底見込みには花文様をスタンプしており、外面体部には蓮弁文がみられた。21は中国製の天目茶碗である。22～24は白磁であり、器種には碗と皿がある。22は碗18類にあたる端反碗であり、23・24は破片が小さいものの皿17類に分類できるであろう。

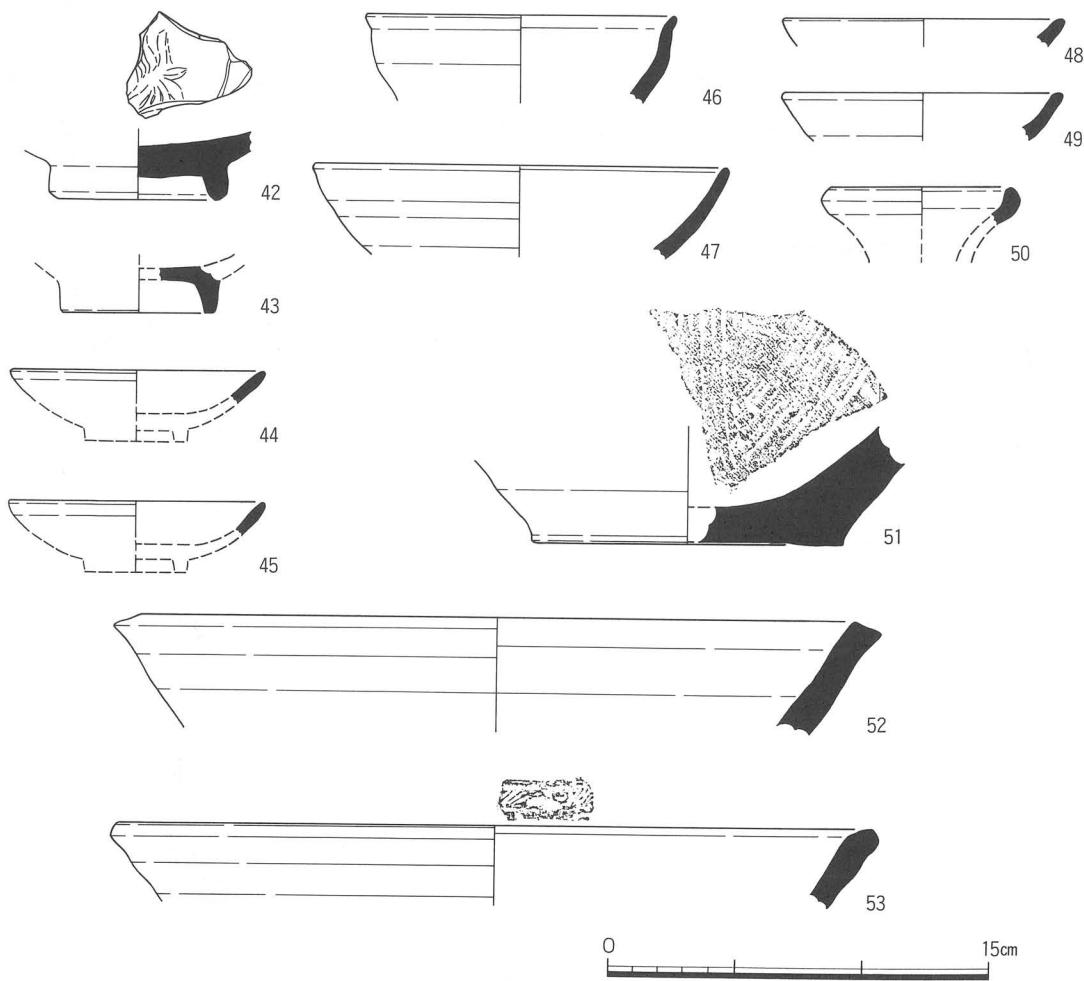
瀬戸美濃（第40図・図版68の25～38）：色々な器種が出土している。皿類や瓶類がやや多く、天目茶碗や卸皿はあまりみられない。25・26は灰釉を施す縁釉小皿である。いずれも古瀬戸後III期の製品である。27～29は大窯第1～2小期の皿である。灰釉を全面施釉しており、高台内には輪トチン痕が残っている。30は天目茶碗の底部破片である。削り込みの深い内反り高台で、周辺を露胎にしている。古瀬戸後IV期のものである。31は古瀬戸中期後半の梅瓶、32は古瀬戸中期前半の花瓶である。施される釉薬は、31が灰釉で32が鉄釉である。なお31は二次被熱していた。34は鉄釉の筒型香炉である。古瀬戸後IV期（吉）である。35も同じく、鉄釉香炉の底部破片である。胴部下部に脚が付されている。古瀬戸後期である。36は卸皿の口縁部破片である。口縁部の内側に小突起がめぐるが、口縁部上面は若干凹む程度である。鉄釉が施されており、古瀬戸後期の製品である。37は灰釉を施す直縁大皿である。古瀬戸後III期のものであり、二次被熱のあとが明瞭にみられた。38はすり鉢の口縁部破片である。黒褐色の濃い錆釉を施しており、古瀬戸後IV期（新）のものである。



第39図 1978年度調査におけるSI01出土の遺物（1）
(1～16土師器, 17～20青磁, 21中国製天目茶椀, 22～24白磁) 縮尺1/3



第40図 1978年度調査におけるSI01出土の遺物（2）
(25～38瀬戸美濃, 39～41株洲) 縮尺1/3



第41図 1978年度調査におけるSI01周辺出土の遺物
(42青磁, 43~45白磁, 46~50瀬戸美濃, 51~53珠洲) 縮尺1/3

珠洲（第40図・図版68の39～41）：甕とすり鉢が出土しているが、甕については細かい体部破片がほとんどであった。39～41はすり鉢である。39は口縁を水平にして面をとっており、さらに端部を外方向につまみ出している。珠洲IV期でも後半のものであろう。40・41はいずれも内傾した口縁端面に、櫛目波状文が施されている。珠洲V期のものである。

なお図示していないが、瓷器系陶器の甕や、白瓷系陶器椀の体部破片も出土している。

まとめ：以上で述べたSI01出土遺物の概要を、江馬氏下館全体の時期変遷に沿って整理しておこう。江馬氏下館跡I期（13世紀後半～14世紀）の遺物としては、T-1類土師器Ⅲ、青磁の蓮弁文椀、白磁の端反椀、古瀬戸中期の瓶類などが出土しているが、量的に

まとまるものでなかった。出土品のほとんどは、方約一町の館が成立した江馬氏下館II A期からII B期までのものであり、多くの種類の食器が出土している（14世紀末～15世紀後半）。細かい年代観についてみてみると、瀬戸美濃では古瀬戸後II～IV期のものが多く出土していた。土師器皿もT-5・6・7類やT-3類が多くを占めており、瀬戸美濃の年代観ともよく対応している。

出土遺物の下限年代を示すものは大窯第2小期の灰釉皿であり、遺構の埋没年代が江馬氏下館II B期の終末（16世紀初頭）であることがわかる。これはまた、江馬氏が館と堀を廃棄し、本拠を移動するのと同じ時期でもある（神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室1995）。したがって、S I 01はそうした江馬氏の本拠地移動の過程で、廃棄されたと考えてよいであろう。

（中田書矢・石井淳平）

（d）小 結

1996年度江馬氏下館跡の発掘調査により、館の周辺利用についてより多く知見を得ることができた。ここでこれらをまとめておきたい。

調査した地点は、館中心部からやや南に離れた河岸段丘の端に位置している。発掘の結果から、この地域が、道路や柵によって区割りした中に、建物や土坑を配置する居住空間であったことが判った。出土する遺物には14世紀末からのものが多く、この区画の成立をほぼその頃に求めることができるであろう。これは館全体を整備する時期と一致するものである。1995年度門前地区の調査成果から、館外での営みが段丘のかなり広い範囲に及んでいたことが明らかになっているが、南辺地区もまたその景観の一部をなすものであると理解できた。館周辺の整備は、居館の堀や庭園の造成にあわせて行われたものであり、ここにみられる館内外の変化は、当時の武家権門の新しい動向として位置づけられるものである（宇野1994b、小島1996）。

15世紀の最盛期をへて16世紀になると、南辺地区では遺構や遺物の廃棄を盛んに行ったようである。館の堀の廃棄もこの頃であり、江馬氏の本拠移動にあわせて、遺跡全体がそれまでとは全く異質な景観へと変化した。

次に、本年度調査地区と館門前との相違点を明らかにしておきたい。その主要な点は、館門前の建物が全て堀立柱式であったのに対して、南辺の本調査地区には竪穴住居を伴う区画があったことである。中世の竪穴住居は職人工房である可能性が考えられており（高橋1992）、本書付章において四柳嘉章氏が分析を行っている漆液容器の出土は、その性格を端的に示すものであった。

以上のような職人・工人の営みを、居館周辺の景観として復元できたことは、非常に大きな成果であった。そしてこのことは、当時の武家館周辺の遺跡構造を理解するうえでも、大きな手がかりになるものである。

（大平愛子・中田書矢）

4 段丘斜面のトレンチ調査

飛騨国高原郷は、日本海側と太平洋側を結ぶ交通の要所である。高原郷を通過する中近世の主要街道としては、越中と信州を結ぶ有峰街道、越中と飛騨を結ぶ越中東街道があり、これらを連絡する脇街道があった。高原郷の中世城館跡がこれらの街道を意識して立地していることは、既に本書第2章で述べたとおりである。

下館が立地する殿段丘の段丘斜面中位、段丘端部から約4m下には、かつての脇街道の一つである「上宝道」が通っている。現在は段丘下の国道が生活道路となっており、幅約1.8mのこの旧街道は周辺に居住する方々が時々徒歩で利用する程度であるが、かつては周辺地域の商業地であった船津の町と上宝村方面を結ぶ高原郷の主要道であった。地元の古者の話によると、段丘面の耕地を広げるために段丘斜面を埋めてからは道幅も狭くなつたが、往時は牛馬が曳く荷車も通行するほどの規模であったようである。

本年度の調査では、調査区の西端から段丘下までの斜面部分に試掘坑を拡張して、耕地化する以前の旧斜面を検出した。現在、段丘上端部と旧街道との中位に畠が一面あるが、調査に際してはこの畠の西辺まで調査区の3つの土層観察壁を延長し、幅約1.5mの試掘坑とした。試掘坑はそれぞれ南側を1トレンチ、北側を2トレンチ、中央を3トレンチと呼称する。

(大平愛子)

(a) 層 位 (図版31の3・4・32・34~36)

1~3トレンチで地山面を検出したところ、段丘端部と旧街道の間に幅3mほどの平坦面を確認した。段丘斜面には、段丘端部に盛られている畦の土が流れ込んでいるが、層をなしていない。旧街道面は、後世の耕地化に際して平坦面を拡張するため、西に幅2.5mほど土を盛り、近世以降、段丘上面と同じく耕作地として利用している。そのため、平坦面は段丘上面と同じ基本層序（表土、土地改良土、旧耕作土、地山）が確認できる。

1トレンチ・2トレンチでは、第1層オリーブ褐色砂質土および第2層暗褐色砂質土が表土であり、現在の耕作土である。第3層明黄褐色砂質土は盤土であり、以上の層は1972年の土地改良時の客土である。第11層、第25~29層は土地改良以前の耕作土であり、中世~近世までの遺物を包含する。第29層は耕作に伴って沈着した鉄分層である。この層が平坦面と拡張部分にまで伸びていることから、平坦面の拡張が耕地化によるものと判断した。3トレンチでは、a層およびb層が表土、c層が土地改良土にあたる。旧耕作土はg層、j層、k層、m~r層が相当し、k層が鉄分層である。なお、各トレンチとも鉄分層より以下の土層は、耕地を広げる際に段丘斜面を埋め立てた土である。

(戸田真美子)

(b) 遺 構 (図版30・31の1・2・33)

1~3トレンチそれぞれにおいて確認できた段丘斜面の旧地形は、その中位に二段の平

坦面を開削するものであった。段丘上面を上段とし、現在の畑に対応する中段の面を「平坦面」、旧街道に対応する下段の面を「街道面」として、以下にその概要を記述していく。なお段丘端部と平坦面との比高差は約3mであり、段丘端部と街道面との比高差は約4～5mである。

平坦面（図画3）：各トレンチで確認した平坦面の規模は、南北約25m、奥行きは南から順に1トレンチ3.06m、3トレンチ3.16m、2トレンチ5.86mを測るものであった。北西方向にやや張り出すようであり、南東から北西にかけて緩やかに傾斜している。この平坦面の面積は現在の畑の面積とは対応しておらず、耕地化する以前の段階、すなわち中世期の造成面であると考えることができる。またこの面においては、1トレンチで柱穴3基、2トレンチで溝1本（SD08）、3トレンチで柱穴4基を確認している。前後の時期の遺跡の性格を考えると、これらの遺構は江馬氏下館跡の段階のものと推定できるであろう。なお、平坦面の面上からは漆の塗膜が1点出土している。

SD08：2トレンチ平坦面の中央に位置する東西方向の溝である。検出長4.36m、幅0.36～0.68m、深さ約0.20mを測る。後世の削平によって溝の東側は残っていない。溝は街道面に盛られた土と切り合っているが、新旧関係は不明である。この溝内には柱穴が4基掘り込んでおり、布堀り溝であったと考えられる。遺物は青磁碗1点、珠洲すり鉢1点、土師器皿1点などが出土している。

街道面：1・3トレンチの西端部で確認した削平面である。調査区西に旧街道が隣接していることから「上宝道」の一部であると判断した。街道面の東端から現存する旧街道西端までを本来の幅とするならば、その幅は1トレンチで約6m、3トレンチで約7mである。後世の耕地の拡張に伴って街道の東側部分を平坦面の高さまで埋め立てており、その埋め立て土から土師器皿7点、青磁碗1点、白磁皿2点、瀬戸美濃の折縁中皿1点・壺2点、珠洲の甕1点・すり鉢1点が出土している。

（滝沢 匠）

（c）遺物（図版56・63・66）

図画3出土遺物

1トレンチ出土品（図版56・63・66の188～201）：188～193は土師器皿である。いずれも胎土は密であり、焼成は良好であるが、色調には差異がある。188はT類に属し、口径は約8cmを測る。内面にタールが付着している。色調は灰白色を呈する。189は分類不明である。口径は約10cmを測り、色調は浅黄橙色を呈する。190はT-6類かT-7類に属する。口径は約11cmを測り、色調は黄褐色を呈する。191はT-6類かT-7類に属する。口径は約12cmを測り、色調は浅黄橙色を呈する。192はT-6類かT-7類に属する。口径は約12cmを測り、色調は浅黄橙色を呈する。193はR-5類に属し、口径は約15cmを測る。色調は灰黄色を呈する

194は青磁碗である。口径は約14cmを測る。体部外面に線描きの粗略な蓮弁文を持つ。胎土は密であり、褐灰色を呈する。全面にくすんだ緑色の釉を施す。龍泉窯系碗B 2類に属し、14世紀後半～15世紀前半頃のものである。195は青磁碗である。口径は約15cmを測る。体部外面に線描きの蓮弁文を持つ。胎土は密であり、灰色を呈する。全面に緑灰色の釉を施す。龍泉窯系碗B 4類に属し、15世紀後半～16世紀前半頃のものである。

196は白磁口禿皿である。口径は約11cmを測る。口縁部はゆるく外反し、端部が口禿になる。胎土は密であり、灰白色を呈する。釉調は灰黄色を呈する。白磁皿1類に属し、13世紀中頃～14世紀中頃のものである。

197は瀬戸美濃の水注であり、注口部つけ根の破片である。外面全体と内面下方に浅黄色の灰釉を施す。胎土は密であり、灰黄褐色を呈する。焼成は良好である。古瀬戸中期に属し、14世紀前半のものである。198は瀬戸美濃の直線大皿の底部破片である。底径は約14cmを測る。胎土は砂粒を含んでやや粗く、灰黄色を呈する。底部外面周辺は露胎であるが、体部内面上半には浅黄色の灰釉を施す。古瀬戸後期に属し、14世紀後半～15世紀後半のものである。

199は瓦器の火鉢の体部破片である。外面に1本の隆線を持ち、その下部に雷文を施す。胎土は石英・雲母片を多く含み、灰黄色を呈す。内外面は明褐色を呈す。焼成はやや悪い。

200は瓷器系陶器の甕の体部破片である。外面を斜め上方になでた後、横方向になでている。胎土は砂粒を多く含み、粗い。色調は外面が明赤褐色、内面が灰褐色を呈する。焼成はやや悪い。

201は洪武通宝である。直径は2cmを測り、重さは3.0gを量る。初鑄年代は明代であり、初鑄年は1368年である。

2 トレンチ出土品（図版56・66の202～217）：202のみが遺構（S D 08）出土品である。202～208は土師器皿である。いずれも胎土は密であり、焼成は良好であるが、色調には差異がある。202はT類に属し、口径は約9cmを測る。磨耗が著しいため調整は不明である。色調は灰白色を呈する。203はT類に属し、口径は約9cmを測る。色調は灰黄色を呈する。204はT-6類かT-7類に属する。口径は約10cmであり、色調は淡黄色を呈する。205はT-6類かT-7類に属する。口径は約11cmを測り、色調は浅黄色を呈する。206はT-6類かT-7類に属し、口径は約11cmを測る。内面全体にタールが付着している。色調は灰褐色を呈する。207はT類に属し、口径は約12cmを測る。内外面の胎土が剥落しているため、調整は不明である。色調は浅黄橙色を呈する。208は底部破片である。R-1類に属し、底径は約4.5cmを測る。底面には回転糸切り痕が残る。色調は浅黄橙色を呈する。

209は青磁碗である。口径は約14cmを測る。口縁部外面に雷文帯を持ち、全面に緑灰色

の釉を施す。胎土は密であり、灰白色を呈する。龍泉窯系碗C 2類に属し、14世紀末～15世紀初頭のものである。

210は白磁皿である。口径は約10cmを測る。体部は内湾気味にひらき、高台径約4cm、器高約3cmの器形と推定できる。全面に白色の釉を施す。胎土は密であり、灰白色を呈する。白磁皿16類か17類に属し、15世紀代のものである。

211は瀬戸美濃の香炉である。口径は約12cmを測る。頸部はほぼ直立し、口縁端部は短く外折する。外面及び口縁部内面に浅黄色の灰釉を施す。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。古瀬戸後II期に属し、15世紀初頭のものである。212は瀬戸美濃の鉢皿である。口径は約15cmを測る。口縁部は内側に折り返し、小突起を形成する。口縁部内外面に浅黄色の灰釉を施す。胎土は砂粒を含んでやや粗く、明黄褐色を呈する。焼成は良好である。古瀬戸後IV期（古）段階に属し、15世紀中頃のものである。213は瀬戸美濃の折縁中皿である。口径は約16cmを測る。口縁部は一旦外折し、端部が短く立ち上がる。口縁部内外面に浅黄色の灰釉を施す。古瀬戸後III期に属し、15世紀前半のものである。

214は瓷器系陶器の壺甕類の体部破片である。磨耗が著しく、内外面とも調整は不明である。胎土は砂粒を含み、やや粗い。焼成は良好であり、色調は灰色を呈する。

215は珠洲の甕の体部破片である。体部外面には3cm幅に7条の平行叩き目を施す。胎土は砂粒をわずかに含み、密である。焼成は還元硬質であり、色調は灰色を呈する。年代は不明である。216は珠洲の壺甕類の体部破片である。体部外面には3cm幅に7条か8条の平行叩き目を施す。胎土は砂粒が混じり、やや粗い。焼成は還元硬質であり、色調は灰色を呈する。年代は不明である。

217は瀬戸美濃の盤類の体部破片である。体部外面上方に浅黄色の灰釉を施す。胎土は砂粒を含んでやや粗く、外面は淡黄色、内面は黄橙色を呈する。焼成は良好である。古瀬戸後III～IV期（古）段階に属し、15世紀中頃のものである。

3 トレンチ出土品（図版56・63・66の218・219）：218は白磁皿である。口径は約10cmを測る。体部は内湾気味にひらき、高台径約4cm、器高約3cmの器形と推定できる。全面に白色の釉を施す。胎土は密であり、灰白色を呈する。白磁皿16類か17類に属し、15世紀代のものである。

219は不明銅製品である。長さは2.2cm、幅は0.6cmを測り、重さは4.2gを量る。内側にもみがらが付着している。
（野水晃子）

（d）小 結（第42図）

本年度に行ったトレンチ調査によって、下館跡南辺の区画と古街道が近接した位置関係にあることが判明した。当時の街道と考えられる面は、堀立柱建物や竪穴住居を検出した段丘面から4m程下がったところで確認できた。トレンチ内では僅かな範囲しか検出して

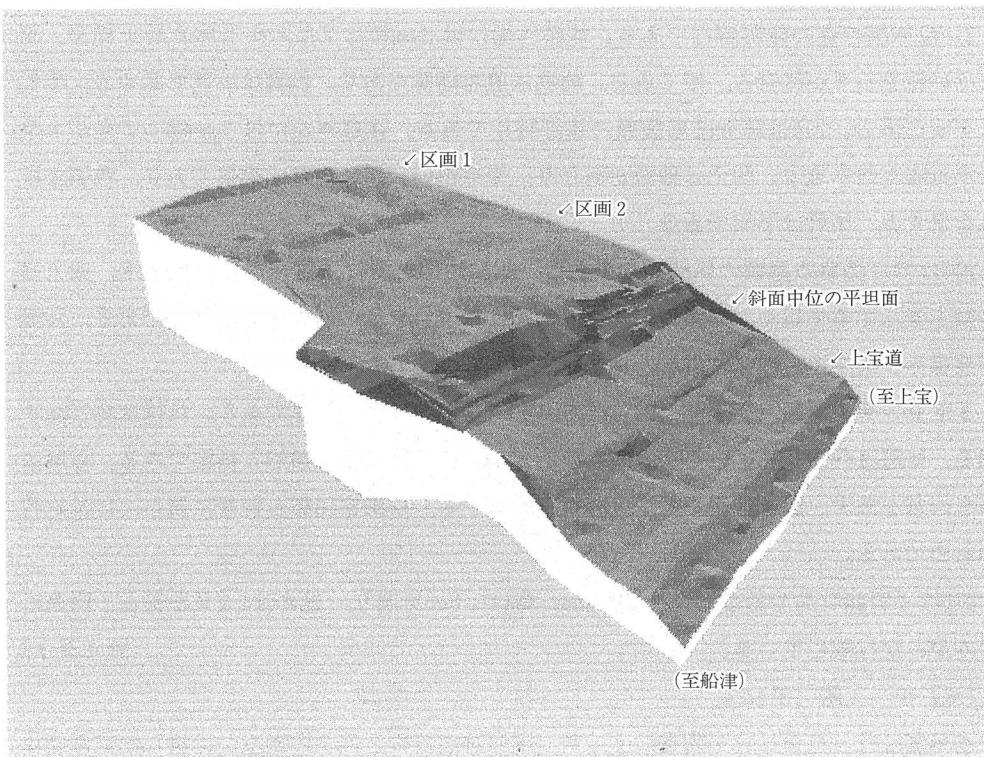
江馬氏城館跡III

いないが、現存する古道の位置も考慮に入れると、その道路幅を約6.5m前後に復元することが可能であろう。さらに道際の施設として、段丘崖の中位に小規模な平坦面を造成していることも判った。平坦面は幅3～6mの規模であり、道路面より一段高く、これには平行して造られているものである。面上には溝・柱穴などの中世遺構がみられ、館周辺の施設が、道路に接するところまで広がっていたことが明らかになった。

飛騨国高原郷は越中・飛騨・信濃を結ぶ交通の要衝であり、江馬氏にとってこの地を支配することは、軍事・商業の両面で大切な意味をもつことであったのであろう。そして本拠地である下館跡もまた、その意識のもとに成立していたようである。

武家居館と交通路の関わりについては、周辺景観の在り方も考えながら、考察の章においてさらに検討を加えたい。

(大平愛子・中田書矢)



第42図 1996年度調査地区の地形鳥瞰図
(等高線自動計算ソフト [TN-CONTOUR Ver.3] で作成、北から)

第4章 考察

1 遺構の考察

(a) 遺構配置の変遷（第43～48図）

今回の調査では、館南辺において掘立柱建物7棟・柵列3列を復元し、竪穴住居2棟を確認した。遺構に伴う遺物が十分に出土しておらず、遺物から各遺構の年代を決めるることは難しい。しかし、南辺地区全体で出土した遺物の年代は14世紀末以後のものがほとんどであり、掘立柱建物の主軸方位が館内のA期建物と概ね一致することから、南辺の土地利用は居館を造成するのとほぼ同時期に始まったと考えられる。

ここでは発掘調査によって検出した遺構の配置と構成、遺構の重複状況、遺構出土遺物の検討などを重ねることによって、遺構配置の変遷を復元的に整理することとする。

なおSB14はどの建物とも重複していないため、他の建物との前後関係は不明である。そのため本報告ではいずれの段階にも入れていない。

江馬氏下館Ⅰ期（13世紀後半～14世紀中頃、第46図）

門前地区では総柱式掘立柱建物が散在する景観がうまれたようであるが、南辺地区にはこの時期にあたる遺構は確認できていない。

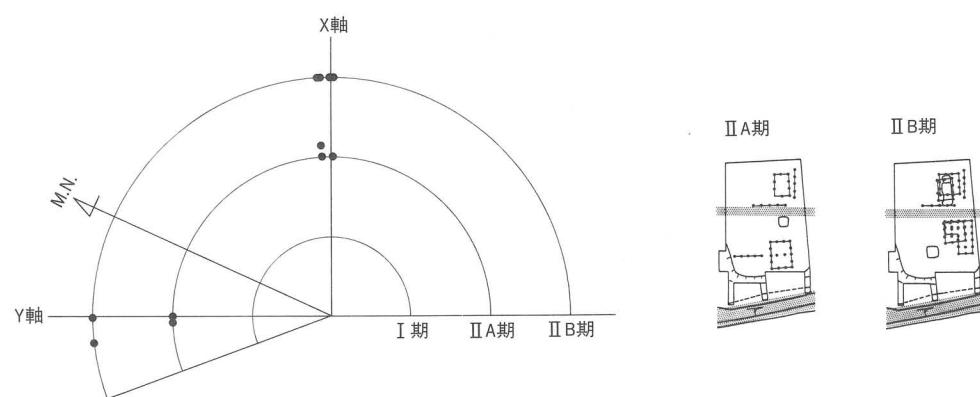
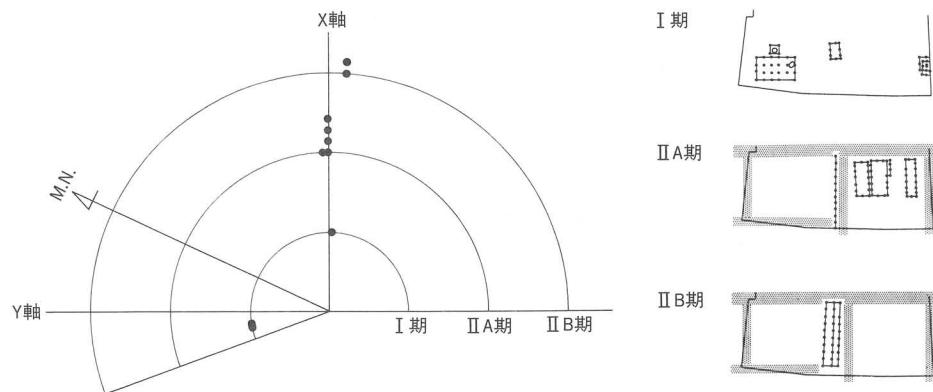
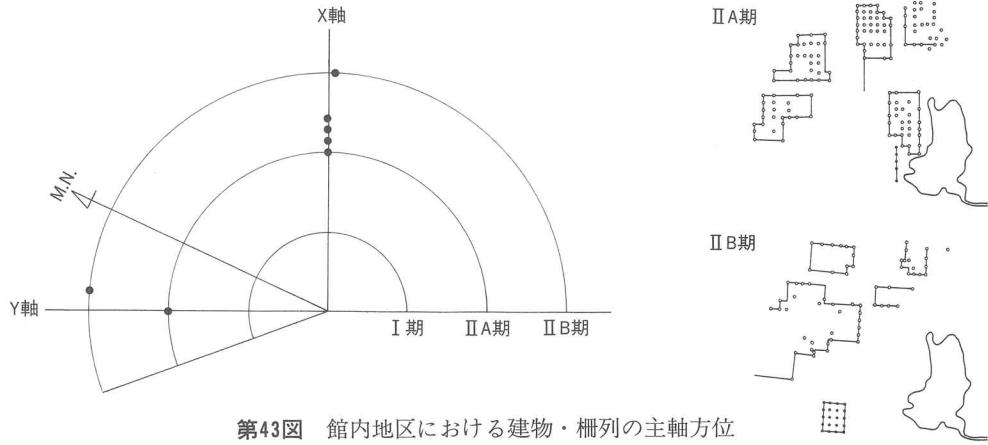
江馬氏下館Ⅱ期（14世紀末～16世紀初め）

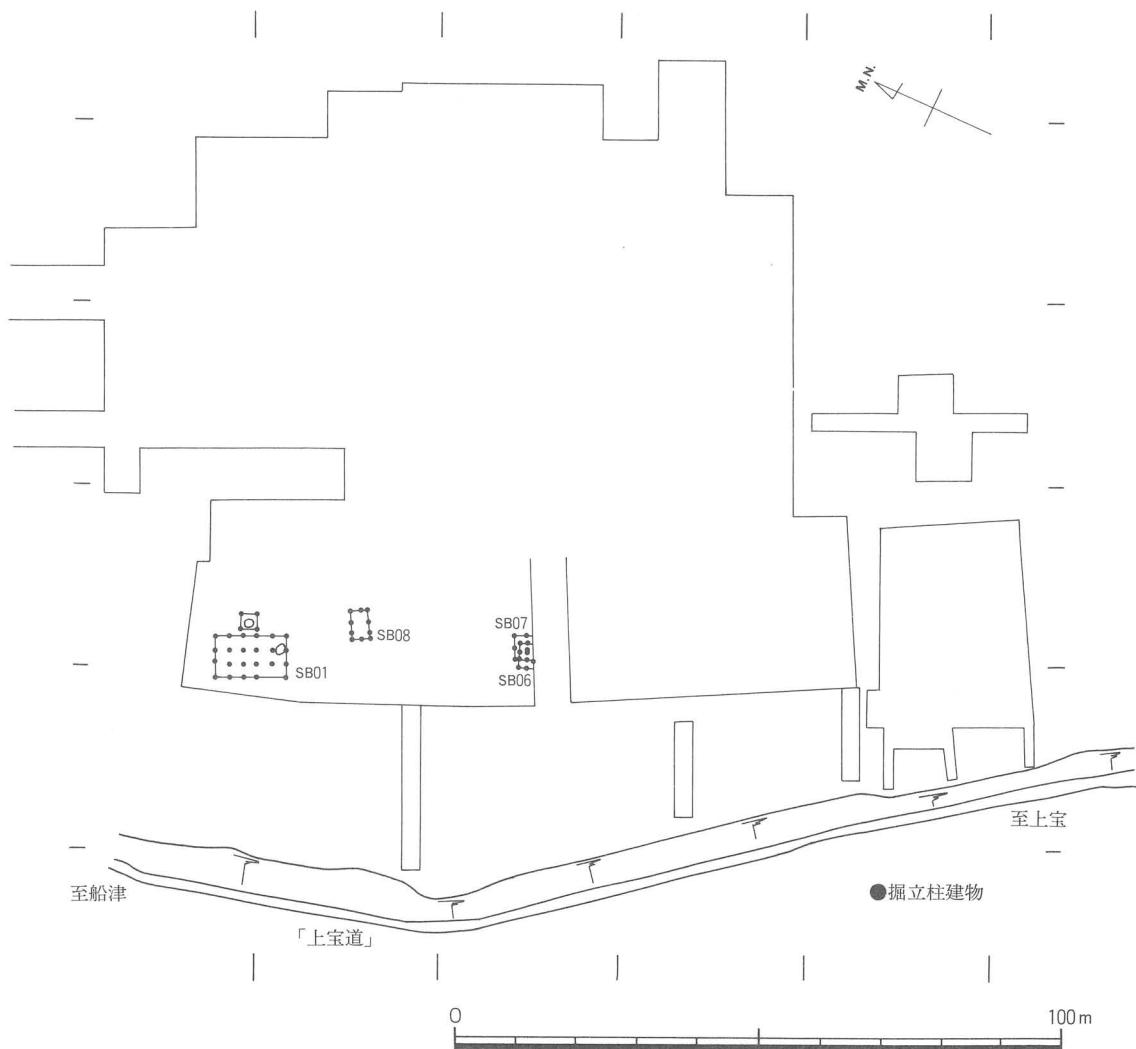
この頃に南辺地区の土地利用が始まったようであり、旧街道に接する段丘斜面に平坦面を造成している。付章に示す遺跡探査の成果では、区画1と区画2の間に電気抵抗が高い帯状の部分があり、この部分には遺構もほとんど存在しないことから南北方向にのびる道路があったと考えられる。道路の東側に掘立柱柵列SA12を設けて、2つの方形区画として利用していたようである。

館内や門前地区においては建物の主軸方位の違いによって、更に2時期に細分しており、本地区でもそれぞれの時期に対応する変遷案を示すこととしよう。

江馬氏下館ⅢA期（14世紀末～15世紀前半、第47図）：堀と庭園を造成し、居館を整備した時期である。門前地区では柵列による方形の区画を設け、画一的な側柱式建物群が出現している。南辺地区の区画1では掘立柱建物SB11がみられ、区画2では掘立柱建物SB15と竪穴住居SI02が配置されている。中世の竪穴住居は職人工房である可能性が考えられており、付近より漆液容器が出土したことは漆職人の存在を示唆している（漆器の塗膜分析については本書付章の四柳嘉章氏論考にくわしい）。なおSA11・12は他の建物や柵列と重複しないことから、次のⅢB期まで長期に渡って存続したと考えておく。

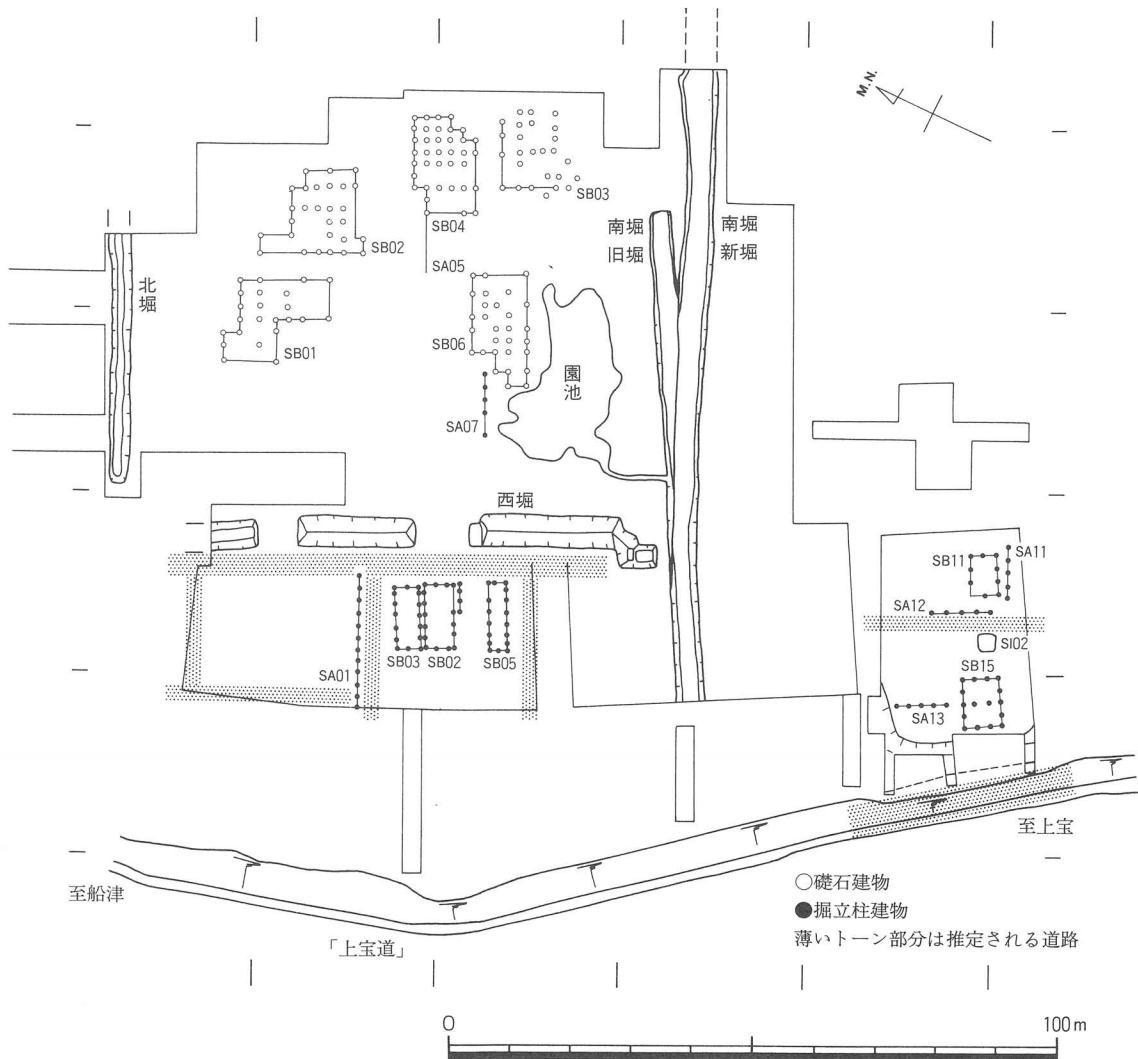
江馬氏城館跡III





第46図 江馬氏下館 I 期の遺構配置図（13世紀後半～14世紀） 縮尺1/1,250

江馬氏下館 II B 期（15世紀後半～16世紀始め、第48図）：館内や門前地区では軸の異なる建物に建て替えているが、南辺地区にはそういった状況がみられず、基本的にはII A 期の区画割・建物の配置を継承している。区画1には掘立柱建物S B12・13が成立し、この建物は土間状遺構S X01を伴っている。土間状遺構の用途は明確ではないが、付近の柱穴から漆液容器が出土していることを考慮すると、漆塗のための作業場であった可能性が考えられる。区画2には掘立柱建物S B16・17と竪穴住居S I 01が配置されており、前段階と同様の手工業生産の場であったと考えられる。

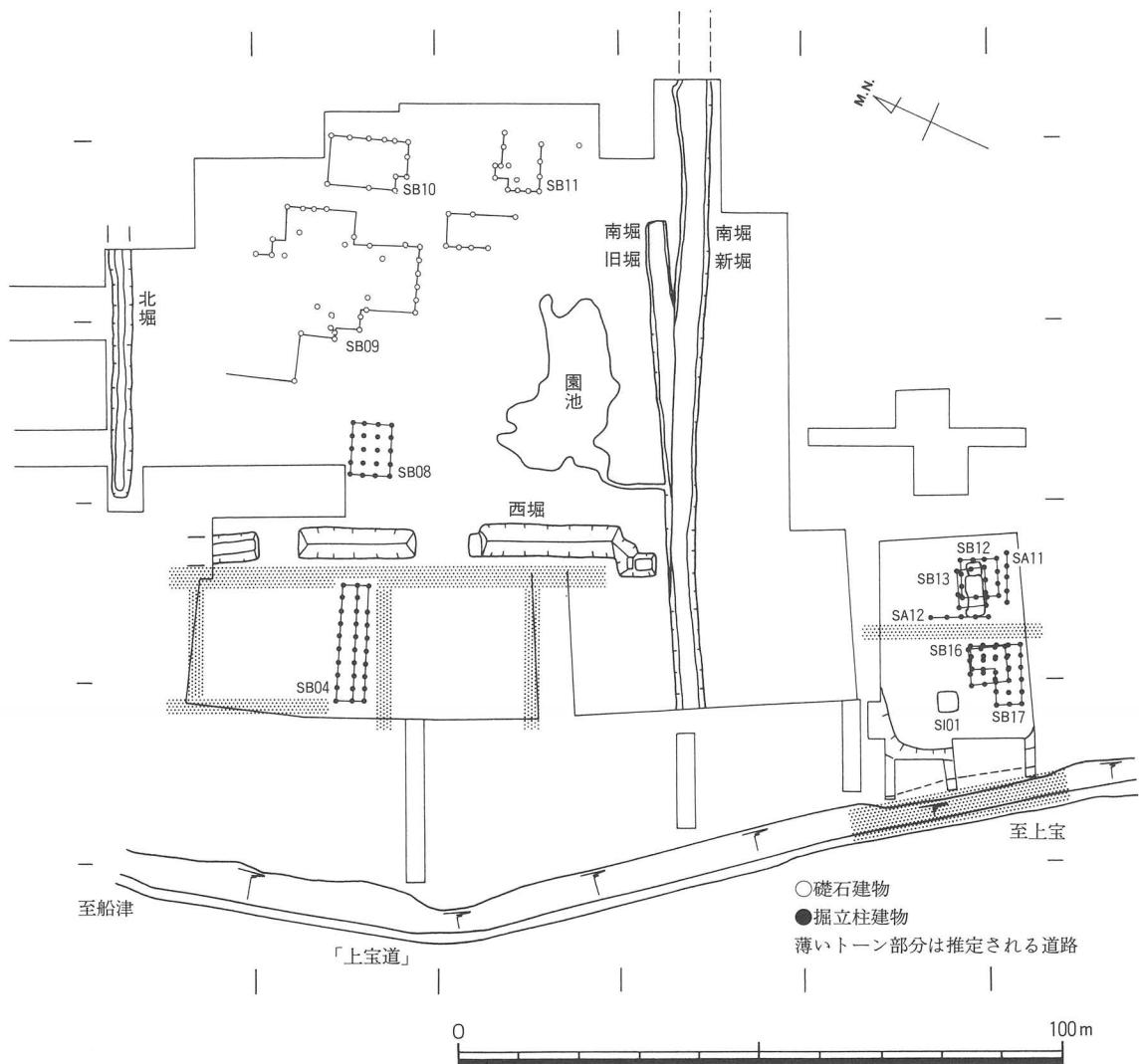


第47図 江馬氏下館IIA期の遺構配置図（14世紀末～15世紀前半）縮尺1/1,250

16世紀は江馬氏が館と堀を廃棄し本拠を移動する時期であるが、南辺地区ではこれにあわせて遺構や遺物の廃棄を行っている。特にS X01では被熱した礫と遺物を共に廃棄している状況がみられた。また段丘西端では盛土地業によって従来の建物柱穴などを埋め立てており、この頃を境として遺跡全体がそれまでとは全く異質な景観へと変化したと考えられる。

江馬氏下館Ⅲ期（16世紀以降）

この頃の江馬氏の本拠は段丘野尻の東町城に移動しており、殿段丘は近世になってから

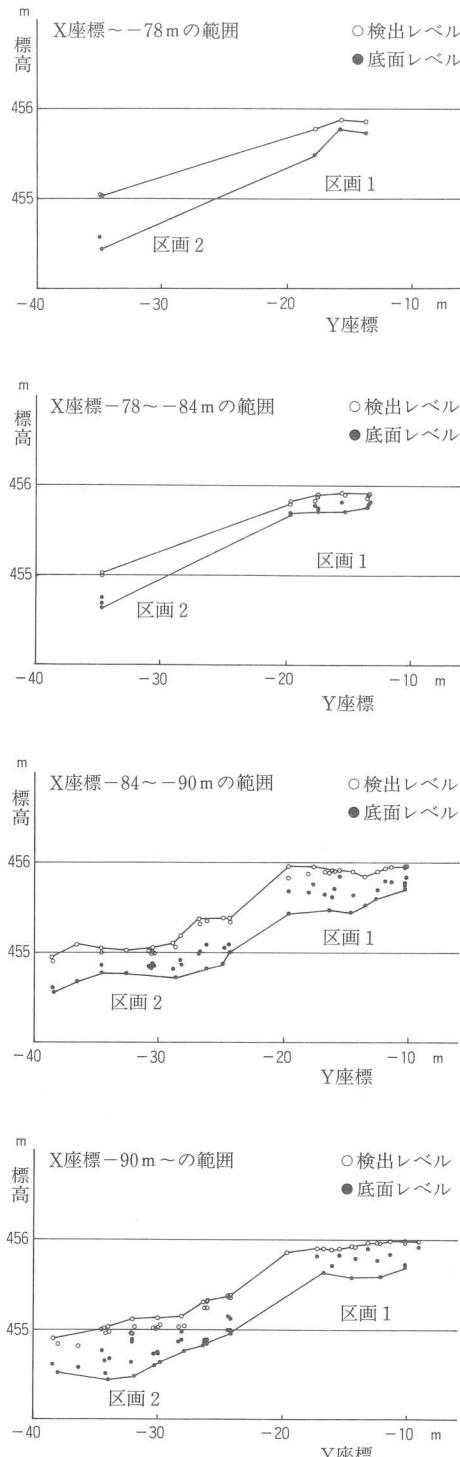


第48図 江馬氏下館II B期の遺構配置図（15世紀後半～16世紀初め）縮尺1/1,250

耕地として再開発されている。南辺地区では段丘斜面の盛土を壊して石積みを造成しているが、これは近世の耕地化に伴うものであろう。同時に耕地面積を確保するために段丘の西側斜面を埋め立てており、これによって旧街道の道幅が狭められたようである。

(小野 基・清水あゆ美)

江馬氏城館跡III



第49図 柱穴レベルをもとにした旧地形の復元（南から）

(b) 旧地形の復元 (第49図)

1996年度調査地区は河岸段丘の西辺端部に位置しており、遺構を検出した地山面は東から西に傾斜していた（その標高差は約1m）。調査区内のY座標-20mと-30m付近には段差があり、近世の耕地化に伴う削平によるものと考えられる。しかし削平を受けた部分も含め、調査地区全体で多くの柱穴を検出することができた。これらの柱穴の深さが本来は同程度であったとするならば、その底面レベルが削平以前の地形をより正確に反映するものと考えられる。また柱穴の検出レベルとの比較によって、以後の削平の程度も推定できるであろう。ここでは柱穴の検出レベルと底面レベルを用いて、旧地形の復元を試みてみたい。

第49図には標高値を縦軸、座標値を横軸とする調査地区の東西断面図を示した。これは掘立柱建物・柵列を構成する柱穴データから作成したものであり、上線が検出面における地形を、下線が柱底レベルが示す地形を表している。作図はX座標軸を主軸とする幅6mごとで行っており、それぞれを比較することによってより詳細な地形的変化を読み取ることができる。ここでは掘立柱建物の多い調査区南半(X座標、-84~-96mの範囲)での検討が容易であった。

以上の作業から復元できる地形は区画1がほぼ平坦な面をなし、区画2では西にやや傾斜するものであった。また区画1と区画2の間にある段差は、後世の削

平以前にもあったようであり、その比高差は0.6m前後であったと考えられる。

付章に示す遺跡探査の成果からは、この段差の西側に電気抵抗が高い帶状の部分があり、区画の間をはしる南北道路であったことを示していた。このように南辺地区においては、柵列や道路だけでなく、段差をつけることによって区画を設け、居住空間を分けていたようである。
(戸田真美子)

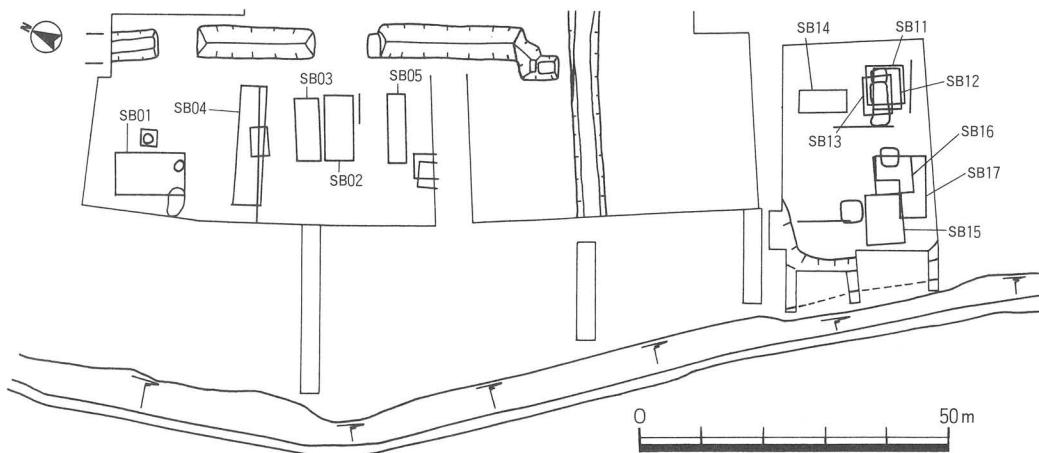
(c) 堀立柱建物 (第50~55図、第10~13表)

江馬氏下館跡では、1995年度調査の門前地区で8棟、1996年度調査の南辺地区で7棟の堀立柱建物を復元した(第50図)。本稿では主成分分析・クラスター分析を用いて、堀立柱建物の諸属性の関係を整理し、江馬氏下館跡の堀立柱建物群のあり方の把握を試みていこう。

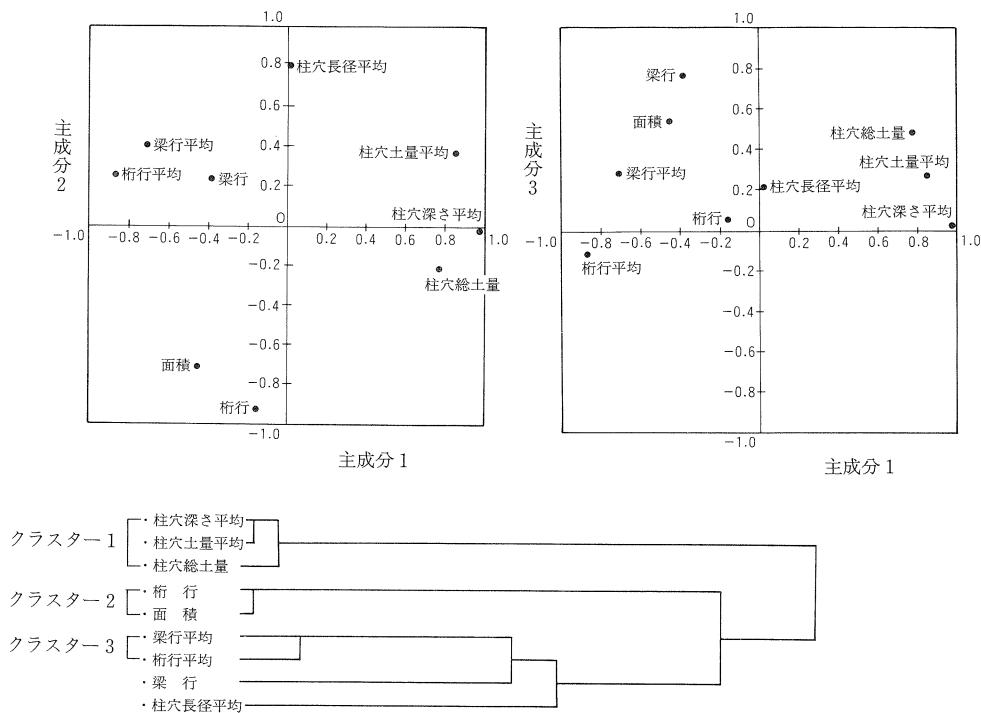
なお統計処理に使用したソフトウェアは「SPSS for Windows BASE System」・「Professional Statisuics」である。

分析の方法：分析に使用した変数は [梁行][梁行平均][桁行][桁行平均][柱穴長径平均][面積][柱穴深さ平均][柱穴総土量][柱穴土量平均] である。まず全ての変数に対して主成分分析を行い、変数同士の相関関係を概観する。主成分分析の結果に基づき、相関係数・相関性の検定、散布図を用いて変数同士の相関関係を個別に検討する。次にクラスター分析を用いて、建物の分類を行う。さらに、主成分得点の散布図からクラスター分析で分類した建物群がどの様な属性に持つのかを検討する。

変数の概要 (第51図・第10表)：第51図は多変量解析による江馬氏下館の堀立柱建物の分析結果である。上は主成分負荷散布図¹である。主成分は主成分3まで出力し、寄与率は主成分1が²43.4%、主成分2が²27.5%、主成分3が²14.7%で累積寄与率が²85.5%である(第



第50図 門前・南辺地区における建物概略図 縮尺1/1,250



第51図 多変量解析による掘立柱建物属性の分析結果

10表)。主成分1 – 2 の散布図をみると [柱穴土量平均][柱穴深さ平均][柱穴総土量] が近い位置にプロットされることから、互いに高い相関を持つと考えられる。さらにこれらと [桁行平均][梁行平均] が主成分1 = 0 をはさんで反対の位置にプロットされることから、[柱穴土量平均][柱穴深さ平均][柱穴総土量] と [桁行平均][梁行平均] が負の相関をもつと考えられる。また柱穴に関わる属性のうち [長径平均] のみが主成分1 の方向に出力せず、柱穴の土量を示す属性との相関が低いと考えられる。[面積][桁行][梁行] といった建物規模を表す属性は主成分1 – 2 では [面積] と [桁行]、主成分1 – 3 では [面積] と [梁行] が近い距離にプロットされる。これらと柱穴の属性は、やや負の相関にあると思われる。

第51図下は変数のクラスターである。近い距離で結合する変数ほど高い相関がある。[柱穴深さ平均][柱穴土量平均][柱穴総土量] がクラスター1、[桁行][面積] がクラスター2、[桁行平均][梁行平均] がクラスター3を形成する。クラスター1は柱穴土量に関わる属性、クラスター2は建物規模に関わる属性、クラスター3は柱間距離である。[梁行] は建物規模を示す属性から、[柱穴長径平均] は柱穴に関わる属性から遠い距離で結合する。

第10表 掘立柱建物の主成分統計値表

	固有値	寄与率	累積寄与率
主成分 1	3.90672	43.4%	43.4%
主成分 2	2.47173	27.5%	70.9%
主成分 3	1.31965	14.7%	85.5%
主成分 4	0.67987	7.6%	93.1%
主成分 5	0.39033	4.3%	97.4%
主成分 6	0.19334	2.1%	99.6%
主成分 7	0.01974	0.2%	99.8%
主成分 8	0.01158	0.1%	99.9%
主成分 9	0.00704	0.1%	100.0%

第11表 掘立柱建物の主成分負荷行列表

属性	主成分 1	主成分 2	主成分 3
梁 行	-0.38276	0.23789	0.76465
梁 行 平 均	-0.70950	0.40560	0.27565
桁 行	-0.15726	-0.92189	0.05813
桁 行 平 均	-0.86878	0.25553	-0.11837
面 積	-0.44894	-0.70684	0.53568
柱穴 総 土 量	0.77432	-0.21510	0.48346
柱穴 深 き 平 均	0.97436	-0.02247	0.02507
柱穴 長 径 平 均	0.01749	0.80891	0.21412
柱穴 土 量 平 均	0.85236	0.36701	0.27279

第12表 掘立柱建物の主成分得点表

地点	建物	主成分 1	主成分 2	主成分 3
門前	1	-1.65173	-0.44708	1.48588
門前	2	0.35521	-0.79496	-0.00063
門前	3	1.04024	-0.09868	0.08753
門前	4	-1.01869	-2.11034	-0.05054
門前	5	1.29220	-1.07987	-1.61471
南辺	11	-0.74625	0.58603	-1.18149
南辺	12	-0.02307	0.48518	-0.02318
南辺	13	-0.28798	1.39376	-0.54833
南辺	14	-1.15512	0.91958	-1.16441
南辺	15	0.11266	0.05461	1.05625
南辺	16	0.72484	1.08103	1.19788
南辺	17	1.35768	0.01074	0.75574

第13表 堀立柱建物の相關行列列表

	梁 行	梁 行	梁行平均	桁 行	桁行平均	柱穴長径平均	面 積	柱穴深さ平均	柱穴総土量	柱穴土量平均
梁 行 平 均	1.000 p = *	0.4433 p = 0.149	1.000 p = *	-0.2591 p = 0.416	-0.1957 p = 0.542	1.000 p = *				
桁 行 平 均		0.2181 p = 0.496	0.698 p = 0.012	-0.698 p = 0.847	-0.0623 p = *	1.000 p = *				
柱穴長径平均	0.2077 p = 0.517	0.3036 p = 0.337	-0.5791 p = 0.048	0.1927 p = 0.549	1.000 p = *					
面 積	0.3906 p = 0.209	0.1679 p = 0.602	0.7751 p = 0.003	0.1469 p = 0.649	-0.4178 p = 0.177	1.000 p = *				
柱穴深さ平均	-0.3014 p = 0.341	-0.6723 p = 0.017	-0.1904 p = 0.553	-0.8681 p = 0.000	-0.1002 p = 0.757	-0.4231 p = 0.171	1.000 p = *			
柱穴総土量	-0.1027 p = 0.751	-0.4477 p = 0.144	0.181 p = 0.573	-0.6625 p = 0.019	0.0105 p = 0.974	0.0687 p = 0.832	0.7405 p = 0.006	1.000 p = *		
柱穴土量平均	-0.1225 p = 0.704	-0.2877 p = 0.365	-0.4057 p = 0.191	-0.6277 p = 0.223	0.3801 p = 0.103	-0.4934 p = 0.001	0.8144 p = 0.003	0.7694 p = *	1.000 p = *	

以上みてきたように変数のクラスター分析は主成分負荷散布図の結果とほぼ一致し、特に主成分1-2と一致することがわかる。

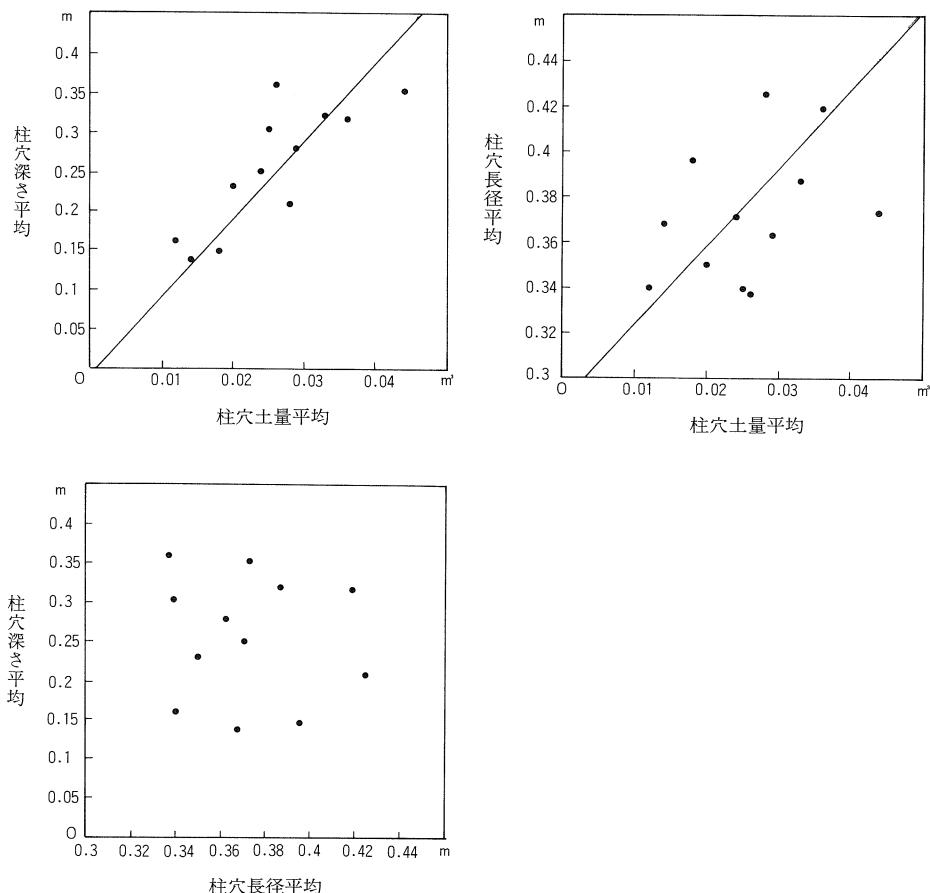
相関関係の検討（第52～55図・第13表）：第13表は相関行列表である。上段がピアソンの相関係数で下段のP³=有意確率である。1%で棄却されるものは〔面積〕-[桁行], [柱穴深さ平均]-[桁行平均], [柱穴総土量]-[柱穴深さ平均], [柱穴土量平均]-[柱穴深さ平均], [柱穴土量平均]-[柱穴総土量]である。5%で棄却されるものは[桁行平均]-[梁行平均], [柱穴深さ平均]-[梁行平均], [柱穴長径平均]-[桁行], [柱穴総土量]-[桁行平均], [柱穴柱穴土量平均]-[桁行平均]である。主成分1の負荷量が正の値をとる [柱穴土量平均][柱穴深さ平均][柱穴総土量] の組合せは、それ有意確率が1%以下で、相関係数も0, 7を越えるなど高い相関があることがわかる。主成分1の負荷量が負の値をとる [桁行平均][梁行平均] は、[梁行平均] が [柱穴深さ平均] との有意確率が5%以下で相関係数が-0, 6, [桁行平均] が [柱穴深さ平均] との有意確率が1%以下で相関係数が-0, 8, [柱穴総土量][柱穴土量平均] との有意確率が5%以下で相関係数は-0, 6である。したがって、ピットの土量と柱間距離の間には負の相関関係があると考えられる。

第52図は柱穴の諸属性の相関図である。[柱穴土量平均]と[柱穴深さ平均]の散布図をみると、主成分負荷散布図と相関行列表で確認したように正の相関関係にあることがわかる。[長径平均]は主成分1では限りなく0に近い値をとり、相関行列表からも[柱穴土量平均]や[柱穴深さ平均]といった柱穴に関わる変数とは相関がないと考えた。しかし、[長径平均]と[柱穴土量平均]散布図をみると、若干、正の相関関係があると考えられる。一方、[長径平均]と[柱穴深さ平均]はほぼ無相関である。

第53図は柱間距離と柱穴規模の相関図である。相関行列表で確認したように、全て負の相関関係があることがわかる。

第54図は面積と柱穴規模の相関図である。[面積]は主成分1が-0, 4とやや負の値をとり、ピットの土量を示す属性とは若干負の相関があると考えられる。相関行列表では[柱穴深さ平均][柱穴総土量][柱穴土量平均]との有意確率は5%以上で棄却されず相関があるとはいえない。しかし、[面積]と[柱穴土量平均][柱穴深さ平均][柱穴総土量]の散布図をみると、50m²を越える建物では[柱穴総土量]は[面積]に比例して増加していないが、面積が50m²以下の小型の建物では正の相関があることがわかる。従って建物の規模が一定以下であれば、建物規模と柱穴規模の間には正の相関関係があるといえる。一方、主成分2=0をはさんで反対の位置にプロットされ、負の相関があると考えた[面積]と[柱穴長径平均]は無相関である。

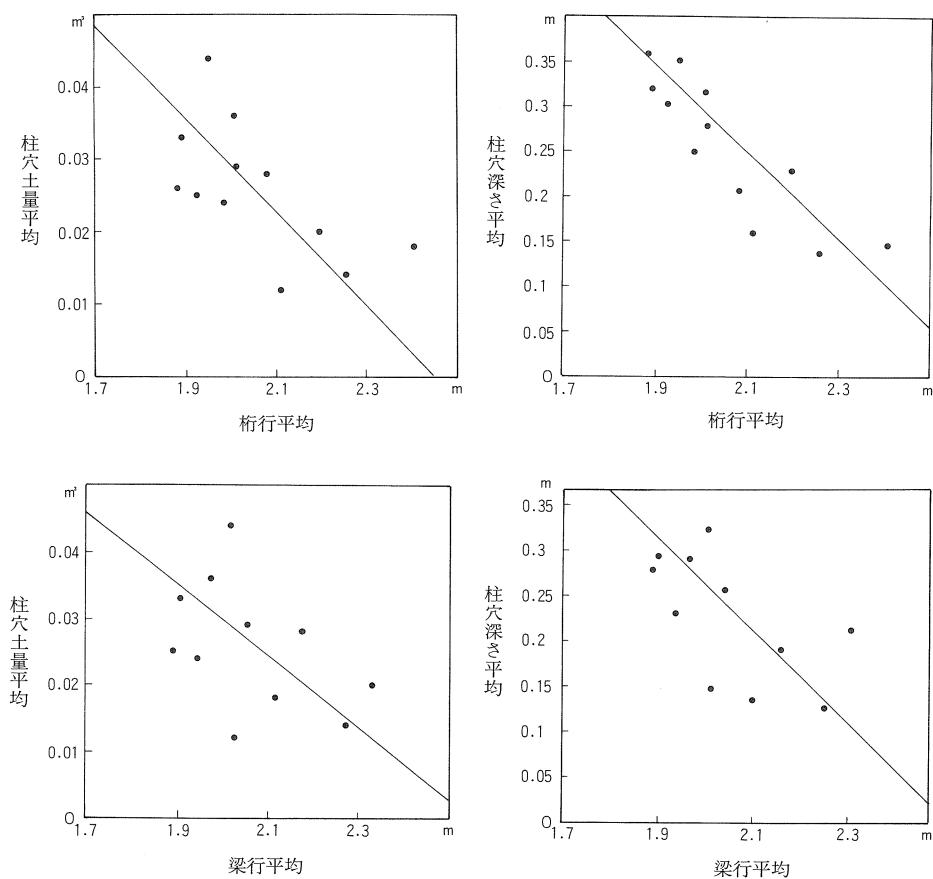
第55図の左下の図に、これまで検討してきた変数相互の関係から、主成分の座標の意味



第52図 柱穴の諸属性の相関図

付けを示した。主成分1は正方向に向かって柱穴土量が多くなり、負の方向に向かって柱間距離が短くなる。主成分2は面積と桁行が負の方向に現れ、負の方向に向って面積が大きく細長い建物になる。主成分3はほぼ全ての変数が正方向に出力する。特に梁行と面積が大きな値をとることから、主成分3は規模が大きく、正方形に近い形の建物を示しているといえる。

建物の分類（第55図）：第55図は多変量解析による堀立柱建物の分類図である。クラスター1は門前地区S B03・南辺地区S B12・16、クラスター2は門前地区S B02・南辺地区S B12・15、クラスター3は南辺地区S B11・13・14、クラスター4は門前地区S B01, 04である。江馬氏下館I期にあたるS B01とII期にあたるS B04は他の建物と最も遠くで結合する。クラスター1, 2, 3は門前地区にある江馬氏下館II期の建物と南辺の全ての建物が含まれる。クラスター分析による建物の分類は時期別、地点別でなんらかのまと



第53図 柱間距離と柱穴規模の相関図

まりをみせるかと思われたが、クラスター3が全て南辺の区画1の建物である以外は明確な関連は無いようである。

次に主成分得点グラフからクラスター分析で分類された建物がどのような特徴を持った建物であるかを述べる。

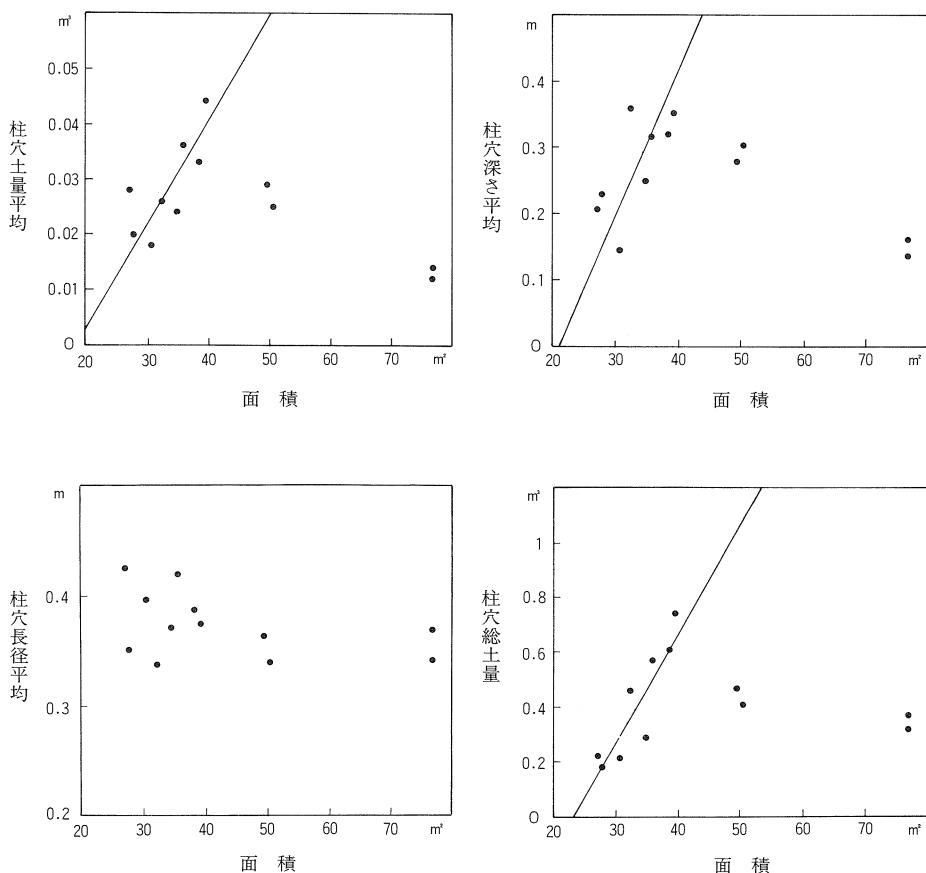
クラスター1 = 柱穴土量が最も大きく柱間距離が最も短い。建物規模は小さい。

クラスター2 = クラスター2-1, 2-3との中間的な柱穴土量、柱間距離をもつ。

建物規模は若干大きい。門2・南12・15である。

クラスター3 = 最も土量が少なく、かつ柱間距離が大きい建物である。建物規模はやや小さい。正方形に近い建物である。南11・13・14であり、全て南辺地区の区画1の建物である。

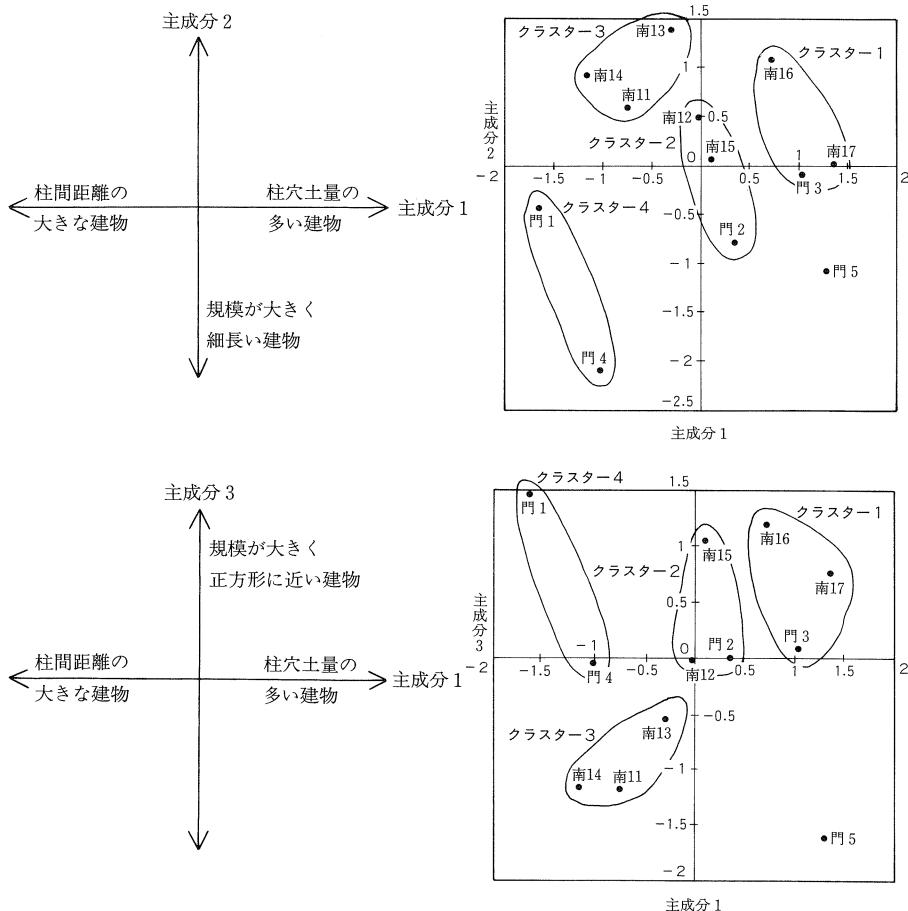
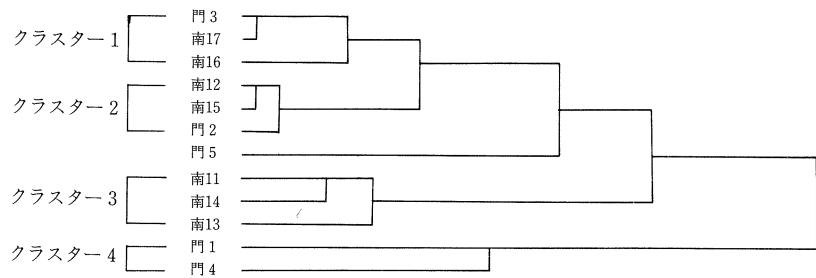
クラスター4 = 建物規模、柱間距離が大きく、柱穴土量の少ない建物である。これら



第54図 建物面積と柱穴規模の相関図

は門前地区の江馬氏下館 I 期と II B 期の建物である。門 1 は総柱式掘立柱建物、門 4 は馬屋である。

まとめ：以上の様に、建物の属性に主成分分析を行い、そこで得られた主成分負荷散布図から変数同士の関係を視覚的に把握した。ついで、主成分散布図で認められた変数同士の関連を相関係数や散布図を用いて明らかにした。その結果から得られた情報をもとにクラスター分析により分類された建物群を説明した。門前地区と南辺地区はその空間の性格が異なり、存続期間も100年以上に及ぶため、当初は主成分分析やクラスター分析の結果が地区毎の建物の性格の差や時期毎に差を反映するのではないかと推定していたが、明確な差はみられなかった。しかし、柱間距離と柱穴の土量の間に明確な相関がみられるなど、建物を構成する属性間の関係を明らかにすることができた。本来はクラスターで分類した建物群に意味を与え、変数間にみられた相関の因果関係を説明する仮説の構築を行うべき



第55図 多変量解析による掘立柱建物の分類

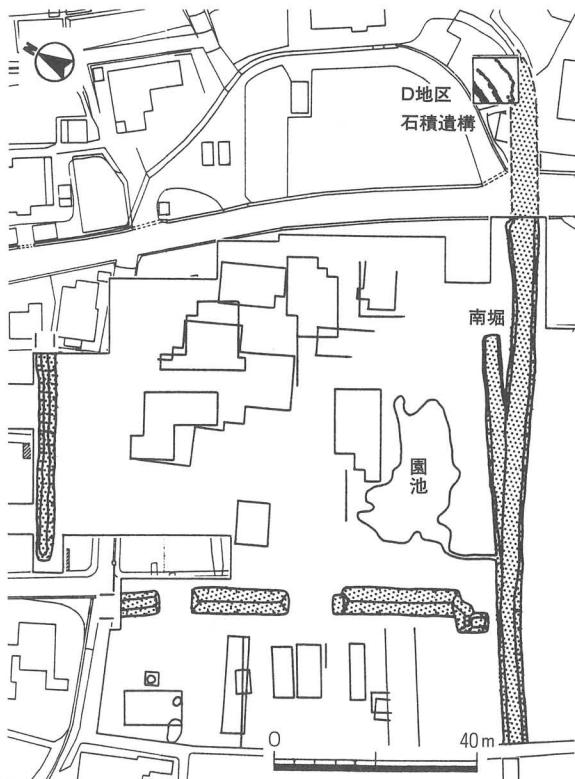
であるが、今回はそこまで踏み込んだ分析を行うことができなかった。今後は建築史的な研究成果などと照らし合わせ、より必然性の高い解釈を導きだすことが必要である。

(石井淳平)

(注)

- 1 それぞれの主成分において、全ての建物の変数の分散のうちの何%が表せるかを示した数値。寄与率の合計が累積寄与率で通常、累積寄与率は70%から80%を越えることが望ましいとされる。
- 2 主成分の係数と変数の相関係数を主成分負荷量という。 $-1 < R < 1$ の値をとり、絶対値が大きいほど相関が高く、正值をとると正の相関関係、負値をとると負の相関関係となる。すなわち、因子負荷量の絶対値の大きい変数ほど主成分得点に反映されやすいと言える。
- 3 この場合は、2組の変数が相関係数 = 0 の母集団から抽出されたと仮定して、その標本の示す分布が起こり得る確率。通常 1 %ないし、5 %以下の場合はほとんど起こり得ないことが起こったとみなし、相関係数 = 0 の母集団から抽出されたという仮定が否定される。したがって、2組の変数の間にはなんらかの相関があると考える。

(d) 石積み (第56~61図)



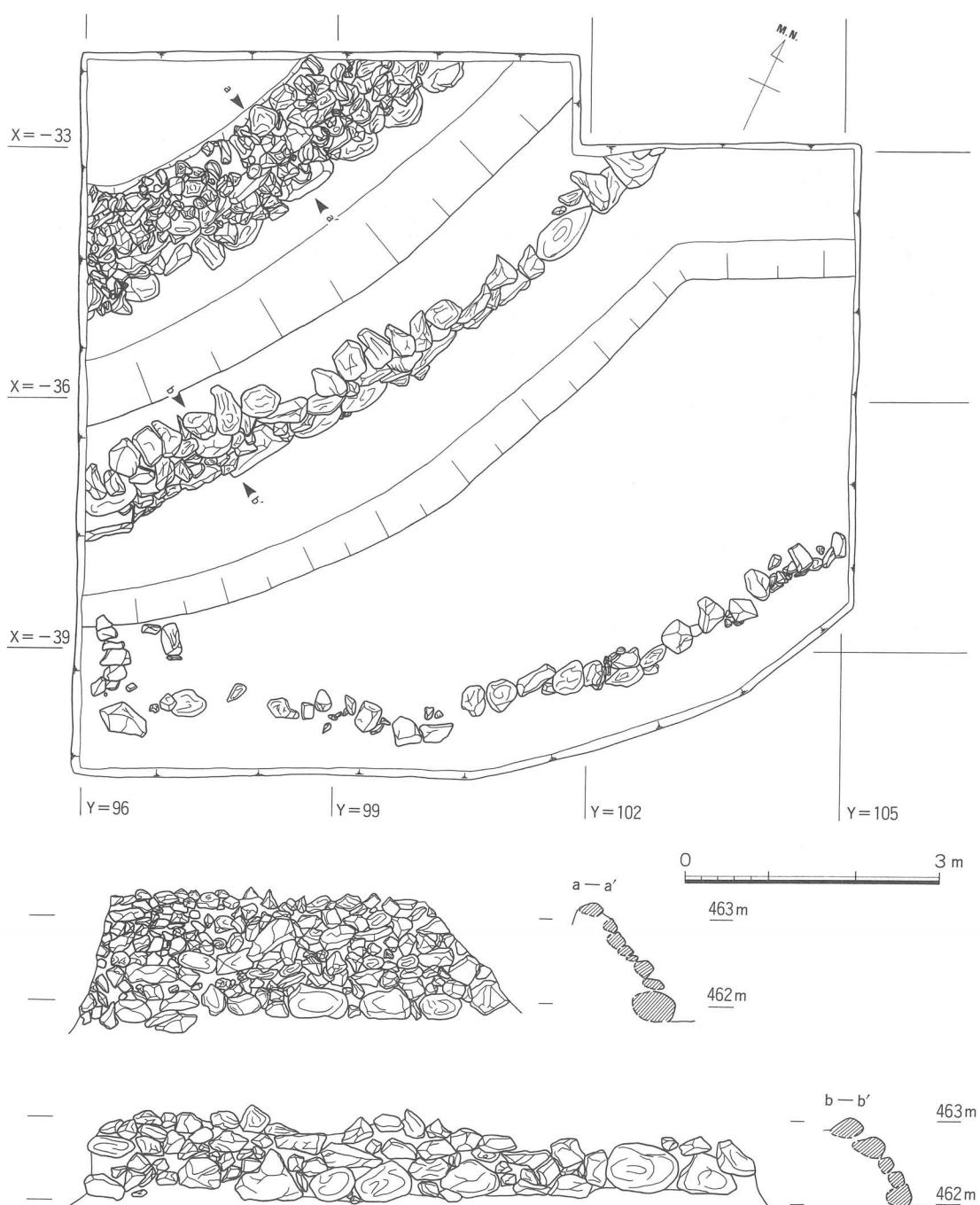
第56図 江馬氏下館の石積み遺構 縮尺1/1,500

本年度の調査では河岸段丘の北西端に沿う二方向の石積みを確認した。江馬氏下館における石積み遺構としては、このほかに1978年度に調査した例があり、また多くの石材を使用した施設として館内部の園池がある。

ここでは各遺構の石材について岩石種と大きさに注目し、その使用法の比較を試みることとしよう。

なお、本文中における石材の寸法は、長径、短径、控え（園池については高さ）の平均値である三軸平均径で示している。

1996年度調査の石積み (図版46・47、第32・59図)：この石積みは居館が廃棄された頃（江馬氏下館II B期末）の整地面を削平して築いており、おそらく近世の耕地化にあわせ



第57図 1978年度調査D地区石積み実測図 縮尺1/80



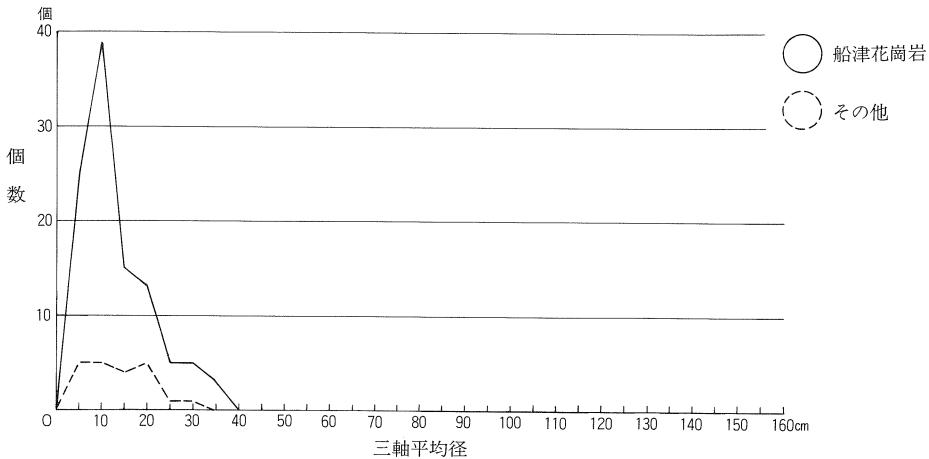
第58図 1978年度調査D地区石積み写真（南から）

て造成したものであると考えられる。一部が崩壊しており、遺存高は残りの良いところで90cm程であった。

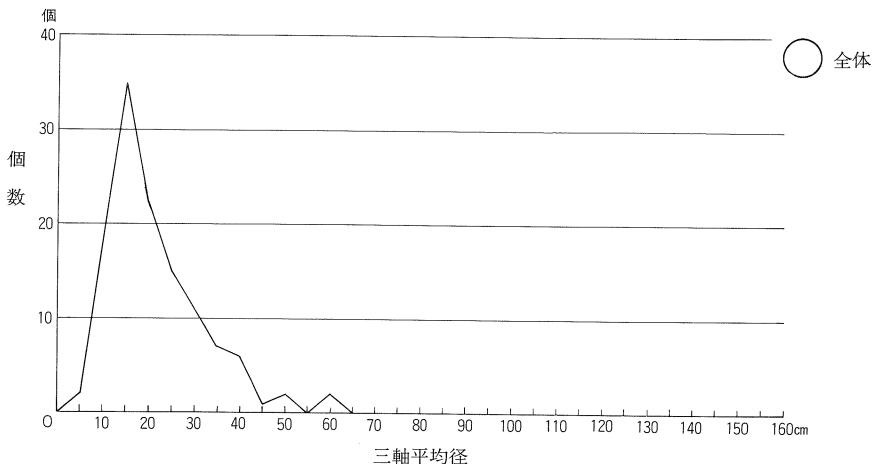
まず岩石種に注目すると、船津花崗岩が77.7%と大部分を占めており、これ以外のほとんどは河床礫とその破片である。岩石種別の石材寸法をみると、船津花崗岩では10cm前後のものが最も多く、15~35cm程のやや大きいものが10個ほどある。そして船津花崗岩以外の岩石では5~20cmのものが定量みられた（第59図）。積み石の主体は寸法20~30cmの石材であり、小破片はそれらの詰石に用いていたようである。

1978年度調査の石積み（第56~58・60図）：館東部の山裾で検出した石積みであり、南堀の延長部分に沿うようにして北方向に湾曲している。3重の石積みが築かれており、高さ1.5m程のものが内側を、高さ1m程のものが外側をめぐっている。最も外側の石積みについては記録類が不十分であった為、データ化できなかった。

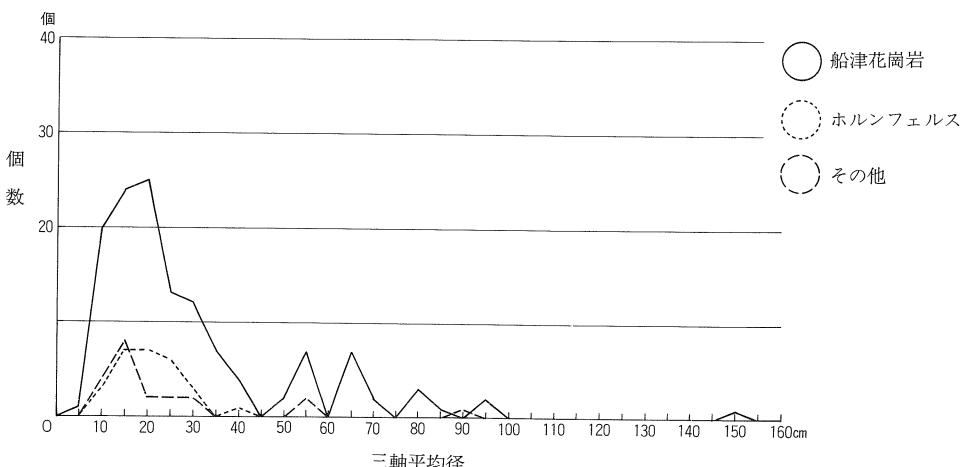
積み石の岩石種に関する記録は存在しないが、当時の写真からは河床礫が多いように見受けられる。使用石材の寸法は15cm前後のものが最も多いが、基底部に用いている25~60cmの大きなものが目立つ。1996年度調査の石積みと比べると、ここではやや大きめの石が多いようである（第60図）。



第59図 1996年度調査：石積み遺構の岩石別三軸平均径



第60図 1978年度調査：石積み遺構の三軸平均径



第61図 1995年度調査：園池景石の岩石別三軸平均径

園池の景石（第56・61図）：1995年度調査では園池地区で検出した景石・礫について石材観察表を作成しており、石材の使用法を分析している（神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室1996）。この成果によると、園池の使用石材は岩石種による使い分けを周到に行っていたと考えられる。すなわち景観上重要な景石には大型の船津花崗岩を使用し、汀石には色彩が鮮やかなホルンフェルス転石を使用していた。また10cm未満の船津花崗岩は撒き石として用いていたようである（第61図）。

まとめ：以上のように個々の遺構について、岩石種とその大きさの関係をみてきた。まず居館の付属施設である1978年度調査石積みと園池については、大型石材の使用という共通点を指摘することができた。また園池では岩石種の使い分けを周到に行っており、このことは各景石の視覚的効果を意識した為と推察される。一方、1996度調査の石積みの石材は小さく、また岩石種による使い分けも見られない。これは造成工事に対する丁寧さの違いによるものであろう。

（滝沢 匡）

2 遺物の考察

本年度の調査地区からは594片・口縁部15.14個体分の中世食器が出土し、江馬氏下館全域における出土総数は4800片・口縁部171.07個体分に達した。江馬氏下館では居館の内外をわける空間の設定が明瞭であり、食器を種類・用途別に計量することによって、遺跡における生活相の違いを把握することが可能である。

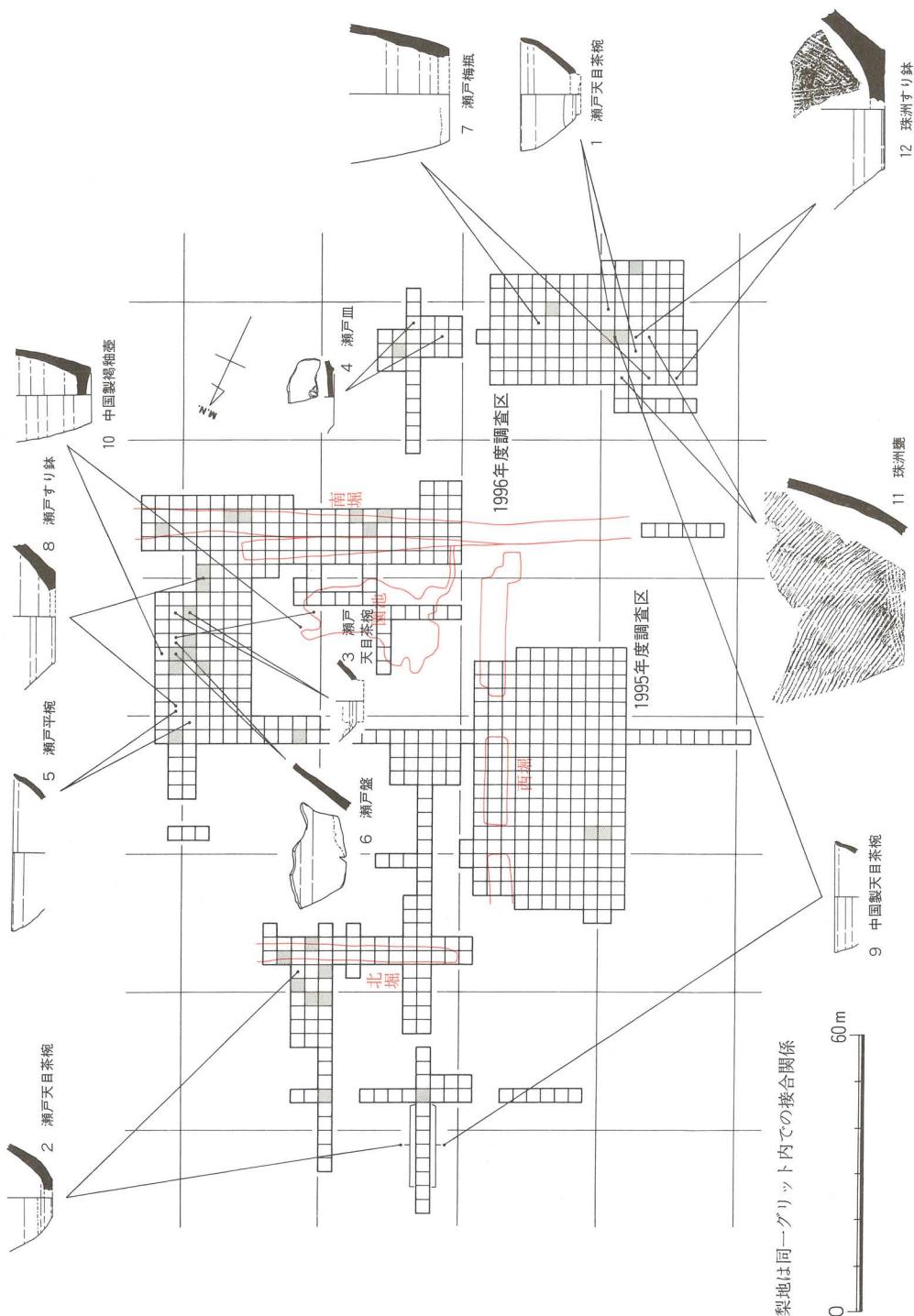
ただし調査で確認できる各遺物の出土状態は一様でなく、その分布には様々な要因が働いていると考えなければならない。具体的には、廃棄された遺物が二次的に移動・散逸することが想定できるであろう。遺跡内での食器様相の違いを理解する場合には、こういった状況をどのように評価していくかが大切な課題である（小野1991b）。

本節では食器類の使用から廃棄に至る過程を考えるために、遺物の接合状況と破片分布の在り方について検討を加えることとしよう。

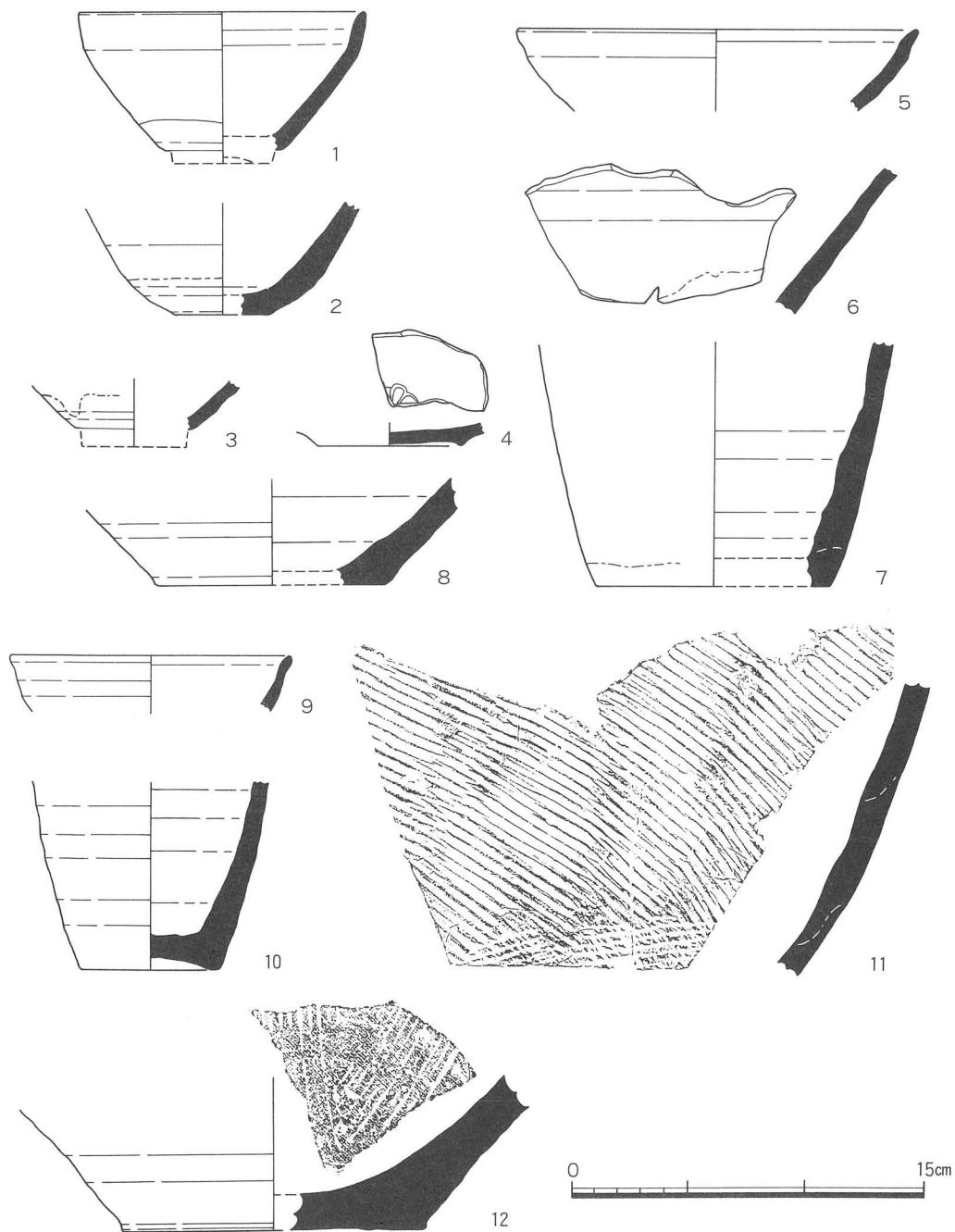
（a）遺物の接合状況（第62・63図）

まず個体識別が容易である陶磁器類の接合状況について考えてみる。接合を確認できた資料は総数2106点のうち僅か40例であった（出土地点の記録が明確なもののみ、第62図）。これらの接合資料は遺跡内で多様に分布しており、ほぼ同地点で接合する例から10m以上も離れて接合する例まである。特に大きく離れていたのは第62・63図-9の中国製天目茶碗であり、南辺地区S I 01と館外北方とに別れて分布していた。この他の多くが未接合の破片であり、遺跡における遺物片の移動がかなり複雑で広範囲に及ぶものであったと推測できる。

こういった状況が生じる要因としては、江馬氏時代における自然災害や整地地業、後世



第62図 江馬氏下館における中世遺物の接合関係図 縮尺1/1,500



第63図 江馬氏下館出土の陶磁器接合資料

(1～8瀬戸美濃, 9中国製天目茶碗, 10中国製褐釉壺, 11・12珠洲) 縮尺1/3

の耕地化に伴う景観の変化などがあったであろう。例えば南辺地区S X01には被熱した礫・陶磁器が投棄されていたが、遺構付近は火をうけておらず、これは他所で焼かれたものを人為的に移動・投棄した結果と考えることができた。同じ様な投棄は館北堀を埋める際にも行っており（神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室1995），館を廃棄する江馬氏下館II B期末に火事場整理のような行為があったことが想定できる。このように考えた場合、遺跡内に分布する食器が本来それぞれの地点で使用された道具であったと認識するのは難しいであろう。

（b）遺物の出土状況（第64～第68図、第14～19表）

前述したような資料の制約を理解しつつ、遺跡内における食器様相の違いを検討することとしよう。この課題については遺跡の各地点における食器出土量と食器組成を比較することが基礎的な方法である（小野1984 b）。

まず食器の出土量については、破片数をもとにした等量線図を作成して、その分布傾向を把握することとした。図化は等高線自動計算ソフト（TN-CONTOUR Ver. 3）を用いて行い、各種食器の出土量に応じて等量線を設定した。

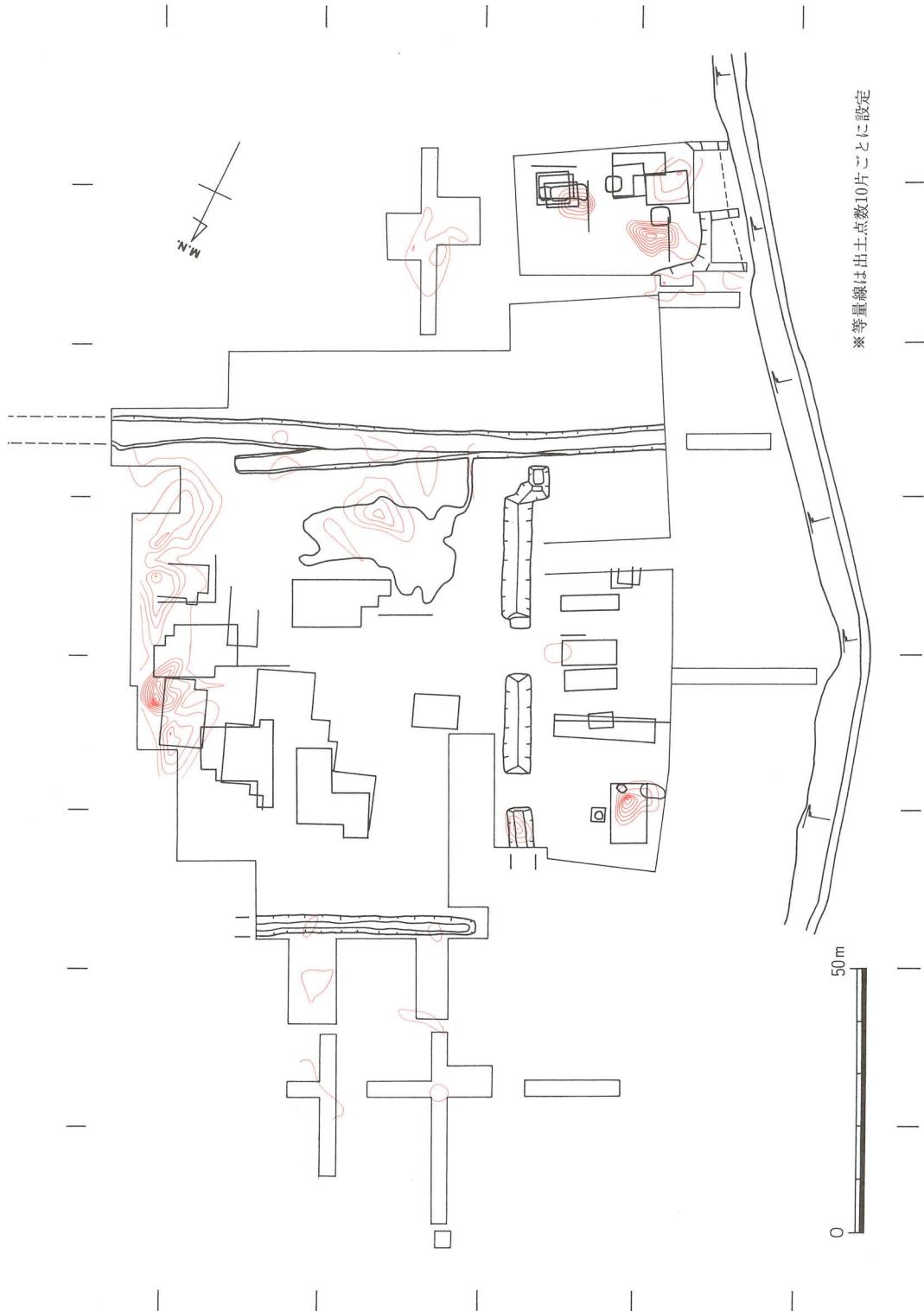
全体的な傾向としては館内外の広い範囲から食器が出土しており、とりわけ館内部に偏って出土する傾向が強い。また館内での分布については、いわゆるハレ向の空間に少なく、台所や常御殿などのケの空間に多い傾向がある（第64図）。こうした傾向は、土師器皿の出土状況として特に顕著にあらわれており、館外ではいくつかの遺構ごとに若干まとまる程度であった（第65図）。これに対して、国産無釉陶器や中国陶磁は館外から多量に出土していることが指摘できる（第66～68図）。

次に各遺構からの出土品に資料を絞り、生産の場に力点をおく種類別の食器組成、使用の場に力点をおく用途別の食器組成を算出して比較を行った（宇野1992）。遺構単位では出土量の多寡に関わらず、土師器皿の占める比率が高いことがわかる。館内外では陶磁器類の構成比率が異なっており、館内では瀬戸美濃の食膳具の比率が高く、中国陶磁器の食膳具を上回る状況が一般的にみられた（第14～19表）。

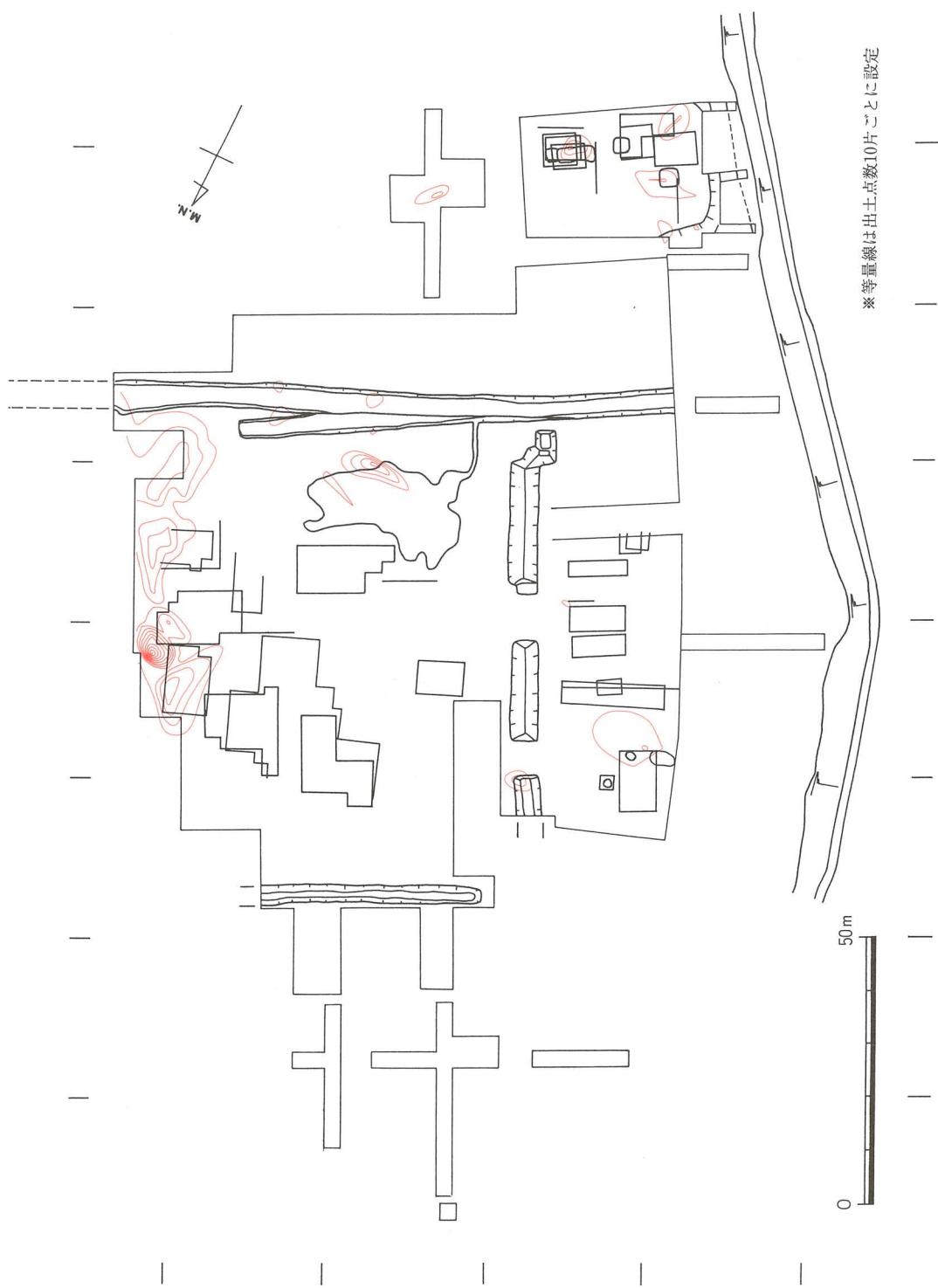
本遺跡における食器様相は居館の内外で明確に区分することができ、特に土師器皿の出土量と陶磁器類の構成比率が明確に相違していた。同じ遺跡内においてこのような差異が生じる理由は、それぞれの空間がもった機能差・階層差に基づくとするのが最も妥当な解釈であろう（小野1991 b）。例えば中世の土師器皿は儀礼的食器であり（藤原1988）、館内は土器を用いた儀礼祭祀が盛んな公的空間であったと考えられる。

なお門前地区の竈・土坑の廃棄例では土器比率が低く珠洲の比率が高いが、いずれも館が本格的に整備される前の江馬氏下館 I 期に遡る資料であり、土器を用いる儀礼祭祀が盛んになった江馬氏下館II 期の段階と区分できるであろう。

江馬氏城館跡III

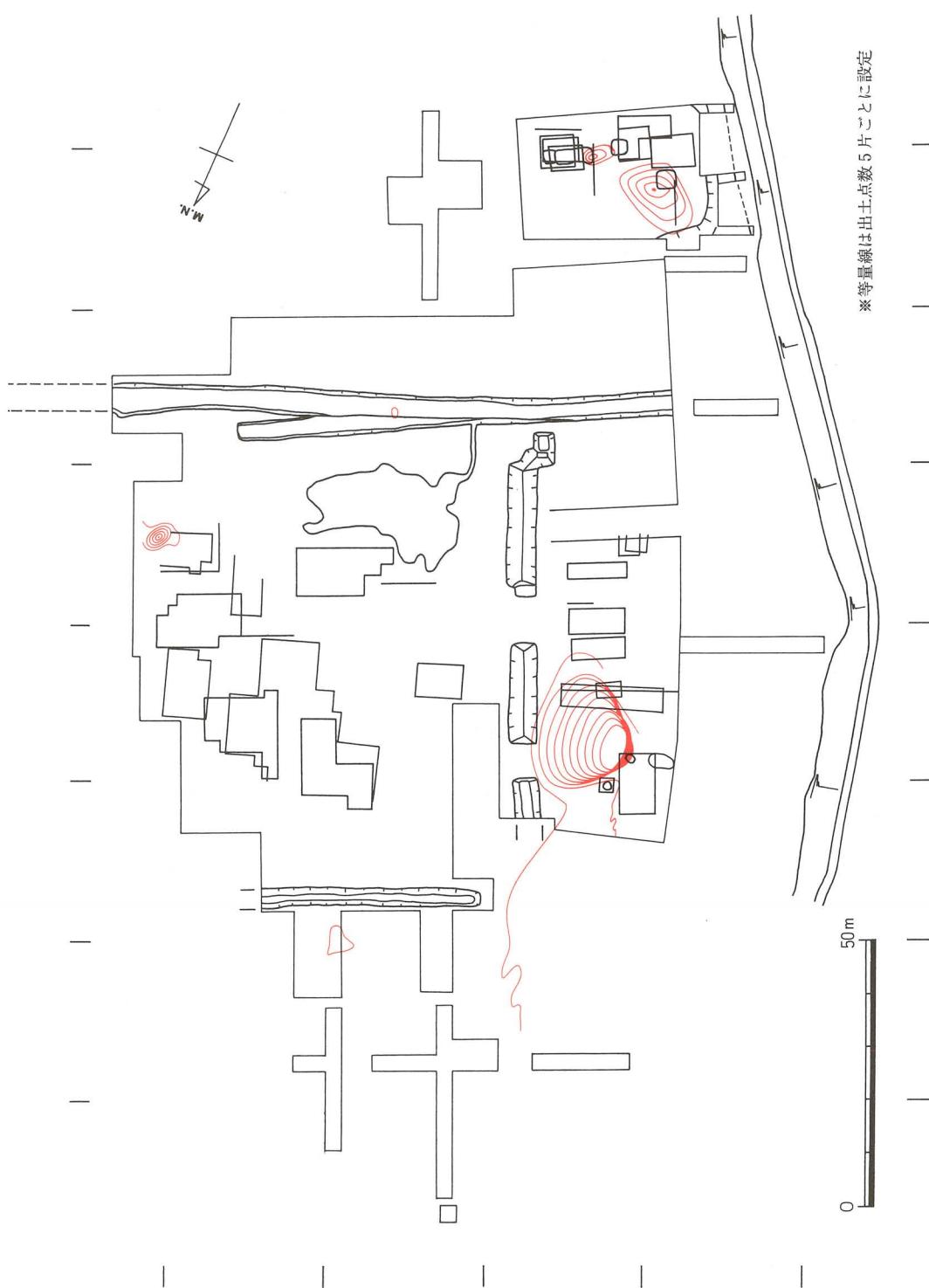


第64図 江馬氏下館における中世食器の出土状況 縮尺1/1,250

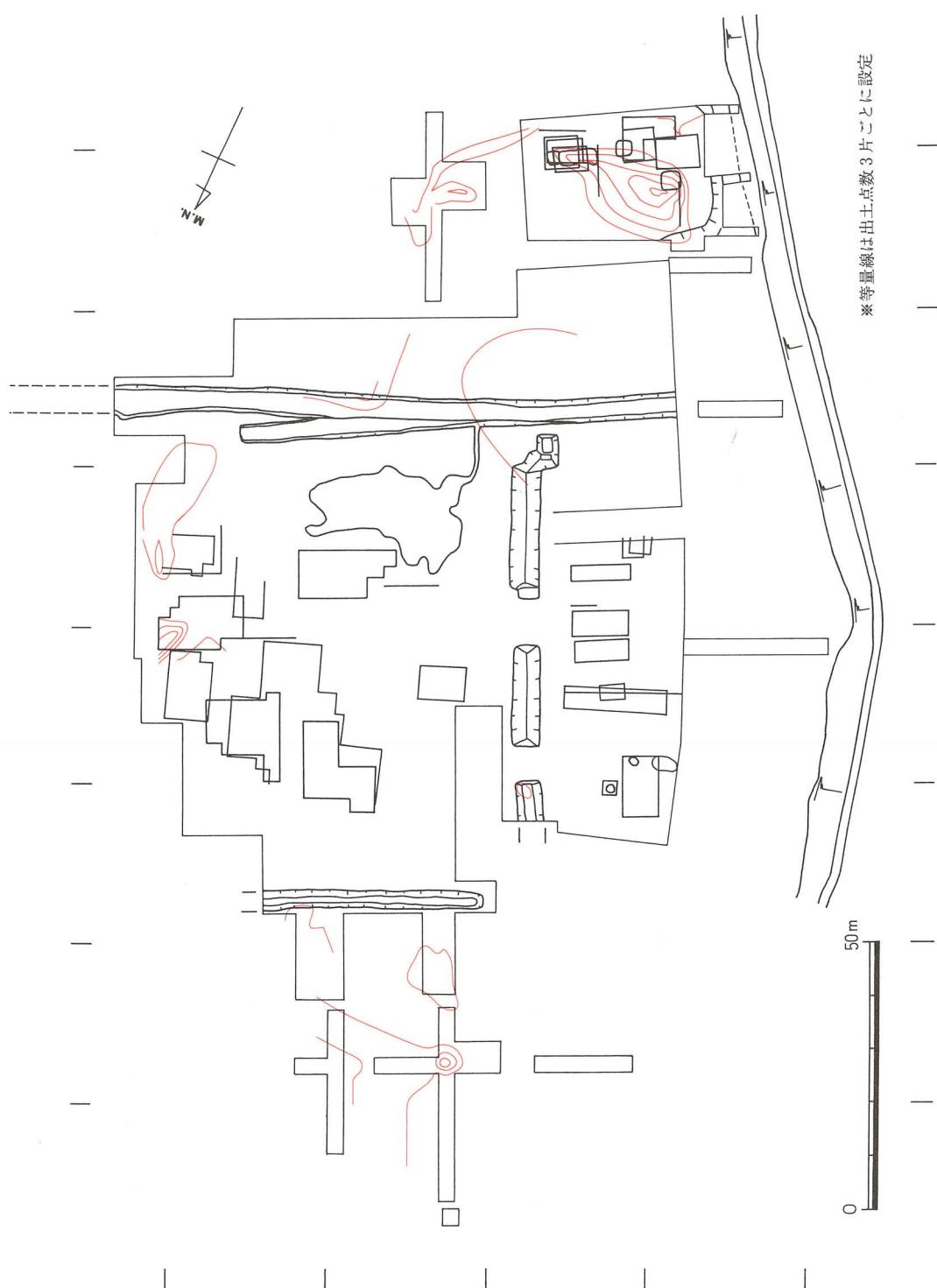


第65図 江馬氏下館における土師器皿の出土状況 縮尺1/1,250

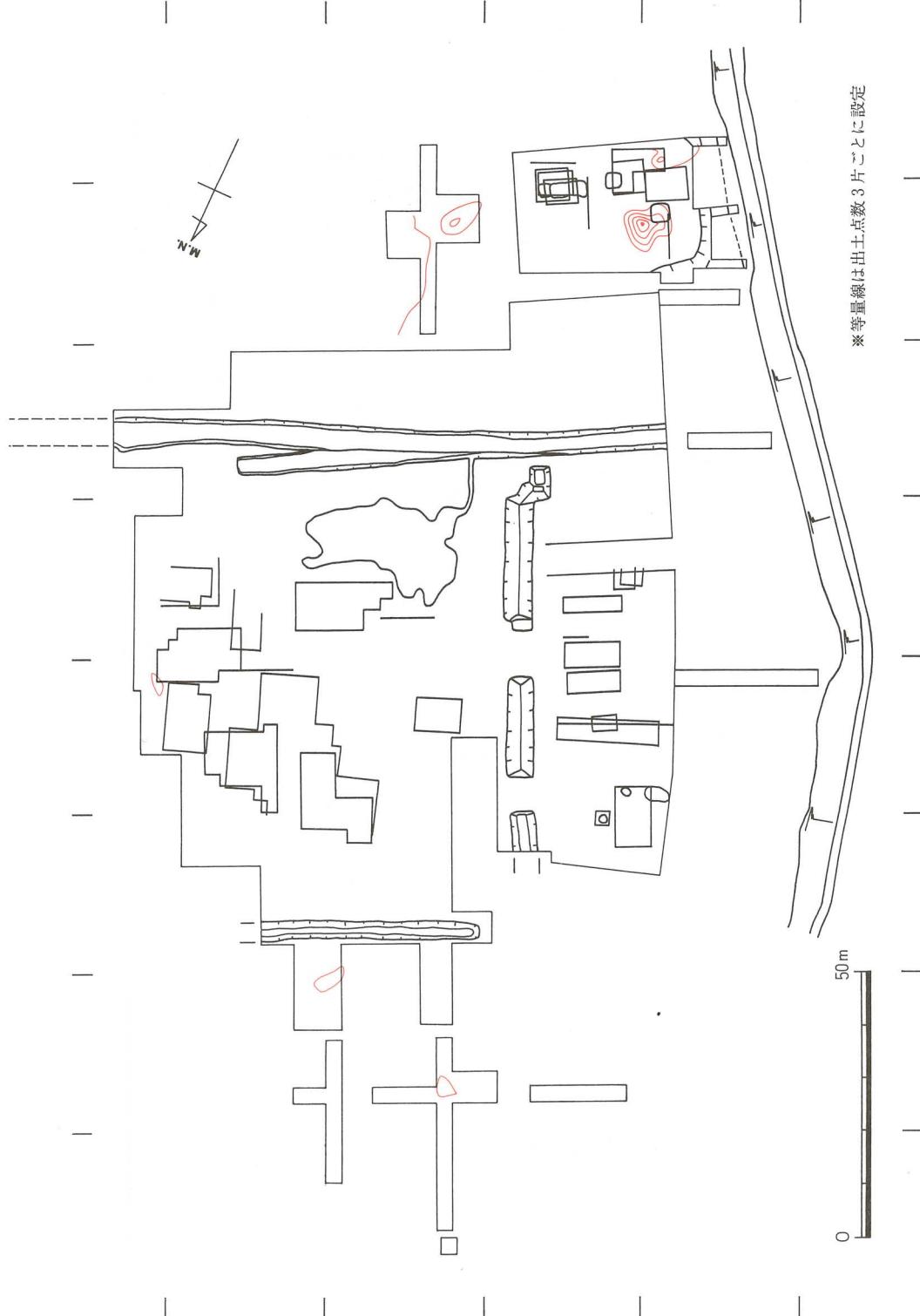
江馬氏城館跡III



第66図 江馬氏下館における国産無釉陶器の出土状況 縮尺1/1,250



第67図 江馬氏下館における国産施釉陶器の出土状況 縮尺1/1,250



第68図 江馬氏下館における中国陶磁器の出土状況 縮尺／1,250

第14表 江馬氏下館：堀跡毎の種類・器種別食器組成

種類・器種／堀跡	南堀(旧堀)	南堀(新堀)	西堀(箱堀)	北堀
土 師 器 盆 小 計	1.82(76) 1.82[95.3%]	7.98(139) 7.98[79.7%]	0.64(63) 0.64[78.0%]	2.15(29) 2.15[43.5%]
瓦 器 火鉢・風炉 小 計	0.03(4) 0.03[1.6%]	0.08(7) 0.08[0.8%]	0.13(6) 0.13[15.9%]	0.31(2) 0.31[6.3%]
珠 洲 壺 ・ 甕 すり鉢 小 計	(4) (1) ※	0.94(32) 0.06(2) 1.0 [10.0%]	(1) ※	0.54(12) 0.05(2) 0.59[11.9%]
瓷器系陶器 甕 小 計	(4) ※	(6) ※		(5) ※
白瓷系陶器 梗 小 計	(2) ※			
瀬戸 美濃 天目茶椀 椀 皿 盤 壺・瓶 すり鉢 卸皿 不明 小 計	0.06(1) (1) (2) (2) 0.12(14) (2) (2) 0.06[3.1%]	0.46(10) 0.03(2) 0.04(3) (5) 0.12(14) (2) 0.65[6.5%]	(1) (1) (1) (1) (3) 0.05[6.1%]	0.5 (2) 0.18(2) 0.47(6) 0.18(5) (2) 0.13(2) 0.24(1) (1) 1.7 [34.4%]
中国陶磁器 青磁 梗 皿 白磁 梗 皿 青花 皿 小 計	(3) (1) (1) (2) 0.03(1) ※	0.23(9) (1) (1) 0.04(1) 0.03(1) 0.3 [3.0%]	(1) (1) ※	0.13(8) 0.06(1) 0.19[3.9%]
総 計	1.91個体分 102破片	10.01個体分 235破片	0.82個体分 79破片	4.94個体分 80破片

(口縁部計測法による。括弧外は個体数、(括弧内)は破片数である。(括弧内)には堀跡毎の個体数比率を示した。
※は存在するが個体数比率が数値として表れないもの。)

第15表 江馬氏下館：堀跡毎の用途・種類別食器組成

用途・種類／堀跡	南堀(旧堀)	南堀(新堀)	西堀(箱堀)	北 堀
食 膳 具 土 師 器	1.82(76) (2)	7.98(139) 0.06(4) (5)	0.64(63) 0.05(4) (2)	2.15(29) 1.33(15) 0.19(9)
白瓷系陶器				
瀬 戸 美 濃				
中国陶磁器				
小 計	1.88[98.4%]	8.81[88.0%]	0.69[84.1%]	3.67[74.3%]
貯 藏 具 珠 洲	(4)	0.94(32)	(1)	0.54(12)
瓷器系陶器	(4)	(6)		(5)
瀬 戸 美 濃	(2)	(5)		(2)
小 計	※	0.94[9.4%]	※	0.54[10.9%]
調 理 具 珠 洲	(1)	0.06(2) 0.12(14)	(3)	0.05(2) 0.37(3)
瀬 戸 美 濃				
小 計	※	0.18[1.8%]	※	0.42[8.5%]
そ の 他 瓦 器	0.03(4)	0.08(7)	0.13(6)	0.31(2)
瀬 戸 美 濃				
小 計	0.03[1.6%]	0.08[0.8%]	0.13[15.9%]	0.31[6.3%]
総 計	1.91個体分 102破片	10.01個体分 233破片	0.82個体分 79破片	4.94個体分 79破片

(口縁部計測法による。括弧外は個体数、(括弧内)は破片数である。〔括弧内〕には堀跡毎の個体数比率を示した。
※は存在するが個体数比率が数値として表れないもの。)

(c) 小 結

まず接合状況の分析からは、館内外で出土する遺物破片のほとんどが原位置から移動・散逸している可能性を指摘できた。遺跡内においては様々な営力によって複雑な破片の移動があったようであり、中には火事場整理のような人為的行為の結果として動かされたものもあったと考えられる。このような遺物の移動状況は鎌倉や一乗谷といった都市遺跡でよくみられる現象である（河野真知郎1989、福井県教育委員会・福井県立朝倉氏遺跡資料館1983）。

こういった移動状況を前提にすることによって、遺跡内における食器様相の違いをより具体的に解釈することが可能である。計量分析の成果からは食器の違いが場の機能や居住者の階層性をよく反映しているようであり、これらが無作為な移動の結果であったとは考えにくい。おそらくは食器を廃棄する過程においてまで、館内外を区分する境界意識が強く働いていたのであろう。

(中田書矢)

〈付記〉

小稿をなすにあたり、特に（a）について国立歴史民俗博物館・小野正敏氏より種々の御教示を受けました。末筆ながら、記して感謝の意を表します。

第16表 門前地区：遺構毎の種類・器種別食器組成

種類・器種／遺構	門前区画－S X01	門前区画－S K73
土 師 器 皿 小 計	0.07(2) 0.07[8.4%]	0.45(38) 0.45[35.2%]
珠 洲 壺 ・ 甕 すり鉢 小 計	0.63(72) 0.13(3) 0.76[91.6%]	0.81(12) 0.81[63.3%]
瀬 戸 美 濃 盤 小 計		0.02(2) 0.02[1.5%]
中国陶磁器 青磁 梗 小 計		(1) ※
総 計	0.83個体分 77破片	1.28個体分 53破片

(口縁部計測法による。括弧外は個体数、(括弧内)は破片数である。(括弧内)には遺構毎の個体数比率を示した。※は存在するが個体数比率が数值として表れないもの。)

第17表 門前地区：遺構毎の用途・種類別食器組成

用途・種類／遺構	門前区画－S X01	門前区画－S K73
食 膳 具 土 師 器 瀬 戸 美 濃 中国陶磁器 小 計	0.07(2) 0.02(2) (1) 0.07[8.4%]	0.45(38) 0.02(2) (1) 0.47[36.7%]
貯 藏 具 珠 洲 小 計	0.63(72) 0.63[75.9%]	
調 理 具 珠 洲 小 計	0.13(3) 0.13[15.7%]	0.81(12) 0.81[63.3%]
総 計	0.83個体分 77破片	1.28個体分 53破片

(口縁部計測法による。括弧外は個体数、(括弧内)は破片数である。(括弧内)には遺構毎の個体数比率を示した。※は存在するが個体数比率が数值として表れないもの。)

第18表 南辺地区：遺構毎の種類・器種別食器組成

種類・器種／遺構	区画1-S X01	区画2-S I01	区画2-ブロック1	区画2-ブロック2	区画2-ブロック3
土 師 器 盆 小 計	2.36(58) 2.36[80.3%]	1.9 (37) 1.9[52.0%]	1.93(73) 1.93[79.4%]	1.48(33) 1.48[98.7%]	0.28(25) 0.28[84.8%]
瓦 器 火鉢・風炉 小 計	(4) ※				(1) ※
珠 洲 壺・甕 すり鉢 小 計	(3) ※	0.01(9) 0.15(7) 0.16[4.4%]	(7) 0.03(3) 0.03[1.2%]	(4) ※	(2) ※
瓷器系陶器 甕 小 計	0.03(17) 0.03[1.0%]	(22) ※	(3) ※		
白瓷系陶器 梗 小 計		(1) ※			
瀬戸 美濃 天目茶碗 碗 皿 盤 壺・瓶 すり鉢 卸目付大皿 卸 皿 香 炉 花 瓶 不 明 小 計	0.06(2) 0.21(15)	(1) 0.15(6) 0.03(5) 0.54(6) 0.03(3) 0.07(4) 0.08(1) 0.16(3) 0.09(2) (4) 0.55[18.7%]	(2) (1) (2) (2) 0.07(4) 0.07(1) 0.12(1) (1) (2)	(2) 0.02(1) (1) (1) 0.05(1) 0.05(1)	(1)
中国陶磁器 天目茶碗 青磁 梗 盤 白磁 梗 皿 青花 皿 小 計	(2)	0.09(1) 0.15(10) (2) 0.08(1) 0.14(2) 0.05(2) 0.51[14.0%]	0.21(11) (1) (2)	(1) (1)	(2)
総 計	2.94個体分 104破片	3.65個体分 125破片	2.43個体分 117破片	1.50個体分 44破片	0.33個体分 33破片

(口縁部計測法による。括弧外は個体数、(括弧内)は破片数である。(括弧内)には遺構・ブロック毎の個体数比率を示した。※は存在するが個体数比率が数値として表れないもの。)

第19表 南辺地区：遺構毎の用途・種類別食器組成

用途・種類／遺構	区画1-S X01	区画2-S I 01	区画2-ブロック1	区画2-ブロック2	区画2-ブロック3
食 膳 具 土 師 器	2.36(58)	1.9 (37) (1)	1.93(73)	1.48(33)	0.28(25)
白 瓷 系 陶 器					
瀬 戸 美 濃	0.06(2) (2)	0.18(12)	(6)	0.02(4) (2)	(1) (2)
中 国 陶 磁 器		0.51(18)	0.21(14)		
小 計	2.42[82.3%]	2.59[71.0%]	2.14[88.1%]	1.50[100%]	0.28[84.8%]
貯 藏 具 珠 洲		0.01(9) (22)	(7)	(4)	(2)
瓷 器 系 陶 器	0.03(17)		(3)		
瀬 戸 美 濃	0.21(15)	0.54(6)	(2)	(1)	
小 計	0.24[8.2%]	0.55[15.1%]	※	※	※
調 理 具 珠 洲	(3)	0.15(7)	0.03(3)		
瀬 戸 美 濃	0.28(2)	0.11(4)	0.14(5)		0.05(1)
小 計	0.28[9.5%]	0.26[7.1%]	0.17[7.0%]		0.05[15.2%]
そ の 他 瓦 器	(4)				(1)
瀬 戸 美 濃		0.25(5)	0.12(2)		
小 計	※	0.25[6.8%]	0.12[4.9%]		※
総 計	2.94個体分 103破片	3.65個体分 121破片	2.43個体分 115破片	1.50個体分 44破片	0.33個体分 32破片

(口縁部計測法による。括弧外は個体数、(括弧内)は破片数である。(括弧内)には遺構・ブロック毎の個体数比率を示した。※は存在するが個体数比率が数値として表れないもの。)

3 周辺景観の考察

本年度の発掘調査により、江馬氏下館と旧街道（上宝道）との関係がより注目されるものになった。ここでは文献・絵図等の諸記録から、居館と街道をとりまく周辺景観の在り方について考えていくたい。

(a) 江馬氏下館跡周辺の近世村落の復元（第69～71図、第20表）

本年度の発掘調査の結果、街道際まで館の施設が広がり、江馬氏下館と街道との関わりがより注目すべきものとなった。また、下館の施設が現在の史跡指定地の外側に、更に広がることが確実になった。

そこで、下館の立地とその施設の広がりを推定する手掛かりを得るため、史料の収集と、土地改良工事前、また下館を南北に横切る町道建設前の下館跡周辺の状況、屋号・通称名等についての聞き取り調査を行い、下館跡周辺の近世村落の復元を試みた。

なお、聞き取り調査に際しては、下館跡周辺の神岡町殿地区に現在居住しておられる、またはかつて居住していた、明治・大正生まれの方々を中心に、以下の方々にご協力いただいた。

聞き取り調査：中田康孝（明治44年、1911年生）、川上定義（昭和9年、1934年生）

協力者 林政夫（大正12年、1923年生）、新家定夫（昭和9年、1934年生）

新家ハル（明治42年、1909年生）、中家良雄（大正9年、1920年生）

都竹清隆（昭和17年、1942年生） 以上、神岡町殿

関屋鉄男（昭和11年、1936年生） 神岡町坂巻

関屋利三（大正5年、1916年生） 神岡町朝日町

（順不同・敬称略）

近世殿村の景観復元：これまでには、絵図面がないため元禄7年（1694年）の元禄検地帳で確認できる字名・孫字名の正確な位置を知ることができなかつたが、今回の資料調査で第69図に示した絵図が見つかった。この絵図はトレーシングペーパーに墨で写し取ったものであり、本来の図がどのようなものであるか不明であるが、描かれた様子からは幕末頃のものと推定できる。第70図に第69図の絵図の屋敷地・寺社の位置とその名前、道路・水路を写した。道路・水路の区別は聞き取り調査の結果などによつた。括弧内は字名である。字名と下館の遺構との関係は、1994年度発掘調査報告書の小島道裕氏の論考に詳しい（小島1995）。この絵図から、屋敷地の位置とその住人の名前が確認できる。第20表に絵図と元禄検地帳の名前の対応をまとめた。元禄検地帳に記す名前が絵図においても確認できることから、元禄検地帳の屋敷地小字名の位置が復元可能となった。絵図でしか確認できない名前があるが、これらは元禄検地以後に殿村に移ってきたものであろう。以上の名前の対応と聞き取り調査の結果から、第71図に屋敷地小字名、寺社の位置、街道などの殿村の近世村落の景観を復元した。

殿段丘の段丘面は、山際南端から山に沿つて東西に幅狭く、南北に細長い地形であり、南端から北に約700mの辺りで西にむかって大きく開ける。

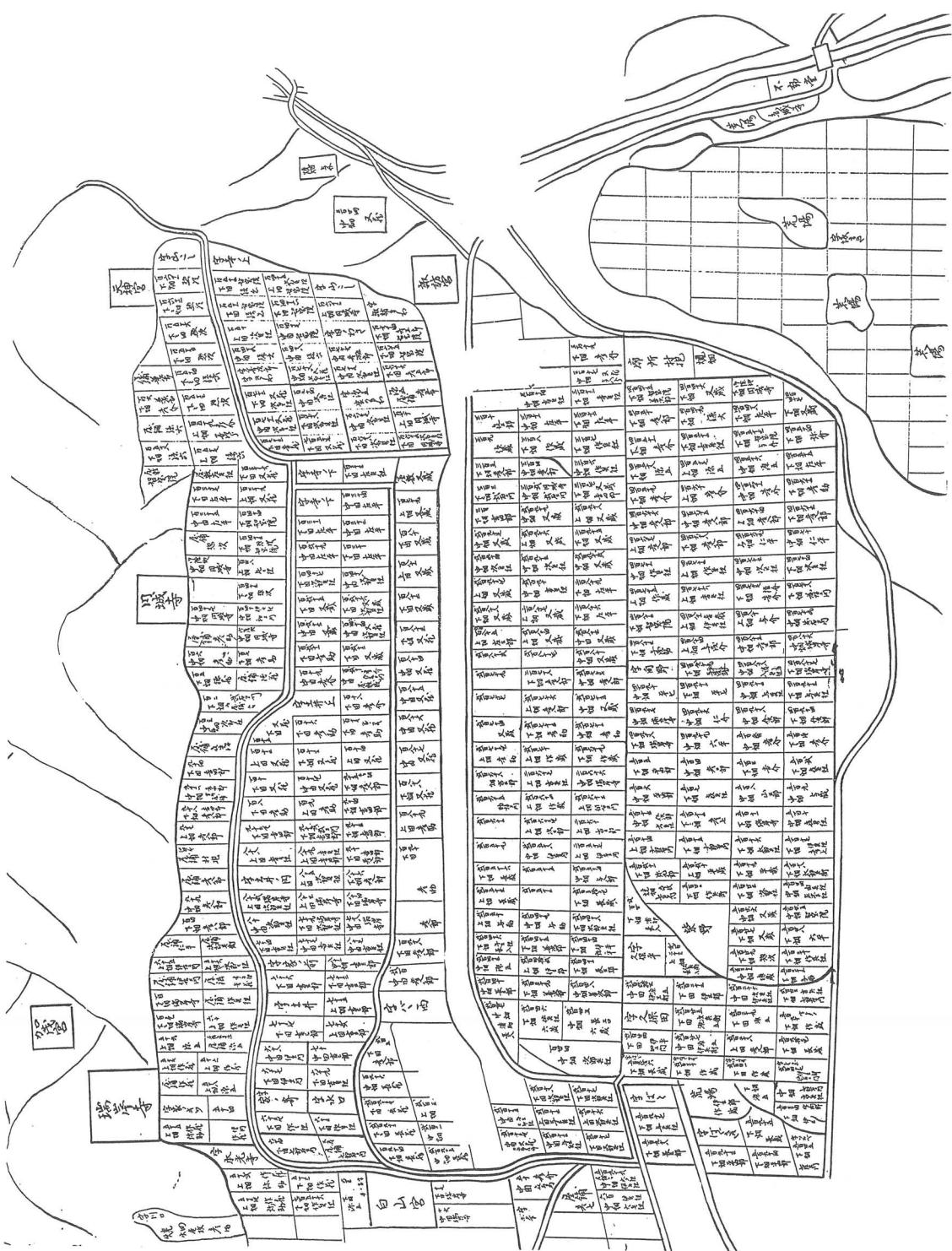
有峰街道と越中東街道を結ぶ脇街道である上宝道が、段丘斜面中位を南北に通過している。段丘面を南北に通過する道は、山際の段丘南端部と、段丘が西へ大きく広がるあたりで北に廻り込んでから北西部の段丘斜面下で、それぞれ上宝道と合流する。

近世殿村の集落は段丘面を通過する道に沿つて、その東側山際に広がつてゐる。上宝道沿いにも2軒確認できる。

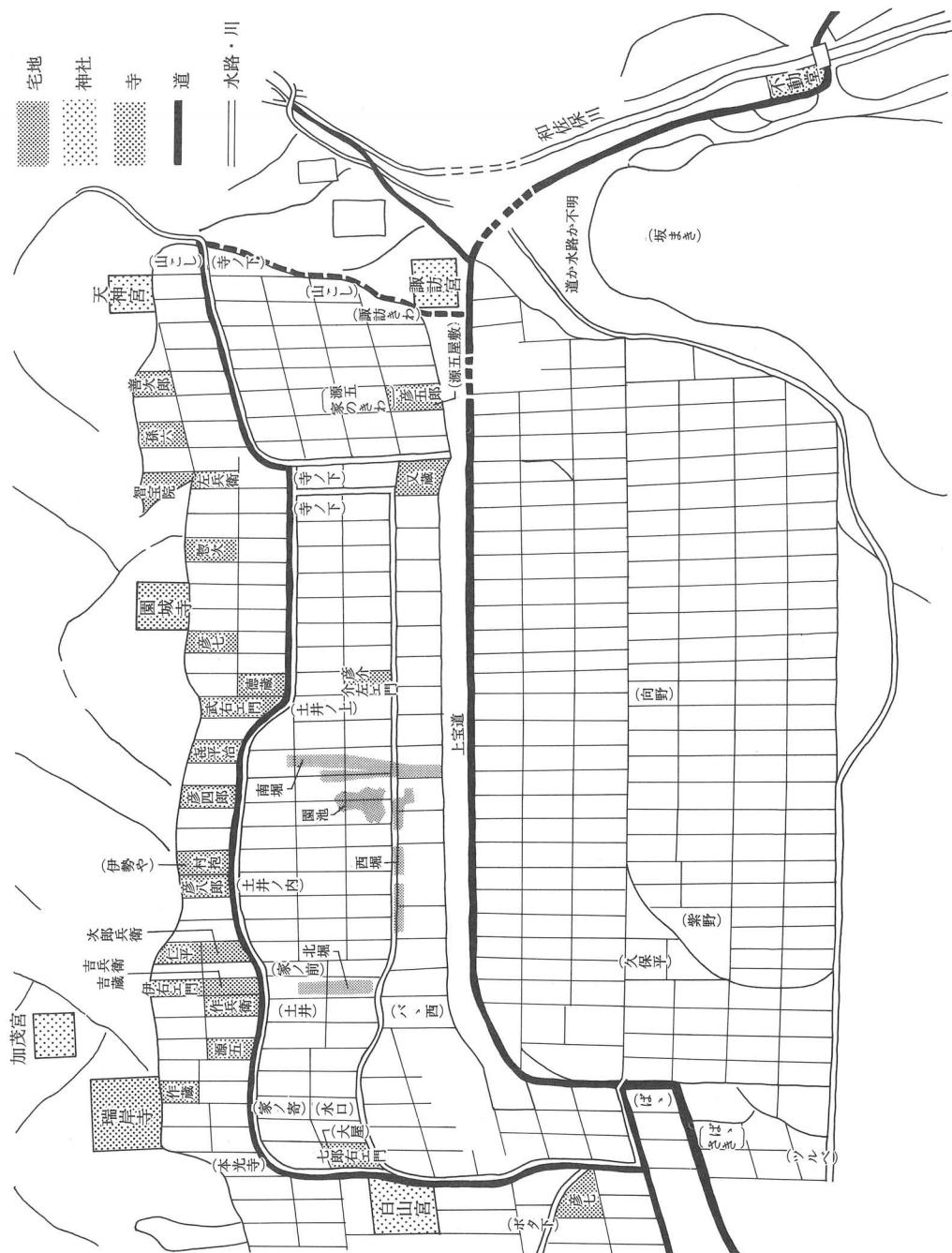
集落の南端部、段丘端部で道に接して天神宮が、この道と上宝道との合流点に南接して諏訪宮がある。集落の北端部、北に下る道との分岐点に北接して、白山宮がある。加茂宮と瑞岸寺は、集落の北東部、山裾の高台に位置し、集落中央部には園城寺がある。

段丘面を通過する道の西側は、段丘端部まで田や畠が広がつてゐたようである。

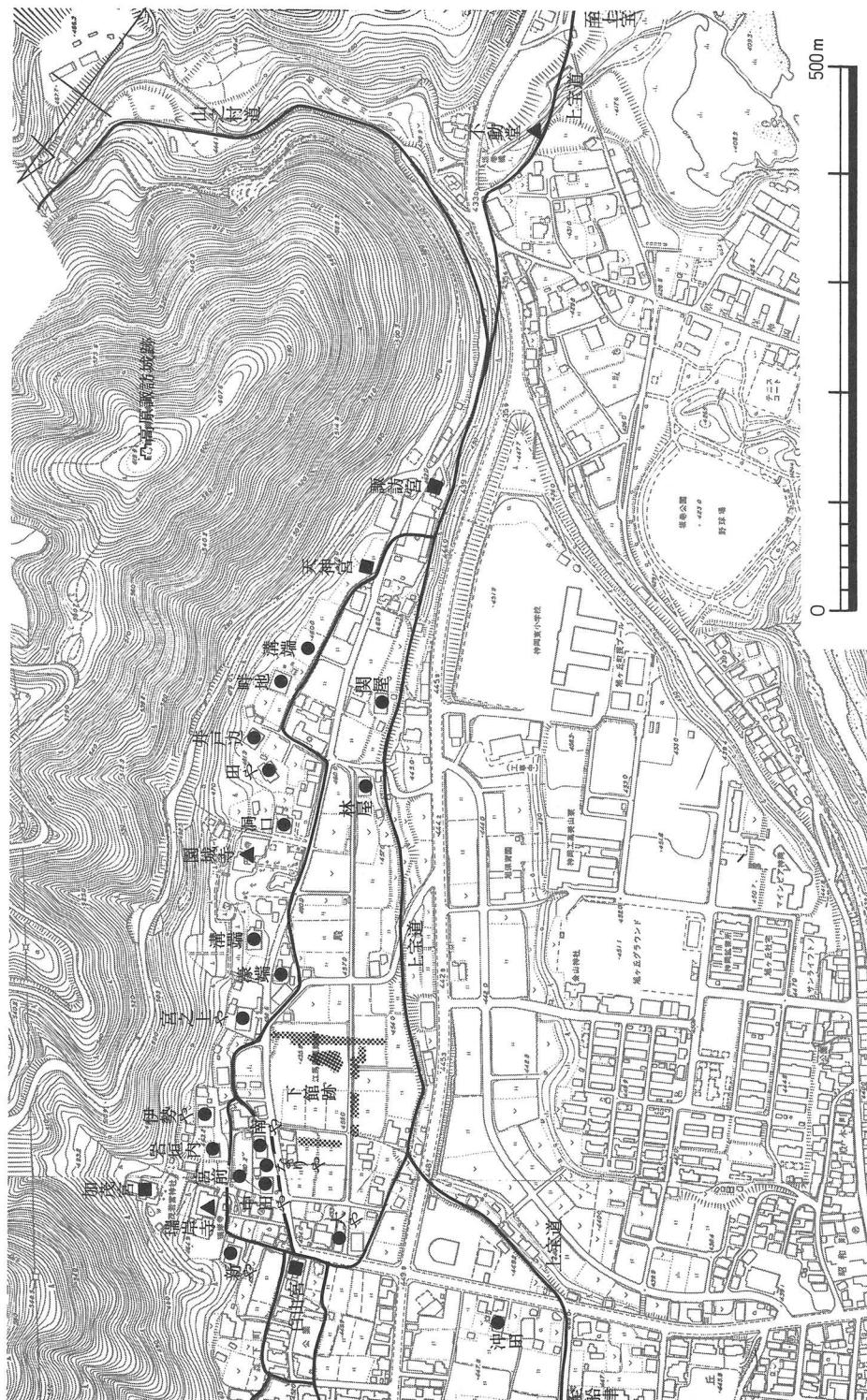
近世の殿村の景観と江馬氏下館との関連：以下で近世殿村の景観と、中世の江馬氏下館との関連について検討しよう。下館との関連については推定の域を出ないが、以上に復元



第69図 吉城郡高原郷阿曾布村殿組繪図



第70図 吉城郡高原郷阿曾布村殿組絵図トレース図（括弧内は小字名）



第71図 江馬氏下館跡周辺の近世村落復元図 縮尺1/6,500

第20表 絵図と元禄検地帳に記す名前の対応表

番 号	江戸末年の殿組絵図に記されている名前 (括弧内は字名)	元禄検地帳（元禄7年、1694年）に記されている	
		名 前	屋敷地小字名
1	作蔵	作蔵	新や
2	源五	—	
3	作兵衛	作兵衛	中田や
4	吉兵衛	吉兵衛	なりや
	吉蔵	吉蔵	
5	伊右衛門	伊右衛門	宮前
6	次郎兵衛	次郎兵衛	南屋
7	仁平	仁平	岩垣内
8	彦八郎	彦八郎	伊勢や
9	(伊勢屋)村抱え		
10	吉四郎	—	
11	喜平治	喜平治	宮之上や
12	武右エ門	—	
13	徳蔵	徳蔵	濠端
14	彦助	彦助	溝端
15	惣治・山平	惣治	洞口
16	左兵衛	左兵	田や
17	智宝院	雲慶院	井戸辺
18	孫六	孫六	畔地
19	善次郎	善次郎	溝端
20	(源五)彦五郎	源五	閑屋
21	又蔵	又蔵	林屋
22	彦介	—	
23	(大屋)七郎左衛門	七郎左衛門	大や
24	彦七	彦七	沖田

したように、近世の殿村は、山際に宅地がある以外は耕地になっており、その景観の大きな変化は、下館に伴うものであると考えられよう。

段丘面の道沿いの屋敷地小字名で注目できるものには、「濠端」・「溝端」がある。「濠端」・「溝端」は発掘調査で確認した南堀の南東方向にあり、下館の名残を示したものと言えよう。小島氏が指摘している田畠の小字名も含め、近世の殿村の地名には下館跡の名残が色濃く残っているようである。

上宝道沿いでは下館の南方向に屋敷地小字名「林屋」・「閑屋」がある。「閑屋」については、すでに服部英雄氏が、下館が閑所を設け、閑銭を徴収していたことを示すものである可能性があり、武家居館が街道を意識して立地している例であるとしている（服部1995）。下館周辺では館と関係した小字名が多く残っていることを考え合わせれば、服部英雄氏の

指摘は妥当なものといえよう。また下館が街道を強く意識しており、その立地自体も街道と深く関わっていることを示しているものと考えられる。

近世の殿村にあった4つの神社を、いつこの地に勧請したのかは明らかではない。しかし、一般的な村落となってから、この地に四社もの神社を勧請する必然性は少ないのであろう。その配置は江馬氏下館を中心に置くことによって、無理なく理解することができる。

まず、諏訪宮が段丘の南端部の信州方面への上宝道との合流点、白山宮が越中方面への道の分岐点という交通の要所にあることに注目しよう。中世においては寺社勢力が物資の流通と深く関わっており、これら神社の配置には、交易によって力を得ていたと考えられる江馬氏が関与していた可能性が高い。また加茂宮・瑞岸寺については、下館からみると北東方向に位置しており、下館の鬼門を守っていると考えられる。長野県高梨氏館などのように中世の武家居館の周囲に神社を配置する例もあり（湯本1991）、下館の主が、館の形成にあたって、これらの神社を勧請したと想定するのが妥当な解釈となるであろう。このように近世村落の景観復元からも、下館の諸施設が、周辺の広い範囲に存在していたことを示すことができた。

(大平愛子)

〈付記〉

本稿を成すにあたり、国立歴史民俗博物館歴史研究部助教授・小島道裕氏、富山大学人文学部教授・宇野隆夫氏、九州大学大学院比較社会文化研究科助教授・服部英雄氏からご指導・ご教示を得た。資料収集にあたっては神岡町通史編纂室・鈴村貞夫氏、石橋通子氏のご協力を得た。資料の読み下しにあたっては、神岡町文化財審議会委員・橋本 弘のご教示を得た。記して厚くお礼申し上げます。

(b) 江馬氏下館と古道

江馬氏下館の西側には段丘斜面の中腹に古道「上宝道」が通っている。現在は段丘下に国道471号線が通っているため、途中で途切れており、この道沿いに居住する方以外には殆ど利用されていないが、かつては神岡町中心部の船津と麻生野方面をつなぐ重要な道であった。今回の調査では館のある平坦面の西端まで発掘が行なわれたことから、館の付属施設が道際まで存在したことが確認され、またこの古道の規模もほぼ明らかとなり、館と古道の関係が一層注目されることとなった。中世における館の立地と機能について極めて示唆に富む結果であり、今後はこうした地域内の諸要素との関連の下に館の意味を考えていかなければならることは明らかである。

江馬氏関連の城館と古道の関係については、すでに服部英雄氏が注目しており（服部1995），これについて紹介・検討しておかなければならない。

その主な論点は、

1、この古道は見座で鎌倉街道に接続する広域的にも重要な往還であり、江馬氏下館と

洞城（麻生野城）、石神城（杏城）などはこの古道に沿って立地している。

2、館のはずれの古道に沿った所に、屋号「関屋」、元禄検地帳の「関屋源五屋敷」があり、これは江馬氏館が関所を設け、通行人より関銭を徴収していたことを示す。

3、「山科家礼記」（公家山科家の家司大沢氏の日記。15世紀）には江馬氏の関銭京上に関する記事があり、江馬氏の関銭徴収を示す明瞭な文献史料である。

というものであり、服部氏はこの他にも城館と関についていくつかの事例を挙げておられ、この方面に関する貴重な業績となっている。

しかし、服部氏の記述には3つの「山科家礼記」について誤認があると考えられる。

服部氏が関銭徴収の明徴として挙げた「山科記礼記」文明4年（1472）5月8日条は次のようなものである。

八日 晴 今朝次郎兵衛・掃部・弥六御構上候也、江馬事、関目事、所々催促、 . . .

服部氏はこれを、山科家の家臣である次郎兵衛（大沢重胤）らが上洛して、江馬氏の関銭京上を催促したことを報告した、と解釈したのだが、いくつか問題がある。

このころ山科家は、高山市付近にあった飛騨国の所領の回復に努めており、江馬氏もこれに関係していたことが知られる（「山科家礼記（重胤記）」文明3年10月12日条など。「江馬氏城館跡II」参照）。またそれのみに限らず、山科家は中央にあって江馬氏のために何らかの周旋を行なっているようでもある（「山科家礼記」文明4年4月10日条、7月27日条など）。しかし、飛騨の江馬氏の領地における山科家の関銭徴収の徴証はなく、一般的に考えても、飛騨のような遠隔地の、所領でもない土地の街道に中央の公家が関銭の徴収権を持っているとは考えがたい。

また、「関目」が関銭のことを指すかも疑問で、少なくともこの記事の「関目」は、前後に「関目彦右衛門尉」という人物の借錢に関わる件の記述が何度も出てくるので（（重胤記）文明3年12月25日条、文明4年11月24日条など），この人物のことを指していると思われる。

「江馬事・関目事」という「事」を並列した書き方も、両者が別々の事項であることを示していると思われ、「江馬事」が具体的に何であったかは今一つ不明確だが、いずれにしてもこの条が江馬氏の関銭徴収に関わるものと読むことはできない。

以上「山科家礼記」の記事は、残念ながら江馬氏下館と関との関係を示すものでないことを明らかにした。「神岡町史」史料編上巻（1972年）10頁に「江馬関目（銭）事等催促」などとされているのも、当然誤りである。

しかし、それは前項でも指摘しているような、屋号や伝承から推測される関の存在自体

を否定するものではない。館の立地と機能、そして周辺の地域社会の復元について、今後のさらなる調査の成果が期待される。

(小島道裕)

4 結 語

以上が1996年度江馬氏下館跡発掘調査の成果である。調査によって明らかとなった事柄については既に詳細な分析を行っているが、最後にそれらの意味するところをまとめて、結語としたい。

本調査の最も大きな成果の一つは、館中心部からやや離れた場所においても、数多くの営みを復元できたことである。館周辺への集住は従来の予想を大きく越える密度であり、恐らくは殿段丘のより広い範囲に及ぶものであったと考えられる。また段丘斜面の調査からは、これら館周辺の施設が古街道に接するところまで広がっていたことが判った。農業生産力に乏しい飛騨国にあっては、交通路をおさえて交易の利益を得ることが特に大切な意味をもつものであったであろう。今後、館門前道路と古街道との関係がくわしく判れば、館中心部と物資流通路とのより密接な結びつきが明らかとなるはずである。

次に南端の区画で確認できた竪穴住居に注目したい。中世東国の事例から考えて、この竪穴住居は工房である可能性が高く（高橋1992），さらに四柳嘉章氏の分析からは漆職人の存在が想定できる。十分な面積を調査している訳ではないが、こうした手工業生産の場は居館のより周縁地帯に限られており、一定程度身分による住み分けがなされていたと考えられる。そしてこのことは館内の礎石建物、門前地区の掘立柱建物、南辺地区の竪穴住居というように、その区画ごとの建物形式の差としてよく表れていた。このように武家が手工業者を編成していくことは、中世社会の重要な動向である（宇野1994a）。

さらに絵図による近世村落の復元作業からは、下館のある殿段丘の南北端に神社があつたことを明らかにすることができた。諏訪宮・白山宮・天神宮・加茂宮などの神社は江馬氏によってこの地に勧請された可能性があり、これらが信濃方面に諏訪宮、越中方面に白山宮という様に街道の結節点に位置することは、都市領域の境界も兼ねてのことであろう。また、下館の背後に分れて立地する瑞岸寺・円城寺についても、居館と関連が深い施設と考えられる。

このように江馬氏下館は、街道や神社などを含めたより広い地域景観のなかに位置づけていくことができるであろう。こうした景観が自然発的に形成されたとは考えにくく、むしろ江馬氏が自らの都市政策によって積極的につくりだした結果であると解釈すべきである。江馬氏下館の変遷と意義についてはすでに1995年度報告書でまとめているが（神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室1996），発掘調査の成果を加えて再掲しておきたい。

江馬氏下館I期（13世紀後半～14世紀中頃）は、殿段丘上に総柱式掘立柱建物が点在していた段階である。江馬氏一族が高原郷に入部した初期の頃であり、江馬氏下館I期の主がそのような人々であった可能性は非常に高いと言えよう。南辺地区ではこの時期に相当する遺構は確認しておらず、集落と街道との関係は次の段階ほど明確なものではない。ただし遺跡の立地する飛騨国高原郷は日本海と太平洋側を結ぶ交通の要衝であり、当時の江馬氏が全国的な流通ネットワークと関わりつつ、その力を蓄えていた段階であると理解しておきたい。また中世の一般的な傾向から言えば、川筋・街道にそった帶状の部分には自然発生的な都市的空間が成立しつつあったと考えらえる。

江馬氏下館II期（14世紀末～16世紀初め）には、方約一町の居館が成立した。居館の中では整地地業を行ない、堀・園池・礎石建物を綿密な計画のもとに整備している。館周辺も、堀に平行・直交する道路や柵によって区画を設け、様々な施設を配置するようになった。その主要な構造は武家館を中心におき、馬場などの儀礼施設や堅穴住居などの手工業生産施設を計画的に配置しており、さらには神社・寺院といった宗教施設も周辺に配するものであったと推察できる。II期は館周辺部の営みが特に活発な時期であり、さらに2段階に細分できる。

江馬氏下館IIA期（14世紀末～15世紀前半）には、南辺地区でも道路と柵列で区割りした2つの居住空間が成立した。この区画は職人が活動する場でもあり、下館を整備するにあたって、館の周縁部分に一定の規制のもとに配置されたものであろう。殿段丘では様々な身分の人々が活動するようになっていたが、彼らの食器は主に漆器・木製容器であり、土器・陶磁器類を場の性格や階層を区分するために明確に使いわけていた。そして、このような館内外の整備にみる身分制的構造の強化は、戦国期城下町への着実な歩みを感じさせるものである。またその営みは街道際までの広い範囲に及んでいた。

江馬氏下館IIB期（15世紀後半～16世紀初め）には、館内と館門前では建物の方位が同じように変化し、また門前は広場状となった。南辺地区の建物では方位は変化しておらず、前段階を踏襲した手工業生産の区画であったと考えられる。この時期における館様式の変化は、館近辺のみにとどまり、殿段丘の全体までは及ばなかったようである。このことは館当主と南辺区画の職人集団の関係を知るうえで興味深い事例となろう。今後事例が増えた場合に注意したい。

江馬氏下館III期（16世紀以降）は館の本拠が他所に移動した後の時期であり、殿段丘はそれまでとは全く異質な景観へと変化していた。移動した先は、おそらくは高原川の現河道が形成した段丘の端部に立地する東町城である可能性が高く、城は日本海への川港を見下ろしている。この本拠の移動は、江馬氏が河川筋の商工業者をより強固に統制しようとした動きであったと考えられる。同時に、室町幕府との直接的関係の象徴である方形居館

を廃棄していることは、江馬氏が新たな支配システムを確立しようとした動きであると評価できるであろう。それはまた、室町期から戦国期的な体制への変化のあらわれであった。

中世都市の源流ともいえる院政期の京都や鎌倉・平泉の基本的な構造は道、川を基軸として宗教施設を正面に戴き、政治施設をその下位に置くものであった。これは宗教勢力と商工業者の関係をより重視する都市構造であると言えるだろう（宇野1994b）。一方、江馬氏下館周辺において推定した神社の配置は武家居館を中心とするものであり、街道筋の都市的空間において武家居館がより優位な位置をしめる構造であったと考えたい。江馬氏下館の様式と周辺景観のありかたは、京都における「花の御所」に倣ったものであり、室町幕府との社会的関係の中で成立したようである（小島1996）。この背景としては、武家が列島規模で力を増してきていることを挙げることができるであろう。そして武家権門が中世前期的な商工業活動をより統制する動きは、後の戦国期城下町のイメージにもつながるものといえよう。

このように、江馬氏下館の発掘成果からは、日本の都市の歴史における武家居館の位置を考えることが可能であった。今後は、館の立地する殿段丘上の景観だけでなく、周辺のより広い地域景観から発掘成果を考えることを心がけていきたい。

（大平愛子・前川 要・中田書矢）

付章 自然科学的調査の成果

- 1 岐阜県神岡町江馬氏下館跡における電磁気探査
- 2 江馬氏下館跡の焼土遺構の考古地磁気測定
- 3 江馬氏下館跡1996年度出土漆器の塗膜分析
- 4 江馬氏下館跡出土鉄砲玉の鉛同位体比測定結果

1 岐阜県神岡町江馬氏下館跡における電磁気探査

富山大学理学部 酒井英男・黒沢尚美

人文学部 前川 要

田中地質コンサルタント 田中保士

1 はじめに

江馬氏下館跡は、岐阜県吉城郡神岡町の高原川（神通川水系右支）中流右岸の河岸段丘上に立地していた、江馬氏の住居跡である。江馬氏は、飛騨の北部・吉城郡高原郷を治めていた中世の豪族である。1973～1978年に神岡町教育委員会によるトレンチ調査が実施され、館内部の庭園跡、館をめぐる堀や建物の礎石が確認されている。また、1994年度からは国指定史跡である江馬氏城館跡を歴史公園として復元整備するための発掘調査が行われている（神岡町教育委員会、1996）。同地域の電磁気探査を1994年度から実施している。

1994年の探査では地下レーダと電気探査を館の三方を囲む堀を対象に行い、北堀と南堀およびV字型の西堀を確認した。1995年は、館を取り囲む堀跡のうち西堀を横切る道の存在を調べ、更に周囲の建物等を検討するために電気探査と地下レーダ探査、放射温度計探査を実施した。探査で認めた顕著な変化は、発掘結果との対比から建物、道路や井戸跡と良く対応しており、これらの手法が遺構調査に有用であることが示された。

本年度は、館の中心部からやや離れた南辺地区における道路跡や住居跡の分布の確認を目的として、電磁気探査を実施した。

2 探査概要

探査は、昨年度の調査地域の南側に位置する、土手を挟んだ南北24m×東西30mの範囲で行った（第72図）。探査項目は、磁気探査、電気探査、地下レーダ探査、および放射温度計の探査であり、各探査は発掘前と表土をはぎ取った状態の2回で行った。具体的な内容と使用装置は以下のとおりである。方法の詳細は、Clark（1990）や酒井ほか（1991、1994、1995a、1995b、1996）などで示している。

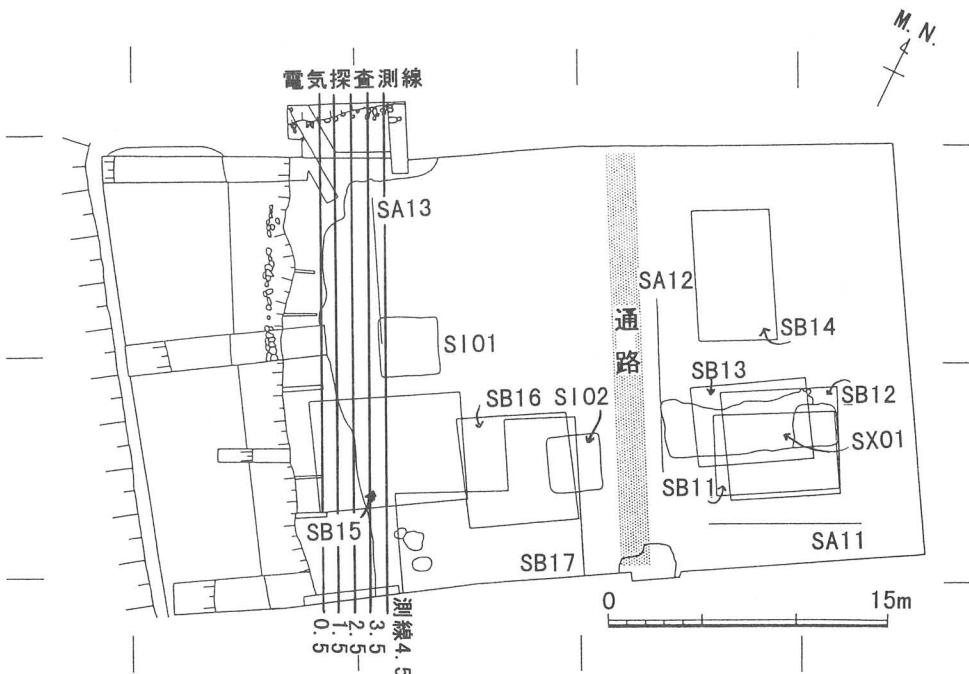
磁気探査：フラックスゲート型磁力計による磁気傾度探査

MS 2型装置と携帯用機器による帯磁率探査

電気探査：RM-15型装置による二極法探査

DZD-2型装置によるウエンナー法探査

地下レーダ探査：Pulse EKKO-4型装置による電磁波パルス反射法の探査



第72図 本研究の探査範囲と発掘調査で検出した遺構

SA : 棚, SB : 掘立柱建物, SI : 竪穴住居, SX : 土間状遺構
第74図の電気探査の測線も示している

放射温度計探査：ミノルタTA-0510 F型による探査

3 発掘前の探査

(1) 二極法電気探査

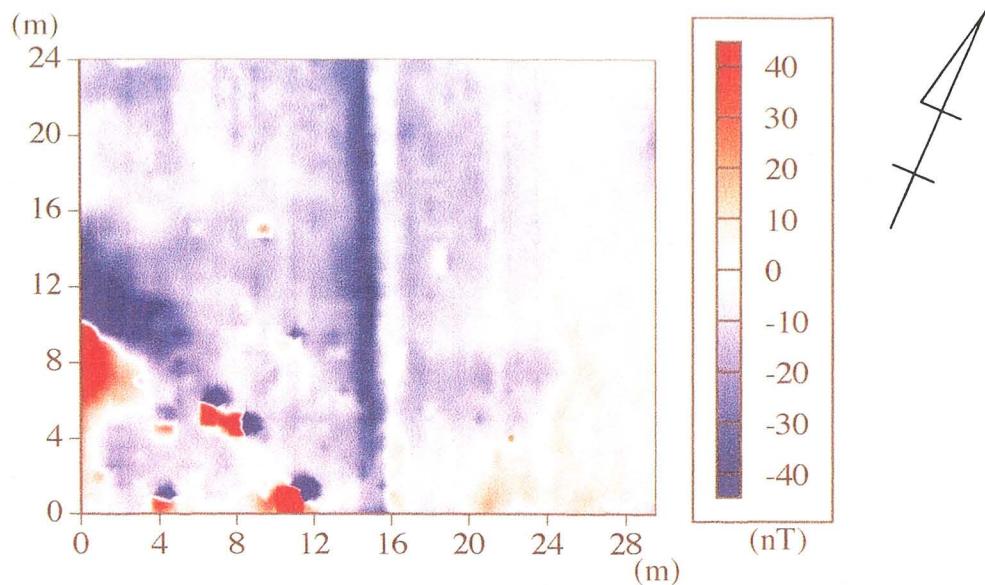
全範囲を電位電極の間隔を0.5mに設定して、1mメッシュで測定した。探査結果を第73図(b)に示す。敷地は水田であり、表面は乾いているが地下土壌は含水量の多い粘性土であった。この影響で電気比抵抗は70~120Ω・mと低い値を示した。

西側に低比抵抗の領域があり、また中央部を南北に走る帯状領域と南側を東西に走る帯状領域において高比抵抗が認められた。高比抵抗の領域は発掘調査から道路と判明した(第72図)。低比抵抗の領域は地表下1m付近から発掘された建物と竪穴住居、土間遺構と道路の領域と対応した。

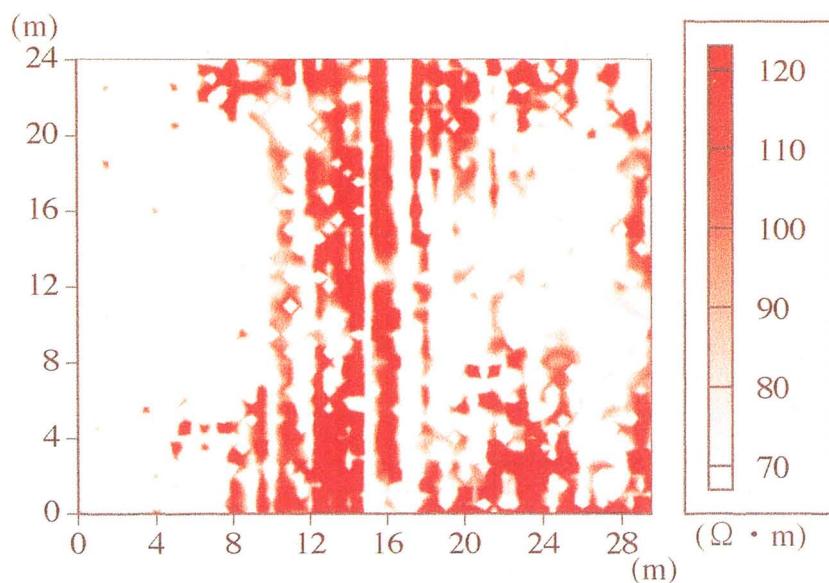
(2) 磁気傾度探査

電気探査と同様に全範囲で行った。第73図(a)の探査結果には、第72図の建物(SB11, 12, 13)と竪穴住居(SI01)に対応する異常が認められた。中央部を南北に走る線は現在の畦の影響であり、南側に点在する磁気異常は現代の鉄製品の影響と考えられる。

(a) 磁気傾度探査



(b) 二極法電気探査



第73図 (a)磁気傾度探査の結果, (b)二極法電気探査の結果

(3) ウエンナー法探査

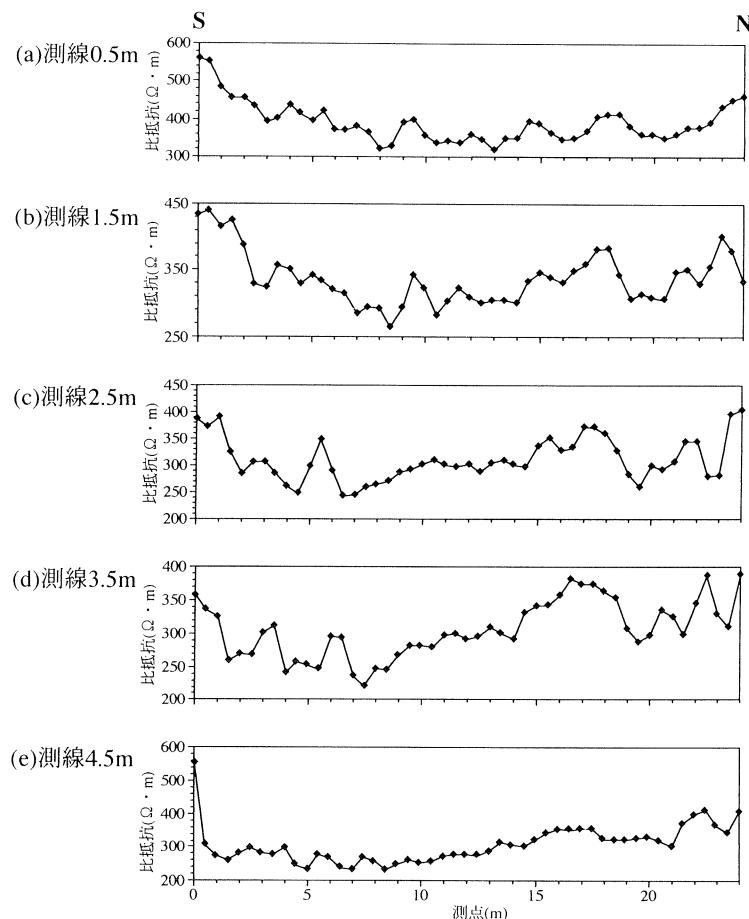
電極間隔を1mに設定して0.5m間隔に移動するウエンナー法探査を第72図の5本の測線で実施した。これにより深度約1mの比抵抗分布が得られる。第74図の各測線の5~15m付近に認められた低い比抵抗は住居(S I 01)に対応し、二極法の結果と一致した。測線の両端の比抵抗が高い傾向は、第72図の西側の盛土に対応している。

(4) 地下レーダ探査

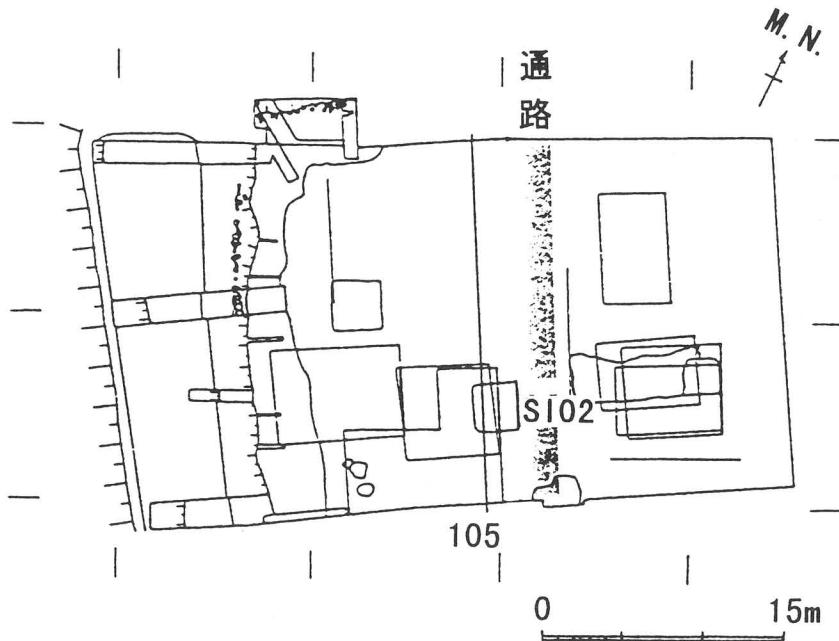
探査は第75図の測線105で行った。第76図の探査結果には豊穴住居S I 02に対応して、豊穴の壁で双曲線状の反射波形があり、豊穴面では地形変化を示す強いリアルラインが認められた。

4 表土掘削後の調査

表土掘削後に、第72図の豊穴住居跡のS I 01地域とS I 02地域において磁気傾度、二極



第74図 ウエンナー法探査の結果



第75図 地下レーダ探査の測線と発掘で得た遺構平面図

法電気、帯磁率、放射温度計の探査を行った。第77図に各探査の範囲を示す。両地域には焼け跡がある。

4-1. 穫穴住居跡 S I 01地域

第78図の上a図は、磁気傾度が正の領域を赤で負の領域を青で示した。中心部に焼土による磁気異常があり、周囲には溝の影響と考えられる高い磁場が現われた。

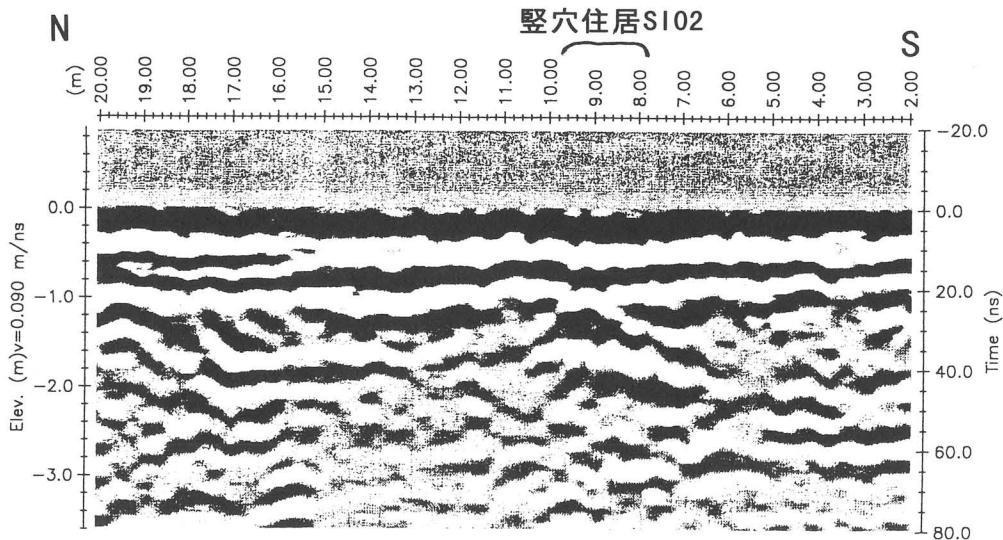
二極法電気探査は電極間隔を50cmに設定して行った。第78図の上b図では、最大値4000 $\Omega \cdot m$ 、最小値2000 $\Omega \cdot m$ で解析を行い、電気比抵抗の高低を濃淡で示した。地面が乾燥して電極接地が悪く比抵抗は全体的に高かった。

竪穴住居の北側にある焼土領域は低い比抵抗を示した。これは、長年火を使用したため周囲より細粒な土に置き換わり、土の間隙比が小さくなり比抵抗は低くなったと考える。立山室堂で認めた遺跡の炉跡でも同様に低い比抵抗が観測されている（酒井ほか、1994）。

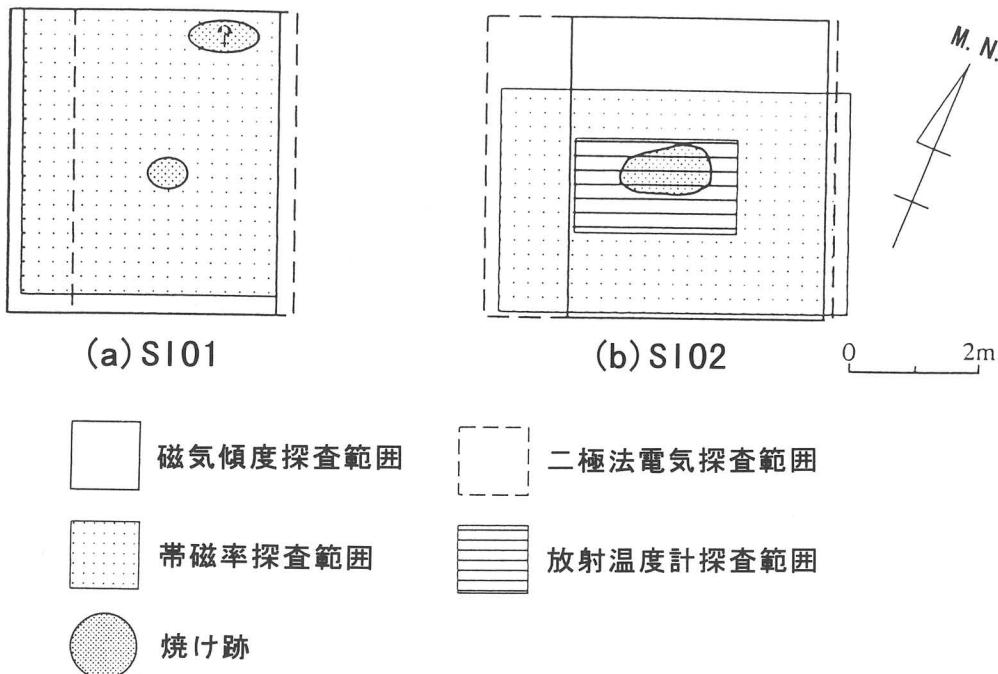
4-2. 穫穴住居跡 S I 02地域

磁気傾度探査（第78図下a）では、中心部の焼土領域で僅かに高い磁場が認められた。二極法電気探査（第78図下b）は、電極間隔50cm、最大値1000 $\Omega \cdot m$ 、最小値500 $\Omega \cdot m$ の条件で解析した。焼土領域はS I 01地域と同様に低比抵抗として認められた。

同地域において、放射温度計探査を日の出を挟んで午前5時と9時の2回に行った。第79図は、2回の測定温度の差を用いて解析した結果であり、温度の高低を濃淡で示している。中心部の温度の低い領域は焼土の領域とほぼ一致した。これは、焼土の比熱が周囲と



第76図 測線105での地下レーダ探査の結果



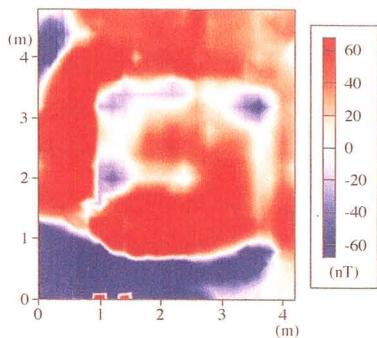
第77図 表土掘削後の電気探査の範囲

異なるので、蓄積され放出される熱量の違いが異常を起したと考えられる。

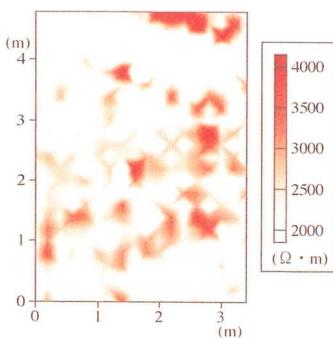
4-3. 調査地域全面での二極法電気探査

第80図は、土手を境に西と東の探査結果を合わせて示している。西側は、最大値 $10000 \Omega \cdot m$ 、最小値 $5000 \Omega \cdot m$ の条件で解析し、東側は最大値 $900 \Omega \cdot m$ 、最小値 $300 \Omega \cdot m$ の

SI01での探査結果

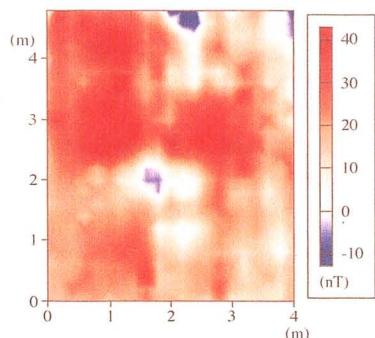


(a) 磁気傾度探査

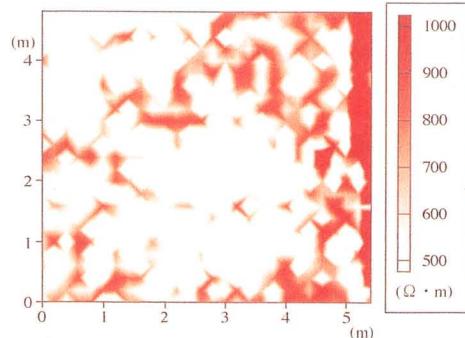


(b) 二極法電気探査

SI02での探査結果

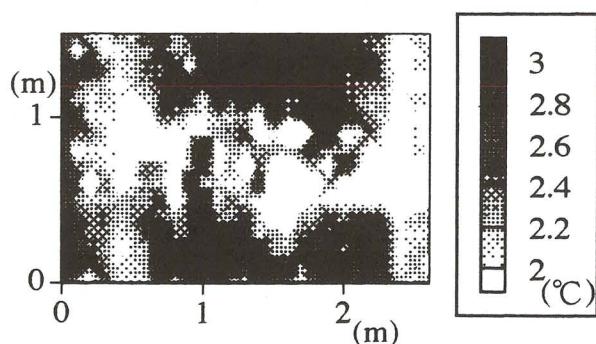


(a) 磁気傾度探査



(b) 二極法電気探査

第78図 上：SI01地域における磁気傾度探査と二極法電気探査の結果
下：SI02地域における磁気傾度探査と二極法電気探査の結果



第79図 SI02地域の放射温度計による調査結果

条件で解析した。電極間隔は50cmを用いた。乾燥して電極接地が悪かったため比抵抗が高くなっている。

中央を南北方向に帯状に延びる高比抵抗の領域は、発掘調査から南北方向の道路と対応した。調査地区の南辺にそって東西方向に帯状に延びる高比抵抗の領域と、竪穴住居S I 02の周囲に高比抵抗を示す領域があり、これは踏みしめによる含水率の低下が原因と考えられる。前者は掘立柱建物が重複するが、ある時期は道路であった可能性もある。住居跡の南側の高比抵抗の領域は、発掘調査で土間状遺構と考えたS X 01に良く対応し、良く踏み締められた土間であることが想定できる。

5 道路に沿う地下レーダ探査の結果

調査地域における明治時代の屋号には、堀や溝に関係する名前（屋敷地小字名）が集中している。また現在も、発掘地域の南側を水路が流れていることも考慮すると、道路の地下に堀跡がある可能性が想定できた。第81図の測線A～Lにおいて地下レーダ探査を実施した。

第82・83図に探査結果を示している。測線AからDまでは、幅が狭く深い反射パターンが各測線の北側にあり、小さな溝状の遺構を示唆する。測線EからHまでは、幅2～3m、深さ1m程度の堀らしい構造が測線の北側で認められた。

6 まとめ

江馬氏館遺跡の中心部からやや離れた地区における道路跡や住居跡の分布を調べるために電磁気探査を実施した。

（1）発掘前の探査

二極法電気探査では、道路、建物と竪穴住居、土間状遺構が電気比抵抗の違いから認められた。遺構と周囲土質の比抵抗の差は少ないことが懸念されたが、適正な可探深度を設定し高密度で測定したので良好な探査結果を得たと考える。

地下レーダ探査では、竪穴住居跡で、壁に双曲線状の特徴ある反射波形を認め、また竪穴面には地形変化を示す強いリアルラインを認めた。通路跡では僅かに盛り上がるリアルラインを確認した。

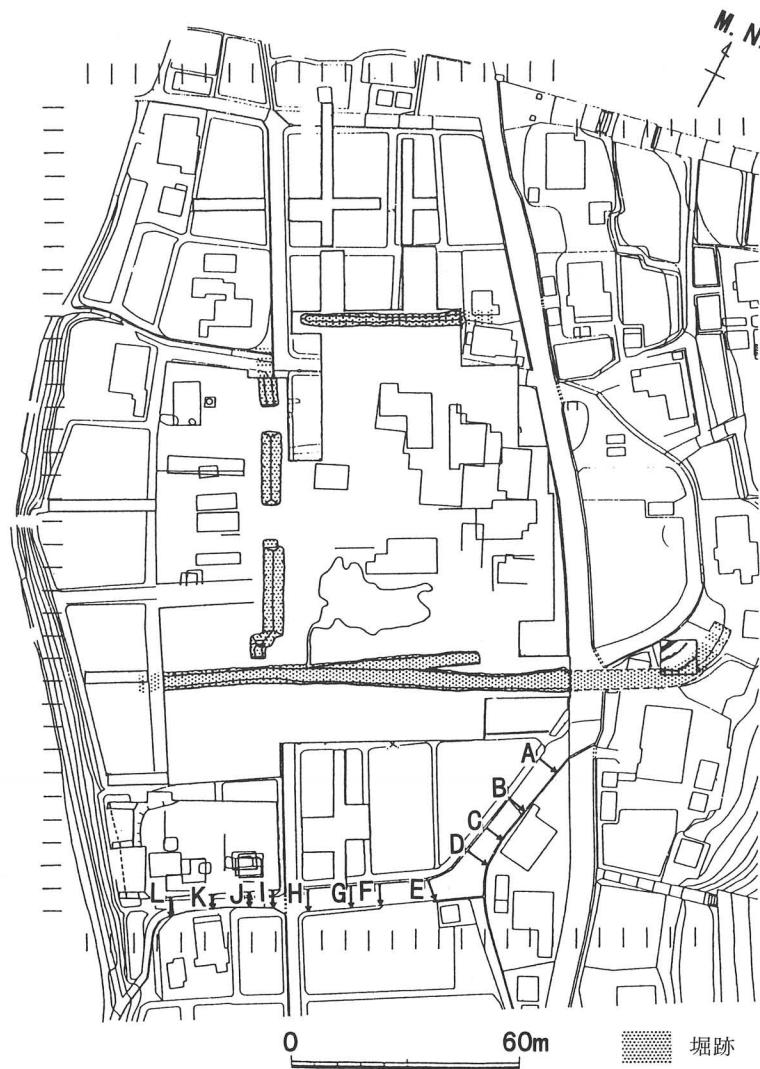
（2）表土掘削後の調査

焼跡がある竪穴住居のS I 01地域とS I 02地域を中心に探査を行った。焼土の領域で高い磁気傾度と低い比抵抗が認められた。焼土は長年の火の使用により周囲に比べて細粒な土に置き換わり土の間隙比が小さくなり低い比抵抗として現われたと考える。

放射温度計探査を日の出を挟んで午前5時と9時の2回で行った。低い温度の領域が焼



第80図 表層を取り除いた後の二極法電気探査で得た電気比抵抗の分布と発掘結果との対応



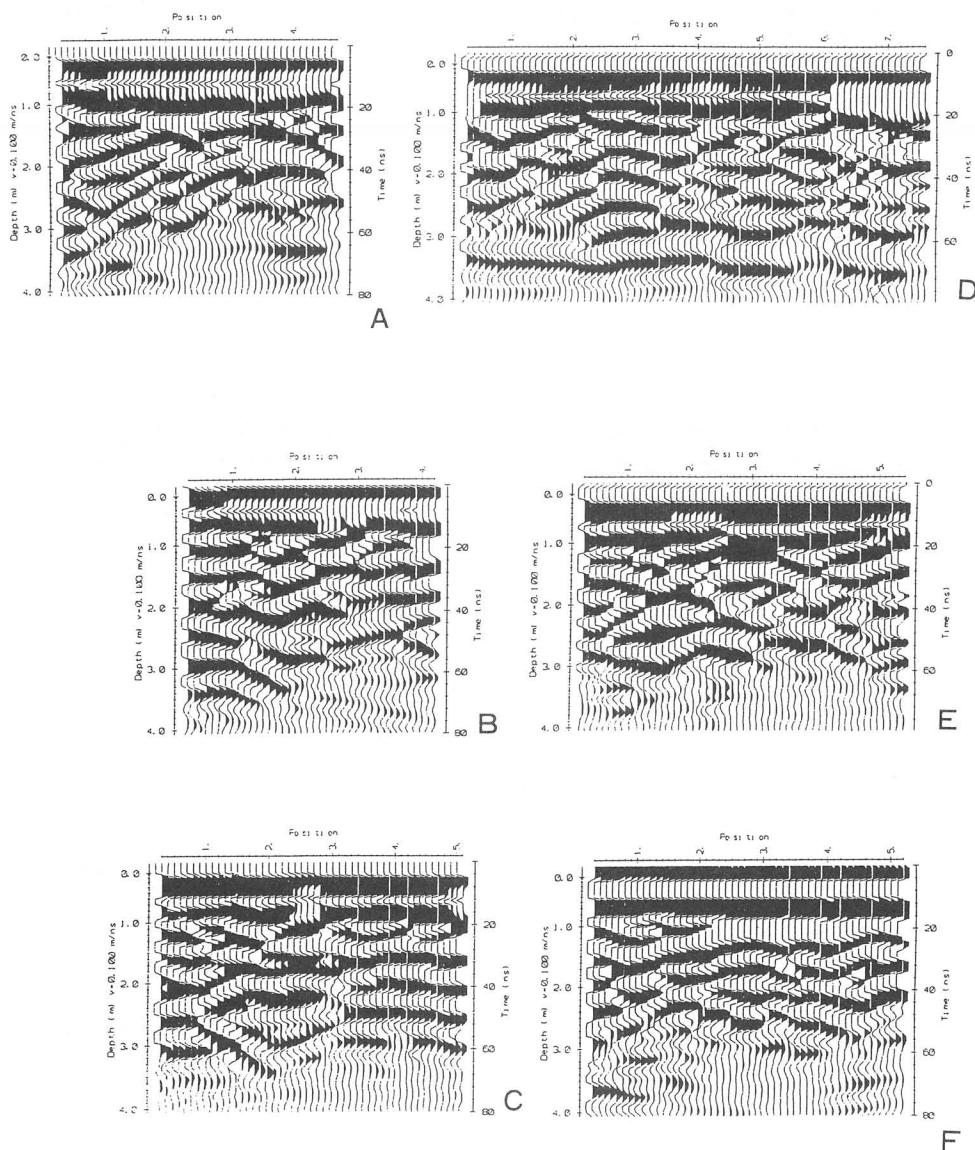
第81図 道路に沿った地下レーダ探査の測線A～L位置図

土とほぼ一致した。焼土は周囲より比熱が大きく、蓄積・放出される熱量の違いが異常として現われたと考えられる。放射温度計による遺跡調査は酒井ほか（1996）で開発されたが、本研究でも有効性が示された。

調査地域全面で行なった電気探査では、高比抵抗の領域は道路と良く対応した。また土間状構造のS X01地域が高比抵抗を示したが、これは土間として使用され踏み締められたためと考えられる。

（3）道路に沿った地下レーダ探査

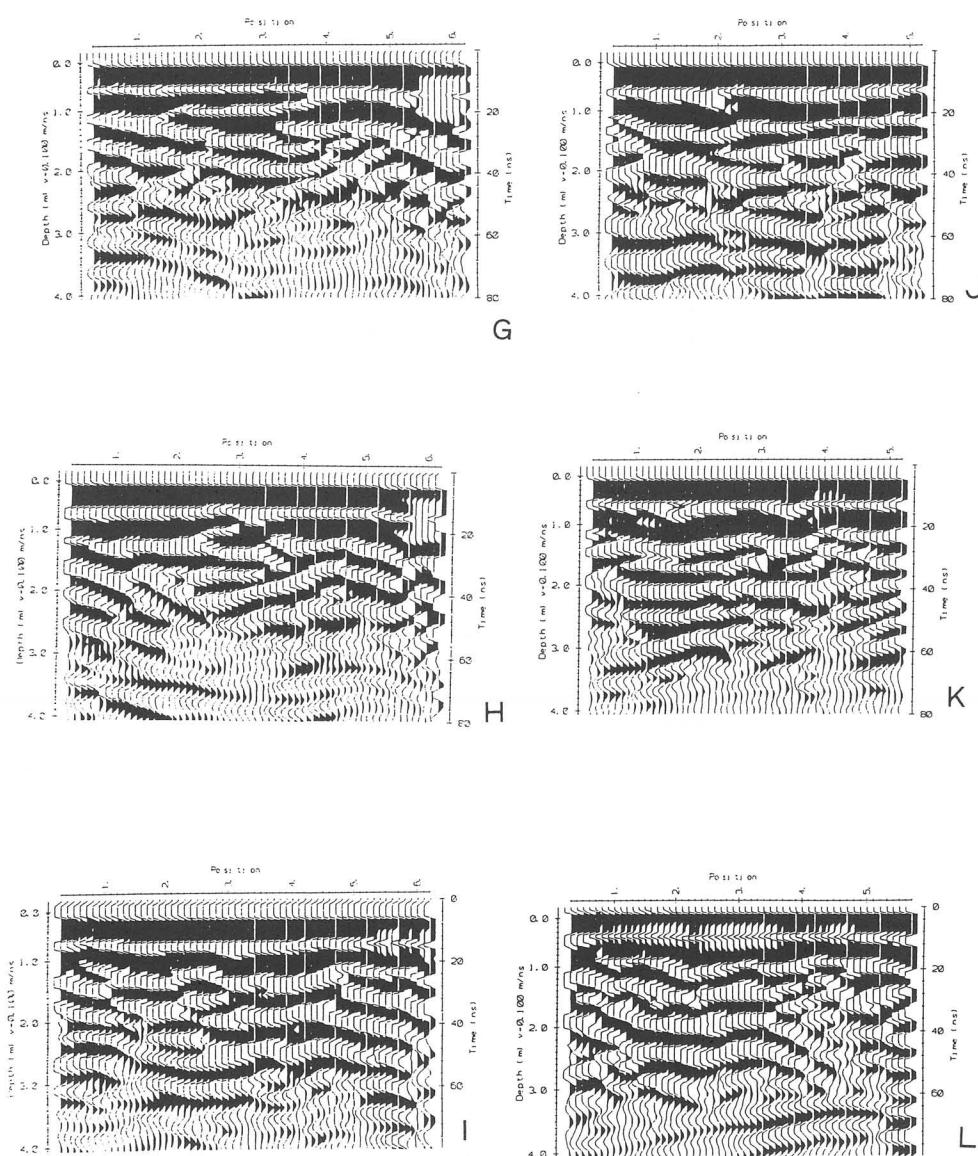
調査地域における明治時代の小字名には、堀や溝に関係する名称が集中しており、現在も発掘地域の南側を水が流れていることも考慮すると、道路の地下に堀跡がある可能性が



第82図 測線A～Fにおける地下レーダ探査の結果

考えられていた。幅が狭く深い反射パターンから小さな溝状の遺構が示された。

以上の様に、江馬氏館で発掘調査前に実施した電磁気の各探査結果は遺構と良く対応しており、発掘前の調査として電磁気探査が活用できる段階であることが示された。



第83図 測線G～Lにおける地下レーベ探査の結果

謝　　辞

神岡町教育委員会の皆様には、探査の便宜を図って頂き、また発掘調査結果との比較において議論を頂いた。また、調査に、文部省科学研究費“基盤研究（C）：課題番号07831004”を使用した。

参考文献

- Clark A. (1990) : Seeing beneath the soil-prospecting methods in archaeology-, B.T. Batsford Ltd, London, p.176.
- 神岡町 (1987) : 史跡江馬氏城跡発掘調査概報, 1987, p.60.
- 酒井英男, 小林剛, 広岡公夫, 胡麻景子, 東順一, 田中保士 (1991) : 石川県羽咋市滝・柴垣海岸の製塙遺跡における電磁気探査, 『能登滝・柴垣製塙遺跡群』, 富山大学人文学部考古学教室, 真陽社, pp.115-127.
- 酒井英男, 平井徹, 山田剛士, 張忠良, 田中保士 (1994) : 立山室堂における山岳宗教遺跡の電磁気探査, 立山町教育委員会, “芦嶽寺室堂遺跡”, pp.65-72.
- 酒井英男, 前川要, 宇野隆夫 (1995 a) : 福島城跡遺跡および十三湊遺跡における電気探査, 『青森県十三湊遺跡・福島城跡の研究』, 国立歴史民俗博物館研究所報告, 第64集, pp.137-142.
- 酒井英男, 武田昌明, 前川要 (1995 b) : 江馬氏館における電磁気探査とレーダー探査, 富山大学人文学部考古学教室, 『江馬氏城館跡－下館跡発掘調査報告書1－』 pp.151-164.
- 酒井英男, 上田純子, 上坂麻子, 宇野隆夫, 田中保士 (1996) : 江馬氏下館遺跡における電磁気探査と放射温度計探査, 富山大学人文学部考古学教室, 『江馬氏城館跡II』, pp.135-146.

2 江馬氏下館跡の焼土遺構の考古地磁気測定

富山大学理学部地球科学教室

広岡公夫・森 京子

1 はじめに

江馬氏下館跡の1996年度の発掘調査によって、6基の焼土遺構が見出された。そのうち、S X02, S X03, S X05, S X11の4基の焼土址からは、考古地磁気測定用の焼土試料を採取し、年代推定のための考古地磁気測定に供した。また、S X01とSK13では、床は殆ど焼けていないが、焼けた礫が多数散在しており、これらの礫が現位置で焼かれたのか、あるいは何処かよそで焼かれてからここに運ばれたのかを判定するために、7個の礫を試料として採取した。もし、現位置で焼かれたものであるならば、よく焼けた部分は再磁化し、どの礫も同じ方向の熱残留磁化を示すはずであり、焼成後に運ばれたものであるならば、磁化方向が礫ごとに異なるはずであるからである。

2 試料の採取

S X02, S X03, S X05, S X11については、石膏で固めて採る通常の考古地磁気試料採取法によった。採取試料は実験室でダイヤモンド・カッターを用いて切断し、34mm×34mm×34mmの立方体に整形した。磁化測定中の試料の破損を防ぐために、切断面にも石膏をかけて補強してある。

S X01及びSK13の岩石の礫については、古地磁気測定の時の岩石試料の採取方法にしたがって、直接、岩石表面に方位をつけ、礫ごと持ち帰った。大きい礫の場合は、赤変した部分を割り欠いて採取したものもある。採取試料の個数および試料番号は、第21表のようになる。

礫の赤変した部分は非常に脆くなってしまっており、実験室で、ダイヤモンド・コア・ドリルでコア試料（直径24.5mm、長さ24.0mmの円柱形）に整形する際に、崩れてしまい試料ができなかったものもある。CG1352, 1353がそれである。同一礫から複数個のコアを得たときは、試料番号の後に順にa, b, c, を付ける。コアが長くて2個以上のコア試料が得られた場合には、表面に近いものから1, 2, の番号を付した。したがって、例えば、CG1341a 2の試料は、CG1341の礫試料の第1コアの表面から25mm～50mmの深さの部分であることを表す。

3 残留磁化の測定

残留磁化の測定は、夏原技研製リングコア型スピナー磁力計（S MM-85型）を用いて行なった。この磁力計は、コア試料と、 $34\text{mm} \times 34\text{mm} \times 34\text{mm}$ の立方体の考古地磁気試料の両方が測定できるように特別に設計された磁力計である。立方体試料、コア試料ともに6回置き直し法で測定した。SX02, SX03, SX05, SX11の石膏で固めた焼土試料については、不安定な磁化成分を除去するために交流消磁を行った。2.5mT, 5.0mT, 7.5mTの3段階で段階交流消磁を行った。これらの焼土址から得た試料の残留磁化の測定結果は、第22～37表に示されている。いずれも、磁化強度が弱く、磁化方向のばらつきも大きいので、充分な熱残留磁化を獲得するまで温度が上がっていなことを示している。通常のよく焼けた焼土の場合は、磁化は $5 \times 10^{-4} \text{ A m}^2/\text{kg}$ (=emu/g) より強い強度を示すが、今回の焼土址の消磁する前の自然残留磁化（natural remanent magnetization, 略して、NRM）の強度は、すべて上記の値より弱く、余り温度が上がっていなことを示している。

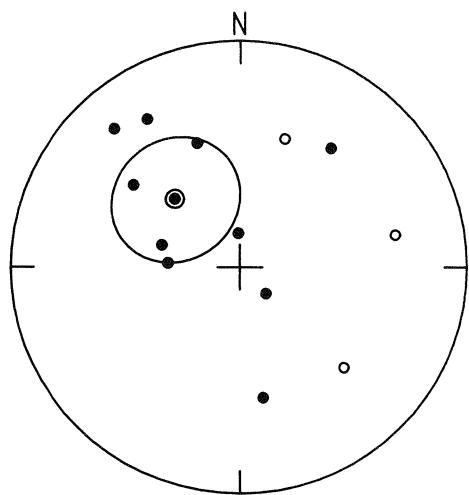
フィッシャーの統計法（Fisher, 1953）を用いて統計計算を行った結果は第44表に示されている。SX02の磁化は大きくばらつき、地磁気の方向の熱残留磁化を獲得したとはとても考えられない結果となった。多分、試料として採取した部分は、殆ど温度が上がっていなかったのであろう。SX11のNRMは良いまとまりを示すが、過去2000年間の地球磁場の方向（Hirooka, 1971；広岡, 1977）から大きく外れた方向にまとまっており、地磁気の記録とは考えられない。しかも、段階交流消磁によってそのまとまりが悪くなるので、何らかの他の原因（例えば雷の放電電流による磁場）で付加された磁化であると思われる。

大きく磁化方向が外れて磁気の記録とは見なせない磁化を持つ試料を除くと、なんとかSX03とSX05が考古地磁気年代推定に供せる程度のまとまりを見せた。SX05の場合は、ばらついたものが多く、除外した試料数が半数を超える。統計計算の際に除外した試料は、第22～37表中で*印を付して示しておいた。

S K13とSX01の焼けた礫の試料については、どこで焼かれたか、また、温度がどれくらい上がったかを見るために、150°Cと200°Cで熱消磁を行った。その結果は、第45表に示されている。

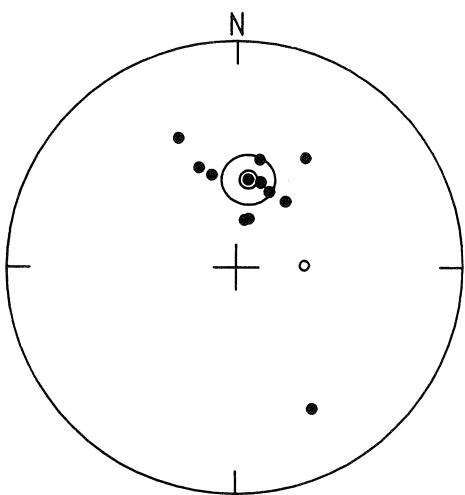
4 考古地磁気学的考察

第44表の段階交流消磁の結果のうちで、最もまとまりのいい最適消磁段階の磁化方向をプロットしたのが第84～87図である。磁化のばらつきが大きいために、通常用いている拡大シュミット・ネットでは間に合わないので、全円のシュミット・ネット（等積ステレオ

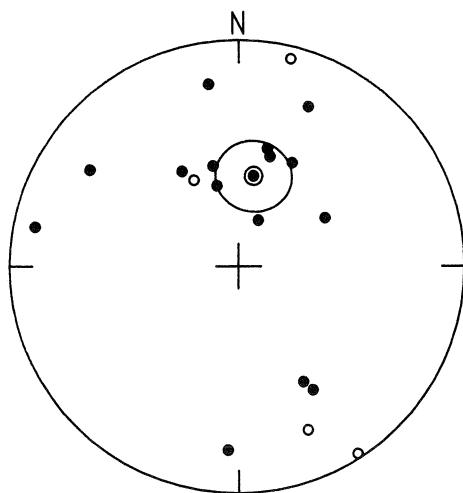


第84図 SX02の試料の磁化方向の等積ステレオ投影図

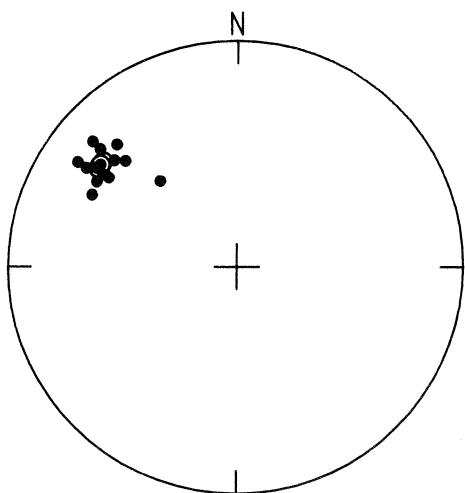
- ：下半球（伏角が正）、○：上半球（伏角が負）
- ◎：平均磁化方向（大きく外れた磁化方向を示す試料を除外して求めたもの）
- ◎を開む円：フィッシャーの信頼円 (α_{95})



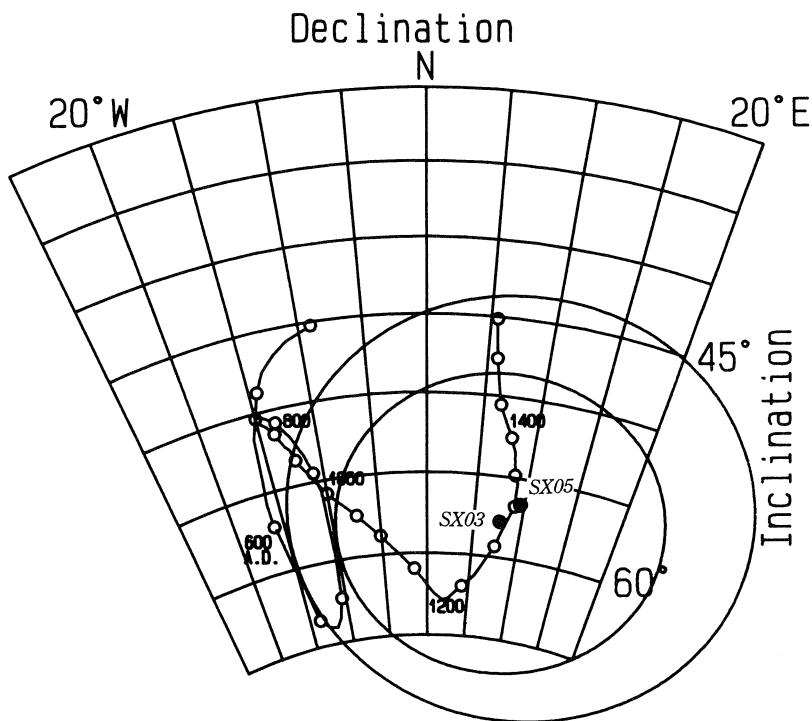
第85図 SX03の試料の磁化方向の等積ステレオ投影図
記号は第84図と同じ。



第86図 SX05の試料の磁化方向の等積ステレオ投影図
記号は第84図と同じ。



第87図 SX11の試料の磁化方向の等積ステレオ投影図
記号は第84図と同じ。



第88図 北陸版考古地磁気永年変化曲線(広岡、1996)と、SX03・SX05の考古地磁気方位(平均磁化方向)

投影図)に投影した。SX02は磁化のばらつきが非常に大きく、また、SX11では磁化のまとめりはいいが、過去2000年間の地磁気の永年変化の範囲から大きく外れた向きになっており、地磁気の記録とは考え難い方向を示している。

SX03とSX05については、大きく外れた磁化方向を示す試料を除外して平均磁化方向を求めると、辛うじて年代の推定ができる程度のまとめりを見せてるので、北陸版考古地磁気永年変化曲線(広岡、1996)にプロットした拡大シュミット・ネットを第88図に示した。これから年代を推定すると、

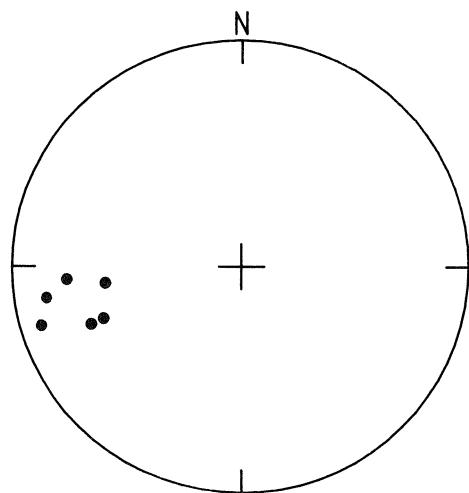
SX03 : A.D.1280年頃 (A.D.1010年～A.D.1480年)

SX05 : A.D.1300年頃 (A.D. 950年～A.D.1580年)

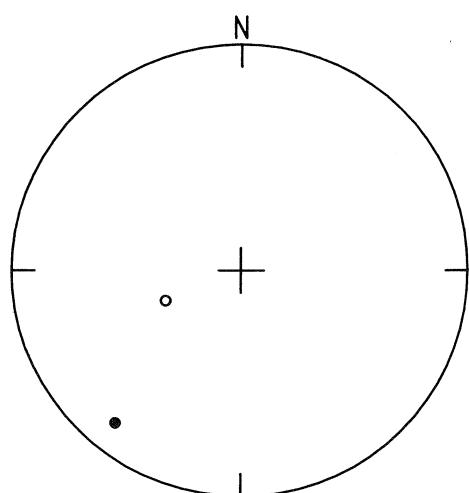
となろう。しかし、先にも述べたように、磁化方向のばらつきが大きいので、この年代値は、目安程度のものでしかない。

焼けた礫に関する測定結果は、第38～43表に示されているが、礫は全て花崗岩質の岩石であるため、磁化強度は焼土に比して2桁ほど磁化が弱い。

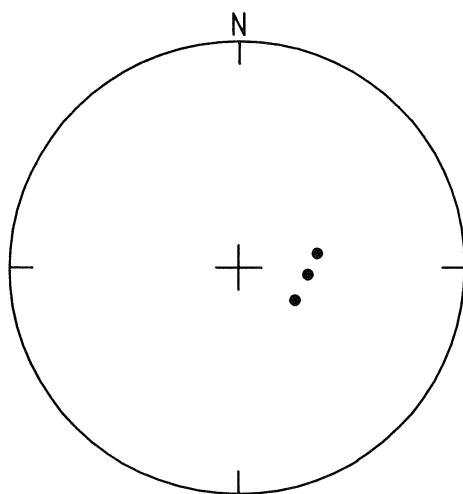
礫ごとの熱消磁前(NRM)の磁化方向は、第89～93図に示しておく。礫ごとに磁化方



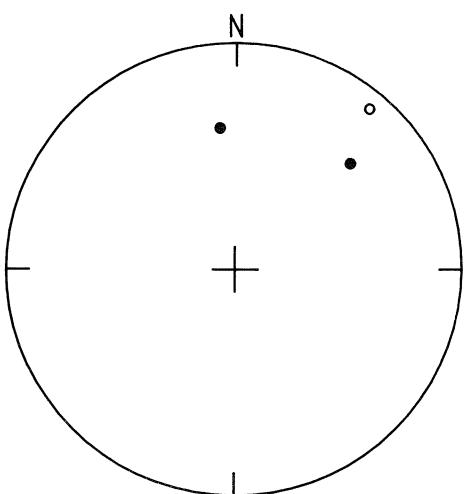
第89図 SK13中の被熱礫 (CG1341) のNRMの磁化方向
●が個々の試料の磁化方向を示す (下半球投影)。



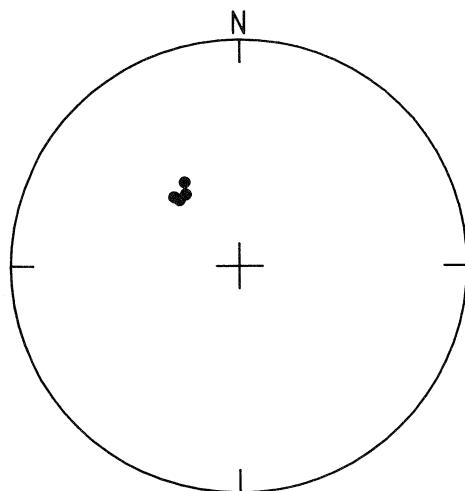
第90図 SK13中の被熱礫 (CG1342) のNRMの磁化方向
●, ○が個々の試料の磁化方向を示す。
●: 下半球 (伏角が正), ○: 上半球 (伏角が負)。



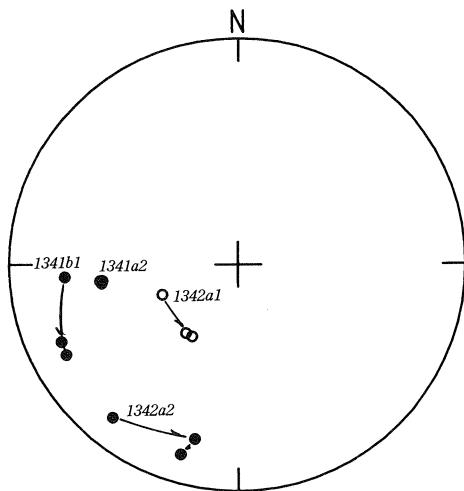
第91図 SK13中の被熱礫 (CG1343) のNRMの磁化方向
●が個々の試料の磁化方向を示す (下半球投影)。



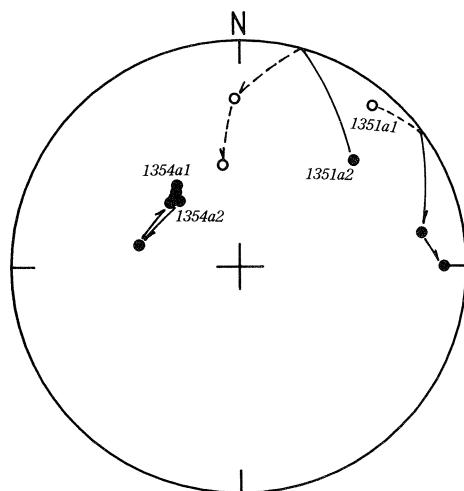
第92図 SX01中の被熱礫 (CG1351) のNRMの磁化方向
●, ○が個々の試料の磁化方向を示す。
●: 下半球 (伏角が正), ○: 上半球 (伏角が負)。



第93図 SX01中の被熱礫(CG1354)のNRMの磁化方向
●が個々の試料の磁化方向を示す(下半球投影)。



第94図 SK13中の被熱礫の熱消磁による磁化方向の変化
矢印の先が高温段階



第95図 SX01中の被熱礫の熱消磁による磁化方向の変化
矢印の先が高温段階

向は大きく異なっているのがわかる。この事実は、もし、これらの礫が焼かれて再磁化をしているとすれば、焼かれたのは現位置ではなく別の場所であって、焼成後にここに運ばれたことを意味する。

S K13ではC G1342の礫は1342 a 1のコアと1342 a 2のコアの磁化方向が大きく異なり、焼けた表面の部分を含むa 1の試料は焼かれたときに再磁化した熱残留磁化であろうと思われる。これに対してa 2の試料は焼けた表面から2.5cm内部に入ったものであるため、再磁化されず、岩石が生成した時の磁化を保っているものと思われる。C G1341とC G1343の礫については、コア試料の磁化方向は礫ごとにそろっているので、礫全体として(少なくとも火を受けた表面から5cm内部まで)再磁化したものと思われる。別の可能性として、礫全体が全く熱の影響を受けていないことも考えられるが、表面の赤変状態を考えるとこの可能性は少ないであろう。

S X01では、C G1351の礫が上記のC G1342と同様の傾向を示している。これらの礫は、200°Cまでの熱消磁によって、磁化方向の変化が他の礫に比べて大きく、150°ないし200°までの温度の上昇があったと考えられる。第94・95図は、それぞれのコア試料が熱消磁によって磁化方向がどのように変化したかを、シュミットネットに投影したものである。試料によって動きが大きいものと、殆ど変化しないものがあるのがよくわかる。C G1341 a 2とC G1354 a 1は熱消磁を行っても全然磁化方向は変化しないが、C G1351 a 1とC G1351 a 2は大きく動く。その他のものはこれらの中間の動きを示している。

引用文献

- R. A. Fisher (1953) Dispersion on a sphere, Proceedings of Royal Society of London, Series A, vol. 217, 295-305.
- Kimio Hirooka (1971) Archaeomagnetic study for the past 2,000years in Southwest Japan, Mem. Fac. Sci., Kyoto Univ., ser. Geol. & Mineral., 38, 167-207.
- 広岡公夫 (1977) 考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向, 第四紀研究, vol. 15, 200-203.
- 広岡公夫 (1996) 北陸における考古地磁気研究, 「考古資料が語る中近世の北陸」北陸中世土器研究会編, 桂書房 (印刷中).

第21表 江馬氏下館跡の考古地磁気試料番号一覧

遺構名	試料個数	試料番号
S X 02	13	C G 1281~1293
S X 03	13	C G 1261~1273
S X 05	20	C G 1301~1320
S X 11	14	C G 1321~1334
S X 01	4	C G 1351~1354
S K 13	3	C G 1341~1343

第22表 江馬氏下館跡 S X 02 の NRM の
磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4} \text{ A m}^2/\text{kg}$)
C G 1281	-28.4	17.9	2.48
1282	-49.0	39.4	1.57
1283	-21.2	38.2	7.42
1284	-35.8	71.0	0.306
1285	154.0	83.3	0.425
*	1286	169.2	-38.8
*	1287	-7.6	0.168
	1288	7.5	0.285
*	1289	20.9	42.0
*	1290	-158.0	0.495
	1291	52.8	55.3
*	1292	81.0	0.237
	1293	-48.4	8.77

* : 統計計算の際に除外したもの。

第23表 江馬氏下館跡 S X 02 の 2.5mT
消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4} \text{ A m}^2/\text{kg}$)
C G 1281	-31.6	24.2	1.60
1282	-51.6	40.9	1.21
1283	-18.9	41.6	5.64
1284	-2.2	77.7	0.238
1285	-86.5	64.5	0.305
*	1286	133.8	-36.3
	1287	-73.7	0.147
*	1288	37.3	61.2
*	1289	19.2	0.280
*	1290	169.7	34.2
	1291	134.6	0.357
*	1292	78.2	41.2
	1293	-30.6	0.188
*	1293	-41.7	19.2

* : 統計計算の際に除外したもの。

第24表 江馬氏下館跡 S X 02 の 5.0mT
消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4} \text{ A m}^2/\text{kg}$)
C G 1281	-24.1	15.8	1.04
1282	-56.8	51.2	0.921
1283	-9.2	46.7	4.30
1284	-42.9	80.1	0.241
1285	95.2	74.6	0.405
*	1286	149.5	-22.0
*	1287	-112.6	0.163
*	1289	-20.6	0.227
*	1289	26.0	-44.6
*	1290	-186.1	0.574
	1291	-185.8	10.2
*	1292	83.9	-12.8
	1293	-32.5	0.240
		28.7	2.28

* : 統計計算の際に除外したもの。

第25表 江馬氏下館跡 S X 02 の 7.5mT
消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4} \text{ A m}^2/\text{kg}$)
C G 1281	-34.9	7.0	0.839
1282	-60.1	61.6	0.760
1283	-8.8	48.6	3.39
1284	-26.5	74.2	0.198
1285	73.4	69.1	0.326
*	1286	162.2	-42.4
*	1287	-127.1	0.177
	1288	42.5	-23.2
*	1289	146.5	0.266
*	1290	35.9	32.7
*	1291	-160.0	0.286
*	1292	90.6	-49.2
	1293	-29.5	0.534
*	1293	-14.0	78.9
*	1293	-29.5	0.440
*	1293	32.5	1.57

* : 統計計算の際に除外したもの。

第26表 江馬氏下館跡S X03のNRMの
磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ A m ³ /kg)
C G 1261	46.7	33.5	2.64
1262	55.0	46.8	4.19
1263	65.1	23.2	6.82
1264	34.4	37.0	2.56
1265	-3.1	66.7	3.41
*	1266	-75.0	74.3
*	1267	152.9	14.2
*	1268	2.0	49.9
*	1269	-54.4	-3.1
*	1270	91.1	-65.1
*	1271	22.0	-66.7
*	1272	41.4	50.5
*	1273	37.1	14.1
			5.04

* : 統計計算の際に除外したもの。

第27表 江馬氏下館跡S X03の2,5mT
消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ A m ³ /kg)
C G 1261	9.8	72.7	1.71
1262	12.2	49.6	1.48
1263	36.6	60.3	1.63
1264	16.0	57.7	1.96
1265	-14.8	55.1	0.963
1266	-20.4	51.0	2.58
*	1267	151.6	29.8
*	1268	16.1	58.0
*	1269	-24.1	37.5
*	1270	88.4	-65.4
*	1271	14.8	71.9
*	1272	23.7	60.1
*	1273	32.0	42.4
			1.71

* : 統計計算の際に除外したもの。

第28表 江馬氏下館跡S X03の5.0mT
消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ A m ³ /kg)
C G 1261	3.6	82.0	1.31
1262	-3.0	51.6	0.817
1263	-10.8	56.2	1.28
1264	20.8	59.3	1.56
1265	-21.3	67.7	0.425
1266	-4.9	40.3	1.77
*	1267	166.1	74.2
*	1268	74.0	51.8
*	1269	-10.4	45.6
*	1270	85.5	-63.9
*	1271	-8.4	-71.0
*	1272	37.0	72.5
*	1273	-76.6	58.1
			0.581

* : 統計計算の際に除外したもの。

第29表 江馬氏下館跡S X03の7.5mT
消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ A m ³ /kg)
C G 1261	116.9	84.8	1.099
1262	-10.3	42.4	0.532
*	1263	-78.6	22.8
*	1264	22.3	61.9
*	1265	-101.9	61.5
*	1266	-20.6	37.4
*	1267	-61.2	71.6
*	1268	65.6	46.0
*	1269	-1.7	45.8
*	1270	83.1	-57.3
*	1271	-22.5	-70.2
*	1272	57.0	67.4
*	1273	-113.2	31.2
			0.415

* : 統計計算の際に除外したもの。

第30表 江馬氏下館跡S X 05のNRMの
磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4} \text{A m}^2/\text{kg}$)
C G 1301	-18.9	47.7	1.42
1303	9.4	47.7	0.982
1304	-18.3	60.6	0.898
1305	-0.5	21.1	1.08
1306	-6.3	47.0	1.11
1307	-16.5	58.0	1.21
1308	-23.2	53.3	1.14
1309	12.6	30.3	1.01
*	1310	12.4	-5.0
*	1311	163.4	-40.3
*	1312	152.6	51.6
*	1313	153.1	44.0
*	1314	164.9	38.3
*	1315	-34.8	-9.0
*	1316	151.0	-2.7
*	1317	-32.4	-60.8
	1318	-15.6	36.5
*	1319	54.4	52.7
*	1320	-77.9	15.8

*: 統計計算の際に除外したもの。

第31表 江馬氏下館跡S X 05の2.5mT
消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4} \text{A m}^2/\text{kg}$)
C G 1301	-30.4	49.7	0.878
1303	27.4	47.2	0.624
1304	23.4	71.8	0.513
1305	16.2	48.1	0.708
1306	13.9	45.4	0.684
1307	-14.7	59.7	0.677
1308	-14.1	52.2	0.665
*	1309	23.7	24.1
*	1310	14.2	-6.1
*	1311	156.8	-22.8
*	1312	150.4	41.2
*	1313	148.7	36.5
*	1314	-176.7	20.3
*	1315	-56.5	23.6
*	1316	147.2	-2.4
*	1317	-27.0	-54.7
*	1318	-9.3	19.6
	1319	60.7	53.8
*	1320	-78.8	10.5

*: 統計計算の際に除外したもの。

第32表 江馬氏下館跡S X 05の5.0mT
消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4} \text{A m}^2/\text{kg}$)
C G 1301	-28.2	48.4	0.685
1303	44.1	37.4	0.527
1304	-37.6	87.4	0.315
1305	44.5	43.7	0.528
1306	3.2	54.4	0.407
1307	-21.9	81.2	0.373
1308	-35.6	55.6	0.410
*	1309	34.4	16.7
*	1310	15.2	-8.6
*	1311	157.5	14.3
*	1312	151.4	36.0
*	1313	147.8	38.7
*	1314	-163.9	-8.5
*	1315	-58.8	16.8
*	1317	-26.9	-48.4
*	1318	-4.3	-2.8
	1319	59.7	39.2
*	1320	-78.8	2.2

*: 統計計算の際に除外したもの。

第33表 江馬氏下館跡S X 05の7.5mT
消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4} \text{A m}^2/\text{kg}$)
C G 1301	-34.2	48.4	0.531
1303	52.4	33.2	0.450
1304	-161.6	83.9	0.239
1305	54.9	40.6	0.431
1306	9.0	42.6	0.308
1307	-134.1	78.3	0.256
1308	-43.2	52.1	0.326
*	1309	37.1	4.8
*	1310	14.3	-4.0
*	1311	158.0	39.7
*	1313	150.9	51.5
*	1314	-160.2	-24.6
*	1315	-55.1	8.7
*	1317	-28.4	-41.8
*	1318	-3.8	-21.6
	1319	66.2	36.1
*	1320	-76.4	-0.8

*: 統計計算の際に除外したもの。

第34表 江馬氏下館跡S X11のNRMの
磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ A m 2 /kg)
C G 1321	-54.8	32.2	3.12
*	1322	-41.6	48.0 2.32
1323	-63.3	30.0	2.90
1324	-44.1	25.8	2.81
1325	-54.7	30.7	3.37
1326	-56.4	17.6	3.60
1327	-48.7	29.6	2.70
1328	-46.1	33.0	2.70
1330	-48.7	17.3	2.36
1331	-54.5	25.6	2.89
1332	-58.3	29.0	3.06
1333	-49.0	22.0	2.64
1334	-56.4	22.1	3.44

*: 統計計算の際に除外したもの。

第35表 江馬氏下館跡S X11の2.5mT
消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ A m 2 /kg)
C G 1321	-35.1	56.1	1.40
1322	-17.5	62.8	1.53
1323	-68.5	49.7	1.27
1324	-27.5	39.7	1.17
1325	-50.6	54.2	1.42
1326	-50.2	32.7	1.09
1327	-25.4	42.8	1.13
1328	-15.5	47.9	1.27
1330	-12.4	20.0	0.674
1331	-38.4	35.1	1.12
1332	-42.9	56.8	1.24
1333	-25.3	28.5	1.12
1334	-41.0	30.5	1.45

第36表 江馬氏下館跡S X11の5.0mT
消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ A m 2 /kg)
C G 1321	-34.5	70.3	0.869
1322	16.2	70.7	0.981
*	1323	-103.4	58.2 0.700
1324	-4.0	36.5	0.665
1325	-52.6	64.2	0.890
1326	-43.6	36.9	0.526
1327	-2.4	50.8	0.552
1328	22.7	53.5	0.791
*	1330	15.2	-12.1 0.386
1331	-47.7	29.8	0.632
1332	-16.6	69.6	0.824
1333	-3.7	22.8	0.601
1334	-31.3	32.8	0.858

*: 統計計算の際に除外したもの。

第37表 江馬氏下館跡S X11の7.5mT
消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ A m 2 /kg)
C G 1321	-27.0	79.7	0.670
1322	51.1	70.5	0.769
*	1323	-128.4	55.4 0.562
1324	10.4	30.1	0.464
1325	-70.2	69.2	0.668
1326	-39.9	39.5	0.321
1327	18.5	49.0	0.336
1328	43.4	50.1	0.591
*	1330	35.3	-36.7 0.379
1331	-49.0	24.9	0.445
1332	4.5	76.1	0.658
1333	6.6	14.4	0.443
1334	-29.2	30.4	0.616

*: 統計計算の際に除外したもの。

第38表 江馬氏下館跡 S K13の焼け石のNRMの磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4} \text{ A m}^3/\text{kg}$)
C G1341a1	-99.3	15.4	0.00557
1341a2	-96.9	40.5	0.00652
1341b1	-94.2	25.3	0.00736
1341c1	-106.7	10.2	0.00510
1341c2	-111.3	31.0	0.00457
1341c3	-110.9	36.6	0.00682
C G1342a1	-112.1	-61.2	0.0986
1342a2	-141.2	14.4	0.138
C G1343a1	119.6	66.4	0.0925
1343b1	95.6	64.8	0.175
1343c1	79.6	61.0	0.198

第41表 江馬氏下館跡 S X01の焼け石のNRMの磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4} \text{ A m}^3/\text{kg}$)
C G1351a1	39.6	-8.8	0.00184
1351a2	47.0	31.8	0.00218
1351b1	-6.4	37.2	0.0028
C G1354a1	-42.7	55.7	0.763
1354a2	-41.5	57.9	0.464
1354b1	-32.7	53.6	0.0268
1354c1	-36.2	57.6	0.818

第39表 江馬氏下館跡 S K13の焼け石の150°C 消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4} \text{ A m}^3/\text{kg}$)
C G1341a2	-98.0	40.1	0.00517
1341b1	-114.0	16.9	0.00576
C G1342a1	-147.	-59.4	0.124
1342a2	-16693	22.0	0.375

第42表 江馬氏下館跡 S X01の焼け石の150°C 消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4} \text{ A m}^3/\text{kg}$)
C G1351a1	79.6	19.6	0.00221
1351a2	-1.6	-26.5	0.00169
C G1354a1	-36.8	52.7	0.623
1354a2	-77.5	53.3	0.350

第40表 江馬氏下館跡 S K13の焼け石の200°C 消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4} \text{ A m}^3/\text{kg}$)
C G1341a2	-96.9	39.4	0.00556
1341b1	-118.1	16.2	0.00563
C G1342a1	-143.	-59.1	0.127
1342a2	-16334	13.8	0.308

第43表 江馬氏下館跡 S X01の焼け石の200°C 消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4} \text{ A m}^3/\text{kg}$)
C G1351a1	90.0	10.7	0.00274
1351a2	-9.1	-52.3	0.00138
C G1354a1	-39.8	54.5	0.582
1354a2	-46.6	55.9	0.386

第44表 江馬氏下館跡焼土址の考古地磁気測定結果

遺構名	消磁段階	N	D (° E)	I (°)	α_{95} (°)	K	平均磁化強度 ($\times 10^{-4} \text{A m}^2/\text{kg}$)
S X02	(NRM	8	-22.9	50.8	25.45	5.7	2.71)
	(2.5mT	8	-43.9	55.8	22.62	6.9	1.77)
	(5.0mT	8	-27.5	60.9	27.76	5.7	1.38)
	(7.5mT	8	-13.5	59.8	27.54	5.0	0.976)
S X03	(NRM	8	38.8	42.0	16.45	12.3	3.45)
	2.5mT	11	7.7	57.8	9.25	25.3	2.65
	(5.0mT	8	-1.4	60.3	11.30	25.0	1.21)
	(7.5mT	9	0.7	67.0	19.63	7.8	0.811)
S X05	(NRM	9	-7.1	45.4	10.32	25.9	3.80)
	2.5mT	8	9.6	56.6	13.16	18.7	0.682
	(5.0mT	8	17.5	61.4	20.10	8.5	0.501)
	(7.5mT	8	22.9	63.4	26.54	5.3	0.406)
S X11	(NRM	12	-52.9	26.3	3.96	120.9	2.97)
	(2.5mT	13	-34.1	43.9	9.04	22.0	1.22)
	(5.0mT	11	-19.2	51.4	13.97	11.7	0.744)
	(7.5mT	11	-8.4	53.7	19.03	6.7	0.544)

N : 試料個数, D : 平均偏角, I : 平均伏角, α_{95} : フィッシャーの信頼角, K : フィッシャーの精度係数
() は年代推定のための考古地磁気データとして採用しなかったものを示す。

第45表 江馬氏下館跡焼け石の考古地磁気測定結果

遺構名	消磁段階	N	D (° E)	I (°)	α_{95} (°)	K	平均磁化強度 ($\times 10^{-4} \text{A m}^2/\text{kg}$)
S K13 C G1341	NRM	6	-103.2	26.7	11.33	35.9	0.00599
	150°C	2	-106.9	28.7	—	—	0.00547
	200°C	2	-108.7	28.2	—	—	0.00560
	NRM	2	-131.6	-24.0	—	—	0.118
C G1342	150°C	2	-106.9	28.7	—	—	0.00547
	200°C	2	-156.5	-22.9	—	—	0.218
	NRM	3	96.9	65.0	13.92	79.5	0.155
S X01 C G1351	NRM	3	28.6	21.9	60.37	5.2	0.00227
	150°C	2	40.3	-4.5	—	—	0.00195
	200°C	2	55.7	-29.5	—	—	0.00206
	NRM	4	-38.2	56.3	3.74	604.7	0.518
C G1354	150°C	2	-57.0	54.8	55.29	22.6	0.487
	200°C	2	-43.1	55.2	—	—	0.484

N : 試料個数, D : 平均偏角, I : 平均伏角, α_{95} : フィッシャーの信頼角, K : フィッシャーの精度係数

3 江馬氏城館跡1996年度出土漆器の塗膜分析

漆器文化財科学研究所 四柳嘉章

1 分析の方法

漆器は古代以来階級性を反映したものであり、塗膜の下に隠された情報を引き出すことによって、品質を解明することができる。その1つの方法が塗膜分析である。

塗膜分析は漆器の内外面数箇所から数mmの塗膜片を採取し、ポリエステル樹脂（リゴラック）に包埋後その断面を研磨のうえ、金属・偏光顕微鏡で観察する方法である。サンプルである手板試料と比較検討しながら髹漆や下地材料の同定を行うが、これによって表面観察では分からぬ時代的・地域的な髹漆の特色、製品の価値判断が把握できるので、遺跡・遺構における所有階層の推定やデータが集積されれば製品の流通問題にも迫ることが¹できる。

2 分析結果

塗膜分析を行った漆器は区画3の遺構面直上から1ブロック（No.0）、掘立柱建物S B12のS P222から3ブロック（No.1～3）、S B12と切り合っているS P223から2ブロック（No.4・5）が検出された。いづれも木胎は残っておらず塗膜片のみである。

以下その概要を表面観察と塗装工程について、木胎（木地）から順に番号（①～）を付して説明する（木胎への木固め工程の記述は特記すべきもの以外は省略）。層厚は1資料につき内外面各3点を分析したものの平均値であり、必ずしも図版のスケールとは一致しない。本稿で用いる用語などについては前回報告を参照いただきたい。

◇資料A 皆朱漆器（第96図の1～3、第97図の4・5）

分析の結果No.0とNo.2は同一個体と判明した。

器形・表面観察

あまり腰が張らずに斜上方に開くやや浅めの皆朱（内外面赤色）有台皿（盃）ないし小型椀。口唇部と高台皿付けには中塗の黒色漆が残されている。上塗漆は鮮やかな緋色でマニセル値7.5R 4.5/11。塗膜のみであり、樹種や木取りは不明。内面全体に漆独特の縮み皺と刷毛目が残っており、漆液容器に転用されたことが知られる（第96図の1）。

塗膜分析（第96図の2・3、第97図の4）

口縁部外面（第96図の2）①口縁部に布着せが施されており、ヨコ糸はやや円形で織

維束幅は径165 μm 、タテ糸纖維束幅は長径100 μm 前後である。②地の粉漆下地層。層厚はヨコ糸頂部で112 μm 、最下部で200 μm である。地の粉（鉱物粒子）は石英、斜長石、有色鉱物などから構成。大きなものは石英の68×107 μm はじめ、大小各種サイズのものを含む粗い地の粉である。③黒色漆層。層厚18～20 μm 。黒色顔料は油煙で粒子は0.2 μm 以下の均質な微粒子である。④漆層。層厚15 μm 前後。⑤漆層。層厚10 μm 前後。⑥赤色（朱）漆層。層厚18～20 μm 。表層と下層の凹凸が著しい。粒子は径1～2 μm 前後と0.5 μm 以下の均一な微粒子から構成されている。

体部内面（第96図の3、第97図の4）①体部のため布着せはみられない。②地の粉漆下地層。層厚190～200 μm 。鉱物粒子の構成は内面に同じ。③黒色漆層。層厚40～48 μm 。部分的に大きな塊（34×72 μm ）を含んでいる。④漆層。層厚24 μm 前後。⑤漆層。層厚38 μm 前後。⑥赤色（朱）漆層。層厚29 μm 前後。朱粒子の構成は内面と同じであるが、内面の朱漆はごく薄い部分があり、上手な上塗とはいえない。⑦漆層。この層は漆液容器の部分で、大小のゴム質水球の分散がみられるので生漆と判断される。

◇資料B 朱漆器 器形不明（第97図の6・7）

分析の結果No.1・3・4・5は同一個体と判明。

器形・表面観察

漆塗膜のみであり、器形や内外面の別などは不明。上塗漆は鮮やかな緋色でマンセル値7.5R 4.5/11。

塗膜分析

内外面不明のためA面、B面として記述する。

A面（No.1、第97図の6）①炭粉漆下地層。層厚は24～50 μm で、炭粉粒子は沈殿している。炭粉粒子は主に1×9 μm 、1×17 μm 、2×15 μm 前後の針状粒子、径2～4 μm の台形・方形粒子から構成。②漆層。層厚12 μm 前後。③赤色（朱）漆層。層厚17～19 μm 。表層と下層の凹凸が著しい点は資料Aと同じである。朱粒子は径1～2 μm 前後と0.5 μm 以下の均一な微粒子から構成されている。

B面（No.5、第97図の7）①炭粉漆下地層。層厚は60～97 μm で、炭粉粒子は沈殿している。炭粉粒子はA面に同じ。②漆層。層厚24 μm 前後。③赤色（朱）漆層。層厚32 μm 前後。特色はA面に同じ。

3 小 結

漆器は上質品の漆下地から普及品の渋下地漆器まで、階層や行事に対応したランクのものが生産されており、塗装工程（髹漆）や下地、加飾の材料を解明することによって所有階層推定に役立てることができる。こうした観点から江馬氏城館跡下館跡1995年度出土漆

器をみると、普及型の渋下地であるが上塗が朱塗であることから、渋下地漆器としては良品であると判断された²。品質としては被官クラスのものであり、江馬氏そのもののステータスとは結びつかなかったが、今回の調査によって江馬氏の漆家財と手工業の実態にせまる重要な知見が得られた。以下、要点を箇条書きにまとめ結びとしたい。

①柱穴 S P222と切りあう S P223出土漆器は同一個体（資料B）であることが判明。

②区画3の遺構面直上から出土した漆液容器に転用された皆朱漆器（資料A）とS P222から出土したもの一部が同一個体であることが判明。つまり、これら2個体は同一時期（15世紀）であり、上段から転落したものと考えられる。

③資料A・Bとも漆下地（本堅地）とよばれる上質品であり、とくに資料Aの髹漆は地の粉漆下地→黒色漆→漆→漆→朱漆という高級漆器であることが判明した。類似したものは新潟県頸城村水久保遺跡³や新潟県新発田市宝積寺遺跡⁴、岐阜県大垣市大垣城郭町C遺跡⁵などから出土しているが、本例が最も丁寧といえる。下地のうえに施された油煙による黒色顔料を含んだ「黒色漆」は、漆器が上層階級の独占物であった古代以来のものである。中世においては手箱・化粧箱・硯箱などの高級品に用いられるが⁶、食器に用いられることは少ない⁷。まさに江馬氏の家財としてふさわしいものであろう。木製品に適した遺跡状況であれば1463（寛正4）年の「新見地頭方政所見搜物色々在中」（東寺百合文書サ函123）に引用される、瓶子・銚子・提子・鏡箱・蒔絵の茶入れ・薬壺・湯蓋台・茶盆・香箱・折敷・椀・皿などの漆器が検出されたと思われる。

またこの皆朱漆器（資料A）は破損後、漆液容器に転用されたわけであるが、それは区画2において何らかの漆作業が行われたことを意味する。遺跡の性格と漆液容器の質を考慮すれば漆職人の存在を考えても大過ないであろう。遺構の配置や他の城館跡の例からして区画2は職人の工房ないし居住区と推定されてきたが⁹、漆液容器の出土によってその可能性は一層強くなったといえる。

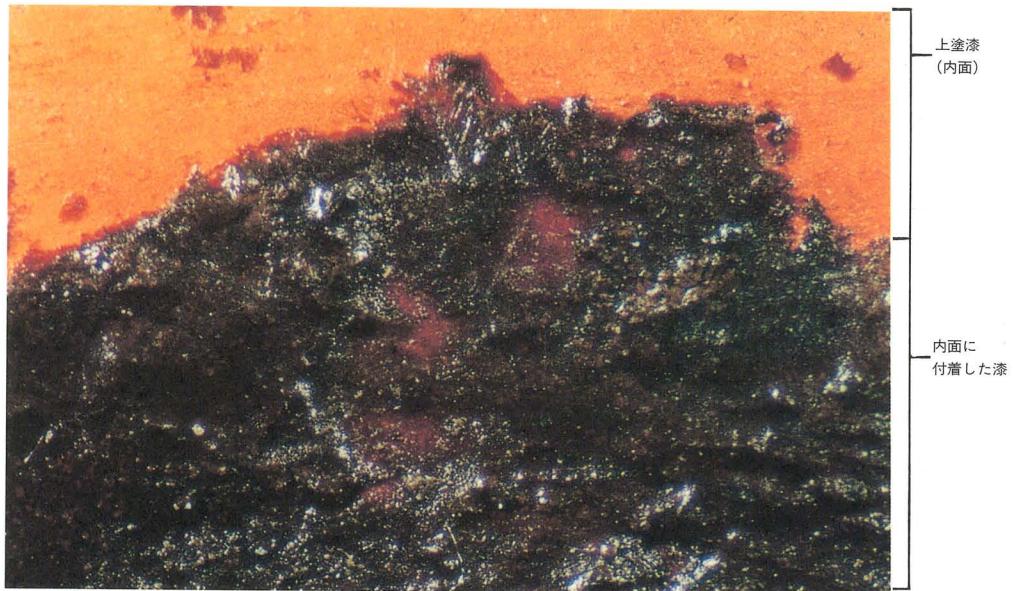
以上、要点のみを列記したが、15・16世紀における漆器所有や朱漆器の意義については、前回報告をはじめいくつか紹介したことがあるので参照していただければ幸いである。¹⁰

末筆ながら調査にあたっては富山大学前川 要助教授、神岡町教育委員会大平愛子氏から種々のご便宜を図っていただいた。厚く御礼申し上げる。

（注）

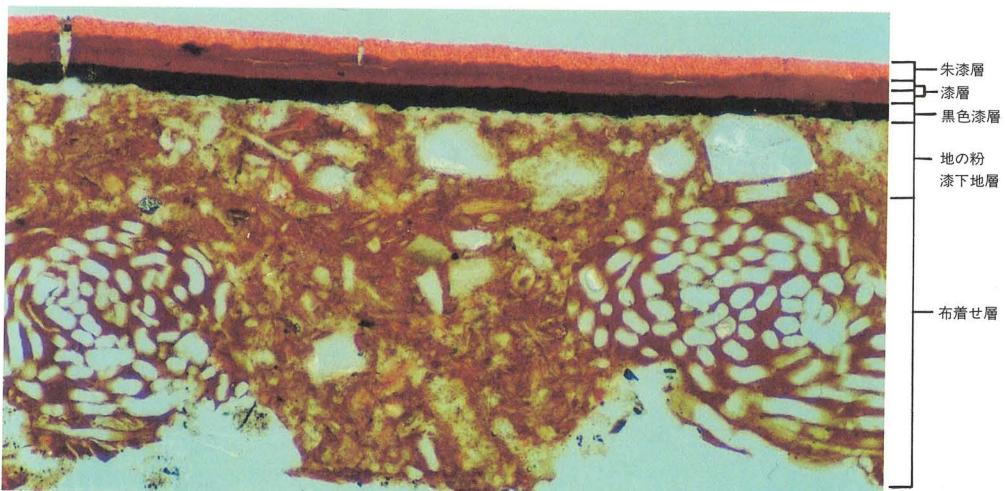
- 1 四柳嘉章「漆器考古学の方法と中世漆器」『考古学ジャーナル』401号、1996
 - 2 四柳嘉章「江馬氏城館跡下館跡出土漆器の塗膜分析」『江馬氏城館跡II一下館跡門前地区と庭園の調査一』岐阜県神岡町教育委員会・富山大学考古学研究室、1996
- 本稿において下地材料としてモミガラの可能性を検討課題としたが、その後の分析でモミガ

- ラではなく炭粉粒子であることを確認した。
- 3 四柳嘉章「新潟県水久保遺跡出土漆器の塗膜分析」『水久保遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団, 1996
 - 4 田中耕作・鶴巻康志ほか『三光館跡・宝積寺遺跡』新潟県新発田市教育委員会, 1990
四柳嘉章「新潟県水久保遺跡出土漆器の塗膜分析」『水久保遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団, 1996
 - 5 大垣市教育委員会調査, 報告書近刊
 - 6 四柳嘉章「埼玉県広木上宿遺跡出土漆箱の科学的分析」『財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第170集・広木上宿遺跡—古代・中世編』埼玉県埋蔵文化財調査事業団, 1996
 - 7 四柳嘉章「三島市御殿川流域遺跡群出土漆器の塗膜分析」『三島市御殿川流域遺跡群II—平成2・3年度一級河川御殿川小規模河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』静岡県埋蔵文化財研究所, 1994
 - 8 小泉和子「莊園政所の家財と生活」『朝日百科 日本歴史2』, 1986
 - 9 神岡町教育委員会『1996年度江馬氏城館跡下館跡発掘調査の成果』現地説明会資料, 1996
 - 10 四柳嘉章『掘り出された縄文～中世の漆器』日本漆文化会議, 1995
四柳嘉章「漆器」『概説中世の土器・陶磁器』真陽社, 1995
四柳嘉章「16世紀の漆器—七尾城跡シッケ地区遺跡出土漆器の塗膜分析（第2次報告）」『石川考古学研究会々誌』38号, 1995
四柳嘉章「北陸・東北における古代・中世漆器の髹漆技術と画期」『石川考古学研究会々誌』35号, 1992



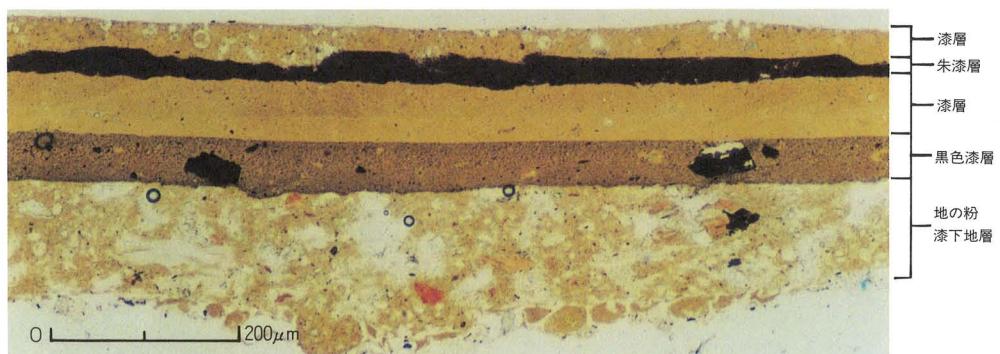
1 資料A (No.0) 皆朱椀 (内面、漆液容器に転用)

(×13)



2 同上 (口縁部外面)

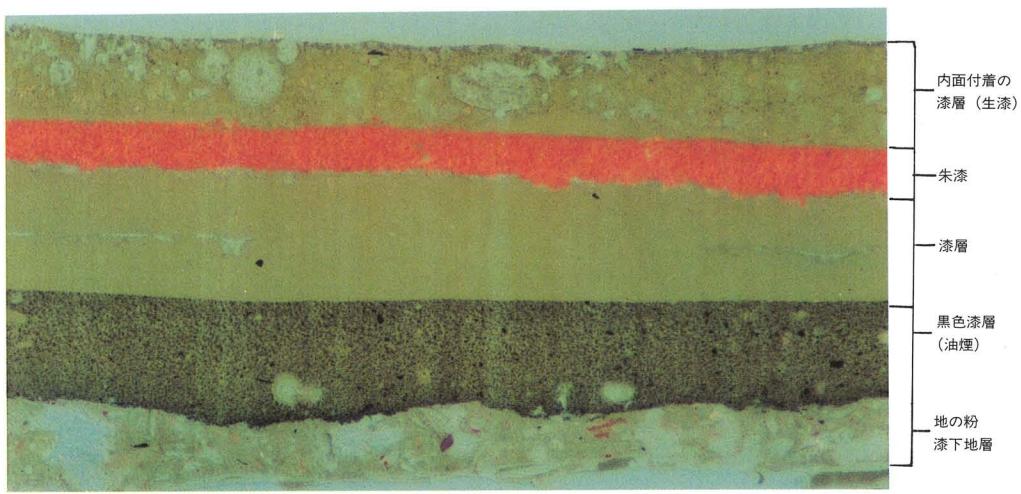
(×130)



3 同上 (体部内面)

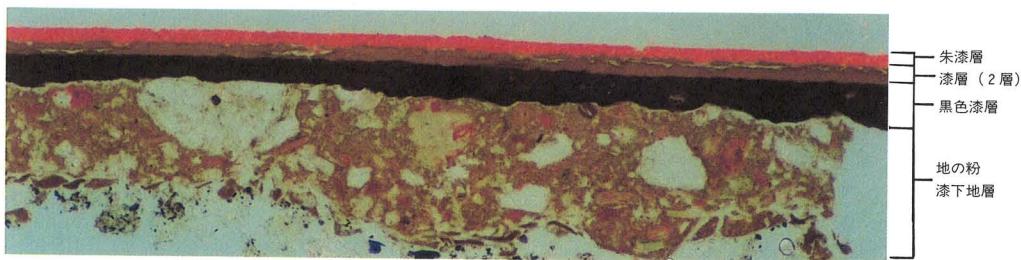
(×130)

第96図 漆器塗膜層の顕微鏡写真 (1)



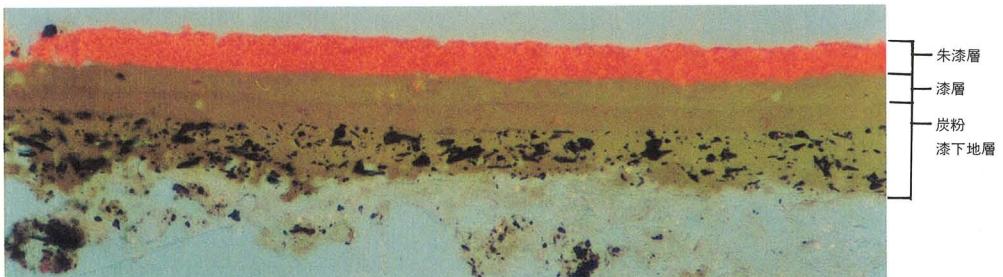
4 資料A (No. 0) 皆朱漆器 (体部内面)

(×260)



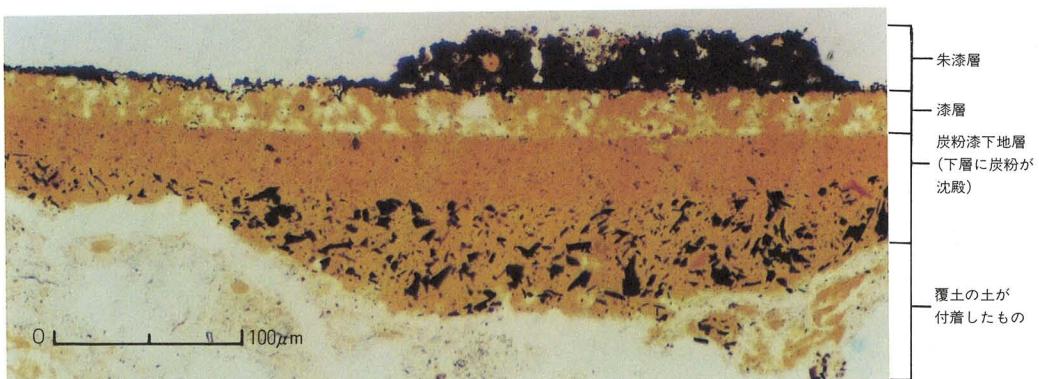
5 資料A (No. 2) 同上

(×130)



6 資料B (No. 1) 朱漆器 (A面)

(×260)



7 資料B (No. 5) 朱漆器 (B面)

(×260)

第97図 漆器塗膜層の顕微鏡写真 (2)

4 江馬氏下館跡出土鉄砲玉の鉛同位体比測定結果

国立歴史民俗博物館 斎藤 努

1 はじめに

神岡町教育委員会より依頼のあった、江馬氏下館跡出土資料について鉛同位体比を測定したので報告する。

2 試 料

分析を行った資料は、1978年度調査で出土した鉛製の鉄砲玉1点で、16世紀のものと考えられる。提供資料の表面から1mg以下の極微量をサンプリングし、測定用試料とした。

3 方 法

国立歴史民俗博物館において最近新たに開発された「高周波加熱分離—鉛同位体比測定法」^{1・2}を用いて分析を行った。この方法によれば、従来法に比べ、低ブランクで迅速（鉛の分離に要する時間：約15分）に、高精度な測定を行うことが可能である。

4 結 果

鉛同位体比の測定結果を第46表に示した。第46表の分析番号は当博物館で独自につけたものである。測定結果は、これまでに報告されている東アジアの青銅器および鉛鉱石のデータと比較するために、馬淵、平尾たちの方法に準じて図示した。ここでは、縦軸に $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ 、横軸に $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ をプロットする「A式図」と、縦軸に $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ 、横軸に $^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ をプロットする「B式図」とを用いた。この表示法によれば、弥生時代～平安時代における青銅器の鉛同位体比の変遷を、下記のように示すことができる。

第46表 江馬氏下館跡出土鉄砲玉の鉛同位体比

分析番号	$\frac{^{207}\text{Pb}}{^{206}\text{Pb}}$	$\frac{^{208}\text{Pb}}{^{206}\text{Pb}}$	$\frac{^{206}\text{Pb}}{^{204}\text{Pb}}$	$\frac{^{207}\text{Pb}}{^{204}\text{Pb}}$	$\frac{^{208}\text{Pb}}{^{204}\text{Pb}}$
L 1802	0.8463	2.0992	18.638	15.775	39.131

すなわち、

- A：弥生時代に将来された前漢鏡の範囲（華北の鉛）
- B：後漢・三国時代の舶載鏡の範囲（華中～華南の鉛）
- C：日本産鉛の範囲
- D：弥生時代に将来された多鈕細文鏡、細形銅劍などの範囲（朝鮮半島の鉛）

第98・99図中の記号A～Dは、これらに対応する。

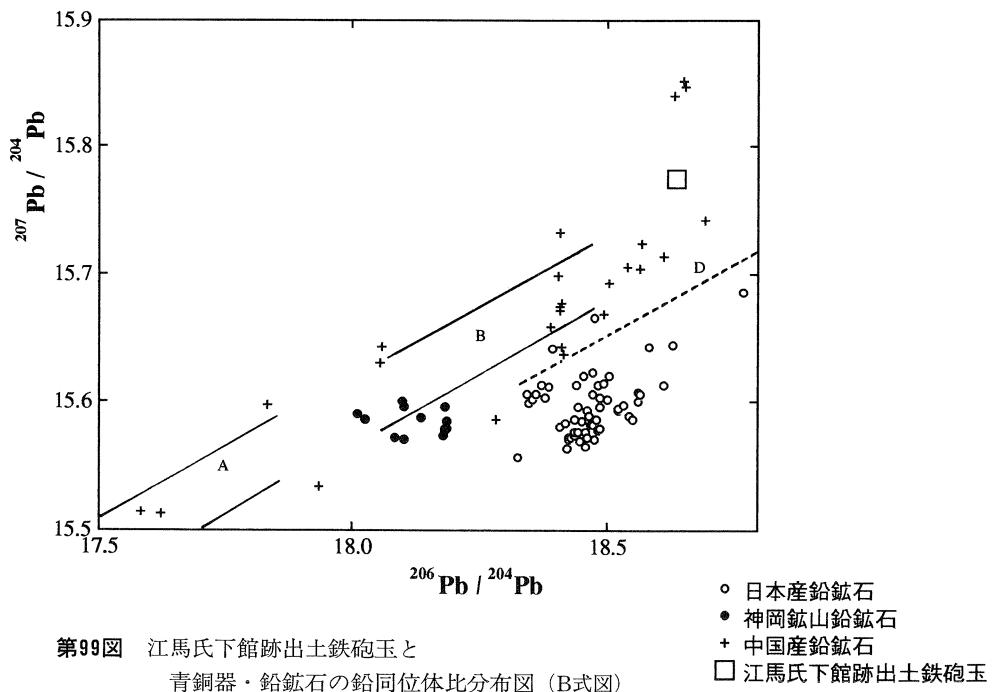
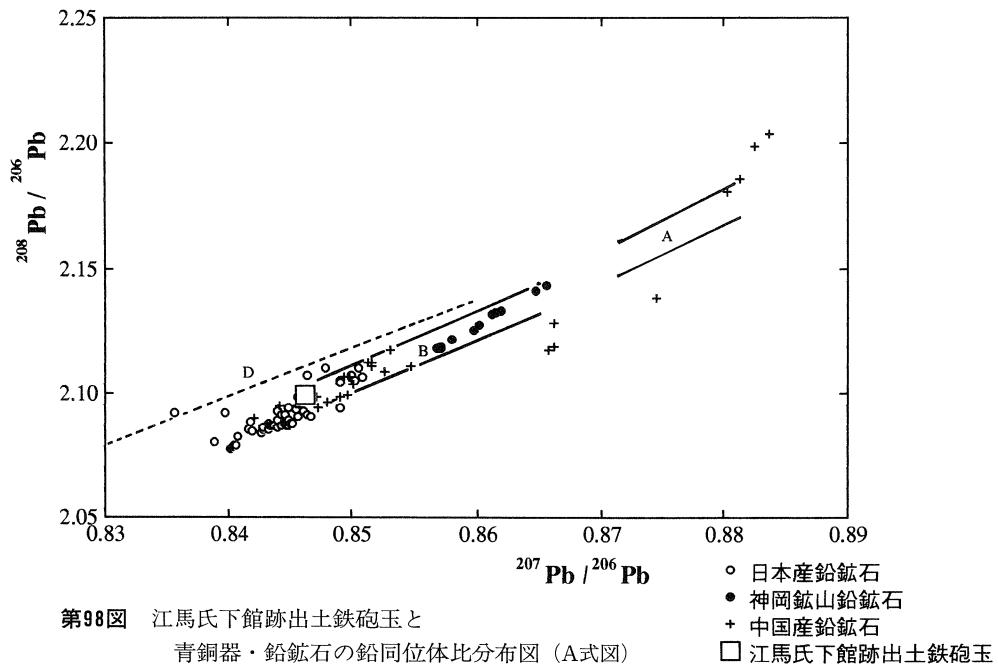
神岡鉱山産の鉛鉱石の鉛同位体比は、他の日本産鉛鉱石のそれが収まる範囲からは外れていることが知られている。^{3～5} 第98・99図に、今回測定を行った鉄砲玉の鉛同位体比を、神岡鉱山産鉛鉱石、神岡鉱山以外の日本産鉛鉱石、中国産鉛鉱石のデータとともにプロットした。⁵ 鉛鉱石の値は馬淵、平尾が報告したものを使用した。

この結果を見ると、今回測定を行った鉄砲玉の鉛同位体比は、神岡鉱山産鉛鉱石の数値範囲とは一致していない。A式図（第98図）では日本産鉛と中国後漢・三国時代鏡の両領域の重なる部分に位置している。この両領域を識別できるB式図（第99図）で見ると、この資料のデータは日本産鉛の範囲からは外れ、むしろ中国産鉛に近い数値を示していることがわかる。

以上より、今回測定した鉄砲玉の原料鉛は、日本産ではなく中国産である可能性が高い。ただし、どのような経緯でこの原料が使用されるにいたったかということは不明である。

参考文献

- 1 斎藤 努、田口 勇（1994）：日本文化財科学会第11会大会研究発表要旨集、91
- 2 Tsutomu SAITO (1994) : The Third International Conference on the Beginning of the Use of Metals and Alloys, 40
- 3 馬淵久夫、平尾良光（1982）：MUSEUM, 370, 4
- 4 馬淵久夫、平尾良光（1982）：MUSEUM, 370, 16
- 5 馬淵久夫、平尾良光（1987）：考古学雑誌, 73 (2), 199



参 考 文 献 (五十音順)

- 青森県市浦村教育委員会 1996 『十三湊遺跡—市浦村第1次・第2次発掘調査概報—』
- 朝野熙彦 1996 『入門多変量解析の実際』 講談社サイエンティフィック
- 穴水町教育委員会 1987 『西川島—能登における中世村落の発掘調査—』
- 網野善彦・石井 進編 1992 『中世都市と商人職人』 帝京大学山梨文化財研究所シンポジウム報告集
- 市村高男 1992 「戦国期東国の城郭と城下町の実態」『北の中世 史跡整備と歴史研究』 日本エディタースクール出版部
- 上田秀夫 1982 「14~16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』 №2, 日本貿易陶磁研究会
- 宇野隆夫 1992 「食器計量の方法と意義」『国立歴史民俗博物館研究報告』 第40集, 国立歴史民俗博物館
- 宇野隆夫 1994 a 「考古学からみた日本生産流通史—2000年余の歴史を二分する転換点について—」『日本史研究』 第380号, 日本史研究会
- 宇野隆夫 1994 b 「日本海における中世の生産と流通」『中世都市十三湊と安藤氏』 国立歴史民俗博物館
- 宇野隆夫 1996 「木製食器と土製食器—弥生変革と中世変革—」『古代の木製食器—弥生期から平安期にかけての木製食器—』 発表要旨, 埋蔵文化財研究会・第39回埋蔵文化財研究集会実行委員会
- 大山町 1964 『大山町史』
- 岡村利平 1912 『飛騨山川』 住伊書店
- 小野正敏 1984 a 「福井県一乗谷における陶磁器の組成と機能分担」『貿易陶磁研究』 №4, 日本貿易陶磁研究会
- 小野正敏 1984 b 「第4回貿易陶磁研究集会・その成果と課題」『貿易陶磁研究』 №4, 日本貿易陶磁研究会
- 小野正敏 1985 「出土陶磁よりみた15, 16世紀における画期の素描」『MUSEUM』 №416, 東京国立博物館
- 小野正敏 1991 a 「中世陶磁器研究の視点と方法」『考古学と中世史研究』 帝京大学山梨文化財研究所シンポジウム報告集
- 小野正敏 1991 b 「城館出土の陶磁器が表現するもの」『中世の城と考古学』 新人物往来社
- 小野正敏 1994 「戦国期の館・屋敷の空間構造とその意識」『信濃』 531号, 信濃史研究会
- 金子拓男・前川 要編 1994 『守護所から戦国城下へ—地方政治都市論の試み—』 1993年度日本考古学協会シンポジウム報告集

- 勝沼氏館跡発掘調査団 1975『勝沼氏館跡発掘調査概報』山梨県教育委員会
勝沼氏館跡発掘調査団 1977『勝沼氏館跡発掘調査概報』II, 勝沼町教育委員会
勝沼氏館跡発掘調査団 1978『勝沼氏館跡発掘調査概報』III, 勝沼町教育委員会
鎌倉考古学研究所 1994『中世都市鎌倉を掘る』日本エディタースクール出版部
神岡町 1972『神岡町史』史料編上巻(中世・近世・近代)
神岡町 1982『神岡町史』特集編(飛騨国野史・国説集成)
神岡町教育委員会 1979『江馬氏城館跡発掘調査概報』
神岡町教育委員会 1981『江馬氏城館跡保存管理計画策定報告書』
神岡町教育委員会 1994『ふるさと「神岡」探検マップ』
神岡町教育委員会 1995『飛騨の神岡』
神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 1995『江馬氏城館跡一下館跡発掘調査報告書I—』
神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 1996『江馬氏城館跡II一下館跡門前地区と庭園の調査—』
神岡町役場総務課 1992『神岡町勢要覧』資料編
河野真知郎 1989「街のなかのゴミ処理問題」「武士の都鎌倉」よみがえる中世3, 平凡社
岐阜県 1968『岐阜県史』通史編近世上
岐阜県 1969『岐阜県史』通史編中世
岐阜県 1969『岐阜県史』資料編古代・中世1
岐阜県 1973『岐阜県史』史料編古代・中世4
岐阜県郡上郡大和村教育委員会 1984『東氏館跡発掘調査報告書』
岐阜市教育委員会 1990『城之内遺跡』
葛谷鮎彦 1970『中世江馬氏の研究』神岡町
葛谷鮎彦 1972「越中街道」「飛騨の街道」飛騨運輸株式会社
国立歴史民俗博物館 1993『日本出土の貿易陶磁』
国立歴史民俗博物館 1994『中世都市十三湊と安藤氏』
小島道裕 1984「戦国期城下町の構造」『日本史研究』第257号, 日本史研究会
小島道裕 1990「平地城館跡と寺院・村落—近江の事例から—」『中世城郭研究論集』新人物往来社
小島道裕 1995「地籍図及び絵図による検討」『江馬氏城館跡一下館跡発掘調査報告書I—』神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室
小島道裕 1996『江馬氏下館と江馬氏—文献史料による考察—』『江馬氏城館跡II一下館跡門前地区と庭園の調査—』神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室
小林幹 1972「信州街道」「飛騨の街道」飛騨運輸株式会社
酒井重洋 1990「越中における在地窯の諸問題」中世北陸の在地窯—生産と流通の諸問題

- 』北陸中世土器研究会
- 坂井秀弥 1991 「絵図にみる城館と町」『中世の城と考古学』新人物往来社
- 千田嘉博 1994 「古城探検隊」『歴史読本』第39巻, 新人物往来社
- 千田嘉博 1995 「江馬氏の山城」『江馬氏城館跡——下館跡発掘調査報告書 I —』神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室
- 多賀秋五郎 1941 「第5編第2章 社会経済」『飛騨史の研究』下巻, 濃飛文化研究会
- 高橋與右衛門 1992 「発掘された中世の建物跡」『北の中世史跡整備と歴史研究』日本エディタースクール出版部
- 中世土器研究会 1995 『概説中世の土器・陶磁器』
- 中世都市研究会 1994 『都市空間』中世都市研究1
- 中世都市研究会 1995 『古代から中世へ』中世都市研究2
- 中世都市研究会 1996 『津・泊・宿』中世都市研究3
- 東海埋蔵文化財研究会 1989 『清須—織豊期の城と都市—』研究報告編
- 富山県井口村教育委員会 1990 『井口城跡発掘調査概要』
- 中井 均 1987 「中世城館の発生と展開」『物質文化』48, 物質文化研究会
- 中井 均 1990 「織豊系城郭の画期」『中世城郭研究論集』新人物往来社
- 中井 均 1991 「中世の居館・寺そして村落—西国を中心として—」『中世の城と考古学』新人物往来社
- 中井 均 1996 「安土城前夜—主として寺院からみた石垣の系譜—」『織豊城郭』第3号, 織豊期城郭研究会
- 中条町教育委員会 1993~1996 『江上館跡』I~IV
- 長野県中野市教育委員会 1993 『高梨氏館跡発掘調査報告書』
- 新村秀一 1995 『パソコンによるデータ解析』講談社ブルーバックス
- 仁木 宏 1991 「戦国・織豊期の都市把握はどうなされたか」『争点日本の歴史』4, 新人物往来社
- 丹生川村教育委員会 1993 『尾崎城跡発掘調査概報』
- 橋口定志 1987 「中世居館の再検討」『東京考古』5, 東京考古学談話会
- 橋口定志 1991 「中世居館研究の現状と問題点」『争点日本の歴史』4, 新人物往来社
- 服部英雄 1995 「第IV部中世城館の研究視覚2 中世城館の機能」『景観にさぐる中世』新人物往来社
- 菱村正文 1972 a 「総論」『飛騨の街道』飛騨運輸株式会社
- 菱村正文 1972 b 「平湯街道」『飛騨の街道』飛騨運輸株式会社
- 兵庫県教育委員会 1989 『中尾城跡—近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書 XI —』
- 福井県教育委員会 1979 『一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告』I

- 福井県教育委員会 1990 『一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告』 III
- 福井県教育委員会・福井県立朝倉氏遺跡資料館 1983 『一乗谷朝倉氏遺跡県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書』
- 藤澤良祐 1986 「瀬戸大窯発掘調査報告」『研究紀要』 V, 瀬戸市歴史民俗資料館
- 藤澤良祐 1991 a 「瀬戸古窯址群II—古瀬戸後期様式の編年—」『研究紀要』 X, 瀬戸市歴史民俗資料館
- 藤澤良祐 1991 b 「城館出土の瀬戸・美濃大窯製品」『中世の城と考古学』新人物往来社
- 藤澤良祐 1995 「瀬戸古窯址群III—古瀬戸前期様式の編年—」『研究紀要』 第3輯, (財)瀬戸市埋蔵文化財センター
- 藤澤良祐 1996 「中世瀬戸窯の動態」『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界～その生産と流通～』 (財)瀬戸市埋蔵文化財センター設立5周年シンポジウム資料集
- 藤原良章 1988 「中世の食器・考—〈かわらけ〉ノート—」『列島の文化史』第5号, 日本エディタースクール出版部
- 北陸中世土器研究会 1991 『城館遺跡出土の土器・陶磁器』
- 北陸中世土器研究会 1993 『中世北陸の家・屋敷・暮らしぶり』
- 埋蔵文化財研究会・大阪市文化財協会 1990 『中近未から近世のまち・むらと都市』第1分冊発表要旨編
- 前川佳代 1993 「平泉の鎮守」『古代文化』第45巻第9号, 古代学協会
- 馬淵和雄 1991 「都市の周縁, また周縁の都市—いわゆる方形堅穴建築址による中世都市論の試み—」『青山考古』第9号, 青山考古学会
- 馬淵和雄 1994 「武士の都鎌倉—その成立と構想をめぐって—」『都市鎌倉と坂東の海に暮らす』中世の風景を読む2, 新人物往来社
- 村瀬一郎 1979 「岐阜県・概説」『日本城郭大系』9, 新人物往来社
- 本澤慎輔 1993 「12世紀平泉の都市景観の復元—現在の地形景観と発掘調査の成果をもとに—」『古代文化』第45巻第9号, 古代学協会
- 森田 勉 1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2, 日本貿易陶磁研究会
- 湯本軍一 1991 「信濃高梨氏城下の景観復元」『中世の村落と現代』吉川弘文館
- 横田賢次郎・森田 勉 1978 「太宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4, 九州歴史資料館
- 吉岡康暢 1994 「中世須恵器の研究」吉川弘文館
- 吉岡泰英 1983 「朝倉館の建築的考察」『朝倉氏遺跡資料館紀要』福井県立朝倉氏遺跡資料館
- 脇田晴子 1981 『日本中世都市論』東京大学出版会

別 表

凡　例

〈柱穴・土坑計測表〉

No. : 調査時・報告書での通し番号。ただし S B・S Aについては、1995年度門前地区からの通し番号を継承した。

X・Y : 1 m単位の調査座標で遺構の位置を示した。

平面形：円形、楕円形、方形、不整形の形に分類した。

データ：[長径][短径][深さ][底面レベル] の値。

埋　土：堆積に層位があるものは第20図～第22図参照。

断面形：第5表の分類表に依拠して表示した。

出土遺物：●国産土器、■国産陶器、○中国陶磁器、▲鉄製品、□その他、で表した。

備　考：遺構の切り合い関係は>、<の記号で表した。

切り合い不明は、遺構≠遺構と表した。

調　査：×はすでに1976～1978年度調査時において完掘していた遺構を表わす。

〈遺物計測表〉

No. : 報告書での通し番号。

種　類：土師器、珠洲、瀬戸美濃、青磁などの名称。

器　種：椀、皿、すり鉢、盤など用途別の分類。

X・Y : 1 m単位の調査座標で出土地点を示した。

遺　構：遺物の出土遺構名。空白は遺構外である。

層　位：遺物の出土した土層名。層位図参照。

レベル：遺物の出土標高値。水準はT.P.である。

法　量：口=口径、底=底径、高=器高を示している。

括弧のつかないデータが完形値、〔 〕が復元値、()が現存値である。

個体数：口縁部計測法(宇野1992)による。

備　考：時期別分類、重量、その他を示す。

整理No.：調査時の取り上げ番号。

別表 1 建物計測表

遺構No.	桁行柱間	梁行柱間	桁行(cm)	桁行(尺)	梁行(cm)	梁行(尺)	平面積(m ²)	主軸方位	備 考
S B11	3	2	659	21.75	421	13.89	27.7439	N-61.5°-E	S B11≠S K19·S X01·S B12
S B12	3	3	595	19.64	583	19.24	34.6885	N-62.5°-E	S X01>S B12>S P223, S B12≠S K19·S B11
S B13	3	2	622	20.53	435	14.36	27.0570	N-62.0°-E	S D03>S B13, S B13≠S K19·S K20
S B14	3	2	722	23.83	423	13.96	30.5406	N-27.0°-W	S B14≠S P76·S P121·S P301
S B15	4	3	804	26.53	616	20.33	49.5264	N-61.5°-E	S P529·S P535>S B15
S B16	3	3	602	19.87	592	19.54	35.6384	N-31.5°-W	S B17>S B16, S B16≠S P527
S B17	5	2	975	32.18	403	13.30	39.2925	N-64.5°-E	S P514·S P526·S K12>S B17>S P496·S P524·S P564·S I 02·S B16 2間×2間の張り出しが北辺東側につく

別表 2 棚列計測表

遺構No.	柱間	総長(cm)	総長(尺)	主軸方位	備 考
S A11	4	820	27.06	N-66.0°-E	
S A12	4	963	31.78	N-25.5°-W	S A12>S P87·S P89
S A13	4	795	26.24	N-27.5°-W	S A13≠S I 01

別表 3 積穴住居計測表

(単位: cm)

No.	X	Y	平面形	長径	短径	深さ	底面レベル	出土遺物	備 考
S I 01	-83.4	-33.0	方形	328	320	22	454.885		S I 01≠S A13·S P331·S P333·S P335·S P337·S P512
S I 02	-89.6	-24.3	*			10	455.303	●●, 炭	S B17·S K18>S I 02

別表 4 溝計測表

(単位: cm)

No.	検出長	最大幅	最小幅	平均幅	深さ	埋土	主軸方位	出土遺物	備 考	調査
S D01	177	24	17	20.5	6.0		N-31.5°-W			×
S D02										
S D03	531	49	31	40.0	4.7	図版44	N-24.0°-W	●●●	欠番 S D03>S B13·S X01	
S D04										
S D05										
S D06	151	33	24	28.5			N-13.4°-E			
S D07										
S D08	427	65	37	51.0			N-64.5°-E	●●●■○, 炭	S D08≠S P559·S P560·S P561·S P562	
S D09										

別表5 土坑計測表

(単位: cm)

No.	X	Y	平面形	長径	短径	深さ	底面レベル	埋土	出土遺物	備考	調査
S K01	-72.3	-9.0	楕円形	76	50	22.0	455.642				×
S K02	-72.2	-11.6	*	133	42	16.5	455.672				×
S K03	-73.7	-11.5	楕円形	88	62	30.0	455.582				×
S K04	-73.3	-16.0	楕円形	76	52	20.5	455.647				×
S K05	-73.8	-17.6	不整形	90	74	28.5	455.532				×
S K06	-79.5	-7.2	不整形	114	98	11.0	455.822	図版45			×
S K07	-79.1	-15.3	不整形	70	39	16.5	455.712				×
S K08	-83.7	-11.1	不整形	93	65	7.5	455.852				×
S K09	-82.2	-19.3	円形	124	108	20.5	455.647	図版45	●	S P109> S K09	完掘
S K10・11	-95.2	-20.5	*	307	172	24.2	455.265	図版45	●8■2○□2, 炭		完掘
S K12	-93.5	-33.9	円形	75	72	9.0	454.990	図版45	■■○	S K12> S K13・S B17・S P526	完掘
S K13	-93.9	-33.1	方形	133	112	20.3	454.790	図版45	●5■2○4▲4	S K12> S K13> S P484	完掘
S K14	-95.2	-32.7	楕円形	104	88	12.2	454.801	図版45	■		完掘
S K15	-80.9	-36.0	不整形	309	212	44.9	454.567			S K15≠ S P339・S P340・S P341・S P342・S P343	×
S K16	-77.3	-38.7	*	144	128	36.8	454.611			S K16≠ S P324・S P515	×
S K17	-96.3	-31.5	*	372	48	32.0	454.600	●●, 炭		S P566> S K17	半截
S K18	-87.8	-24.9	楕円形	87	62	19.9	455.144	図版45	●	S K18> S I02	トレンチ
S K19	-87.7	-11.4	方形	231	221	31.2	455.647			S K19≠ S X01・S B11・S B12・S B13	×
S K20	-89.8	-13.7	方形	334	181	16.9	455.817			S K20≠ S B13・S X01・S P198・S P199・S P203・S P208・S P487	×
S K21	-72.3	-10.0	楕円形	72	54	16.0	455.692				×
S K22	-80.9	-20.2	*	92	47	24.3	455.569				完掘
S X01	-87.4	-15.4	方形	682	238	32.0	455.592	図版44	●61■45○2▲11, 炭	S D03・S P296・S P507> S X01≠ S B11・S P132・S P139・S P173・S P175・S P176・S P178・S P487・S K19・S K20> S B12・S P516・S P517・S P531	×
S X08	-87.5	-25.7	円形	51	49	24.7	455.090		■○		トレンチ
S X10	-88.5	-26.9	楕円形	112	32	2.7	455.280				トレンチ
S X11	-81.5	-31.8	不整形	68	32	6.5	454.963				×

別表 6 柱穴計測表

(単位: cm)

No.	X	Y	平面形	長径	短径	深さ	柱痕跡	底面レベル	埋 土	断面形	出土遺物	備 考	調査
S P001	-72.2	-8.1	楕円形	44	24	15		455.752		B			×
S P002	-72.8	-8.8	円形	36	34	13		455.727		A			×
S P003												欠番	
S P004	-73.0	-11.9	円形	18	16	14		455.722		B			×
S P005	-72.6	-13.2	円形	22	20	10		455.757		B			×
S P006	-73.2	-13.8	円形	40	34	15		455.702		A			×
S P007	-72.2	-15.6	*	22	13	31		455.537		A			×
S P008	-74.3	-15.6	円形	23	19	13		455.712		B			×
S P009	-73.7	-15.8	不整形	37	36	17		455.672	黒褐色	C-2			
S P010	-73.3	-16.0	円形	40	35	22		455.622	第20回	A			
S P011	-73.2	-16.5	不整形	23	20	19		455.632	黒褐色	B			
S P012	-72.5	-16.6	方形	21	19	16		455.642	黒褐色	B			
S P013	-73.9	-16.7	円形	32	30	25	円形 径16	455.567	第20回	C-2			
S P014	-73.5	-16.8	不整形	55	32	26		455.557	黒褐色	B			
S P015	-73.3	-17.0	円形	22	20	18		455.542	黒褐色	B			
S P016												欠番	
S P017	-72.3	-17.9	方形	27	24	18		455.522	黒褐色	B			
S P018	-73.0	-5.9	方形	20	18	12		455.752		B			×
S P019	-73.7	-9.0	円形	44	42	9		455.757		A	底面に石1		×
S P020	-73.6	-9.5	円形	23	21	10		455.742		C-2			×
S P021												欠番	
S P022	-73.5	-10.1	円形	24	22	17		455.792		A			×
S P023	-74.8	-10.3	円形	30	30	16		455.687		A			×
S P024	-75.0	-11.8	円形	24	24	11		455.762		C-1			×
S P025												欠番	
S P026	-73.9	-13.3	円形	40	38	12		455.737		A			×
S P027	-74.8	-15.8	不整形	40	27	19	円形 径16	455.657	第20回	A			
S P028	-74.7	-18.1	円形	21	21	12		455.642	黒褐色	A			
S P029	-74.7	-18.9	方形	25	24	18		455.562	黒褐色	A			
S P030	-74.2	-19.1	不整形	27	21	14		455.592	黒褐色	A			
S P031												欠番	
S P032												欠番	
S P033	-74.7	-8.9	円形	26	24	13		455.732		C-2			×
S P034	-76.4	-7.6	不整形	42	26	15		455.747		A			×
S P035	-76.1	-7.9	円形	20	18	9		455.807		A			×
S P036	-76.3	-8.5	円形	26	23	8		455.802		A			×
S P037	-76.7	-8.9	楕円形	36	26	6		455.802		B			×
S P038	-76.1	-11.3	円形	40	32	30		455.572		A			×
S P039	-75.0	-12.0	円形	23	20	8		455.787		B			×
S P040	-76.1	-13.2	円形	30	30	17		455.677		A			×
S P041												欠番	
S P042	-75.7	-13.7	円形	52	44	13		455.727		A	S B14柱穴		×
S P043	-75.2	-13.8	円形	24	22	8		455.782		B			×
S P044	-76.5	-14.2	円形	22	21	17		455.687		B			×
S P045	-75.8	-15.8	円形	33	30	11		455.767	黒褐色	A	S B14柱穴		
S P046	-76.6	-16.1	楕円形	26	18	16		455.702	暗茶褐色	A			
S P047												欠番	
S P048	-75.9	-16.5	円形	24	19	9		455.762	黒褐色	A			×
S P049	-76.3	-16.3	楕円形	32	26	12		455.732	黒褐色	A			×
S P050	-75.7	-17.8	円形	31	28	29		455.482	黒褐色	B	S B14柱穴		
S P051	-79.2	-8.8	楕円形	30	20	8		455.832		A			×
S P052	-78.5	-9.8	不整形	34	24	8		455.792		B			×
S P053	-79.0	-10.5	円形	22	22	9		455.792		A			×
S P054	-79.1	-10.7	円形	24	18	10		455.777		B			×
S P055	-77.3	-11.3	円形	18	16	17		455.697		B			×
S P056	-78.7	-12.5	円形	22	23	6		455.807		B			×
S P057	-78.0	-13.5	円形	40	36	10		455.752		A	S B14柱穴		×
S P058												欠番	
S P059	-77.7	-15.1	不整形	40	32	12		455.752		B			×
S P060	-78.2	-15.6	楕円形	40	32	10		455.812		A	S B14柱穴		×

江馬氏城館跡III

別表6 のつづき

(単位: cm)

No.	X	Y	平面形	長径	短径	深さ	柱痕跡	底面レベル	埋 土	断面形	出土遺物	備 考	調査
S P061												欠番	
S P062	-77.4	-16.9	方形	24	22	13		455.717	B				
S P063	-78.2	-17.7	方形	47	35	6		455.772	A			S B14柱穴	
S P064	-77.5	-18.6	方形	29	27	28	円形 径16	455.522	黒褐色	A			
S P065	-80.1	-8.2	不整形	42	29	9		455.852	A				×
S P066	-79.7	-10.1	方形	24	22	12		455.767	A				×
S P067	-79.6	-10.4	円形	20	16	7		455.822	A				×
S P068	-80.1	-11.0	不整形	39	31	13		455.757	A				×
S P069	-80.2	-12.7	方形	32	24	11		455.792	C-2				×
S P070	-80.1	-13.4	円形	28	24	4		455.832	A				×
S P071	-80.4	-13.4	円形	37	32	11		455.787	A			S B14柱穴 S P71≠S P301	×
S P072												欠番	
S P073	-80.4	-14.1	円形	34	29	13		455.767	A				×
S P074	-79.7	-15.1	方形	47	45	13		455.767	A				×
S P075	-80.7	-14.8	不整形	31	26	6		455.827	C-2				×
S P076	-80.2	-15.4	円形	31	27	8		455.792	A			S P76≠S P77	×
S P077	-80.5	-15.3	楕円形	52	40	31		455.382	A			S B14柱穴 S P77≠S P76	×
S P078	-80.4	-15.8	楕円形	30	20	16		455.712	黒褐色	C-2			
S P079	-80.1	-17.3	円形	22	22	5		455.817	B				
S P080												欠番	
S P081	-80.5	-17.5	円形	32	32	17		455.702	黒褐色	A			S B14柱穴
S P082	-79.6	-18.4	楕円形	38	28	10		455.752	B				
S P083												欠番	
S P084												欠番	
S P085												欠番	
S P086	-80.1	-19.8	円形	20	20	8		455.772	B				
S P087	-80.4	-19.9	楕円形	25	17	7		455.682	黒褐色	B			S P88>S P87
S P088	-80.5	-19.7	円形	33	28	12		455.672	黒褐色	A			S A12柱穴 S P88>S P87-S P89
S P089	-80.6	-19.5	円形	27	24	9		455.722	黒褐色	A			S P88-S P90>S P89
S P090	-80.7	-19.5	円形	26	22	15		455.722	黒褐色	A			S P90>S P89
S P091	-81.5	-7.4	円形	30	29	9		455.862	A				
S P092	-82.3	-6.5	不整形	26	17	7		455.867	B				×
S P093	-82.7	-7.4	円形	31	28	12		455.872	A				×
S P094	-82.8	-9.4	円形	26	26	13		455.782	A				×
S P095	-81.6	-10.5	楕円形	18	14	12		455.777	A				×
S P096	-81.6	-12.6	不整形	22	18	10		455.787	B				×
S P097	-81.7	-13.0	円形	26	24	23		455.672	A				×
S P098	-82.1	-13.0	円形	24	24	13		455.734	A				×
S P099	-82.3	-14.1	不整形	38	24	15		455.747	C-2				×
S P100	-82.2	-14.5	円形	17	14	16		455.747	A				×
S P101	-81.6	-15.4	円形	20	19	15		455.722	A				×
S P102	-81.7	-15.2	円形	17	16	6		455.832	A				×
S P103												欠番	
S P104	-82.2	-16.0	楕円形	27	19	4		455.842	黒褐色	B			
S P105	-82.6	-16.7	円形	27	26	18		455.717	黒褐色	A			
S P106	-82.1	-17.6	円形	21	18	18		455.732	黒褐色	A			
S P107	-82.4	-17.8	楕円形	28	19	12	円形 径6	455.772	C-2				
S P108	-83.0	-17.5	不整形	41	34	15		455.747	黒褐色	A			S B14柱穴
S P109	-82.7	-19.2	楕円形	51	44	70		455.122	第20回	A			S P109>S K09
S P110	-83.0	-19.7	不整形	55	40	13		455.692	黒褐色	A			S A12柱穴
S P111	-83.7	-20.1	*	58	26	15		455.732	黒褐色	A			
S P112	-84.6	-6.4	楕円形	48	42	7		455.912	B				×
S P113	-84.0	-7.2	円形	28	27				B				×
S P114	-84.8	-9.3	円形	26	25	10		455.852	B				×
S P115	-83.0	-12.3	楕円形	36	20	9		455.817	B				×
S P116	-83.2	-12.2	不整形	24	22	18		455.812	A				×
S P117	-82.9	-12.7	円形	26	20	8		455.837	A				×
S P118	-83.3	-12.9	楕円形	30	20	5		455.867	A				×
S P119	-82.9	-13.3	方形	32	28	9		455.812	C-2				S B14柱穴

別 表

別表6のつづき

(単位: cm)

No.	X	Y	平面形	長径	短径	深さ	柱痕跡	底面レベル	埋 土	断面形	出土遺物	備 考	調査
S P120	-82.9	-14.1	方形	20	17	10		455.802	B				×
S P121	-82.8	-15.4	円形	17	14	7		455.832	A		S P121≠S P122		×
S P122	-82.9	-15.3	円形	39	35	19		455.702	A		S B14柱穴 S P122≠S P121		×
S P123	-83.6	-15.3	楕円形	25	19	2		455.872	A		石1		×
S P124	-83.3	-16.2	楕円形	48	42	25		455.637	黒褐色	B	底面に石1		
S P125	-86.7	-6.7	円形	30	29	24		455.772	A				×
S P126											欠番		
S P127	-86.9	-7.7	円形	36	34	14		455.847	A				×
S P128	-86.9	-8.6	楕円形	34	26	35		455.642	A				×
S P129	-85.8	-9.8	円形	22	20	8		455.892	A				×
S P130	-85.8	-10.0	円形	20	18	7		455.907	B				×
S P131	-85.5	-10.3	円形	34	32	24		455.707	A		S B12柱穴		×
S P132	-85.5	-11.6	円形	42	40	25		455.687	A		S P132≠S X01		×
S P133	-85.0	-11.9	不整形	50	32	15		455.792	B		S B13柱穴		×
S P134	-83.8	-13.0	円形	30	30	10		455.822	A				×
S P135	-84.5	-12.8	円形	24	22	22		455.727	A		底面に石1		×
S P136	-85.7	-12.5	円形	42	40	21		455.692	A		S B12柱穴 上面に石1		×
S P136											S P136≠S X01		
S P137	-84.4	-14.2	楕円形	28	24	15		455.767	B				×
S P138	-84.4	-14.7	楕円形	22	18	6		455.857	B				×
S P139	-86.5	-11.8	不整形	34	24	13		455.752			S P139≠S X01		×
S P140	-86.1	-14.0	円形	22	21	5		455.842	A				×
S P141	-85.8	-14.5	円形	35	34	27		455.637	A		S B12柱穴		×
S P142	-85.5	-15.0	円形	31	28	20		455.672	A				×
S P143	-84.7	-15.4	楕円形	30	23	14		455.777	C-1				×
S P144	-85.4	-16.0	円形	46	45	20	円形 径12	455.702	第20回	A		S B13柱穴	
S P145	-85.8	-16.0	円形	18	18	3		455.852	黒褐色	B			
S P146	-86.2	-15.6	円形	17	17	7		455.782	B				×
S P147	-86.3	-15.8	楕円形	31	20	5		455.812	黒褐色	B			
S P148	-85.8	-16.4	円形	42	34	42	円形 径14	455.472	第20回	A		S B12柱穴 底面に石1	
S P149	-85.6	-16.6	楕円形	36	22	21		455.672	第20回	B			
S P150	-86.4	-16.5	円形	23	22	11		455.812	B				
S P151											欠番		
S P152	-85.5	-18.1	方形	34	28	22		455.659	黒褐色	A		S B13柱穴	
S P153	-85.1	-18.2	楕円形	44	30	20	円形 径15	455.632	第20回	C-2			
S P154	-86.1	-18.2	円形	43	36	19		455.682	暗茶褐色	A	●		
S P155	-84.6	-19.8	円形	29	28	9		455.762	黒褐色	B			
S P156	-85.5	-19.7	楕円形	46	32	16		455.674	黒褐色	B	●	S A12柱穴	
S P157	-85.0	-19.9	円形	31	24	19		455.632	黒褐色	B			
S P158	-85.7	-20.0	*	23	11	9		455.694	黒褐色				
S P159											欠番		
S P160	-88.6	-6.6	円形	38	36	6		455.947	A				×
S P161	-89.3	-6.6	円形	38	34	7		455.947	A				×
S P162	-90.0	-6.6	円形	32	30	27		455.762	A				×
S P163	-90.5	-7.0	方形	40	30	24		455.767	A				×
S P164	-89.5	-8.6	円形	34	30	6		455.942	A				×
S P165	-90.1	-8.4	円形	32	32	34		455.662	A				×
S P166	-87.1	-9.7	円形	40	38	9		455.882	A				×
S P167											欠番		
S P168	-86.9	-10.3	*	28	11	23		455.742	A		S B11柱穴 S P168≠S K19		×
S P169	-87.4	-10.3	*	33	13	19		455.772	A		S B12柱穴 S P169≠S K19		×
S P170	-88.8	-10.3	円形	34	30	20		455.772	A		S B11柱穴		×
S P171	-89.3	-10.2	円形	32	30	13		455.832	A		S B12柱穴 底面に石1		×
S P172	-87.2	-11.6	楕円形	50	40	31		455.352	A		S B13柱穴 S P172≠S K19		×
S P173	-86.4	-12.7	楕円形	29	20	9		455.652	A		S P173≠S X01		×
S P174	-86.9	-12.6	円形	27	26	8		455.587	A		S B11柱穴 S P174≠S X01		×
S P175	-86.5	-13.7	楕円形	50	30	53		455.357	C-1		S P175≠S X01		×
S P176	-87.4	-13.6	円形	26	26	13		455.462	A		S P176≠S X01 上面に石1		×
S P177	-86.9	-14.7	円形	40	39	24		455.442	A		S B11柱穴 埋土に石1		×
											S P177≠S X01		

江馬氏城館跡III

別表6 のつづき

(単位: cm)

No	X	Y	平面形	長径	短径	深さ	柱痕跡	底面レベル	埋 土	断面形	出土遺物	備 考	調査
S P178	-87.5	-15.0	円形	30	24	8		455.597	A			S P178≠S X01	×
S P179	-87.9	-19.7	円形	30	28	54		455.422	黒褐色	B	●	S A12柱穴	
S P180	-88.1	-19.9	楕円形	38	29	20		455.592	黒褐色	B	■	S P180>S P497	
S P181	-92.0	-6.5	円形	26	24	20		455.787	A				×
S P182	-91.5	-8.5	円形	30	30	11		455.882	A			S P182≠S P183	×
S P183	-91.7	-8.5	円形	28	26	8		455.922	A			S P183≠S P182	×
S P184	-90.4	-9.1	円形	29	24	26		455.747	A				×
S P185	-91.0	-9.3	楕円形	36	27	14		455.842	A				×
S P186	-91.5	-9.0	楕円形	33	24	8		455.897	B				×
S P187	-91.1	-9.9	方形	16	14	9		455.892	B				×
S P188	-91.2	-10.2	楕円形	36	27	25		455.722	C-2			S B11柱穴 S P188≠S P189	×
S P189	-91.4	-10.2	楕円形	50	31	30		455.692	C-2			S B12柱穴 S P189≠S P188	×
S P190	-89.7	-10.3	長方形	16	10	6		455.927	B				×
S P191	-90.3	-10.7	円形	32	30	23		455.763	A				×
S P192	-90.1	-11.2	楕円形	30	20	13		455.857	B				×
S P193	-91.6	-10.8	円形	26	22	19		455.812	A				×
S P194	-91.2	-11.2	円形	25	24	9		455.902	A			S P194≠S P195	×
S P195	-91.4	-11.3	楕円形	42	33	17		455.812				底面に石1 S P195≠S P194	×
S P196	-91.2	-11.7	円形	22	20	8		455.927	B				×
S P197	-92.0	-11.7	楕円形	22	18	13		455.887	B				×
S P198	-90.2	-12.4	楕円形	34	27	9		455.797	B			S P198≠S K20	×
S P199	-90.3	-12.6	楕円形	36	25	12		455.757	B			S P199≠S K20	×
S P200	-91.2	-12.4	円形	34	30	20		455.772	B			S B11柱穴 S P200≠S P201	×
S P201	-91.5	-12.2	円形	40	38	38		455.592	C-1			S B12柱穴 S P201≠S P200	×
S P202	-89.5	-13.5	円形	40	34	33		455.522	B			S B13柱穴 S P202≠S K20	×
S P203	-90.2	-13.3	円形	22	22	44		455.402	B			S P203≠S K20	×
S P204	-91.0	-13.4	円形	28	22	11		455.817	A				×
S P205	-91.1	-13.7	円形	26	25	11		455.812	A				×
S P206	-91.5	-14.2	円形	40	36	13		455.792	B			S B12柱穴	×
S P207	-91.4	-14.5	楕円形	42	32	35		455.582	A			S B11柱穴	×
S P208	-90.4	-15.0	楕円形	28	21				C-2			S P208≠S K20	×
S P209	-91.0	-15.4	円形	30	28	9		455.822	B				×
S P210	-89.6	-15.6	楕円形	44	35	8		455.837	C-1			S B13柱穴	×
S P211	-89.3	-16.0	円形	20	18	15		455.752	第20回	A		S P500>S P211	
S P212	-89.8	-16.2	円形	32	28	31	円形 径16	455.612	第20回	B		S B12柱穴 埋土に石3	
S P213	-91.0	-15.9	円形	22	20	9		455.822	黒褐色	A			
S P214	-89.3	-16.4	円形	28	24	21		455.692	黒褐色	B	●		
S P215	-89.4	-16.8	楕円形	36	28	25		455.642	黒褐色	B		S B11柱穴	
S P216	-90.6	-16.4	円形	22	20	16		455.747	黒褐色	A		埋土に石1	
S P217	-90.1	-17.0	円形	26	26	10		455.807	黒褐色	A	▲	S P218>S P217	
S P218	-90.4	-17.0	円形	36	35	25	円形 径24	455.642	第20回	C-2	●	S P218>S P217·S P219	
S P219	-90.5	-17.2	円形	24	22	18		455.732	第20回	B		S P218>S P219	
S P220	-90.2	-17.4	楕円形	22	17	11		455.802	黒褐色	A			
S P221	-91.1	-17.4	方形	36	32	15		455.802					
S P222	-91.8	-16.1	円形	38	38	18	円形 径18	455.712	第20回	A	●●	S B12柱穴 埋土に石2	
S P223	-91.7	-16.3	円形	30	22	53		455.362	第20回	B		S P222>S P223	
S P224	-91.9	-16.5	円形	37	34	39		455.512	黒褐色	B	●	S P222>S P223	
S P225	-91.5	-16.8	不整形	42	23	28		455.632	黒褐色	B	●	S B11柱穴	
S P226	-91.8	-16.9	円形	10	6	12		455.792	B				
S P227	-92.2	-16.9	円形	24	21	17		455.747	黒褐色	B			
S P228	-91.4	-17.9	円形	22	20	14		455.757	黒褐色	B			
S P229	-91.7	-18.0	円形	34	34	6		455.842	黒褐色	A	●●●	埋土に石2	
S P230	-92.2	-17.5	方形	20	19	16		455.757	黒褐色	A			
S P231	-90.2	-19.7	円形	59	48	9		455.777	黒褐色	A		S A12柱穴 埋土に石1	
S P232	-90.8	-19.8	円形	17	16	9		455.738	A				
S P233	-94.2	-6.5	円形	26	24	25		455.753	B				×
S P234	-94.2	-7.1	方形	20	20	27		455.714	A				×
S P235	-94.6	-7.1	方形	24	22	18		455.844	A				×
S P236	-94.4	-7.4	円形	22	16	57		455.426	A				×

別 表

別表6のつづき

(単位: cm)

No.	X	Y	平面形	長径	短径	深さ	柱痕跡	底面レベル	埋 土	断面形	出土遺物	備 考	調査
S P237	-93.9	-7.9	円形	25	20	15		455.856		A			×
S P238	-94.2	-7.7	円形	27	26	19		455.811		A			×
S P239	-93.2	-8.3	円形	25	22	9		455.902		A			×
S P240												欠番	
S P241	-93.3	-8.7	楕円形	22	18	13		455.862		A			×
S P242	-93.8	-8.3	円形	29	27	9		455.896		C-2			×
S P243	-94.2	-8.3	円形	31	30	20		455.800		B			×
S P244	-94.6	-8.0	楕円形	40	28	28		455.736		C-2			×
S P245	-93.0	-9.1	円形	35	34	6		455.919		A	S A11柱穴		×
S P246	-94.1	-9.0	方形	30	28	19		455.795		A	埋土に石1		×
S P247	-94.3	-9.0	*	22	12	11		455.866		A	S P247≠S P248		×
S P248	-74.5	-8.0	楕円形	50	36	18		455.810		B	S P248≠S P247		×
S P249												欠番	
S P250	-94.2	-7.8	円形	32	28	29		455.687		B	S P250≠S P251		×
S P251	-94.3	-10.1	楕円形	36	28	35		455.637		A	S P251≠S P250		×
S P252	-94.6	-9.7	円形	30	26	18		455.795		A			×
S P253												欠番	
S P254	-92.8	-10.6	円形	18	18	5		455.942		B			×
S P255	-93.0	-11.4	楕円形	60	41	15		455.842		B	S A11柱穴		×
S P256	-94.1	-10.8	円形	32	32	27		455.717		A			×
S P257	-94.4	-10.8	円形	40	40	19		455.787		A			×
S P258												欠番	
S P259	-93.8	-11.5	方形	20	19	14		455.862		B			×
S P260	-92.3	-12.1	円形	25	24	11		455.877		B			×
S P261	-93.4	-12.1	楕円形	32	26	16		455.847		A			×
S P262	-94.1	-12.5	円形	27	24	10		455.877		A	S P262≠S P263		×
S P263	-94.3	-12.3	円形	32	31	31		455.692		A	S P263≠S P262		×
S P264	-94.6	-11.8	楕円形	46	35	20		455.807		B			×
S P265	-94.8	-11.6	円形	19	18	18		455.812		B			×
S P266	-92.9	-13.2	円形	42	40	6		455.907		B	S A11柱穴		×
S P267	-94.6	-13.5	円形	30	26	26		455.717		A	S P267≠S P268		×
S P268	-94.7	-13.3	円形	19	15	13		455.827		A	S P268≠S P267		×
S P269	-95.0	-13.2	*	30	28	16		455.820		C-2	S P269≠S P509		×
S P270	-92.9	-14.5	円形	34	30	27		455.662		A			×
S P271	-94.5	-14.6	円形	51	44	40		455.547		B			×
S P272	-95.0	-14.3	円形	26	22					B			×
S P273	-92.4	-15.2	円形	32	30	7		455.847		A			×
S P274	-92.9	-15.5	方形	41	34	8		455.827		B	S A11柱穴		×
S P275												欠番	
S P276												欠番	
S P277	-92.7	-16.1	円形	24	22	24		455.662	黒褐色	B			
S P278	-93.0	-16.6	円形	26	18	24		455.692	黒褐色	B			
S P279	-93.6	-16.4	円形	28	27	25	円形 径5	455.652	第20回	B		S P280>S P279	
S P280	-93.5	-16.6	円形	25	28	22		455.692	第20回	B		S P280>S P279	
S P281	-93.8	-16.6	方形	20	20	22		455.697	A				
S P282	-92.9	-17.3	不整形	36	32	9		455.817	黒褐色	B		S A11柱穴	
S P283	-94.7	-16.5	円形	32	25	20		455.692	A				
S P284	-95.3	-16.6	円形	21	22	28		455.612	A				
S P285	-92.0	-18.8	楕円形	40	23	71		455.142	第20回	B	●●■	S P285>S P498	
S P286	-93.3	-18.8	不整形	31	26	32		455.512	黒褐色	B	■	上面に石1	
S P287	-93.6	-18.7	円形	29	26	54		455.322	黒褐色	B			
S P288	-94.1	-18.8	円形	37	34	50		455.322	黒褐色	B			
S P289	-95.1	-18.7	円形	32	28	26		455.552	暗茶褐色	A			
S P290	-91.7	-19.8	*	26	16	18		455.657	黒褐色	A		埋土に石1	
S P291	-87.5	-20.0	*	34	17	5		455.772	黒褐色	B		S P291>S P497	
S P292	-84.8	-16.0	楕円形	32	28	16	円形 径11	455.732	第20回	A			
S P293	-84.2	-12.1	楕円形	28	18	7		455.862	A				
S P294	-85.6	-11.0	楕円形	26	18	13		455.802	B				
S P295	-83.0	-20.1	方形	17	14	10		455.579	黒褐色	B	●●●		
S P296	-86.5	-19.6	楕円形	47	30	4		455.762	B	●●●		S P296>S X01	

江馬氏城館跡III

別表6 のつづき

(単位: cm)

No	X	Y	平面形	長径	短径	深さ	柱痕跡	底面レベル	埋土	断面形	出土遺物	備考	調査
S P297	-94.9	-10.6	*	30	11	6		455.927	A				×
S P298	-86.9	-19.8	円形	28	26	10		455.702	B				
S P299	-87.3	-19.6	楕円形	30	24	11		455.722	B		S P299> S P300		
S P300	-87.5	-19.7	楕円形	26	14	15		455.726	A		S P299> S P300		
S P301	-80.4	-13.2	*	30	13	7		455.817	B		S P301≠ S P71		×
S P302	-94.1	-5.8	*	21	6	10		455.888	B				×
S P303	-79.3	-25.9	円形	30	28	14		455.158	暗茶褐色	A			
S P304	-76.7	-28.0	楕円形	40	32	20		455.150	第21図	B			
S P305	-75.5	-34.6	方形	27	22	25		454.782	暗茶褐色	A			
S P306	-75.2	-34.9	円形	37	36	46		454.577	黒褐色	B	S A13柱穴		
S P307	-75.8	-34.8	楕円形	27	24	19		454.852	暗茶褐色	B			
S P308	-75.6	-35.3	円形	36	32	44	楕円形 径12	454.540	第21図	C-1	埋土に石1		
S P309	-75.3	-36.2	円形	32	30	40		454.606	黒褐色	B			
S P310	-76.3	-35.5	円形	29	27	11		454.913	暗茶褐色				
S P311	-76.4	-36.1	円形	25	20	43		454.594	黒褐色	B			
S P312	-76.3	-36.3	円形	26	22	29		454.725	暗茶褐色	B			
S P313	-76.5	-36.5	円形	28	26	31		454.686	暗茶褐色	B			
S P314	-77.3	-34.7	円形	45	41	59	円形 径23	454.440	第21図	B	S A13柱穴		
S P315	-77.7	-34.8	円形	26	21	23	楕円形 径13	454.810	第21図	B			
S P316	-77.4	-35.9	円形	25	22	21		454.822	黒褐色	B			
S P317	-78.2	-35.9	楕円形	42	36	65		454.366		A			×
S P318	-78.6	-35.8	円形	31	30	28		454.719		A			×
S P319	-77.2	-36.1	円形	30	26	25		454.796	暗茶褐色	B			×
S P320	-78.5	-36.3	円形	28	26	21		454.787		A			
S P321	-77.5	-36.7	楕円形	60	40	39		454.643	第21図	B			
S P322	-78.0	-36.5	円形	32	30	53		454.507	黒褐色	B			
S P323	-78.4	-36.7	楕円形	49	38	31		454.679		A	S P324≠ S K16		×
S P324	-79.1	-31.4	円形	28	27	12		454.922		A			×
S P325	-81.2	-31.2	円形	30	28	15		454.893		A			×
S P326	-81.5	-32.9	円形	30	30	8		454.940		A			×
S P327	-83.2	-31.1	円形	28	27	11		454.937		A			×
S P328	-82.1	-31.9	円形	29	27	58		454.384		B	S I 01柱穴		×
S P329	-84.4	-31.9	円形	34	33	48		454.433		A	S I 01柱穴		×
S P330	-82.2	-34.3	楕円形	37	28	30		454.596		A	S I 01柱穴		×
S P331	-83.9	-34.4	楕円形	36	18	12		454.797		A	S P331≠ S I 01		×
S P332	-84.7	-34.2	楕円形	33	22	39		454.489		A	S I 01柱穴		×
S P333	-81.8	-34.7	円形	28	26	27		454.844		A	S P333≠ S I 01		×
S P334	-81.2	-34.6	円形	34	30	34		454.687		A	S A13柱穴		×
S P335	-82.1	-34.7	円形	32	15	13		454.925		A	S P335≠ S I 01		×
S P336	-83.2	-34.6	楕円形	38	32	24		454.757		A	S A13柱穴 S P336≠ S I 01		×
S P337	-84.7	-34.6	円形	36	34	41		454.605		A	S P337≠ S I 01		×
S P338	-79.2	-34.6	楕円形	44	36	38		454.644		A	S A13柱穴		×
S P339	-80.5	-36.4	楕円形	40	27	25		454.427		A	S P339≠ S P340- S K15		×
S P340	-80.5	-36.6	円形	33	25	32		454.448		A	S P340≠ S P339- S K15		×
S P341	-81.9	-35.6	円形	34	27	51		454.437		B	S P341≠ S K15		×
S P342	-81.9	-36.1	円形	32	28	32		454.623		B	S P342≠ S K15		×
S P343	-81.4	-36.5	円形	35	33	43		454.429		A	S P343≠ S K15		×
S P344	-79.6	-37.8	円形	35	33	52		454.360		A	S P344≠ S P345		×
S P345	-79.5	-38.0	楕円形	31	26	30		454.532		A	S P345≠ S P344		×
S P346	-80.3	-38.0	円形	25	22	43		454.512		A			×
S P347	-83.3	-35.0	方形	30	24	17		454.853		B			×
S P348	-83.1	-35.4	円形	40	36	47		454.568		A			×
S P349	-82.5	-35.7	方形	25	22	24		454.781		A			×
S P350	-84.5	-35.4	円形	30	27	1		454.872		B			×
S P351	-84.9	-35.9	楕円形	32	25	39		454.672		A			×
S P352	-88.0	-36.5	円形	25	22	21		454.807		A			×
S P353	-84.0	-36.5	円形	40	40	27		454.757		A	S P353≠ S P354		×
S P354	-84.0	-36.7	円形	29	19	25		454.767		A	S P354≠ S P353		×
S P355	-83.0	-36.4	円形	44	40	34		454.703		A			×
S P356	-83.0	-36.8	円形	26	26	40	円形 径14	454.600	第21図	B			

別 表

別表6 のつづき

(単位: cm)

No.	X	Y	平面形	長径	短径	深さ	柱痕跡	底面レベル	埋 土	断面形	出土遺物	備 考	調査
S P357	-82.0	-37.4	円形	32	30	49		454,483	A		S P357≠S P358	×	
S P358	-82.2	-37.7	楕円形	46	36	58		454,405	A		S P358≠S P357	×	
S P359	-82.8	-21.0	円形	25	24	15		455,312	暗茶褐色	A			
S P360											欠番		
S P361	-85.0	-24.4	方形	26	23	35		455,019	暗茶褐色	B			
S P362	-84.4	-25.0	楕円形	36	28	36		454,971	暗茶褐色	C-1			
S P363	-86.2	-25.0	方形	28	25	27	円形 径17	455,100	第21図	B			
S P364	-86.3	-26.9	方形	30	23	28		455,087	暗茶褐色	B	○		
S P365	-86.4	-27.5	方形	28	23	36		454,995	暗茶褐色	A			
S P366	-84.6	-27.7	方形	27	22	50		454,785	A			×	
S P367	-85.2	-28.2	方形	32	24	50		454,791	A			×	
S P368	-85.1	-29.1	方形	34	27	9		455,043	B			×	
S P369	-84.8	-29.7	円形	39	35	31		454,748	B		S P369>S P521	×	
S P370	-85.9	-30.5	方形	32	32	17		454,846	A		S B15柱穴	×	
S P371	-85.1	-30.9	円形	33	29	9		454,922	A			×	
S P372	-85.9	-32.5	円形	34	32	26		454,764	A		S B15柱穴	×	
S P373	-85.4	-32.7	円形?	32	30	16		454,855	A		S P373≠S P522	×	
S P374	-86.0	-34.5	円形	38	32	23		454,767	A		S B15柱穴	×	
S P375	-85.6	-34.9	楕円形	38	30	12		454,885	B			×	
S P376	-86.3	-36.5	円形	40	35	42		454,671	A		S B15柱穴	×	
S P377	-85.7	-36.6	円形	36	33	21		454,844	A			×	
S P378	-85.6	-37.4	方形	24	24	31		454,557	A			×	
S P379	-85.6	-38.0	円形	30	26	29		454,492	黒褐色	B			
S P380	-86.0	-37.9	円形	34	34				黒褐色	B			
S P381	-86.3	-38.5	円形	38	31	35		454,607	黒褐色	B		S B15柱穴	
S P382	-87.1	-24.3	方形	26	24	30		455,082	B		S B17柱穴		
S P383	-87.6	-24.4	方形	27	19	22		455,153	暗茶褐色	A			
S P384	-86.9	-24.8	円形	31	29	51		454,870	暗茶褐色	B		S B16柱穴	
S P385	-88.7	-24.7	円形	33	33	34		455,046	黒褐色	A		S B16柱穴	
S P386	-88.7	-25.5	円形	31	27	36	円形 径20	455,022	第21図	B	●	S I 02柱穴	
S P387	-85.6	-37.0	円形	38	35	92		454,128	A			×	
S P388	-87.3	-26.1	円形	27	22	53		454,816	暗茶褐色	B		S B17柱穴	
S P389	-87.0	-26.7	円形	29	29	40		454,981	暗茶褐色	A	炭	S B16柱穴	
S P390	-87.3	-28.2	円形	34	27	28		454,912	暗茶褐色	A		S B17柱穴	
S P391	-87.2	-28.8	円形	32	28	29		454,814	暗茶褐色	B		S B16柱穴	
S P392	-86.5	-29.4	方形	23	21	10		454,971	暗茶褐色	B			
S P393	-87.3	-30.2	方形	46	31	16		454,896	灰黄褐色	B			
S P394	-87.7	-30.4	円形	30	30	19	円形 径19	454,870	第21図	A		S B15柱穴	
S P395	-87.3	-30.7	楕円形	46	30	18		454,840	第21図	A	■	S B16柱穴	
S P396	-87.3	-34.2	円形	35	30	14		454,886	暗茶褐色	B			
S P397	-87.9	-33.9	楕円形	58	46	23		454,777	灰黄褐色	A			
S P398	-87.9	-34.5	円形	30	30	19		454,852	暗茶褐色	B		S B15柱穴	
S P399	-87.5	-34.7	円形	43	35	22		454,830	第21図	B			
S P400	-87.4	-36.4	円形	30	28	8		454,901	暗茶褐色	B			
S P401	-88.4	-38.4	円形	30	30	35		454,552	黒褐色	B		S B15柱穴 上面に石1	
S P402	-89.4	-23.7	円形	30	28	18		455,180	黒褐色	B	●		
S P403	-90.5	-23.5	円形	27	24	59		454,740	第21図	B		S I 02柱穴	
S P404	-89.1	-24.2	方形	29	27	27	楕円形 径12	455,000	第21図	B		S B17柱穴	
S P405	-90.0	-24.4	円形	34	28	32		455,037	第21図	A	▲		
S P406	-90.7	-24.3	楕円形	67	46	21		455,150	暗茶褐色	B	●	S B16柱穴	
S P407	-91.1	-24.1	円形	34	33	40	円形 径12	454,952	第21図	B		S B17柱穴 S P407>S I 02	
S P408	-90.7	-25.3	円形	36	32	33	円形 径21	454,910	第21図	B	●, 炭	S I 02柱穴	
S P409	-89.2	-26.1	不整形	30	23	27		455,082	暗茶褐色	B	骨片	S B17柱穴	
S P410	-91.1	-26.0	楕円形	49	41	42	楕円形 径21	454,890	第21図	B	▲	S B17柱穴 S P410>S P411	
S P411	-91.0	-26.3	楕円形	46	30	48		454,830	第21図	B	●	S B16柱穴 S P410>S P411	
S P412	-90.2	-26.4	円形	30	25	43	円形 径15	454,882	第21図	B			
S P413	-89.0	-26.6	円形	35	31	32	円形 径14	455,002	第21図	B		S B16柱穴 S P413≠S P527	
S P414	-89.2	-28.1	円形	28	28	33		454,858	暗茶褐色	A		S B17柱穴	
S P415	-91.2	-28.3	円形	24	20	16		454,870	暗茶褐色	B		S B16柱穴	
S P416	-89.2	-28.6	方形	28	26	34	楕円形 径14	454,720	第21図	A		S B16柱穴	

江馬氏城館跡III

別表6 のつづき

(単位: cm)

No.	X	Y	平面形	長径	短径	深さ	柱痕跡	底面レベル	埋土	断面形	出土遺物	備考	調査
S P 417	-91.2	-30.0	円形	30	26	29		454.730	第21図	A		S B17柱穴 S P417> S P513	
S P 418	-89.7	-30.3	円形	30	26	15	円形 径16	454.840	第21図	B		S B15柱穴	
S P 419	-89.3	-30.5	楕円形	48	32	17	楕円形 径18	454.820	第21図	B		S B16柱穴	
S P 420	-91.7	-30.2	円形	36	30	41	円形 径16	454.600	第21図	A	▲	S B15柱穴	
S P 421	-91.3	-32.0	円形	28	28	10		454.858		A		S B17柱穴	
S P 422	-91.9	-32.1	円形	42	33	32	円形 径14	454.640	第22図	A		S B15柱穴	
S P 423	-91.9	-32.4	円形	28	26	24		454.709		B			
S P 424	-90.0	-32.4	円形	36	33	20	円形 径13	454.788	第22図	B			
S P 425	-89.3	-32.6	円形	38	33	27	円形 径17	454.710	第22図	B	■		
S P 426	-90.9	-40.0	円形	20	17	18		454.827	黒褐色	B	●		
S P 427	-90.5	-34.0	円形	33	28	16	円形 径16	454.780	第22図	B			
S P 428	-90.0	-34.4	円形	23	19	24		454.766	第22図	B	●	S B15柱穴 S P529> S P428	
S P 429	-89.4	-34.5	円形	43	38	18	円形 径18	454.808	第22図	A			
S P 430	-90.3	-34.6	円形	27	27	16		454.845	黒褐色	B			
S P 431	-91.4	-34.1	楕円形	50	33	45	有 径16	454.510	第22図	A	●●,種子	S B17柱穴 S P514> S P431	
S P 432	-91.4	-35.4	円形	34	30	11		454.928	暗茶褐色	B			
S P 433												欠番	
S P 434	-89.0	-37.7	円形	28	24			454.672	暗茶褐色	B			
S P 435	-92.1	-20.8	楕円形	30	21	17		455.198	暗茶褐色	A			
S P 436	-93.2	-20.7	楕円形	26	19	13		455.240	暗茶褐色	A			
S P 437	-92.3	-24.2	楕円形	39	22	32	円形 径25	455.040	第22図	B	□		
S P 438	-92.7	-24.3	円形	36	36	38		455.000	暗茶褐色	A		S B16柱穴	
S P 439	-93.2	-24.1	円形	37	32	38		455.000	第22図	A		S B17柱穴 上面に石1	
S P 440	-92.0	-25.0	円形	22	18	22		455.155	暗茶褐色	B			
S P 441	-92.3	-26.1	円形	22	22	18		455.106	暗茶褐色	B			
S P 442	-93.2	-26.0	円形	49	47	39		454.850	第22図	A	○	S B17柱穴	
S P 443	-92.9	-26.2	円形	42	36	36		454.880	第22図	A	●	S P442> S P443· S P496	
S P 444	-92.0	-27.0	円形	29	25	31		454.903	暗茶褐色	B		S B16柱穴 S P442> S P443	
S P 445	-92.3	-27.4	円形	28	25	29		454.785	暗茶褐色	B			
S P 446	-92.7	-27.7	円形	28	26	36		454.785	暗茶褐色	B			
S P 447	-93.2	-28.0	円形	45	37	17		454.979	第22図	A		S B17柱穴 埋土に石1	
S P 448	-92.0	-28.5	円形	22	22	11		454.937	暗茶褐色	B		S P447> S P563	
S P 449	-93.2	-30.0	楕円形	70	42	38		454.749	第22図	B		S B16·S B17柱穴	
S P 450	-92.1	-31.0	円形	32	28	28	円形 径11	454.680	第22図	B			
S P 451	-93.2	-32.0	円形	36	30	23		454.889	第22図	C-2		S B17柱穴 S P451> S P564	
S P 452	-92.9	-32.5	円形	22	20	13		454.840	灰黄褐色	B			
S P 453	-93.0	-32.8	円形	27	26	15		454.831	灰黄褐色	B			
S P 454	-92.9	-33.9	円形	33	27	28	円形 径14	454.740	第22図	B	●		
S P 455	-92.0	-34.2	楕円形	65	40	36		454.653	暗茶褐色	A	□	S B15柱穴 埋土に石1	
S P 456	-92.0	-34.8	楕円形	50	42	5		454.960	暗茶褐色	A	●		
S P 457	-94.2	-22.9	円形	25	21	23		455.153		B			
S P 458	-94.8	-24.0	楕円形	43	34	30		455.095	暗茶褐色	B			
S P 459	-95.1	-24.1	円形	33	32	26		455.128	暗茶褐色	B		S B17柱穴 上面に石1	
S P 460	-94.3	-25.6	円形	32	30	44	円形 径18	454.980	第22図	B		埋土に石1	
S P 461	-95.2	-25.9	円形	35	34	47		454.858	暗茶褐色	B		S B17柱穴 埋土に石1	
S P 462	-94.3	-26.3	円形	34	31	38	円形 径15	454.890	第22図	A			
S P 463	-95.1	-26.5	円形	25	24	39		454.841	黒褐色	B			
S P 464	-96.0	-27.0	円形	29	27	22		454.888	暗茶褐色	B			
S P 465	-95.3	-29.8	楕円形	40	32	42		454.637		B		S B17柱穴 埋土に石1	
S P 466	-94.6	-31.5	円形	30	28	48	楕円形 径16	454.540	第22図	B			
S P 467	-95.2	-31.8	円形	45	36	55		454.480		B		S B17柱穴	
S P 468	-95.6	-31.8	円形	26	26	19		454.840	第22図	B			
S P 469	-94.4	-33.5	円形	22	20	3		454.906	暗茶褐色	B	●○		
S P 470												欠番	
S P 471												欠番	
S P 472												欠番	
S P 473												欠番	

別 表

別表6 のつづき

(単位: cm)

No.	X	Y	平面形	長径	短径	深さ	柱痕跡	底面レベル	埋 土	断面形	出土遺物	備 考	調査
S P474												欠番	
S P475												欠番	
S P476												欠番	
S P477	-88.3	-34.3	円形	26	26	22	円形 径12	454.800	第22回	C-2			
S P478	-95.3	-27.8	円形	36	28	28		454.760	第22回	A	●●	S B17柱穴 S P478>S P524	
S P479	-87.3	-36.8	楕円形	36	28	24		454.804	暗茶褐色	B			
S P480	-92.2	-36.3	円形	30	28	24		454.580	暗茶褐色	A		S B15柱穴	
S P481	-86.0	-37.6	円形	26	24	38		454.517	黒褐色	B			
S P482												欠番	
S P483	-81.1	-33.7	円形	26	25	8		454.919		A			x
S P484	-94.5	-32.5	楕円形	66	46	16		454.832		B	●	S K13>S P484	
S P485	-88.9	-38.0	楕円形	30	25	24		454.618	黒褐色	A			
S P486												欠番	
S P487	-89.3	-14.7	円形	50	46	42		455.422		A		S P487≠S K20·S X01	x
S P488	-90.2	-36.4	円形	28	23	36							
S P489	-95.4	-33.8	円形	33	31	30		454.672	暗茶褐色	B		S B17柱穴	
S P490												欠番	
S P491												欠番	
S P492												欠番	
S P493												欠番	
S P494	-90.5	-37.0	円形	40	36	30	円形 径16	454.540	第22回	C-2		S P494>S P528	
S P495	-93.3	-36.5	楕円形	60	43	48		454.773	暗茶褐色	A		S P567>S P495	
S P496	-93.2	-25.9	円形	36	33	9		455.272		A		S P442>S P496	
S P497	-87.8	-19.9	*	29	18	16		455.632	黒褐色	A		S P180·S P291>S P497	
S P498	-92.2	-18.8	円形	24	19	57		455.272	第20回	A		S P285>S P498	
S P499	-90.4	-38.4	円形	34	30	28		454.620	暗茶褐色	A		S B15柱穴 S P535>S P499	
S P500	-89.3	-15.8	円形	23	21	14	楕円形 径11	455.752	第20回	A		S P500>S P211	
S P501	-83.3	-36.5	円形	30	30	43		454.613		A		S P501>S P502	x
S P502	-83.4	-36.7	*	35	11	33		454.764		A		S P501·S P503>S P502	x
S P503	-83.4	-37.0	方形	52	29	45		454.603		A		S P503>S P502·S P504	x
S P504	-83.2	-37.3	円形	40	38	57		454.437		A		S P503>S P504	x
S P505	-83.1	-6.4	楕円形	30	20	10		455.842		B			x
S P506	-88.8	-23.7	楕円形	30	22	30		455.032		A		S I 02柱穴	
S P507	-87.0	-19.6	円形	28	25	10		455.692		B	■	S P507>S X01	
S P508	-92.3	-38.0	楕円形	48	30	31		454.530	黒褐色	B		S B15柱穴	
S P509	-95.0	-13.4	*	24	23	10		455.860		A		S P509≠S P269	x
S P510												欠番	
S P511	-85.3	-34.1	方形	35	34	9		454.895		A			x
S P512	-85.0	-32.7	円形	32	26	17		454.856		A		S P512≠S I 01	x
S P513	-91.3	-30.3	楕円形	48	26	29		454.730	第21回	A		S B16柱穴 S P417>S P513	
S P514	-91.3	-34.3	円形	38	29	16		454.860	第22回	A		S P514>S P431	
S P515	-78.4	-38.1	円形	32	31	36		454.364		A		S P515≠S K16	x
S P516	-86.6	-15.7	円形	24	22	20	円形 径12	455.642	第20回	B		S X01>S P516>S P517	
S P517	-86.6	-15.8	方形	24	20	21		455.652	黒褐色	A		S X01>S P516>S P517	
S P518	-81.6	-38.5	円形	28	27	38		454.589	暗茶褐色	A			
S P519	-83.8	-38.3	*	29	17	24		454.477	暗茶褐色	A			
S P520	-83.2	-39.3	円形	34	32	20		454.504	暗茶褐色	B			
S P521	-84.8	-29.5	*	35	12	18		454.917		B		S P369>S P521	
S P522	-85.4	-32.9	円形	35	32	16		454.875		A		S P522≠S P373	x
S P523												欠番	
S P524	-95.2	-28.0	円形	35	34	16		454.930	第22回	B		S P478>S P524	
S P525	-93.5	-33.9	円形	34	32	58		454.447	第22回	B		S B17柱穴	
S P526	-93.5	-34.1	楕円形	24	17	19		454.829	第22回	B		S P526·S K12>S P525	
S P527	-89.3	-26.5	楕円形	36	29	30	楕円形 径23	455.022	第21回	B		S K12>S P526>S P525	
S P528	-90.3	-37.1	*	28	21	26		454.580	第22回	A		S P527≠S P413	
S P529	-90.0	-34.3	楕円形	45	37	13		454.860	第22回	A		S P494>S P528>S P539	
S P530	-89.5	-11.4	円形	40	36	18		455.777		A		S P529>S P428	
S P531	-87.1	-15.8	円形	27	25	10	円形 径6	455.642	第20回	A		S B13柱穴	x
S P532	-73.4	-15.5	方形	60	40	15		455.672		B		S X01>S P531	
S P532												S P532≠S K04	x

江馬氏城館跡III

別表6 のつづき

(単位: cm)

No	X	Y	平面形	長径	短径	深さ	柱痕跡	底面レベル	埋 土	断面形	出土遺物	備 考	調査
S P533	-88.0	-16.4	*	27	12							S B12柱穴 S X01> S P533	
S P534	-89.9	-17.7	円形	36	34	21		455,752	黒褐色	B		S B13柱穴 S D03> S P534	
S P535	-90.5	-38.4	円形	30	26	65	* 径9	454,248		A		S P535> S P499	
S P536	-83.7	-37.4	*	33	11					B			
S P537	-91.1	-37.3	円形	24	24	5		454,754					
S P538	-90.5	-37.5	円形	24	24	6		454,729					
S P539	-90.2	-37.4	円形	32	29	5		454,764					
S P540	-90.1	-37.6	円形	30	26	9		454,729				S P528> S P540> S P539	
S P541	-89.8	-37.4	円形	21	19	8		454,755				S P540> S P539	
S P542	-89.8	-37.6	円形	24	22	5		454,765					
S P543	-88.1	-36.9	円形	30	29	14		454,794					
S P544	-88.2	-37.6	円形	31	31	16		454,697				S P544> S P545	
S P545	-88.2	-37.9	楕円形	43	32			454,767				S P544> S P545> S P546	
S P546	-87.9	-38.0	円形	29	25		円形 径13					S P545> S P546	
S P547	-87.9	-37.3	不整形	48	36	8		454,743				S P548> S P547	
S P548	-87.7	-37.6	楕円形	39	31	13		454,715				S P548> S P547	
S P549	-87.4	-37.5	楕円形	22	17	11		454,739		A		S P548> S P547	
S P550	-87.1	-37.7	円形	27	25	9		454,787					
S P551	-96.6	-35.6	円形	22	17								
S P552	-96.2	-39.1	楕円形	23	16								
S P553	-96.4	-41.8	円形	36	32	22		451,879					
S P554	-96.3	-43.7	円形	20	16	16		451,958					
S P555	-84.1	-43.2	円形	21	18	12		451,986					
S P556	-83.3	-44.0	円形	23	18	16		451,940					
S P557	-84.2	-45.3	円形	22	20	10		451,964					
S P558	-83.4	-46.0	*	20	12								
S P559	-73.8	-45.8	方形	26	17							S P559≠ S D08	
S P560	-73.7	-46.1	楕円形	20	12							S P560≠ S D08	
S P561	-73.8	-46.4	円形	7	7							S P561≠ S D08	
S P562	-73.7	-48.0	楕円形	23	15							S P562≠ S D08	
S P563	-93.2	-28.0	楕円形	55	38	26		454,889	第22図	B		S B16柱穴 S P447> S P563	
S P564	-93.2	-32.2	円形	31	25	12		455,099				S P451> S P564	
S P565	-96.5	-39.1	*	38		25		454,410		B			
S P566	-96.5	-31.8	*	29		16		454,900		B		S P566> S K17	
S P567	-93.1	-36.6	楕円形	32	23	68		454,569				S P567> S P495	
S P568	-90.5	-38.8	*	24	10								

別表7 土坑内検出の石・礫、石材観察表

(単位: cm)

遺構	No.	長径	短径	高さ	使用石材	被熱	遺構	No.	長径	短径	高さ	使用石材	被熱
S K06	1	27	21	17	船津花崗岩		S X01	26	60	27	20	船津花崗岩	
	2	19	10	6.5	船津花崗岩			27	17	11	7	船津花崗岩	
	3	10	7	7	船津花崗岩			28	17	16	9	閃緑花崗岩	
	4	19.5	13	6	船津花崗岩			29	10	9	5	船津花崗岩	
	5	20.5	11	8	船津花崗岩			30	13	12	7	船津花崗岩	
	6	28	15	9.5	船津花崗岩			31	17	8	5	船津花崗岩	
	7	15	12	6	船津花崗岩			32	13	8	5	船津花崗岩	
	8	22	14	13.5	船津花崗岩			33	15	13	10	船津花崗岩	
	9	12.5	11	6	船津花崗岩			34	18	16	10	船津花崗岩	
	10	7	5	3.5	船津花崗岩			35	23	13	9	船津花崗岩	
	11	10	6	4.5	船津花崗岩			36	18	14	12	船津花崗岩	
	12	10	9	5.5	船津花崗岩			37	13	8	9	花崗岩	
	13	14	10	5	船津花崗岩			38	13	9	3	閃緑花崗岩	
	14	9	5.5	2	船津花崗岩			39		5	4	船津花崗岩	
	15	9	8	4	船津花崗岩			40	14	11	7	船津花崗岩	
	16	4.5	4	3	船津花崗岩			41	23	14	8	船津花崗岩	
S K09	1	30	19	10	船津花崗岩			42		5.5	5	船津花崗岩	
S K10	1	19	15	5	船津花崗岩			43	24	13	7	船津花崗岩	
	2	16	15	4	船津花崗岩			44	22	13	12	船津花崗岩	
	3	7	5	3	船津花崗岩			45	13	10	2	船津花崗岩	
S K11	1	5			船津花崗岩			46	7	2	16	船津花崗岩	
	2			6	船津花崗岩			47	7	4	2	閃緑花崗岩	
	3	19			船津花崗岩			48	26	13	7	船津花崗岩	
	4	31	21	12	船津花崗岩			49	12	9	7	閃緑花崗岩	
	5			8	船津花崗岩			50	20	18	9	船津花崗岩	
	6			7	船津花崗岩			51	19	12	8	船津花崗岩	
	7			16	19	船津花崗岩		52	13	9	7	船津花崗岩	
	8	18	12	26	船津花崗岩			53	14	8	7	船津花崗岩	
S K13	1	16	12	7	船津花崗岩			54	13	12	4	船津花崗岩	
	2	23	14	5	船津花崗岩			55	13	10	2	船津花崗岩	
	3	20	14	9	船津花崗岩			56	13	11	6	船津花崗岩	
	4	23	14	11	船津花崗岩			57	15	3	船津花崗岩		
	5	14	13	3	船津花崗岩			58	18	12	3	船津花崗岩	
S K17	1	18	11		船津花崗岩			59	20	14	8	船津花崗岩	
	2	27	15		船津花崗岩			60	10			船津花崗岩	
S X01	1	23	22	13	船津花崗岩			61	9	5	5	船津花崗岩	
	2	21	9.5	12	船津花崗岩			62	13	8	3	船津花崗岩	
	3	25	13	8	船津花崗岩			63	22	15	6	船津花崗岩	
	4	37	34.5	15	船津花崗岩			64	22	16	8	船津花崗岩	
	5	13	7	10	船津花崗岩			65	13	9	6	船津花崗岩	
	6	27	17	7	船津花崗岩			66	12	9	3.5	船津花崗岩	
	7	25	17	20	船津花崗岩			67	9.5		1	砂岩	
	8	13	9	7	閃緑花崗岩			68	15	10	4.5	船津花崗岩	
	9	29	22.5	15	船津花崗岩			69	20	15	11	船津花崗岩	
	10	18	12.5	8	船津花崗岩			70	9	6	2	船津花崗岩	
	11	13	10	7	船津花崗岩			71	11	8	4	船津花崗岩	
	12	36	34	11	船津花崗岩			72	20	5	5	船津花崗岩	
	13	12		4	船津花崗岩			73	8	6	7	船津花崗岩	
	14	32	28	14	花崗岩			74	11	9	3	船津花崗岩	
	15	49	19	24	船津花崗岩			75	18	14	7	船津花崗岩	
	16	26	12	7	船津花崗岩			76	13	10	9	船津花崗岩	
	17	17	13	11	船津花崗岩			77	12	10	14	閃緑花崗岩	
	18		7	6	船津花崗岩			78	30	29	14	閃緑花崗岩	
	19		5	3	船津花崗岩			79	53	43	21	閃緑花崗岩	有
	20	16	14	4	船津花崗岩			80	15		2	船津花崗岩	
	21	26.5	15	11	船津花崗岩			81	24	10	15	花崗岩	
	22	24	12	8	船津花崗岩			82	11	10	9	船津花崗岩	
	23	32	16	8	船津花崗岩			83	12	8	14	船津花崗岩	
	24	12		3	閃緑花崗岩	有		84	43	34	8	花崗岩	有
	25	27	18	11	閃緑花崗岩	有		85	27	14	7	花崗岩	有

別表7 のつづき

(単位: cm)

遺構	No.	長径	短径	高さ	使用石材	被熱
S X01	86	27	23	13	船津花崗岩	
	87	22	9	10	船津花崗岩	
	88	19	10	10	花崗岩	
	89	28	20	4	船津花崗岩	
	90	16	8	2	船津花崗岩	
	91	33	26	7	船津花崗岩	
	92	27	12	10	船津花崗岩	
	93	22	10	14	船津花崗岩	
	94	44	37	15	花崗斑岩	有
	95	25	14	14	船津花崗岩	
	96	12	14	8	船津花崗岩	
	97	22	18	10	閃緑花崗岩	有
	98	15	14.5	7	船津花崗岩	有
	99	33	24	17	閃緑花崗岩	
	100	23	12	12	船津花崗岩	
	101	21	19	10	船津花崗岩	
	102	15	11	9	船津花崗岩	
	103	14	11	6	船津花崗岩	
	104	14	4	3.5	閃緑花崗岩	
	105	11	6	2.5	閃緑花崗岩	
	106	11	6	4.5	閃緑花崗岩	
	107	7	6	3	閃緑花崗岩	
	108	8	5	5	閃緑花崗岩	
	109	12	9	4	船津花崗岩	
	110	4	3	1	閃緑花崗岩	
	111	13	12	5	閃緑花崗岩	
	112	21	12	7	船津花崗岩	
	113	12	7	4	船津花崗岩	
	114	40	25	14	船津花崗岩	
	115	10	6	3	船津花崗岩	
	116	8	6	5	船津花崗岩	
	117	10	8	4	閃緑花崗岩	
	118	8	5	2	船津花崗岩	
	119	18	9	1.5	花崗岩	
	120	16	10	2.5	船津花崗岩	
	121	18	14	16	花崗岩	
	122	19	14	15	船津花崗岩	
	123	27	16	17	閃緑花崗岩	有
	124	30	17	10	船津花崗岩	
	125	17	8	9	船津花崗岩	
	126	16	11	4	船津花崗岩	
	127	17	11	7	船津花崗岩	
	128	12	13	1.5	船津花崗岩	
	129	25	9	9	船津花崗岩	
	130	18	15	6	船津花崗岩	
	131	19	8			
	132	10	4		閃緑花崗岩	
	133	10			船津花崗岩	
	134	27	16		船津花崗岩	
	135	28	16		船津花崗岩	
	136				船津花崗岩	
	137	11	8		船津花崗岩	
	138	11	9		船津花崗岩	
	139	14	12	8	花崗岩	

別表8 石積みの石材観察表

(単位: cm)

No.	長径	短径	控え	使用石材	被熱	No.	長径	短径	控え	使用石材	被熱
1	20	19	49	船津花崗岩		61	21	16		船津花崗岩	
2	26	24		船津花崗岩		62	18	14		船津花崗岩	
3	13	8		船津花崗岩		63	13	8		船津花崗岩	
4	40	28		船津花崗岩		64	25	14		船津花崗岩	
5	21	12	32	船津花崗岩		65	31	13		船津花崗岩	
6	41	24		船津花崗岩		66	12	4		船津花崗岩	
7	19	18	51	船津花崗岩		67	20	5		閃緑花崗岩	
8	35	24	29	船津花崗岩		68	12	7		船津花崗岩	
9	41	23		船津花崗岩		69	33	19		閃緑花崗岩	
10	12	9		船津花崗岩		70	42	26		船津花崗岩	
11	9	8		船津花崗岩		71	24	9		船津花崗岩	
12	21	6	13	船津花崗岩		72	13	11		船津花崗岩	
13	17	12	44	船津花崗岩		73	21	9		船津花崗岩	
14	17	11	38	船津花崗岩		74	24	6		船津花崗岩	
15	29	21		船津花崗岩		75	14	13		閃緑花崗岩	
16	37	36		船津花崗岩		76	18	13		船津花崗岩	
17	42	36	22	船津花崗岩		77	21	14		花崗岩	
18	12	3		船津花崗岩		78	39	8		花崗岩	
19	37	30	24	船津花崗岩		79	32	14		閃緑花崗岩	
20	19	14		船津花崗岩		80	20	9		船津花崗岩	
21	28	21		船津花崗岩		81	13	10		船津花崗岩	
22	37	28		船津花崗岩		82	15	12	15	船津花崗岩	
23	28	14	18	閃緑花崗岩	有	83	16	3		閃緑花崗岩	
24	29	18	14	閃緑花崗岩	有	84	12	11		船津花崗岩	
25	28	13		閃緑花崗岩	有	85	19	6		船津花崗岩	
26	38	19	35	閃緑花崗岩		86	7	5		船津花崗岩	
27	32	14		船津花崗岩		87	23	18		船津花崗岩	
28	26	16		船津花崗岩		88	20	11		船津花崗岩	
29	13	7		船津花崗岩		89	22	14		船津花崗岩	
30	43	20	19	船津花崗岩		90	48	24		閃緑花崗岩	
31	31	18		花崗岩		91	19	16		船津花崗岩	
32	20	19	23	船津花崗岩		92	30	14		斑勵岩	有
33	23	7	31	船津花崗岩		93	20	19		船津花崗岩	
34	38	18	27	船津花崗岩		94	30	21		花崗岩	
35	30	22		船津花崗岩		95	14	10		船津花崗岩	
36	25	11		船津花崗岩		96	42	28		花崗岩	有
37	25	9		船津花崗岩		97	28	8		花崗岩	
38	20	19		船津花崗岩		98	35	15	20	船津花崗岩	
39	16	9		船津花崗岩		99	33	27		船津花崗岩	
40	22	32		船津花崗岩		100	15	3		船津花崗岩	
41				船津花崗岩		101	36	16		花崗岩	
42	18	14		船津花崗岩		102	12	5		船津花崗岩	
43	11	10		船津花崗岩		103	24	17		閃緑花崗岩	
44	13	10		船津花崗岩		104	23	14		船津花崗岩	
45	31	11	23	花崗岩		105	22	8	23	船津花崗岩	
46	21	18	21	船津花崗岩		106	19	9		船津花崗岩	
47	53	22		船津花崗岩		107	15	9		船津花崗岩	
48	30	15	55	船津花崗岩		108	18	11		船津花崗岩	
49	21	12		船津花崗岩		109	27	17		花崗岩	
50	9	8		船津花崗岩		110	32	16		船津花崗岩	
51	12	6		斑勵岩		111	13	3		船津花崗岩	
52	19	10	35	閃緑花崗岩		112	36	19		船津花崗岩	
53	18	12		花崗岩		113	12	10		船津花崗岩	
54	22	21		船津花崗岩		114	19	16		船津花崗岩	
55	14	9		船津花崗岩		115	7	5		船津花崗岩	
56	8	5		船津花崗岩		116	3	2		船津花崗岩	
57	38	24	39	船津花崗岩		117	37	14		花崗斑岩	
58	10	9		船津花崗岩		118	19	11		船津花崗岩	
59	13	9		船津花崗岩		119	20	14		船津花崗岩	
60	13	4		船津花崗岩		120	21	13		斑勵岩	

江馬氏城館跡III

別表8 のつづき

(単位: cm)

No.	長径	短径	控え	使用石材	被熱	No.	長径	短径	控え	使用石材	被熱
121	10	3		ホルンフェルス		181	18	10	24	船津花崗岩	
122	31	19		船津花崗岩		182	16	9	13	船津花崗岩	
123	8	6		船津花崗岩		183	12	12	3	船津花崗岩	
124	6	6		船津花崗岩		184	6	2	6	船津花崗岩	
125	16	13		船津花崗岩		185	16	10	5	船津花崗岩	
126	31	24		船津花崗岩		186	14	7	10	船津花崗岩	
127	22	6	27	船津花崗岩		187	7	5	6	船津花崗岩	
128	16	7	18	船津花崗岩		188	8	3	15	船津花崗岩	
129	24	9	28	船津花崗岩		189	10	1	14	船津花崗岩	
130	11	4	9	船津花崗岩		190	15	10	11	船津花崗岩	
131	15	7	1	船津花崗岩		191	18	3	20	閃緑花崗岩	
132	12	6	7	船津花崗岩		192	10	5	11	船津花崗岩	
133	7	5	18	船津花崗岩		193	10	10	28	船津花崗岩	
134	12	7	16	船津花崗岩		194	7	4	7	花崗岩	
135	16	12	15	閃緑花崗岩		195	30	18	25	閃緑花崗岩	
136	11	4	7	船津花崗岩		196	7	5	10	閃緑花崗岩	
137	12	7	5	花崗岩		197	12	6	6	船津花崗岩	
138	14	9	15			198	8	4	1	閃緑花崗岩	
139	12	8	8	船津花崗岩		199	28	6	20	花崗岩	
140	45	40				200	41	14	20	船津花崗岩	
141	10	7	15	船津花崗岩		201	28	12			
142	18	6	5	船津花崗岩		202	8	5			
143	13	6	8	船津花崗岩		203	6	4			
144	14	7				204	17	12	18	船津花崗岩	
145	10	8	30	船津花崗岩		205	14	5	14	船津花崗岩	
146	13	8				206	18	8	27	船津花崗岩	
147	8	3				207	12	6	7	船津花崗岩	
148	8	6	12	船津花崗岩							
149	9	5	10	船津花崗岩							
150	17	11	3	船津花崗岩							
151	7	6									
152	8	4	14	船津花崗岩							
153	11	8	10	船津花崗岩							
154	9	6	8	船津花崗岩							
155	10	3	11	船津花崗岩							
156	10	6	10	船津花崗岩							
157	3	3	8	船津花崗岩							
158	6	7	3	船津花崗岩							
159	10	4	6	船津花崗岩							
160	12	5	8	船津花崗岩							
161	8	2	4	閃緑花崗岩							
162	40	13	12	船津花崗岩							
163	18	7	8	船津花崗岩							
164	22	20	5	船津花崗岩							
165	20	5	20	船津花崗岩							
166	23	20	10	船津花崗岩							
167	5	3									
168	9	6	12	船津花崗岩							
169	13	2	11	船津花崗岩							
170	23	6	9								
171	15	10	17	船津花崗岩							
172	12	3	7	船津花崗岩							
173	15	6	9	閃緑花崗岩							
174	22	14	5	船津花崗岩							
175	28	19	6	船津花崗岩							
176	4	4	6	船津花崗岩							
177	15	10	11	船津花崗岩							
178	9	6	11	船津花崗岩							
179	17	5	7	船津花崗岩							
180	26	13									

別 表

別表9 1978年度調査D地区石積みの石材観察表 (単位:cm)

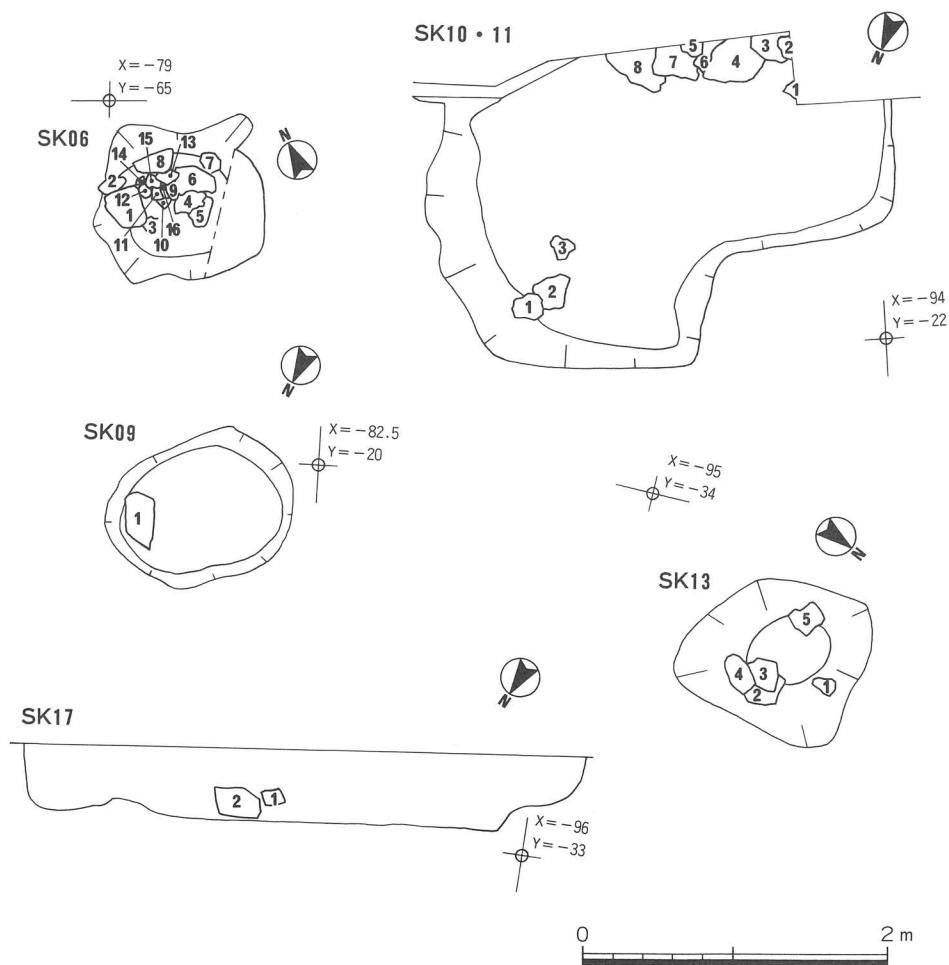
No.	長径	短径	控え	No.	長径	短径	控え	No.	長径	短径	控え
1	12	9	9	61	25			121	25	14	20
2	39	19	19	62	12	10	6	122	14	9	
3	16	14		63	18	10	15	123	25	10	
4	18	11	12	64	15	13	10	124	14	11	15
5	12	12	24	65	16	7		125	5	4	
6	25	10	12	66	27	16	22	126	9	5	6
7	14	6		67	24	20		127	14	10	16
8	27	21	23	68	8	6		128	12	10	
9	20	16	29	69	69	56		129	12	9	
10	27	23	26	70	30	14		130	16	6	
11	27	18	27	71	36	10		131	27	17	
12	20	12	26	72	14	10		132	20	11	10
13	9	5	11	73	24	21	29	133	25	12	
14	29	21		74	22	13	16	134	19	8	
15	46	33		75	66	28	24	135	16	12	
16	20	13		76	19	13	14	136	21	14	
17	16	13	12	77	19	15	26	137	26	10	13
18	34	26		78	20	8	9	138	15	10	11
19	18	14	14	79	25	16	13	139	42	14	
22	38	35		80	16	16	12	140	12	11	
21	21	12		81	16	12	15	141	21	14	22
22	26	19		82	20	15	20	142	35	17	
23	41	23		83	26	16		143	14	8	15
24	18	9	15	84	18	8	19	144	12	12	10
25	21	11		85	9	7	6	145	13	11	14
26	14	11		86	26	20	24	146	25	18	14
27	16	14	18	87	17	14	14	147	15	8	
28	50	30		88	24	20	23	148	47	22	20
29	27	16		89	18	11		149	51	21	
30	25	12		90	18	10	16	150	9	8	8
31	30	23	22	91	20	12		151	5	3	
32	22	9		92	20	16		152	14	8	16
33	14	9	9	93	30	16		153	13	6	
34	20	11		94	39	12		154	20	15	
35	22	19		95	15	11	11	155	64	21	
36	25	16		96	17	13		156	20	18	
37	40	21		97	28	19		157	42	12	
38	60	33		98	18	12		158	25	14	
39	31	22	25	99	24	18		159	10	7	
40	20	11	15	100	44	22		160	22	7	
41	30	20	29	101	8	4		161	44	27	
42	17	10	19	102	12	7		162	21	16	
43	15	10		103	17	13		163	20	18	
44	23	21		104	40	22		164	16	12	
45	43	25	32	105	10	6	12	165	10	8	8
46	30	14	35	106	21	13	28	166	10	10	9
47	31	16	16	107	18	13		167	22	10	22
48	22	18		108	46	21		168	11	11	12
49	16	12	28	109	36	28	43	169	22	10	17
50	16	10	23	110	15	13	19	170	31	22	25
51	18	12	31	111	16	13	12	171	16	12	12
52	22	10		112	13	10		172	23	13	
53	25	8	20	113	20	11	12	173	17	13	
54	16	10		114	15	10		174	56	33	56
55	29	19		115	19	16	11	175	35	19	60
56	23	12		116	20	11	14	176	70	48	37
57	25	16		117	21	12		177	22	16	8
58	28	10	22	118	22	8		178	84	58	39
59	14	12		119	15	11	6	179	44	26	33
60	30	24		120	26	20	17	180	34	32	31

江馬氏城館跡III

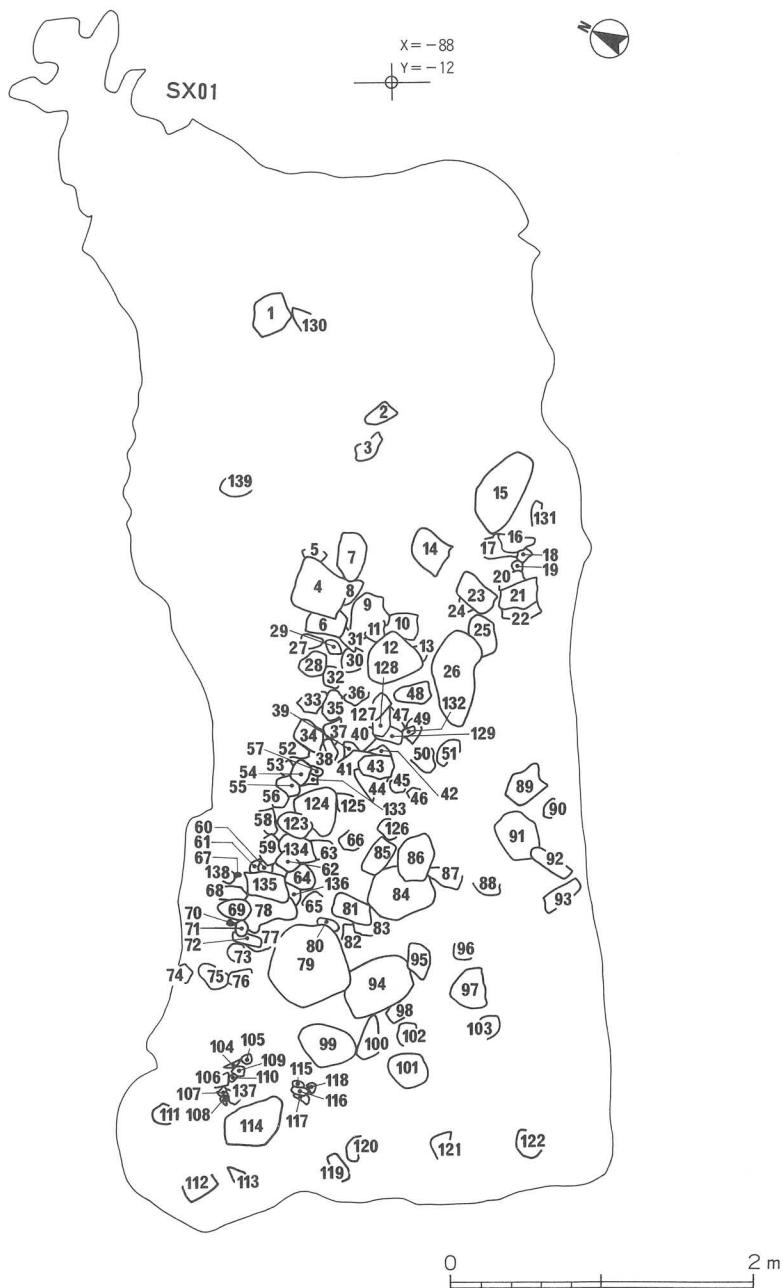
別表9 のつづき

(単位: cm)

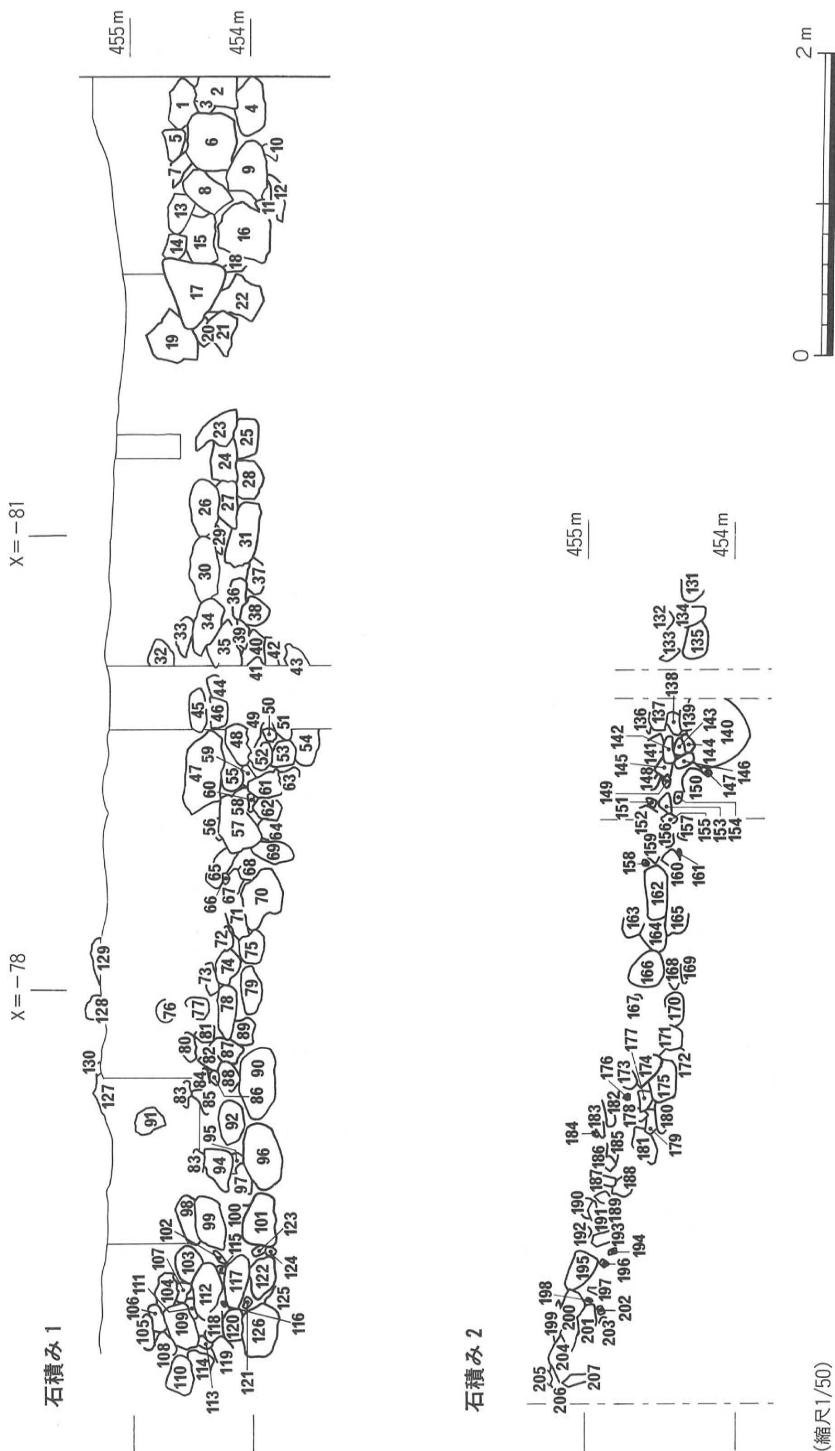
No.	長径	短径	控え		No.	長径	短径	控え
181	30	9			241	18	15	39
182	17	8			242	55	26	
183	41	28	23		243	23	21	
184	57	21	14		244	26	10	
185	31	20			245	31	22	14
186	26	16			246	17	8	
187	43	13			247	20	14	
188	46	21	31		248	48	28	14
189	33	15	22					
190	20	15						
191	18	14						
192	38	27	46					
193	52	24	44					
194	38	22						
195	19	15						
196	69	45						
197	49	21						
198	28	14						
199	27	18						
200	38	26	49					
201	35	21	41					
202	40	22	34					
203	65	43						
204	36	26	48					
205	17	17	18					
206	72	26	30					
207	10	6						
208	12	9						
209	52	38						
210	61	36	28					
211	29	21						
212	41	15	39					
213	22	16						
214	26	10						
215	25	17						
216	79	61	38					
217	34	30	62					
218	37	12						
219	21	13						
220	24	17						
221	35	22	39					
222	48	26						
223	20	17						
224	28	16	17					
225	16	8	32					
226	30	16						
227	12	8	12					
228	13	11	12					
229	23	9	14					
230	51	36						
231	32	25	47					
232	26	20	24					
233	28	22						
234	31	16	40					
235	34	18	40					
236	34	16						
237	39	22						
238	18	16						
239	26	18	12					
240	25	20	32					



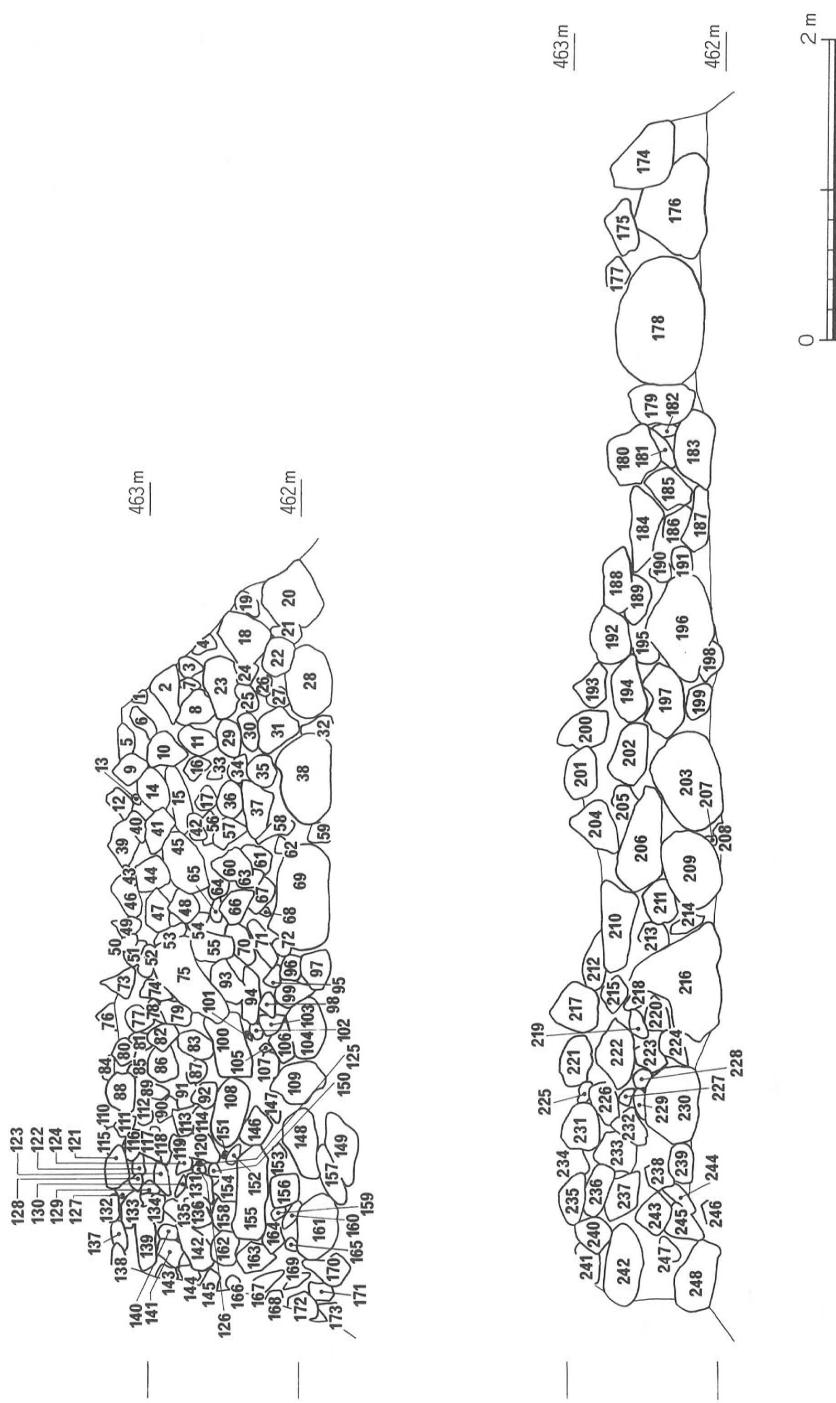
第100図 土坑内検出の石・礫、石材観察番号（1）縮尺1/50



第101図 土坑内検出の石・礫、石材観察番号（2）縮尺1/50



第102図 石積みの石材観察番号 縮尺1/50



第103図 1978年度調査D地区石積みの石材観察番号 縮尺1/50

別表10 1996年度調査の出土遺物計測表

(単位: cm)

No.	種類	器種	X	Y	遺構	層位	レベル	法量	個体数	備考	整理No.
1	土師器	皿	-75.74	-13.76	S P42	搅乱	455.801	□[7.5]	0.21	T-5類 黄褐色 2片接合 S B14柱穴	I 082
2	土師器	皿	-85.25	-19.75	S P156	埋土	455.789	□[11.5]	0.10	T-1類 淡黄色 S A12柱穴	I 205
3	土師器	皿	-89.05	-16.03	S X01	埋土	455.846	□[8.0]	0.23	T-2類 灰黄色	I 163
4	土師器	皿	-89.10	-16.68		埋土	455.892	□[9.0]	0.19	T-5類 黄白色	I 071
5	土師器	皿	-88.62	-15.92		埋土	455.816	□[10.0]	0.03	T類 灰白色	I 179
6	土師器	皿	-87.59	-17.88		埋土	455.656	□[10.0]	0.11	T-5類 黄白色 2片接合	I 219
7	土師器	皿	-87.71	-16.20		埋土	455.668	□[7.5]	0.08	R-1類 黄白色	I 171
8	土師器	皿	-89.27	-19.10		埋土	455.890	□[11.0]	0.11	分類不明 灰白色	I 069
9	土師器	皿	-86.64	-18.00		埋土	455.883	□[11.0]	0.04	T-8類か 黄白色	I 025
10	土師器	皿	-88.89	-16.84		埋土	455.850	□[11.0]	0.23	T類か 灰白色	I 152
11	土師器	皿	-88.56	-16.32		埋土	455.788	□[11.0]	0.10	T-5類か 灰白色	I 166
12	土師器	皿	-87.72	-16.50		埋土	455.812	□[12.0]	0.03	分類不明 黄白色	I 172
13	土師器	皿	-89.27	-18.93		埋土	455.756	□[11.5]	0.05	T-1類か 浅黄橙色	I 146
14	土師器	皿	-88.47	-19.06		埋土	455.922	□[12.0]	0.06	T-2類か 灰白色	I 067
15	土師器	皿	-89.10	-16.80		埋土	455.784	□[12.0]	0.05	T類 灰白色	I 173
16	土師器	皿	-87.64	-18.76		埋土	455.891	□[13.0]	0.09	T類 黄白色	I 020
17	土師器	皿	-86.89	-18.91		埋土	455.899	□[15.0]	0.05	R-5類 黄白色 2片接合	I 027
18	土師器	皿	-88.35	-17.29		埋土	455.856	□[15.0]	0.10	R-5類か 灰白色	I 148
19	土師器	皿	-88.17	-16.57		埋土		□[14.0]	0.11	R-5類か 黄白色	I 058
20	土師器	皿	-88.52	-15.96		埋土	455.925	□[20.0]	0.07	T-8類か 黄白色 I 61と接合	I 004
	土師器	皿	-88.22	-17.13		埋土		□[20.0]	0.05	T-8類か 黄白色 I 4と接合	I 061
21	土師器	皿	-87.56	-17.32		埋土	455.851	□[20.0]	0.15	R-4類か 黄白色	I 079
22	珠洲	すり鉢	-88.03	-18.23		埋土	455.765				I 195
23	珠洲	すり鉢	-86.76	-18.26		埋土	455.895			珠洲V期	I 026
24	珠洲	すり鉢	-88.84	-16.34		埋土	455.761			珠洲V期	I 167
25	瓷器系	甕	-89.09	-18.07		埋土	455.965			I 124-125-127-132-134-135と接合	I 012
	瓷器系	甕	-88.85	-18.68		埋土	455.835			I 12-125-127-132-134-135と接合	I 124
	瓷器系	甕	-88.87	-18.83		埋土	455.897			I 12-124-127-132-134-135と接合	I 125
	瓷器系	甕	-88.92	-18.84		埋土	455.874	□[40.0]	0.03	I 129と接合	I 126
	瓷器系	甕	-88.77	-18.49		埋土	455.878			I 12-124-125-132-134-135と接合	I 127
	瓷器系	甕	-88.85	-18.75		埋土	455.925			I 126と接合	I 129
	瓷器系	甕	-88.89	-18.65		埋土	455.905			I 12-124-125-127-134-135と接合	I 132
	瓷器系	甕	-88.98	-18.84		埋土	455.900			I 12-124-125-127-132-135と接合	I 134
	瓷器系	甕	-88.99	-18.89		埋土	455.905			I 12-124-125-127-132-134と接合	I 135
26	瀬戸美濃	平椀	-87.56	-18.14		埋土	455.667			古瀬戸後II期 灰釉 I 178と接合	I 177
	瀬戸美濃	平椀	-87.58	-18.12		埋土	455.736	□[17.5]	0.05	古瀬戸後II期 灰釉 I 177と接合	I 178
27	瀬戸美濃	鉢皿	-88.70	-16.10		埋土	455.782	□[18.0]	0.20	古瀬戸中IV期 灰釉 二次被熱	I 165
28	瀬戸美濃	鉢皿	-88.46	-18.64		埋土	455.707	□[18.0]	0.07	古瀬戸中IV期 灰釉 二次被熱	I 159
29	瀬戸美濃	無頬壺	-88.90	-18.74		埋土	455.886	□[5.0]	0.20	古瀬戸中I~II期 鉄釉 内面に酸化鉄付着	I 121
30	瀬戸美濃	椀形鉢	-86.95	-16.98		埋土	455.813			古瀬戸後I~II期 灰釉	I 155
31	瀬戸美濃	瓶子	-88.75	-15.91		埋土	455.862			古瀬戸後I~II期 灰釉 二次被熱	I 176
32	瀬戸美濃	瓶子	-89.14	-16.20		埋土	455.761			古瀬戸後I~II期 灰釉 二次被熱	I 175
33	瀬戸美濃	瓶子	-88.92	-18.84		埋土	455.835			古瀬戸後I~II期 灰釉 二次被熱	I 128
34	瀬戸美濃	梅瓶	-86.62	-16.01		埋土	455.966			古瀬戸後I~II期 灰釉 2T62と接合	I 220
	瀬戸美濃	梅瓶	-73.62	-40.78	2T S X01	盛土1	453.253			古瀬戸後I~II期 灰釉 I 220と接合	2T062
35	瓦器	火鉢	-88.59	-15.58		埋土	455.584			雷文	I 201
36	鉄製品	釘	-86.52	-17.43		埋土	455.852	長3.4 幅0.5	1.2g		I 077
37	鉄製品	釘	-86.63	-15.94		埋土	455.875	長(3.4) 幅0.4	1.2g		I 075
38	鉄製品	釘	-88.80	-19.05		埋土	455.892	長(2.8) 幅0.7	1.8g		I 081
39	土師器	皿	-86.02	-17.55	S D03	埋土	455.904	□[10.0]	0.10	T-6類か T-7類 淡黄色	I 090
40	土師器	皿	-85.69	-17.69		埋土	455.885	□[15.0]	8.33	R-5類 灰黄色	I 091
41	土師器	皿	-89.99	-17.81	S D04	埋土	455.905	□[14.0]	0.03	R-5類 黄白色	I 120
42	瀬戸美濃	腰折皿	-76.57	-16.06	S P46	埋土	455.794	底5.0		古瀬戸後IV期(新) 灰釉	I 083
43	土師器	皿	-89.36	-16.42	S P214	埋土	455.838	底[4.0]		R-1類 黄白色	I 110
44	土師器	皿	-90.29	-17.07	S P218	埋土	455.760	□[10.0]	0.09	T-2類 浅黄橙色	I 191
45	土師器	皿	-91.65	-18.04	S P229	埋土	455.860	□[11.0]	0.07	R類 黄白色	I 116
46	土師器	皿	-92.42	-15.14	S P273	搅乱	455.906	□[11.0]	0.05	T類 灰褐色	I 107
47	土師器	皿	-86.13	-19.71	S P296	埋土	455.869	□11.0 高2.7	0.52	T-6類 淡黄色 I 88・89と接合	I 087
	土師器	皿	-86.20	-19.60		埋土	455.420	□11.0 高2.7	0.15	T-6類 淡黄色 I 87・89と接合	I 088
	土師器	皿	-86.16	-19.67		埋土	455.828	□11.0 高2.7	0.12	T-6類 淡黄色 I 87・88と接合	I 089

江馬氏城館跡III

別表10のつづき

(単位:cm)

No.	種類	器種	X	Y	遺構	層位	レベル	法量	個体数	備考	整理No.
48	土師器	皿	-92.02	-18.79	S P285	埋土	455.818	口[12.0]	0.05	T類 灰褐色	I 102
49	珠洲	壺・甕	-92.52	-18.86		埋土	455.900				I 119
50	瀬戸美濃	鉢	-87.33	-19.60	S P507	埋土	455.884	口[18.0]	0.05	古瀬戸中Ⅳ期 灰釉 内面露胎 二次被熱	I 092
51	瀬戸美濃	盤類	-93.34	-18.85	S P286	埋土	455.832	口[32.0]	0.03	古瀬戸後II期 灰釉	I 105
52	土師器	皿	-90.05	-18.33		旧耕作土		口[10.0]	0.06	T-5類か 灰黄色	I 056
53	土師器	皿	-91.65	-17.64		旧耕作土	455.914	口[11.0]	0.06	T-5類 黄白色 タール付着	I 045
54	土師器	皿	-90.30	-16.16		旧耕作土	455.854	口[11.0]	0.07	T類 黒色 タール付着	I 190
55	土師器	皿	-86.39	-20.30		旧耕作土	455.728	口[11.0]	0.11	T-6類かT-7類 浅黄色	I 051
56	土師器	皿	-89.53	-19.14		旧耕作土	455.949	口[12.0]	0.06	T-6類かT-7類 淡黄色 タール付着	I 015
57	土師器	皿	-86.87	-20.61		旧耕作土	455.506	口[14.0]	0.05	T-5類 浅黄橙色	I 054
58	珠洲	甕	-88.40	-20.20		旧耕作土	455.726				I 049
59	珠洲	すり鉢	-92.30	-19.30		旧耕作土	455.850				I 053
60	瀬戸美濃	天目茶碗						口[12.0]	8.33	古瀬戸後I期 鉄釉	I 100
61	瀬戸美濃	盤類	-90.80	-18.82		旧耕作土		口[34.0]	0.05	古瀬戸後II期か 灰釉	I 050
62	白磁	碗	-90.54	-6.83		旧耕作土	456.018			白磁碗V-4b類 内面に描きの花文	I 048
63	古銭							径2.2		1.4g 銀種不明	I 227
64	土師器	皿	-85.90	-30.62		搅乱	454.846	口[8.0]	0.06	T類 黄白色	II175
65	土師器	皿	-80.46	-36.45		搅乱	454.430	口[8.0]	0.10	T-5類 灰白色 タール付着 2片接合	II202
66	土師器	皿	-73.83	-17.68		搅乱	455.720	口[8.0]	0.10	T-4類 灰黄色	I 099
67	土師器	皿	-85.90	-32.40		搅乱	454.792	口[9.0]	0.08	T-5類 橙色 タール付着	II179
68	土師器	皿	-93.28	-8.76		搅乱	455.916	口9.0	0.41	T-6類かT-7類 浅黄色 I 182と接合	I 114
	土師器	皿	-93.27	-8.77		搅乱	455.904	口9.0	0.20	T-6類かT-7類 浅黄色 I 114と接合	I 182
69	土師器	皿	-85.66	-14.97		搅乱	455.696	口[11.0]	0.05	T類 灰白色	I 085
70	土師器	皿	-85.09	-28.03		搅乱	455.222	口[12.0]	0.05	T類 黄橙色	II173
71	土師器	皿				搅乱		口[14.5]	0.07	分類不明 黄橙色	I 031
72	瀬戸美濃	天目茶碗	-93.28	-8.72		搅乱	455.885			大窯第1段階 鉄釉 I 186~189と接合	I 185
	瀬戸美濃	天目茶碗	-93.31	-8.75		搅乱	455.902			大窯第1段階 鉄釉 I 185~187~189と接合	I 186
	瀬戸美濃	天目茶碗	-93.31	-8.76		搅乱	455.885	口[13.0]	0.05	大窯第1段階 鉄釉 I 185~186~188~189と接合	I 187
	瀬戸美濃	天目茶碗	-93.27	-8.76		搅乱	455.885			大窯第1段階 鉄釉 I 185~187~189と接合	I 188
	瀬戸美濃	天目茶碗	-93.24	-8.76		搅乱	455.890	口[13.0]	0.03	大窯第1段階 鉄釉 I 185~188と接合	I 189
73	瀬戸美濃	天目茶碗	-96.28	-10.18		搅乱	455.945			大窯第2段階 鉄釉 鎔化粧	I 113
74	瀬戸美濃	丸皿か	-91.10	-10.17		搅乱	455.897	底[6.0]		大窯第1~2段階 灰釉 付高台	I 104
75	瀬戸美濃	皿	-93.25	-8.70		搅乱	455.900	底4.5		古瀬戸前期 灰釉	I 183
76	瀬戸美濃	水注	-93.33	-12.09		搅乱	455.969	口[6.5]	0.04	古瀬戸中期 灰釉 二次被熱	I 108
77	瀬戸美濃	梅瓶				搅乱				古瀬戸中II~III期 烟け 外面に印花文	I 040
78	瀬戸美濃	小壺	-81.83	-33.25		搅乱	454.819	底[6.0]		古瀬戸後期 鉄釉	II195
79	瀬戸美濃	香炉	-80.07	-37.65		搅乱	454.856			古瀬戸後I~II期 灰釉 二次被熱 3片接合	II285
80	瀬戸美濃	すり鉢	-82.35	-33.75		搅乱	454.999			古瀬戸後II~III期 鎔釉	I 194
81	瀬戸美濃	盤類				搅乱		口[31.5]	0.03	古瀬戸後III期 灰釉 二次被熱	I 141
82	珠洲	すり鉢				搅乱					I 036
83	土師器	皿	-90.00	-34.40	S P428	埋土	454.925	底[6.0]		T-5類か 灰黄色 S B15柱穴	II177
84	土師器	皿	-90.70	-24.29	S P406	埋土	455.278	口[9.0]	0.14	T-2類 黄白色 S B16柱穴	II162
85	土師器	皿	-92.74	-26.21	S P443	埋土	455.187	口[12.0]	0.14	T-6類かT-7類 灰白色 S B16柱穴	II168
86	土師器	皿	-91.48	-35.01	S P431	埋土	454.725	口[8.0]	0.08	T-4類か黄白色 2片接合 S B17柱穴	II226
87	土師器	皿	-91.32	-34.20		埋土	454.927	口[11.0]	0.10	T-6類かT-7類 灰褐色 S B17柱穴	II181
88	土師器	皿	-95.26	-27.80	S P478	埋土	454.970	口[13.0]	0.09	T-2類 灰褐色 S B17柱穴	II171
89	青磁	碗	-93.15	-26.07	S P442	埋土	455.174	口[15.0]	0.07	外面に蓮弁文 S B17柱穴	II169
90	土師器	皿	-93.98	-33.00	S K13	埋土	455.064	口[9.0]	0.12	T類か 灰褐色 2片接合	II185
91	瀬戸美濃	盤類	-94.08	-32.77		埋土	454.157	底[14.0]		古瀬戸後III~IV期(古) 灰釉	I 104
92	珠洲	R壺	-94.06	-33.41		埋土	454.163				I 107
93	鉄製品	小札						長6.0 幅2.0			II341
94	鉄製品	鎌か	-93.89	-33.24		埋土	454.789	長6.0 幅2.4			II303
95	鉄製品	釘				埋土		長4.0 幅0.3			II340
96	土師器	皿	-80.35	-36.21	S K15	搅乱	454.541	底[6.0]		R-5類 灰白色	II201
97	土師器	皿	-96.54	-31.82	S K17	埋土	455.018	底[7.5]		R-5類 灰白色	II290
98	土師器	皿	-89.47	-23.72	S P402	埋土	455.298	口[14.0]	0.03	R-5類 灰白色	II160
99	土師器	皿	-90.72	-25.40	S P408	埋土	455.340	口[8.0]	0.06	T類 灰白色	II164
100	古銭		-91.10	-24.18	S P437	埋土	455.164	径2.5		1.8g 「開元通宝」(621年)	II259
101	鉄製品	釘	-89.83	-24.68	S P405	埋土	455.267	長3.7 幅1.1		5.6g	II161
102	鉄製品	釘	-88.92	-25.91	S P410	埋土	455.198	長(4.0) 幅0.5		1.8g S B17柱穴	II166

別 表

別表10のつづき

(単位: cm)

No.	種類	器種	X	Y	遺構	層位	レベル	法量	個体数	備考	整理No.
103	青磁	碗	-87.50	-25.63	S X08	埋土	455, 353	口[16.0]	0.03	同安窯系 内面に平行沈線	II209
104	珠洲	甕	-87.60	-25.70		埋土	455, 327			2片接合	II188
105	土師器	皿	-95.50	-21.67	S K10・11	埋土	455, 191	口[10.0]	0.10	T-5類 橙色	II197
106	土師器	皿	-94.12	-20.77		埋土	455, 296	口[12.0]	0.07	T-6類かT-7類 浅黄橙色	II155
107	土師器	皿	-94.88	-21.88		埋土	455, 287	口[12.0]	0.03	T-6類かT-7類 黄褐色 タール付着	II157
108	土師器	皿	-94.53	-19.68		埋土	455, 487			R-4類 淡黄色 3片接合	II149
109	土師器	皿	-94.16	-20.37		埋土	455, 376	口[14.0]	0.05	R-5類 淡黄色	II152
110	土師器	皿	-94.40	-20.35		埋土	455, 348	口[15.0]	0.10	R-5類 灰白色	II153
111	青磁	碗	-94.65	-21.02		埋土	455, 322	口[14.0]	0.08	内面に平行沈線	II156
112	珠洲	甕	-94.76	-19.90		埋土	455, 256	底[18.0]			II219
113	石製品	石臼	-96.05	-21.30		埋土	454, 795				II336
114	銅津					埋土				15.2 g	II342
115	土師器	皿	-73.70	-40.36	2T	盛土1	453, 260	口[10.0]	0.05	分類不明 黄褐色	2T063
116	土師器	皿	-73.52	-41.34	2T	盛土1	452, 896	口[10.0]	0.05	T類 黄白色	2T058
117	土師器	皿	-73.28	-40.12	2T	盛土1	453, 410	口[11.0]	0.07	T-6類かT-7類 浅黄橙色 タール付着	2T047
118	土師器	皿	-72.98	-35.92	2E T	盛土1	454, 402	口[12.0]	0.05	T-7類 浅黄色 タール付着 2片接合	II299
119	白磁	皿	-72.90	-36.36	2E T	盛土2	454, 652	口[11.0]底[5.0]高[3.0]	0.08	白磁皿16類	II298
120	瀬戸美濃	天目茶碗	-70.90	-33.40	10T	盛土1	454, 885			古瀬戸後Ⅳ期 鉄釉	II192
121	瀬戸美濃	綠釉小皿	-72.87	-36.01	2E T	盛土1	454, 304	口[11.0]	0.01	古瀬戸後Ⅲ期 灰釉 内面露胎	II295
122	瀬戸美濃	小壺	-73.14	-38.02	2T	盛土1	454, 034	底[6.0]		古瀬戸後期 鉄釉	2T052
123	瀬戸美濃	平碗	-73.38	-40.76	2T	盛土1	453, 056	口[16.0]	0.04	古瀬戸後Ⅰ～Ⅱ期 灰釉 二次被熱	2T060
124	瀬戸美濃	鉢皿	-97.02	-38.37	1T	盛土1	454, 448	口[15.0]	0.08	古瀬戸後Ⅲ期 灰釉 内面露胎 II117と接合	II115
125	瀬戸美濃	鉢皿	-96.60	-36.95	1T	盛土1	454, 669	口[15.0]	0.13	古瀬戸後Ⅲ期 灰釉 内面露胎 II117と接合	II117
126	古銭		-72.94	-33.38	10T	盛土1	454, 439	径2.2		1.6 g 銭種不明	II095
127	瓷器系	壺・甕	-72.78	-33.36	10T	盛土1	454, 792				II090
128	珠洲	R壺	-73.12	-38.24	2T	盛土1	453, 802			珠洲 I～II期 肩部に波状文	2T051
129	珠洲	甕	-73.30	-33.90	10T	盛土1	454, 968			II275・III18と接合	II190
130	珠洲	甕	-73.03	-34.96	2E T	盛土1	454, 426			II190・III18と接合	II275
131	珠洲	甕	-81.08	-41.14	プロック2	旧耕作土	453, 690			II190・275と接合	III018
132	珠洲	甕	-97.00	-38.54	1T	盛土1	454, 463				II114
133	石製品	石臼	-73.73	-33.42	10T	盛土1	454, 932				II096
134	土師器	皿	-90.80	-38.03	プロック1	盛土直上	454, 759	口[9.0]	0.04	T-1類 浅黄色 2片接合	II306
135	土師器	皿	-95.31	-36.23		旧耕作土	454, 989	口[9.0]	0.07	T-6類かT-7類 浅黄色	II231
136	土師器	皿	-94.21	-37.33		盛土直上	454, 880	口[9.0]	0.08	T-6類かT-7類 黄白色	II238
137	土師器	皿	-94.27	-37.33		盛土直上	454, 860	口[10.0]	0.11	T-6類かT-7類 淡黄色	II237
138	土師器	皿	-86.68	-37.41		盛土直上	454, 990	口[10.0]	0.10	T-1類か 浅黄色	II057
139	土師器	皿	-90.54	-35.86		旧耕作土	454, 999	口[11.0]	0.05	T-1類か 灰黄色	II034
140	土師器	皿	-95.78	-34.00		旧耕作土	455, 036	口[7.0]	0.08	R-1類 灰白色 タール付着 2片接合	II041
141	土師器	皿	-90.17	-33.68		旧耕作土	455, 005	口[11.0]	0.06	T-5類 灰白色	II010
142	土師器	皿	-94.85	-34.72		旧耕作土	455, 035	口[11.0]	0.06	T-6類かT-7類 灰褐色	II329
143	土師器	皿	-90.08	-38.15		盛土直上	454, 757	口[12.0]	0.04	T類 淡黄色	II297
144	土師器	皿	-95.81	-36.50		旧耕作土	454, 995	口[12.0]	0.05	T-6類かT-7類 灰褐色	II254
145	土師器	皿	-96.27	-33.54		旧耕作土	455, 080	口[12.0]	0.10	T-6類かT-7類 灰褐色	II040
146	土師器	皿	-88.09	-39.62		盛土直上	454, 942	口[13.0]	0.07	T-8類 浅黄色	II305
147	土師器	皿	-93.73	-37.71		盛土直上	454, 899	口[15.0]	0.05	T-8類 灰黄色	II241
148	青磁	碗	-94.69	-37.20		旧耕作土	454, 894	口[14.0]	0.10	龍泉窯系碗D類 無文	II327
149	青磁	碗	-93.88	-34.76		旧耕作土	454, 309	口[15.0]	0.06	龍泉窯系碗D類 無文	II325
150	青磁	碗	-93.19	-36.90		盛土直上	454, 900	口[15.0]	0.03	無文	II045
151	青磁	盤	-94.89	-34.96		旧耕作土	454, 999	底[12.0]		内底に印花文	II048
152	青磁	碗	-91.90	-37.29		盛土直上	454, 881	底[6.0]		内底に平行沈線	II324
153	瀬戸美濃	天目茶碗	-94.49	-36.22		旧耕作土	455, 000			白磁皿1類	II247
154	瀬戸美濃	香炉	-94.96	-36.34		旧耕作土	454, 979	口[12.0]	0.12	古瀬戸後Ⅳ期 鉄釉 鎔化粧	II044
155	瀬戸美濃	卸皿	-94.72	-35.52		旧耕作土	455, 004	口[14.0]	0.06	古瀬戸中I期 鉄釉 二次被熱	II228
156	瀬戸美濃	梅瓶	-91.24	-38.86		盛土直上	454, 893			古瀬戸後II期 灰釉	II320
157	瀬戸美濃	瓦器	-95.19	-34.06		旧耕作土	455, 036			古瀬戸中I～II期 灰釉 外面に印花文 二次被熱	II250
158	瀬戸美濃	不明	-94.87	-34.90		旧耕作土	455, 018				II131
159	瀬戸美濃	卸皿付大皿	-94.89	-34.96		旧耕作土	454, 586	口[30.0]	0.01	古瀬戸後III～IV期(古) 灰釉 II333と接合	II186
160	瀬戸美濃	卸皿付大皿	-92.00	-34.01		旧耕作土	455, 032	口[32.0]	0.05	古瀬戸後IV期(古) 灰釉 II186と接合	II333
161	珠洲	すり鉢	-88.14	-37.16		盛土直上	454, 815	口[28.0]	0.03	珠洲IV期	II021
162	珠洲										II319

江馬氏城館跡 III

別表10のつづき

(単位: cm)

No	種類	器種	X	Y	遺構	層位	レベル	法量	個体数	備考	整理No.
159	瓷器系	甕	-93.35	-36.57	ブロック1	盛土直上	454.763				II 257
160	珠洲	壺・甕	-93.93	-34.38		旧耕作土	455.040				II 035
161	土師器	皿	-79.00	-38.82	ブロック2	盛土直上	454.928	口[7.0]	0.23	T-5類か 灰白色 2片接合	II 272
162	土師器	皿	-81.11	-38.18		盛土直上	454.953	口[8.0] 高[1.0]	0.32	T-5類か 淡黄色 2片接合	II 140
163	土師器	皿	-81.53	-38.25		盛土直上	454.857	口[8.0] 高[1.4]	0.25	T-5類 黄白色 タール付着	II 269
164	土師器	皿	-81.70	-39.64		旧耕作土	454.552	口[8.0]	0.12	T類 灰黄色	III 028
165	土師器	皿	-78.84	-39.86		旧耕作土	454.378	口[9.0]	0.07	R-1類か 黄白色	III 012
166	土師器	皿	-79.86	-40.32		旧耕作土	454.632	口[10.0]	0.07	T-5類か 黄白色	II 323
167	土師器	皿	-78.90	-39.78		旧耕作土	454.432	口[10.0]	0.07	T-6類か T-7類 灰褐色	III 013
168	土師器	皿	-81.48	-38.62		盛土直上	454.879	口[11.0]	0.07	T-2類 灰褐色 タール付着 II 331と接合	II 307
	土師器	皿	-80.47	-38.62		盛土直上	454.885	口[11.0]	0.07	T-2類 灰褐色 タール付着 II 307と接合	II 331
169	瀬戸美濃	天目茶碗	-88.33	-30.20		旧耕作土	455.032	口[12.0]	0.05	古瀬戸後Ⅲ期 鉄釉 二次被熱 II 139と接合	II 008
	瀬戸美濃	天目茶碗	-80.57	-38.87		盛土直上	455.028			古瀬戸後Ⅲ期 鉄釉 二次被熱 II 8と接合	II 139
170	瀬戸美濃	平椀	-82.15	-38.65		盛土直上	454.936	口[16.0]	0.01	古瀬戸後I~II期 灰釉 二次被熱	II 264
171	瀬戸美濃	梅瓶	-81.56	-39.00		盛土直上	454.800			古瀬戸後I~II期 灰釉 外面に波状文と平行弦線 二次被熱	II 343
172	珠洲	甕	-77.36	-41.64		旧耕作土	453.156				III 020
173	鉄製品	釘	-81.56	-38.20		盛土直上	454.947	長7.5 幅0.6	7.2 g		II 133
174	土師器	皿	-70.36	-33.80	ブロック3	旧耕作土	455.182	口4.5		分類不明 浅黄橙色	II 280
175	白磁	皿	-70.68	-35.46		盛土直上	454.717	底[4.5]		白磁皿16類 二次被熱	II 317
176	土師器	皿	-70.34	-33.54		旧耕作土	455.107	口[15.0]	0.09	R-5類か 灰褐色	II 158
177	瀬戸美濃	鉢皿	-71.27	-38.27		旧耕作土	454.486	口[16.0]	0.05	古瀬戸中Ⅳ期 灰釉	II 148
178	珠洲	甕	-73.13	-38.64		旧耕作土	454.450				II 277
179	土師器	皿	-87.27	-30.89		旧耕作土	455.051	口[10.0]	0.07	T-1類 浅黄色	II 009
180	土師器	皿	-70.68	-35.46				口[10.0]	0.05	分類不明 浅黄橙色 タール付着	II 099
181	土師器	皿	-76.60	-38.49		盛土直上	454.986	口[11.0]	0.05	T類か 灰褐色	II 067
182	土師器	皿	-95.35	-28.28		旧耕作土	455.087	口[15.0]	0.12	R-5類 淡黄色 タール付着	II 003
183	土師器	皿	-76.46	-31.38		旧耕作土	455.117	底[6.0]		R-5類 淡黄色	II 089
184	青磁	椀	-77.94	-30.90		旧耕作土	455.110	口[14.0]	0.03	龍泉窯系椀C2類 雷文	II 084
185	青磁	小杯	-82.10	-32.06		搅乱	454.996	口[12.0]	0.09	龍泉窯系杯III類 蓮弁文	II 060
186	瀬戸美濃	花瓶	-95.60	-22.87		旧耕作土	455.512			古瀬戸後I~II期 灰釉	III 031
187	珠洲	甕	-95.60	-22.87		旧耕作土	455.512				II 001
188	土師器	皿	-96.64	-37.88	1T	旧耕作土	454.729	口[8.0]	0.10	T類 灰白色 タール付着	1T 028
189	土師器	皿	-96.66	-37.62		旧耕作土	454.979	口[10.0]	0.03	分類不明 浅黄橙色	1T 027
190	土師器	皿	-96.68	-37.88		旧耕作土	454.971	口[11.0]	0.05	T-6類か T-7類 黄褐色	1T 026
191	土師器	皿	-96.82	-43.98		旧耕作土	452.177	口[12.0]	0.04	T-6類か T-7類 浅黄橙色	1T 039
192	土師器	皿	-96.64	-41.80		旧耕作土	452.137	口[12.0]	0.05	T-6類か T-7類 浅黄橙色	1T 020
193	土師器	皿	-96.32	-38.12		旧耕作土	454.875	口[15.0]	0.04	R-5類 灰黄色	1T 034
194	青磁	椀	-97.06	-37.74		旧耕作土	454.333	口[14.0]	0.10	龍泉窯系椀B2類 蓮弁文	1T 036
195	青磁	椀	-96.62	-45.48		旧耕作土	451.927	口[15.0]	0.05	龍泉窯系椀B4類 蓮弁文	1T 006
196	白磁	皿	-96.62	-45.48		旧耕作土	452.238	口[11.0]	0.12	白磁皿1類	1T 021
197	瀬戸美濃	水注	-96.24	-42.20						古瀬戸中期 灰釉	1T 018
198	瀬戸美濃	大皿	-	-						古瀬戸後期 灰釉	1T 007
199	瓦器	火鉢	-	-						雷文	1T 004
200	瓷器系	甕	-	-							1T 003
201	古銭	-	-97.30	-42.26		旧耕作土	453.134	径2.0		3.0 g 「洪武通宝」(1368年)	1T 017
202	土師器	皿	-73.98	-46.32	S D 08	埋土	452.004	口[9.0]	0.06	T類 灰白色	2T 039
203	土師器	皿	-73.72	-47.38	2T	搅乱	452.037	口[9.0]	0.01	T類 灰黄色	2T 034
204	土師器	皿	-74.24	-47.28		搅乱	452.088	口[10.0]	0.08	T-6類か T-7類 淡黄色	2T 019
205	土師器	皿	-73.50	-48.20		旧耕作土	452.166	口[11.0]	0.04	T-6類か T-7類 浅黄色	2T 013
206	土師器	皿	-73.50	-46.82		搅乱	451.954	口[11.0]	0.04	T-6類か T-7類 灰褐色 タール付着	2T 038
207	土師器	皿	-73.86	-48.08		旧耕作土	451.930	口[12.0]	0.03	T類 浅黄橙色	2T 015
208	土師器	皿	-74.46	-40.56		旧耕作土	454.226	底[4.5]		R-1類か 浅黄橙色	2T 033
209	青磁	椀	-73.28	-40.96		旧耕作土	453.996	口[14.0]	0.04	龍泉窯系椀C2類 雷文	2T 032
210	白磁	皿	-74.24	-47.64		搅乱	452.155	口[10.0]	0.03	白磁皿16類か17類	2T 014
211	瀬戸美濃	香炉	-	-						古瀬戸後II期 灰釉	2T 002
212	瀬戸美濃	卸皿	-73.68	-47.40		搅乱	452.036	口[15.0]	0.05	古瀬戸後IV期(古) 灰釉 内面露胎	2T 035
213	瀬戸美濃	折縁中皿	-73.58	-48.52		旧耕作土	452.194	口[16.0]	0.10	古瀬戸後III期 灰釉 内面露胎	2T 020
214	瓷器系	甕	-73.70	-47.92		搅乱	452.041				2T 003
215	珠洲	壺・甕	-74.18	-45.70		搅乱	452.442				2T 016
216	珠洲	壺・甕	-	-							2T 024

別 表

別表10のつづき

(単位: cm)

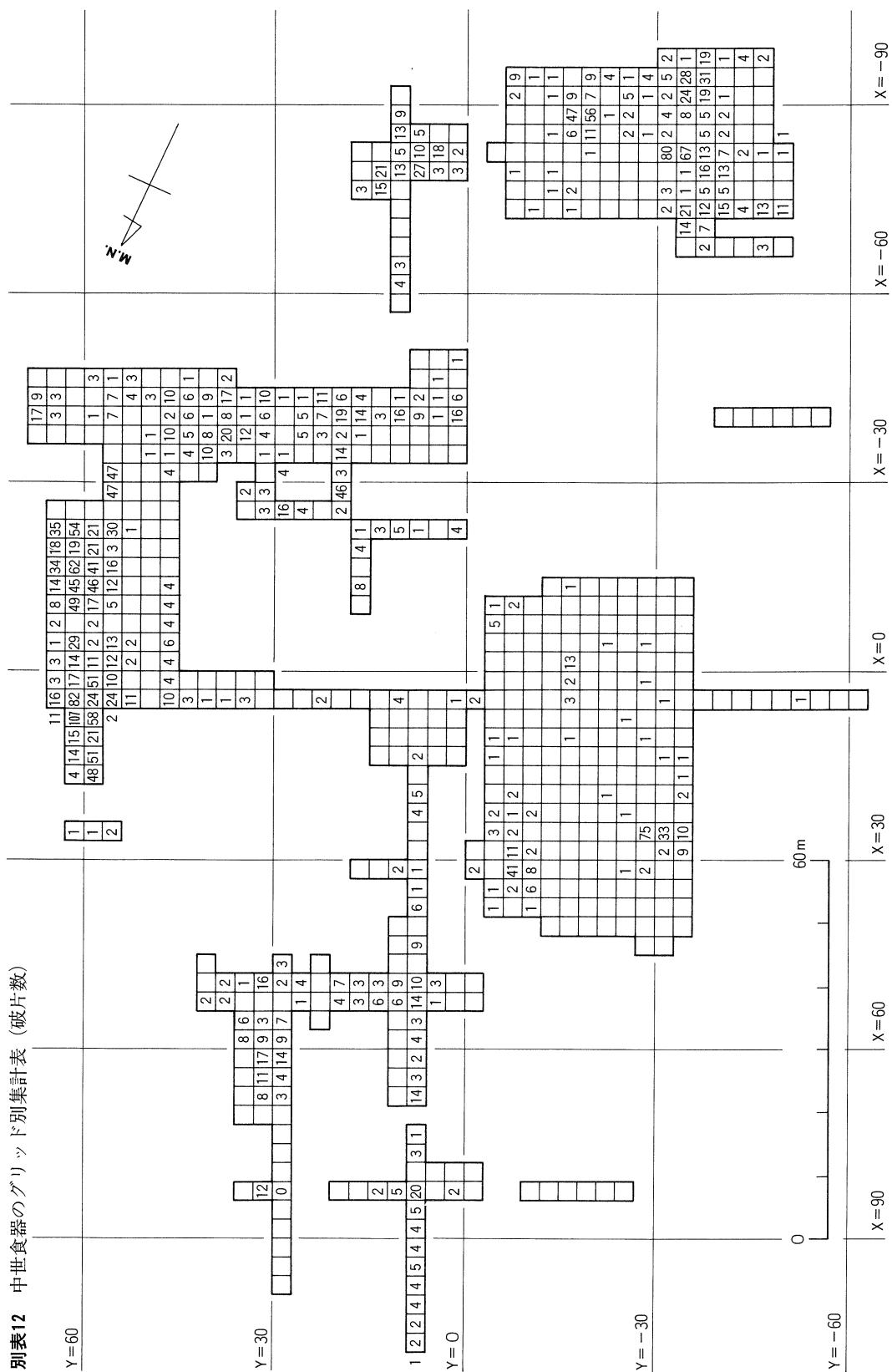
No.	種類	器種	X	Y	遺構	層位	レベル	法量	個体数	備考	整理No.
217	瀬戸美濃	盤類	-73.40	-46.80	2T	搅乱	451,973			古瀬戸後III～IV期(古) 灰釉	2T022
218	白磁	皿	-84.32	-48.30	3T	旧耕作土	452,155	口[10,0]	0.03	白磁皿16類か17類	3T003
219	銅製品	不明	-83.66	-48.28		旧耕作土	452,289	長(2,2) 幅0.6		4.2g	3T001

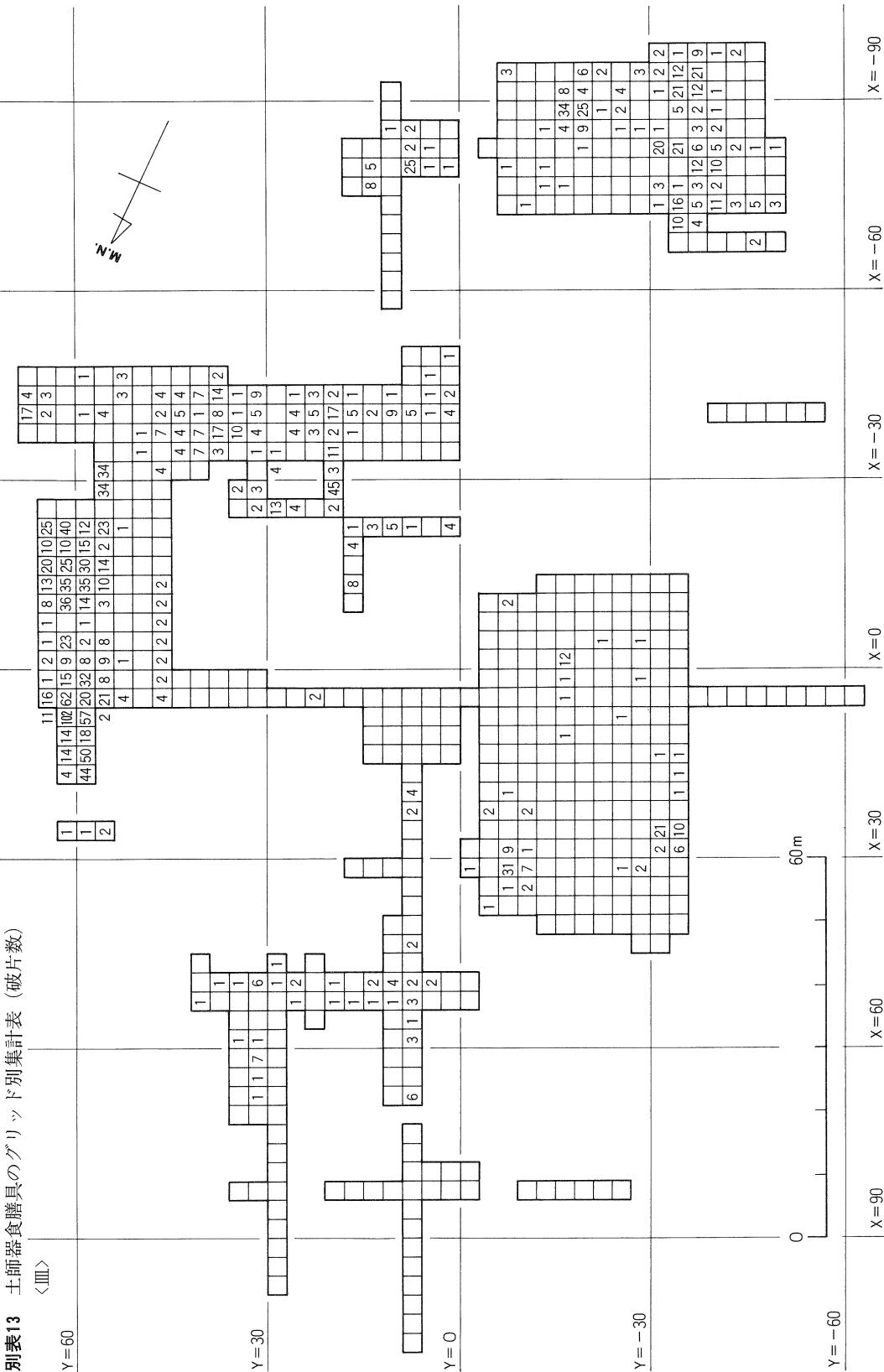
別表11 1978年度調査 S I 01, 周辺の出土遺物計測表

(単位: cm)

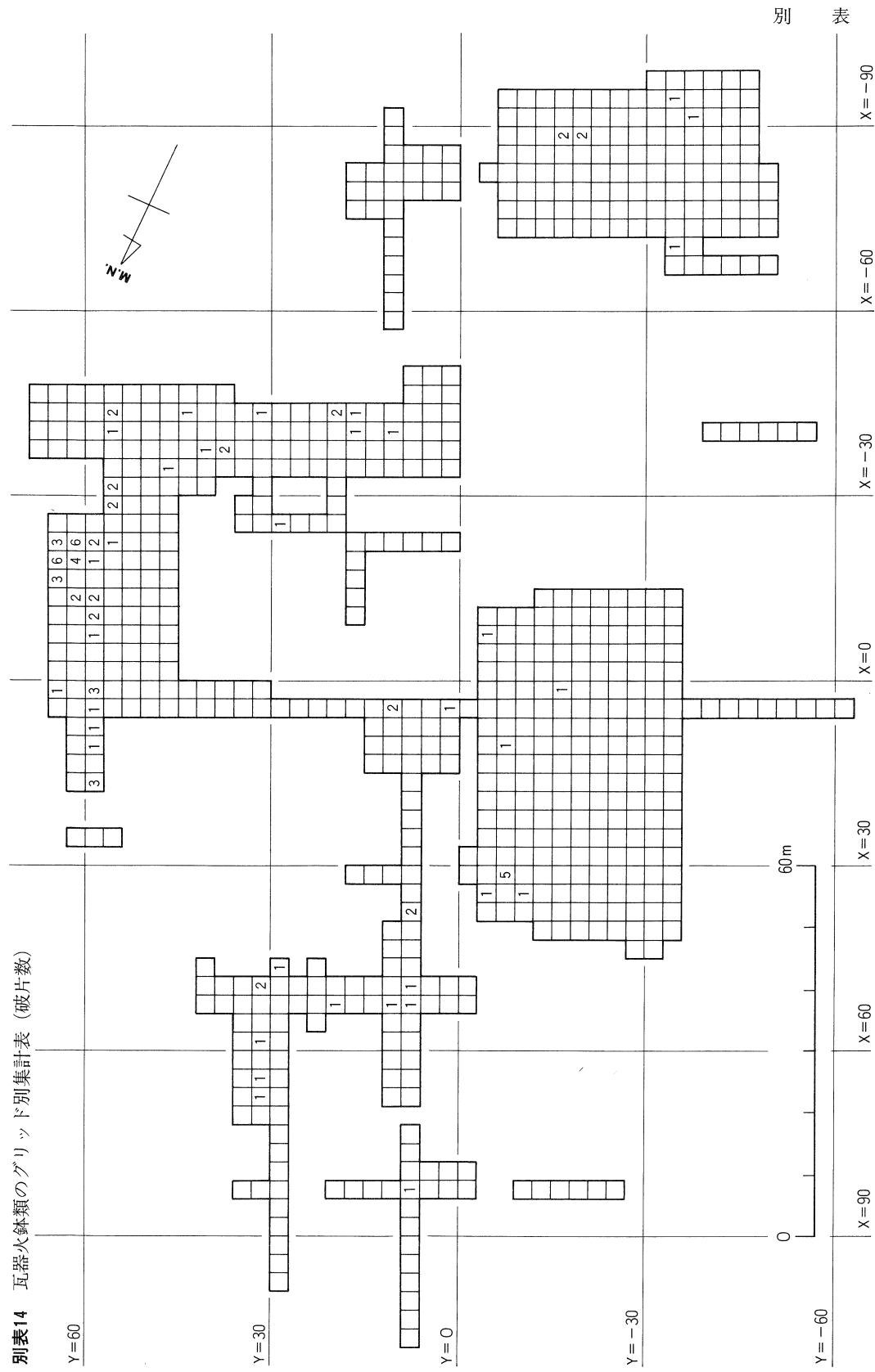
No.	種類	器種	遺構	層位	法量	個体数	備考	整理No.
1	土師器	皿	S I 01	埋土	口[8.0]	0.20	T-5類 浅黄橙色 2片接合	311
2	土師器	皿		埋土	口[10.0]	0.08	T-3類 浅黄橙色	386
3	土師器	皿		埋土	口[10.0]	0.10	T-5類 灰褐色	381
4	土師器	皿		埋土	口[10.0]	0.04	T-5類 灰白色 タール付着	312・317
5	土師器	皿		埋土	口[10.0]	0.08	T-5類 灰褐色	313
6	土師器	皿		埋土	口[11.0]	0.05	T-1類か 浅黄橙色	391
7	土師器	皿		埋土	口[11.0]	0.09	T-1類 浅黄色	389
8	土師器	皿		埋土	口[12.0]	0.06	T-6類かT-7類 灰黄色 タール付着	387
9	土師器	皿		埋土	口[11.0]	0.06	T-5類 浅黄橙色	315
10	土師器	皿		埋土	口[11.0]	0.06	T-5類 浅黄橙色	373
11	土師器	皿		埋土	口[12.0]	0.07	T-6類かT-7類 淡黄色	379
12	土師器	皿		埋土	口[12.0]	0.04	R類か 淡黄色	382
13	土師器	皿		埋土	口[13.0]	0.38	T-2類 灰白色 3片接合	307・308・314
14	土師器	皿		埋土	口[16.0]	0.22	T類 灰白色 2片接合	371・376
15	土師器	皿		埋土	口[16.0]	0.14	T-3類 灰白色 2片接合	374・383
16	土師器	皿		埋土	口[16.0]	0.17	T-3類 灰白色	375
17	青磁	椀		埋土	口[15.0]	0.06	龍泉窯系椀D類 無文 2片接合	442
18	青磁	椀		埋土	口[15.0]	0.03	龍泉窯系椀C類 雷文	357
19	青磁	椀		埋土	口[15.0]	0.05	龍泉窯系椀C2類 雷文	356
20	青磁	椀		埋土	底4.5		龍泉窯系椀B1類 内底に印花文 外面に蓮弁文	438
21	中国	天目茶椀		埋土	口[12.0]	0.09	鉄釉	413
22	白磁	椀		埋土	口[15.0]	0.08	白磁碗18類	359
23	白磁	皿		埋土	口[10.0]	0.10	白磁皿17類	447
24	白磁	皿		埋土	口[10.0]	0.04	白磁皿17類	448
25	瀬戸美濃	綠釉小皿		埋土	口[11.0]	0.04	古瀬戸後III期 灰釉 内面露胎 二次被熱	428
26	瀬戸美濃	綠釉小皿		埋土	口[11.0]	0.08	古瀬戸後III期 灰釉 内面露胎	348
27	瀬戸美濃	皿		埋土	底[6.0]		大窯第1~2小期 灰釉 高台底面に輪トテン痕	346
28	瀬戸美濃	皿		埋土	底[6.0]		大窯第1~2小期 灰釉 高台底面に輪トテン痕	345
29	瀬戸美濃	皿		埋土	底[6.0]		大窯第1~2小期 灰釉 高台底面に輪トテン痕	426
30	瀬戸美濃	天目茶椀		埋土	底2.0		古瀬戸後IV期 鉄釉 内反り高台	341
31	瀬戸美濃	梅瓶		埋土	口[4.0]	0.54	古瀬戸中III~IV期 灰釉 二次被熱	434
32	瀬戸美濃	花瓶		埋土	口[11.0]	0.09	古瀬戸中I~II期 鉄釉	416
33	瀬戸美濃	香炉		埋土	口[11.0]	0.06	古瀬戸後IV期(古) 灰釉 二次被熱	354
34	瀬戸美濃	香炉		埋土	口[11.0]	0.09	古瀬戸後IV期(古) 鉄釉	418
35	瀬戸美濃	香炉		埋土	底[8.0]		古瀬戸後期 鉄釉	415
36	瀬戸美濃	却皿		埋土	口[16.0]	0.08	古瀬戸後期 鉄釉 二次被熱	417
37	瀬戸美濃	直線大皿		埋土	口[30.0]	0.03	古瀬戸後III期 灰釉 二次被熱	347
38	瀬戸美濃	すり鉢		埋土	口[30.0]	0.02	古瀬戸後IV期(新) 銀鉢	344
39	珠洲	すり鉢		埋土	口[30.0]	0.03	珠洲IV期	337
40	珠洲	すり鉢		埋土	口[30.0]	0.05	珠洲V期 口縁端面に波状文	411
41	珠洲	すり鉢		埋土	口[30.0]	0.05	珠洲V期 口縁端面に波状文	412
42	青磁	椀	S I 01周辺	搅乱層	底[6.5]		内底に印花文	495
43	白磁	椀		褐色土	底[6.0]		白磁碗V類	477
44	白磁	皿		褐色土	口[10.0]	0.04	白磁皿17類	479
45	白磁	皿		耕作土	口[10.0]	0.06	白磁皿17類	500
46	瀬戸美濃	天目茶椀		耕作土	口[12.0]	0.03	古瀬戸後IV期(新) 鉄釉	486
47	瀬戸美濃	平碗		表土	口[16.0]	0.05	古瀬戸後I期 灰釉	297
48	瀬戸美濃	皿		耕作土	口[11.0]	0.05	大窯第3小期 灰釉	487
49	瀬戸美濃	皿		褐色土	口[11.0]	0.06	大窯第3小期 灰釉	474
51	珠洲	すり鉢		黒色土	底[12.0]			502
52	珠洲	すり鉢		褐色土	口[28.0]	0.05	珠洲IV期	469
53	珠洲	すり鉢		耕作土	口[30.0]	0.04	珠洲V期 口縁端面に波状文	485

別表



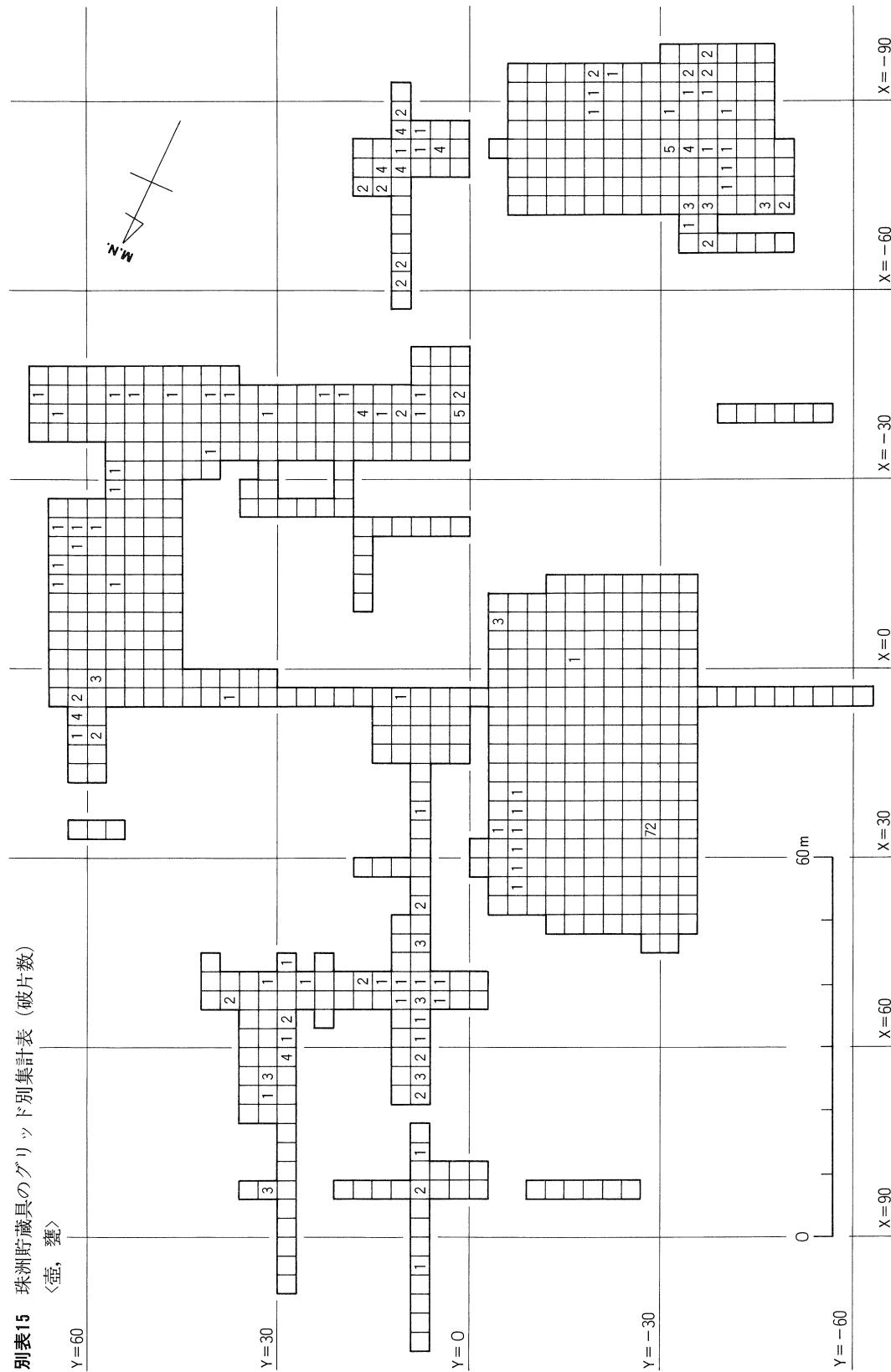
別表13 土師器食膳具のグリッド別集計表（破片数）
<III>

別表14 瓦器火鉢類のグリッド別集計表(破片数)

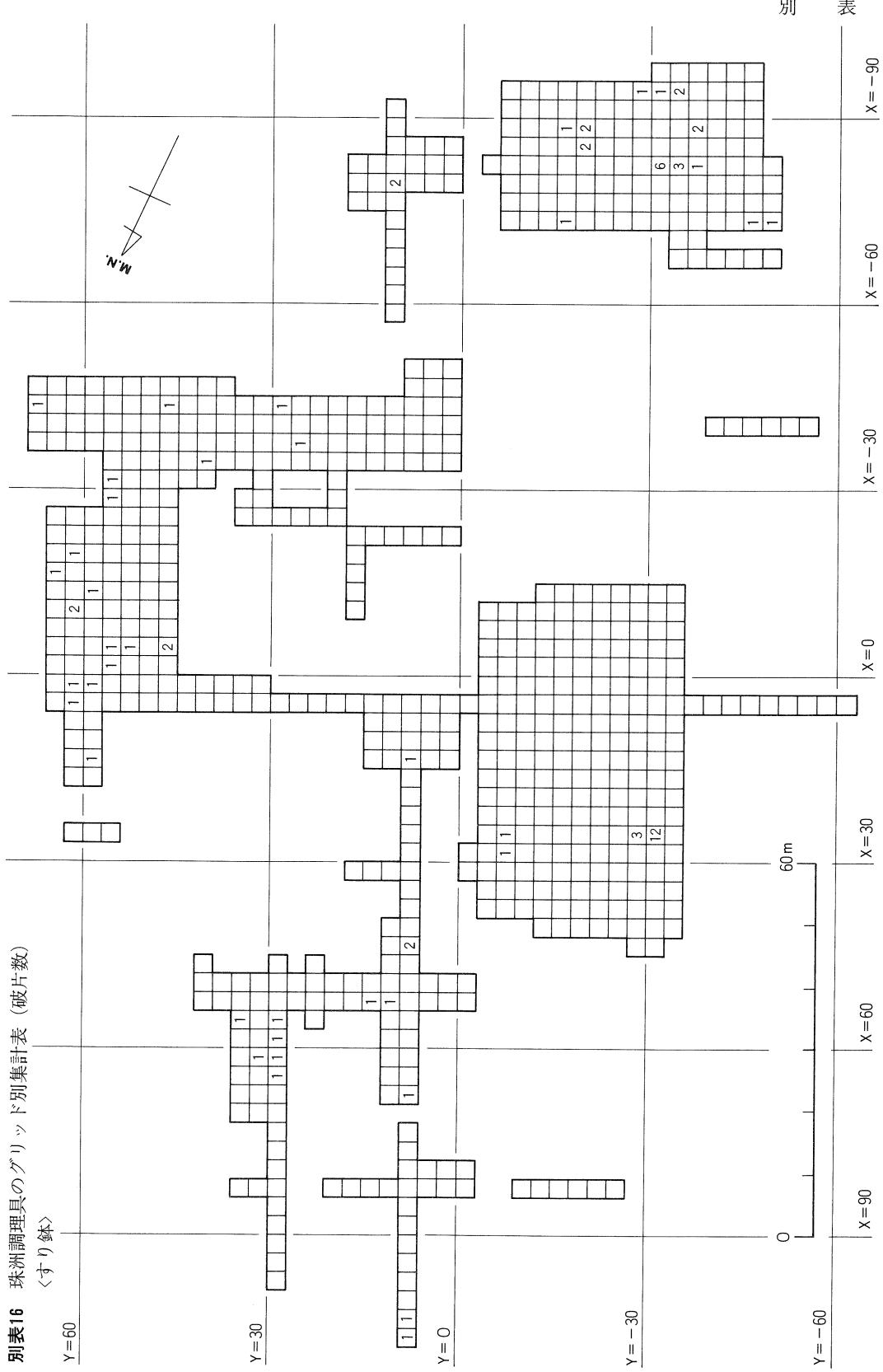


珠洲町感具のヨリツ下別集計表(岐片数)

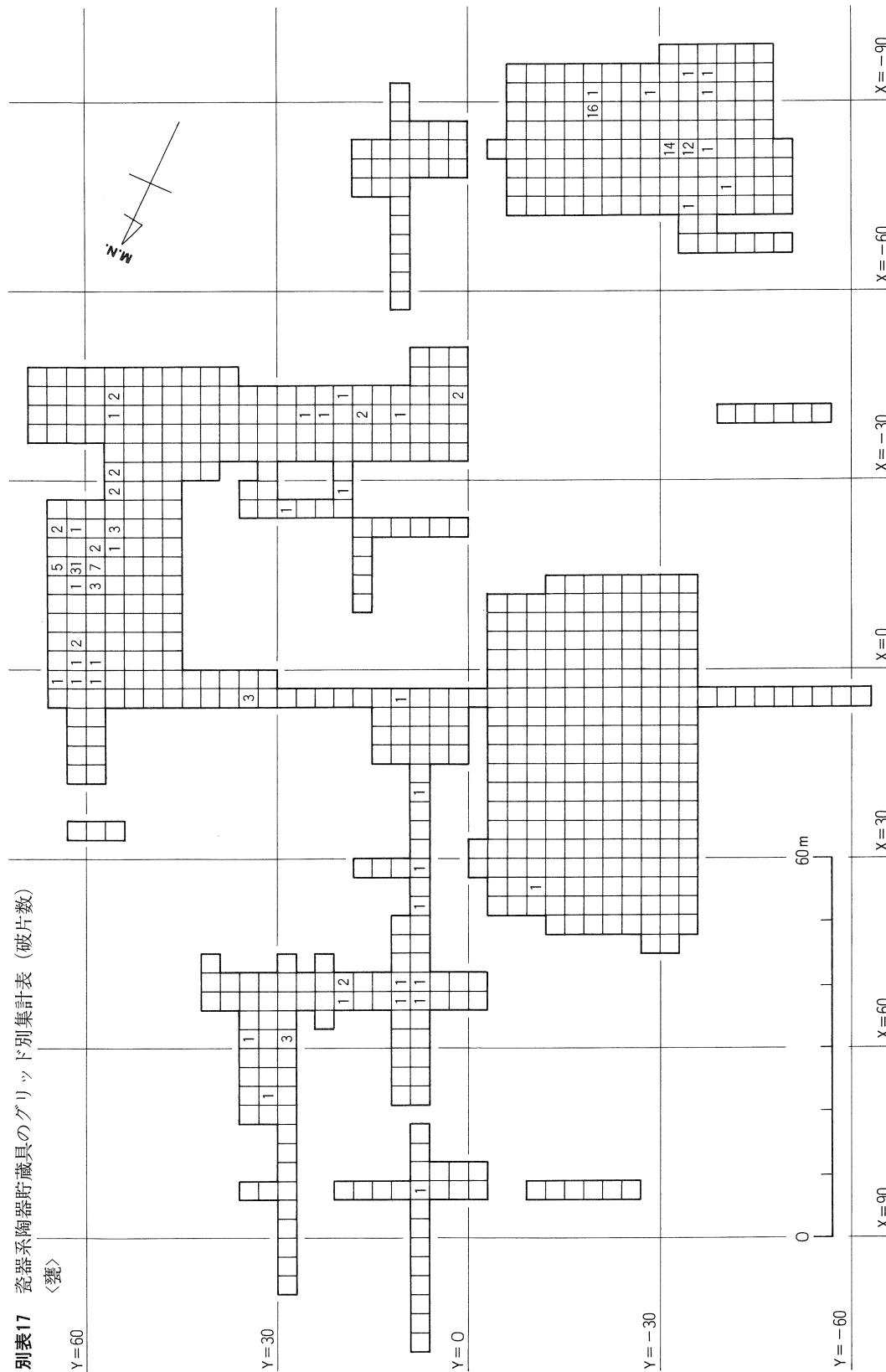
廣雅



別表16 珠洲調理具のグリッド別集計表（破片数）
〈すり鉢〉

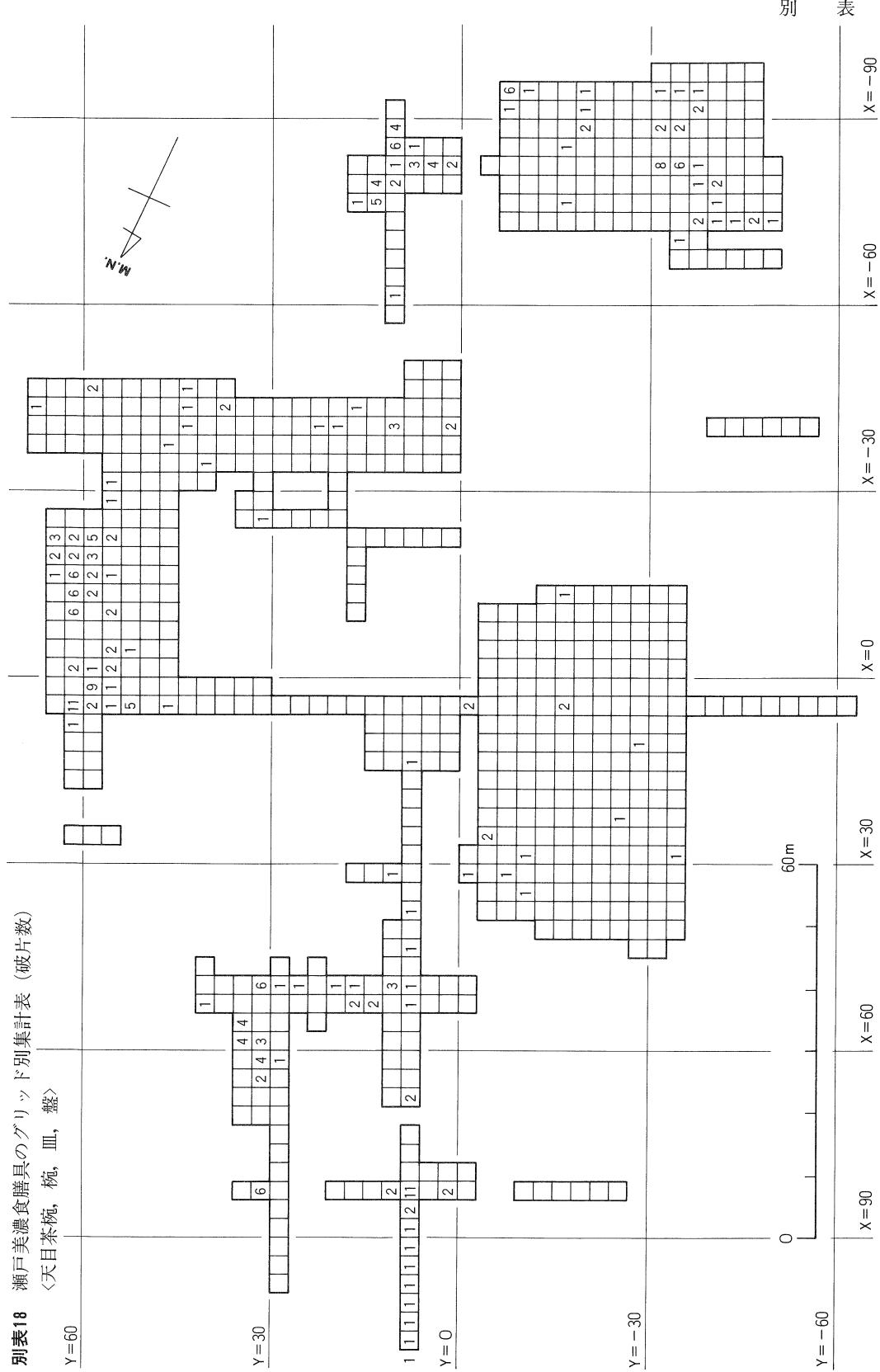


江馬氏城館跡III

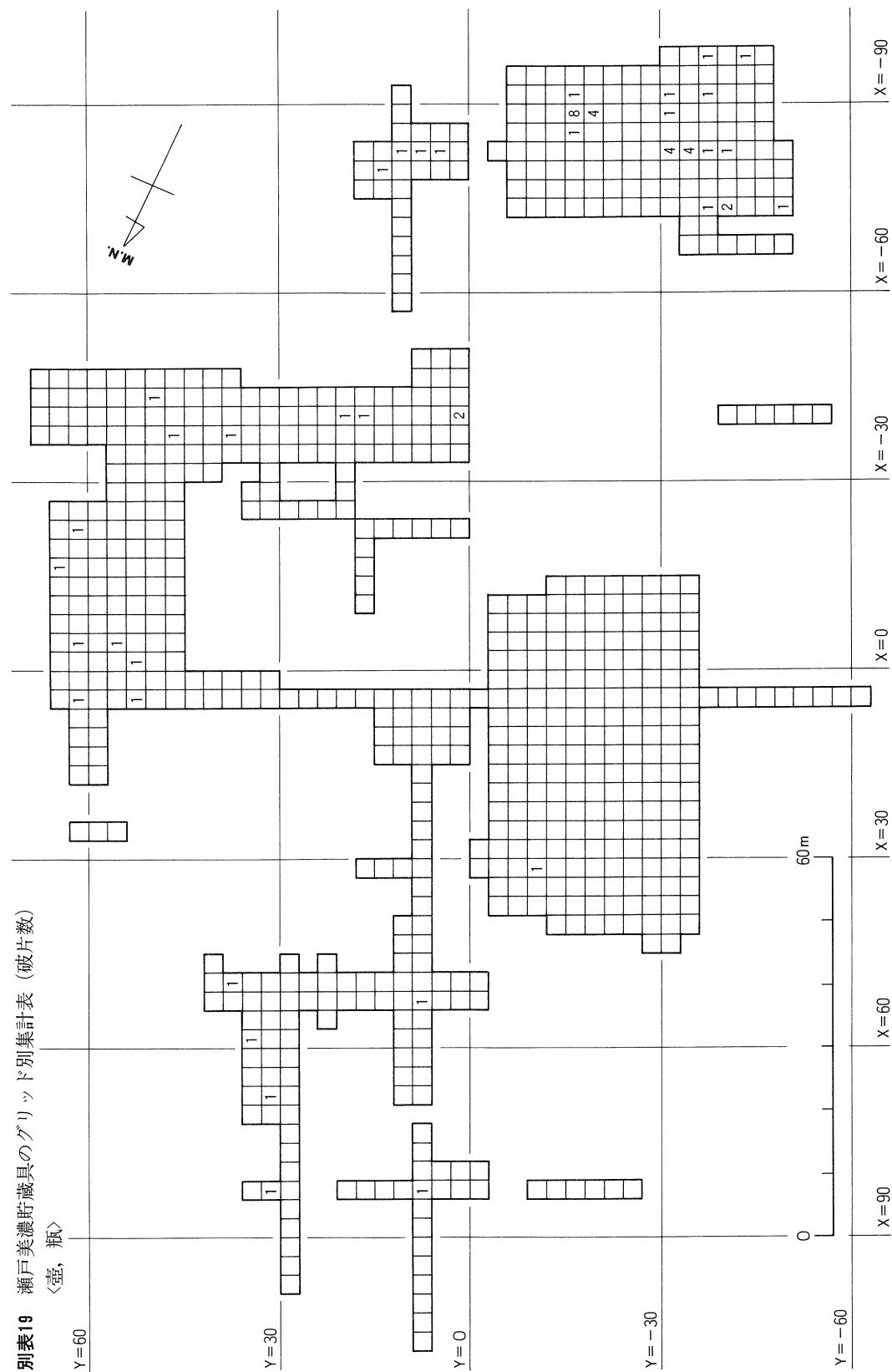


別表17 瓷器系陶器貯蔵具のグリッド別集計表（破片数）

別表18 濱戸美濃食膳具のグリッド別集計表（破片数）
 <天目茶碗、椀、皿、盤>

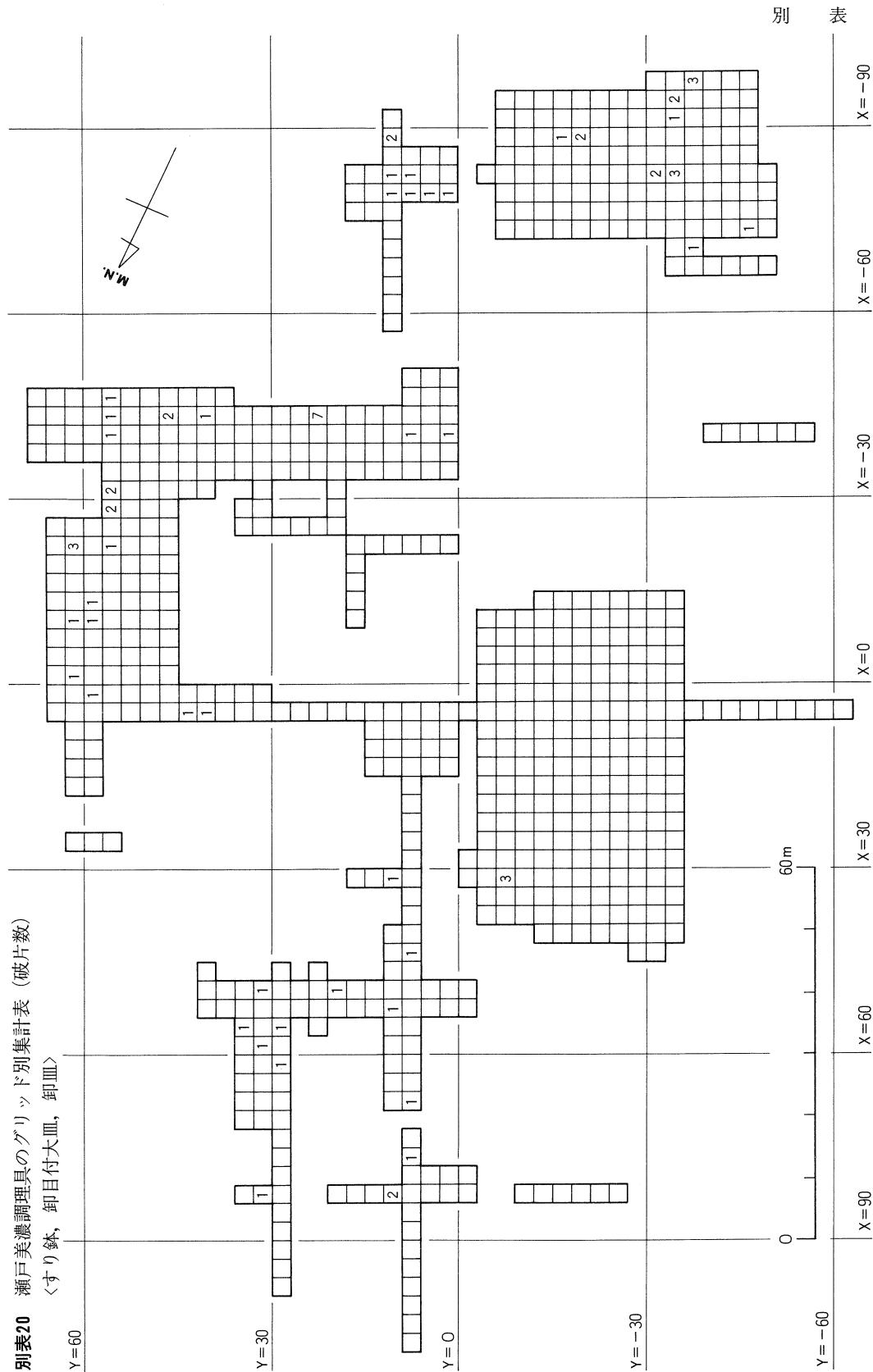


江馬氏城館跡III



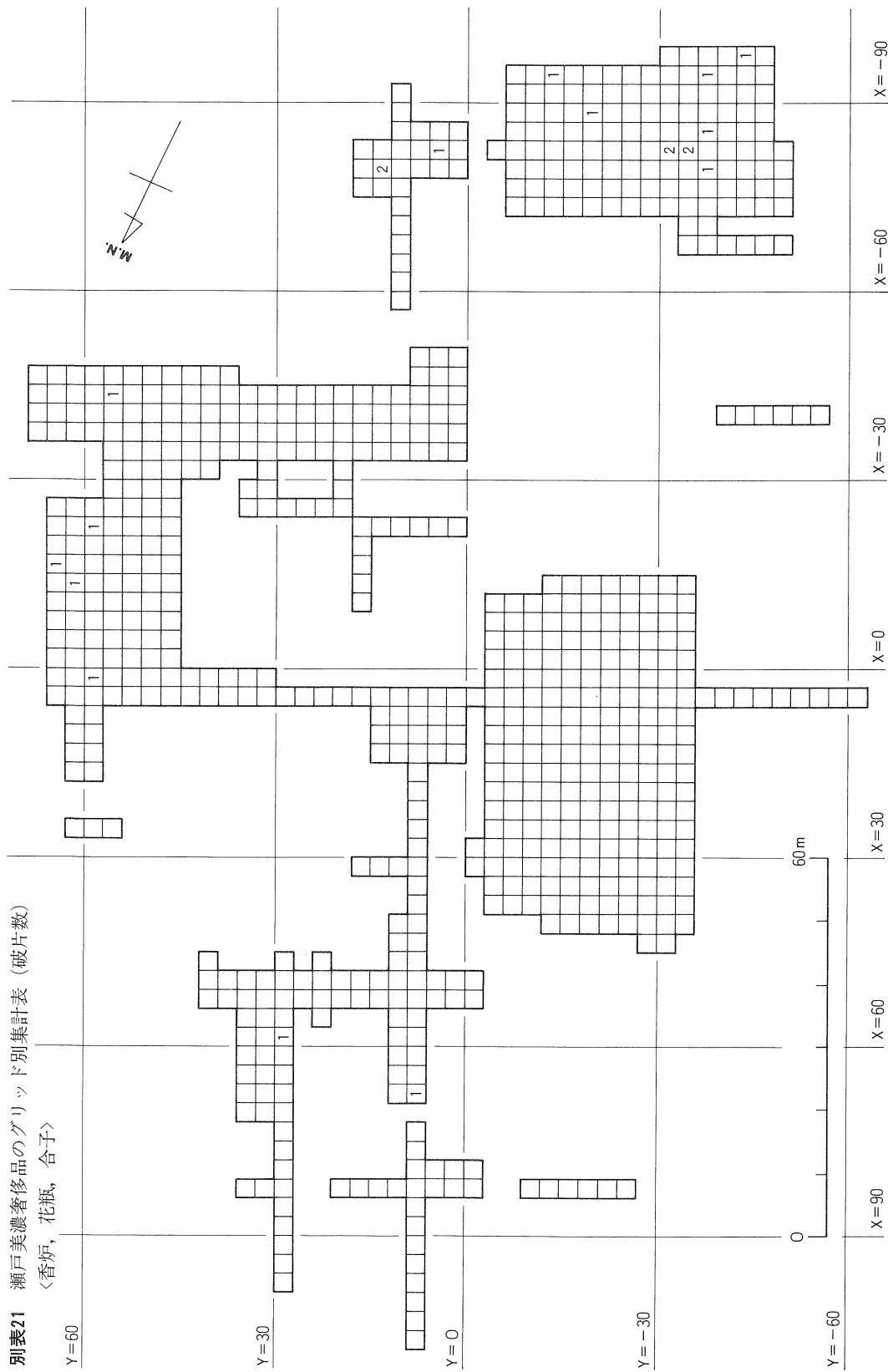
別表19 濱戸美濃貯蔵具のグリッド別集計表（破片数）
〈壺、瓶〉

別表20 濱戸美濃調理具のグリッド別集計表（破片数）
<すり鉢、鉗目付大皿、鉗皿>

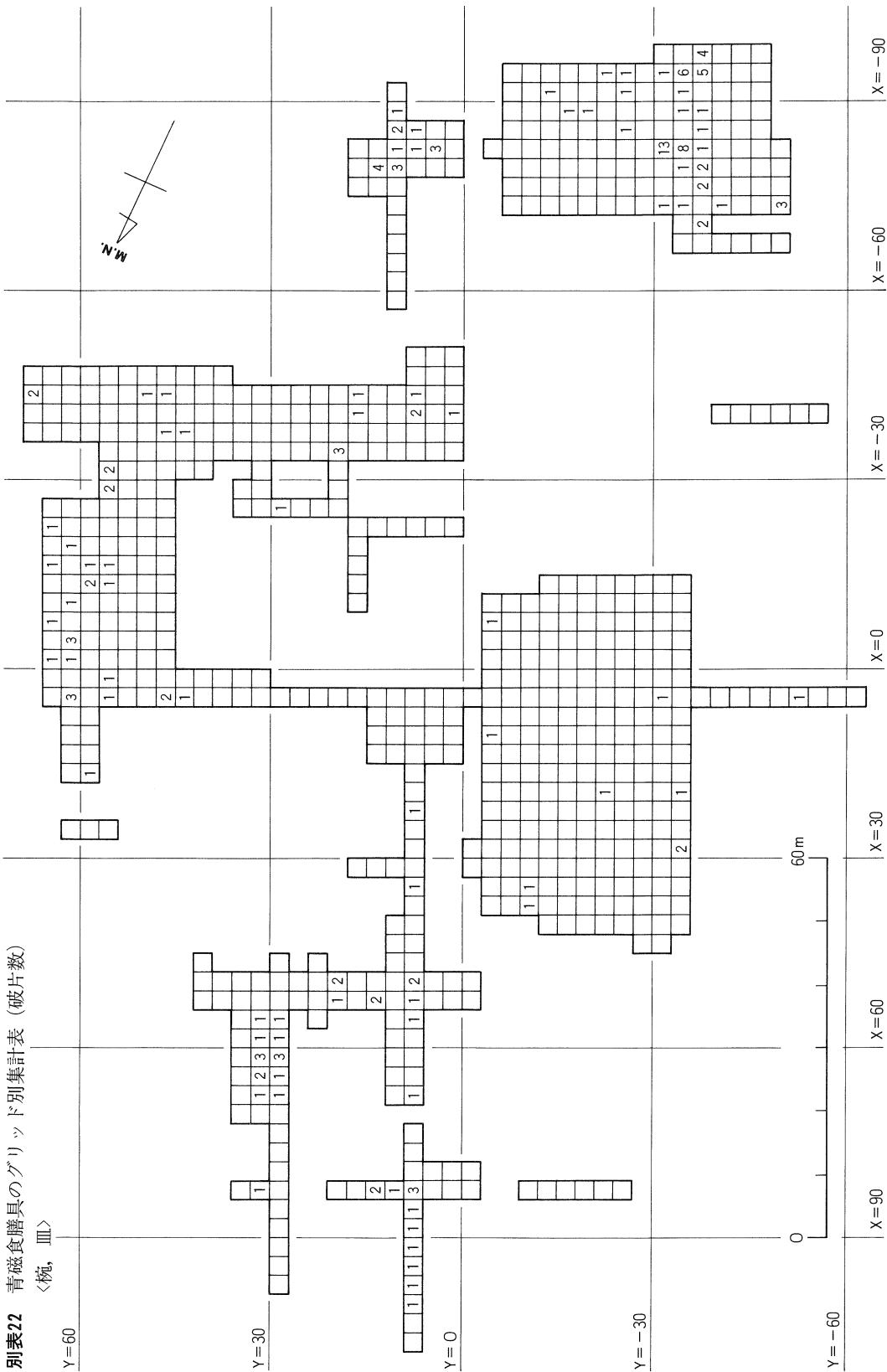


江馬氏城館跡III

別表21 濱戸美濃奢多品のグリッド別集計表（破片数）
〈香炉、花瓶、合子〉



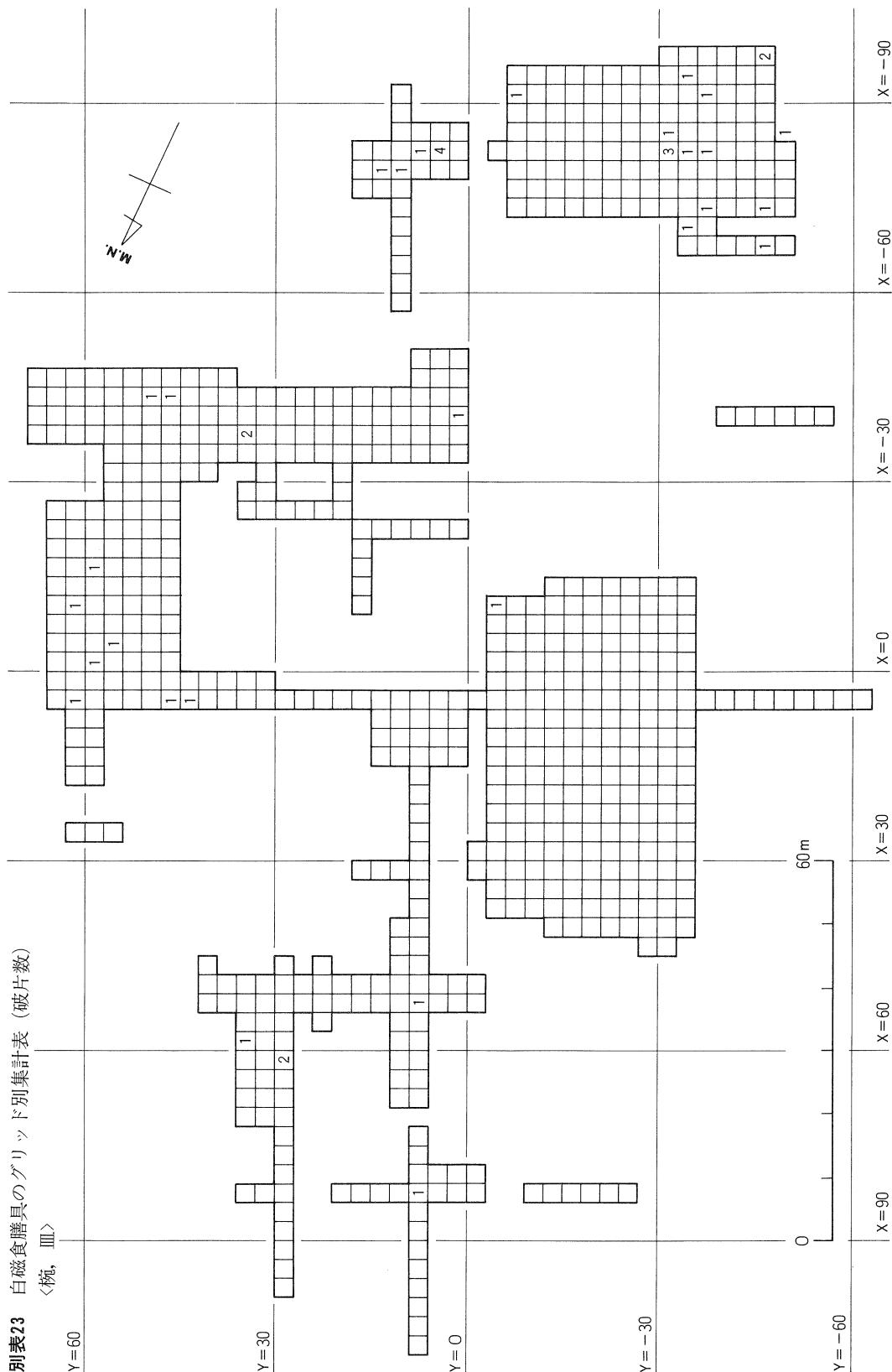
別表22 青磁食膳具のグリッド別集計表（破片数）



別 表

江馬氏城館跡III

別表23 白磁食膳具のグリッド別集計表（破片数）
<概、III>



EMA CASTLE SITE III

**A REPORT ON THE EXCAVATION OF
FIFTEENTH CENTURY SQUARE CASTLE SITE
IN NORTHERN Gifu, JAPAN**

BY

**KANAME MAEKAWA
AIKO OHIRA
MICHIHIRO KOJIMA
KAKUYA NAKATA
JUNPEI ISHII
MOTOI ONO
AYUMI SHIMIZU
MAMIKO TODA
TADASHI TAKIZAWA**

CONTENTS

- Chapter I Progress of research work**
- II Geographical and historical environment**
- III Excavation of Ema Castle site**
- IV Discussion and conclusion**
- V Natural scientific studies**

**THE BOARD OF EDUCATION OF KAMIOKA TOWN
THE FACULTY OF HUMANITIES, TOYAMA UNIVERSITY
MARCH, 1997**

English Summary

MAEKAWA KANAME (Correction by Martin Morris)

Introduction

This is the third report on the archaeological investigations at the Ema Castle site in Northern Gifu Prefecture, Japan. The main site is a late-fourteenth century castle, square on plan, by the Takahara River. One summer of archaeological fieldwork has been carried out on a joint basis by the staff of Kamioka Town Board of Education and the department of archaeology at Toyama University with a view to producing a full-scale reconstruction of Ema Castle on its original site. This report outlines the results of the excavation undertaken in July and August, 1994, and also includes a topographical reconstruction based on an Edo-period map.

Excavation and Analysis

The five weeks of fieldwork brought to light a residential area containing the remains of buildings, garbage pits, and pit houses were enclosed by roads and wooden fences. The most remarkable find of the year is a bowl used in the making of laquar ware. Generally speaking, the pit houses were used by craftsmen such as laquar-ware manufacturer and blacksmiths. The area excavated is therefore thought to be where they lived and worked.

In addition, a trial trench brought to light what appear to be the remains of a medieval road, which, from its relationship to an existing road, is considered to have about 6.5m wide. The road is situated in the middle of the river terrace, and the relationship between it and the landscape surrounding the castle is of the greatest interest.

We also examined the old map of the village, probably drawn in the late Edo period, since we suspected the property boundary marked on it might well shed light on the landscape around the castle at the time when the casle was in being. From it we were able to deduce that four shrines and the two temples were situated on the edge of the castle town, both to define the limits of the settlement and to provide a place where prayers could be offered for military success.

Conclusion

In conclusion, in addition to undertaking an archaeological survey, we adopted an interdisciplinary approach, using scientific analysis and topographical reconstruction to understand this late-fourteenth century or early-fifteenth century prototype of the Sengoku-period castle town.

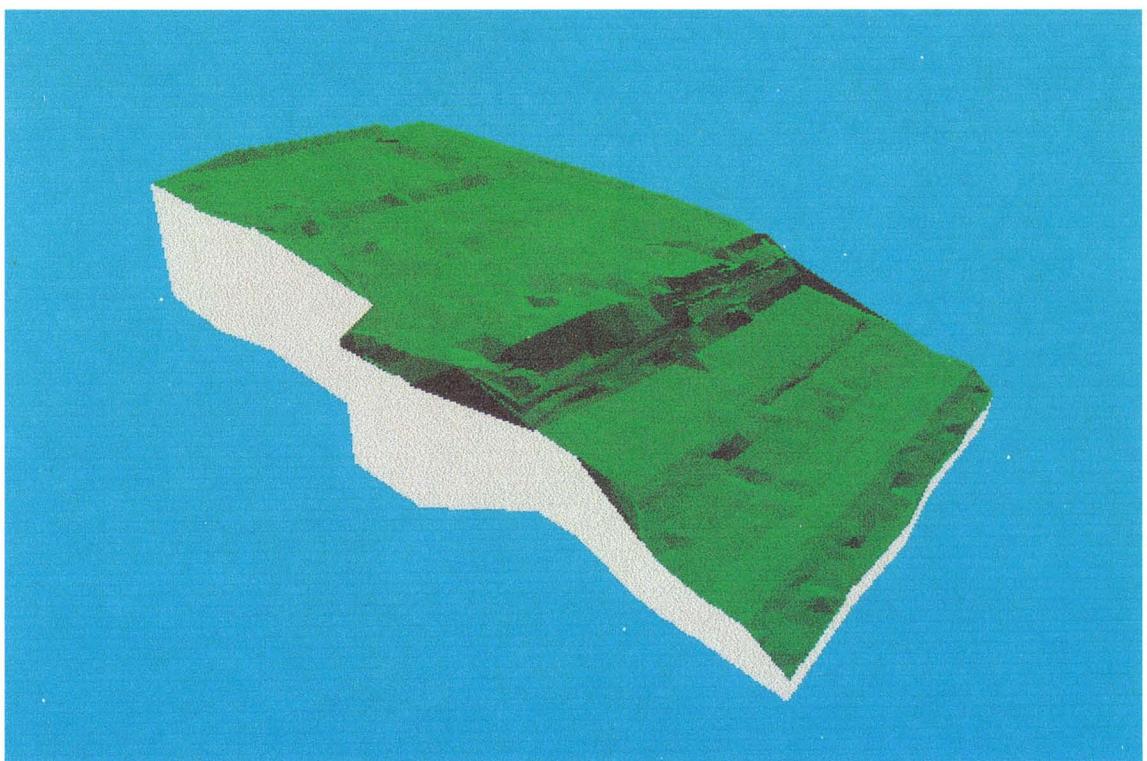
The excavation is scheduled to continue for another five years with the aim of reconstructing the castle not only for the enjoyment of the area, but also to deepen our understanding of medieval history.

図版

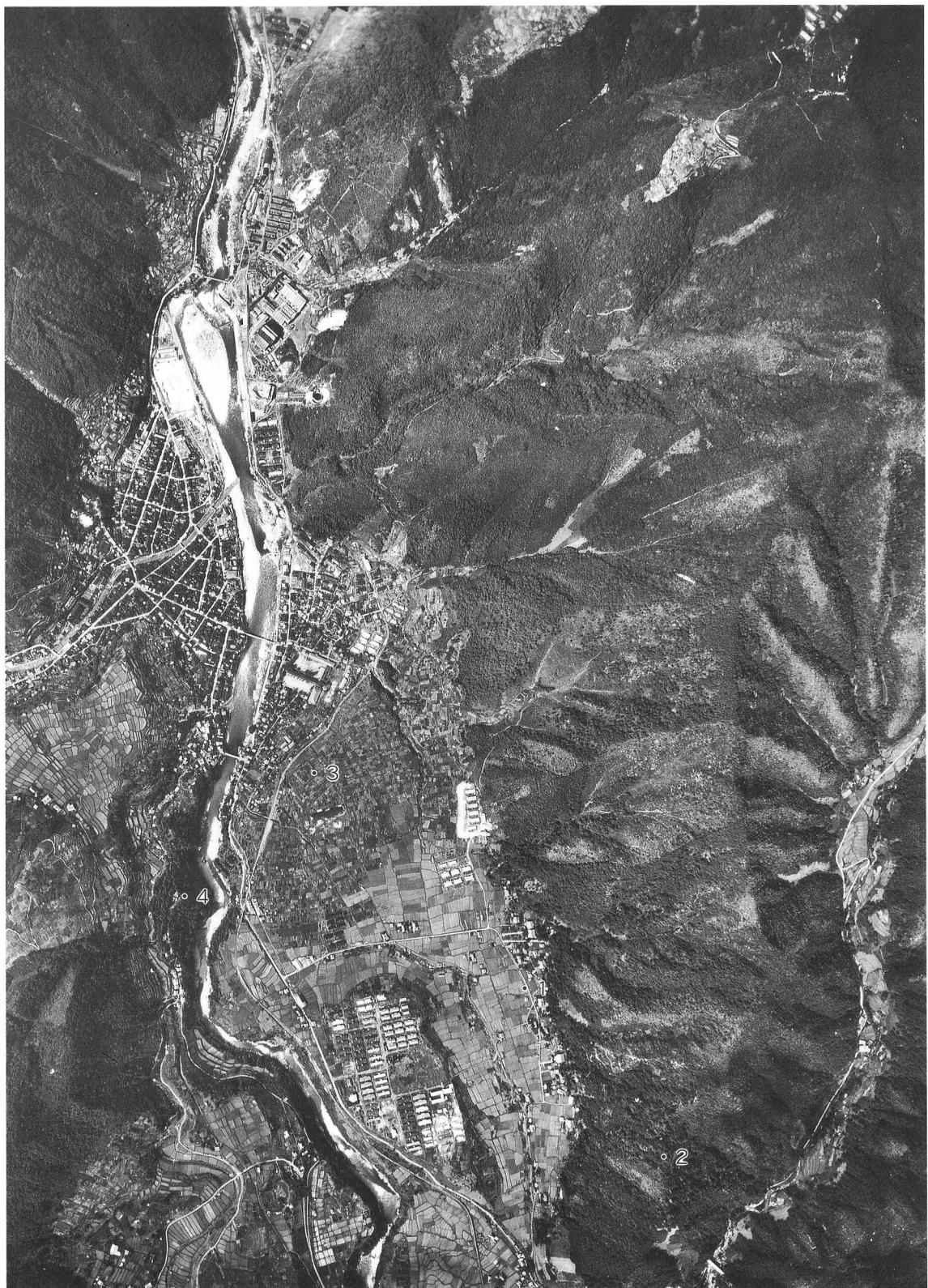
図版一 江馬氏下館跡の地形鳥瞰図



1 江馬氏下館跡の地形(西から)

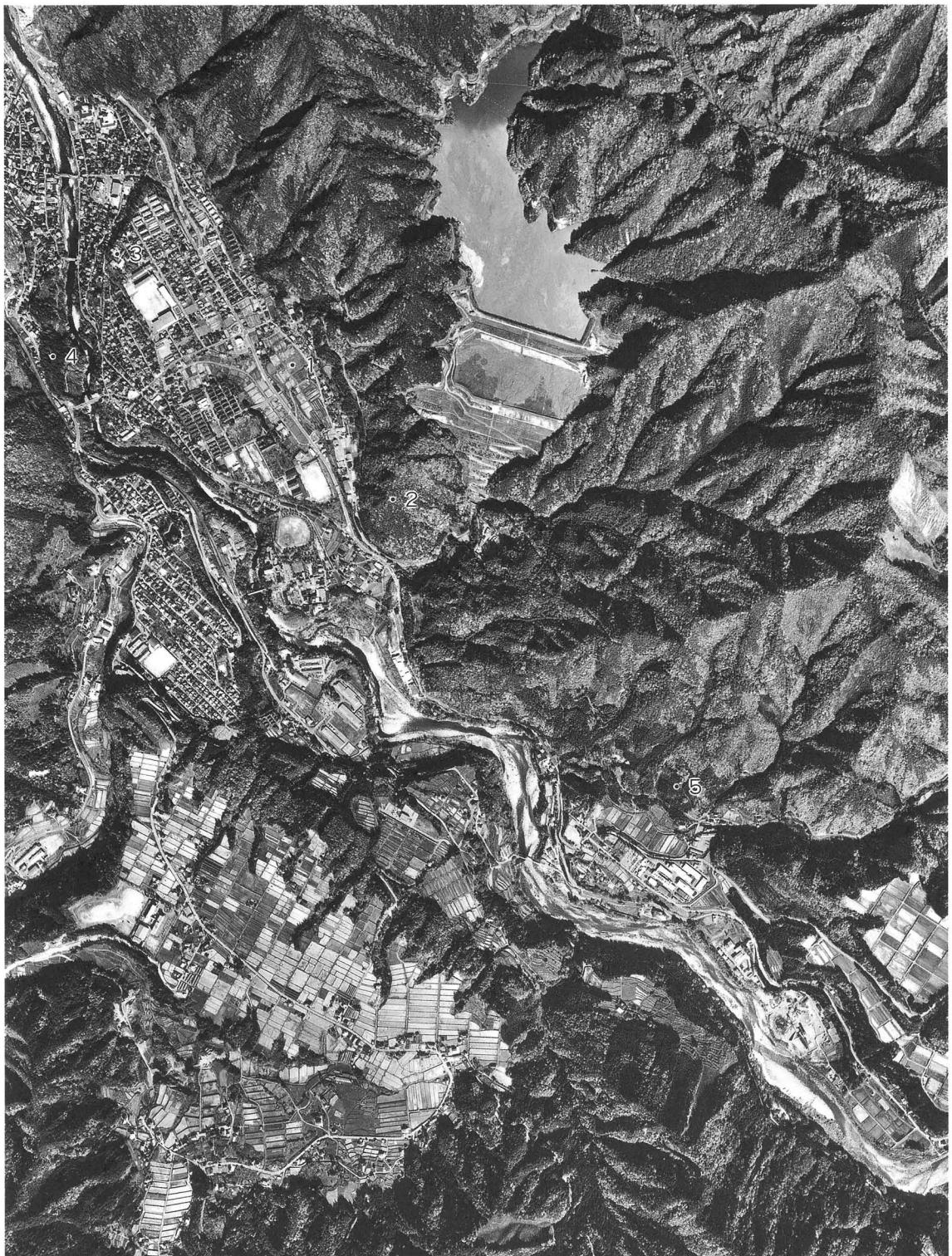


2 1996年度調査地区の地形(北から)



1 江馬氏下館跡, 2 高原諏訪城跡, 3 東町城跡, 4 八幡山城跡(上が北, 縮尺: 約1/26,500)

国土地理院掲載許可済



1 江馬氏下館跡, 2 高原諏訪城跡, 3 東町城跡, 4 八幡山城跡, 5 洞城跡(上が北, 縮尺: 約1/35,000)

国土地理院掲載許可済



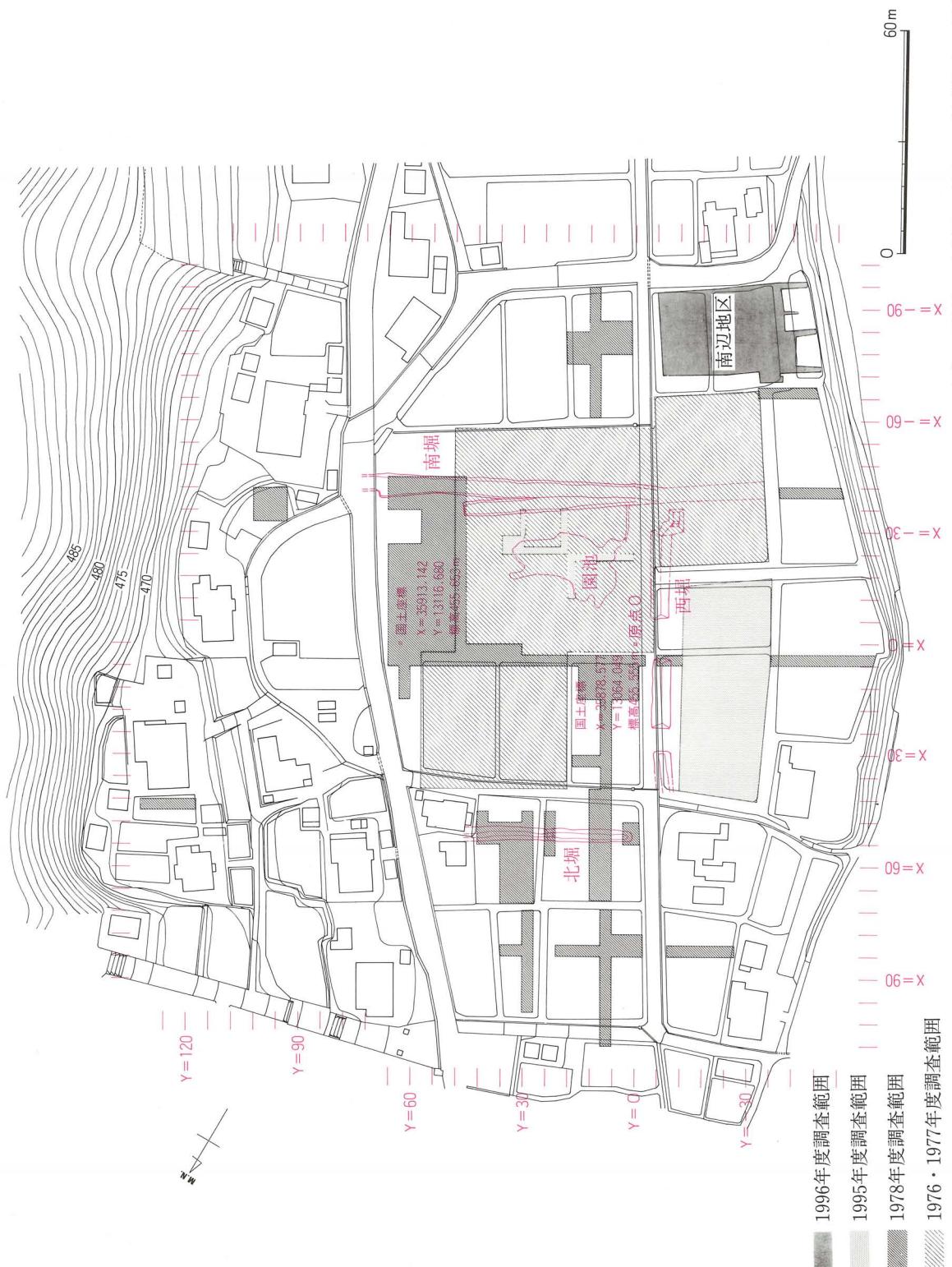
(上が北)



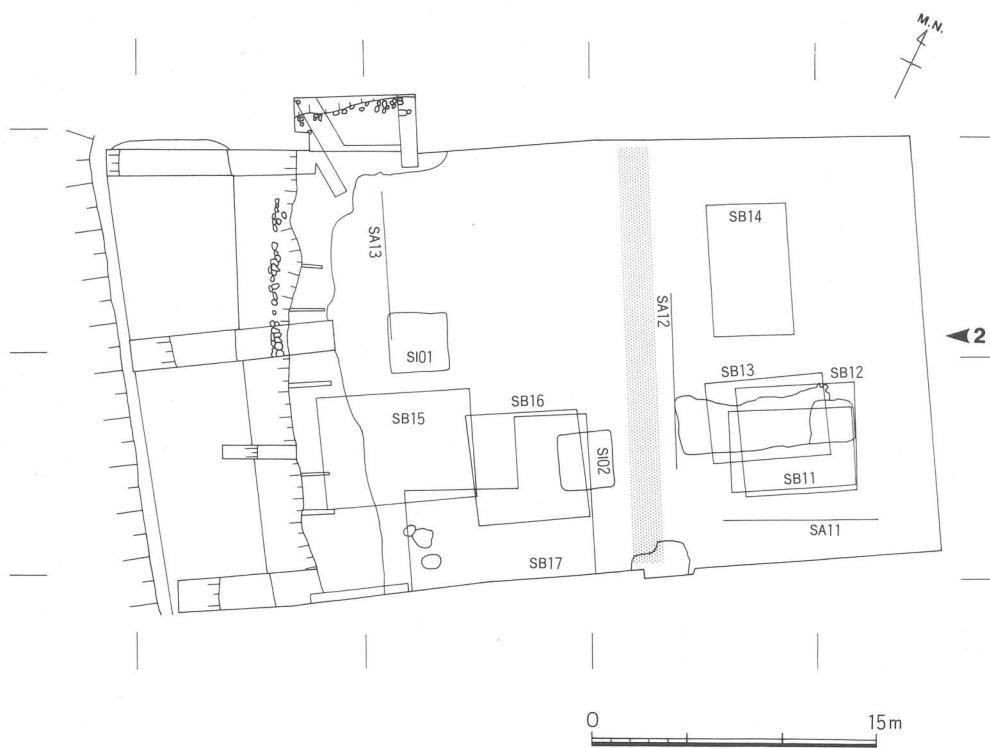
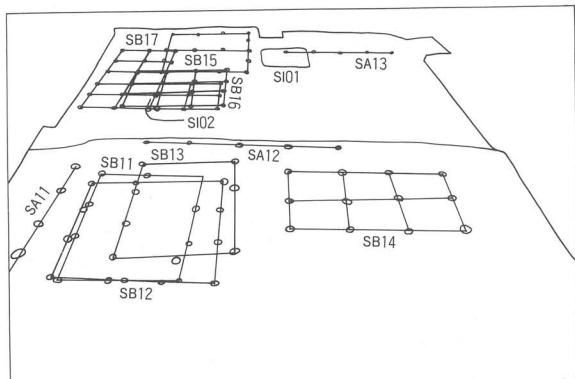
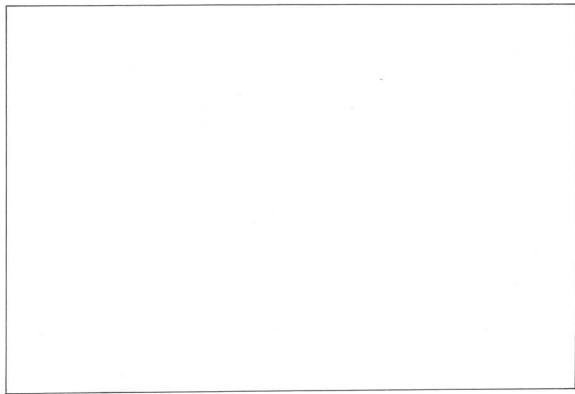
1 神岡町遠景写真(北から)

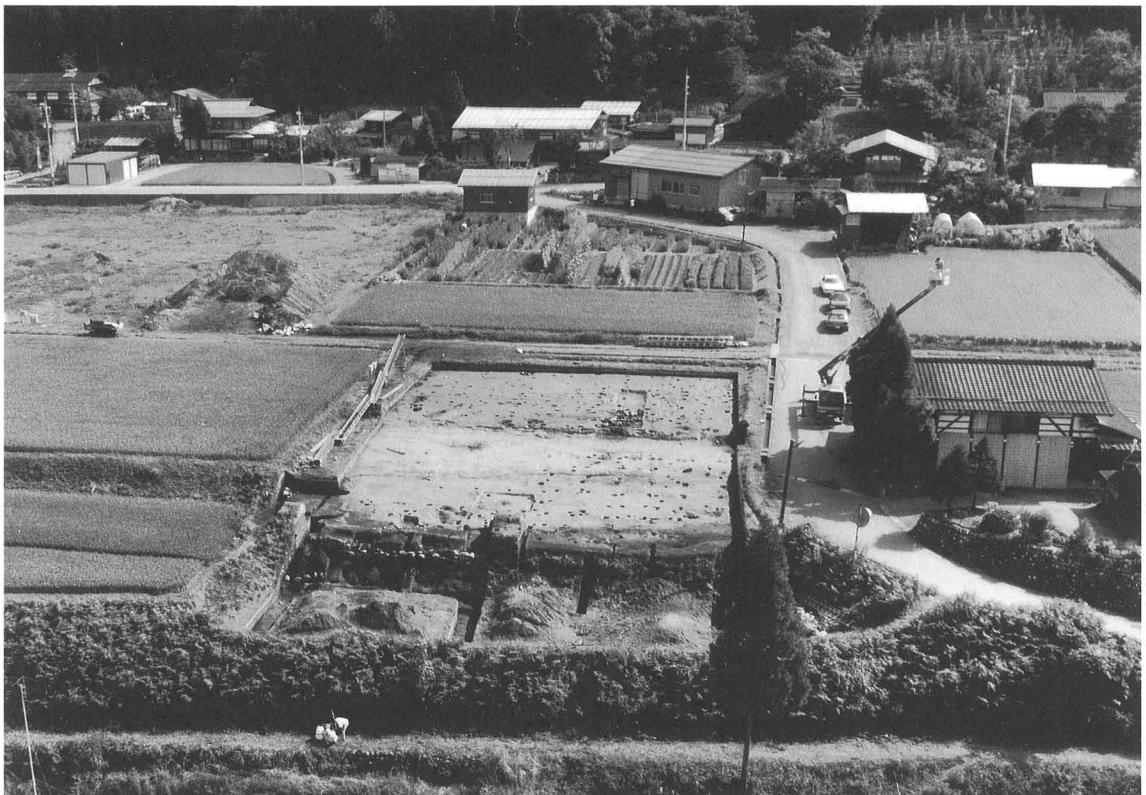


2 調査地区遠景写真：1978年度調査時(西から)



1 調査地区地形図（縮尺1/1,680）

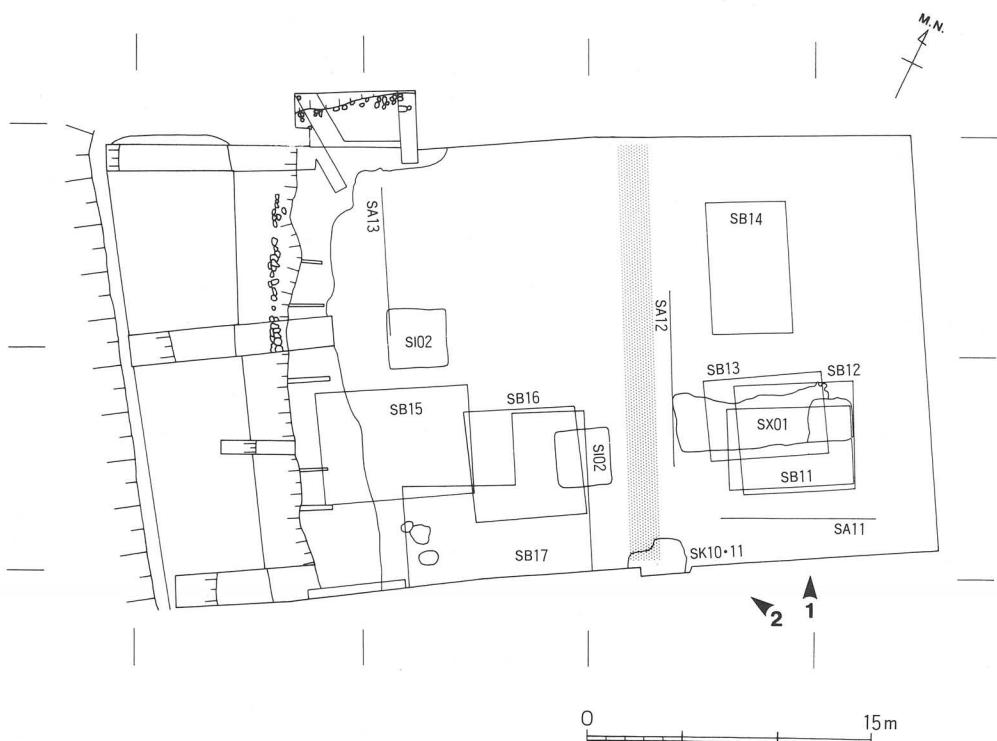
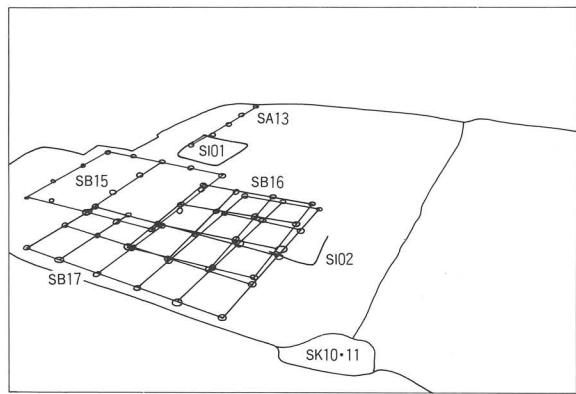
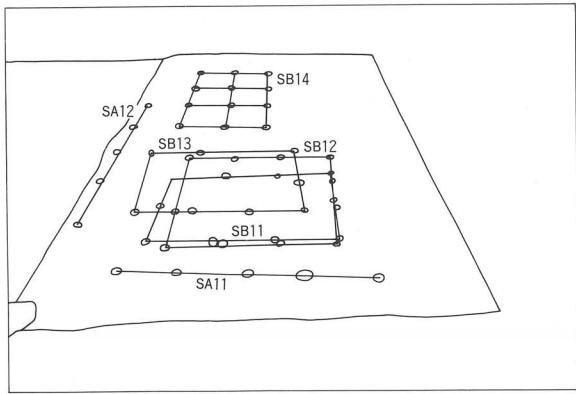




1 調査地区遠景写真(西から)



2 調査地区発掘後全景写真(東から)

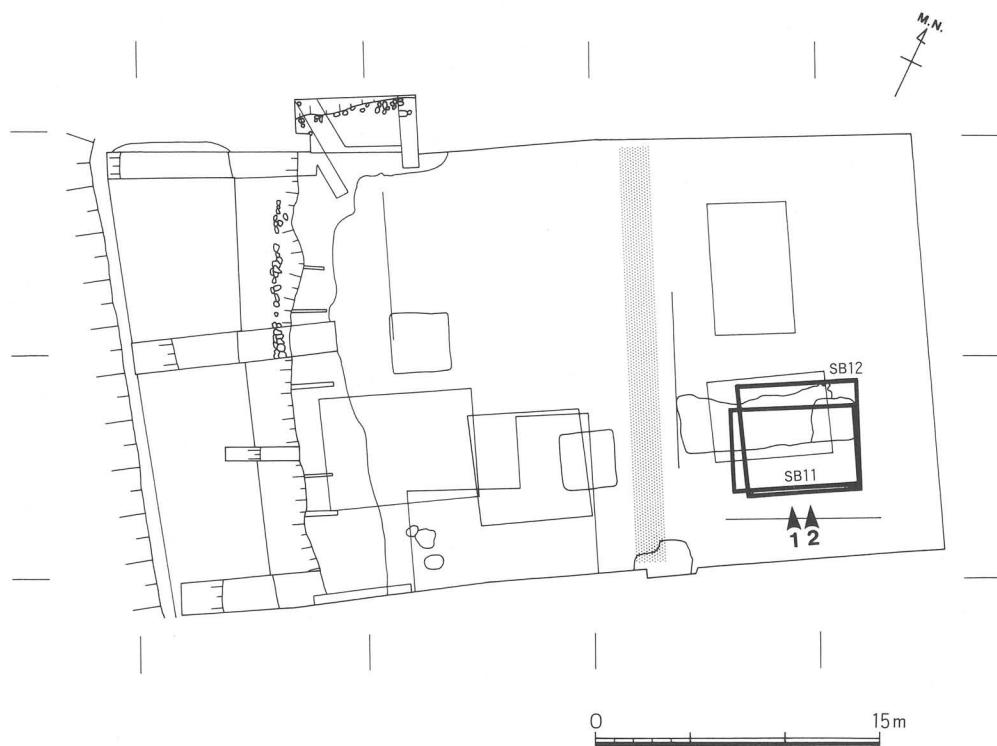
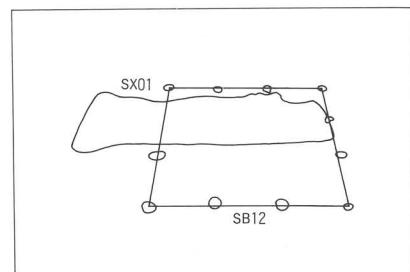
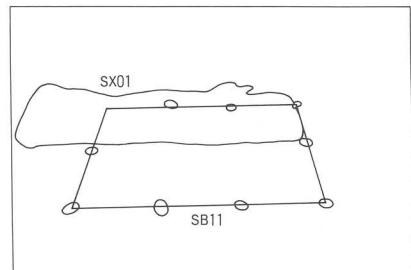


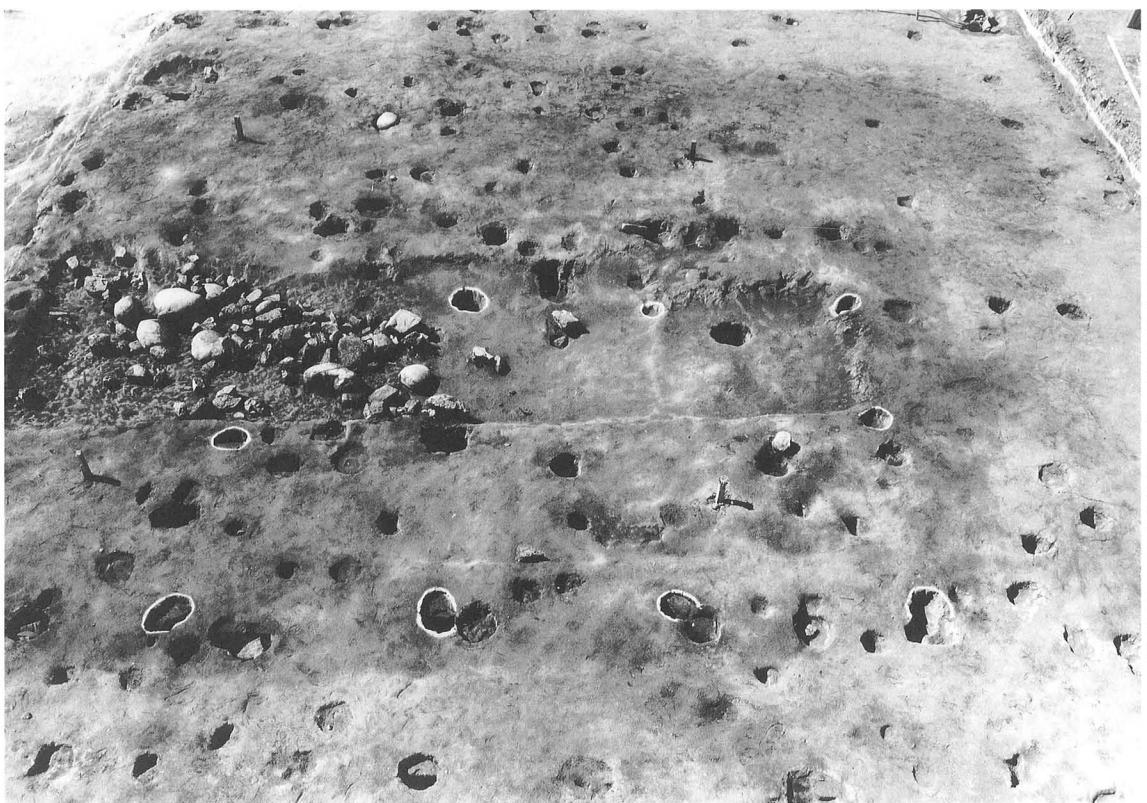


1 調査地区発掘後全景写真(調査地区東部, 南から)

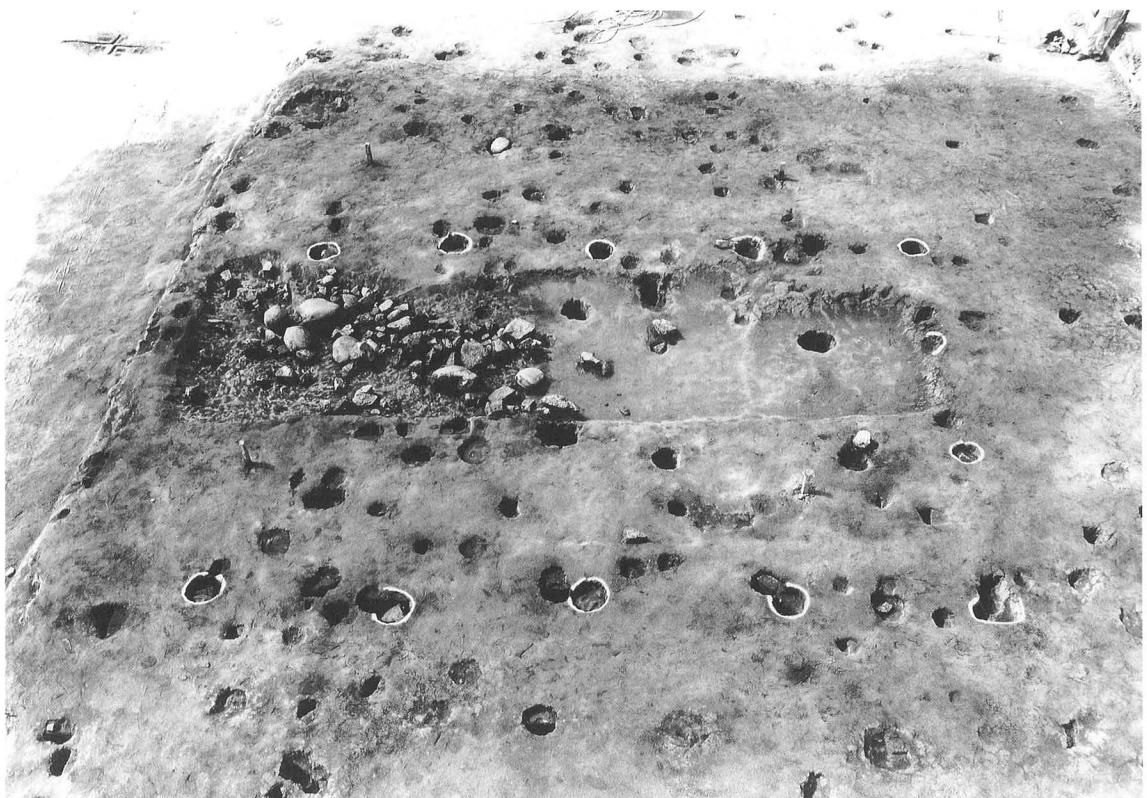


2 調査地区発掘後全景写真(調査地区西部, 南東から)

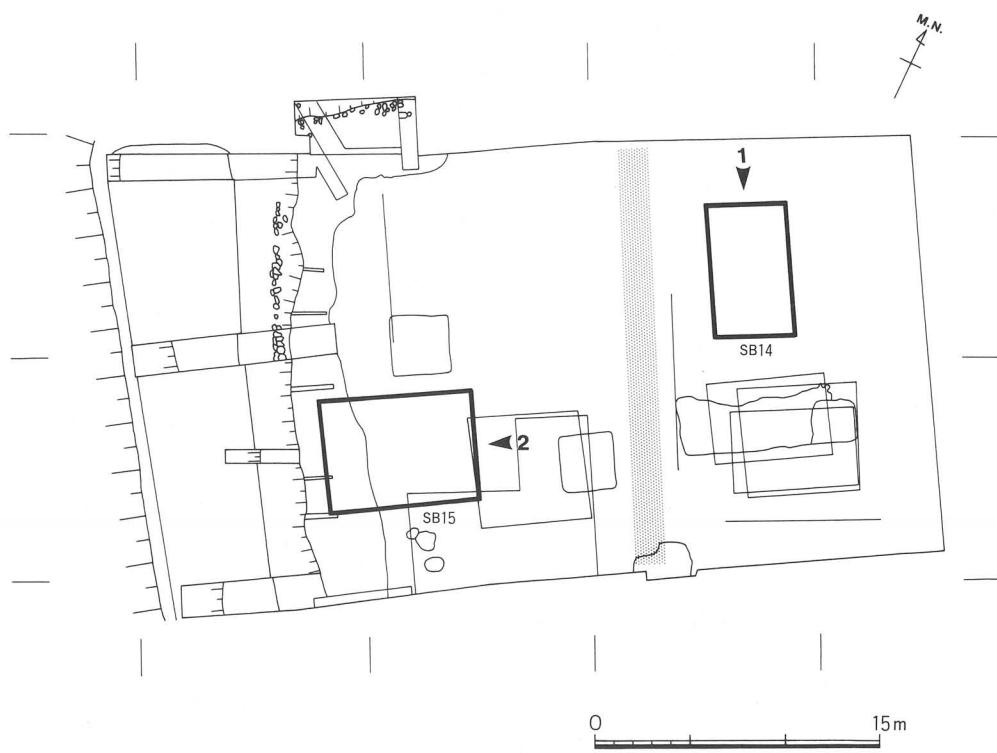
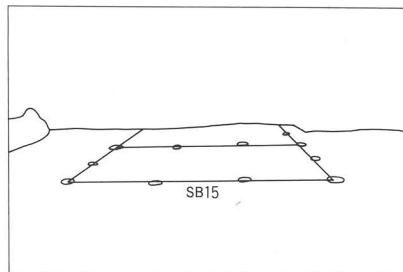
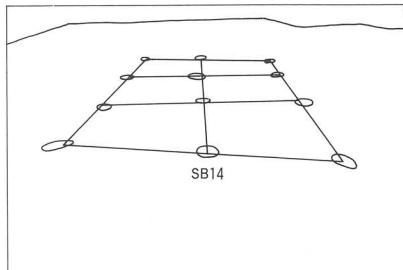




1 建物S B11写真(南から)



2 建物S B12写真(南から)

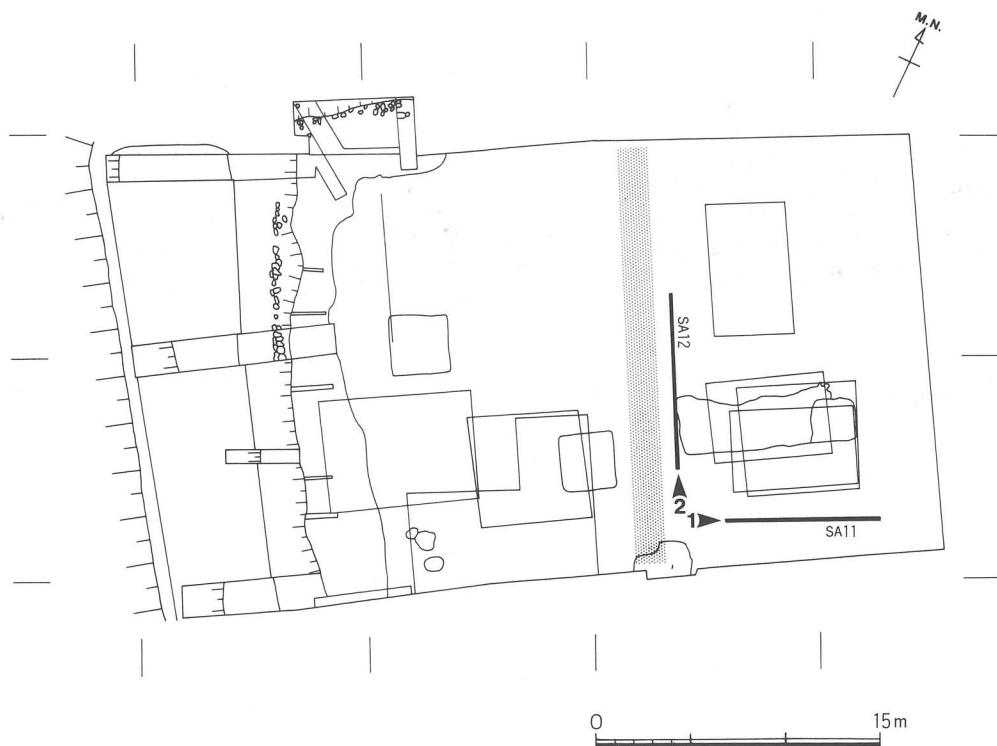
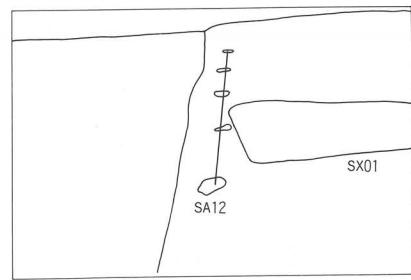
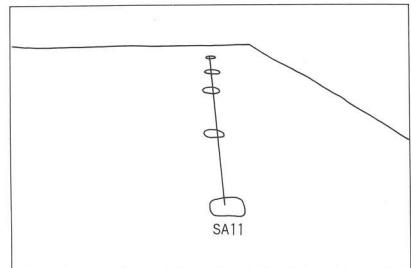




1 建物S B14写真(北から)



2 建物S B15写真(東から)

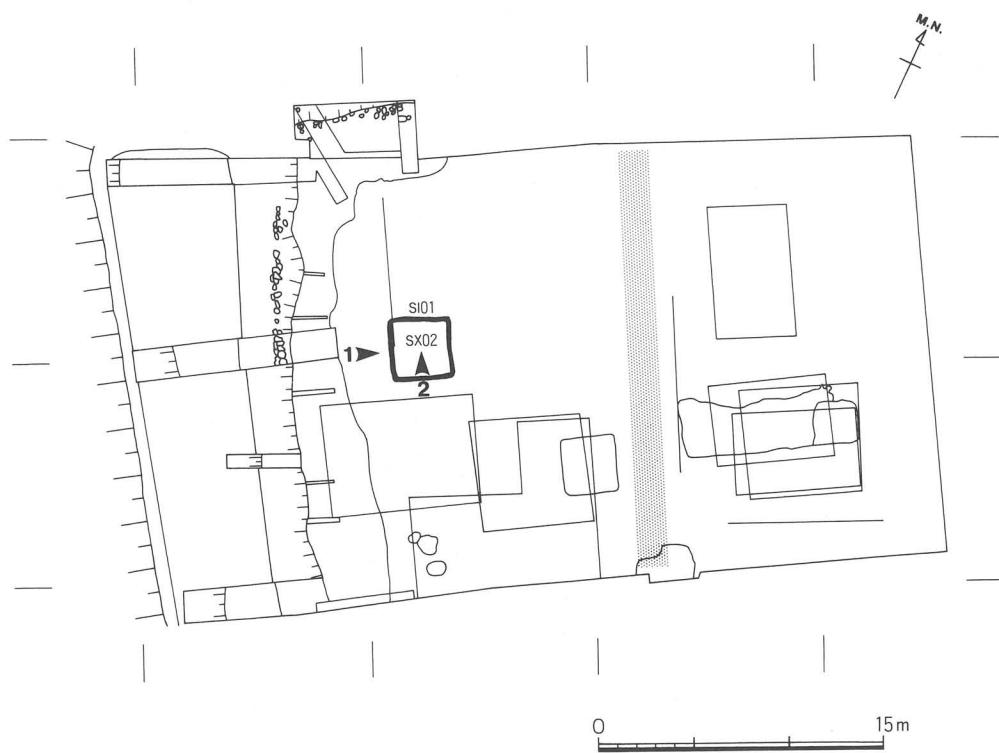




1 構列 S A 11写真(西から)



2 構列 S A 12写真(南から)

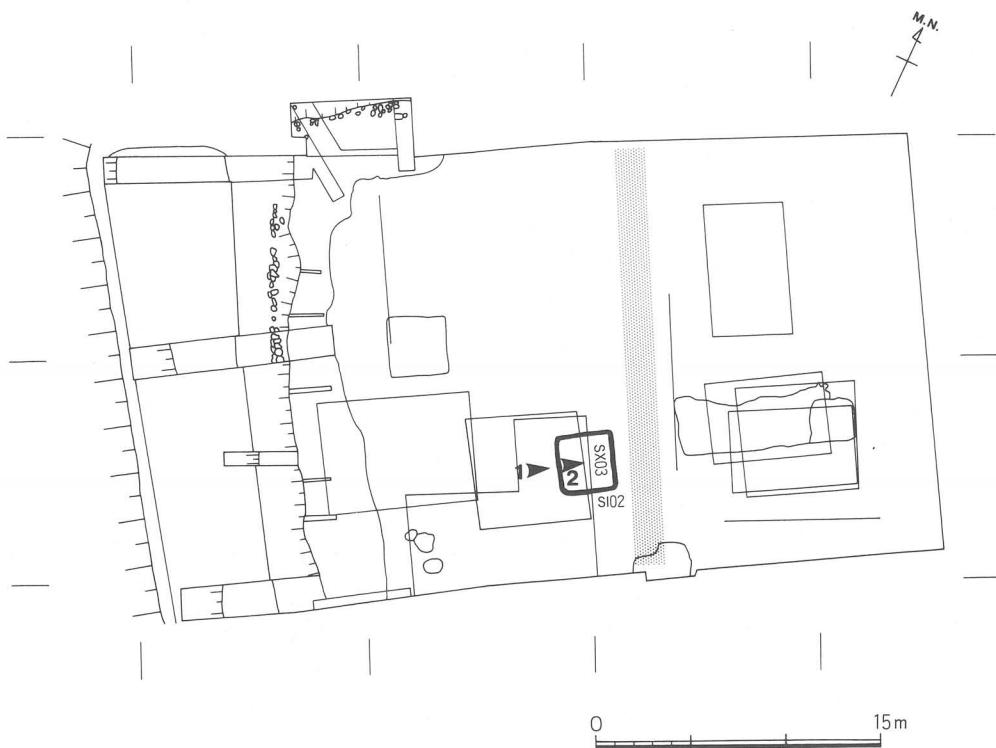




1 竪穴住居 S I 01発掘後写真(西から)

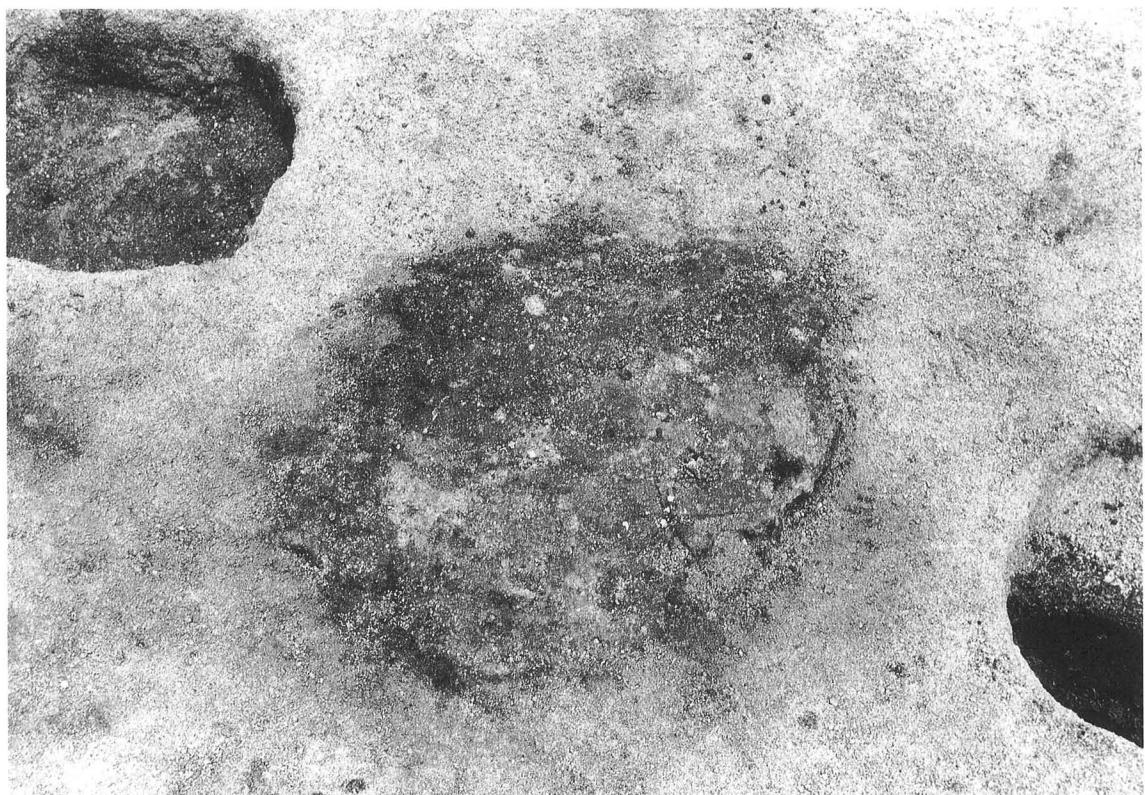


2 炉跡 S X 02検出写真(南から)

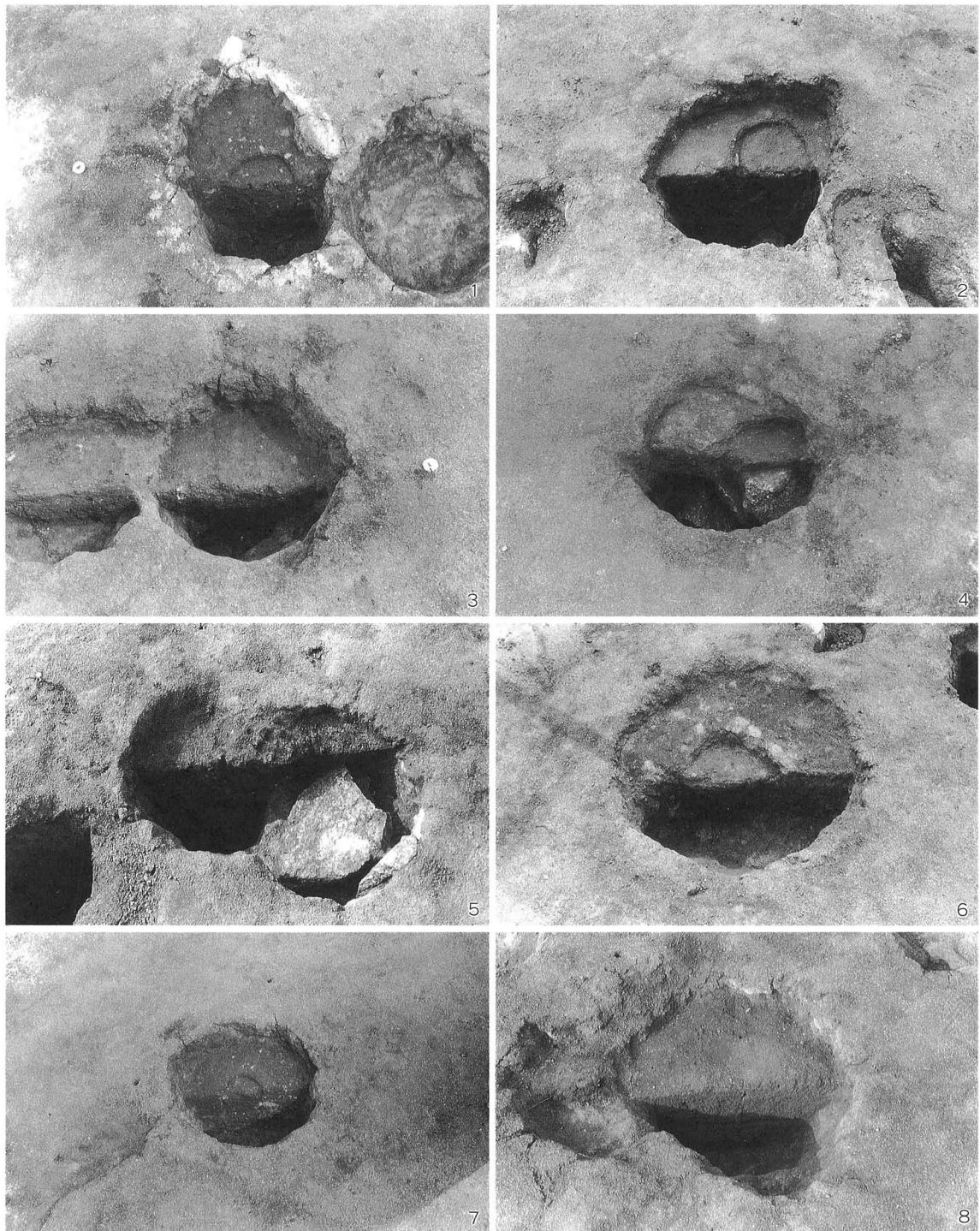




1 竪穴住居 S I 02発掘後写真(西から)

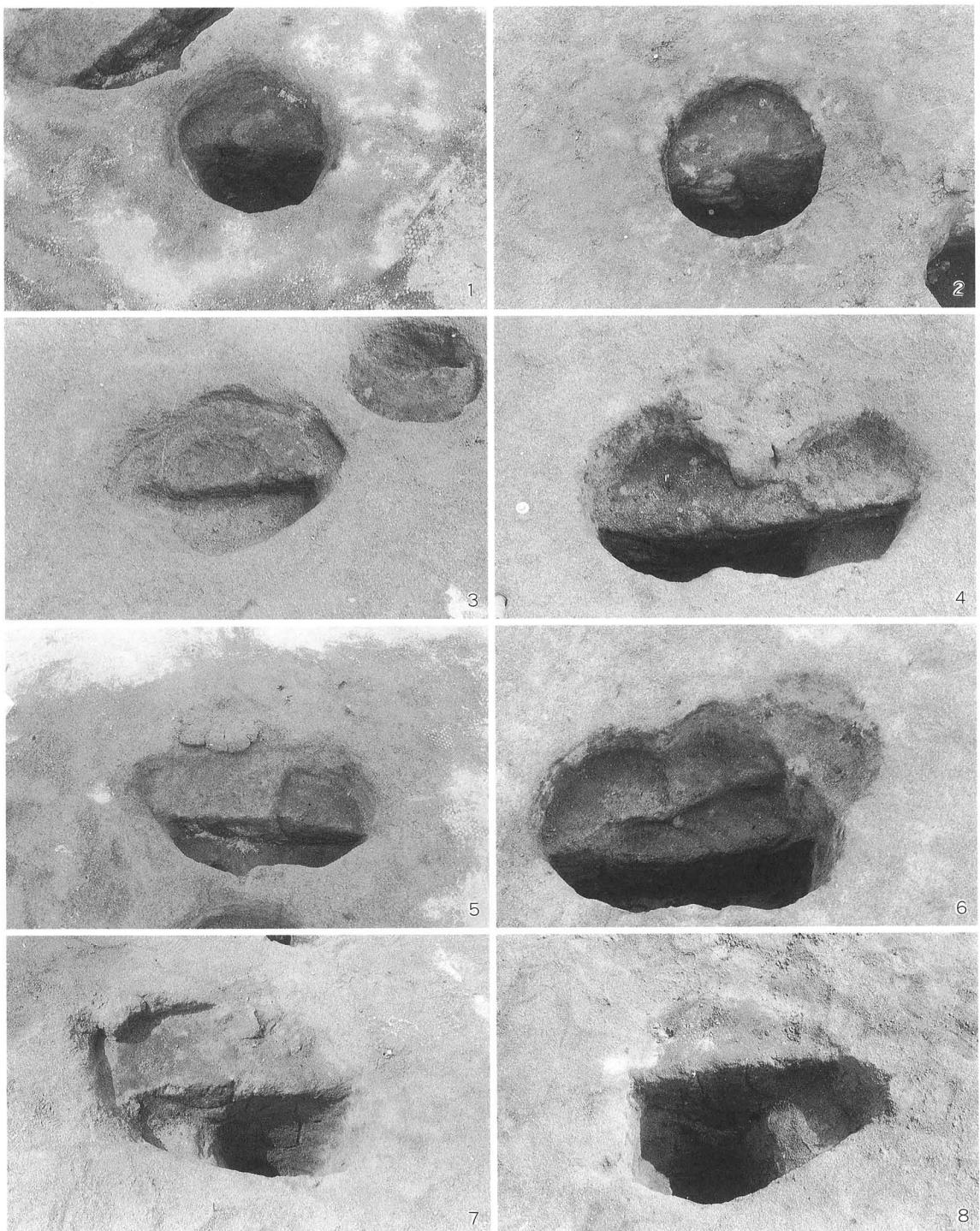


2 炉跡 S X 03検出写真(西から)



柱穴半截断面写真

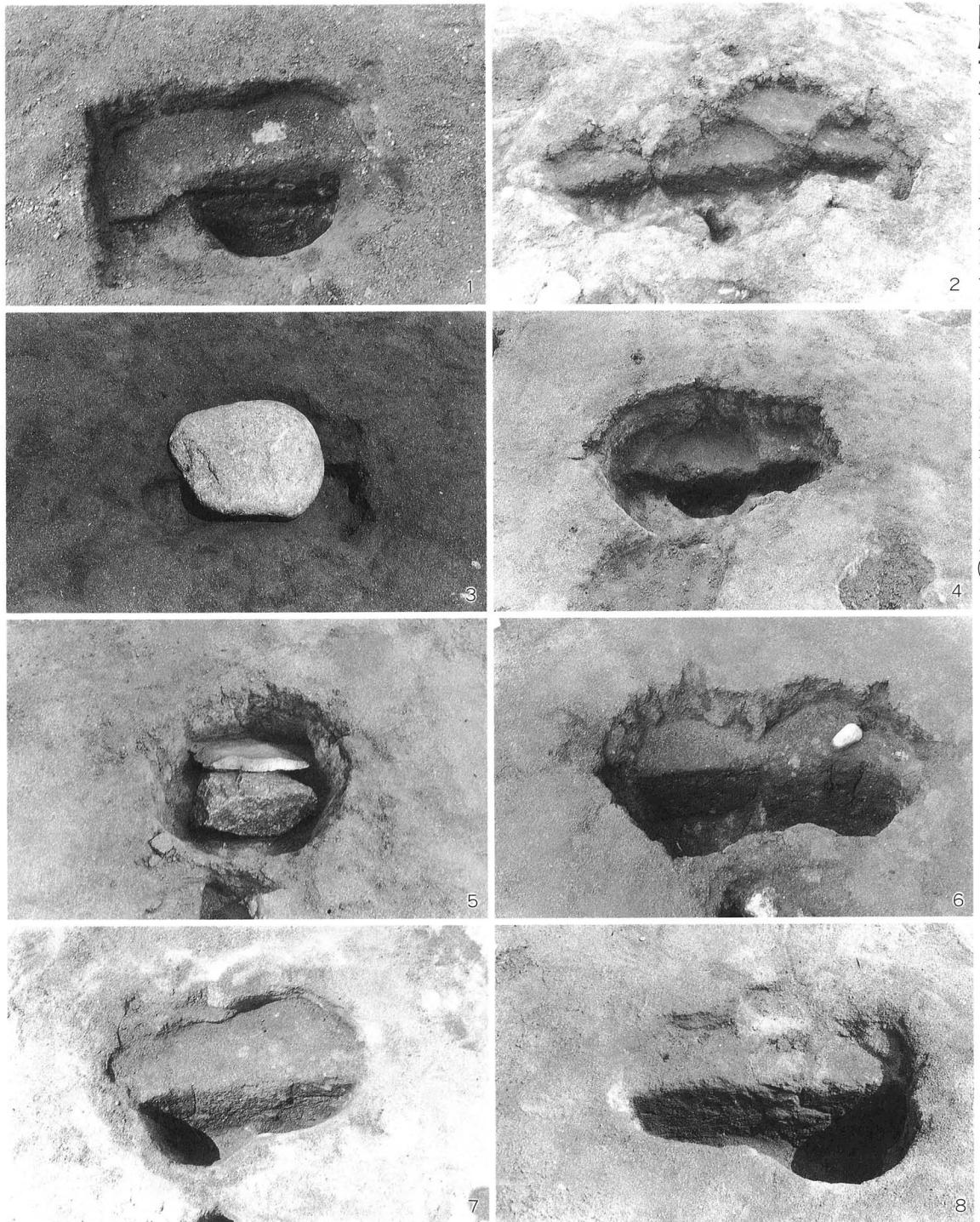
- | | |
|---------------------|---------------------|
| 1 SP207(SB11, 南から) | 2 SP148(SB12, 北から) |
| 3 SP201(SB12, 南西から) | 4 SP212(SB12, 北から) |
| 5 SP222(SB12, 南から) | 6 SP144(SB13, 北西から) |
| 7 SP210(SB13, 西から) | 8 SP77(SB14, 西から) |



柱穴半截断面写真

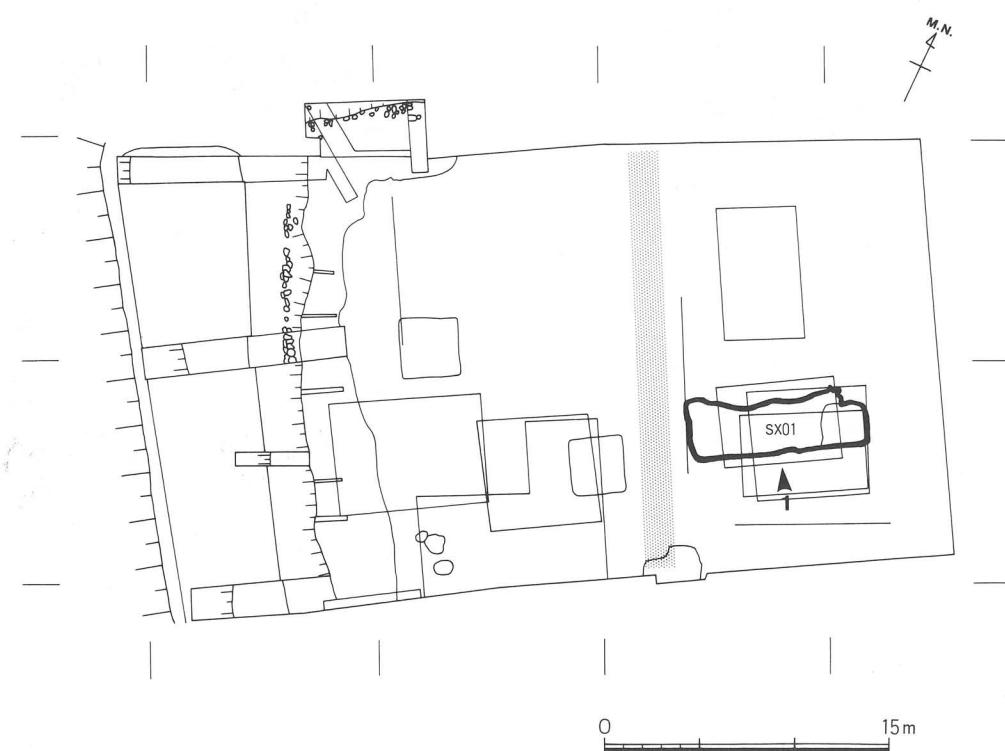
- | | |
|-----------------------------|------------------------------|
| 1 S P420(S B15, 西から) | 2 S P416(S B16, 南から) |
| 3 S P419(S B16, 西から) | 4 S P411・410(S B16・17, 南西から) |
| 5 S P513・417(S B16・17, 南から) | 6 S P443・442(S B16・17, 南西から) |
| 7 S P431(S B17, 南から) | 8 S P525(S B17, 北から) |

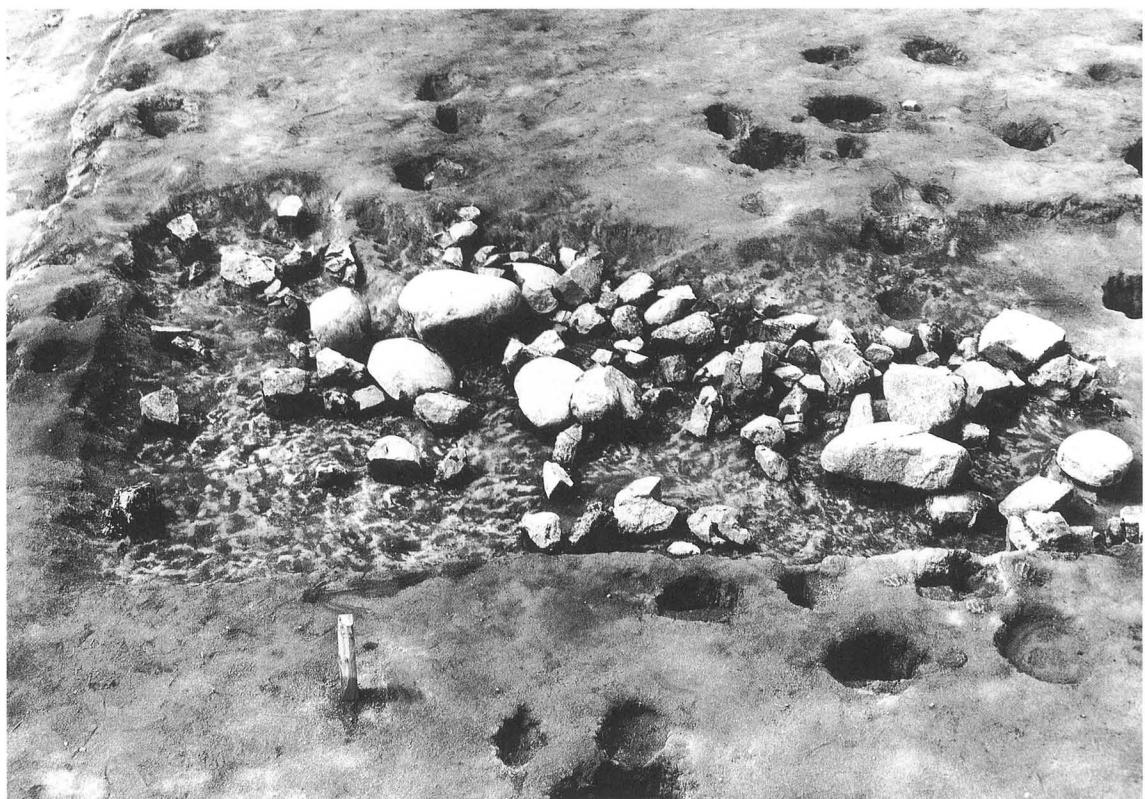
図版一六 江馬氏下館跡 一九九六年度調査地区遺構(○)



柱穴半截断面写真

- | | |
|-----------------------|-----------------------|
| 1 S P 478(S B17, 南から) | 2 S P 88(S A12, 南西から) |
| 3 S P 19 (西から) | 4 S P 218(北から) |
| 5 S P 229(北から) | 6 S P 279(南西から) |
| 7 S P 413(東から) | 8 S P 494・528(南西から) |

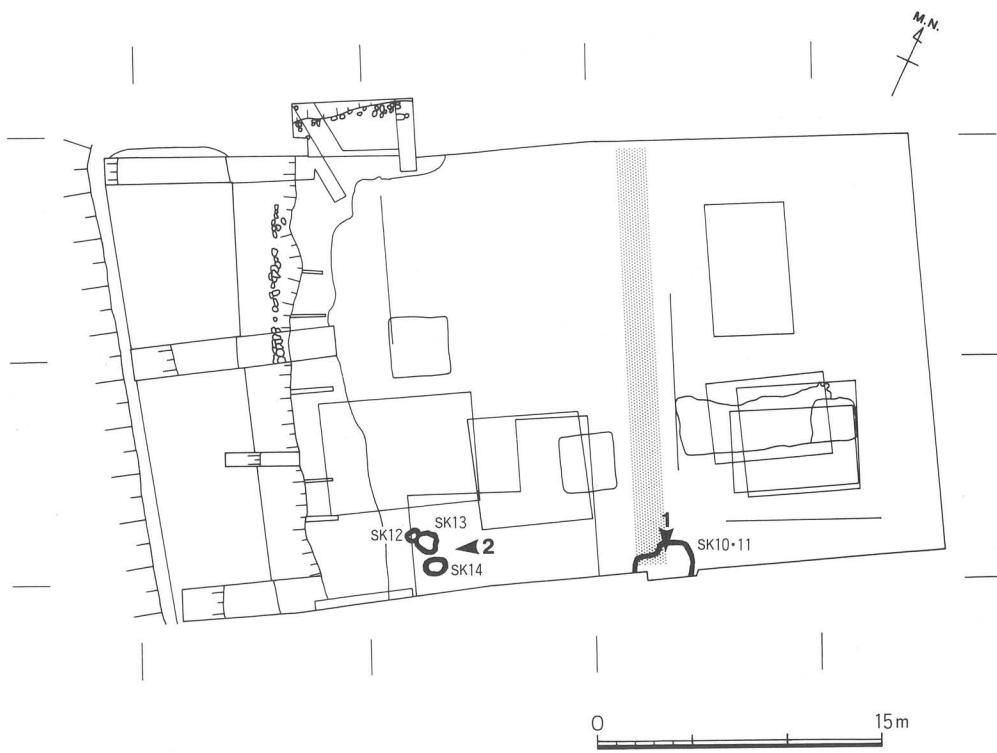




1 SX01発掘後写真(南から)



2 SX01断面層位写真(南北畦の南半, 東から)

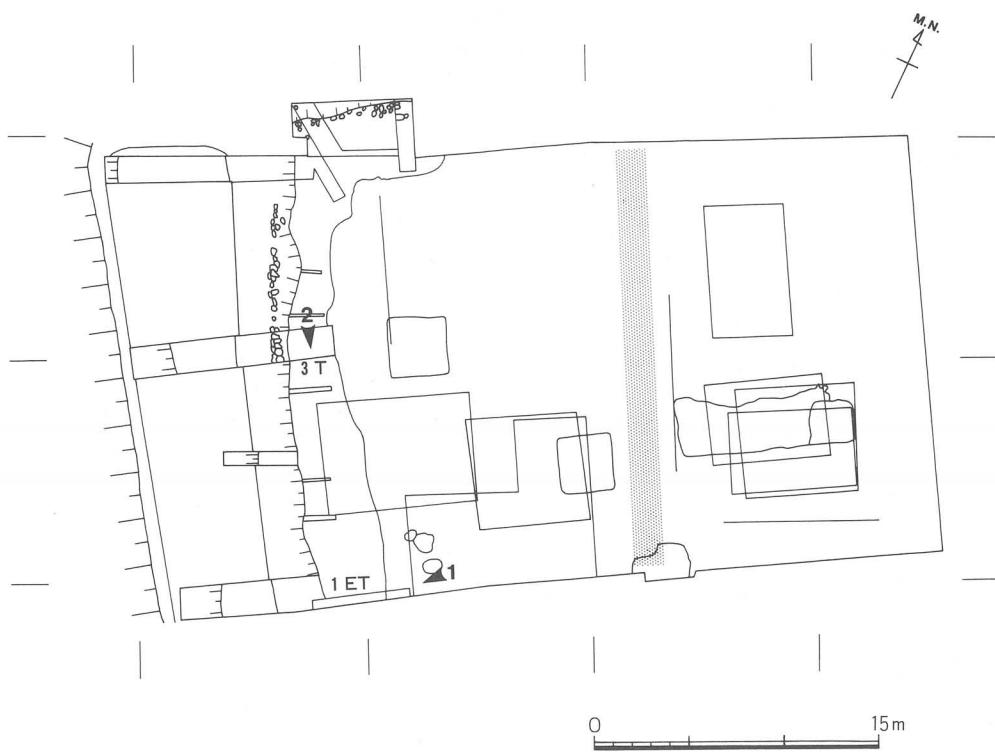




1 S K10・11断面層位写真(北から)



2 S K12・13・14断面層位写真(東から)

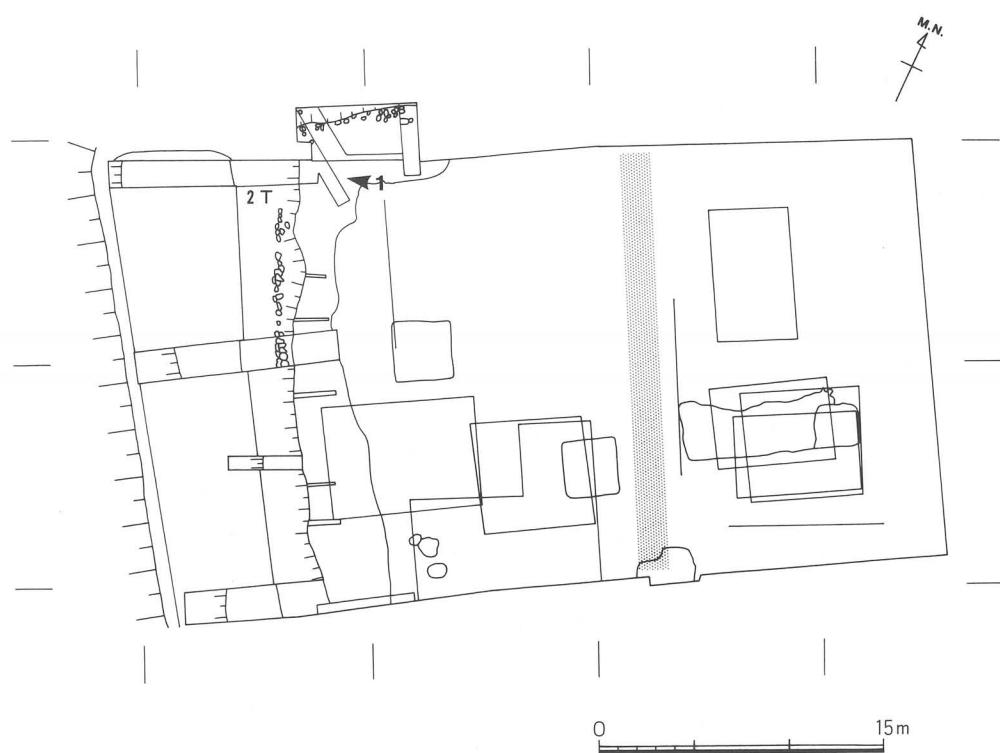




1 1 E T 南壁層位写真(盛土部分, 北東から)

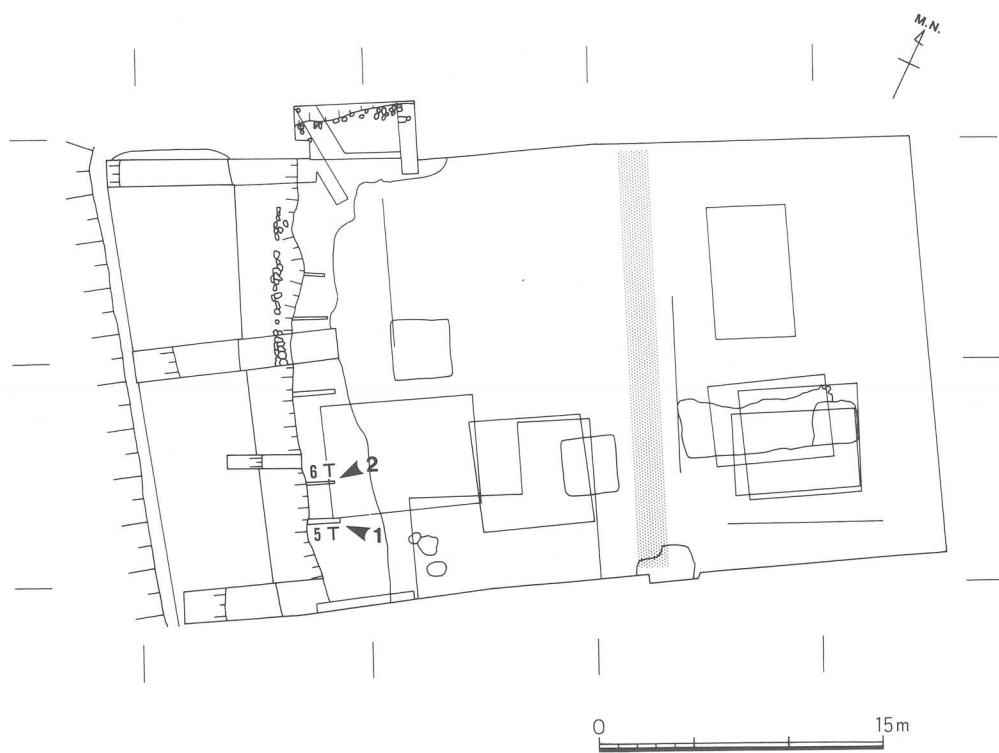


2 3 T 南壁層位写真(盛土部分, 北から)



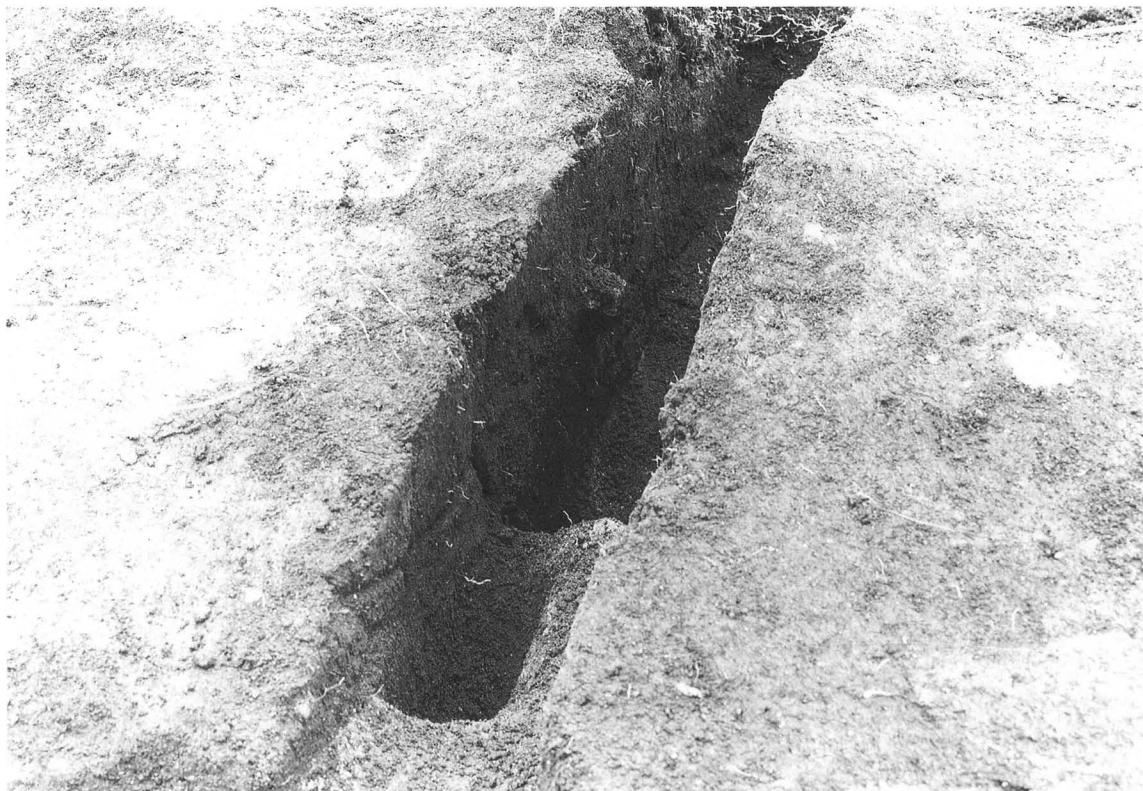


1 2 T北壁層位写真(盛土部分、南東から)

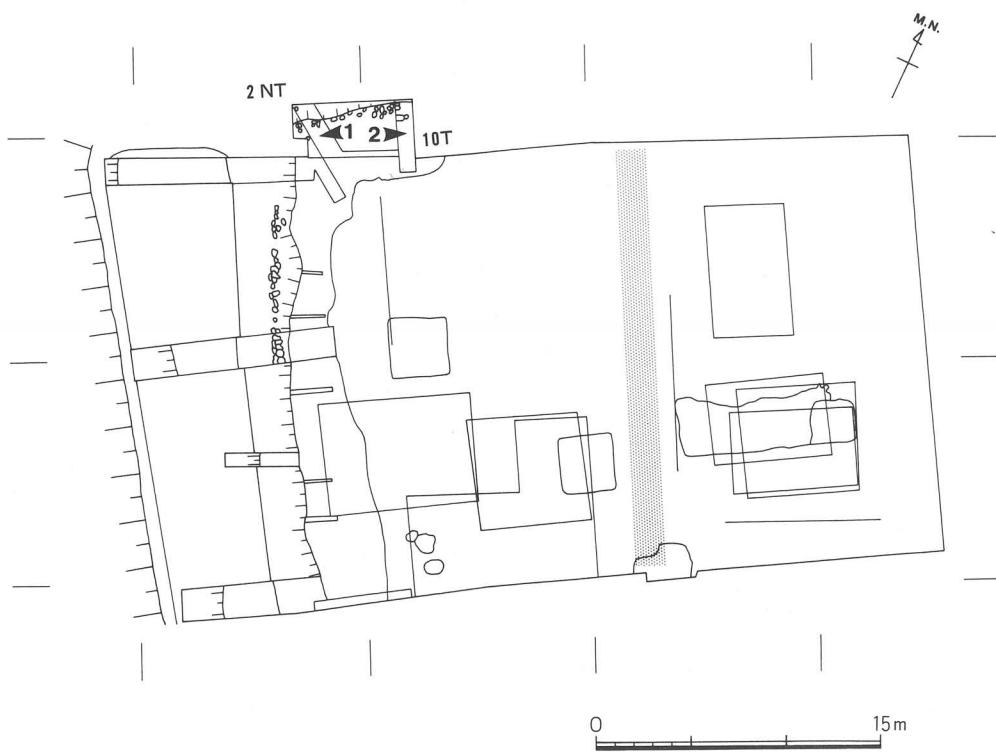




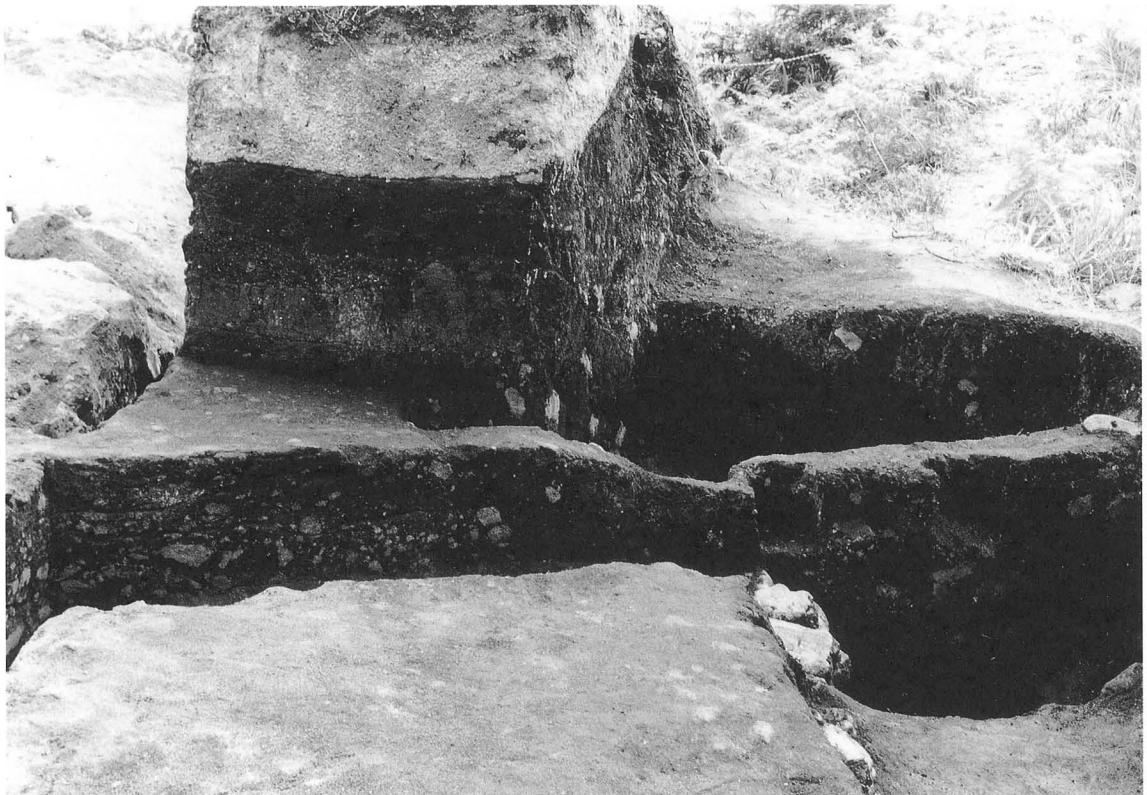
1 5 T 北壁層位写真(南東から)



2 6 T 南壁層位写真(北東から)



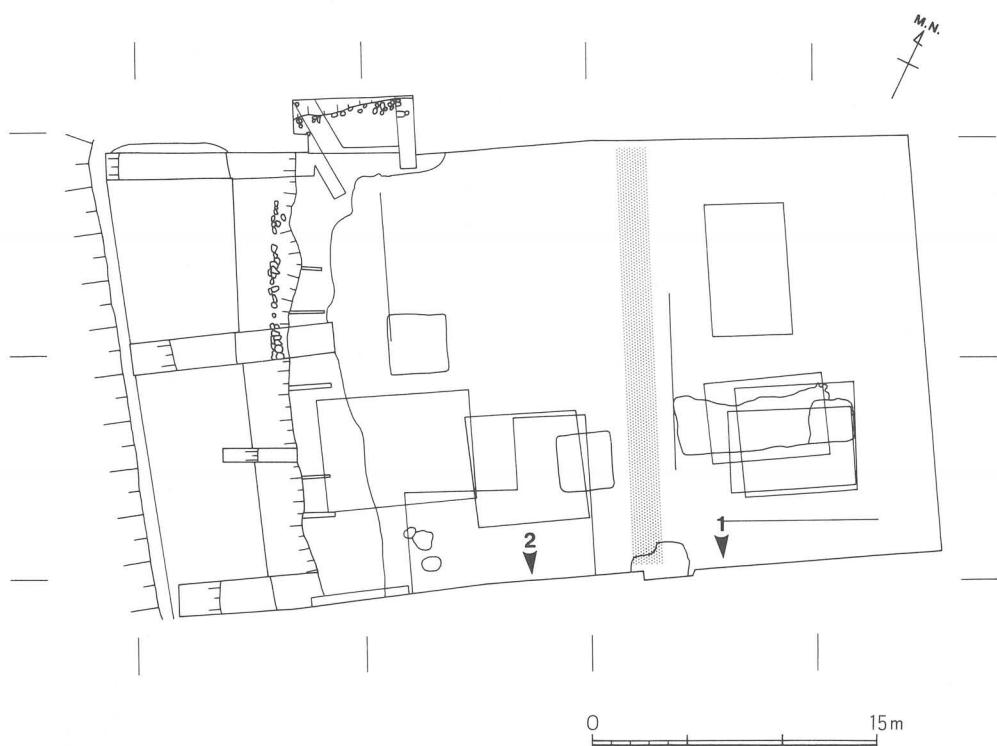
図版二二 江馬氏下館跡 一九九六年度調査地区 遺構(六)



1 2 NT 西壁層位写真(東から)

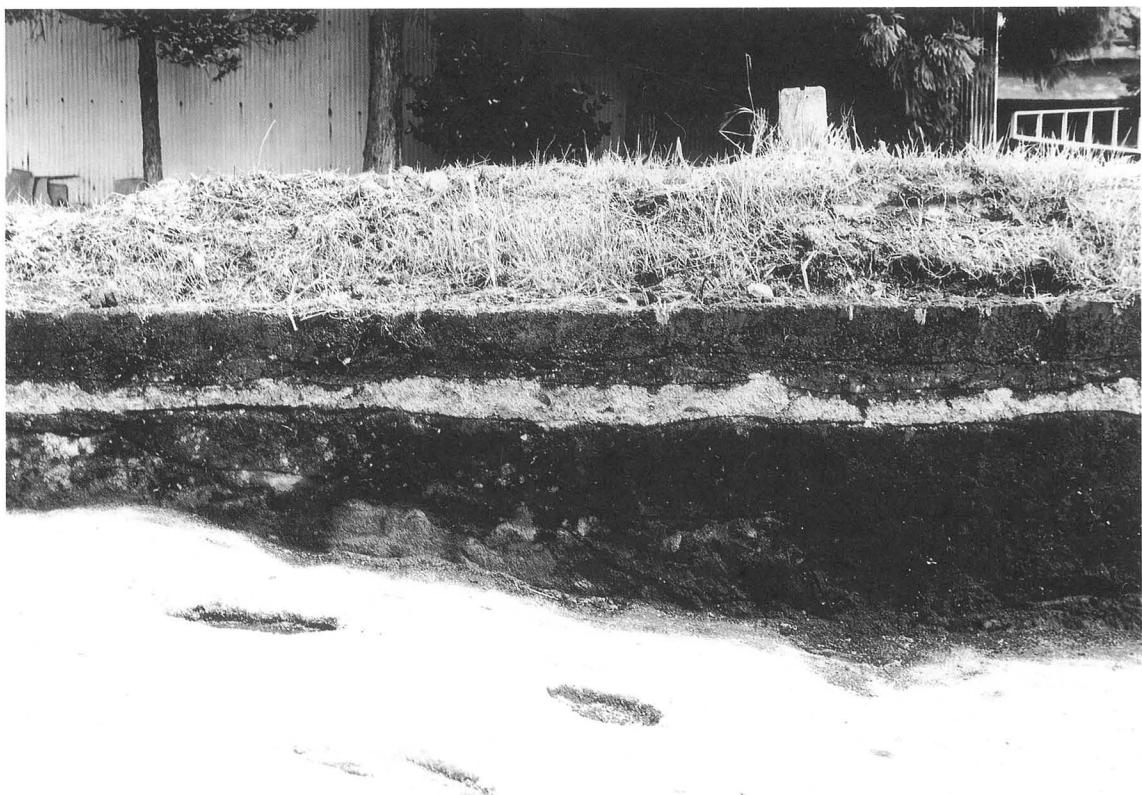


2 10 T 東壁層位写真(西から)

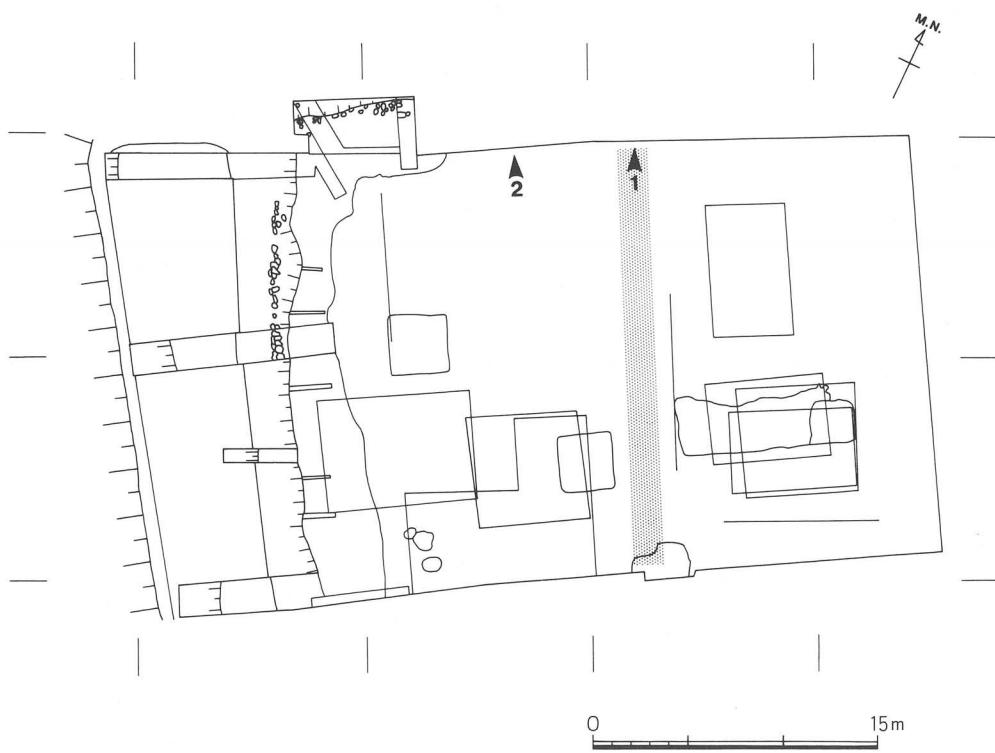




1 調査地区南壁層位写真(中央部, 北から)



2 調査地区南壁層位写真(西寄り, 北から)

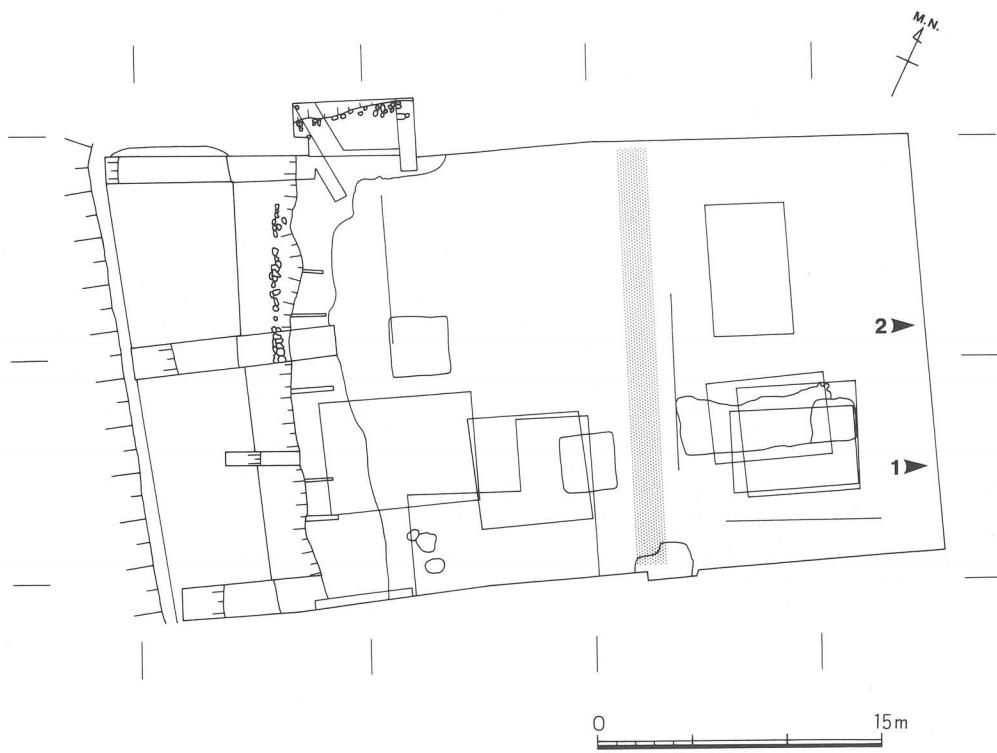




1 調査地区北壁層位写真(中央部, 南から)



2 調査地区北壁層位写真(西寄り, 南から)

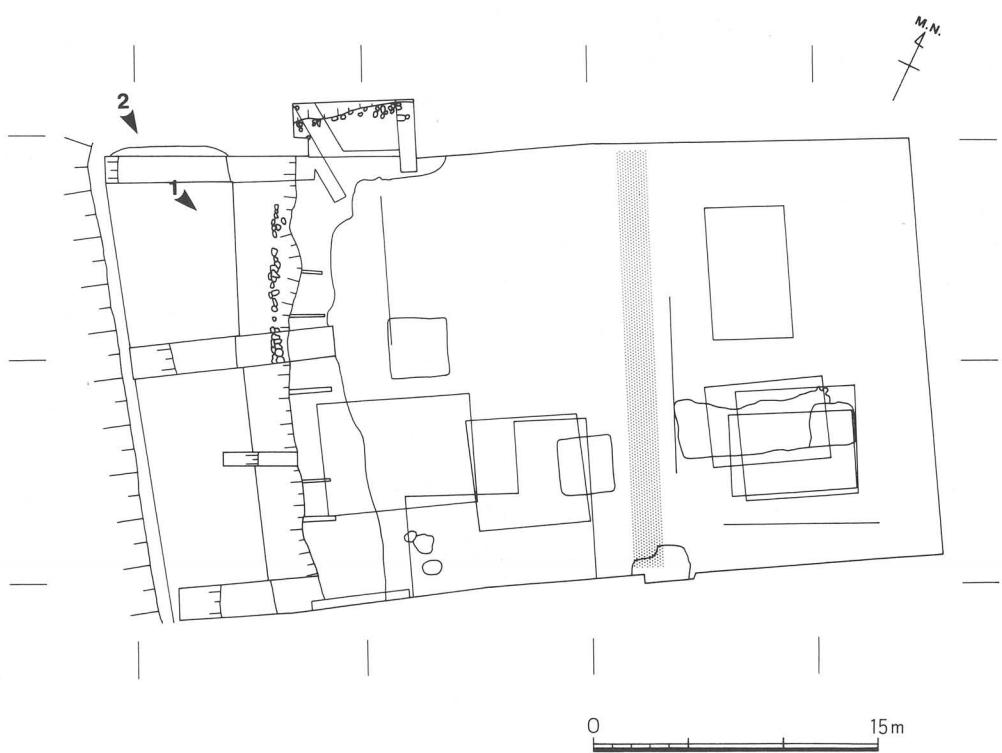




1 調査地区東壁層位写真(南寄り, 西から)



2 調査地区東壁層位写真(中央部, 西から)

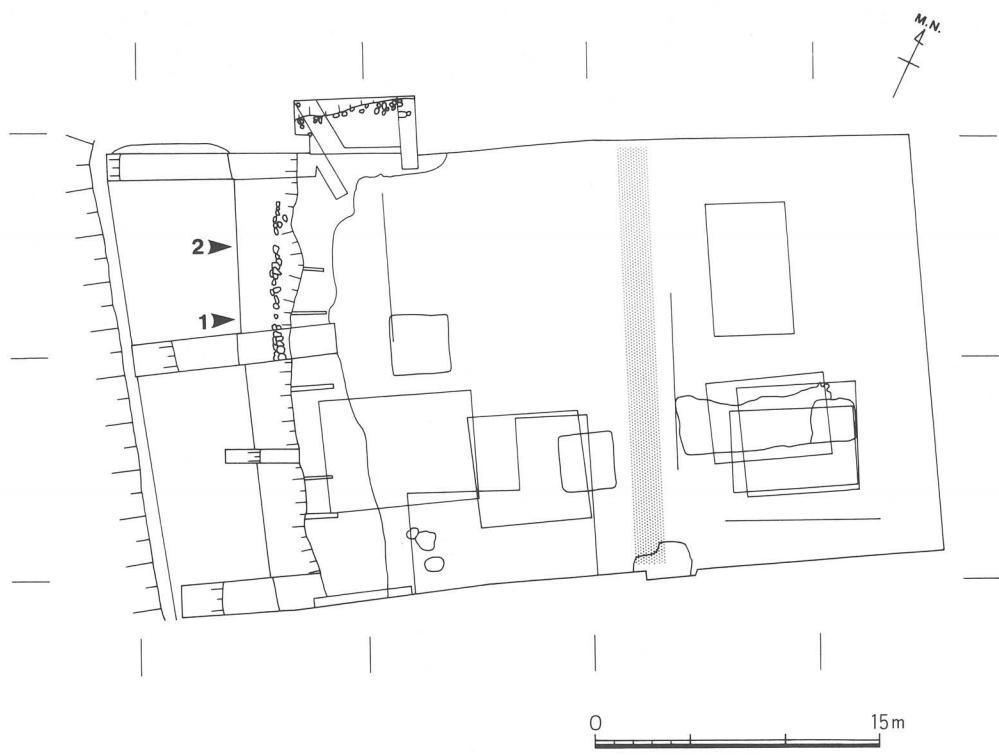




1 段丘斜面発掘前写真(北西から)



2 段丘斜面発掘後写真(北西から)

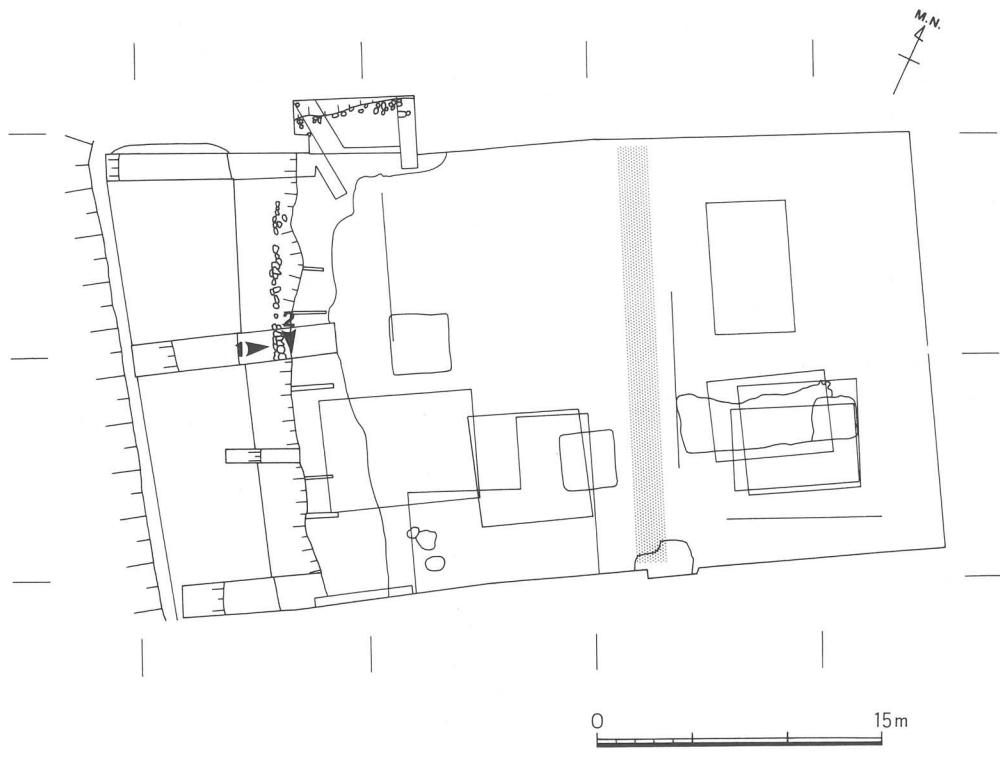




1 段丘斜面発掘後写真(北部南寄り, 西から)



2 段丘斜面発掘後写真(北部北寄り, 西から)

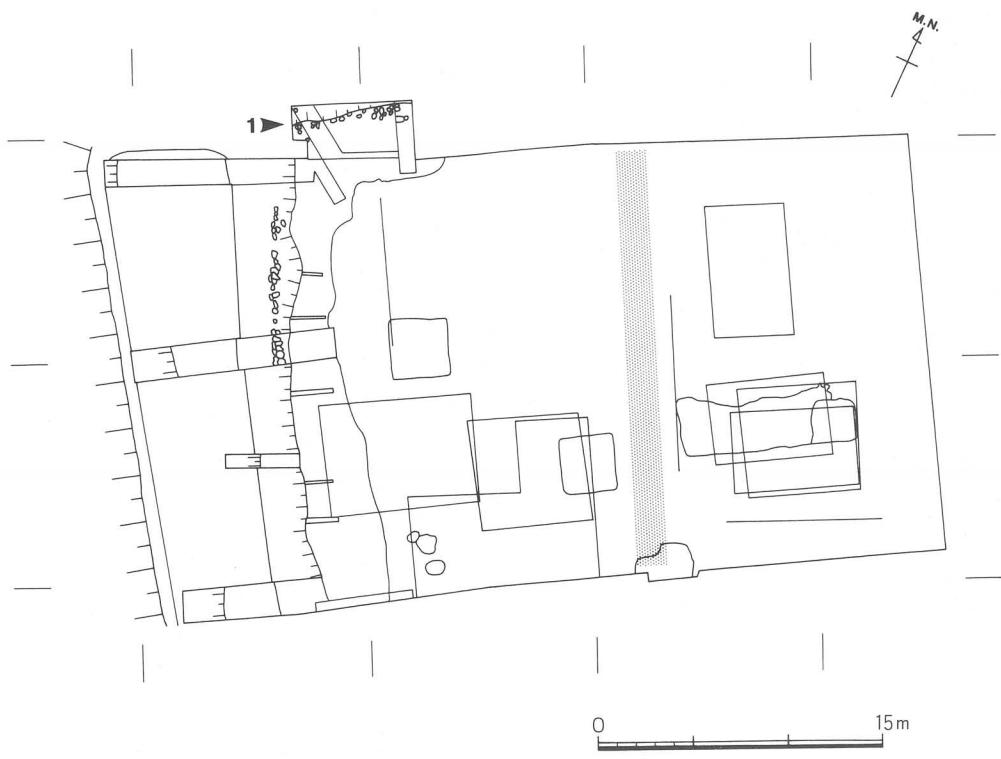




1 石積み 1 裏込完掘写真(3 T部分, 西から)

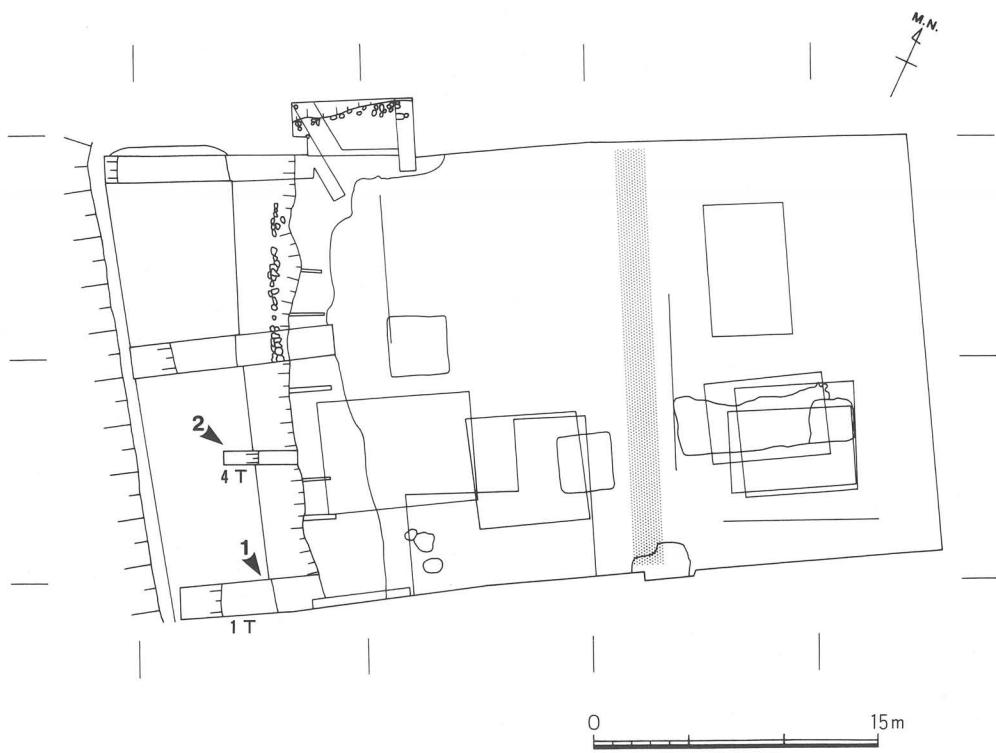


2 石積み 1 裏込断面層位写真(3 T南壁, 北から)



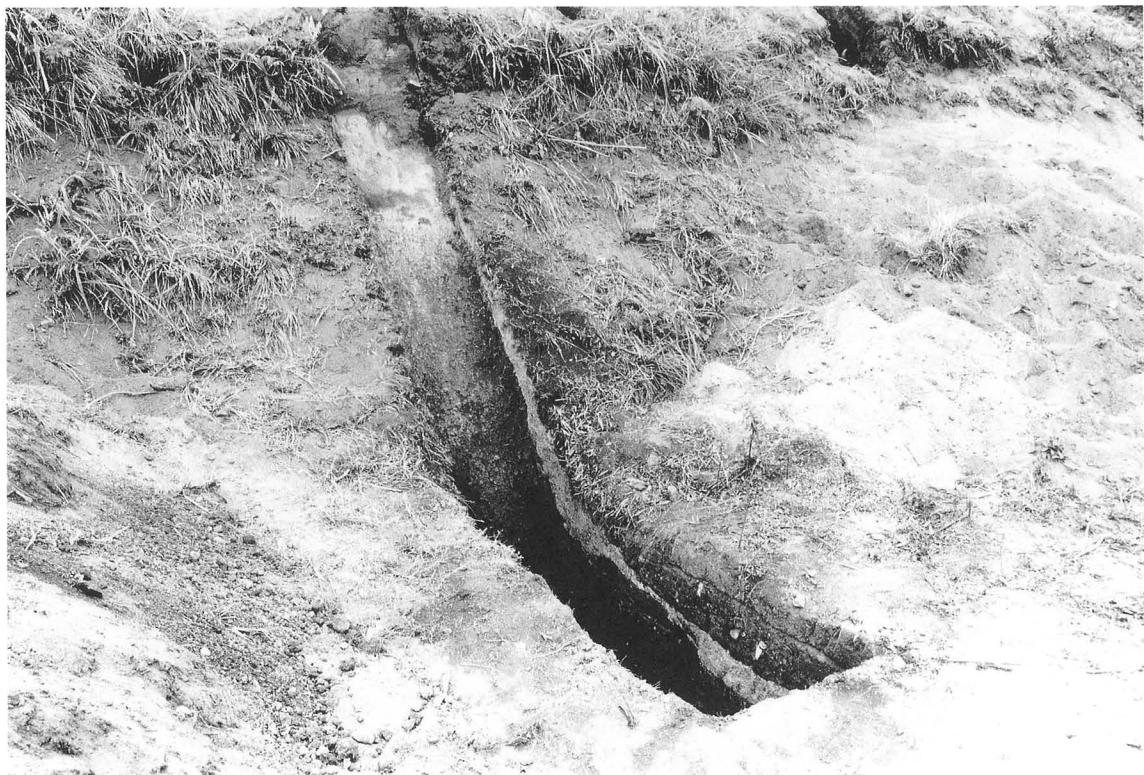


1 段丘斜面石積み 2 写真(調査地区北西隅、西から)

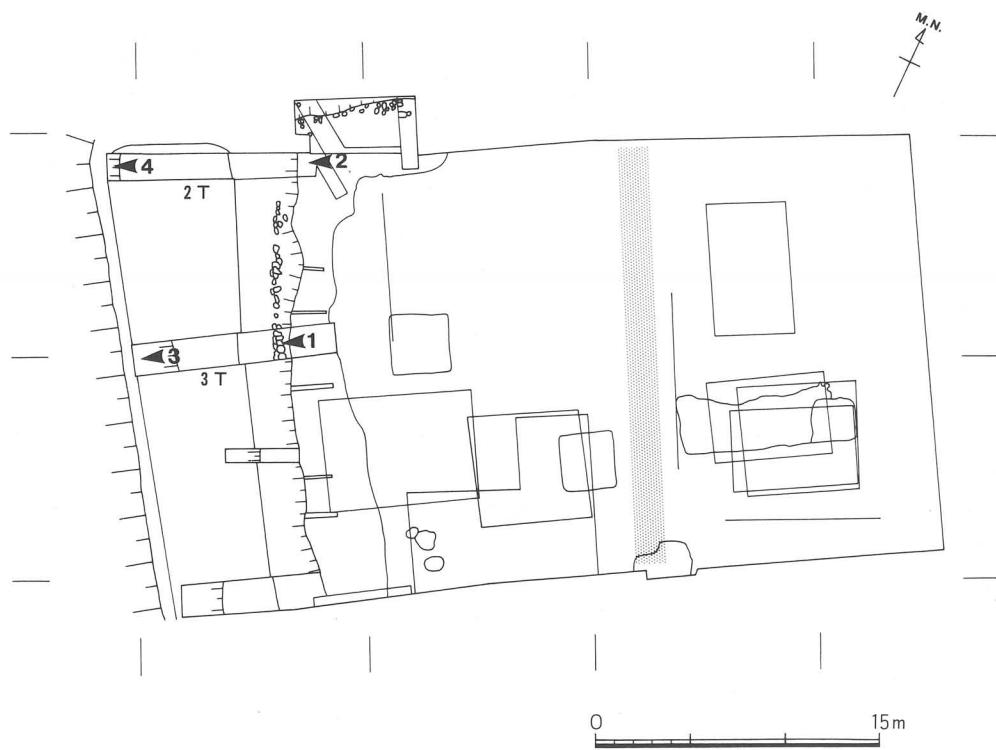




1 1 T 発掘後写真(段丘斜面部分, 北西から)



2 4 T 発掘後写真(段丘斜面部分, 北西から)



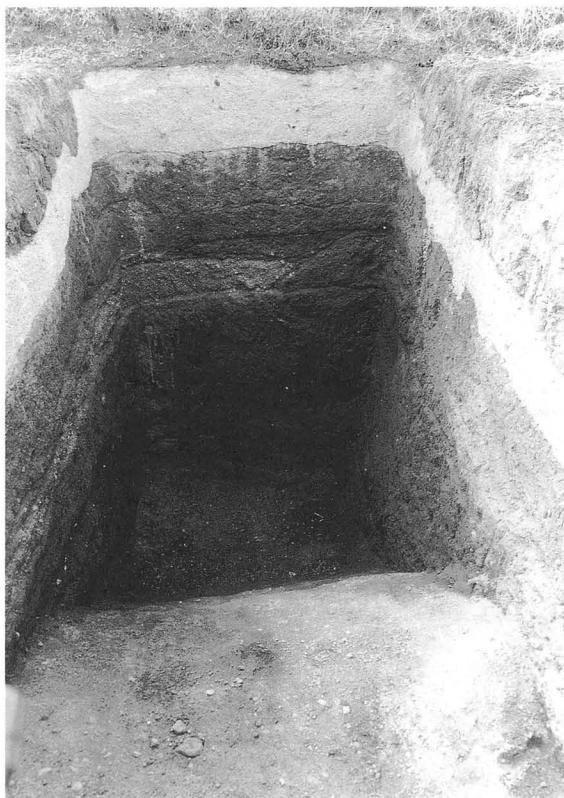
図版三一 江馬氏下館跡一九九六年度調査地区遺構(二五)



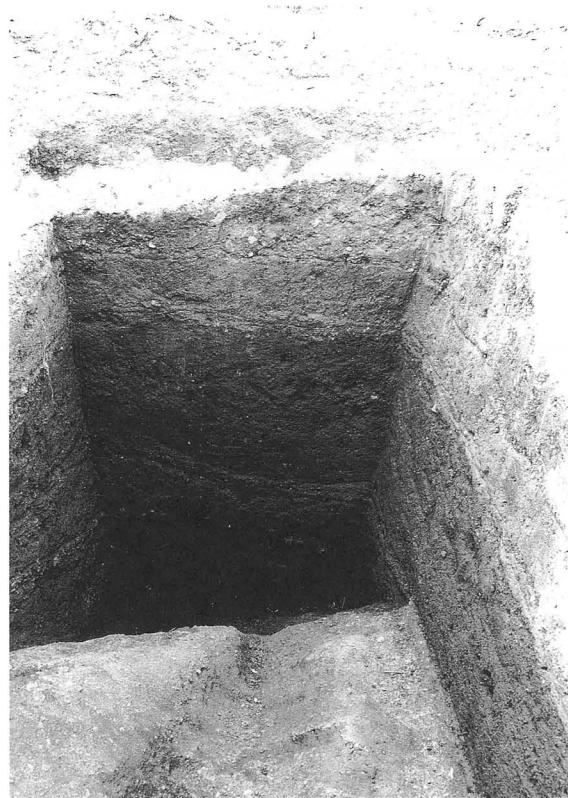
1 3 T発掘後写真(東から)



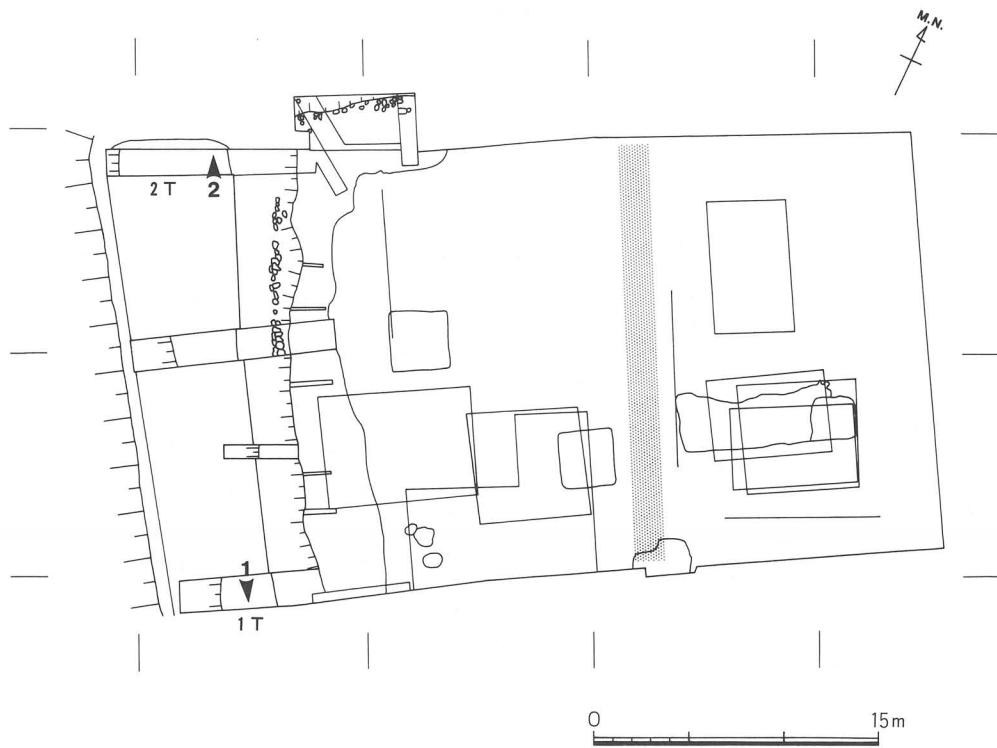
2 2 T発掘後写真(東から)

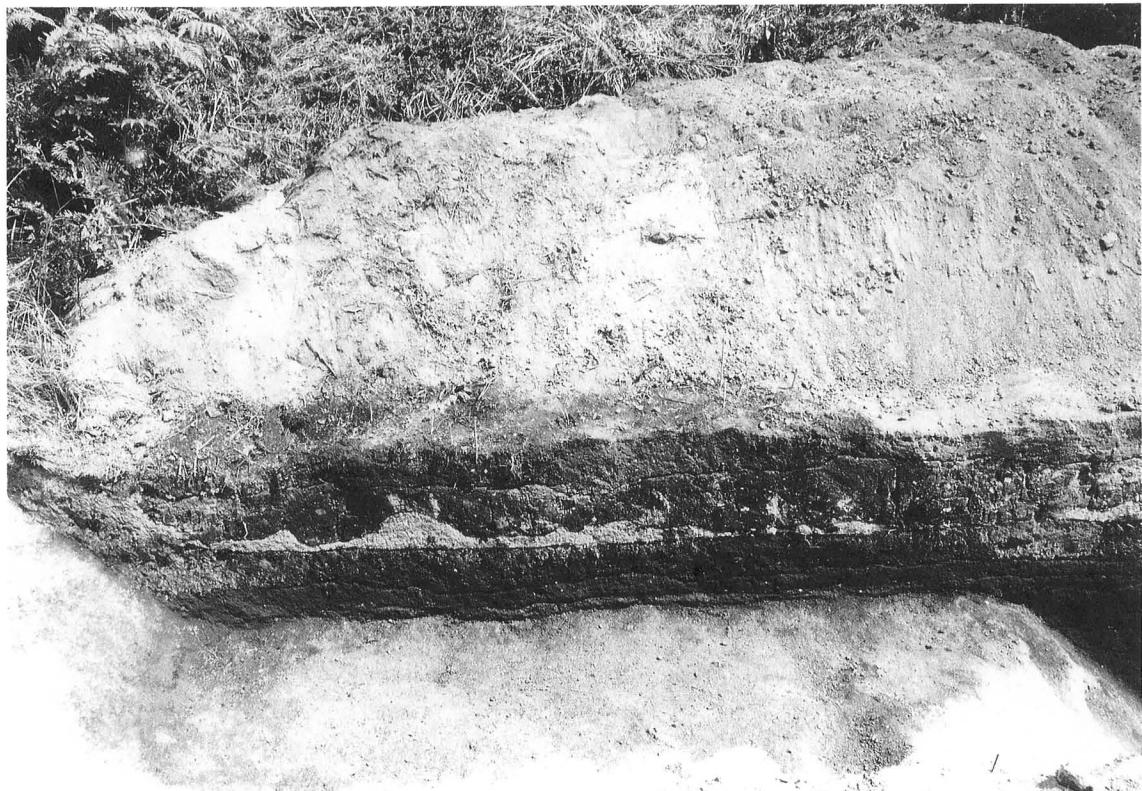


3 3 T西壁層位写真(西端の崖部分、東から)



4 2 T西壁層位写真(西端の崖部分、東から)





1 1 T南壁層位写真(斜面下部分, 北から)



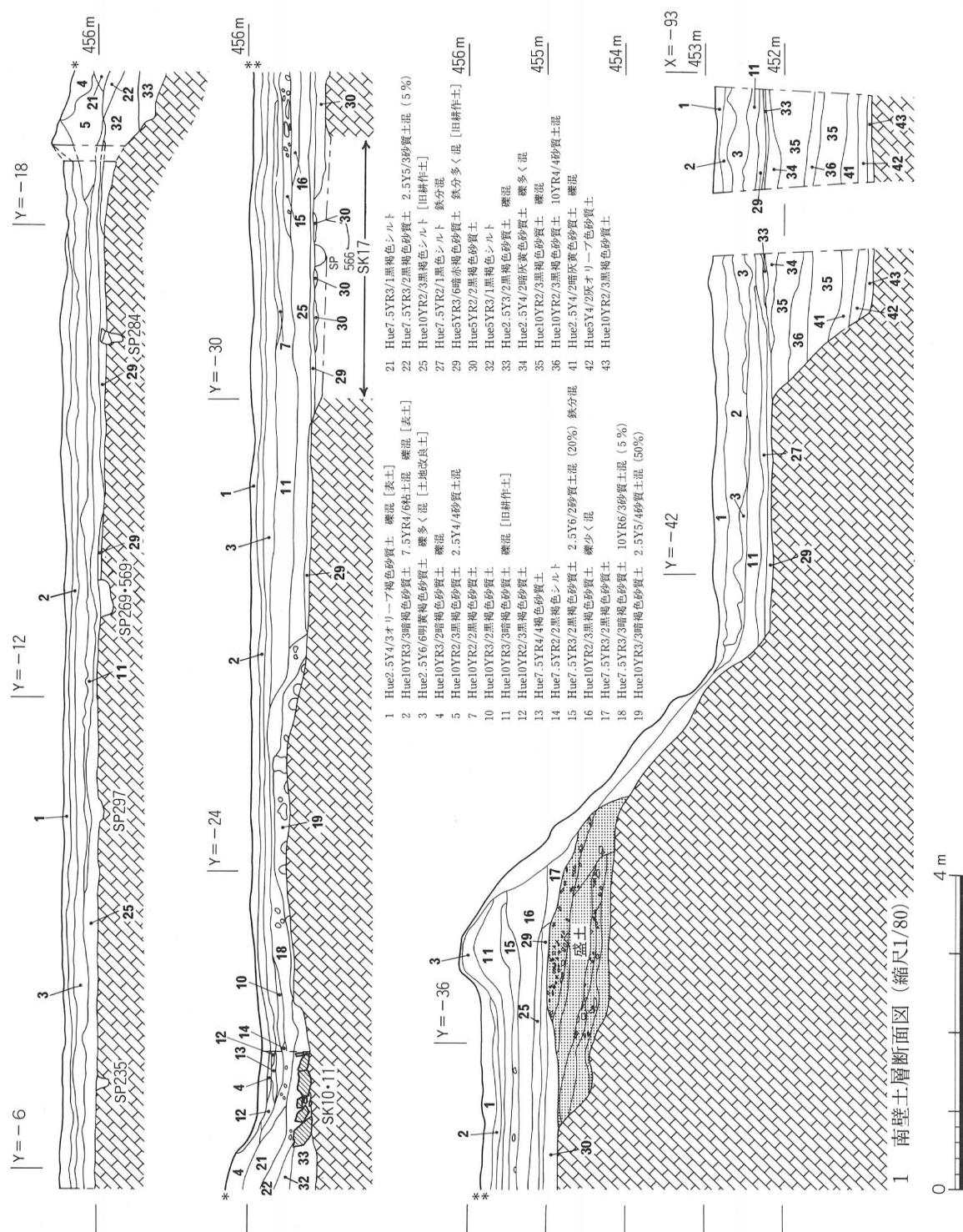
2 2 T北壁層位写真(斜面下部分, 南から)

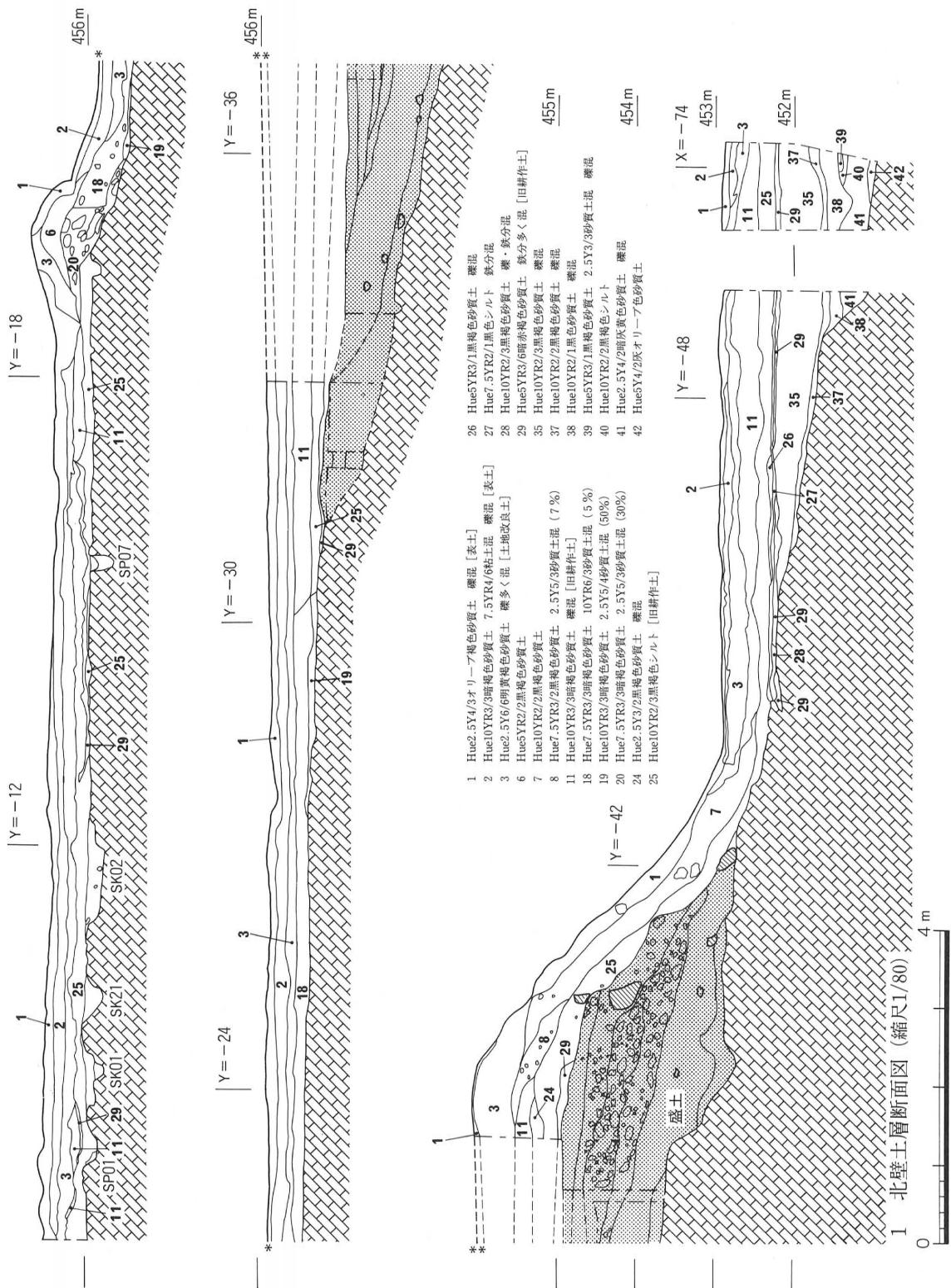
図版III 江馬氏下館跡一九九六年度調査地区遺構実測図(一)

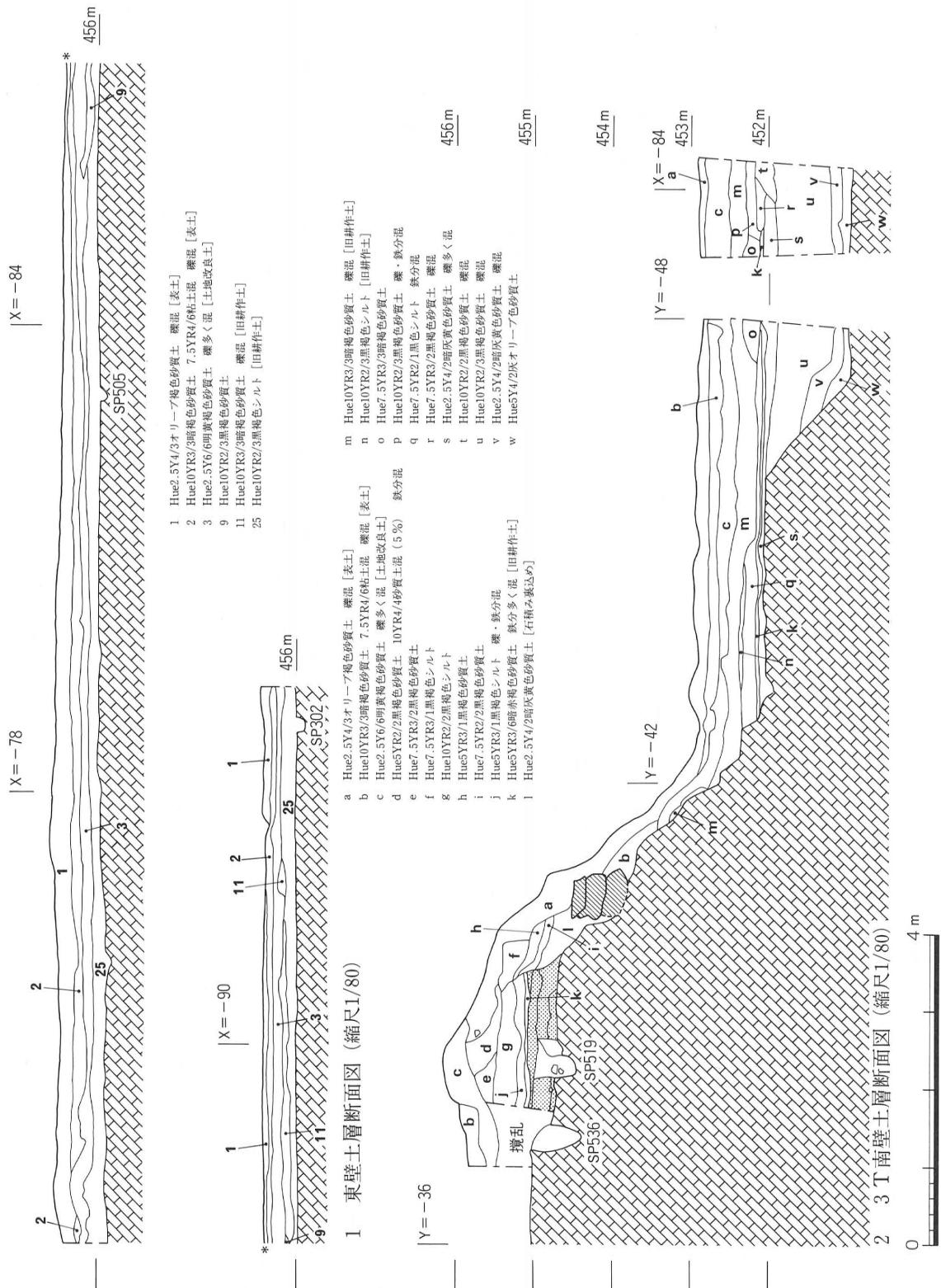


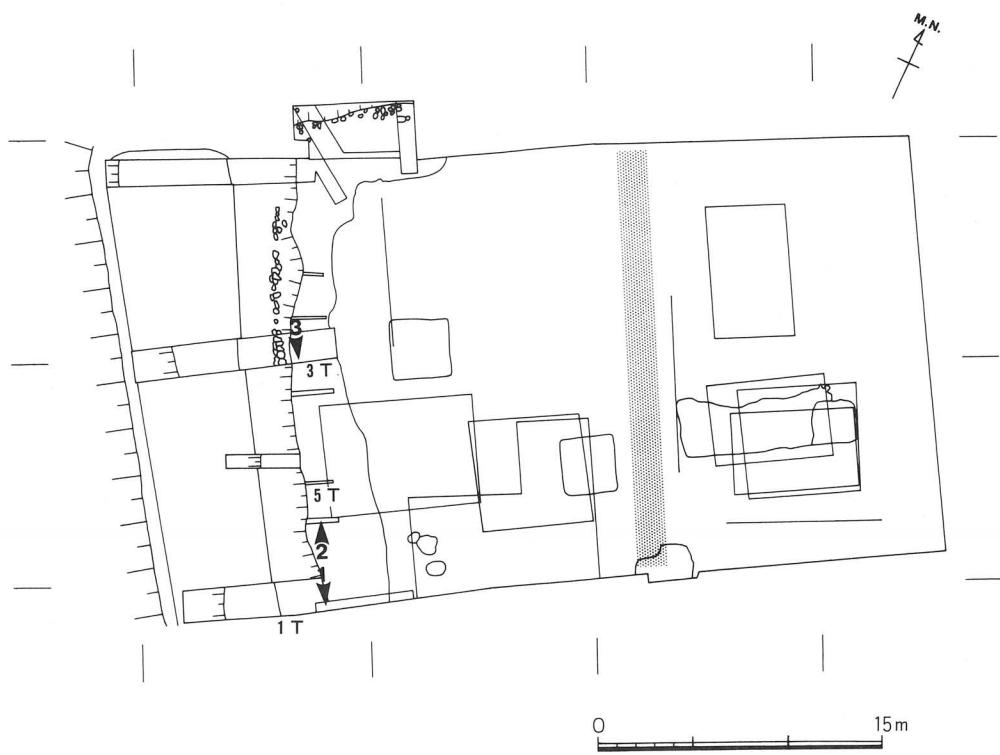


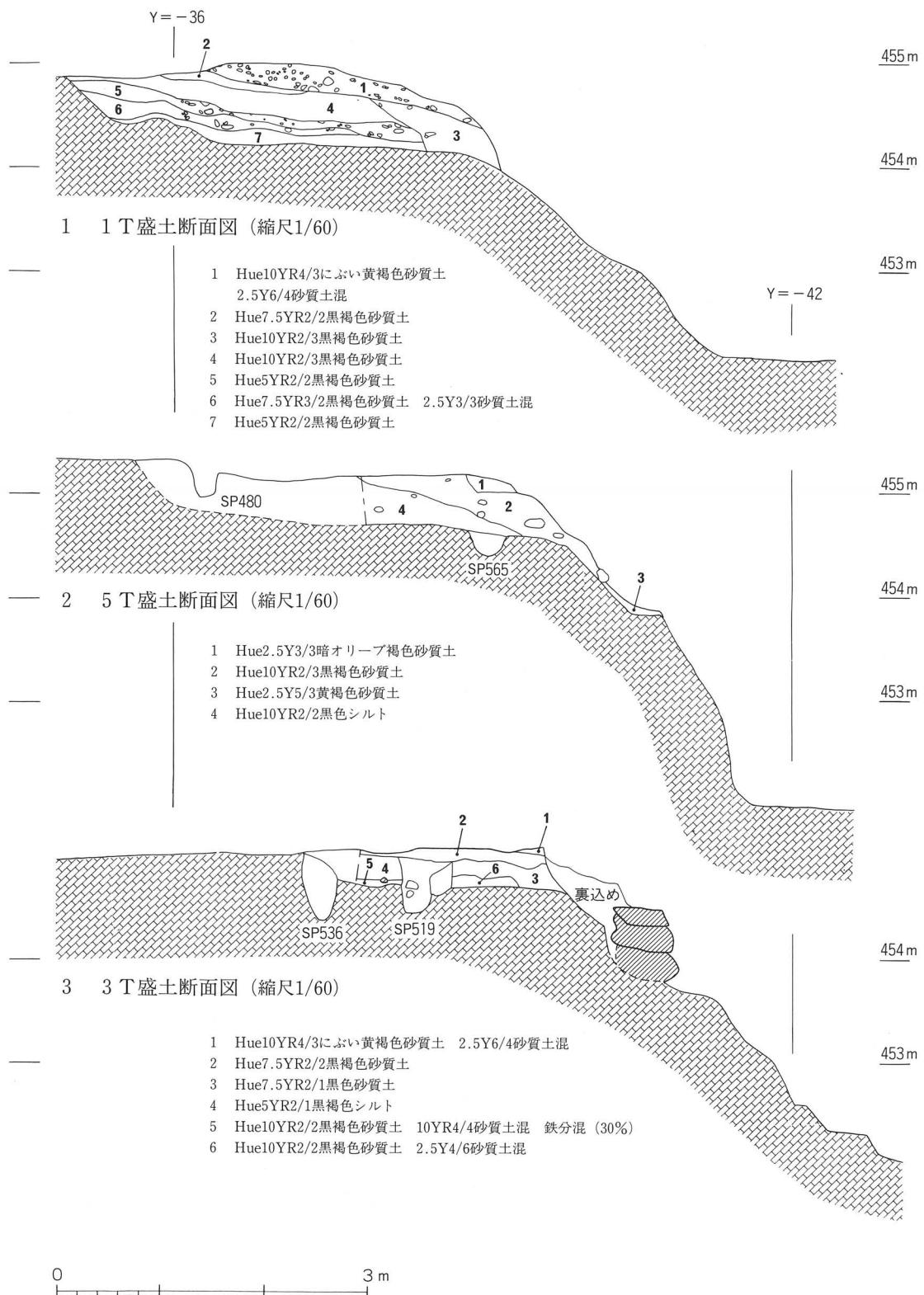
図版三四 江馬氏下館跡 一九九六年度調査地区遺構実測図(二)



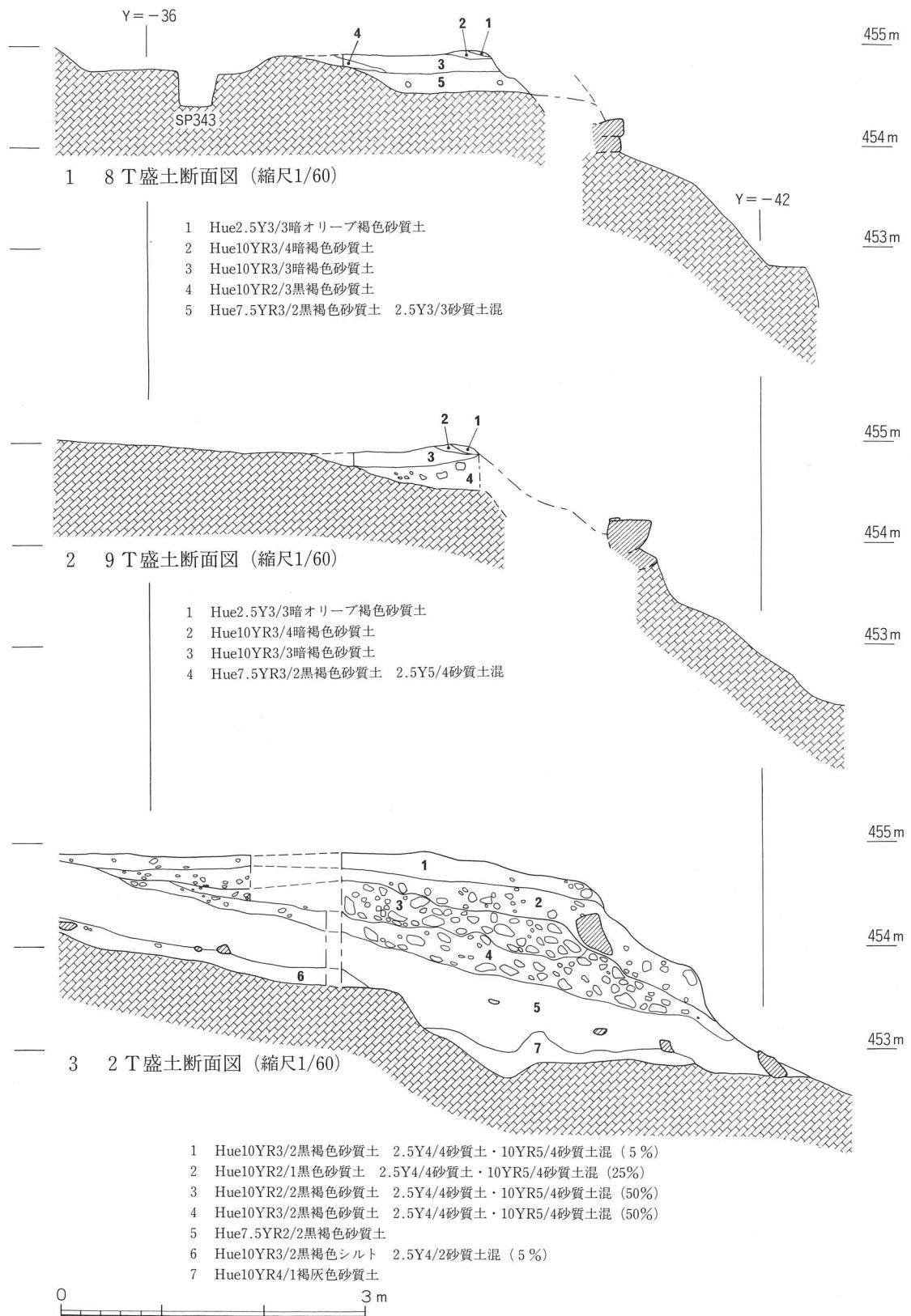


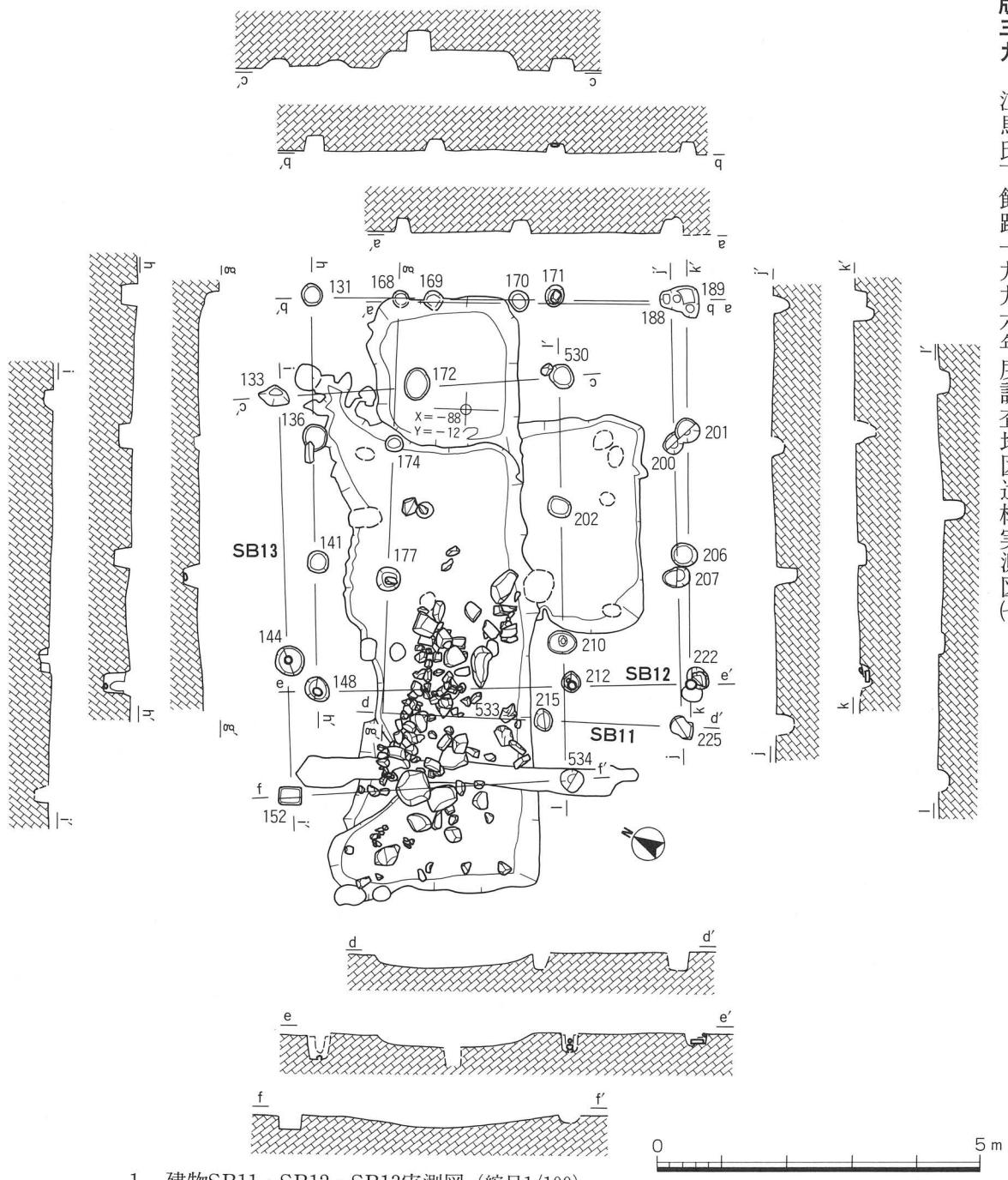






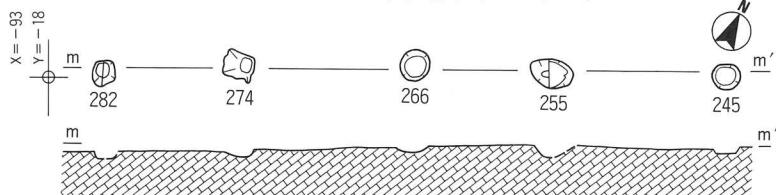




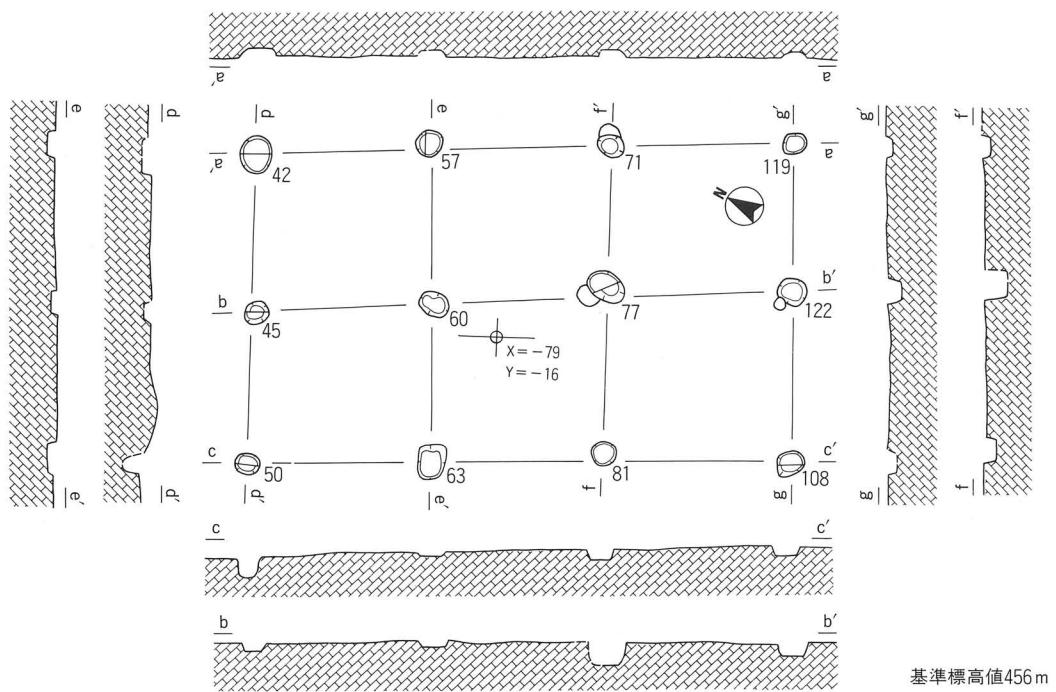


1 建物SB11・SB12・SB13実測図 (縮尺1/100)

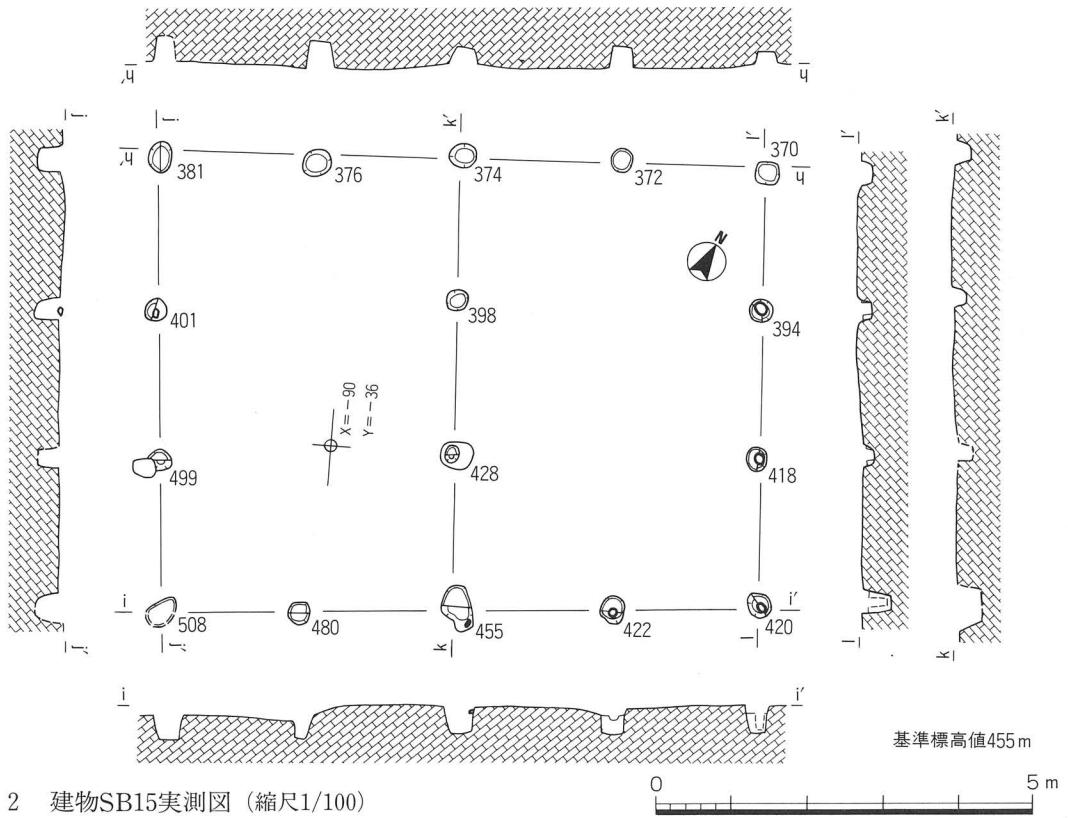
基準標高値456m



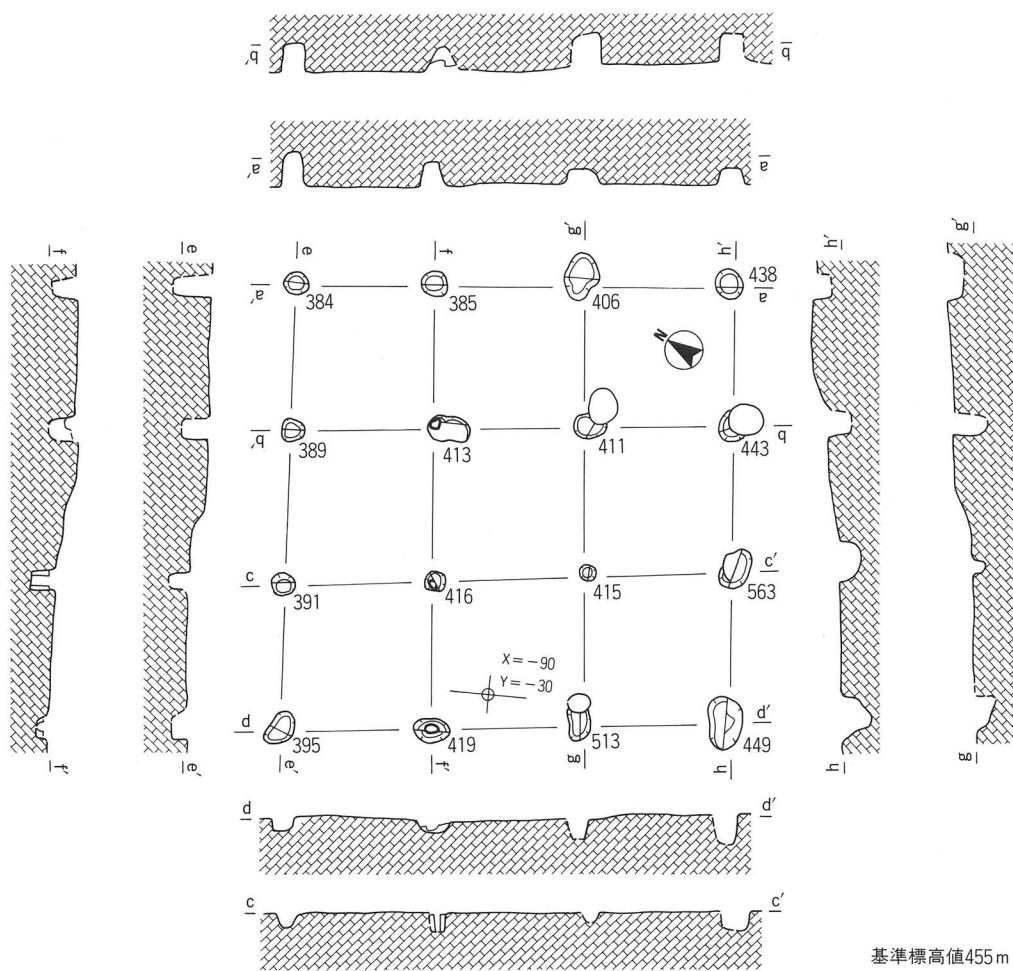
2 欄列SA11実測図 (縮尺1/100)



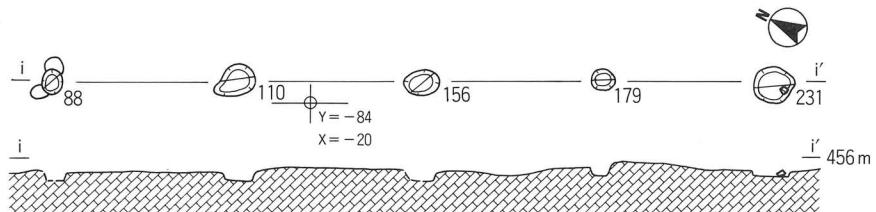
1 建物SB14実測図 (縮尺1/100)



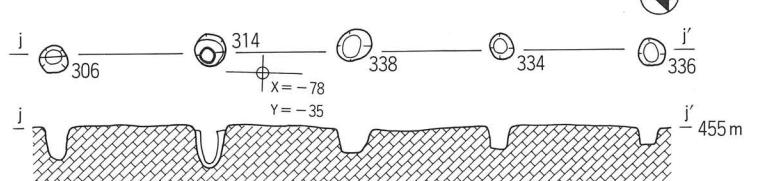
2 建物SB15実測図 (縮尺1/100)



1 建物SB16実測図（縮尺1/100）



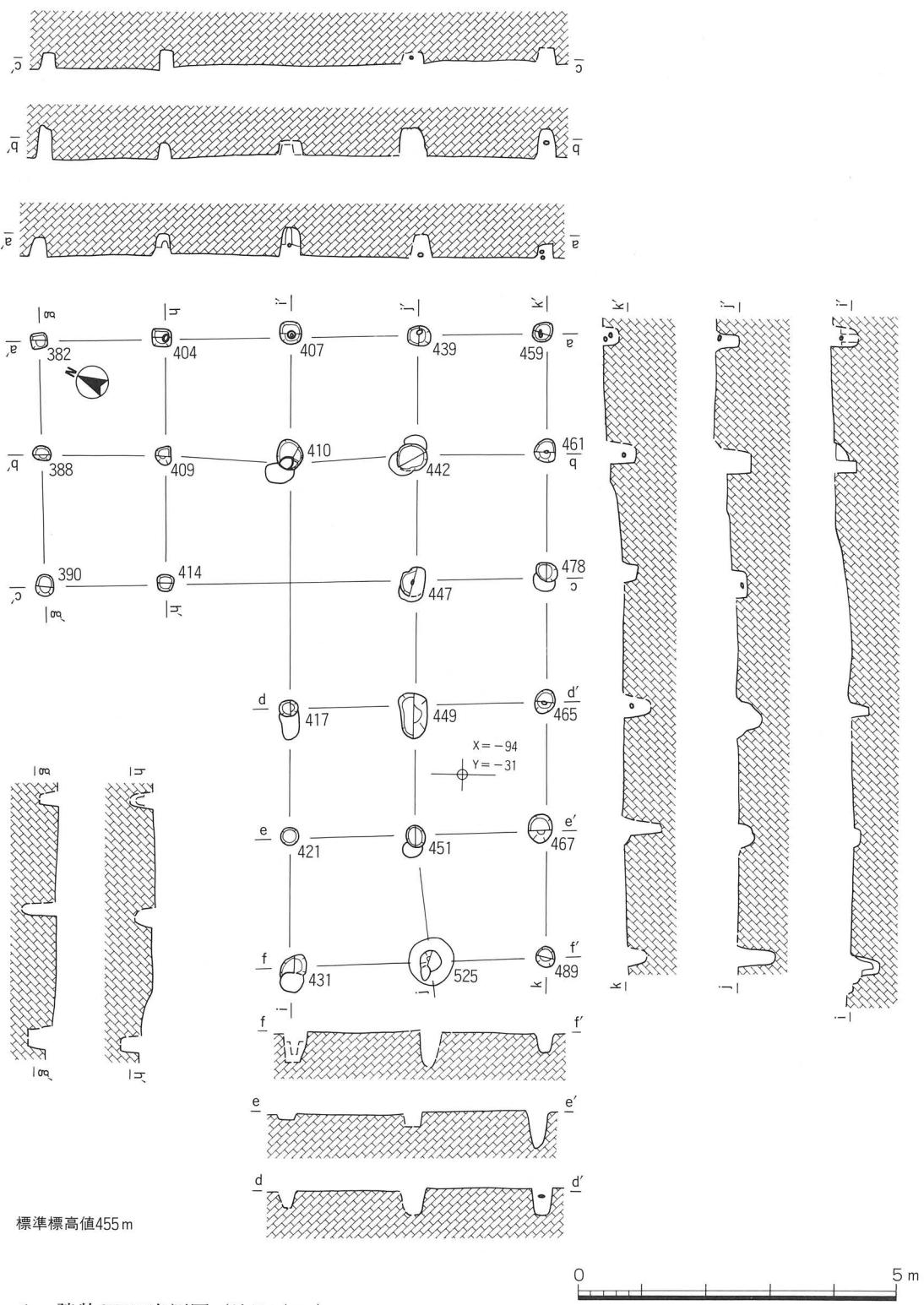
2 棚列SA12実測図（縮尺1/100）



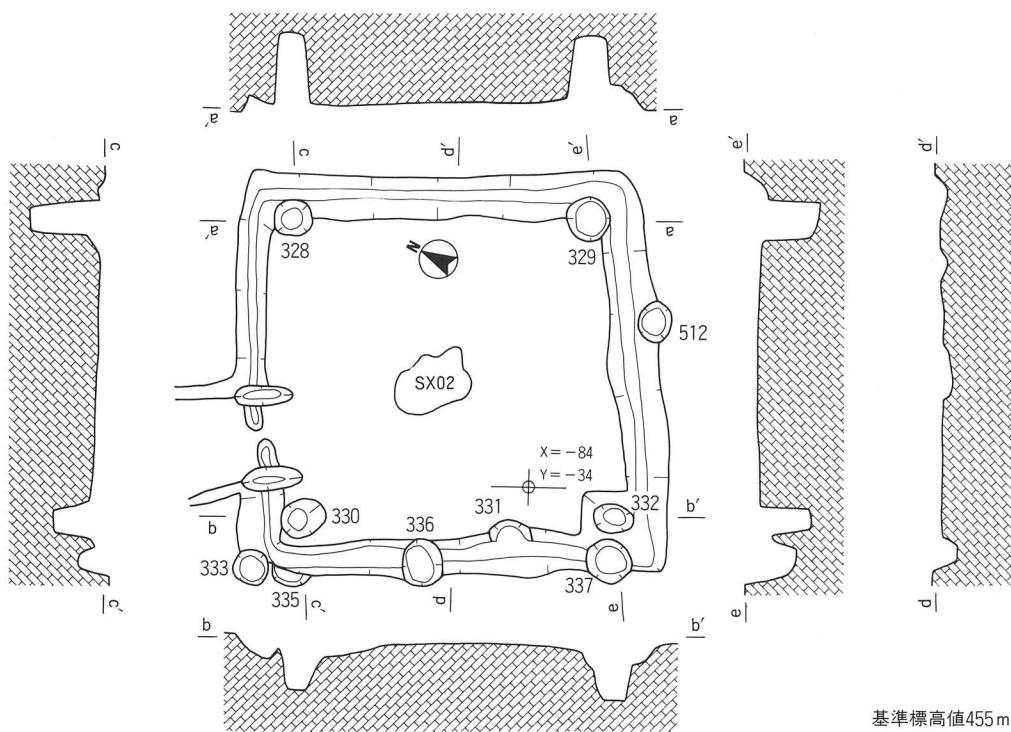
3 棚列SA13実測図（縮尺1/100）



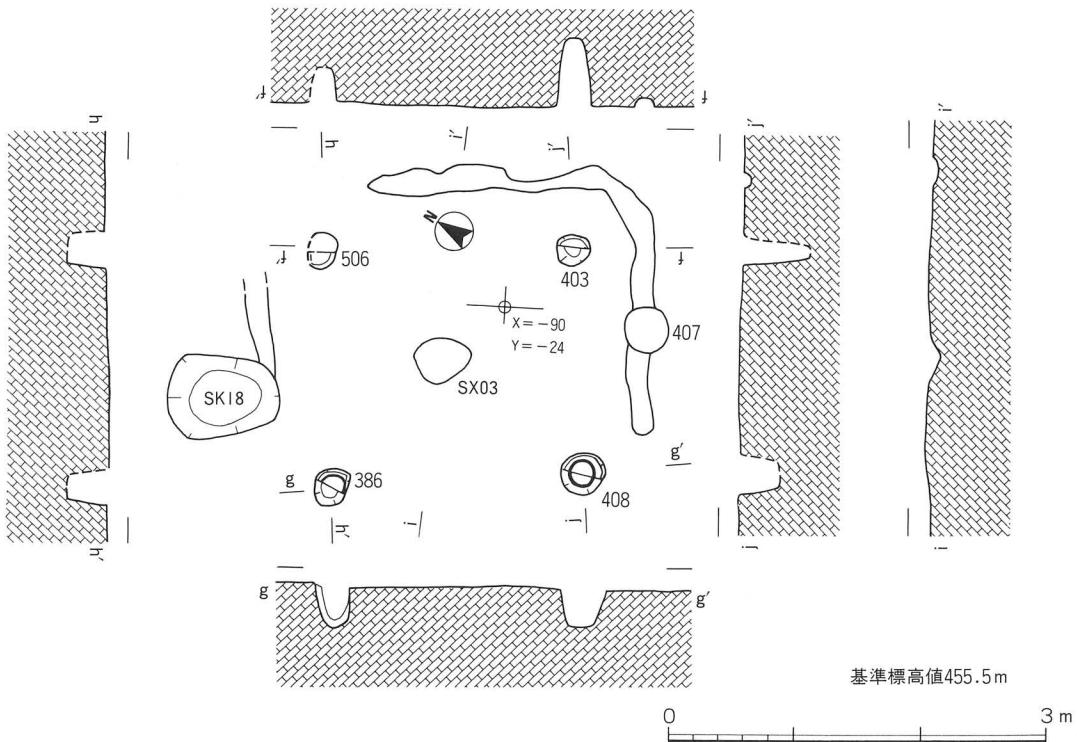
図版四二 江馬氏下館跡一九九六年度調査地区遺構実測図(○)



1 建物SB17実測図 (縮尺1/100)

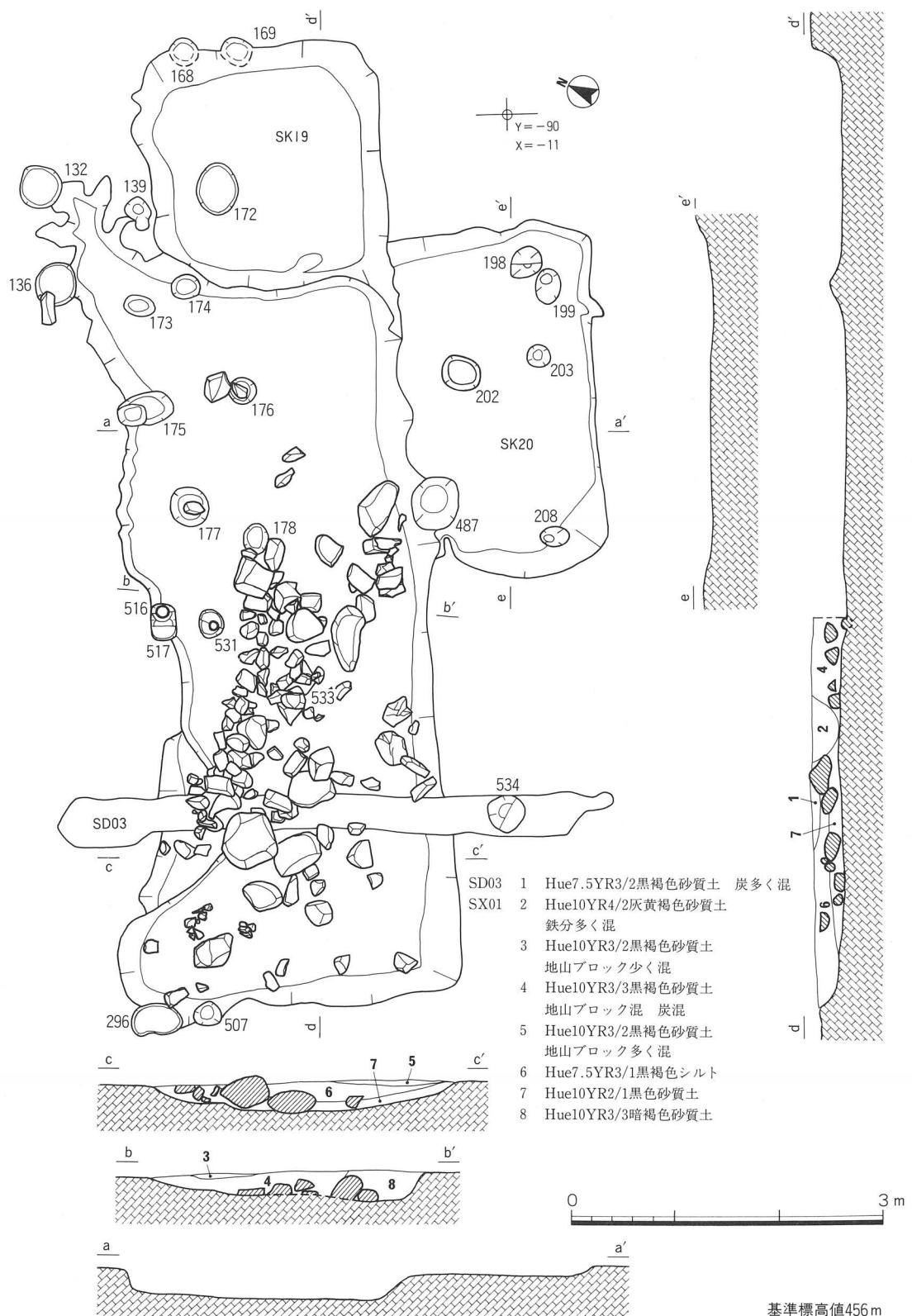


1 竪穴住居S I 01実測図 (縮尺1/60)

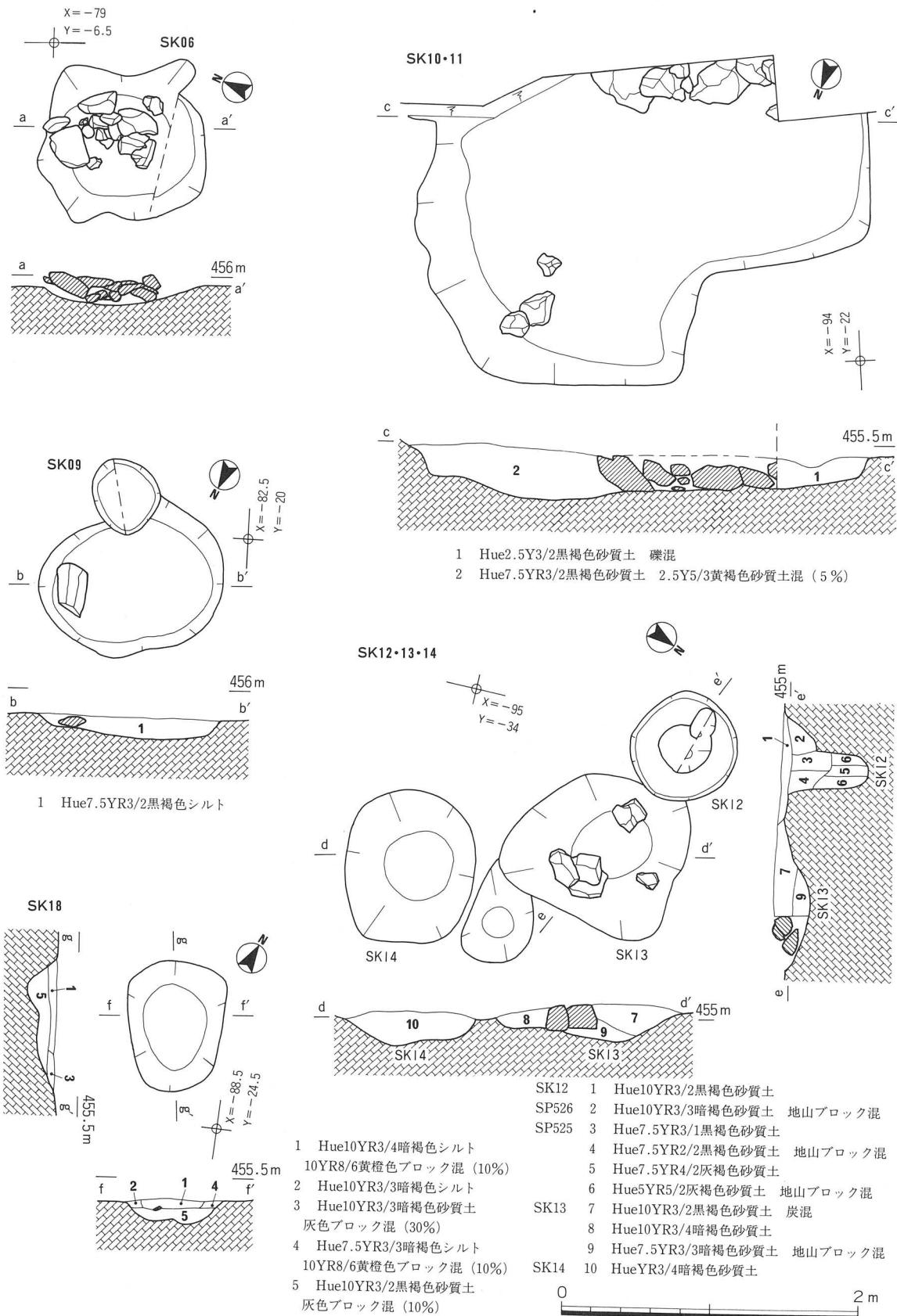


2 竪穴住居S I 02実測図 (縮尺1/60)

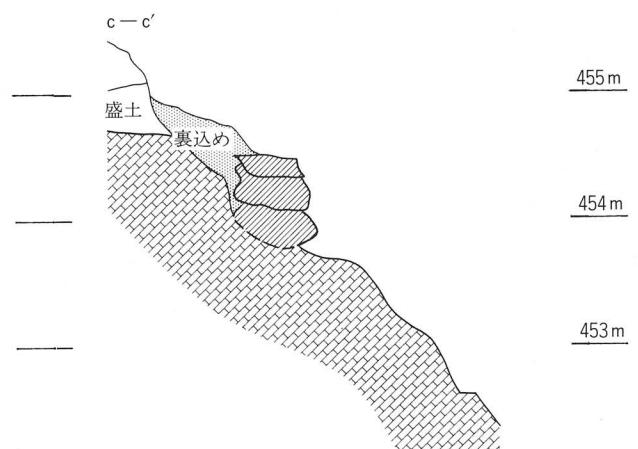
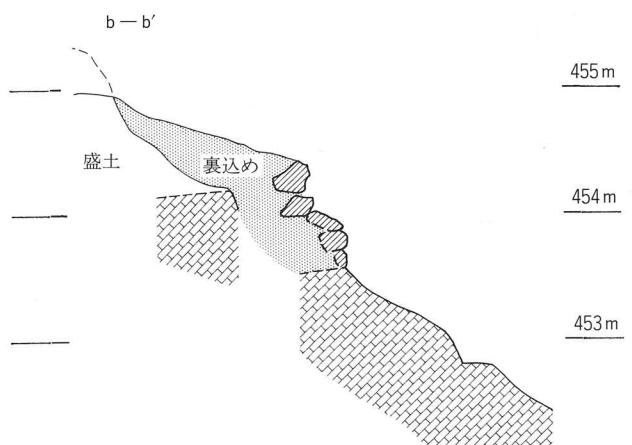
図版四四 江馬氏下館跡一九九六年度調査地区遺構実測図(二)



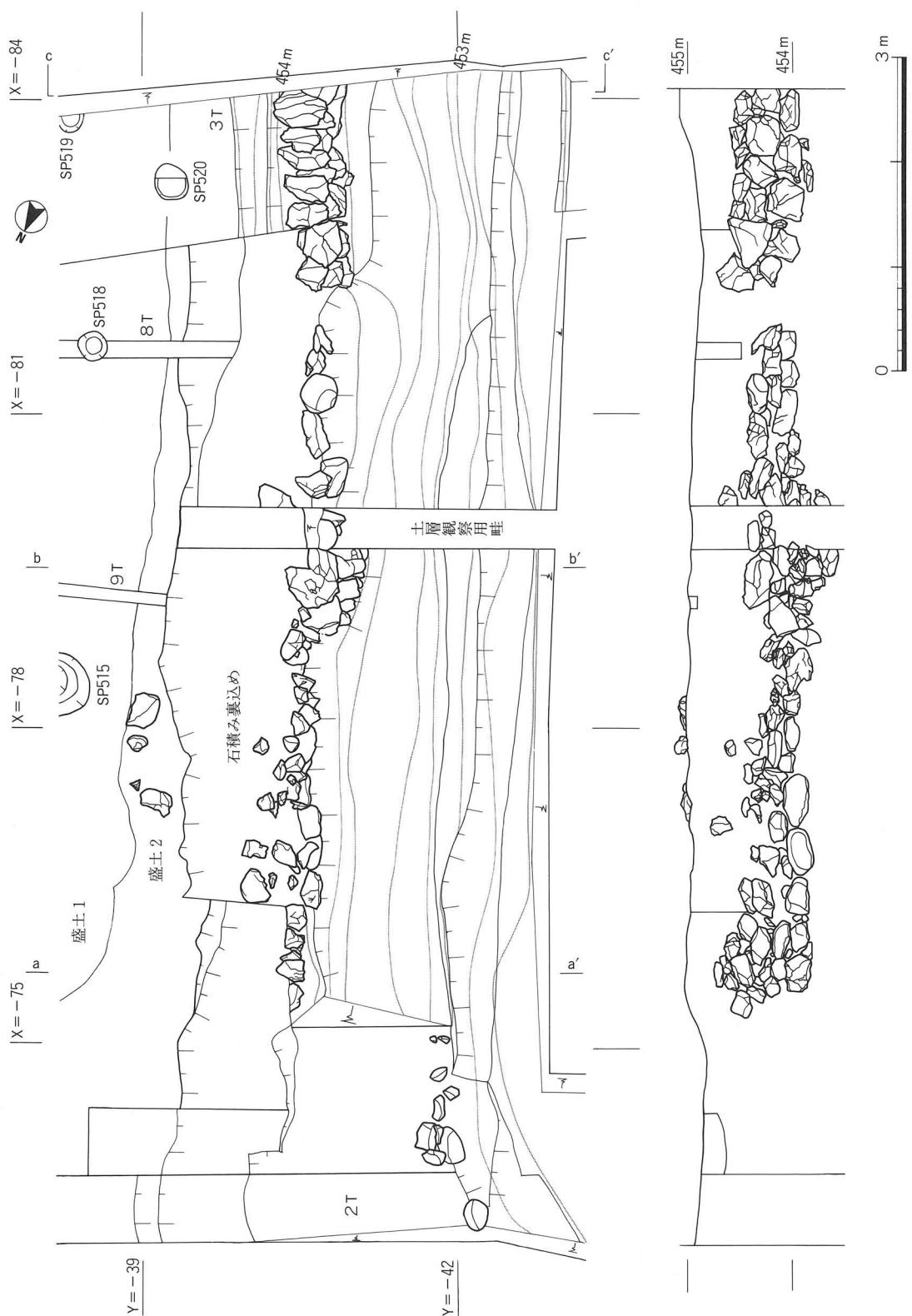
1 土間状遺構SX01実測図 (縮尺1/60)



1 土坑実測図 (縮尺1/40)



図版四六 江馬氏下館跡一九九六年度調査地区遺構実測図(四)

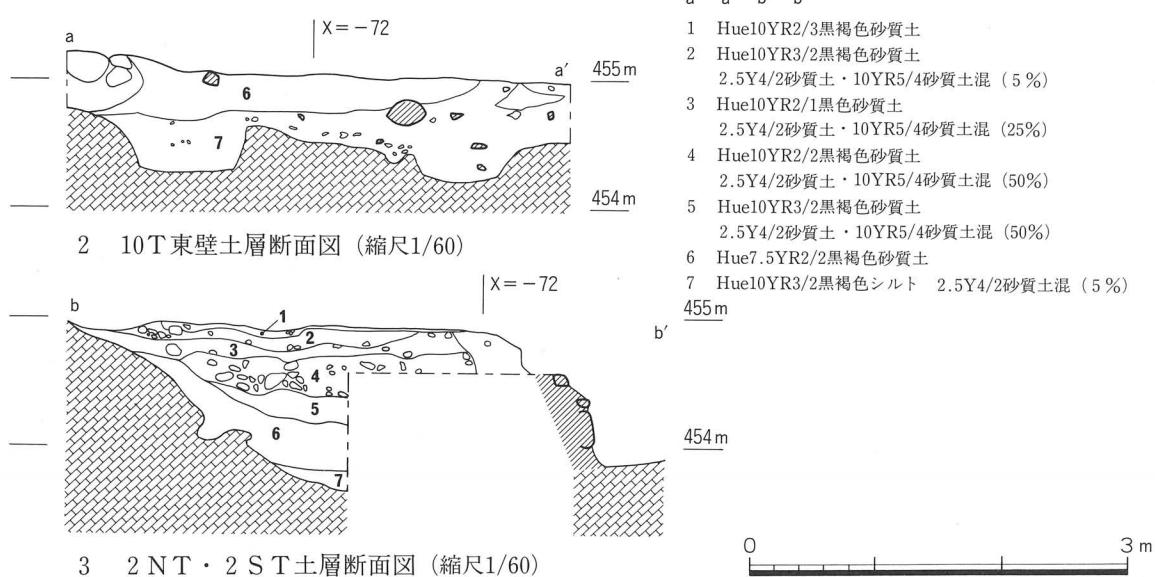


1 石積み 1 実測図 (縮尺1/60)

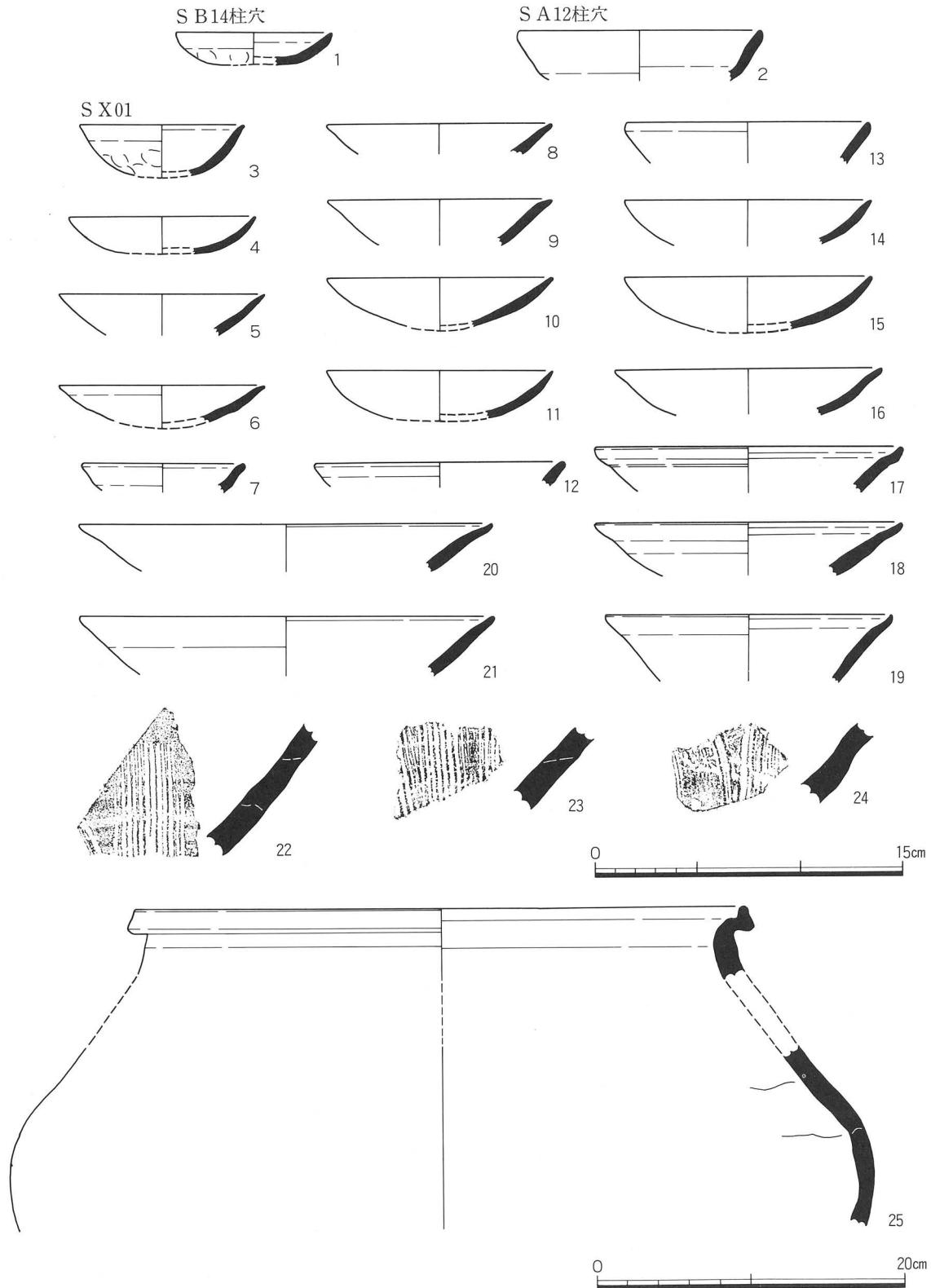
図版四七 江馬氏下館跡一九九六年度調査地区遺構実測図(五)



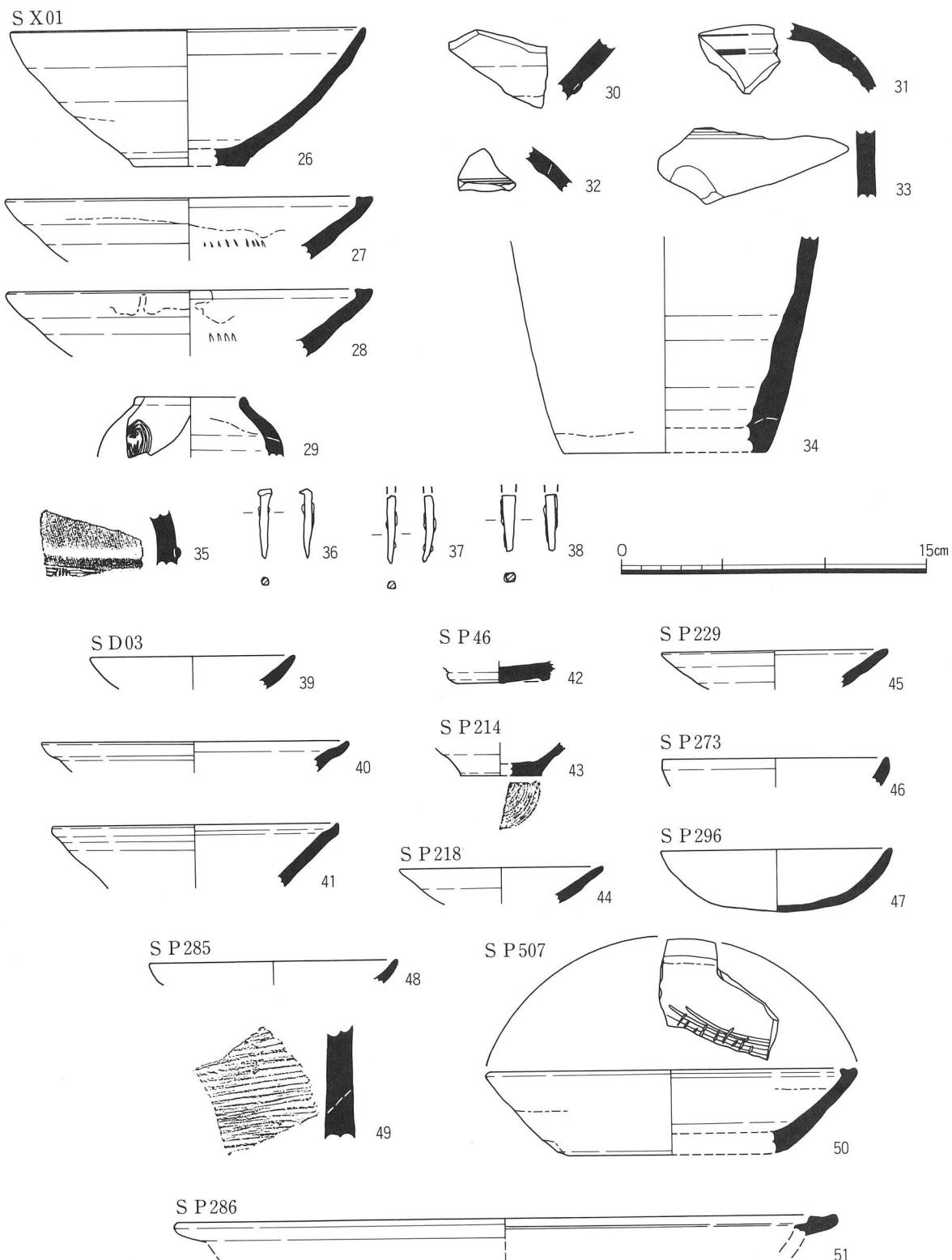
3 2 NT・2 ST 土層断面図 (縮尺1/60)



図版四八 江馬氏下館跡一九九六年度調査出土遺物実測図(一)

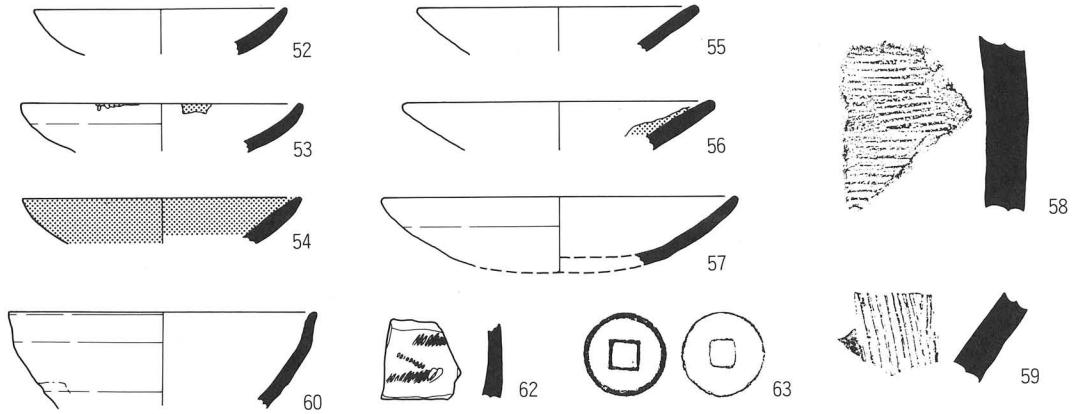


区画1 出土遺物：S B14柱穴（1 土師器）、S A12柱穴（2 土師器）、S X01（3～21 土師器、
22～24 珠洲、25 瓷器系）縮尺1/3、25のみ縮尺1/4

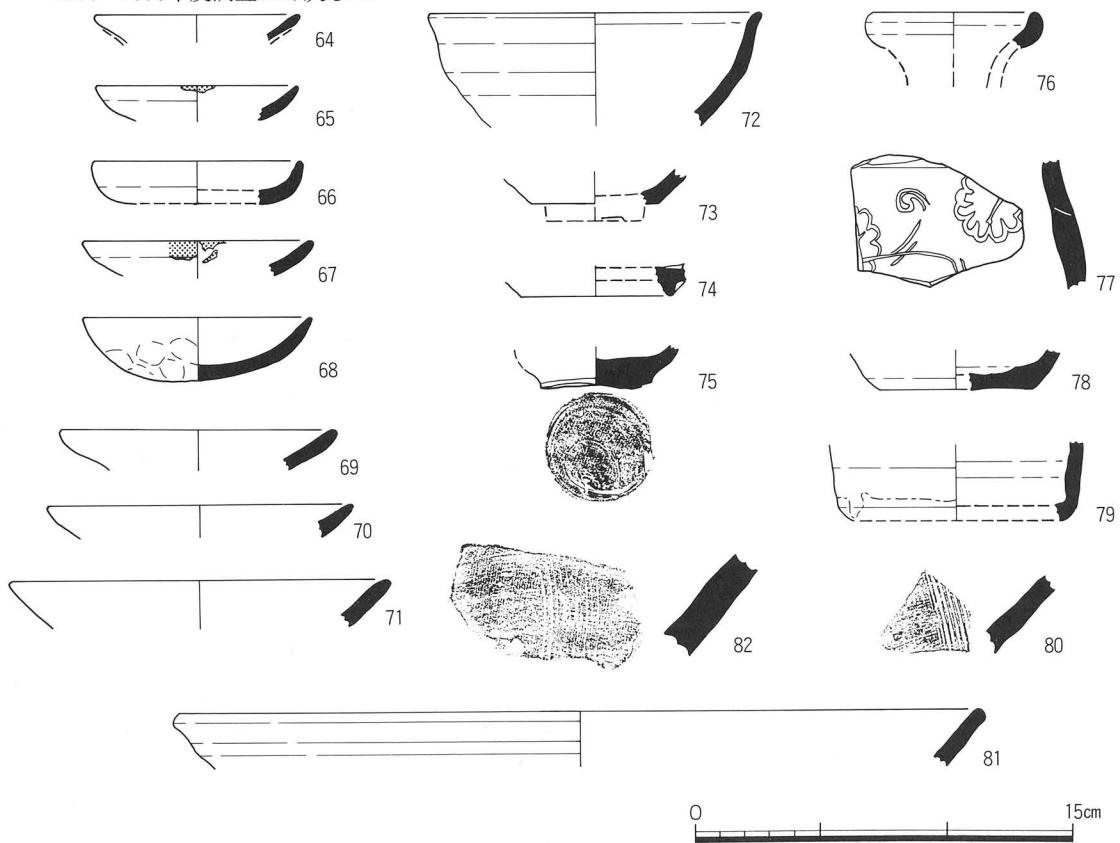


区画1 出土遺物：S X01 (26~34瀬戸美濃, 35瓦器, 36~38鉄製品), S D03 (39~41土師器), S P46 (42瀬戸美濃), S P214 (43土師器), S P218 (44土師器), S P229 (45土師器), S P273 (46土師器), S P296 (47土師器), S P285 (48土師器, 49珠洲), S P507 (50瀬戸美濃), S P286 (51瀬戸美濃) 縮尺1/3

区画1 遺構外



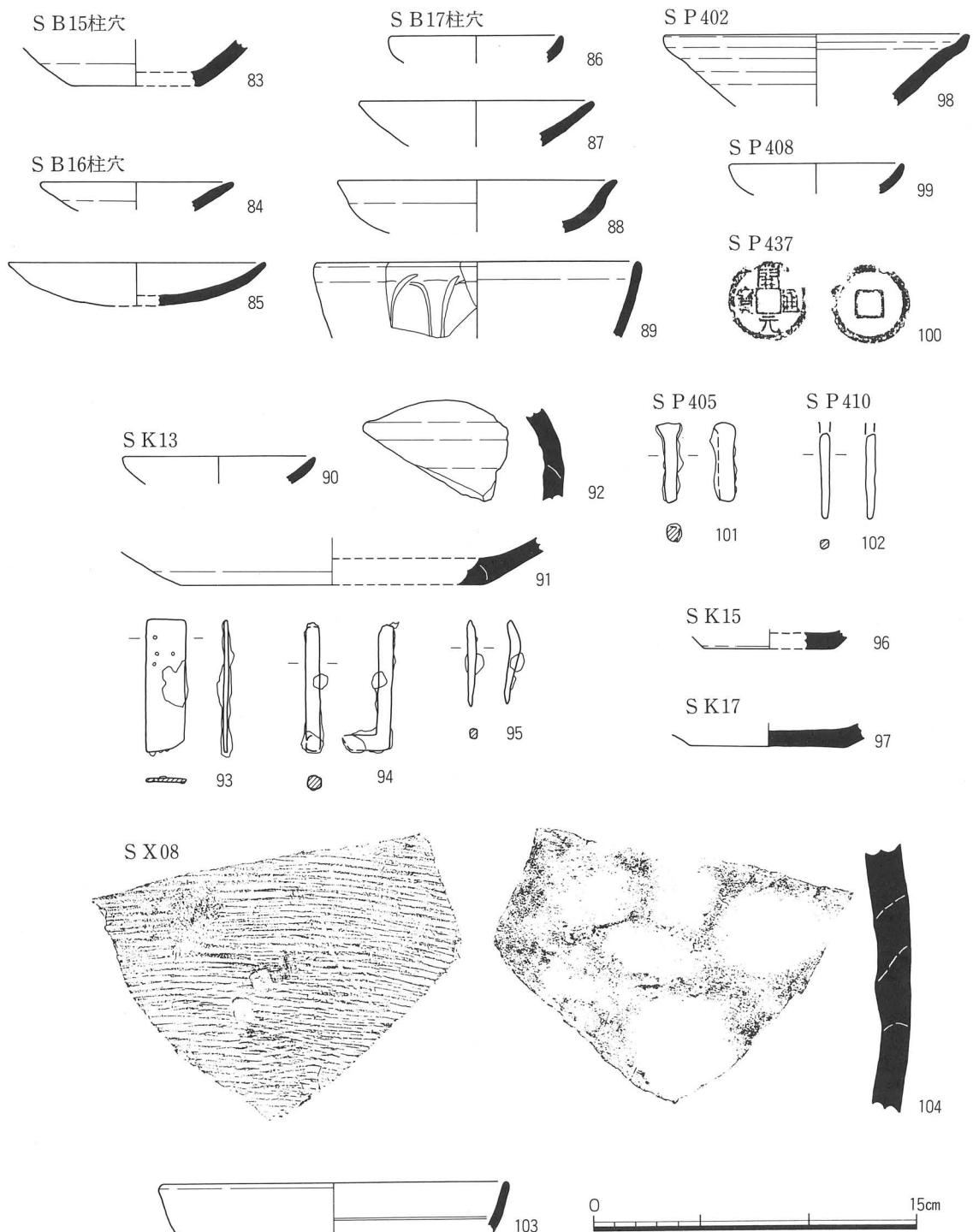
1976~1978年度調査埋め戻し土



区画1 出土遺物：遺構外 (52~57土師器, 58・59珠洲, 60・61瀬戸美濃, 62白磁, 63古銭)

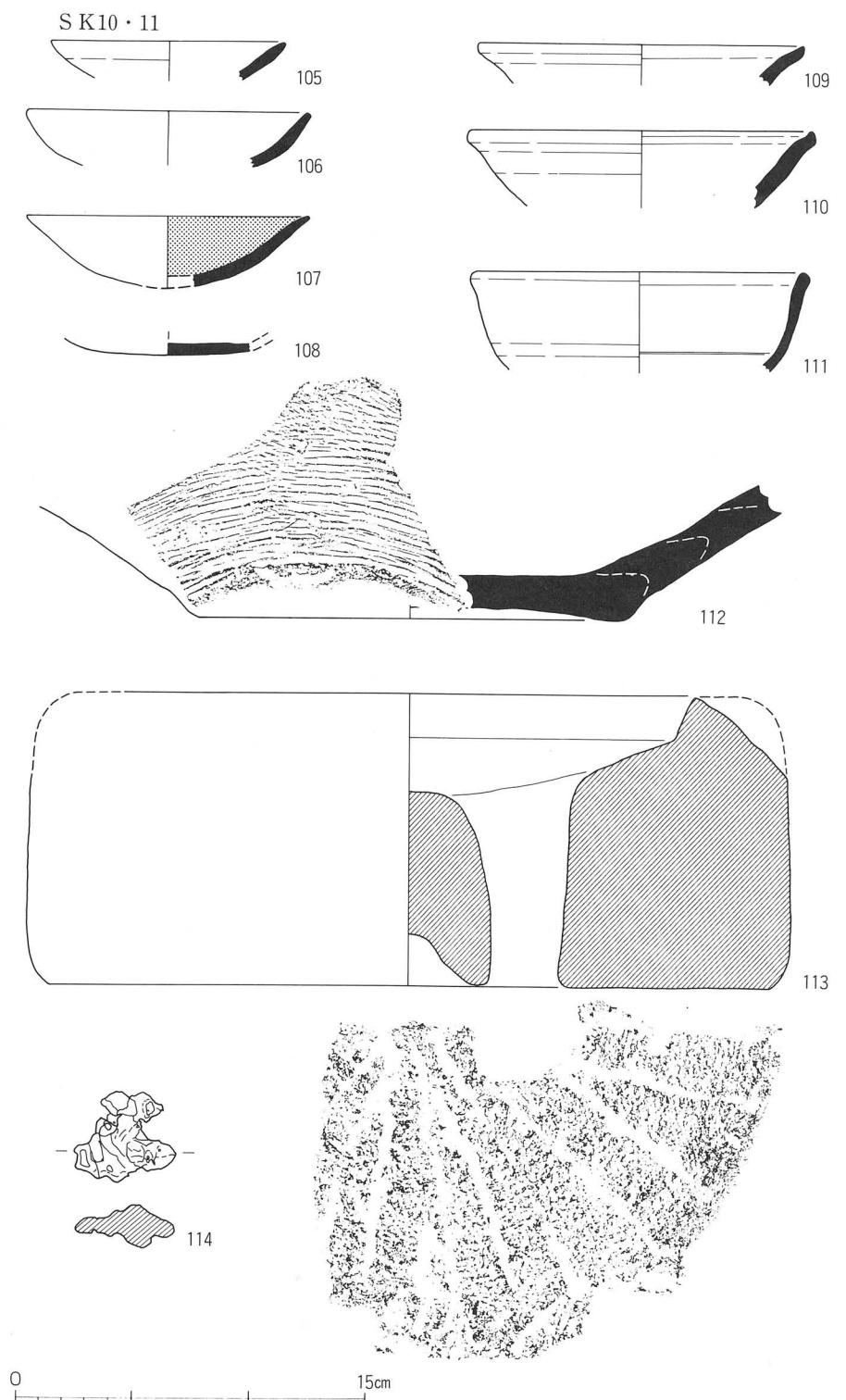
1976~1978年度調査埋め戻し土出土遺物：(64~71土師器, 72~81瀬戸美濃, 82珠洲)

縮尺1/3, 錢貨のみ縮尺1/2



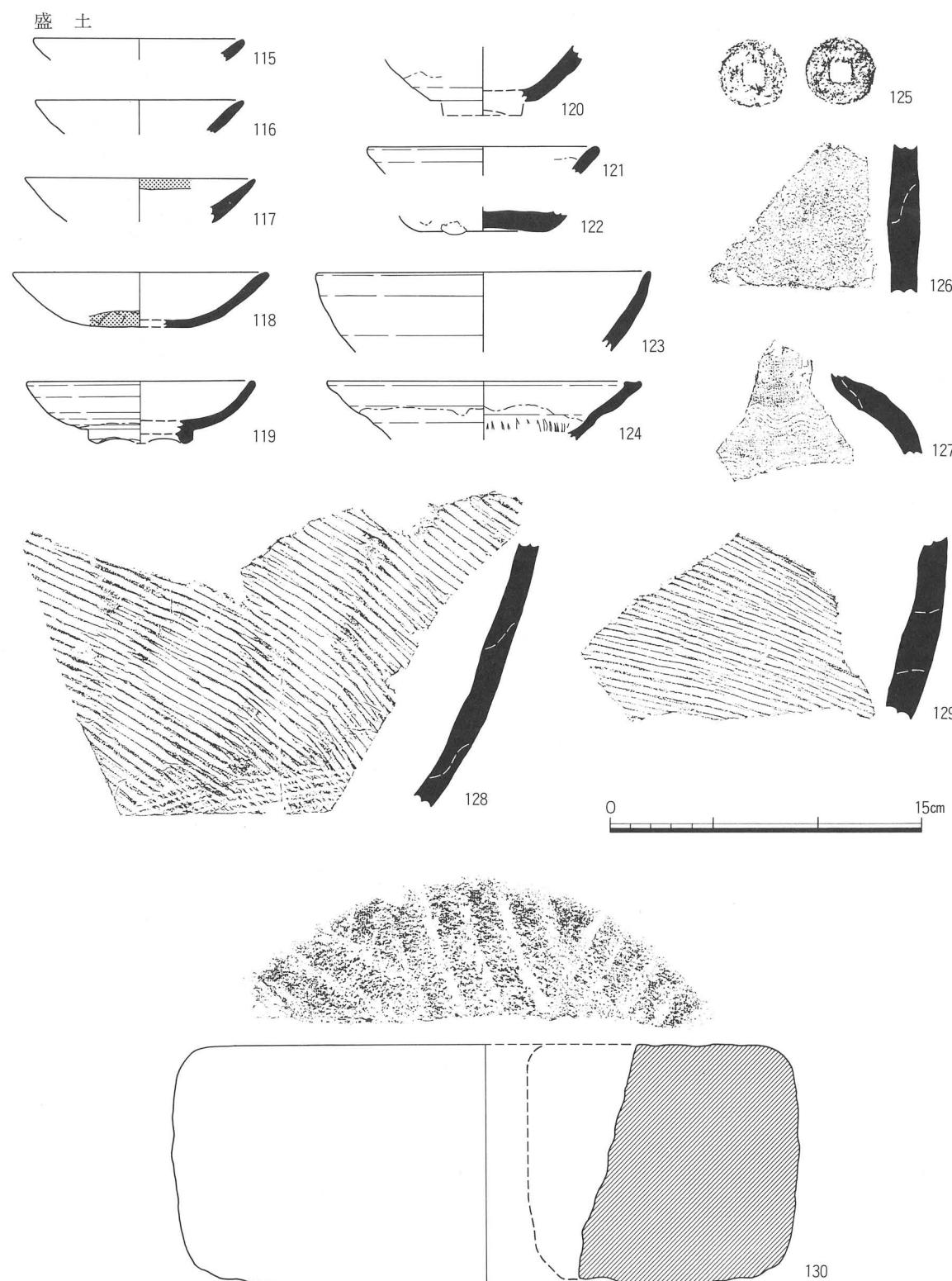
区画2 出土遺物：S B15柱穴（83土師器）、S B16柱穴（84・85土師器）、S B17柱穴（86～88土師器、89青磁）、S K13（90土師器、91瀬戸美濃、92珠洲、93～95鉄製品）、S K15（96土師器）、S K17（97土師器）、S P402（98土師器）、S P408（99土師器）、S P437（100古銭）、S P405（101鉄製品）、S P410（102鉄製品）、S X08（103青磁、104珠洲） 縮尺1/3、銭貨のみ縮尺1/2

図版五二
江馬氏下館跡一九九六年度調査出土遺物実測図(五)

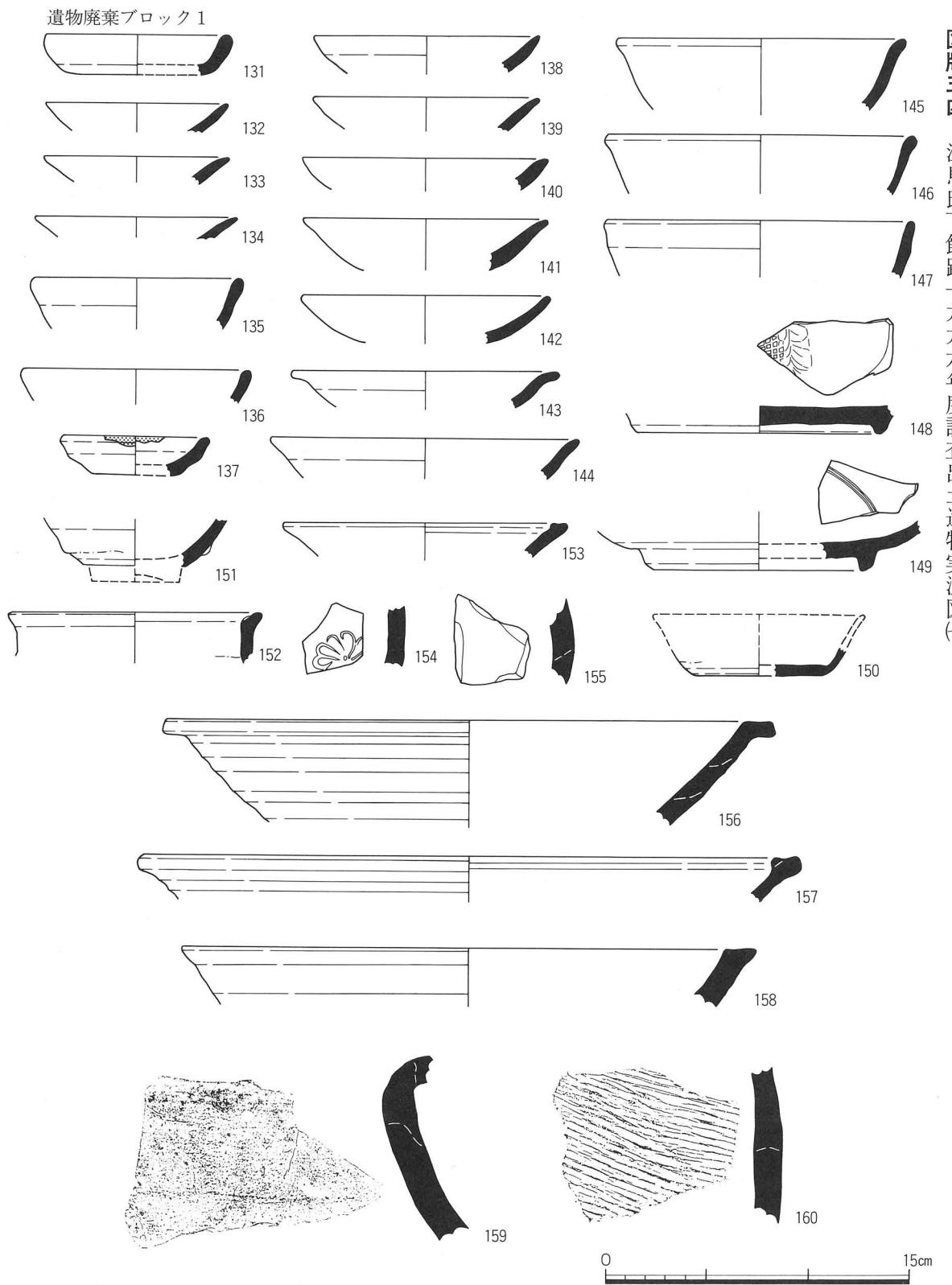


区画2 出土遺物：S K 10・11 (105～110土師器, 111青磁, 112珠洲,
113石臼, 114銅滓) 縮尺1/3

図版五三 江馬氏下館跡一九九六年度調査出土遺物実測図(六)

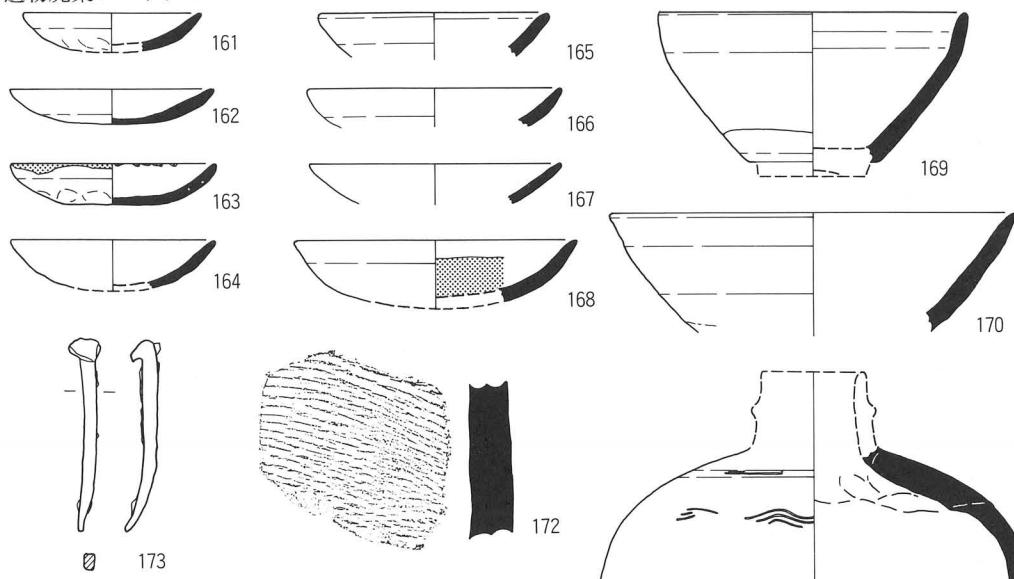


区画2 出土遺物：盛土（115～118土師器，119白磁，120～124瀬戸美濃，125古銭，126瓷器系，127～129珠洲，130石臼）縮尺1/3，錢貨のみ縮尺1/2



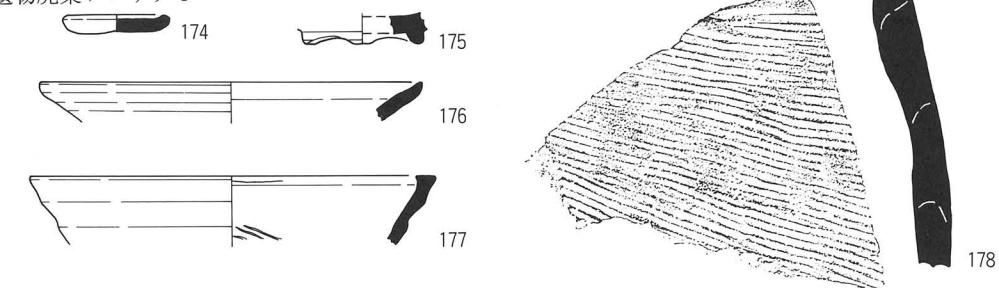
区画2 出土遺物：遺物廃棄ブロック 1 (131～144土師器, 145～149青磁, 150白磁,
151～154・156・157瀬戸美濃, 155瓦器, 158・160珠洲, 159瓷器系) 縮尺1/3

遺物廃棄ブロック 2



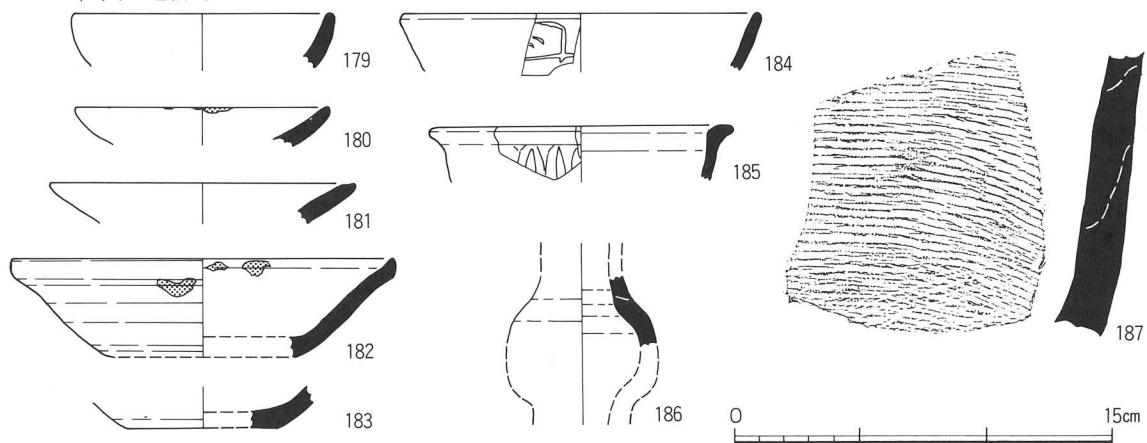
171

遺物廃棄ブロック 3

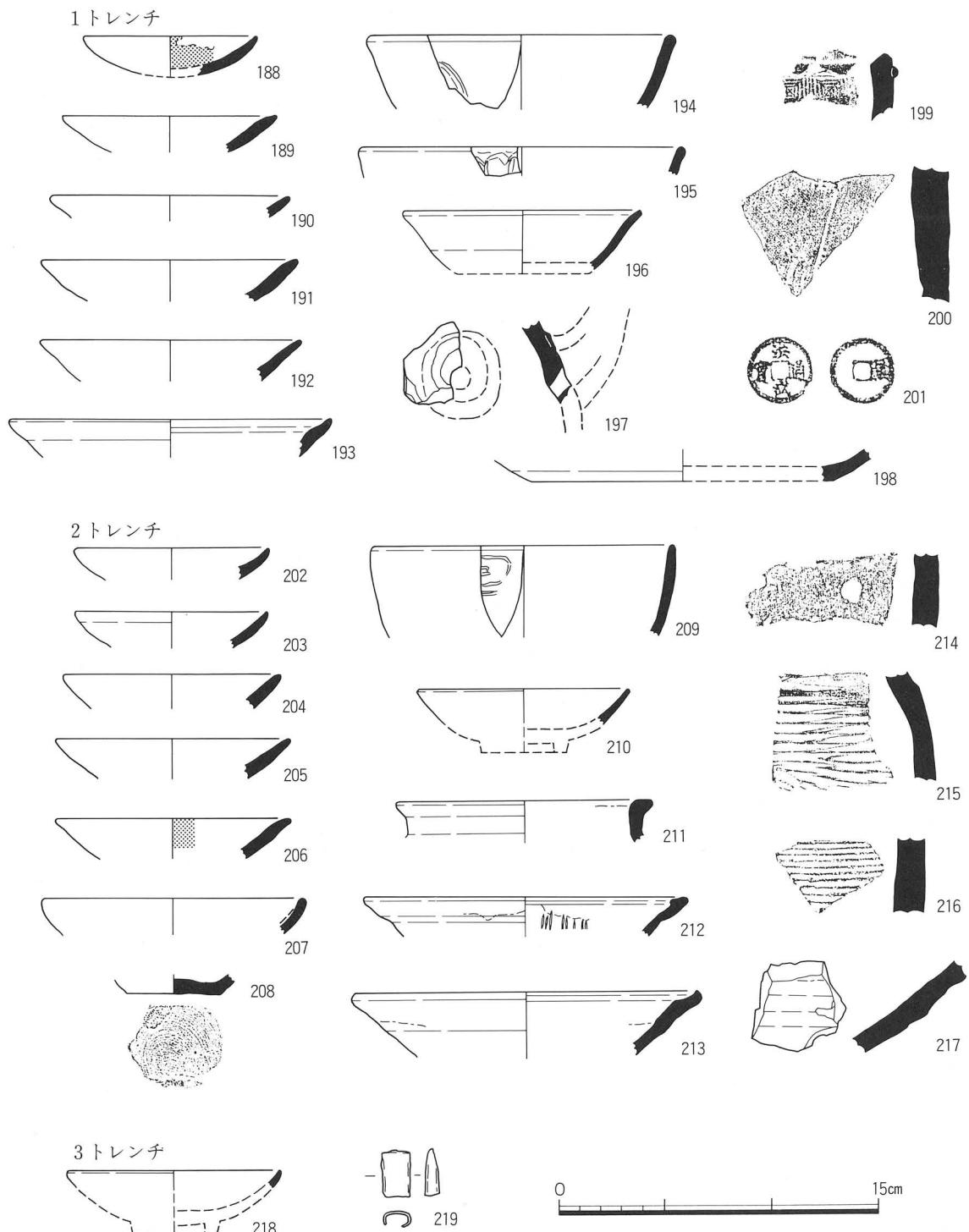


178

区画 2 遺構外



区画 2 出土遺物：遺物廃棄ブロック 2 (161～168土師器, 169～171瀬戸美濃, 172珠洲, 173鉄製品),
遺物廃棄ブロック 3 (174・176土師器, 175白磁, 177瀬戸美濃, 178珠洲),
遺構外 (179～183土師器, 184・185青磁, 186瀬戸美濃, 187珠洲) 縮尺1/3

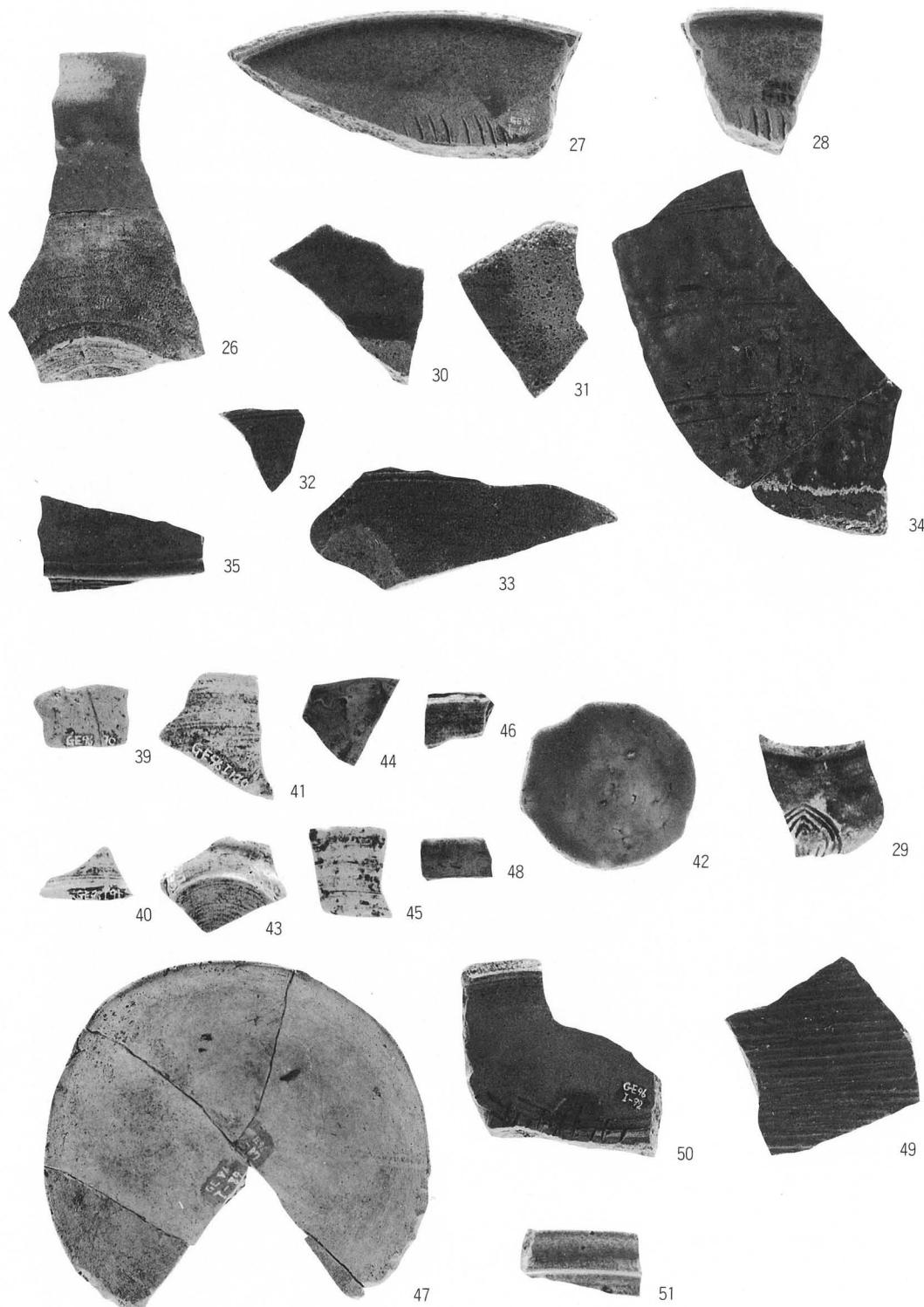


図版3 出土遺物：1トレンチ (188~193土師器, 194・195青磁, 196白磁, 197・198瀬戸美濃, 199瓦器, 200瓷器系, 201古銭), 2トレンチ (202~208土師器, 209青磁, 210白磁, 211~213・217瀬戸美濃, 214瓷器系, 215・216珠洲), 3トレンチ (218白磁, 219銅製品) 縮尺1/3, 銭貨のみ縮尺1/2

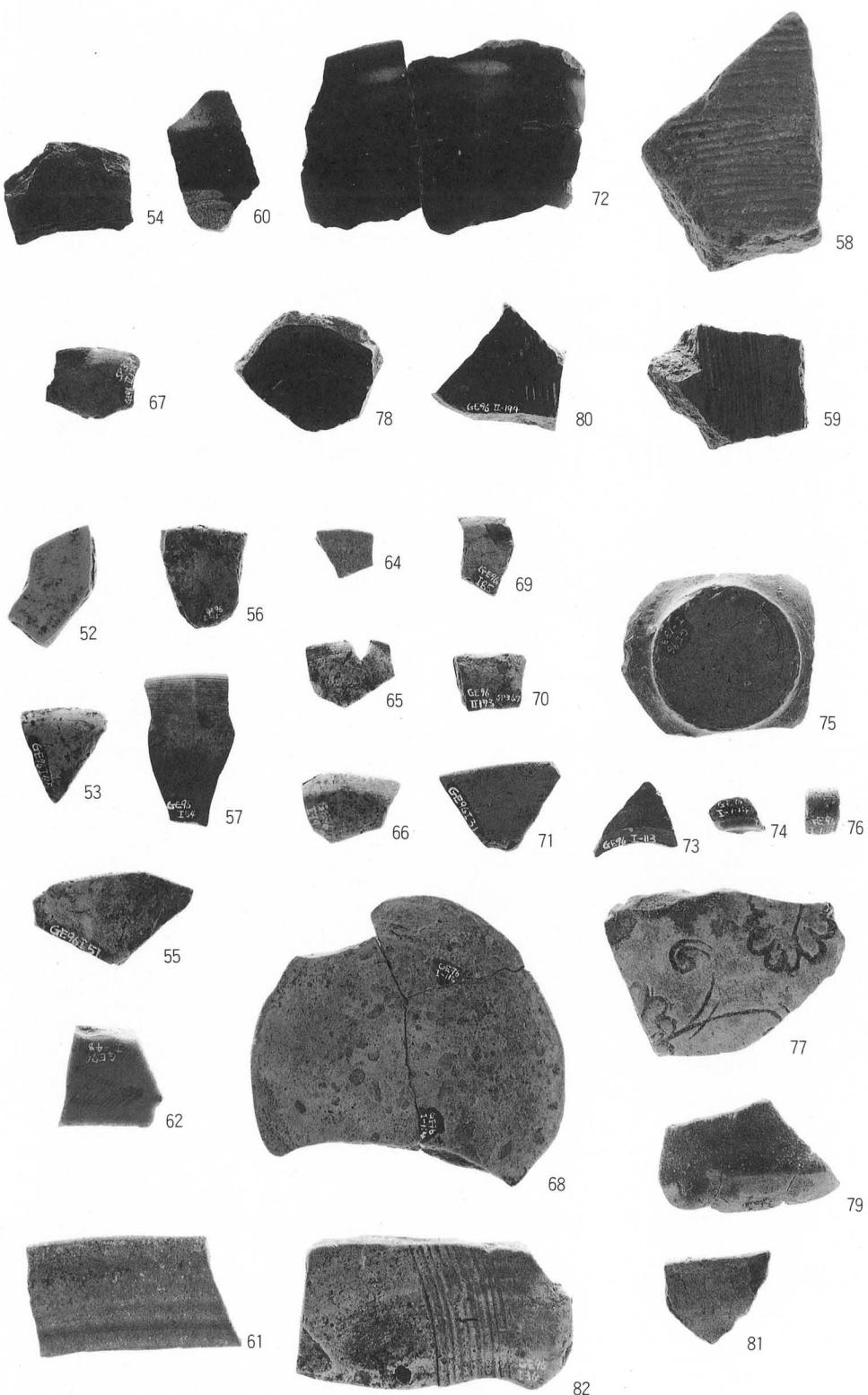
図版五七 江馬氏下館跡一九九六年度調査出土遺物写真(一)



区画1 出土遺物 : S B14柱穴(1土師器), S A12(2土師器), S X01(3~21土師器, 22~24珠洲, 25瓷器系)



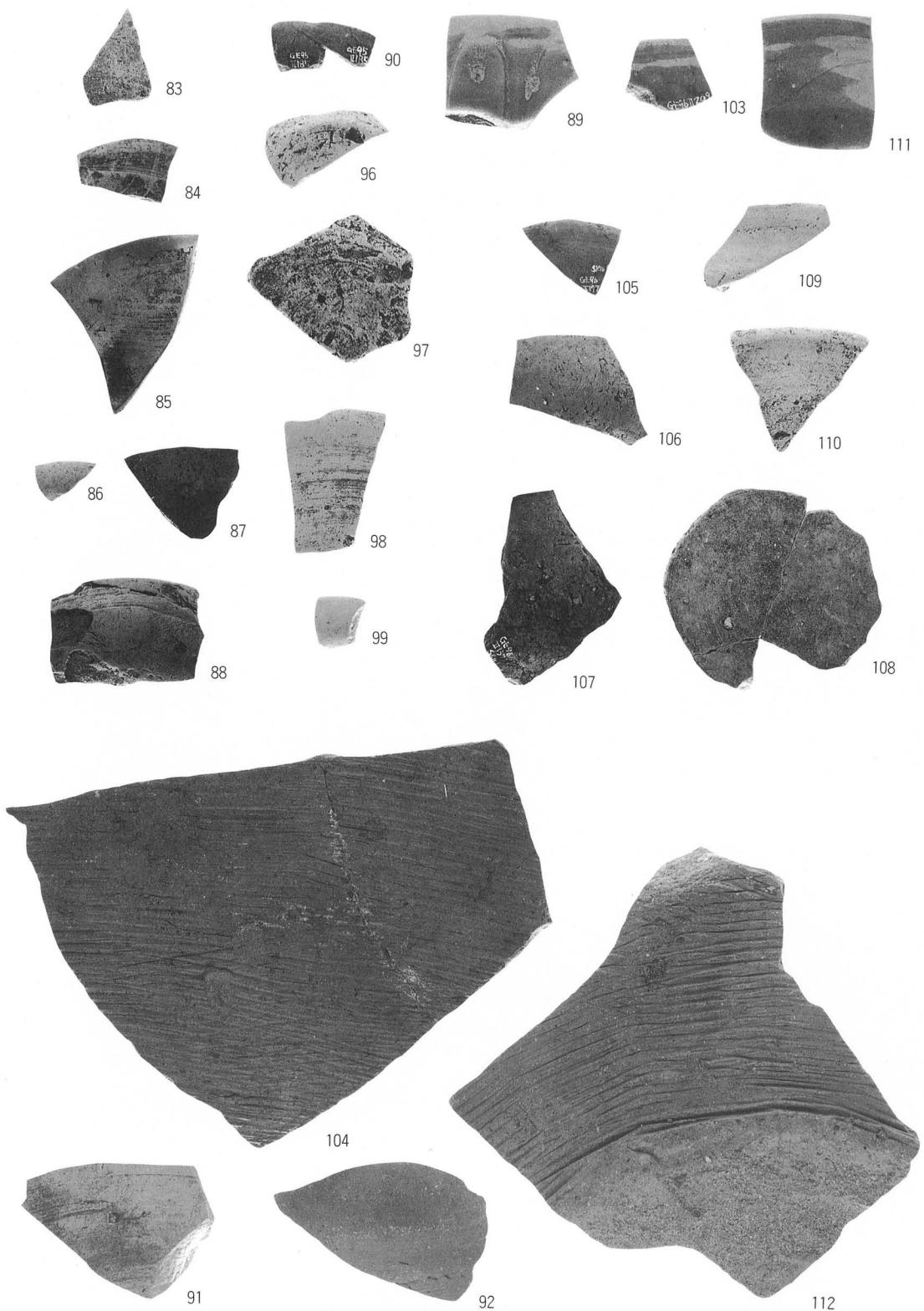
区画1出土遺物：S X01(26~34瀬戸美濃, 35瓦器), S D03(39~41土師器), S P46(42瀬戸美濃),
S P214(43土師器), S P218(44土師器), S P229(45土師器), S P273(46土師器),
S P296(47土師器), S P285(48土師器, 49珠洲), S P507(50瀬戸美濃), S P286(51瀬戸美濃)



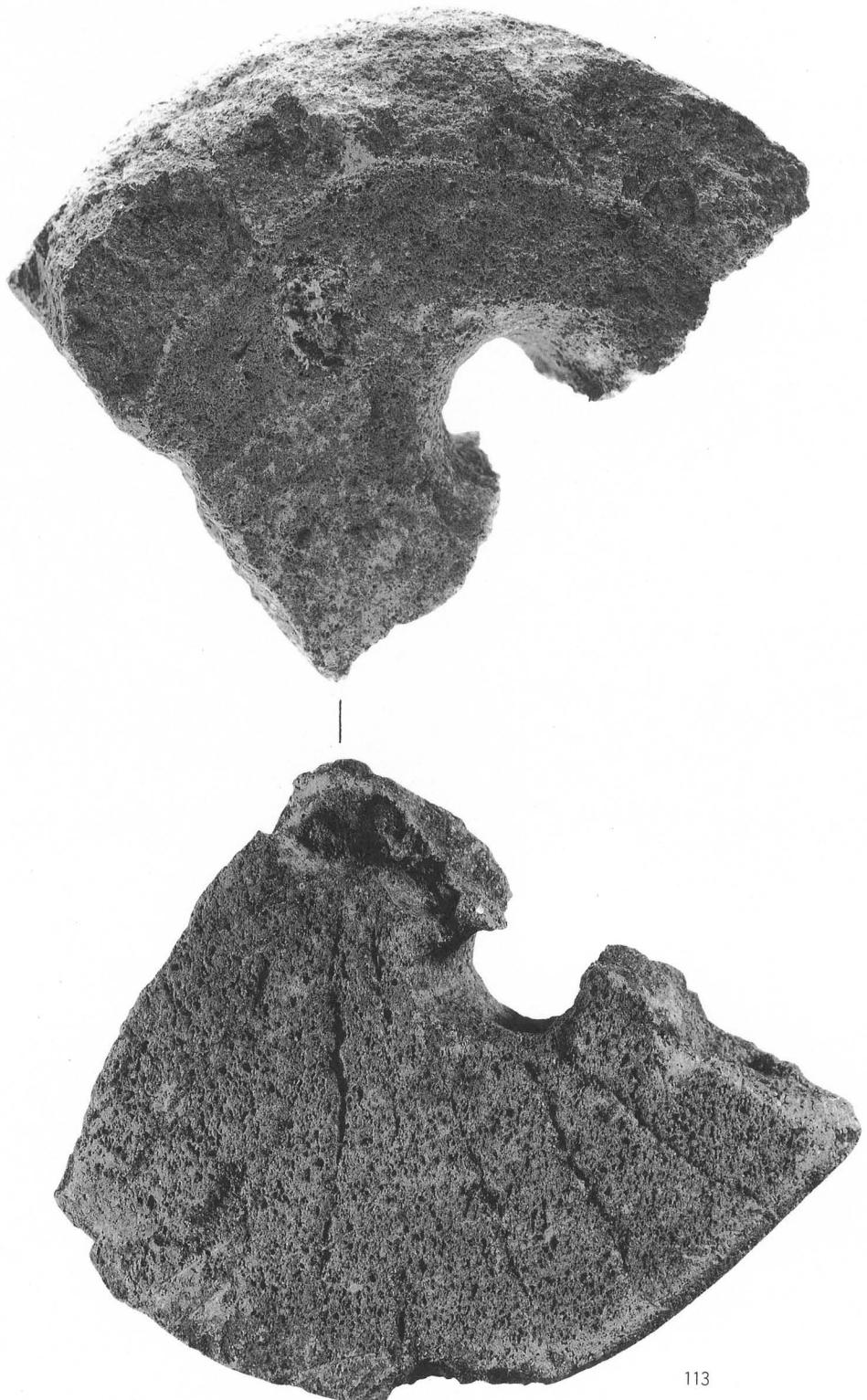
区画1出土遺物：遺構外(52～57土師器，58・59珠洲，60・61瀬戸美濃，62白磁)

1976～1978年度調査埋め戻し土出土遺物：(64～71土師器，72～81瀬戸美濃，82珠洲)

図版六〇 江馬氏下館跡一九九六年度調査出土遺物写真(四)



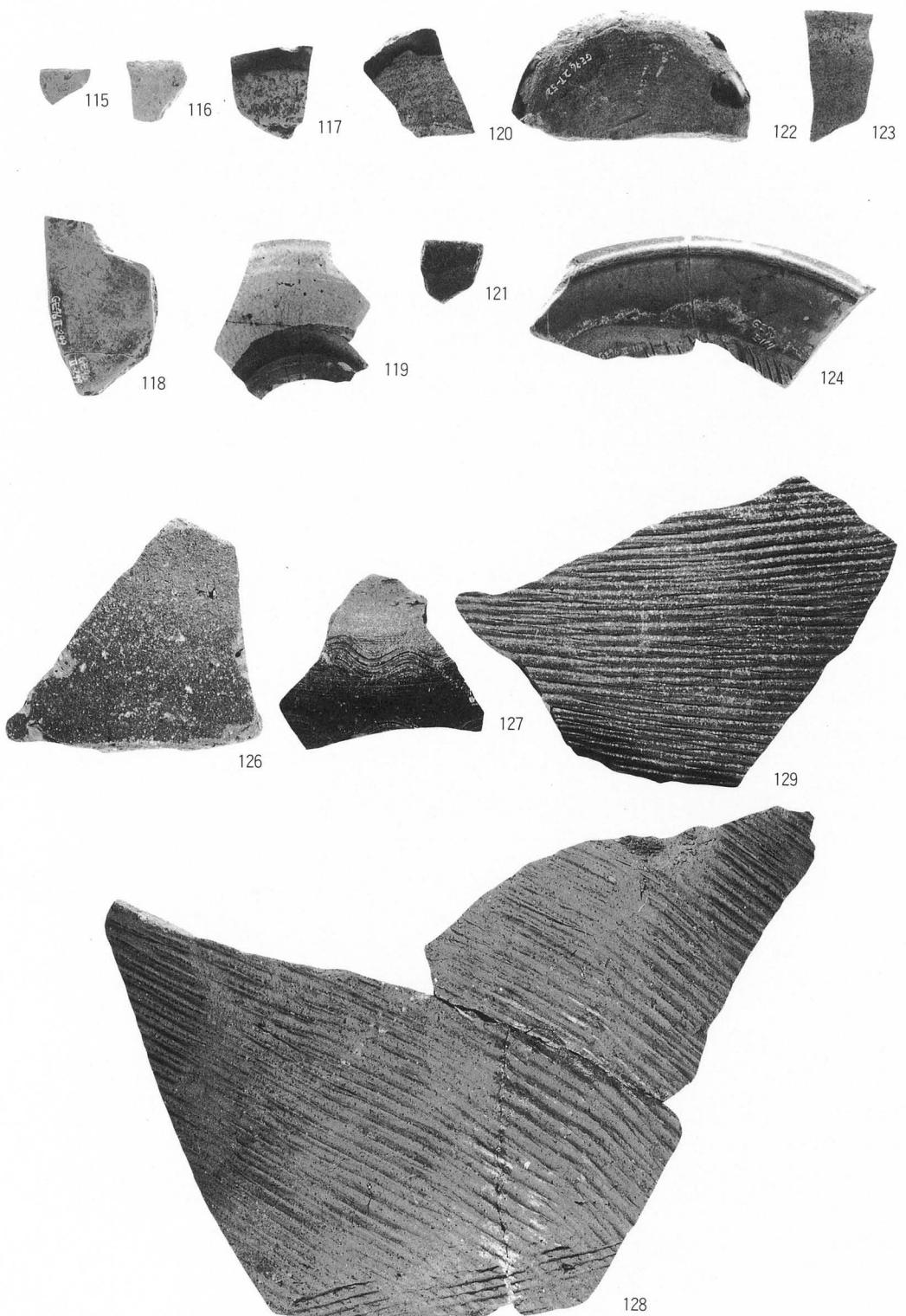
区画2 出土遺物：SB15柱穴(83土師器), SB16柱穴(84・85土師器), SB17柱穴(86~88土師器, 89青磁), SK13(90土師器, 91瀬戸美濃, 92珠洲), SK15(96土師器), SK17(97土師器), SP402(98土師器), SP408(99土師器), SX08(103青磁, 104珠洲), SK10・11(105~110土師器, 111青磁, 112珠洲)



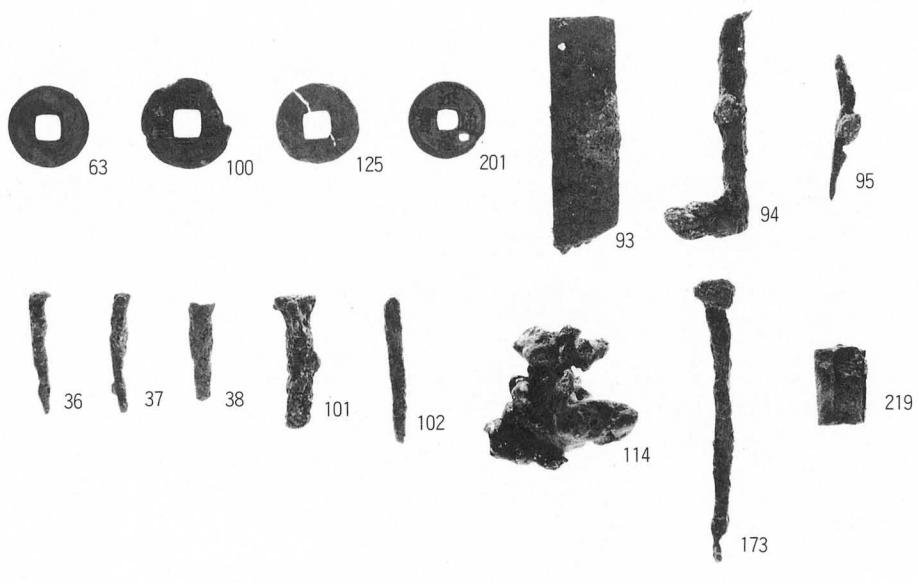
113

区画2 出土遺物：SK10・11(113石臼)

図版六二 江馬氏下館跡一九九六年度調査出土遺物写真(六)



区画2 出土遺物：盛土(115～118土師器，119白磁，120～124瀬戸美濃，126瓷器系，127～129珠州)

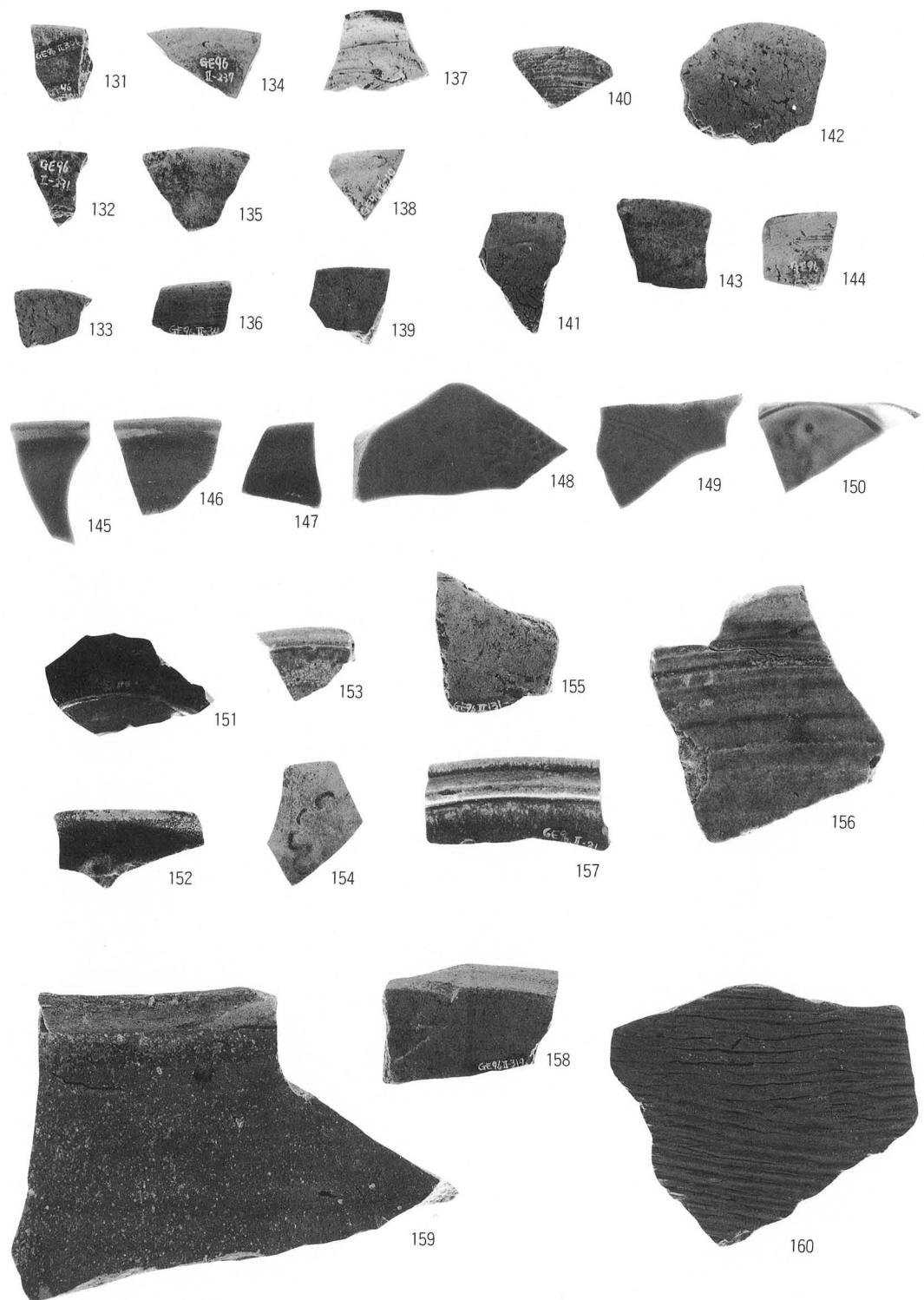


区画1出土遺物：S X01(36~38鉄製品), 遺構外(63古銭)

区画2出土遺物：SK13(93~95鉄製品), SP437(100古銭), SP405(101鉄製品), SP410(102鉄製品), SK10・11(114鉄滓), 盛土(125古銭, 130石臼), 遺物廃棄ブロック2(173鉄製品)

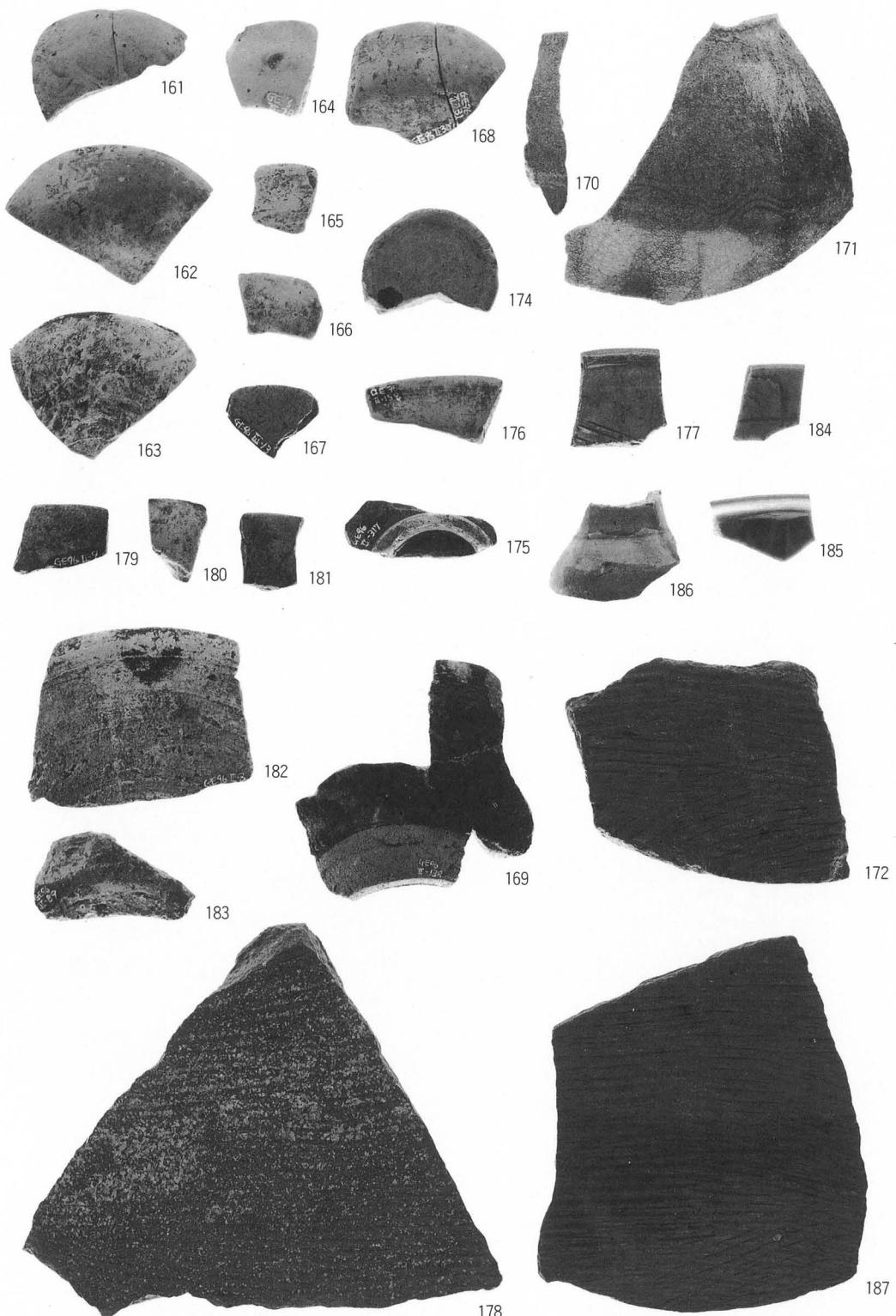
区画3出土遺物：1トレンチ(201古銭), 3トレンチ(219銅製品)

図版六四 江馬氏下館跡一九九六年度調査出土遺物写真(八)

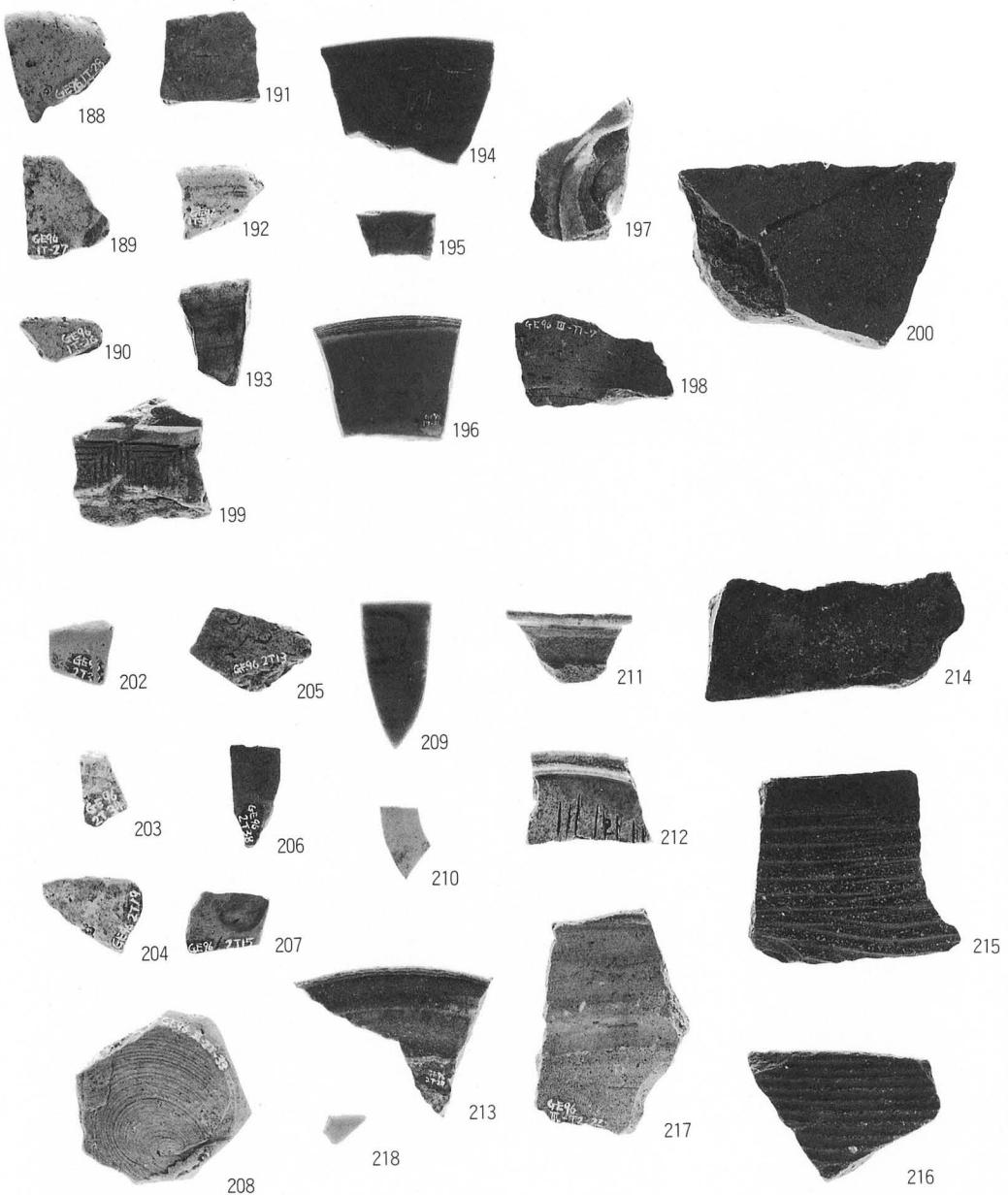


区画2 出土遺物：遺物廃棄ブロック1 (131～144土師器, 145～149青磁, 150白磁,

151～154・156・157瀬戸美濃, 155瓦器, 158・160珠洲, 159瓷器系)



区画2 出土遺物：遺物廃棄ブロック2(161～168土師器, 169～171瀬戸美濃, 172珠洲), 遺物廃棄ブロック3(174・176土師器, 175白磁, 177瀬戸美濃, 178珠洲), 遺構外(179～183土師器, 184・185青磁, 186瀬戸美濃, 187珠洲)



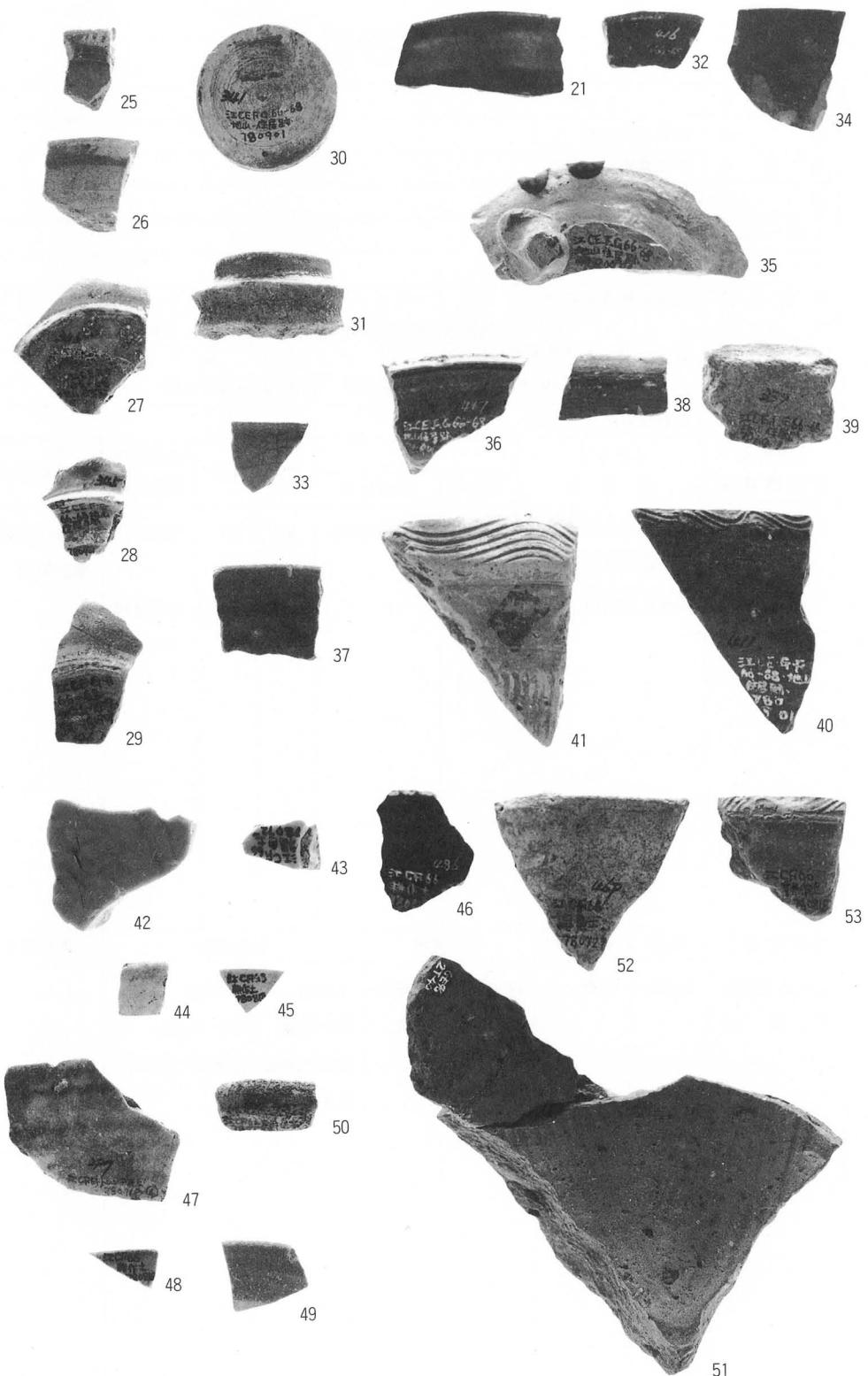
区画3 出土遺物：1 トレンチ(188~193土師器, 194・195青磁, 196白磁, 197・198瀬戸美濃, 199瓦器, 200瓷器系), 2 トレンチ(202~208土師器, 209青磁, 210白磁, 211~213・217瀬戸美濃, 214瓷器系, 215・216珠洲), 3 トレンチ(218白磁)

図版六七 江馬氏下館跡一九七八年度調査出土遺物写真(一)



S101出土遺物：1~16土師器，17~20青磁，22~24白磁

圖版六八 江馬氏下館跡一九七八年度調查出土遺物寫真(二)



S I 01出土遺物：21中国製天目椀，25～38瀬戸美濃，39～41洲

S I 01周辺出土遺物：42青磁，43～45白磁，46～50瀬戸美濃，51～53洲

報告書抄録

ふりがな	えましじょかんあと						
書名	江馬氏城館跡						
副書名	下館跡南辺の調査						
卷次	III						
シリーズ名							
シリーズ番							
編集機関	神岡町教育委員会						
所在地	〒506-11 岐阜県吉城郡神岡町大字東町378番地 TEL 0578-2-1271 富山大学人文学部考古学研究室 〒930 富山県富山市五福3190 TEL 0764-45-6195						
発行年月日	西暦1997年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間 調査面積	調査原因
しも下 館 跡	岐阜県吉城郡神岡町 おおあざこりあざながどお 大字殿字中通り やまこし 山越・馬場西	市町村	遺跡番号				
江馬氏城館跡	21625	G07K00093	36° 19' 25"	137° 18' 43"	19960716 ~ 19960816 890m ²	史跡保存整備 事前調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項
江馬氏城館跡 下館跡	城館跡	中世	掘立柱建物、柵列 竪穴住居、土坑, 盛土	土師器、瓦器、青磁、白磁 瀬戸美濃、珠洲、八尾, 瓷器系陶器、鉄製品（鉄釘） 石製品（石臼）			

1997年3月25日 印刷

1997年3月31日 発行

江馬氏城館跡 III

—下館跡南辺の調査—

編集・発行 神岡町教育委員会
〒506-11 岐阜県吉城郡神岡町大字東町378 ☎0578(2)1271

富山大学人文学部考古学研究室
〒930 富山県富山市五福3190 ☎0764(41) 6195

印 刷 有限会社 真 陽 社
〒600 京都府京都市下京区油小路仏光寺上ル ☎075(351) 6034

江馬氏城館跡III一下館跡南辺の調査— 1997年3月発行
神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室編

江馬氏城館跡 III

一下館跡南辺の調査—

付図1 江馬氏下館跡遺構平面図

